

本郷畑内遺跡

(都)3.3.2 吉井北通り線社会資本整備総合交付金
(防災・安全/活力基盤)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

本郷畑内遺跡

(都)3.3.2 吉井北通り線社会資本整備総合交付金
(防災・安全/活力基盤)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一五

群馬県高崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

2015

群馬県高崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



本郷畑内遺跡

(都)3.3.2 吉井北通り線社会資本整備総合交付金
(防災・安全/活力基盤)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2015

群馬県高崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

本書は、群馬県高崎市吉井町に所在し、都市計画道路「吉井北通り線」の建設工事に伴い発掘調査された本郷畑内遺跡の調査報告書です。この道路は鎭川に沿って建設される国道254号バイパスの一部で、これまでの調査で古墳群や縄文時代から平安時代までの集落など様々な遺跡が調査されてきました。本遺跡の発掘調査は、群馬県高崎土木事務所の委託を受けて公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が平成24年9月から平成25年2月にかけて実施したものです。

本郷畑内遺跡は高崎市吉井町に所在する国の特別史跡「多胡碑」の約2km西側にある古代の集落遺跡です。多胡碑は8世紀初頭の多胡郡建郡の経緯が刻まれた石碑で周辺には多胡郡衙の存在が推定されています。一方、本遺跡の南側は古代の条里地割が広がる地域と推定されています。今回の調査により、本郷畑内遺跡は古墳時代後期には小規模な集落が存在し、奈良時代多胡郡建郡の頃より規模を拡大し、その後平安時代まで永続的に営まれた集落であることが明らかになりました。この一帯が、周辺の調査進展に伴って郡衙・条里・集落が繋がり、古代の景観が復元できる地域として注目されるのは間違いありません。さらに本遺跡では、周辺で調査例が少ない弥生時代末から古墳時代初頭の集落の存在など、鎭川沿いの歴史の空白部分を埋める新たな発見もありました。本報告書が地域研究の資料や地域史を学ぶ教材として役立てて頂けるものと確信いたしております。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成にいたるまで、群馬県高崎土木事務所および群馬県教育委員会、高崎市教育委員会、ならびに地元関係者の皆様からは多くのご指導・ご協力を賜りました。この度、報告書を上梓するにあたり、これら関係者の皆様に心より感謝の意を表し、序といたします。

平成27年1月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 吉 野 勉

例 言

- 1 本書は、平成24年度(都) 3. 3. 2 吉井北通り線社会資本整備総合交付金(防災・安全／活力基盤)事業に伴い発掘調査された本郷畑内遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 所在地 群馬県高崎市吉井町本郷154-2、155-1・2、156、158、183、186-3、187-1、188、191-1・2、193-1・2、194、195-1・3・4、196、197、201-2、235-7、236-1、247-1・6・7・8、248-2・3、250-1、251-4。
- 3 事業主体 群馬県高崎土木事務所
- 4 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 履行期間 平成24年8月1日～平成25年3月31日
調査期間 平成24年9月1日～平成25年2月28日
- 6 調査面積 6351㎡
- 7 発掘調査体制は次の通りである。
発掘担当者 調査統括 関根愼二 主任調査研究員 都木直人 専門調査役 津金沢吉茂
遺跡掘削請負工事 有限会社毛野考古学研究所
地上測量 アコン測量設計株式会社
空中写真撮影 株式会社シン技術コンサル
- 8 整理事業の期間と体制は次の通りである。
履行期間 平成25年8月1日～平成27年3月31日
整理期間 平成25年8月1日～平成26年9月30日
整理担当 専門調査役 飯田陽一
遺物写真撮影 専門調査役 石坂 茂(縄文土器・弥生土器) 飯田陽一(土師器・須恵器)
資料課長 岩崎泰一(石器・石製品) 補佐(総括) 関 邦一(金属製品)
遺物保存処理 関 邦一
- 9 本書作成の担当者は次の通りである。
編集 飯田陽一
デジタル編集 主任調査研究員 齊田智彦
本文執筆 関根愼二(第Ⅲ章11) 資料課長 徳江秀夫(遺物観察表：土師器・須恵器)
石坂 茂(遺物観察表：縄文土器) 岩崎泰一(遺物観察表：石器・石製品)
資料統括 大西雅広(遺物観察表：陶磁器類) 前記以外 飯田陽一
- 10 石器・石製品の石材鑑定については飯島静男氏(群馬県地質研究会会員)にお願いした。
- 11 発掘調査諸資料および出土遺物は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 12 発掘調査および報告書作成に際しては、下記の方々・機関にご協力・ご指導いただきました。記して感謝いたします。
(敬称略・順不同)
群馬県高崎土木事務所、群馬県教育委員会、高崎市教育委員会、高崎市吉井郷土資料館

凡 例

- 本文中に使用した座標・方位はすべて国家座標「世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第IX系)」を使用している。真北方向角は調査区中央付近の $X=29,090$ 、 $Y=-76,980$ で東偏 $0^{\circ}30'24''$ である。遺構挿図中に XY 交点を記号+で示し、数値を併せて座標値を表した。数値は国家座標値 $X \cdot Y$ 値の下3桁を用いて表記している。
- 遺構の種別および遺構番号は、混乱を避けるため調査時の番号を踏襲することを原則とした。一部変更を行ったものは、本文5頁(表1)に記した。
- 遺構断面図に記した数値は、標高(単位:m)を表した。
- 遺構・遺物の縮率は原則として以下の通りとし、各挿図にスケールを添えた。同一の遺物挿図内に異なる縮率の図が加わる場合は、遺物番号の次に縮率を分数で記した。

遺構 全体図(付図) 1 : 400

現況図 1 : 300 全体図 1 : 200

竪穴住居・竪穴状遺構・掘立柱建物 1 : 60 竪穴住居カマド等詳細 1 : 30

ピット配置図 1 : 100 ピット断面 1 : 30

溝 1 : 100および 1 : 50 同断面 1 : 50

島 1 : 80 同断面 1 : 40

土坑・粘土採掘坑・遺物集中地点 1 : 40

遺物 土器類 土師器・須恵器・瓦・縄文土器・弥生土器・陶磁器 1 : 3

カマド形土器 1 : 5 土錘 1 : 2

金属製品 鉄器 1 : 2 銭貨 1 : 1

石器・石製品 砥石・板碑・石斧・敲石 1 : 3 紡輪・石帯・玉類・小型砥石 1 : 2 石鏃 1 : 1

遺物写真は遺物図とおおよそ同縮率となるようにしたが、撮影方向は異なるものがある。

- 遺構挿図内で使用したトーン・記号は次のことを示している。



また、遺構平面図中の重複遺構については薄線を用いて上端のみを表した。

- 遺物挿図内で使用したトーン・記号は次のことを示している。



- 遺構の主軸方向・走向を示すため、座標北を基準として東に傾いた場合は $N-\circ^{\circ}E$ 、西に傾いた場合は $N-\circ^{\circ}W$ というように表記した。
- 住居等の床面積は、デジタルプランメーターにより $1/30$ 縮小打ち出し図上で壁下端を3回計測し、その平均値を記した。壁溝やカマド袖部分を含んでいる。
- 竪穴住居掘り方図に記したマイナス数字は、掘り方等の床面からの深さを記したもので単位はcmである。
- 土坑・ピットの土層説明には173頁に記した共通記号を用いた。
- 遺物観察表の凡例については観察表冒頭の223頁に記した。
- 本書で掲載した地図は以下の通りである。

国土地理院地形図 1 : 25,000 「上野吉井」(平成14年12月1日発行)、「高崎」(平成22年12月1日発行)、
「富岡」(平成12年8月1日発行)、「藤岡」(平成12年8月1日発行)

国土地理院地形図 1 : 50,000 「富岡」(平成7年4月1日発行)

吉井町都市計画図12 1 : 2,500 (平成12年12月発行)

本文目次

序
例言
凡例

第 I 章 調査に至る経緯と経過

1	調査に至る経緯	1
2	発掘調査の方法	2
	(1)調査区とグリッドの設定	2
	(2)基本土層	2
	(3)調査と記録の方法	3
3	発掘調査の経過	3
	(調査日誌抄)	5
4	整理業務の経過	5

第 II 章 発掘調査と遺跡の概要

1	遺跡の位置と地形	6
2	周辺の遺跡	7

第 III 章 調査の内容

1	調査の概要	12
2	竪穴住居	13
3	竪穴状遺構	130
4	掘立柱建物と柱穴列	136
5	ピット	152
6	土坑	173
7	粘土採掘坑	189
8	溝	191
9	畠	207
10	遺物集中地点	211
11	遺構外の遺物	217

第 IV 章 総括

1	本郷畑内遺跡の集落について	220
2	特筆される遺物について	221

遺物観察表

遺物観察表	223
-------	-----

引用・参考文献

引用・参考文献	250
---------	-----

写真図版

報告書抄録

付図 本郷畑内遺跡全体図(1:400)

挿図目次

第1図	本郷畑内遺跡と周辺の地勢	1	第63図	28号住居と出土遺物	71
第2図	本郷畑内遺跡調査区位置図	2	第64図	29号住居と出土遺物	72
第3図	調査区の呼称と基本土層計測地点	3	第65図	30号住居と出土遺物	73
第4図	基本土層柱状図	4	第66図	31号住居	74
第5図	遺跡周辺の地形	6	第67図	31号住居出土遺物	75
第6図	周辺遺跡の分布	9	第68図	32号住居と出土遺物	76
第7図	住居配置図	13	第69図	33号住居	77
第8図	1号住居	14	第70図	34号住居	78
第9図	1号住居出土遺物(1)	15	第71図	34号住居出土遺物	79
第10図	1号住居出土遺物(2)	16	第72図	35号住居と出土遺物	80
第11図	2号住居	18	第73図	36号住居と出土遺物	81
第12図	2号住居出土遺物(1)	19	第74図	37号住居と出土遺物	82
第13図	2号住居出土遺物(2)	20	第75図	38号住居	83
第14図	3号住居	21	第76図	38号住居出土遺物	84
第15図	3号住居出土遺物(1)	22	第77図	39号住居(1)	85
第16図	3号住居出土遺物(2)	23	第78図	39号住居(2)と出土遺物	86
第17図	4号住居(1)	24	第79図	40号住居(1)	87
第18図	4号住居(2)	25	第80図	40号住居(2)	88
第19図	4号住居出土遺物	26	第81図	40号住居出土遺物	89
第20図	5号住居	27	第82図	41号住居	90
第21図	5号住居出土遺物	28	第83図	41号住居出土遺物	91
第22図	6号住居	29	第84図	42号住居と出土遺物	92
第23図	6号住居出土遺物	30	第85図	43号住居	93
第24図	7号住居(1)	31	第86図	43号住居出土遺物	94
第25図	7号住居(2)	32	第87図	44号住居	95
第26図	7号住居出土遺物(1)	33	第88図	44号住居出土遺物	96
第27図	7号住居出土遺物(2)	34	第89図	45号住居と出土遺物	97
第28図	8号住居	35	第90図	46・56号住居と46号住居出土遺物	98
第29図	8号住居出土遺物(1)	36	第91図	47号住居と出土遺物	99
第30図	8号住居出土遺物(2)	37	第92図	48号住居	100
第31図	9号住居	38	第93図	48号住居出土遺物	101
第32図	9号住居出土遺物	39	第94図	49号住居と出土遺物	102
第33図	10号住居と出土遺物	40	第95図	50号住居と出土遺物	103
第34図	11号住居	41	第96図	51号住居	104
第35図	11号住居出土遺物(1)	42	第97図	52号住居	105
第36図	11号住居出土遺物(2)	43	第98図	52号住居出土遺物	106
第37図	12号住居と出土遺物	44	第99図	53号住居	108
第38図	13号住居	45	第100図	53号住居出土遺物	109
第39図	13号住居出土遺物	46	第101図	54号住居	110
第40図	14号住居と出土遺物	47	第102図	54号住居出土遺物	111
第41図	15号住居と出土遺物	48	第103図	55号住居	112
第42図	16号住居	49	第104図	55号住居出土遺物	113
第43図	16号住居出土遺物	50	第105図	57号住居	114
第44図	17号住居	51	第106図	57号住居出土遺物	115
第45図	17号住居出土遺物	52	第107図	58号住居	116
第46図	18号住居と出土遺物	53	第108図	58号住居出土遺物	117
第47図	19号住居と出土遺物	54	第109図	59号住居	118
第48図	20号住居	56	第110図	59号住居出土遺物	119
第49図	20号住居出土遺物	57	第111図	60号住居	120
第50図	21号住居	58	第112図	60号住居出土遺物(1)	121
第51図	21号住居出土遺物	59	第113図	60号住居出土遺物(2)	122
第52図	22号住居と出土遺物	60	第114図	62号住居	124
第53図	23号住居	61	第115図	62号住居出土遺物	125
第54図	23号住居出土遺物	62	第116図	63号住居	126
第55図	24号住居と出土遺物	63	第117図	63号住居出土遺物	127
第56図	25号住居	64	第118図	64号住居と出土遺物	128
第57図	25号住居出土遺物	65	第119図	65号住居	129
第58図	26号住居と出土遺物	66	第120図	66号住居	129
第59図	27号住居(1)	67	第121図	1号竪穴状遺構	130
第60図	27号住居(2)	68	第122図	1 A・B号竪穴状遺構出土遺物	131
第61図	27号住居出土遺物(1)	69	第123図	2号竪穴状遺構と出土遺物	132
第62図	27号住居出土遺物(2)	70	第124図	3号竪穴状遺構と出土遺物	133
			第125図	4号竪穴状遺構と出土遺物	134
			第126図	5号竪穴状遺構と出土遺物	135
			第127図	6号竪穴状遺構	135
			第128図	1号掘立柱建物	136

第129図	2号掘立柱建物	138
第130図	3号掘立柱建物	139
第131図	4号掘立柱建物	140
第132図	5号掘立柱建物	141
第133図	6号掘立柱建物	142
第134図	7号掘立柱建物	143
第135図	8号掘立柱建物	144
第136図	9号掘立柱建物	145
第137図	10号掘立柱建物	146
第138図	11号掘立柱建物	147
第139図	12号掘立柱建物	148
第140図	1号柱穴列	149
第141図	2号柱穴列	150
第142図	3号柱穴列	151
第143図	ピット群(1)	152
第144図	ピット群(2)	153
第145図	ピット群(3)	154
第146図	ピット群(4)	155
第147図	ピット群(5)	156
第148図	ピット群(6)	157
第149図	ピット出土遺物	158
第150図	土坑(1～9・15号)	174
第151図	土坑(10～14・16・19・23号)	175
第152図	土坑(17・18・20～22・24・25・61・65号)	176
第153図	土坑(26～33・37号)	177
第154図	土坑(34～36・38～41・44号)	178
第155図	土坑(42・43・45～48・54号)	179
第156図	土坑(49～53・55～57号)	180
第157図	土坑(58～60・62・63・66～69号)	181
第158図	土坑(64・70～75号)	182
第159図	土坑(76～85号)	183
第160図	土坑(86～95号)	184
第161図	土坑出土遺物(1)	185
第162図	土坑出土遺物(2)	186
第163図	粘土採掘坑と出土遺物	190
第164図	1号溝と出土遺物	191
第165図	2号溝	192
第166図	3号溝	192
第167図	4号溝	193
第168図	6・7号溝と6号溝出土遺物	194
第169図	8号溝	195
第170図	8号溝出土遺物	196
第171図	9号溝と出土遺物	197
第172図	10号溝	198
第173図	11号溝	199
第174図	12・13号溝	200
第175図	14号溝	201
第176図	15・16号溝	202
第177図	17号溝	203
第178図	18号溝	203
第179図	19・21・22号溝	205
第180図	19・21号溝出土遺物	206
第181図	20号溝	206
第182図	1号畠	207
第183図	2号畠	208
第184図	3号畠	209
第185図	4号畠	210
第186図	1号遺物集中地点	211
第187図	1号遺物集中地点出土遺物(1)	212
第188図	1号遺物集中地点出土遺物(2)	213
第189図	2号遺物集中地点	214
第190図	2号遺物集中地点出土遺物(1)	215
第191図	2号遺物集中地点出土遺物(2)	216
第192図	遺構外出土遺物(古墳時代以降)	218
第193図	遺構外出土遺物(縄文時代)	219
第194図	主な遺構の方位	220

表目次

表1	遺構名称変更一覧	5
表2	周辺遺跡一覧	10
表3	周辺の古墳群とその他遺跡一覧	11
表4	調査区別 主な遺構数一覧	12
表5	ピット一覧	159-172
表6	土坑一覧	187-190
表7	住居内礎盤石状礫一覧	221
表8	主なカマド形土器	222

写真図版目次

PL. 1	遺跡全景	
①	本郷畑内遺跡全景(東より)	
②	本郷畑内遺跡全景(西より)	
PL. 2	調査区遠景	
①	本郷畑内遺跡東区全景(合成写真:上側が北)	
②	西3区遠景(東より)	
③	西1・2区遠景(西より)	
④	東3区北側拡張区遠景(北より)	
⑤	東3区南側拡張区の基本土層(西より)	
PL. 3	1・2号住居	
①	1号住居全景(西より)	
②	1号住居カマド(西より)	
③	1号住居掘り方全景(西より)	
④	1号住居貯蔵穴(北より)	
⑤	1号住居床下土坑(西より)	
⑥	2号住居全景(西より)	
⑦	2号住居断面(南より)	
⑧	2号住居カマド断面(西より)	
PL. 4	3・4号住居	
①	3号住居全景(西より)	
②	3号住居カマド(西より)	
③	3号住居南西隅付近遺物出土状態(東より)	
④	3号住居掘り方内遺物出土状態(西より)	
⑤	4号住居全景(南西より)	
⑥	4号住居カマド(南西より)	
⑦	4号住居南隅付近遺物出土状態(南東より)	
⑧	4号住居P1と遺物出土状態(南西より)	
PL. 5	5・6号住居	
①	5号住居全景(西より)	
②	5号住居カマド(西より)	
③	5号住居掘り方全景(西より)	
④	5号住居カマド前遺物出土状態(南西より)	
⑤	6号住居全景(西より)	
⑥	6号住居カマド断面(南より)	
⑦	6号住居北壁側遺物出土状態(北西より)	
⑧	6号住居掘り方全景(西より)	
PL. 6	7・8号住居	
①	7号住居全景(西より)	
②	7号住居カマドA断面(西より)	
③	7号住居カマドB断面(西より)	
④	7号住居掘り方全景(西より)	
⑤	8号住居全景(西より)	
⑥	8号住居カマド断面(南より)	
⑦	8号住居貯蔵穴1と遺物出土状態(西より)	
⑧	8号住居西壁際遺物出土状態(北より)	
PL. 7	9～11号住居	
①	9号住居全景(西より)	
②	9号住居カマド(西より)	
③	9号住居貯蔵穴と遺物出土状態(南西より)	

- ④ 9号住居掘り方全景(南より)
- ⑤ 10号住居全景(西より)
- ⑥ 10号住居カマド断面(西より)
- ⑦ 11号住居全景(西より)
- ⑧ 11号住居カマドと周辺遺物出土状態(西より)
- PL. 8 12~16号住居
 - ① 12号住居遺物出土状態(南より)
 - ② 13号住居全景(南より)
 - ③ 13号住居カマド断面(南より)
 - ④ 14号住居全景(南より)
 - ⑤ 15号住居全景(西より)
 - ⑥ 16号住居全景(西より)
 - ⑦ 16号住居カマド(西より)
 - ⑧ 16号住居貯蔵穴断面(西より)
- PL. 9 17~20号住居
 - ① 17号住居全景(西より)
 - ② 17号住居貯蔵穴断面(西より)
 - ③ 17号住居掘り方全景(西より)
 - ④ 18号住居全景(南より)
 - ⑤ 19号住居全景(西より)
 - ⑥ 19号住居掘り方全景(西より)
 - ⑦ 20号住居全景(南より)
 - ⑧ 20号住居カマド断面(東より)
- PL. 10 21~24号住居
 - ① 21号住居全景(南より)
 - ② 21号住居カマド断面(西より)
 - ③ 21号住居遺物出土状態(東より)
 - ④ 22号住居全景(南より)
 - ⑤ 23号住居全景(西より)
 - ⑥ 23号住居カマドA(西より)
 - ⑦ 23号住居カマドA断面(南より)
 - ⑧ 23・24号住居掘り方全景(西より)
- PL. 11 25~27号住居
 - ① 25号住居全景(西より)
 - ② 25号住居カマド(西より)
 - ③ 25号住居カマド(南より)
 - ④ 25号住居掘り方全景(西より)
 - ⑤ 26号住居全景(西より)
 - ⑥ 26号住居カマド・貯蔵穴と遺物出土状態(西より)
 - ⑦ 27号住居全景(東より)
 - ⑧ 27号住居北隅周辺遺物出土状態(南より)
- PL. 12 27~29号住居
 - ① 27号住居遺物出土状態(北より)
 - ② 27号住居掘り方全景(北より)
 - ③ 27号住居P5と遺物出土状態(東より)
 - ④ 28号住居全景(西より)
 - ⑤ 28号住居カマド断面(西より)
 - ⑥ 28号住居遺物出土状態(東より)
 - ⑦ 29号住居全景(北西より)
 - ⑧ 29号住居カマド(北西より)
- PL. 13 30~32号住居
 - ① 30号住居全景(西より)
 - ② 31号住居全景(北西より)
 - ③ 31号住居カマド(北西より)
 - ④ 31号住居断面と遺物出土状態(北西より)
 - ⑤ 32号住居全景(西より)
 - ⑥ 32号住居カマド(西より)
 - ⑦ 32号住居貯蔵穴断面(西より)
 - ⑧ 32号住居掘り方全景(西より)
- PL. 14 33~35号住居
 - ① 33号住居全景(南西より)
 - ② 34号住居全景(西より)
 - ③ 34号住居カマド焚口付近(西より)
 - ④ 34号住居貯蔵穴(西より)
 - ⑤ 34号住居掘り方全景(西より)
 - ⑥ 34号住居床下土坑(北より)
- ⑦ 35号住居全景(西より)
- ⑧ 35号住居掘り方全景(西より)
- PL. 15 36~38号住居
 - ① 36号住居全景(南西より)
 - ② 36号住居カマド断面(南東より)
 - ③ 37号住居全景(西より)
 - ④ 37号住居カマド断面(西より)
 - ⑤ 38号住居全景(南東より)
 - ⑥ 38号住居貯蔵穴と遺物出土状態(北東より)
 - ⑦ 38号住居中央付近遺物出土状態(南東より)
 - ⑧ 38号住居掘り方全景(北西より)
- PL. 16 39~41号住居
 - ① 39号住居全景(北東より)
 - ② 39号住居掘り方と炉(南東より)
 - ③ 40号住居全景(南より)
 - ④ 40号住居カマド(西より)
 - ⑤ 40号住居掘り方全景(西より)
 - ⑥ 41号住居全景(西より)
 - ⑦ 41号住居カマド断面と遺物出土状態(西より)
 - ⑧ 41号住居掘り方全景(西より)
- PL. 17 42~44号住居
 - ① 42号住居全景(南より)
 - ② 42号住居カマド全景(南より)
 - ③ 43号住居全景(西より)
 - ④ 43号住居カマドと周辺の礫(北より)
 - ⑤ 43号住居南壁付近の遺物出土状態(北西より)
 - ⑥ 43号住居掘り方全景(西より)
 - ⑦ 44号住居全景(北より)
 - ⑧ 44号住居東側の礫出土状態(北より)
- PL. 18 45~47・56号住居
 - ① 45号住居全景(西より)
 - ② 45号住居南東隅遺物出土状態(北西より)
 - ③ 46号住居全景(北より)
 - ④ 46号住居北西隅遺物出土状態(西より)
 - ⑤ 46・56号住居掘り方全景(北より)
 - ⑥ 47号住居全景(北より)
 - ⑦ 47号住居遺物出土状態(西より)
 - ⑧ 47号住居掘り方全景(西より)
- PL. 19 48~50号住居
 - ① 48号住居全景(西より)
 - ② 48号住居遺物出土状態(西より)
 - ③ 48号住居カマドと遺物出土状態(西より)
 - ④ 48号住居掘り方全景(西より)
 - ⑤ 49・50号住居全景(西より)
 - ⑥ 49号住居カマド(西より)
 - ⑦ 49号住居カマド掘り方断面(西より)
 - ⑧ 49・50号住居断面(西より)
- PL. 20 49~52号住居
 - ① 49号住居遺物出土状態(西より)
 - ② 49・50号住居掘り方全景(西より)
 - ③ 51号住居礫出土状態(北より)
 - ④ 51号住居掘り方全景(北より)
 - ⑤ 52号住居全景(西より)
 - ⑥ 52号住居カマド(西より)
 - ⑦ 52号住居貯蔵穴と遺物出土状態(東より)
 - ⑧ 52号住居掘り方全景(西より)
- PL. 21 53・54号住居
 - ① 53号住居全景(西より)
 - ② 53号住居カマド(西より)
 - ③ 53号住居貯蔵穴(北西より)
 - ④ 53号住居2号床下土坑(西より)
 - ⑤ 53号住居掘り方全景(西より)
 - ⑥ 54号住居全景(西より)
 - ⑦ 54号住居カマドと周辺遺物出土状態(西より)
 - ⑧ 54号住居掘り方全景(西より)
- PL. 22 55・57・58号住居

- ① 55号住居全景(西より)
 - ② 55号住居カマド断面(東より)
 - ③ 55号住居北東隅遺物出土状態(南より)
 - ④ 55号住居掘り方全景(西より)
 - ⑤ 57号住居全景(西より)
 - ⑥ 58号住居全景(西より)
 - ⑦ 58号住居カマド(西より)
 - ⑧ 58号住居掘り方全景(西より)
- PL.23 59・60号住居
- ① 59号住居全景(西より)
 - ② 59号住居カマド(西より)
 - ③ 60号住居全景(西より)
 - ④ 60号住居カマドA全景(西より)
 - ⑤ 60号住居掘り方全景(西より)
 - ⑥ 60号住居1号床下土坑(西より)
 - ⑦ 60号住居貯蔵穴(北より)
 - ⑧ 60号住居掘り方内遺物出土状態(北より)
- PL.24 62・63号住居
- ① 62号住居全景(西より)
 - ② 62号住居カマド(西より)
 - ③ 62号住居カマドと周辺遺物出土状態(南西より)
 - ④ 62号住居掘り方全景(西より)
 - ⑤ 63号住居全景(西より)
 - ⑥ 63号住居カマド(西より)
 - ⑦ 63号住居カマド掘り方(北より)
 - ⑧ 63号住居掘り方全景(北より)
- PL.25 64～66号住居
- ① 64号住居全景(北より)
 - ② 64号住居東側遺物出土状態(西より)
 - ③ 64号住居中央遺物出土状態(北より)
 - ④ 64号住居掘り方全景(北より)
 - ⑤ 65号住居全景(東より)
 - ⑥ 65号住居掘り方全景(東より)
 - ⑦ 66号住居全景(東より)
 - ⑧ 66号住居掘り方全景(南より)
- PL.26 1～5号竪穴状遺構
- ① 1A・B号竪穴状遺構全景(西より)
 - ② 1A・B号竪穴状遺構遺物出土状態(南より)
 - ③ 1A・B号竪穴状遺構遺物出土状態(西より)
 - ④ 1B号竪穴状遺構および2号竪穴状遺構断面(東より)
 - ⑤ 3号竪穴状遺構全景(南より)
 - ⑥ 4号竪穴状遺構と23・24号住居(西より)
 - ⑦ 5号竪穴状遺構全景(北より)
 - ⑧ 5号竪穴状遺構断面(西より)
- PL.27 1・2号掘立柱建物
- ① 1号掘立柱建物P1(南より)
 - ② 1号掘立柱建物P2(南より)
 - ③ 1号掘立柱建物P3(南より)
 - ④ 1号掘立柱建物P4(南より)
 - ⑤ 2号掘立柱建物P1断面(南より)
 - ⑥ 2号掘立柱建物P3断面(南より)
 - ⑦ 2号掘立柱建物全景(南より)
 - ⑧ 2号掘立柱建物P9断面(南より)
 - ⑨ 2号掘立柱建物P11断面(南より)
 - ⑩ 2号掘立柱建物P12断面(南より)
- PL.28 3・4号掘立柱建物
- ① 3号掘立柱建物全景(東より)
 - ② 3号掘立柱建物P1断面(西より)
 - ③ 3号掘立柱建物P2断面(西より)
 - ④ 3号掘立柱建物P3断面(西より)
 - ⑤ 4号掘立柱建物全景(西より)
 - ⑥ 4号掘立柱建物P7(南より)
 - ⑦ 4号掘立柱建物P7断面(南より)
- PL.29 5・6号掘立柱建物
- ① 5号掘立柱建物全景(西より)
 - ② 5号掘立柱建物P9(北より)
- ③ 6号掘立柱建物全景(東より)
 - ④ 6号掘立柱建物P2断面(南より)
 - ⑤ 6号掘立柱建物P3断面(南より)
 - ⑥ 6号掘立柱建物P4断面(南より)
 - ⑦ 6号掘立柱建物P5断面(南より)
- PL.30 7・8号掘立柱建物
- ① 7号掘立柱建物全景(北より)
 - ② 7号掘立柱建物P1断面(南より)
 - ③ 7号掘立柱建物P4(南東より)
 - ④ 7号掘立柱建物P5断面(南より)
 - ⑤ 7号掘立柱建物P6(南より)
 - ⑥ 8号掘立柱建物全景(北より)
 - ⑦ 8号掘立柱建物P3断面(南より)
 - ⑧ 8号掘立柱建物P4断面(西より)
- PL.31 9・10・12号掘立柱建物
- ① 9号掘立柱建物全景(北より)
 - ② 9号掘立柱建物P4断面(南より)
 - ③ 9号掘立柱建物P5断面(南より)
 - ④ 9号掘立柱建物P2(南より)
 - ⑤ 9号掘立柱建物P3(南より)
 - ⑥ 10号掘立柱建物P6断面(南より)
 - ⑦ 10号掘立柱建物P9(南より)
 - ⑧ 10号掘立柱建物P8(南より)
 - ⑨ 12号掘立柱建物北東部周辺(南より)
- PL.32 1～3号柱穴列
- ① 1号柱穴列P2断面(東より)
 - ② 1号柱穴列P3断面(東より)
 - ③ 1号柱穴列全景(南より)
 - ④ 1号柱穴列P4断面(東より)
 - ⑤ 1号柱穴列P5断面(東より)
 - ⑥ 2号柱穴列全景(東より)
 - ⑦ 2号柱穴列P1断面(南東より)
 - ⑧ 2号柱穴列P2断面(南東より)
 - ⑨ 3号柱穴列全景(西より)
- PL.33 1～18号土坑
- ① 1・9号土坑全景(北西より)
 - ② 2号土坑全景(北より)
 - ③ 3号土坑全景(北より)
 - ④ 4号土坑全景(北より)
 - ⑤ 5号土坑全景(北より)
 - ⑥ 6号土坑全景(西より)
 - ⑦ 7・8号土坑全景(南西より)
 - ⑧ 10・11号土坑断面(西より)
 - ⑨ 12号土坑全景(北より)
 - ⑩ 13号土坑全景(北西より)
 - ⑪ 14号土坑全景(北西より)
 - ⑫ 15号土坑全景(北西より)
 - ⑬ 16号土坑全景(北より)
 - ⑭ 17号土坑全景(北西より)
 - ⑮ 18号土坑全景(北西より)
- PL.34 17～37号土坑
- ① 17～21号土坑全景(北西より)
 - ② 18・19号土坑全景(北西より)
 - ③ 20・21号土坑全景(北東より)
 - ④ 22号土坑全景(東より)
 - ⑤ 23号土坑全景(西より)
 - ⑥ 24号土坑全景(南西より)
 - ⑦ 25号土坑全景(南より)
 - ⑧ 26～28号土坑全景(南西より)
 - ⑨ 29号土坑断面(北より)
 - ⑩ 30号土坑全景(西より)
 - ⑪ 31号土坑全景(北東より)
 - ⑫ 32号土坑全景(北より)
- PL.35 33～48号土坑
- ① 33・37号土坑全景(西より)
 - ② 34号土坑全景(南西より)

- ③ 35号土坑断面(西より)
- ④ 36号土坑全景(南より)
- ⑤ 38号土坑全景(西より)
- ⑥ 39号土坑全景(西より)
- ⑦ 40号土坑全景(南より)
- ⑧ 41号土坑全景(北西より)
- ⑨ 42号土坑全景(東より)
- ⑩ 43号土坑全景(東より)
- ⑪ 44号土坑全景(南西より)
- ⑫ 45号土坑全景(東より)
- ⑬ 46号土坑断面(西より)
- ⑭ 47号土坑全景(東より)
- ⑮ 48号土坑全景(西より)
- PL.36 49～63号土坑
 - ① 49号土坑全景(東より)
 - ② 50号土坑全景(西より)
 - ③ 51号土坑全景(北より)
 - ④ 52号土坑全景(東より)
 - ⑤ 53号土坑全景(北東より)
 - ⑥ 54号土坑全景(東より)
 - ⑦ 55号土坑全景(北東より)
 - ⑧ 56号土坑全景(北東より)
 - ⑨ 57号土坑全景(東より)
 - ⑩ 58号土坑全景(北より)
 - ⑪ 59号土坑全景(北より)
 - ⑫ 60号土坑全景(東より)
 - ⑬ 61号土坑礫確認状態(南東より)
 - ⑭ 61号土坑全景(南東より)
 - ⑮ 62号土坑全景(北より)
- PL.37 63・65～77号土坑
 - ① 63号土坑全景(北東より)
 - ② 65号土坑全景(左) (北東より)
 - ③ 66号土坑全景(西より)
 - ④ 67号土坑全景(西より)
 - ⑤ 68号土坑全景(北より)
 - ⑥ 69号土坑全景(北より)
 - ⑦ 70号土坑断面(北より)
 - ⑧ 71号土坑全景(西より)
 - ⑨ 71号土坑断面と遺物出土状態(南より)
 - ⑩ 72号土坑全景(北より)
 - ⑪ 73号土坑全景(東より)
 - ⑫ 74号土坑全景(北より)
 - ⑬ 75号土坑全景(西より)
 - ⑭ 76号土坑全景(西より)
 - ⑮ 77号土坑断面(南西より)
- PL.38 78～80・83～94号土坑
 - ① 78号土坑全景(西より)
 - ② 79号土坑全景(西より)
 - ③ 80号土坑全景(西より)
 - ④ 83号土坑全景(北より)
 - ⑤ 84号土坑全景(東より)
 - ⑥ 85号土坑全景(南東より)
 - ⑦ 86号土坑全景(東より)
 - ⑧ 87号土坑全景(東より)
 - ⑨ 88号土坑全景(南より)
 - ⑩ 89号土坑全景(南西より)
 - ⑪ 90号土坑全景(北東より)
 - ⑫ 91号土坑全景と礫出土状態(北東より)
 - ⑬ 92号土坑全景(西より)
 - ⑭ 93号土坑全景(北より)
 - ⑮ 94号土坑全景(北より)
- PL.39 1～4・8～10号溝
 - ① 1号溝全景(北西より)
 - ② 2号溝全景(西より)
 - ③ 2号溝断面(西より)
 - ④ 3号溝全景(南西より)
- ⑤ 4号溝全景(北より)
- ⑥ 8号溝南半部(北より)
- ⑦ 8号溝北半部(南より)
- ⑧ 9号溝全景(北東より)
- ⑨ 10号溝全景(南西より)
- PL.40 11～22号溝
 - ① 11号溝全景(南より)
 - ② 12・13号溝全景(南より)
 - ③ 14号溝全景(南西より)
 - ④ 15・16号溝北半部(南より)
 - ⑤ 17号溝全景(南より)
 - ⑥ 18号溝全景(南東より)
 - ⑦ 19号溝全景(北より)
 - ⑧ 20号溝全景(南東より)
 - ⑨ 21号溝全景(北より)
 - ⑩ 22B号溝全景(北西より)
- PL.41 1～4号畠
 - ① 1号畠全景(西より)
 - ② 1号畠断面(西より)
 - ③ 2号畠全景(南東より)
 - ④ 2号畠断面(南西より)
 - ⑤ 3号畠全景(北より)
 - ⑥ 4号畠全景(西より)
 - ⑦ 4号畠断面(西より)
- PL.42 1・2号遺物集中地点
 - ① 1号遺物集中地点確認状態(東より)
 - ② 1号遺物集中地点上面(西より)
 - ③ 1号遺物集中地点下面(北より)
 - ④ 2号遺物集中地点全景(西より)
 - ⑤ 2号遺物集中地点南側(西より)
 - ⑥ 2号遺物集中地点北側(西より)
- PL.43 1・2号住居出土遺物
- PL.44 2～4号住居出土遺物
- PL.45 4～7号住居出土遺物
- PL.46 7・8号住居出土遺物
- PL.47 8～11号住居出土遺物
- PL.48 11～17・19・20号住居出土遺物
- PL.49 20・21・23号住居出土遺物
- PL.50 24～27号住居出土遺物
- PL.51 27～29・31号住居出土遺物
- PL.52 34・35・37～39号住居出土遺物
- PL.53 39～43号住居出土遺物
- PL.54 44～50・52号住居出土遺物
- PL.55 52～55号住居出土遺物
- PL.56 55・57～60号住居出土遺物
- PL.57 60・62～64号住居出土遺物
- PL.58 竪穴状遺構、ピット、土坑、粘土採掘坑出土遺物
- PL.59 溝、1号遺物集中地点出土遺物
- PL.60 1・2号遺物集中地点出土遺物
- PL.61 遺構外の遺物

第 I 章 調査に至る経緯と経過

1 調査に至る経緯

国道254号は東京都文京区を基点として埼玉県・群馬県を通過し長野県松本市へ至る一般国道である。

群馬県内では藤岡市・高崎市・甘楽郡甘楽町・富岡市・甘楽郡下仁田町の県西部地域を東西に横切っている。この路線のうち、群馬県内の広範な部分が江戸時代に中仙道の脇往還として使われた旧街道を踏襲している。かつて宿場町であった市街地とその周辺では幅員が狭いうえに交通量が多く、特に大型車の通行が目立つ、渋滞と安全対策が課題の道路であった。市街地北側に国道254号バイパスを作る工事は1976年より事業化され、西側から東方へ向かって富岡市田島から甘楽町福島まで全長8.27kmの「富岡バイパス」が2000年に開通した。その東に繋がる「甘楽吉井バイパス」は甘楽町福島から高崎市吉井町本郷を結ぶ全長3.2kmの路線で、高崎市吉井町片山までが2011年に開通している。

都市計画道路「吉井北通り線」は、「甘楽吉井バイパス」の東側へ繋がる高崎市吉井町本郷と高崎市吉井町池を結ぶ全長1.5kmの道路で、平成14年度より建設事業が開始されている。

この路線上の大沢川以西には周知の遺跡(高崎市遺跡番号02746)がわかり、北側の鐮川沿いには本郷古墳群が広がっている。群馬県教育委員会文化財保護課は群馬県高崎土木事務所の照会を受け、用地確保が終了したこの区間について、平成23年8月に西調査区の事業対象地3715㎡、同年10月に東調査区の事業対象地6408㎡について、重機を用いたトレンチ試掘調査を実施した。その結果、両調査区とも竪穴住居や土坑および土師器・須恵器包含層の存在を確認し、試掘対象地内の6351㎡について埋蔵文化財調査が必要と判断した。

平成24年8月1日、群馬県教育委員会文化財保護課の調整を受け、群馬県高崎土木事務所と公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団との間で発掘調査委託契約が締



第1図 本郷畑内遺跡と周辺の地勢

第1章 調査に至る経緯と経過

結され、同年9月より翌25年2月までの期間で発掘調査が実施されることとなった。

遺跡の名称については、調査地全域を覆う大字名である本郷に、調査地内に最も広範にかかる小字名の畑内を組み合わせ『本郷畑内遺跡』とした。

2 発掘調査の方法

(1) 調査区とグリッドの設定

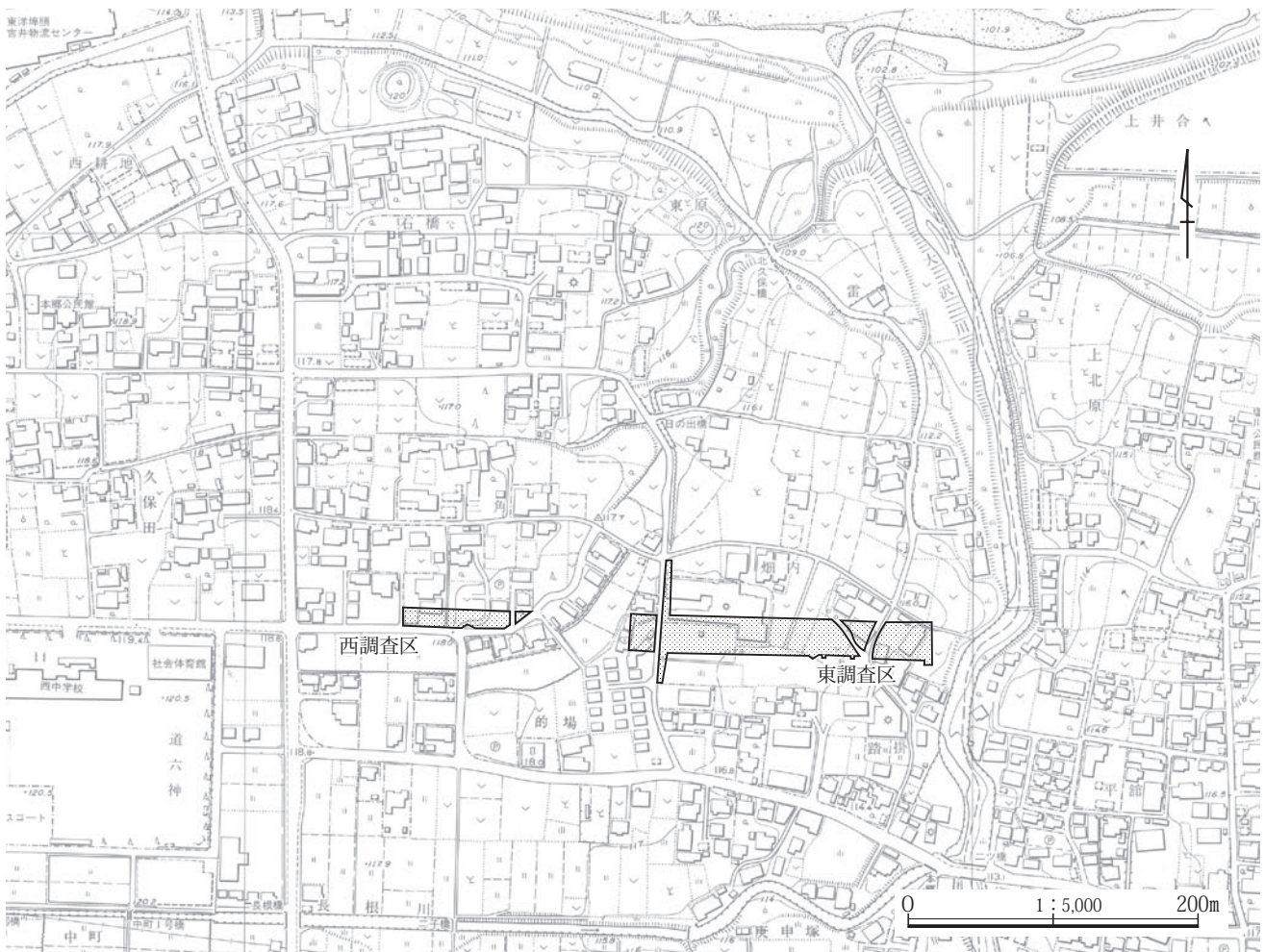
調査対象地を中央で分断する旧流路跡を境に、西側を「西調査区」、東側を「東調査区」とした(第3図)。また、各調査区内にある既存道路や水路が生活施設として不可欠なため、調査対象外とし、これを境に西調査区で1～6区、東調査区では1～5区に分け、それぞれ西1区～西6区および東1区～東5区と呼称した。なお、西3～4区を分ける通路は切り替えしを行い、最終的に境界はなくなっている。

調査区名称は調査工程管理のために用いたが、遺構番号はこれにかかわらず通し番号としたので、個別遺構の名称に反映するものではない。

調査段階では調査区内に方眼杭を設定することはなかったが、遺構に伴わない遺物取上げのためグリッド呼称を使用した部分がある。これは平面直角座標系(新座標IX系)を用いた座標値の下3桁を呼称したもので、例示すれば座標X=29,080とY=-76,950の交点を(080、-950)と略し、この地点を南東隅とする1m四方の範囲を080-950グリッドと呼んだ

(2) 基本土層

本遺跡の基本土層は、河川の氾濫や旧河川の影響により生じた微地形のため、東西両調査区間で異なり、さらに同一調査区であっても一様ではなかった。ここでは第3図の試掘トレンチの調査地点で計測したデータを元に、第4図に柱状図を示した。なお、調査対象地外の記



第2図 本郷畑内遺跡調査区位置図

録も一部で用いている。

西調査区はA～C地点で記録化した。旧流路に近いC地点でシルト質土の堆積が厚かった。基盤層はローム土の二次堆積土で砂礫が不均等に混じっている。全体的には地点間の差の少ない、均質な土層であった。

D地点は旧流路にあたる埋没谷で、基盤層が河床礫となっている。このため調査対象地から外れた地点である。東調査区はE以降の地点である。基盤層は西調査区と同じローム土の二次堆積土層で、砂礫の混入も同様に不均等であった。F～H地点は類似した層で、遺物の包含もやや多かった。調査対象地内では最も安定した地点であったと思われる。東隅付近では大沢川氾濫の影響を受け、M・N地点では他の地点に比べ砂礫層が厚かった。このためM地点以東も調査対象地から外れている。

いずれの地点からも、鍵層となるテフラ層は確認できなかった。また両調査区とも鑛川の氾濫層土を基盤としているようで、礫の中には長さ30cm以上の円礫が含まれていた。

(3)調査と記録の方法

調査では、遺物包含層の上まで重機による土砂除去を行った。これに先立って試掘トレンチ跡を人力で掘削し、土層を把握したうえで、バックホーを使用して表土と上面覆土を除去した。その後をジョレンを用いて人力で遺構確認を行った。把握できた遺構は、埋没土断面観察のため、小規模な遺構は半裁し、大型遺構は十字に土層観察ベルトを残して掘り下げを行った。ただし、ピットに関しては土層確認を行えなかった遺構が多い。

記録はトータルステーションによる平面測量と、アナログの断面測量とした。断面測量の図根点は平面測量図に加え、断面図はデジタルトレースを行って後日のデジタル版下作成に備えた。遺構写真はデジタルカメラによる撮影と、ブローニー版モノクロネガフィルム撮影を併用して調査担当者が行った。

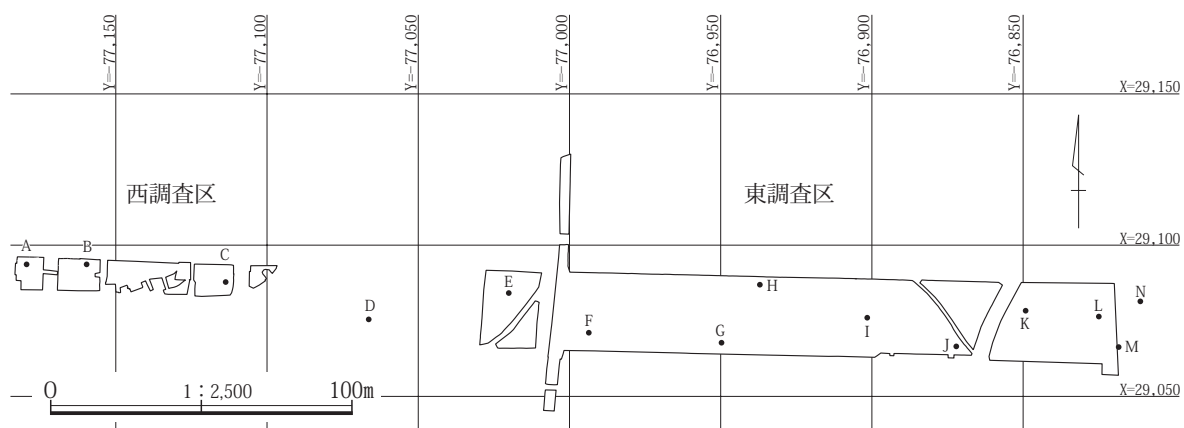
3 発掘調査の経過

発掘調査は平成24年9月より開始した。調査範囲は試掘結果より、調査区中央から西調査区南側に見られる旧流路の埋没谷部分は遺跡なしと判断されていた。住宅地内の調査であるため、排土を調査区域外へ搬出することができず、西調査区と東調査区の間(旧流路部分)に排土を仮置きしながら用地内での打って返しの調査となった。また、地元の生活道路や水道管が調査区内に残り、一部調査できなかった部分がある。

全長200mの東西に長い東調査区では排土移動の通路を確保するため全体を南北に二分し、北側から調査を始めた。このため全景撮影も南北の2回に分けて行い、PL. 2①の東調査区全景写真も2枚の写真を合成したものである。西調査区では西側から順次調査を終了させながら東側へ調査を進める方法をとった。

調査が進行する中で11月18日に地元吉井西小学校の児童父兄向けの遺跡公開、1月20日には地元住民向けの現地説明会を実施した。

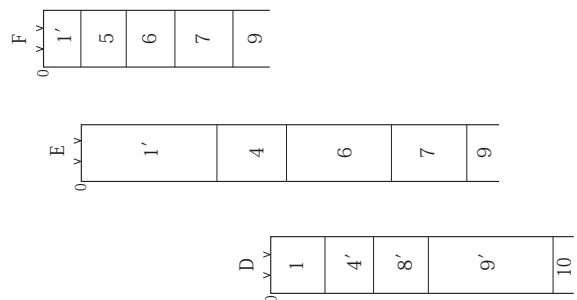
調査は予定通り2月に現場作業を終了し、遺物洗浄と注記作業を外部委託した。また、調査期間中に手実測で



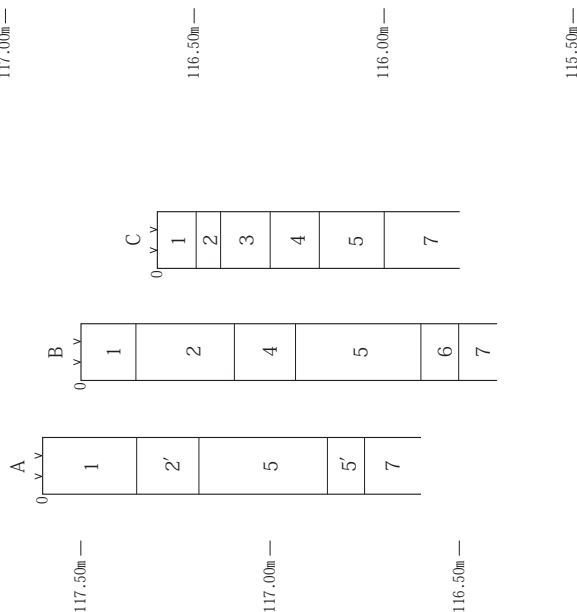
第3図 調査区の呼称と基本土層計測地点

東調査区
 1 黒褐色～暗褐色の表土。As-A混じりの耕作土。1'は客土で碎石混じりの地点も見られる。
 2 褐色砂礫層 大沢川の氾濫層と思われ東寄りの地点でのみ見られる。2'は礫主体で灰色味を増し、2'は砂主体で黄色味を帯びる。
 3 褐色礫層 2層に続く大沢川氾濫層。3'は砂の混入多くやや黄色味を帯びる。
 4 褐色のやや砂質土。西調査区の2層に対応すると思われる。4'は黒色味やや強い。
 5 褐色～暗褐色土層 古代の遺構を覆う弱粘性土層。5'はやや黒色味を帯びる。
 6 黒褐色土層 古代の生活面に相当すると思われる土層で土器の混入が見られる。
 7 暗褐色土層 6層に続き、若干の土器の混入が見られる。
 8 暗褐色～褐色土層 シルト質土層。二次堆積ローム土混じりの層。
 8'は灰色味が強く粘性強い。
 9 黄褐色～灰褐色粘性土。西調査区7層に対応する砂礫混じりのローム土二次堆積土。9'は粘土に近い。
 10 旧流路にあたる礫層。

東調査区



西調査区



西調査区
 1 暗褐色～灰褐色の表土。As-A混じりの耕作土で粗粒土層。
 2 褐色のやや砂質土。径3mm前後の細礫混じりのややしまり欠く層。2'は黒色味やや強い。
 3 暗褐色粘性土。シルト質土層。
 4 黒褐色砂質土。
 5 褐色粘性土。5'は黒色味やや強い。
 6 暗褐色粘性土。
 7 褐色～灰褐色粘性土。砂礫混じりのローム土二次堆積土。

0 1:20 50cm

第4図 基本土層柱状図

図化した遺構断面記録のデジタル化等、調査段階での必要な作業は引き続き3月まで行っている。

具体的な調査経過は以下(調査日誌抄)に記す。

調査日誌抄

- 9/3 本郷畑内遺跡発掘調査開始。
- 9/4 調査区境界杭打ち作業。試掘トレンチ確認作業。
- 9/6 東1区より重機による表土等掘削作業開始。
- 9/7 重機掘削の後より遺構確認作業開始。
- 9/25 東3区西側より重機による表土等掘削作業開始。
- 9/28 東3区1・2号住居掘り下げ作業着手。
- 10/3 土坑・ピット等東3区その他遺構の調査開始。
- 10/4 東1区埋没谷および1号溝調査着手。
- 10/10 西1区より重機による表土等掘削開始。
- 10/11 遺跡最西端確認の1号遺物集中地点調査着手。
- 10/16 西調査区最初の住居となる19号住居調査着手。
- 10/22 西1・2区調査終了し、重機による埋戻し開始。
- 10/24 西3・4区重機掘削終了し、遺構確認着手。
- 10/25 西3区粘土採掘坑および27号住居調査着手。
- 11/2 西3・4区調査終了し、重機による埋戻し開始。
東5区31号住居調査着手。
- 11/7 東5区で畝畝間状の遺構確認。1号畝と命名。
- 11/15 ラジコンヘリによる遺跡全景写真撮影。
- 11/16 東調査区は北側調査終了し、南側に調査地点移動。重機による表土等掘削を東側より開始。
- 11/18 高崎市立吉井西小学校児童父兄遺跡見学 81名。
- 11/27 市道拡幅部南側(南拡張区)部分表土掘削開始。
- 11/28 東調査区の重機による切り返しと埋戻しを東5区より開始。
- 12/14 地域住民向け遺跡説明会資料(回覧)配布。
- 12/27 年末年始休業のため現場一時閉鎖。
- 1/7 年明けの調査再開。
- 1/17 遺跡南半部分ラジコンヘリによる空中写真撮影。
- 1/20 地元向け遺跡現地説明会開催。見学者101名。
- 2/8 55号住居、95号土坑など東3区西寄り遺構の調査を終え、発掘調査作業終了。
- 2/12 重機による埋戻し作業終了。
- 2/20 高崎土木事務所へ調査地点の引き渡し。

4 整理業務の経過

整理事業の実施にあたっては、群馬県教育委員会文化財保護課の調整を受け、群馬県高崎土木事務所と公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団との間で平成25年6月25日、整理事業の委託契約がかわされ、同年8月1日より同事業団本部にて整理作業を開始した。

土器・石器類は洗浄注記を発掘調査時に済ませ、事業団に収納してあった。これを遺構とその周辺遺物ごとに接合し、図化個体を選定後、復元から写真撮影・実測・採拓・観察作業を行った。遺物実測は写真測量を併用しながらアナログ作業で実測・トレース図面まで作成後、スキャニングによりデジタルデータ化したものである。遺物写真はデジタルカメラで撮影した。併行して非掲載土器の分類・カウント作業を実施している。金属製品も当事業団で修復・保存処理作業を行い写真撮影・実測・観察作業を行った。鏽の影響で本来の形状が不明瞭なものはX線写真により旧状を復元した。保存処理後の作業の流れは他の遺物と同様である。

遺構図は調査段階でデジタルデータ化しており、これらを編集してデジタル原稿を作成した。

平成26年9月30日で編集作業を完了し、出土遺物・図面・写真類の収納作業を終了させた。平成27年1月25日に発掘調査報告書「本郷畑内遺跡」を刊行した。

なお、調査時に付けた遺構名称は原則的に踏襲したが、整理過程の中で、掘立柱建物の柱穴を中心に表1のように改定を行ったものがある。その他にピット類は未命名のものが大半だったため、整理段階で新規に番号付けを行った。

表1 遺構名称変更一覧

変更後名称	旧名称	欠番
4号掘立柱建物P7	22号土坑	
6号掘立柱建物	2号柱穴列	
9号掘立柱建物P2	120号ピット	
9号掘立柱建物P3	121号ピット	
10号掘立柱建物P8	12号ピット	
10号掘立柱建物P9	13号ピット	
10号掘立柱建物P10	51号ピット	
10号掘立柱建物P12	16号ピット	
12号掘立柱建物P3	36号ピット	
12号掘立柱建物P10	69号ピット	
2号柱穴列	6号掘立柱建物	
22号土坑	5号溝	○

旧名称は遺構名の差し替えや、別遺構による補填を行なったが、5号溝は補填できず欠番とした。

第Ⅱ章 発掘調査と遺跡の概要

1 遺跡の位置と地形

本郷畑内遺跡のある群馬県高崎市吉井町(明治22年吉井町・矢田村・本郷村など多胡郡内9町村の合併により生まれ、平成21年高崎市と合併により現在の地名となる。本文中では旧吉井町と呼称)は、関東平野の北西隅・群馬県南西部に位置している。北東側は高崎市が広がり、南東側を藤岡市、西側を甘楽郡甘楽町・富岡市と接している。町のほぼ中央部に下仁田町と長野県佐久市の境界付近にある物見山(標高1375m)を源とする延長58.8km、流域面積632km²の利根川水系一級河川の鐮川が西から東へ流れ、高崎市阿久津町付近で利根川一次支流の烏川に合流している。

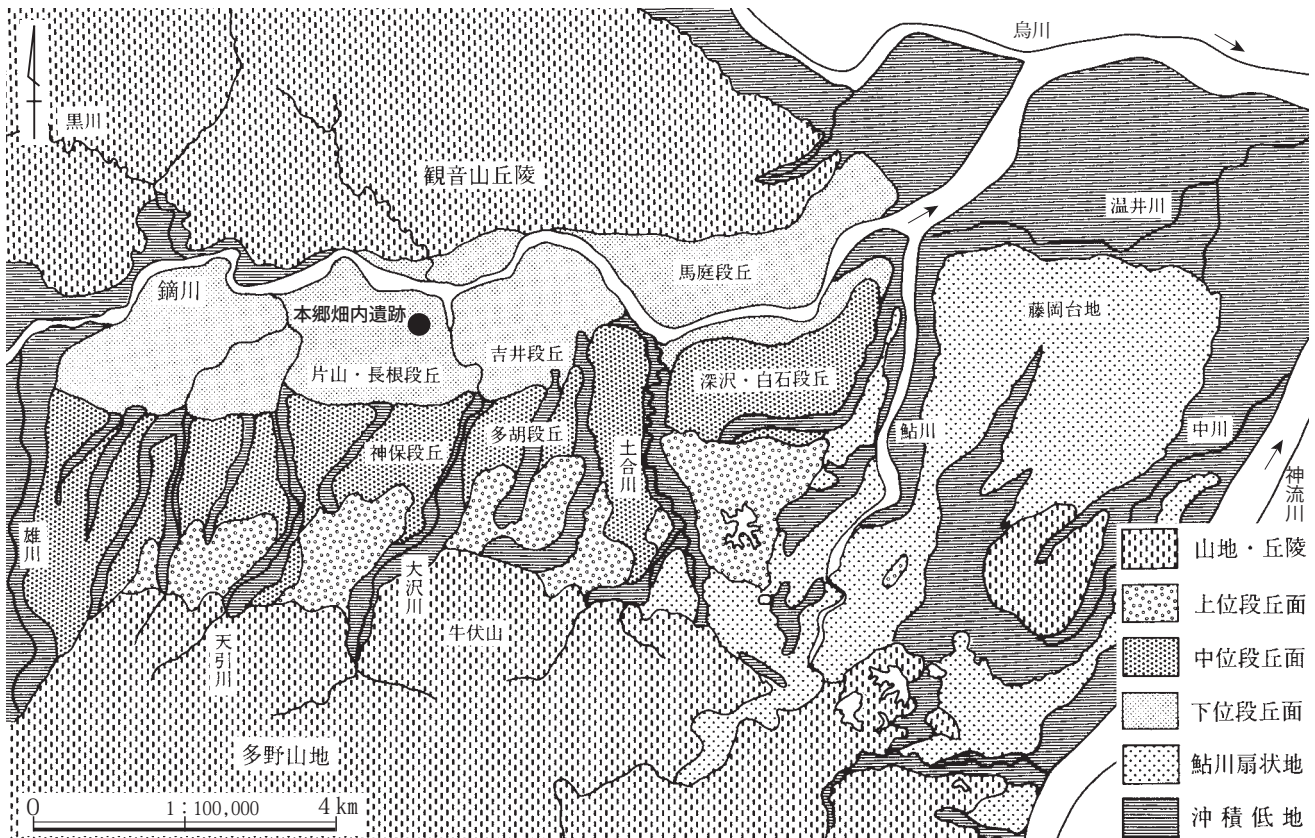
鐮川流域は古くから「甘楽の谷」「鐮の谷」と称されてきた地域である。流域を西側に進めば内山峠を経て長野県佐久市に至る、中部地方と関東地方を結ぶ重要な交通路であった。現在は鐮川兩岸を行き来するようにして上

信電鉄が高崎ー下仁田間を結び、東京都文京区と長野県松本市を結ぶ国道254号も甘楽の谷域では鐮川に沿っている。関越自動車道から藤岡市で分岐し、新潟県上越市で北陸自動車道へ繋がる上信越自動車道は、主に鐮川南の丘陵北隅を走向している。

鐮川流域は西側に隣接する富岡市街から甘楽郡甘楽町、本遺跡のある旧吉井町にかけて、広く富岡層群と呼ばれる第三紀中新世の海成層を基盤としている。旧吉井町市街地と周辺は、北側の丘陵地から続く富岡層群中の吉井層と呼ばれる泥岩・砂岩層を主体とする面にある。

鐮川の作る段丘は左右非対称で、旧吉井町周辺の左岸北側では下位段丘が崖線を隔て丘陵地形に接している。東西に繋がる平坦なこの丘陵地は富岡丘陵と呼ばれるが、高崎市街地に面した周辺では観音山丘陵と呼ばれ、周辺住民から親しまれている。

旧吉井町から西側に隣接する甘楽町にかけての鐮川右岸では三段の河岸段丘が広がり、さらに南側は関東山地



第5図 遺跡周辺の地形
(群馬県埋蔵文化財調査事業団『黒熊中西遺跡』1992 第3図より転載・一部加筆)

の北隅、多野山地へ繋がっている。右岸の河岸段丘は南側から鑄川へ流れ込む雄川・天引川・大沢川・土合川等多数の小河川による浸食をうけ、細かく分断されている。このうち大沢川(全長約6km)は東谷川・八束川・折茂川・長根川などの小河川を集めた旧吉井町域で流域面積、長さ、水量等、最大規模の河川である。

本郷畑内遺跡は旧吉井町市街地西側の片山・長根段丘と呼ばれる下位段丘上にあり、東側を流れる大沢川を挟んで吉井段丘と接している。南側の中位段丘は神保段丘と呼ばれ、さらに上位段丘を隔て周辺のランドマークである牛伏山(標高491m)へ至っている。

本郷畑内遺跡は下位段丘(片山・長根段丘)の北東隅、鑄川河床から比高7m前後の段丘崖より南側35m前後に位置し、無名河川の旧河道と思われる沖積低地が遺跡を二分する入り組んだ地形にある。付近の標高は調査区西側で118m前後、調査区東側で116m前後で、北側の鑄川よりも東側の大沢川へ向かって緩やかに傾斜している比較的平坦な地形である。調査前は住宅地を中心として一部畑地が入り込む土地利用であったが、明治18年の迅速測図では北西側の集落や南側の水田からやや間隔をおいて、畑地が全面に広がっていた。

2 周辺の遺跡

ここでは本郷畑内遺跡で主な調査対象となった弥生時代から平安時代にかけての歴史的景観を理解するために、これらの時代を中心とした周辺の歴史環境について概略を記す。第6図の遺跡ドットは、周辺で数次におよぶ広範な調査を実施した遺跡について代表的な地点のみの掲載とした遺跡がある。また長根遺跡群として報告された報告書中の多数の遺跡はドットを示しきれず、代表的な遺跡のみの図示となった。古墳群の範囲やその他の面的な遺跡はアルファベットで示した。本文中では初出の遺跡にのみ番号を付した。引用・参考文献は250頁に一括して記した。

【旧石器時代】

この時代の遺跡は上信越自動車道の発掘調査で、多比良追部野遺跡(49)や甘楽町白倉下原遺跡などで確認された。いずれも鑄川右岸中位段丘面において、約2万年前のA T(始良・丹沢)火山灰層下から確認されるものであ

る。また、羽田倉遺跡(36)でも多数の石器出土が報告されている。

【縄文時代】

縄文時代草創期・早期の遺跡はほとんど調査されていないが、本遺跡(1)では該期の石鏃の出土例がある。集落が確認されるのは前期からで、鑄川右岸中位段丘上の椿谷戸遺跡(21)・神保富士塚遺跡(41)などの調査例がある。中期に入ると遺跡の範囲はやや広がり、鑄川右岸中位段丘の神保植松遺跡(42)など大規模な土坑群等の確認がある他、左岸でも東吹上遺跡(9)に土器群が見られる。本遺跡でも遺物が採取される他、本遺跡東側に大沢川を隔てて隣接する本郷塩川遺跡(2)に後期前半の敷石住居や列石等が見られる。後期後半以降は再び遺跡が少なくなる。

【弥生時代】

弥生前期から中期も遺跡は少ないが、神保富士塚遺跡では弥生中期の土坑群が調査され注目されている。弥生時代後期になると中位段丘上で集落が増加し、長根安坪遺跡(37)のように一旦途切れる大集落もあるが、多比良追部野遺跡など古墳時代前期まで継続する集落が多い。これらは古墳時代後期以降の集落占地と共通することを特徴としている。本遺跡では下位段丘上の弥生時代後期住居が1棟調査されており、この地区では数少ない調査例となっている。小規模ながら古墳時代前期まで集落が繋がる点は、鑄川右岸中位段丘上の集落と共通している。

【古墳時代】

旧吉井町域は方形周溝墓の調査例が少なく、前期・中期の大型古墳の見られない地域である。古式の古墳調査例には片山古墳群(A)内で粘土槨の小円墳例がある。後期の古墳群は鑄川沿いと、中位段丘上の小河川沿いに見られる。鑄川沿いでは特に下位段丘の広がる右岸側に密集している。自然堤防状の微高地が主な占地となっているようで、片山古墳群の他に本郷古墳群(B)・下池古墳群(D)などがある。小河川沿いでは北側から流下して本遺跡北側に鑄川に合流する大沢川両側の中位段丘部に、神保古墳群(H)や多胡古墳群(I)などこの地域最大の古墳群が展開している。

集落は古墳時代前期まで中位段丘上を中心に見られるが、後期になって急激に増大し、入野遺跡(19)・長根羽田倉遺跡(38)など枚挙にいとまがない。旧吉井町南側に

隣接する藤岡市や西側に隣接する甘楽町で滑石を産出することから滑石製品を製作する工房が古くから注目され、昭和37年群馬大学によって調査された入野遺跡はその嚆矢となった。下位段丘での古墳時代後期集落は、鐮川左岸の川福遺跡(6)、右岸中位段丘直下の吉井川下宿遺跡(18)などわずかに見られ、鐮川右岸縁で片山遺跡群(10)などにややまとまった例がある。町域の広い範囲に古墳群が展開しており、それを支える集落の存在は不可欠であるが、下位段丘での集落数は十分でない。該当地が現在の市街地と重複するため、調査例が少ないものと思われる。本遺跡および本郷塩川遺跡の調査は、片山遺跡群に続く鐮川右岸自然堤防状微高地の集落展開を示す好例となった。

【奈良・平安時代】

律令期の町域は倭名類聚抄記載の多胡郡にあたる地域である。本遺跡のある旧吉井町の西側に隣接する甘楽町は「から」を語源とし、半島からの帰化人と繋がる地域と古くから推測されている。和同四年(711)、周辺の三郡から300戸を割譲し多胡郡を建郡したことが刻まれた日本三古碑の一つ国史跡多胡碑(3)は、本遺跡東側1.8kmの鐮川右岸で本遺跡と同じ下位段丘面にある。続日本紀には甘楽郡の織茂(おりも)・韓級(からしな)・矢田(やた)・大家(おおやけ)の4郷、緑野郡の武美(むみ)1郷・片岡郡の山等(やまな)1郷を併せた6郷名が記され、倭名類聚抄には俘囚郷を加えた7郷が記されている。本遺跡周辺にはこれら郷名の名残が今も数多く見られる。折茂(おりも)の地名が南側1.1km周辺に、辛科(からしな)神社が南西側2.3kmに、矢田の地名が南東側2km周辺に、山名(やまな)の地名が東側5.5km周辺にあるなどきわめて密集した状態であり、多胡碑周辺の御門(みかど)の地名をもって郡衙推定地とする検討も古くから行われ、多胡碑西側に隣接する岡、雑木味地域には瓦の散布地が広がり、この推定を裏付けている。中でも矢田遺跡(47)は出土文字資料から矢田郷内の集落と比定されている。本遺跡周辺は現代の地名より通常織茂郷内に比定される地域にあたる。調査成果からは郷に関する新たな知見は得られなかったが、多胡郡建郡の時期には確実に存在していた集落である。

古墳時代後期に見られた大規模な集落は、この時期にさらに拡大し広範囲にわたって確認される。中位段丘(多

胡段丘)上の入野遺跡・矢田遺跡、および長根遺跡群として報告された神保段丘上の北高原遺跡(28)・神保境遺跡(29)などの諸遺跡は、ともに住居総数が数百棟規模の大集落である。他にも神保富士塚遺跡・長根羽田倉遺跡など周辺でも集落の調査が続き、群馬県内でも有数の集落が調査された地域である。下位段丘面では鐮川右岸縁は自然堤防状の微高地で古墳時代後期に続き集落がみられ、本遺跡や本遺跡西側に隣接する道六神遺跡(11)の他、上河原遺跡(16)・御門遺跡(17)などの集落の広がりが確認されている。しかし、古墳時代後期同様中位段丘上の集落に比べ著しく小規模で、現市街地と重複して古代の集落が存在するものと推定する。

生産遺跡では鐮川左岸でヌカリ沢A窯址(4)など平安時代初頭を中心とする時期の須恵器窯跡が調査されている。また、本遺跡南側一帯の下位段丘面は長根条里(M)と呼ばれる条里区画地と推定されているが、明治39年からの耕地整備事業によって条里地割は姿を消し、現在の地形からその痕跡は窺えない。道六神遺跡では条里地割を留めるとされる溝が調査されている。

【中世の城館】

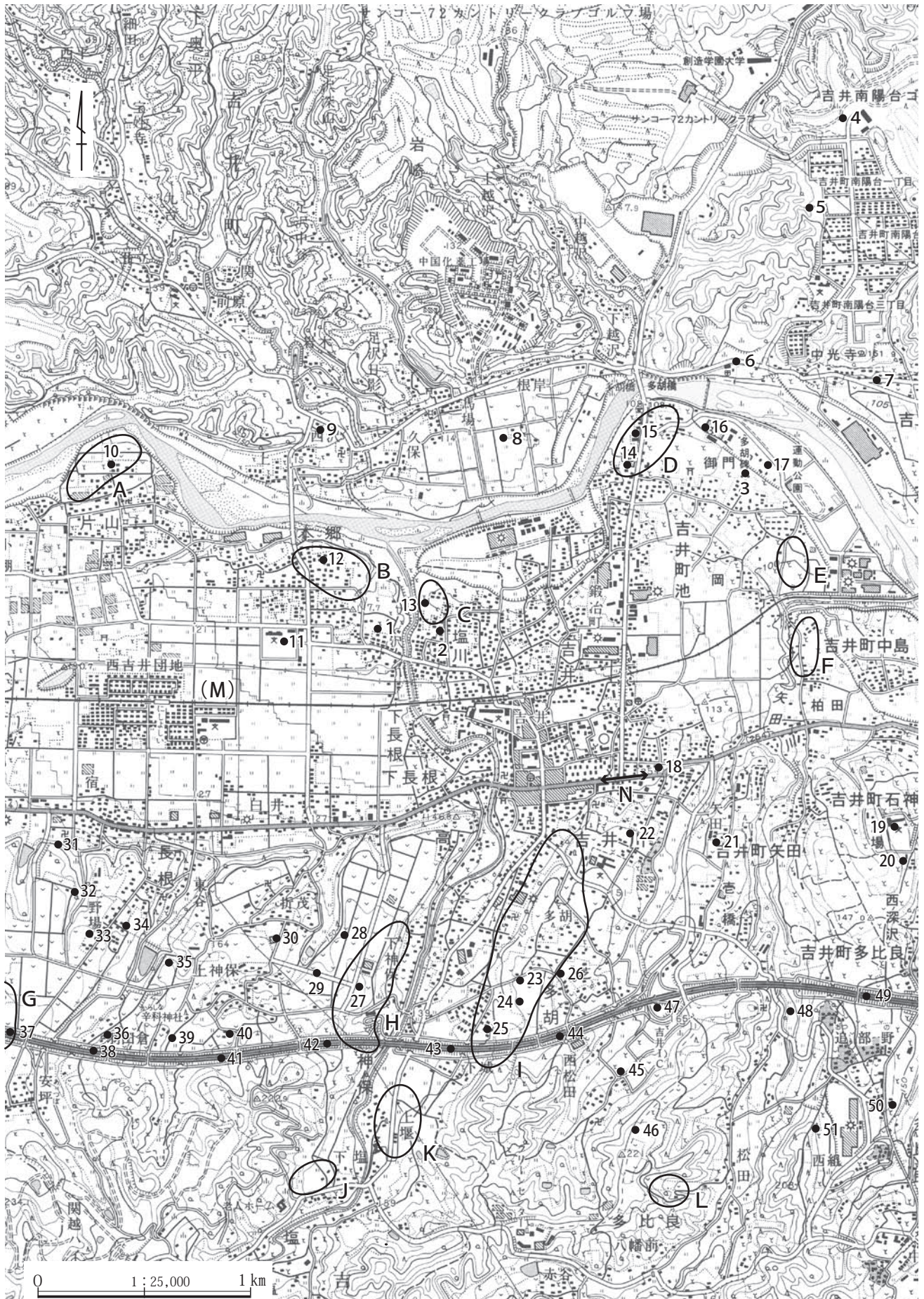
戦国時代の西上州は後北条氏・上杉氏・武田氏の勢力が拮抗する地であった。甘楽の谷は長く小幡氏の支配下にあり、武田氏・織田氏などの侵攻による戦乱があった。山城・城柵の多い地域であり、下条遺跡(25)で城跡が調査されている。下位段丘には本遺跡北側の本郷城(12)・大沢川を隔てて本遺跡東に隣接する塩川の砦(13)があるが、実体は明らかではない。

【江戸時代】

信州との国境へ向かう中仙道は群馬県西部では碓氷川に沿った安中市周辺を横断しているが、鐮川沿いには中仙道脇往還である下仁田街道(N)が通っていた。信州街道・富岡街道などの呼称の他、比較的起伏が少なく参勤交代に用いられなかったことから庶民に用いられることが多く、姫街道とも呼ばれた。吉井町は藤岡宿と富岡宿の間にある宿場町であった。

天明三年(1783)の浅間山噴火の際の降下軽石を集めて埋めた痕跡が吉井川下宿遺跡の井戸で見られるが、畑の一画に軽石を寄せた「灰掻き山」と呼ばれる復旧痕が甘楽町の天引向原遺跡で調査されている。

火打金は江戸時代吉井宿の名産品であったが、吉井川



第6図 周辺遺跡の分布

国土地理院発行 高崎平成22年12月1日 上野吉井平成14年12月1日 富岡平成15年3月1日 藤岡平成2年8月1日使用

第Ⅱ章 発掘調査と遺跡の概要

下宿遺跡で工房と推定される一部が調査され、東シメ木遺跡(23)や多胡蛇黒遺跡(44)に出土例がある。

平成26年6月、富岡製糸場が世界文化遺産に登録された。富岡製糸場は本遺跡の西側約8kmの鑄川および鑄川支流の高田川に囲まれた通称富岡盆地にある。明治5年

の製糸場開業には交通の便、豊富な水や材木、施設建設のための平坦地の存在などが求められた。養蚕地帯であった信濃・上野・武蔵を結ぶ要所として、この地域が選ばれるに至った歴史的な裏付けが看取できる。

表2 周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	縄文			弥生		古墳				奈・平		その他	中・近世	遺跡の概要 その他の遺構・遺物	参考文献
		前	中	後	中	後	集落	墓	生	集	生					
1	本郷畑内遺跡					○	○					◎		▲	本報告の遺跡。	
2	本郷塩川		○	●								○			H25年度 当事業団調査。	52
3	多胡碑												※		711年多胡郡建郡を記す日本三古碑の一つ。	4
4	ヌカリ沢A窯址											○			8世紀後半から9世紀前半の須恵器窯。	26
5	彦田谷窯跡											○			ヌカリ沢窯と同時期の須恵器窯。	26
6	川福遺跡							○				○			須恵器工人の集落か。土鍾多量に出土。	9・37
7	中林遺跡											○			8世紀後半～9世紀主体。瓦多量に出土。	48
8	富岡遺跡	▲	▲									○			9世紀前半頃の集落。	15
9	東吹上遺跡		▲		▲				○							3
10	片山遺跡群						○		○			○		▲	片山古墳群内。粘土槨を持つ円墳より仿製鏡等出土。古墳後期・平安の集落。	45
11	道六神遺跡											○	※		条里地割を留める可能性持つ溝。	8
12	本郷城													※	築城形跡ないが、御門・堀込・的場の地名。	2
13	塩川の砦													▲	永禄六年武田信玄攻略か。平館の地名。	2
14	竹腰遺跡	▲					▲	▲				○			平安後期主体の大集落の一部か。	17
15	釜ヶ淵遺跡											○				
16	上河原遺跡											○			鑄川右岸縁部で多胡碑の北西に近接。	43
17	御門遺跡						○					○		●	地名より多胡郡衙推定地。	27
18	吉井川下宿遺跡								○	○				※	近世の鍛冶工房と道跡。	51
19	入野遺跡	○				○	○		◎			◎	※	◎	古墳後期滑石製品工房址調査の学史的遺跡。その後周辺で集落調査続行。	1・4・10
20	馬場遺跡					○						◎		●	入野遺跡群南側の集落遺跡。	28
21	椿谷戸遺跡	○	○									○		▲		14・18・41
22	川内遺跡		▲									○		※	土壌墓。	7・40
23	東シメ木遺跡											○		※	多胡古墳群中の円墳6基。玉類他遺物豊富。	47
24	多胡松原遺跡									○		○			古墳後期～平安集落。	47
25	下条遺跡									○				※	多胡古墳群内。中世館。	44
26	多胡薬師塚古墳											○				4
27	南高原遺跡								◎	○		◎				46・25・30
28	北高原遺跡						○		○			◎			古墳後期～平安大集落。	29・30
29	神保境遺跡						○		○			◎			古墳後期～平安大集落。	29
30	折茂東遺跡					○	○	○				○				11
31	恩行寺裏古墳											○				4
32	西馬脇・長根宿遺跡	▲	▲									○			広範な集落の一隅か。石帯(巡方)出土。	12・39
33	上の場遺跡											◎				34・39
34	東馬脇廃寺															
35	折茂Ⅲ遺跡	○										○			古墳後期～平安集落。暗文土器豊富。	49
36	羽田倉遺跡											○			Ⅱ遺跡で旧石器時代遺跡確認。	39
37	長根安坪遺跡		○			◎						◎				31
38	長根羽田倉遺跡	▲	▲	▲					◎			◎	○	※	滑石模造品・石製紡輪の工房含む集落。	20
39	富士塚遺跡											○				39
40	宮西遺跡											◎			古墳時代後期から11世紀まで続く集落。	39
41	神保富士塚遺跡	○	●		●				◎			◎			古墳後期～平安大集落。弥生中期土坑群。	23
42	神保植松遺跡	●	●		●							○		○	弥生中期・縄文前期資料豊富。中世城郭。	32
43	神保下條遺跡		●				○	○	○			○		○	豊富な埴輪。As-A下の水田・畑。	21
44	多胡蛇黒遺跡		●						◎			◎			古墳後期～平安大集落。	24
45	柳田遺跡											○			矢田遺跡の南側に繋がる集落か。	16
46	多比良笠掛遺跡	▲	○									○			1棟だけ離れた10世紀の住居。	38
47	矢田遺跡	▲	○	▲		○	○	○	◎			◎		○	古代多胡郡矢田郷中心地に比定される大集落。「八田」刻書石製紡輪出土。	19・36・42
48	多比良観音山遺跡											○			As-B下の水田。	35
49	多比良追部野遺跡	○				○	○	○				◎		※	旧石器。椀型滓等鍛冶に関わる遺物。	33
50	東沢遺跡											○				11
51	多比良遺跡		▲									○				22

縄文・弥生の項で●は竪穴住居の確認はないが、土坑等の確認や多量の遺物出土のあるものを表す。◎は大規模な遺構の確認のあったことを示し、集落であれば竪穴住居では大よそ30軒以上の調査である。※は概要欄に説明を加えている。▲はその他若干の痕跡が見られたことを表す。参考文献は250頁に記した。

表3 周辺の古墳群とその他遺跡一覧

No	古墳群・遺跡名	備 考	参考文献
A	片山古墳群	鑄川右岸。粘土槨を有す中期古墳調査し小形倣製内行花文鏡・鉄剣・鉄斧・石製模造品等豊富な遺物出土。他に後期横穴式石室の円墳調査。	45
B	本郷古墳群	本遺跡北側に隣接。鑄川右岸、21基の後期古墳群。	4
C	北原古墳群	大沢川右岸で鑄川に合流する地点付近、本郷古墳群対岸の後期古墳群。	4
D	下池古墳群	鑄川右岸、多胡碑上流側に隣接。	4
E	高木古墳群	鑄川右岸、多胡碑下流側に隣接。6基現存。	4
F	塚原古墳群	付近には少ない前方後円墳を含む後期古墳群。蛇田古墳の調査。	4・13
G	安坪古墳群	天引川右岸。埴輪を伴う古墳が多い。	4・46
H	神保古墳群	大沢川左岸で対岸の多胡古墳群に次ぐ63基の後期古墳群。	4
I	多胡古墳群	大沢川右岸のこの地域最大規模の91基以上の古墳群。	4
J	塩Ⅱ古墳群	12基の後期古墳群。	4
K	塩Ⅰ古墳群	10基の後期古墳群。塩Ⅱ古墳群と共に塩古墳群と呼ばれる。	4
L	山ノ神古墳群	7基の後期古墳群。	4
M	長根条里	片山・長根段丘上に広がる条里跡で道六神遺跡で一部を調査。範囲など明確ではない。	8
N	下仁田街道	中仙道の脇往還。旧吉井町域では国道254号とほぼ重複すると思われる。吉井川下宿遺跡でAs-A下の路面の一部や道脇の施設の一部を調査。	6

第Ⅲ章 調査の内容

1 調査の概要

本郷畑内遺跡の全体図は別添付図に記したが、他に竪穴住居・竪穴状遺構の配置図を第7図に、ピット群の配置図を第143～148図に示した。

本遺跡で調査した遺構は竪穴住居65棟、竪穴状遺構6棟、掘立柱建物12棟、柱穴列3棟、ピット941基、土坑95基、粘土採掘坑1基、溝21条、畠の畝間痕跡と思われる小溝群4カ所、遺物の集中出土地点2カ所であり、本文ではこの順に記載した。

豊富な遺物の出土があった竪穴住居、竪穴状遺構、遺物集中出土地点以外では、時期の推定ができる遺構はごく少ない。また、テフラ層のような鍵層を遺構埋没土内で検出することができず、相対的な年代推定の資料にも乏しかった。

流路跡の埋没谷を挟んだ西側にある西調査区では、竪穴住居5棟、掘立柱建物と柱穴列各1棟、土坑3基、粘土採掘坑1基、遺物集中出土地点1カ所がある。弥生時代末から古墳時代前期の遺構はすべてこの調査区にあるが、平安時代の住居は1棟もなく、奈良時代の19号住居40号住居の2棟が調査されている。土坑・ピット・溝などの遺構も少なく、畠も確認されていない。遺構ではないが、集落に先行する倒木痕の多さは目立っていた。

東調査区は調査面積が広く、古墳時代前期を除き遺構

の種類・量とも圧倒的に多かった。

埋没谷に接した東調査区西側の東1・2区は、調査範囲内で最も遺構の少ない一画で、確認できたのは両区併せて、ピット・土坑各1基、溝2条のみである。

東3区は調査面積の約6割を占める最も広い調査区で遺構の量も大半を占めている。しかし、西隅の南北に広がる拡張区部分は遺構が少ない。特に北側は流路跡の埋没谷上にあたるようだ。竪穴住居は古墳時代後期が西寄りに偏っているが、奈良・平安時代にはほぼ全域に広がり、北東隅付近でやや少なくなる。掘立柱建物が9棟あるが、中央東寄り付近に多い。ピットは中央南寄りに濃密に分布している。

東4区はやや遺構の少ない一画である。竪穴住居・掘立柱建物が各1棟だが南側に偏り、区北側の空白が東3区北東隅から続いている。

東5区東隅は大沢川へ向かう傾斜が始まる一画だが、遺構密度は西隣の東4区よりむしろ濃くなっている。竪穴住居10棟、掘立柱建物1棟がある。畠は最も明確にできた地点で2カ所で確認できた。

西調査区で弥生時代後期に出現した集落が、東調査区へ移り拡大した経過が看取できる。両調査区を分ける流路跡の埋没時期は不明だが、集落の動向から古代を通じて両区を分断していたことが分かる。

表4 調査区別 主な遺構数一覧

調査区	竪穴住居				竪穴状遺構	掘立柱建物	柱穴列	ピット	土坑	粘土採掘坑	溝	畠	遺物集中地点
	弥・古前	古後期	奈・平	不明									
西1区													1
西2区			1						1				
西3・4区	1		1			1	4			1			
西5区	1						1		2				
西6区	1												
東1区											1		
東2区							1	1			1		
東区北拡張区							11				2		
東区南拡張区							4	1			1	1	
東3区		6	42	1	5	9	1	731	72		11	1	1
東4区			1		1	1		20	3		2		
東5区		1	6	3		1	1	170	15		3	2	
合計	3	7	51	4	6	12	3	941	95	1	21	4	2

2 竪穴住居

本遺跡で調査した65棟の竪穴住居のうち、時期不詳の住居4棟の他、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての住居は3棟、古墳時代後期住居は7棟、奈良・平安時代住居51棟で、奈良時代以降に拡大した集落である。古墳時代中期から後期初頭にかけての住居は確認できず、調査範囲内で見ると、集落には断絶した時期がある。時期が推定できた住居のうち古墳時代前期までの3棟はすべて西調査区にある。古墳時代後期は東調査区西寄りに6棟が偏って築かれている(14・15・32住の時期は不明瞭)。奈良時代に2棟だけ西調査区に住居が残るが、平安時代以降の集落は東調査区に限られ、同区のはほぼ全域に広がり、居住域の変化が窺える。

1号住居

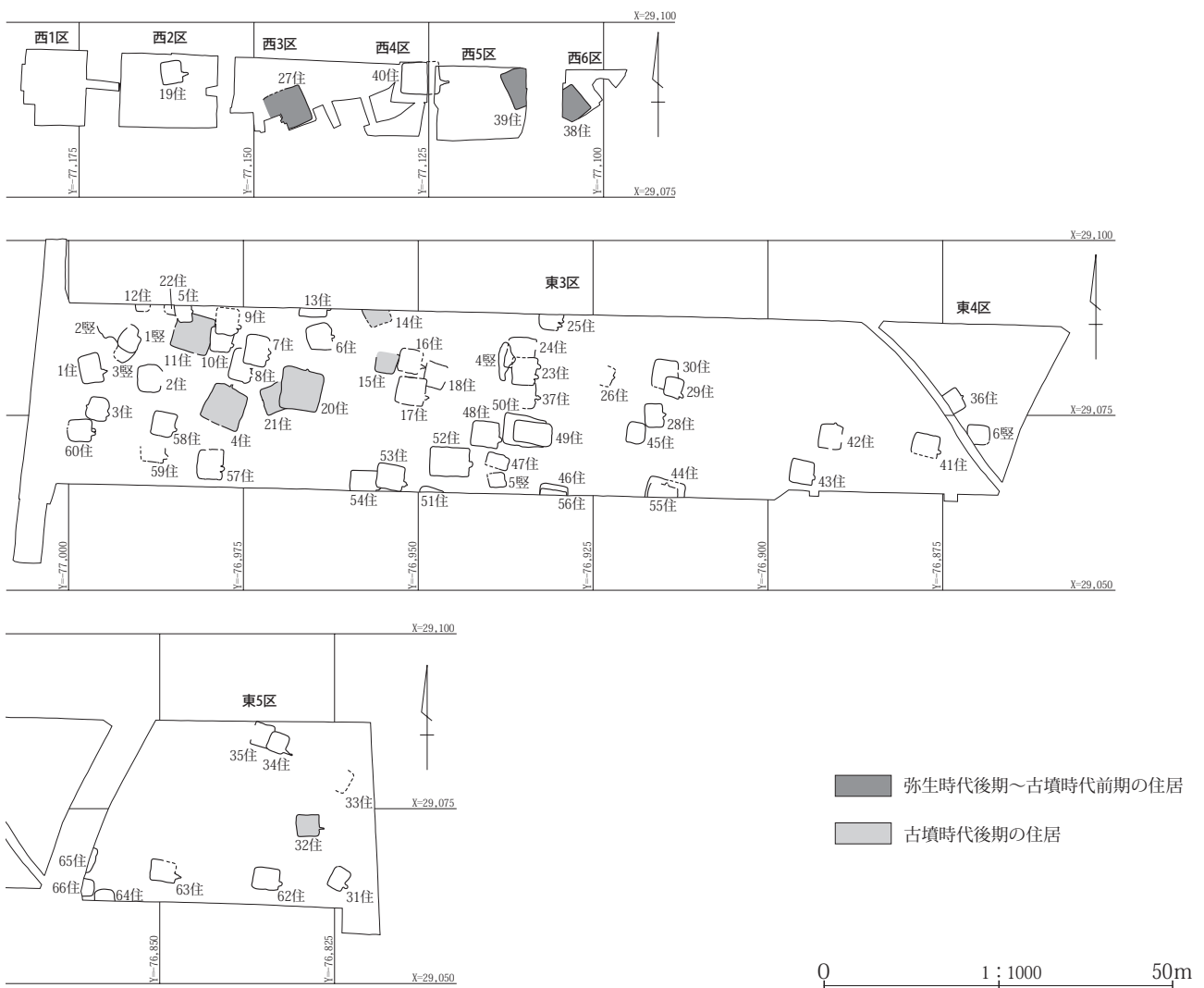
(第8～10図 PL. 3-①～⑤、43 遺物観察表224頁)

東3区西隅は平安時代後半の1～3号住居等の竪穴住居や竪穴状遺構がやや多い一画である。本住居は60号住居とともに東区の最も西側にある住居で、平安時代集落の西端を占めている。本住居西側は旧流路埋没谷縁部の窪みに接していて、地山はやや西側に低く緩やかに傾斜している。

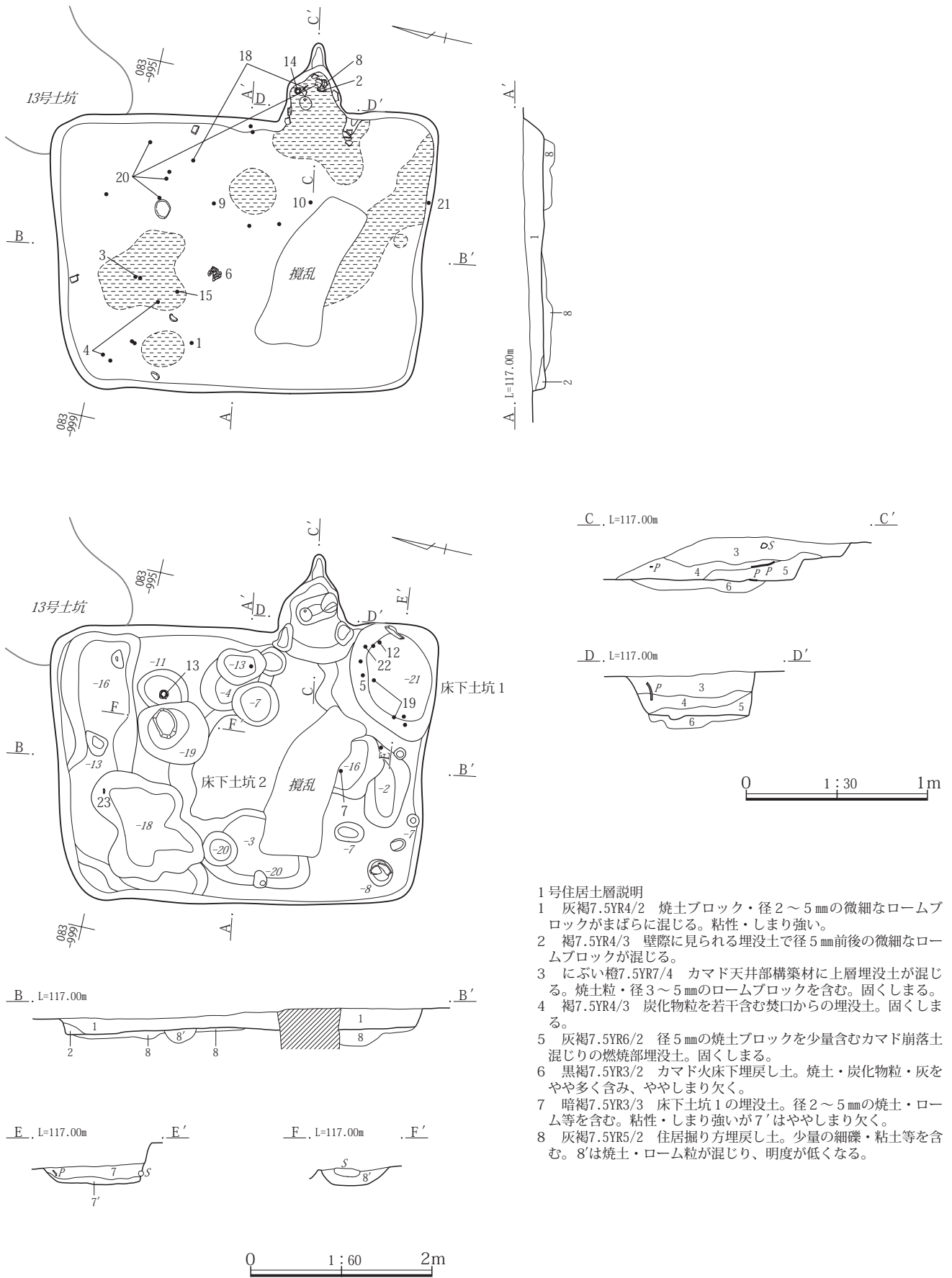
位置 079～083、-994～998グリッドにある。

規模形状 壁下規模で南北軸長3.86m、東西軸長2.84mの、東辺が西辺より50cm長い逆台形状の長方形を呈している。北西隅の丸みが強く、南北両辺は蛇行気味でやや不整形な形状である。

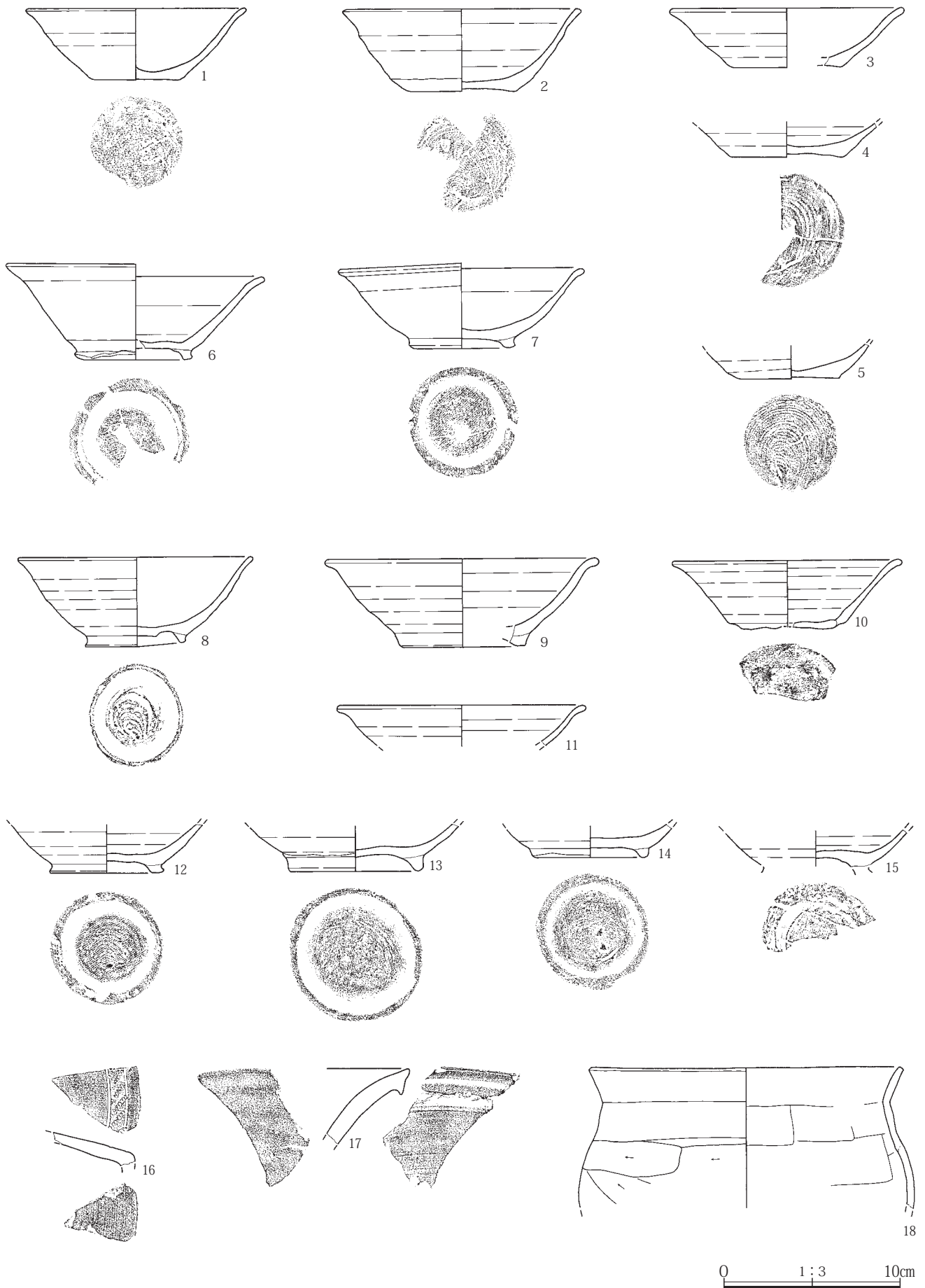
埋没土・壁 単層に近いが、焼土等の混入のある住居堆



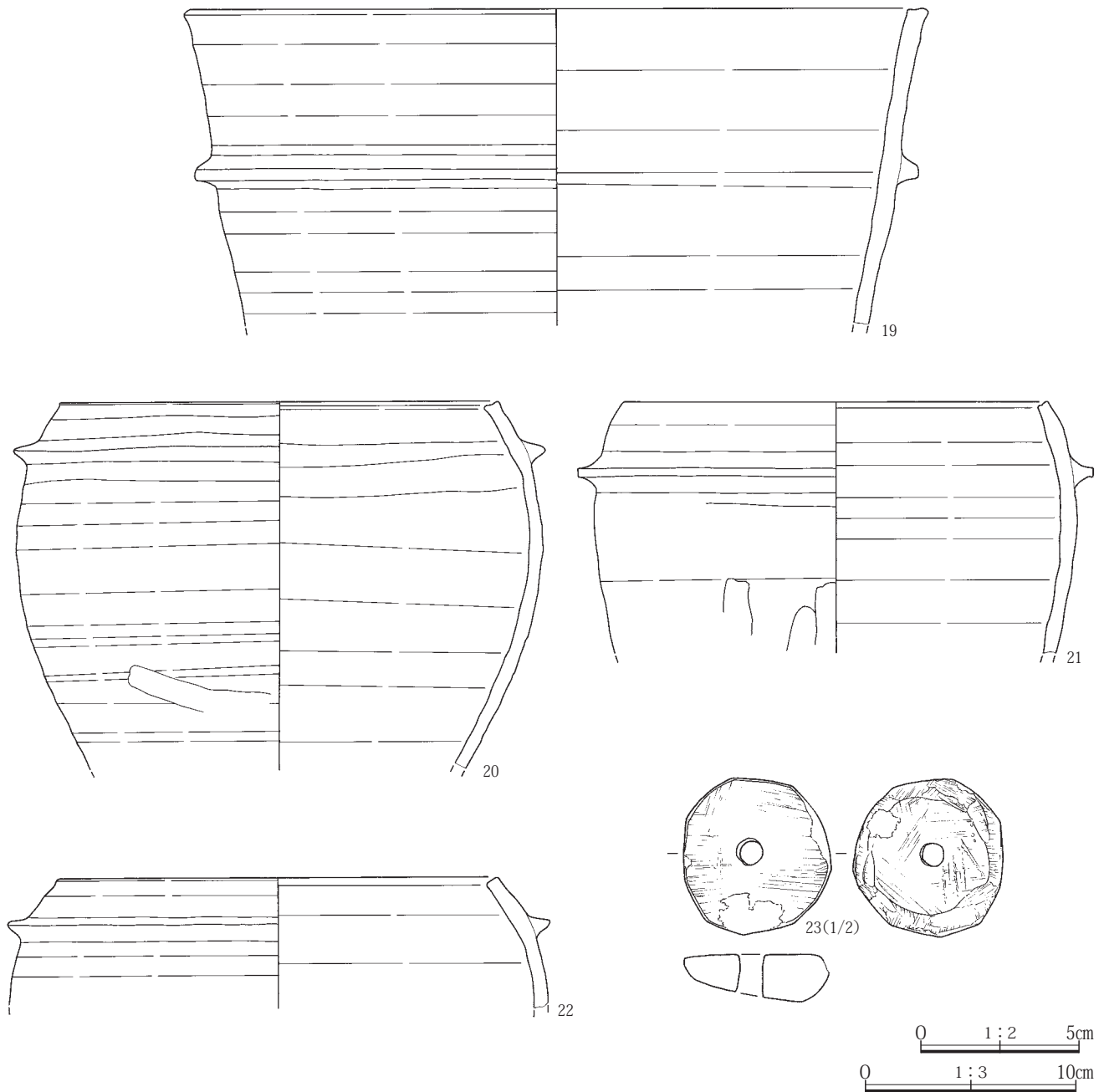
第7図 住居配置図



第8図 1号住居



第9图 1号住居出土遺物(1)



第10図 1号住居出土遺物(2)

積土らしい埋没土である。人為的な埋戻しの痕跡は認められない。壁高は東・南辺で20cm、最も浅い西辺で14cmで全体に深度にやや乏しい。

方位 N-9°W(長軸) N-80°E(カマド)

面積 11.08m²

床面 緩やかな凹凸のある床で、全体では北側へ低く傾斜し、南北両壁下では7cmの比高差がある。カマドから離れた地点まで広範囲に炭化物粒の散布が見られ、火災住居の可能性はある。貼床は確認できない。掘り方は多

数の浅い土坑状・ピット状の窪みとして確認できる。深度は20cm未満がほとんどで、明瞭なものではない。このうち埋没土に焼土が混じる2基について床下土坑として扱い断面の記録を残した。床下土坑1は貯蔵穴の位置にあり、遺物の出土も多かったが、形状が不整で深度にも乏しく、貯蔵穴とは断定できなかった。床下土坑2には上面に礎盤石状の平坦な石が置かれ、住居床面にも石の表面が露出していた。

カマド 東壁南寄りにある。燃烧部は壁外にあり、火床

は住居床面と同レベルにある。火床面は被熱により硬化し、火床下には深さ6cm前後の掘り方がある。南袖基部がわずかに確認できるが、北袖は全く残存していない。南北両壁際に深度3cm前後だが不整な窪みがあり、袖石を据えた痕跡の可能性はある。煙道は燃烧部隅から10cmの高さに段差を作って東側へ延び、残存する範囲で住居壁外へ80cm張出している。

その他 13号土坑と重複している。壁溝は確認できない。掘り方面にはピット状の窪みが多数あるが、主柱穴配置上にある明瞭なピットは確認できない。ただし前述礎盤石状礫の位置は、四主柱穴の位置として齟齬はない。

遺物 出土遺物は豊富で22点の土器と完形の石製紡輪を図示した。完形土器は見られなかった。供膳土器が主体で須恵器椀類が15点を占めている。カマド内出土遺物は須恵器椀2・8・14など杯類が主体で、煮沸具のうち土師器甕18や須恵器羽釜20はカマド内の破片と住居床面に散乱する破片が接合する資料である。羽釜21は南壁東寄りの壁際床直上、須恵器罎付甕19・羽釜22は南東隅の床下土坑1内の出土で、層位は異なるが南東隅付近に集中して出土している。その他にも床下からの出土遺物は多く、須恵器杯5、椀7・12・13がある。瓶類の肩部にあたる16は混入品であろう。

蛇紋岩製石製紡輪23は北西寄り床下の出土である。火ばねしたものを再加工したもので、使い込まれた痕跡が顕著である。石製紡輪は本遺跡で4例出土しているが、いずれも完形で竪穴住居の出土である。

図示した以外に土器片277点が出土しているが、その内の半数近くが須恵器で、土師器は壺・甕類がほとんどであった。灰釉陶器類の破片は見られなかった。

所見 カマド内や床直上遺物の他に、掘り方および床下土坑出土の遺物が多い。杯類の2・3・13~15、羽釜21などが本住居に確実に伴う遺物である。床下出土の遺物もこれらカマド内・床直上の遺物と時期差は認められない。煮沸具は羽釜が主体だがコの字口縁の土師器甕も見られ、10世紀前半の住居と想定できる。

2号住居

(第11~13図 PL. 3—⑥~⑧、43・44 遺物観察表224・225頁)

位置 078~082、-986~990グリッドにある。1号住居の東側5mの位置にある。

規模形状 壁下規模で南北軸長3.68m、東西軸長3.23mの南北にやや長い隅丸長方形を呈している。北西隅を除く各隅の丸みが強く、各辺は細かな蛇行が見られ不整な形状である。

埋没土・壁 礫の混入の多い単層に近い埋没土で、人為的な埋戻しの痕跡は認められない。壁高は床面の窪む南東隅付近で20cm前後だが、他は13cm前後でほぼ一定である。

方位 N-2°W(長軸) N-90°E(カマド)

面積 10.94㎡

床面 礫のやや多い地山を掘り込んでいて、床面に小礫が表れている。凹凸の多い床面で9cmの高低差がある。中央付近と南西隅付近が窪む傾向がある。床下には深さ10cmに満たないピット状の窪みが点在している。このうち南東隅の貯蔵穴としても齟齬のない位置にある窪みは礫がまとまって出土しているが、形状が不整で深度にも乏しく、貯蔵穴とは断定できなかった。

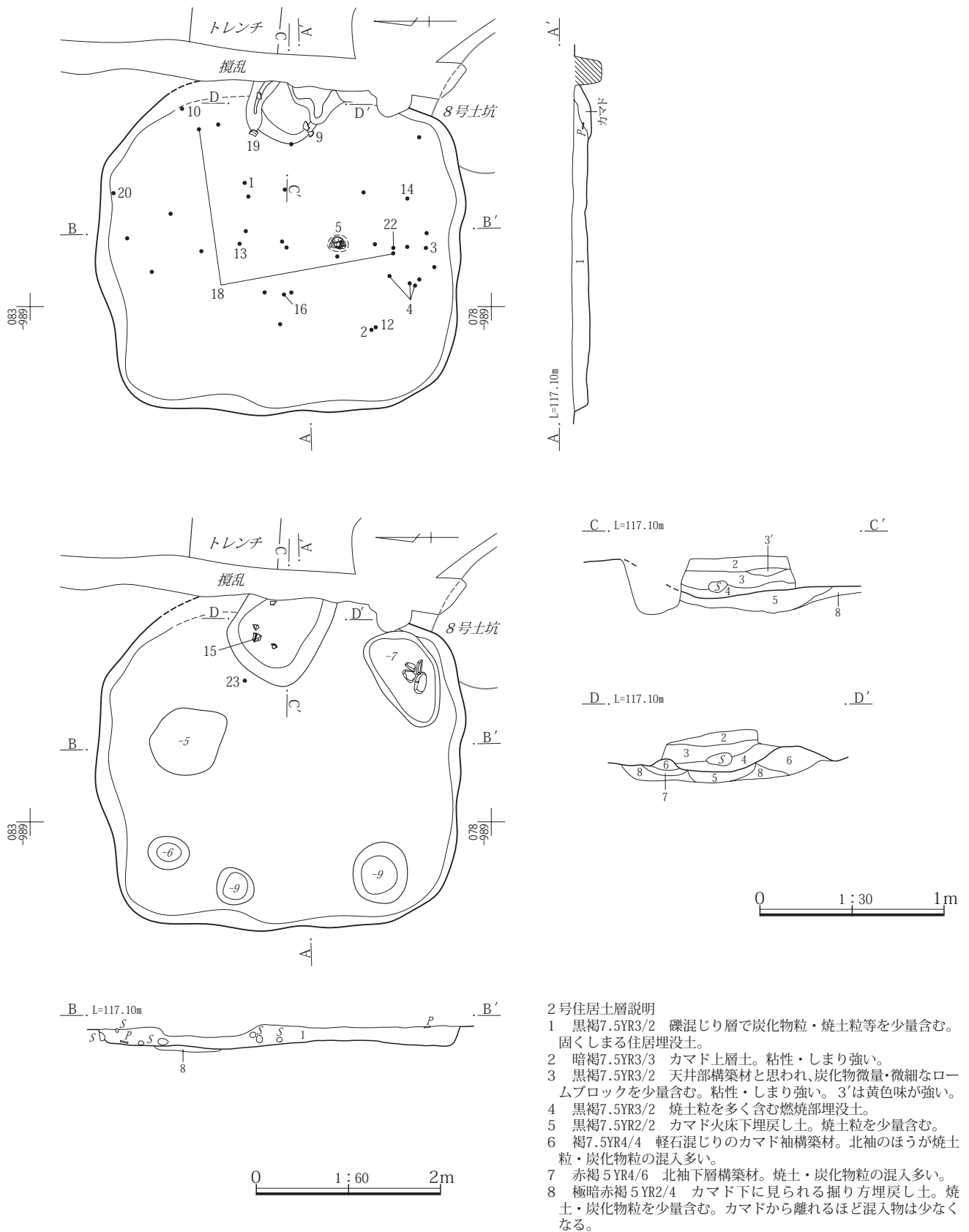
カマド 東壁ほぼ中央にある。燃烧部は住居内にあり、火床は住居床面より3cm前後低くなっている。袖部がわずかに残存していた。煙道側を深い攪乱で壊されているが、幅30cmの攪乱先では煙道の続きが確認できず、短い煙道であったことが分かる。

その他 壁溝・柱穴は確認できない。8号土坑と重複している。

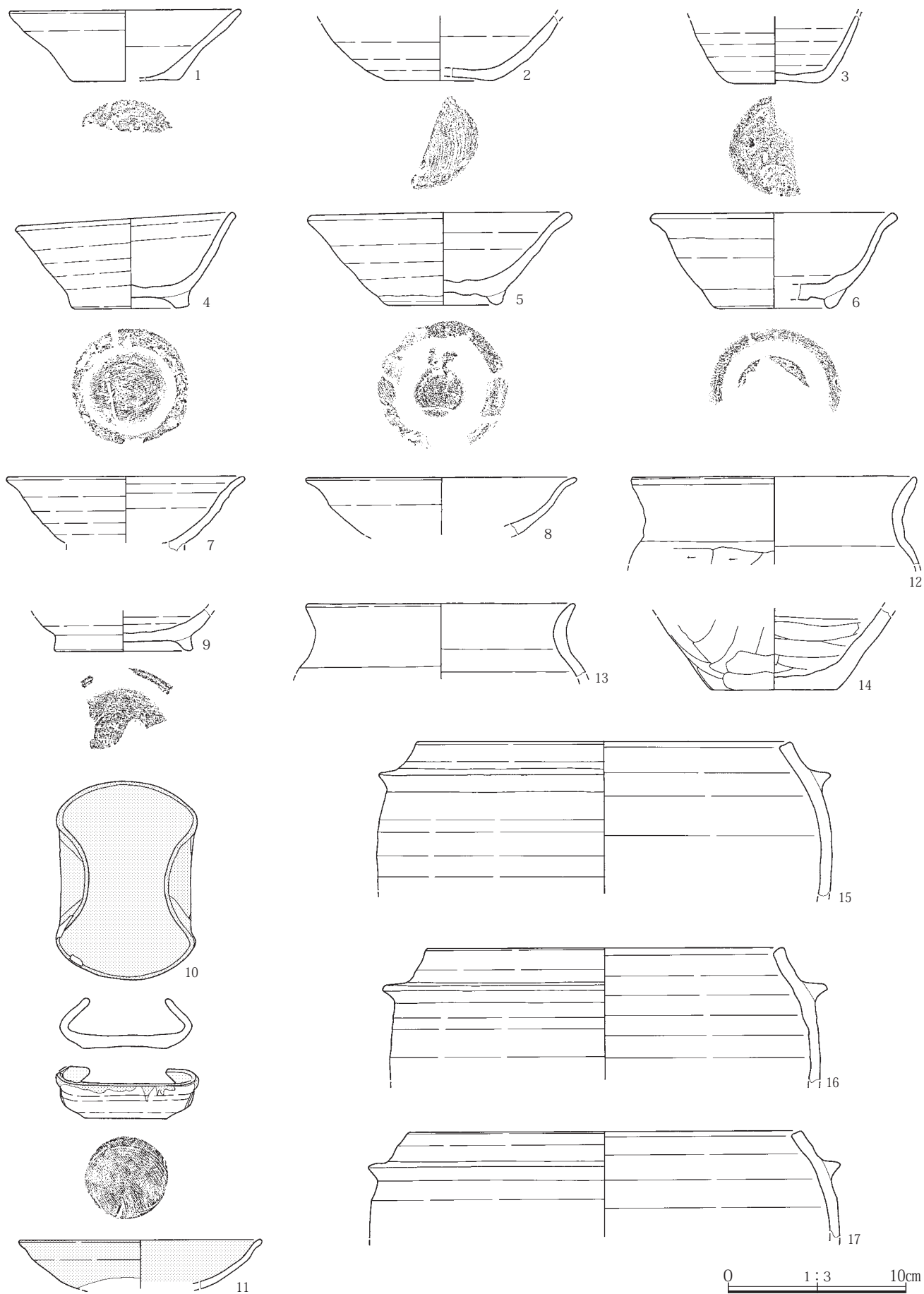
遺物 出土遺物は豊富で23点の土器を図示した。西壁際を除いた住居全体に散乱するような状態であった。杯類の1・2・4、甕類12~14、羽釜18・19など床直上出土の遺物も多い。羽釜15は床下出土であるが、床直上の羽釜類と差異は見られない。北東隅床直上出土の完形灰釉陶器耳皿10は本遺跡唯一の出土例である。

図示した以外に土器片243点が出土しているが、そのうちほぼ2/3が須恵器であった。

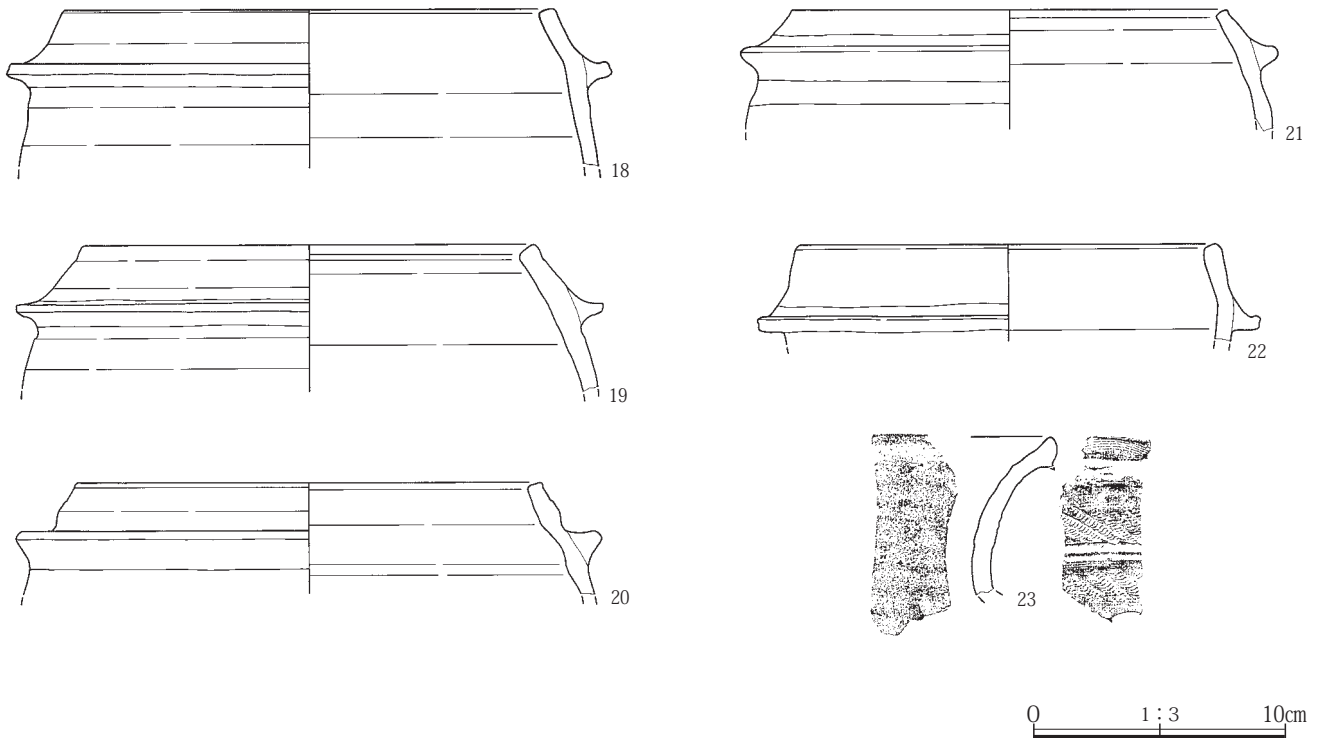
所見 煮沸具は羽釜主体で、土師器甕のコの字口縁も不明瞭になっている。椀の高台も粗雑である。灰釉陶器耳皿は大原2号窯式に比定される。1号住居にやや後続する10世紀前半頃の住居と想定できる。



第11図 2号住居



第12图 2号住居出土遺物(1)



第13図 2号住居出土遺物(2)

3号住居

(第14～16図 PL. 4-①～④、44 遺物観察表225・226頁)

1号住居の南側2mの位置に近接しているが、地山の傾斜は同住居ほど見られない。

位置 074～077、-994～997グリッドにある。

規模形状 南北軸長3.23m、東西軸長2.78mの北辺が南辺より40cmほど短い台形状に歪んだ方形を呈している。各辺は比較的直線的だが、各隅の丸みが強く、特に不整な形状に見える。

埋没土・壁 南側・東側からの自然堆積である。壁高は20～28cmで直線的な立ち上がりの部分が多い。

方位 N-15° E(長軸) N-115° E(カマド)

面積 8.22㎡

床面 南東側へ低く傾斜していて西壁下と6cm前後の比高差がある。掘り方は北壁下で深く、北東側と中央付近に床下土坑がある。

カマド 東壁南寄りにある。燃焼部は壁際であり、先端は壁際へ30cm張出している。火床は住居床面より3cm前後低くなっている。火床下には住居内側約70cmの位置まで続く深さ10cm前後の掘り方がある。両袖部分には細い袖石を立てて据えている。両袖石とも下側を火床下10cm

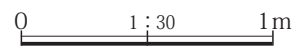
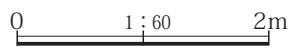
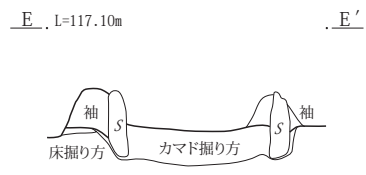
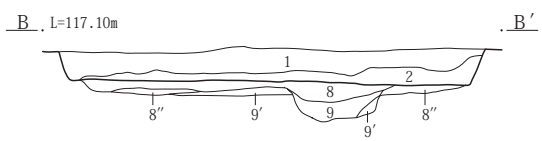
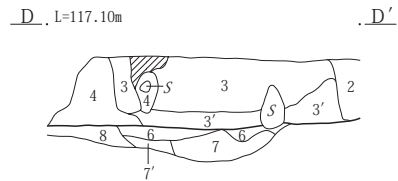
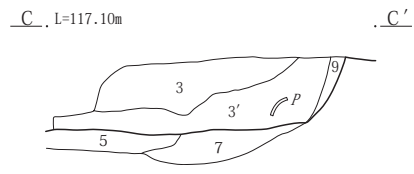
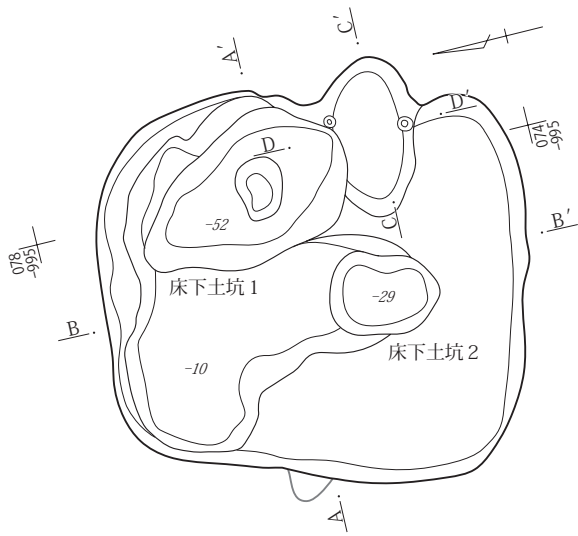
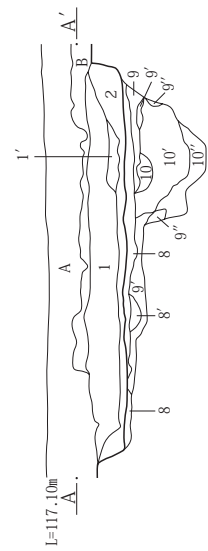
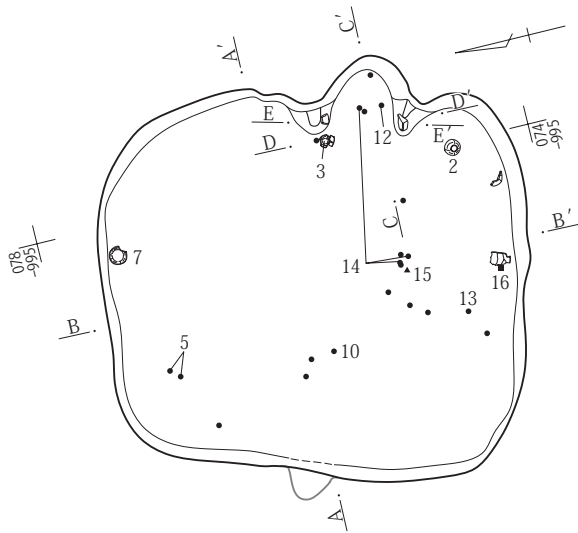
以上の深さまで埋められ、しっかりと据えられている。明瞭な煙道は確認できない。

その他 同時存在が不可能な南西側10cmの位置に60号住居が近接している。貯蔵穴・壁溝・柱穴等の施設は確認できない。

遺物 土器類14点および完形の石製丸柄、鎌破片を図示した。床直上の出土遺物に杯類3・5・7が、カマド内出土遺物に須恵器羽釜12・14があり、これらは本住居に確実に伴う遺物である。北壁際床直上出土のほぼ完形灰釉陶器輪花皿7が特筆できる。灰釉陶器には埋没土内の出土だが皿6もある。石製丸柄15は、床面より20cm高い位置の出土だが、鎌16と共に本遺跡唯一の出土例である。

図示した以外に土器片412点が出土している。その内半数が須恵器で、さらにその半数を杯類が占めていた。土師器は煮沸具が大半で、羽釜類と区別が難しい破片も多数含まれている。

所見 灰釉陶器は大原2号窯式の遺物である。煮沸具は羽釜が主体となっており、甕類の8も土釜状を呈している。10世紀中頃の住居と想定できる。

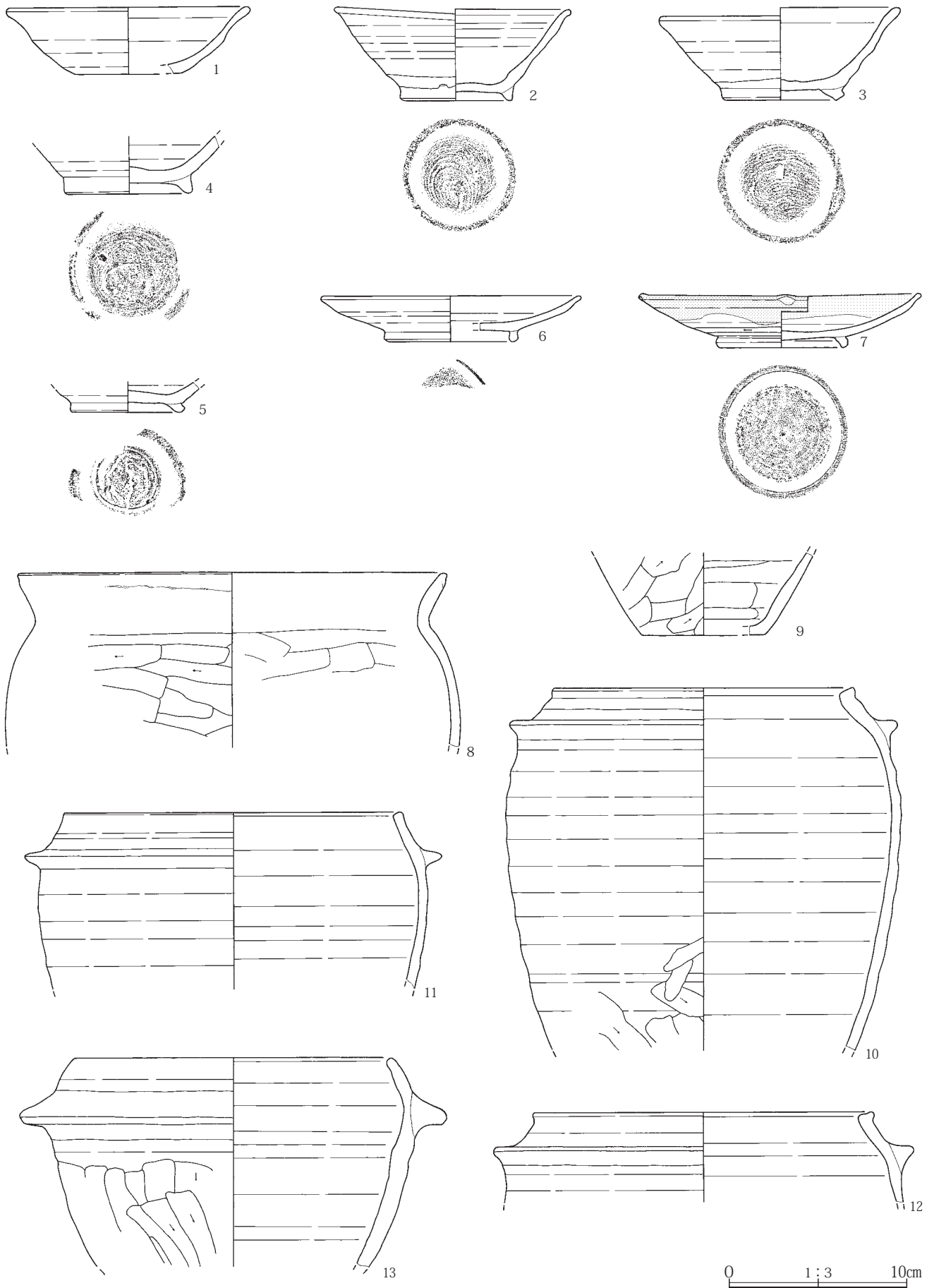


3号住居土層説明

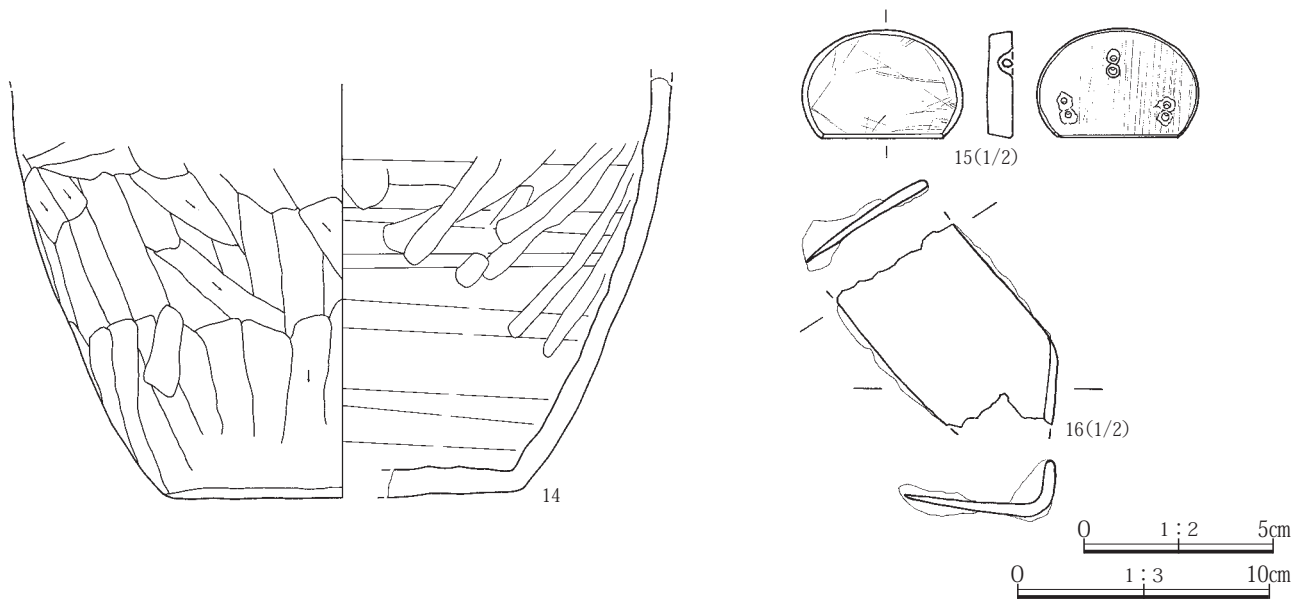
- A・B 基本土層の1・4層に相当。
- 1 灰褐7.5YR4/2 径2~5mmの微細な粘土ブロック散見。粘性・しまり強い。鉄分凝集の赤礫見られる。1'はロームブロックの混入多い。
- 2 褐7.5YR4/3 径2~5mmの粘土ブロック含む。粘性・しまり強い。
- 3 にぶい赤褐5YR4/4 カマド土層。焼土・炭化物粒含む。3'は炭化物粒の混入多い。
- 4 暗褐7.5YR3/3 カマド袖構築材と思われる北袖で顕著。褐色粘土・焼土・炭化物粒を含む。
- 5 暗褐7.5YR3/3 カマド火床下の住居側埋戻し土。炭化物粒・焼土粒を少量含む、住居床下埋戻し土よりしまり弱い。

- 6 褐7.5YR4/3 カマド火床下の袖石下周辺埋戻し土。褐色粘土を多量に含む4層に近い。
- 7 黒褐7.5YR3/1 カマド火床下の下層埋戻し土。焼土ブロックを見られる。7'では焼土の量がきわめて多い。
- 8 褐7.5YR4/6 住居掘り方土層埋戻し土。径2~5mmの粘土ブロックまばらに含む。粘性・しまり強い。8'は黄色味を帯び、8''はやや黒色味を帯び粘性・しまり強い。
- 9 にぶい褐7.5YR5/3 汚れたロームブロックを多く含む。粘性土でしまり強い。9'は黒色味が強く、9''は9に近似する壁際の層。
- 10 灰褐7.5YR4/2 床下土坑1の埋戻し土でロームブロックを少量含む。粘性強い。10'は黒色味を帯び粘性きわめて強く、10''は黄色味を帯びる。

第14図 3号住居



第15図 3号住居出土遺物(1)



第16図 3号住居出土遺物(2)

4号住居

(第17～19図 PL. 4-⑤～⑧、44・45 遺物観察表226頁)

東3区西寄りには、4・11・20号住居など古墳時代後期の住居がやや多く見られる一画である。本住居はその中で最も南側に位置している。

位置 072～079、-974～981グリッドにある。

規模形状 南北軸長5.31m、東西軸長5.27mの方形を呈している。北辺が南辺より70cm前後短い台形状に歪むが、各辺は直線的で整美な形状である。

埋没土・壁 焼土や炭化物粒が上層より混じる。下層では壁際からの自然堆積が確認できるが、中層以上では東側より一気に埋没している。壁高は20～28cmで垂直に近い立ち上がり部分が多い。

方位 N-26° E(長軸) N-22° E(カマド)

面積 27.24㎡ 20号住居に次いで本遺跡の全住居中2番目に広い床面である。

床面 礫のやや多い地山を掘り込んでいて、カマド周辺の床面に小礫が表れている。細かな凹凸があるが、ほぼ水平な床面である。掘り方はごくわずかで掘削面をそのまま床面としている部分が大半だが、北壁下で柱穴状の2カ所の窪みが確認できた。このうち床下土坑と名付けた東側の窪みは、表層に礎盤石状の平坦な礫が住居床面レベルで据えられていた。

ピット 四支柱穴(P 1～4)を確認したが、深さ22～32

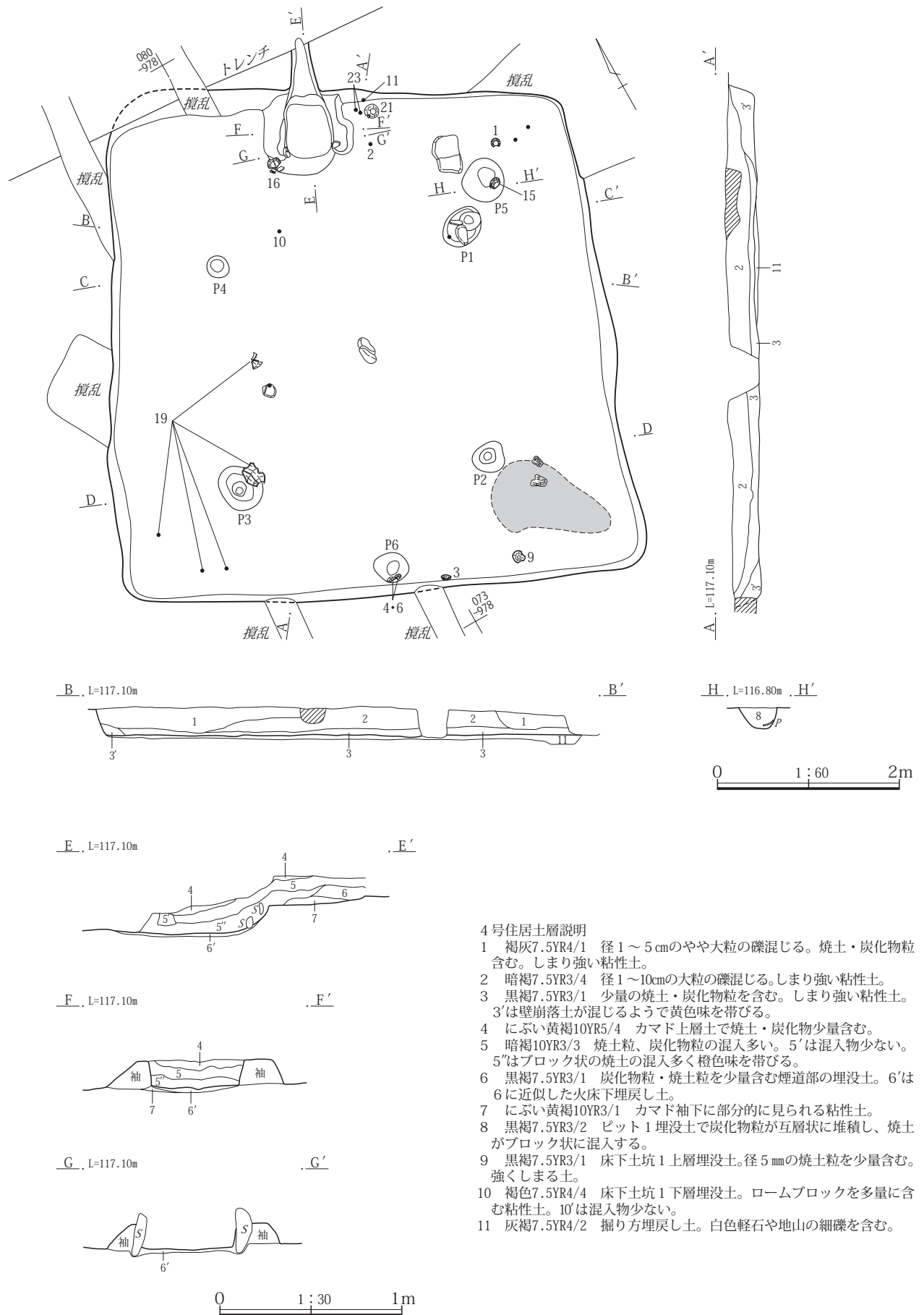
cmの、住居規模に比して深度に乏しい施設である。南側へ逸れるP 4以外は住居4隅からのほぼ対角線上に配置されている。P 5はP 1脇にある柱穴と同規模の窪みで貯蔵穴としては深度に乏しい性格不明の施設である。P 6は南壁直下であり、入り口施設と考えられる。

カマド 北壁西寄りにある。燃烧部は住居内にあり、火床は住居床面より3cm前後低くなっている。東西両袖が残存し、袖石が据えられている。袖石の火床下への埋め込みは5cm前後で、3号住居に比べると浅い。煙道は燃烧部から段をもって立ち上がり、先端をトレンチにより欠いているが、残存部分で壁外へ60cm張り出している。**その他** 壁溝は確認できないが、掘り方面の東西両壁下の一部に壁溝状の窪みが見られる。

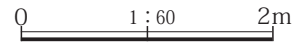
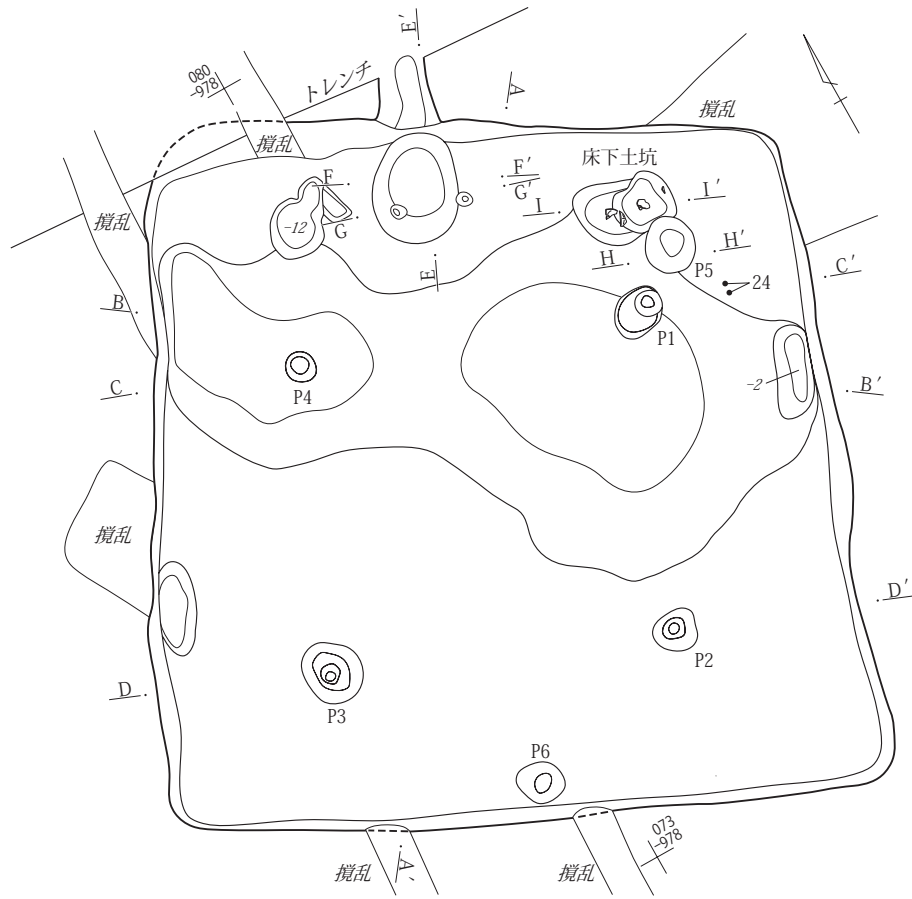
遺物 出土遺物はきわめて豊富で土器類24点と滑石製白玉1点を図示した。埋没土出土の須恵器蓋18は杯Hの蓋で、混入品と考えたい。床直上の遺物に土師器杯1～3・9・10・16、甑19、小型甕21がある。P 5内からは土師器杯15、P 6内からは杯4・6の出土がある。白玉25は埋没土内の出土だが、本遺跡唯一の玉類出土例である。

図示した以外に土器片721点が出土し、この中に須恵器13点が含まれている。土師器は約4割が杯類だった。平安時代遺物の混入も若干見られた。

所見 模倣杯14・15を伴っているが、大半の杯類は深さのある丸底椀状の土器で、6世紀の住居と想定できる。

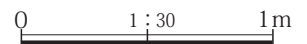
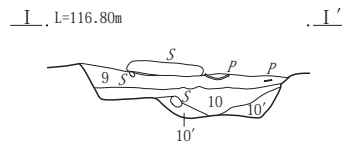


第17図 4号住居(1)



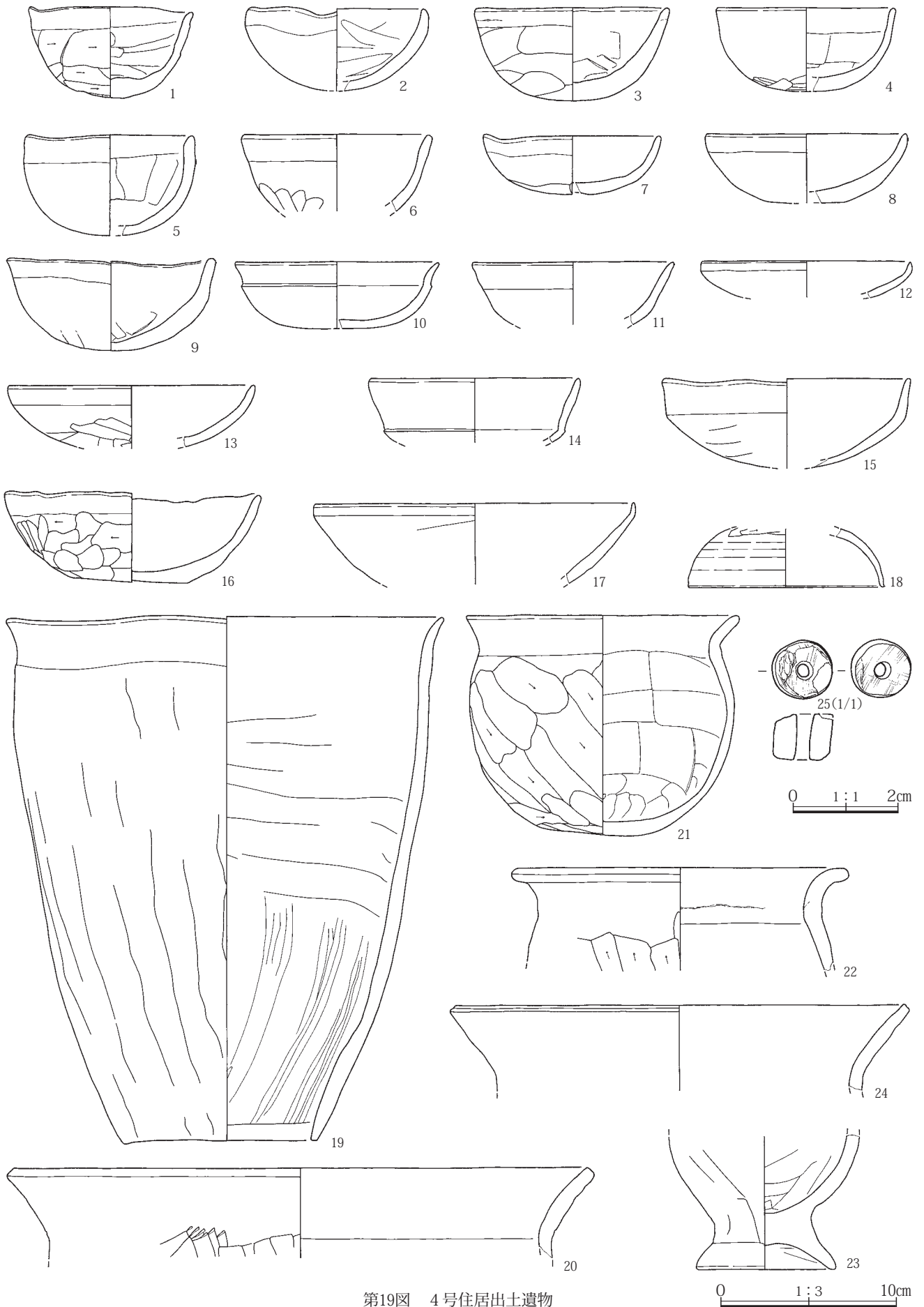
4号住居ピット一覧 (cm)

No.	長径×短径×深さ	種類・備考
1	49×38×26	主柱穴
2	37×33×31	主柱穴
3	52×45×27	主柱穴
4	26×24×22	
5	48×46×25	主柱穴
6	39×33×21	入口ピット



第18図 4号住居(2)

第三章 調査の内容



第19図 4号住居出土遺物

5号住居

(第20・21図 PL. 5-①~④、45 遺物観察表227頁)

2号住居の北側7mの位置にある。北側は調査区境にかかり、全容を把握できていない。

位置 088~090、-982~984グリッドにある。

規模形状 南北残存軸長2.50m、東西軸長2.31mの南北に長い長方形を呈している。各辺は比較的直線的で、小型の住居としては整った形状である。

埋没土・壁 床面直上では住居中央付近で厚い堆積をする部分があり、人為的な埋戻しの可能性がある。残存壁高は20~25cmで垂直に近い立ち上がりをしている。

方位 N-8°W(長軸) N-86°E(カマド)

面積 残存(4.97)m²

床面 凹凸のやや大きな床面で、住居中央付近が低くなる傾向があり、壁際と最大8cmの比高差がある。床面からの深さ8cm前後の不規則な掘り方がある。西壁および

南壁直下には床面からの深さ5~9cmの細い窪みがあり、壁溝があった可能性がある。

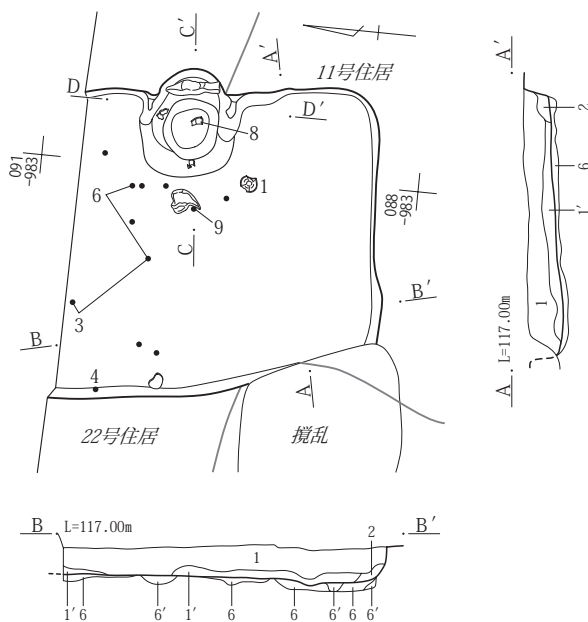
カマド 東壁中央に位置していると思われる。燃烧部は住居内にあり、最奥部は住居壁より約20cm張り出していた。火床は住居床面より5cm前後窪んでいた。両袖基部がわずかに残存している。明確な煙道は確認できない。

その他 11・22号住居に後出している。柱穴・貯蔵穴等の施設は確認できなかった。

遺物 土器類は9点を図示した。杯類のうち1・2は床下出土の遺物である。床直上出土の須恵器杯3・6、カマド内の土師器甕8が本住居に確実に伴う遺物である。

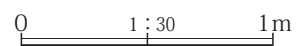
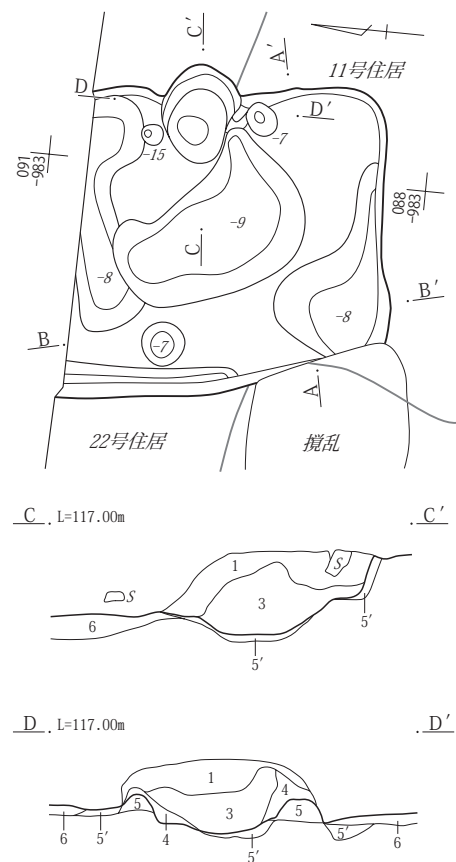
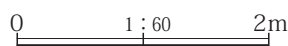
図示した以外に土器片488点が出土している。この内約5/6が土師器で、土師器は壺甕類、須恵器は杯類が9割以上を占めていた。

所見 煮沸具には羽釜を伴わず、須恵器杯類には椀・皿の分化が認められ、9世紀後半の住居と想定できる。

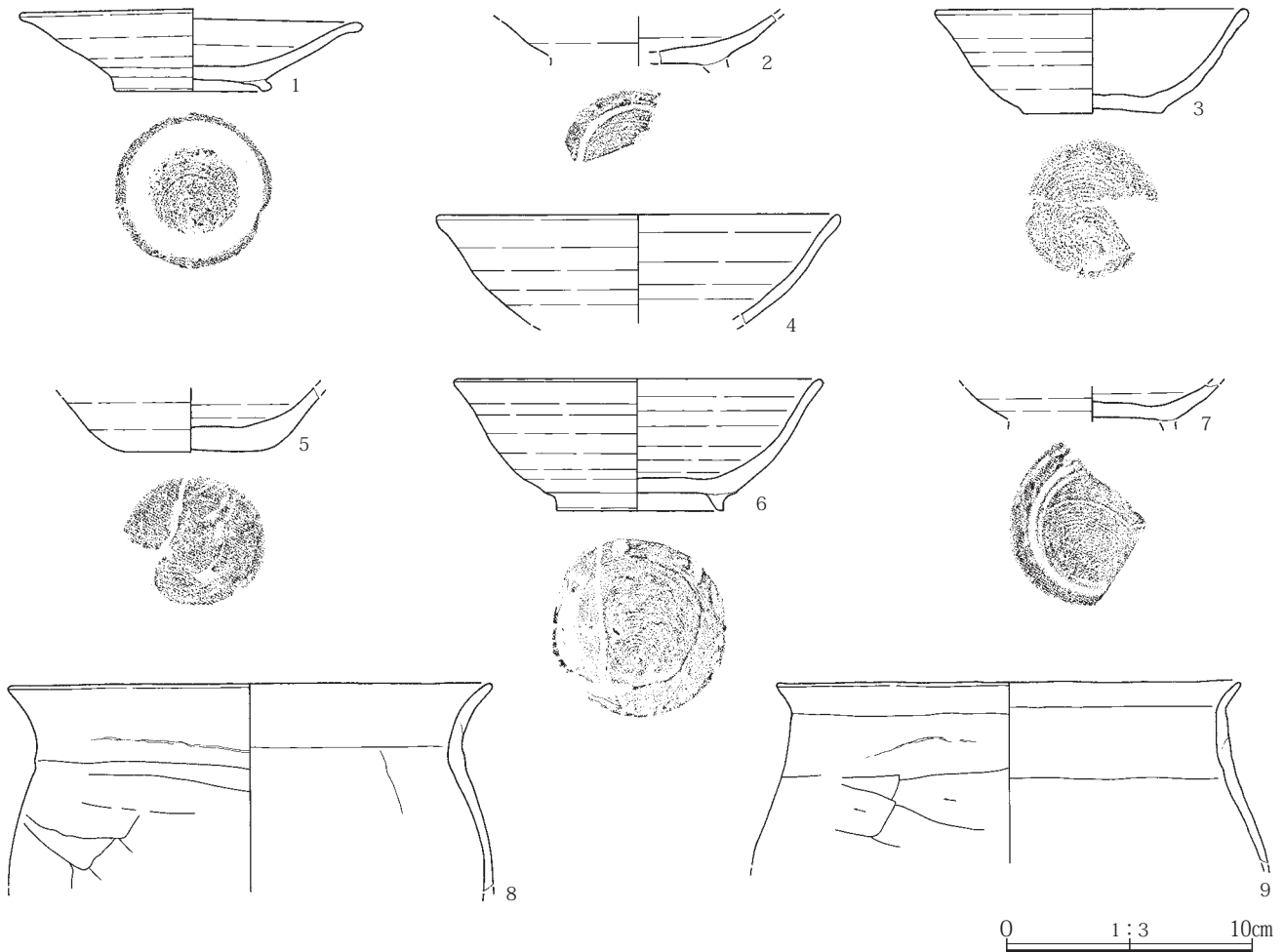


5号住居土層説明

- 1 暗褐色土7.5YR3/3 白色軽石・焼土・炭化物含む。しまり強い粘性土。1'は混入物少ない。
- 2 極暗褐7.5YR2/3 壁際の埋没土。しまり強い粘性土。
- 3 赤褐5YR4/6 径5~8mmの焼土ブロックと炭化物粒の混入多い。
- 4 暗赤褐5YR3/4 焼土・炭化物粒を含む。
- 5 暗褐10YR3/3 カマド袖構築材。5'は近似した土だが火床下や煙道下層で見られる。
- 6 褐色7.5YR4/3 掘り方埋戻し土。粘土ブロック混じり。しまり強い。6'は黒色味を帯び焼土が混じる。



第20図 5号住居



第21図 5号住居出土遺物

6号住居

(第22・23図 PL. 5-⑤~⑧、45 遺物観察表227頁)

5号住居の東側16mに位置している。東3区には中央住居群と西寄り住居群の間に幅10mほどの帯状の住居空白部分があるが、本住居はこの空白部分に接した西寄り住居群東隅にある。

位置 084~088、-961~966グリッドにある。

規模形状 南北軸長3.54m、東西軸長3.47mの方形を呈している。攪乱のため南東隅を壊されて不明瞭だが、西辺が東辺より50cm以上短い台形状に歪むうえ、各辺も蛇行気味で整美さに欠けている。

埋没土・壁 焼土や炭化物粒が少量だが上層より混じる。ほぼ単層の埋没土で埋没過程は明らかにできない。残存壁高は10cm前後で、最も深い北壁で18cmを測る。

方位 N-7°W(長軸) N-81°E(カマド)

面積 復元[11.29]㎡

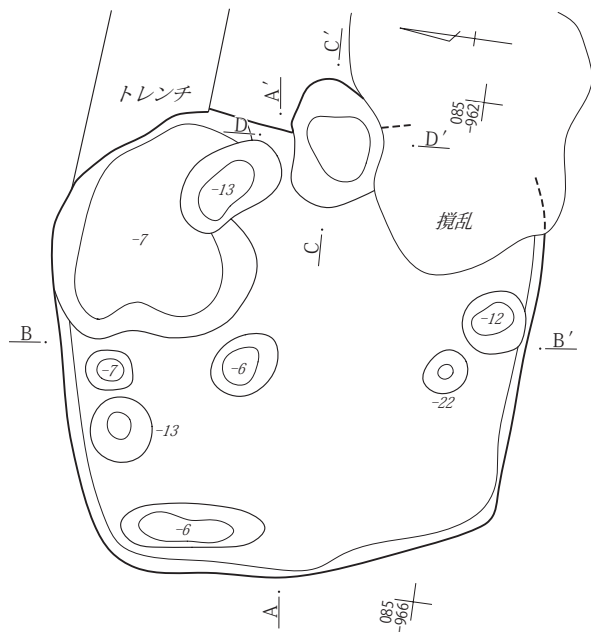
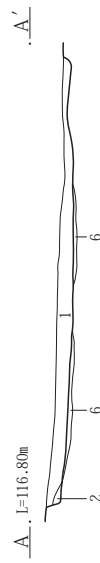
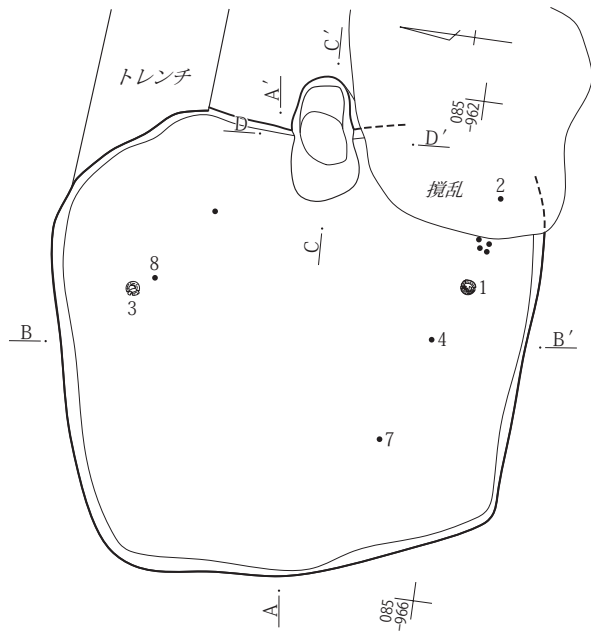
床面 地山の傾斜に沿って北東側へ低く傾斜していて南西隅と10cm以上の比高差がある。住居掘削時の窪みを埋め戻す程度の浅い掘り方がほぼ全面に見られる。礫の多い地山を掘り込んでいて、掘り方面に多量の小礫が表れている。一部でピット状の窪みがあるが、主柱穴配置上にあたる施設はない。

カマド 東壁中央にある。燃烧部は壁際にあり、火床は住居床面より15cm窪んでいる。煙道・袖は確認できない。

その他 重複住居はないが、北側の13号住居は距離1m未満の近接した位置にある。壁溝等の施設は確認できない。

遺物 出土土器は住居内に散在する12点を図示した。須恵器杯類が豊富で1・3が床面出土の遺物である。2は攪乱内の出土だが本住居遺物として扱った。3が完形近くまで復元できた。カマド内やカマド周辺出土の遺物はなかった。

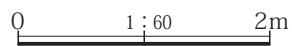
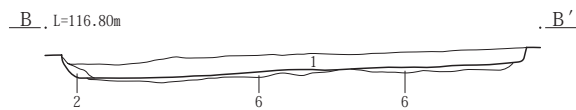
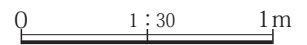
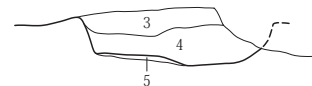
図示した以外に土器片428点が出土している。この内



C, L=116.80m C'



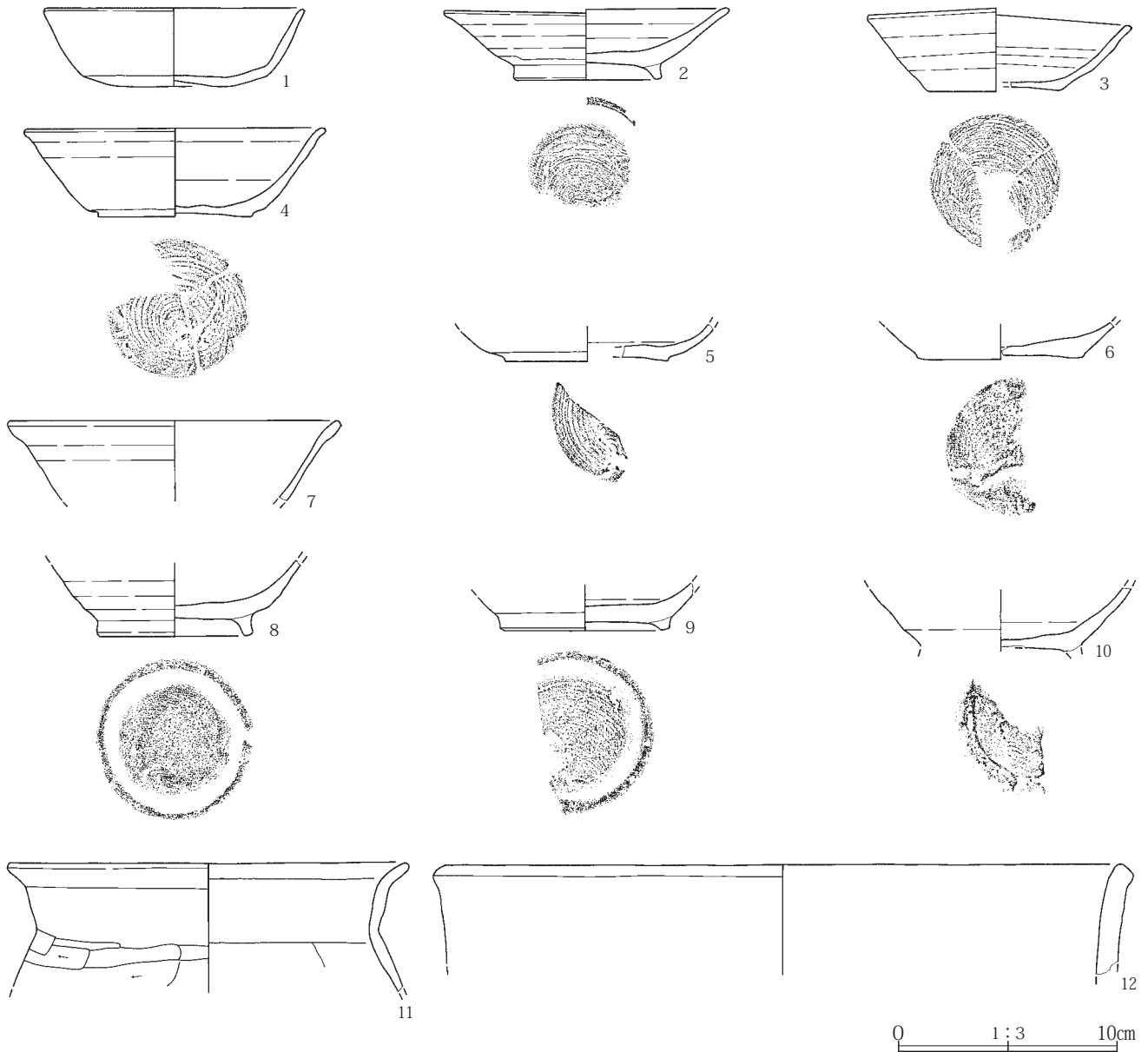
D, L=116.80m D'



6号住居土層説明

- 1 暗褐7.5YR3/3 焼土・炭化物含む。径2~3mmの小礫入る。しまり強い粘性土。住居埋没土。
- 2 褐7.5YR4/3 壁の崩落土。しまり強い粘性土。
- 3 暗赤褐5YR3/2 カマド土層。炭化物・焼土を含む。
- 4 暗赤褐5YR3/3 炭化物粒・焼土・礫を多量に含む火床上埋没土。
- 5 褐5YR3/2 カマド火床下埋戻し土。炭化物粒・焼土を含む。
- 6 褐7.5YR4/4 掘り方埋戻し土。炭化物粒・焼土を散見する。

第22図 6号住居



第23図 6号住居出土遺物

5/6以上が土師器で、土師器は甕類・須恵器は杯類がほとんどで5号住居に近似した様相が見られた。

所見 煮沸具に羽釜を伴っていない。須恵器杯類は椀・皿の分化傾向が始まる時期と思われ、底径はやや広めで椀は浅めである。口縁端部の外反も弱く、9世紀中頃の住居と想定できる。

7号住居

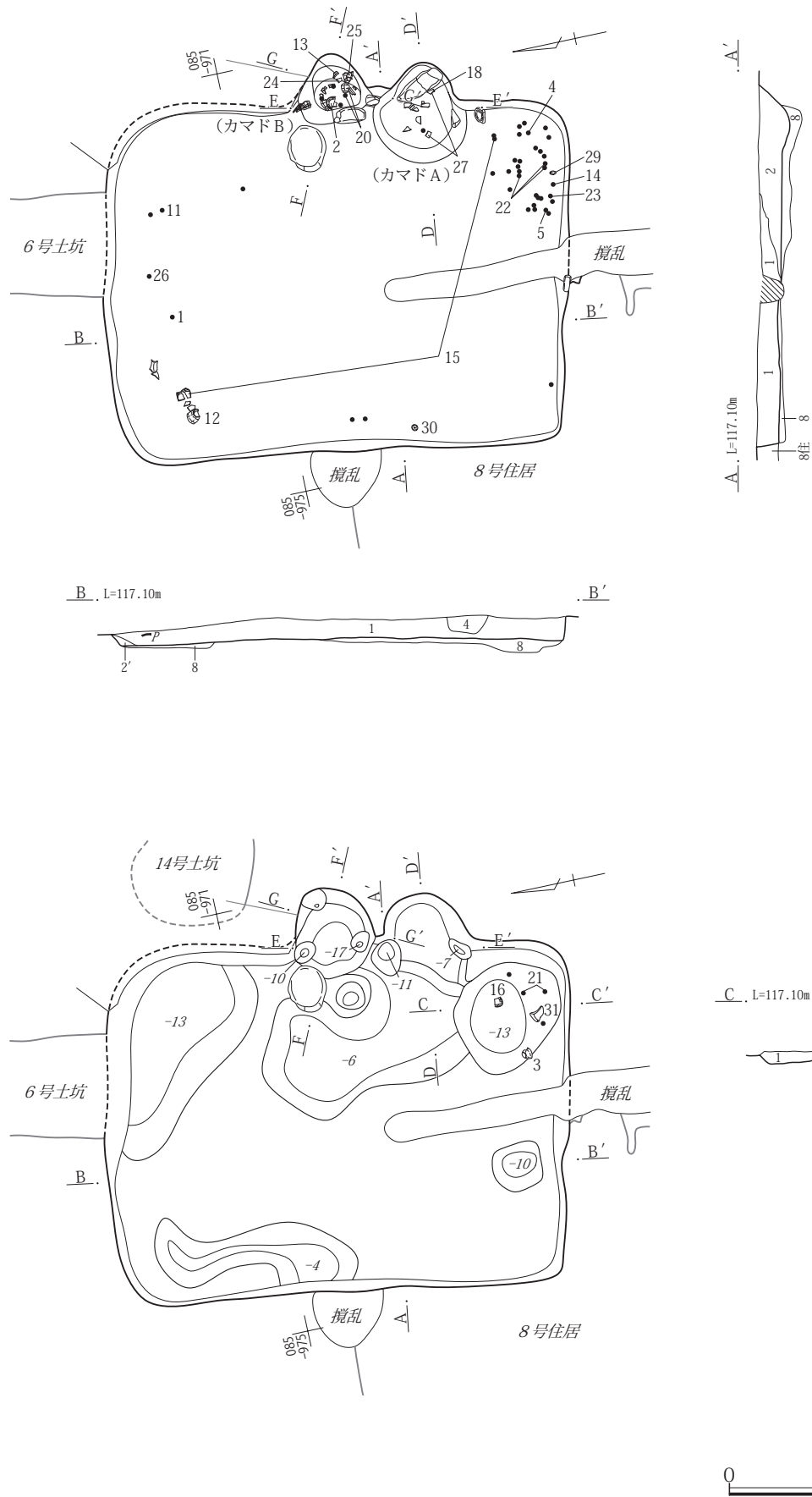
(第24～27図 PL. 6-①～④、45・46 遺物観察表227・228頁)

5号住居・6号住居の中間付近にある。

位置 081～086、-971～975グリッドにある。

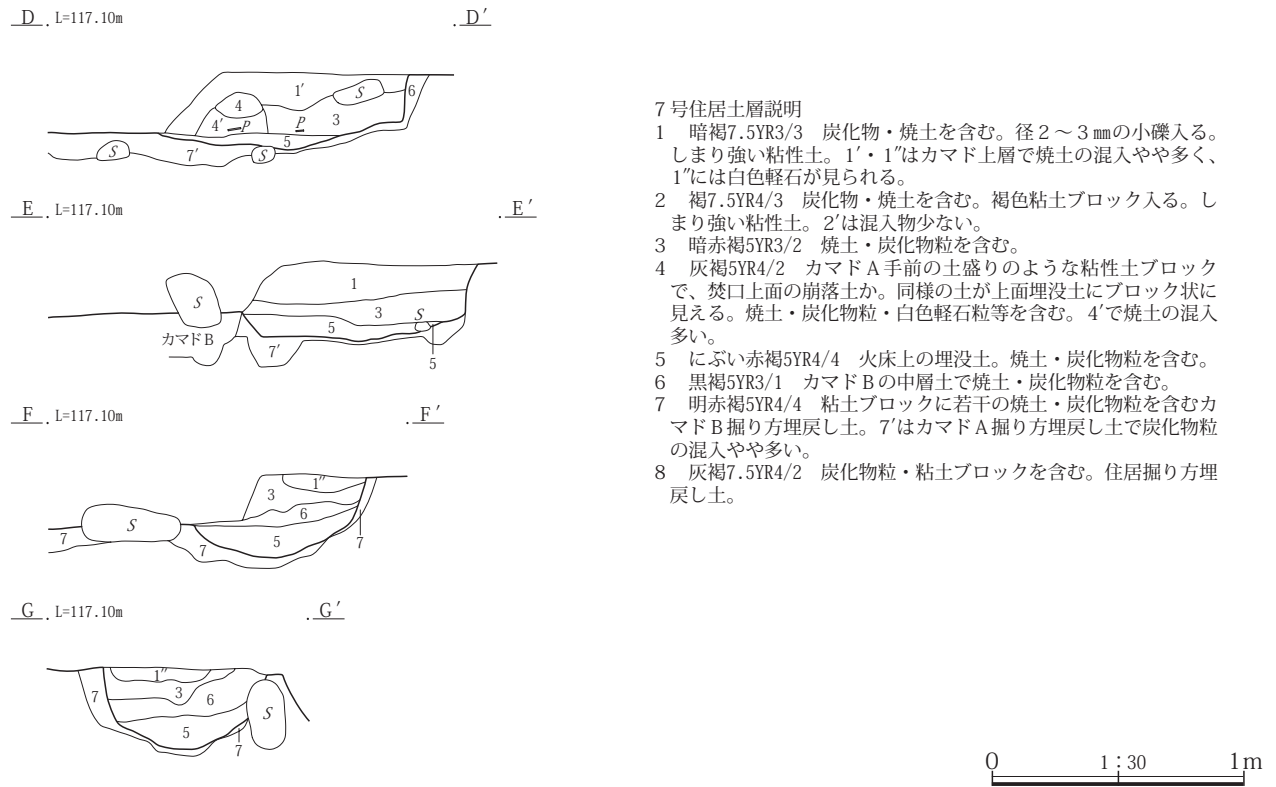
規模形状 南北軸長4.17m、東西軸長3.13mの長方形を呈している。

埋没土・壁 焼土や炭化物粒が上層より混じる。東側から一気に堆積していて、人為的な埋戻しの可能性がある。壁は垂直に近い部分があり、当初は垂直の立ち上がりだったと想定できる。壁高は北壁で12cmだが、他は22から25cmを測る。



第24图 7号住居(1)

第三章 調査の内容



7号住居土層説明

- 1 暗褐7.5YR3/3 炭化物・焼土を含む。径2～3mmの小礫入る。しまり強い粘性土。1'・1''はカマドAで焼土の混入やや多く、1'''には白色軽石が見られる。
- 2 褐7.5YR4/3 炭化物・焼土を含む。褐色粘土ブロック入る。しまり強い粘性土。2'は混入物少ない。
- 3 暗赤褐5YR3/2 焼土・炭化物粒を含む。
- 4 灰褐5YR4/2 カマドA手前の土盛りのような粘性土ブロックで、焚口上面の崩落土か。同様の土が上面埋没土にブロック状に見える。焼土・炭化物粒・白色軽石粒等を含む。4'で焼土の混入多い。
- 5 にぶい赤褐5YR4/4 火床上の埋没土。焼土・炭化物粒を含む。
- 6 黒褐5YR3/1 カマドBの中層土で焼土・炭化物粒を含む。
- 7 明赤褐5YR4/4 粘土ブロックに若干の焼土・炭化物粒を含むカマドB掘り方埋戻し土。7'はカマドA掘り方埋戻し土で炭化物粒の混入やや多い。
- 8 灰褐7.5YR4/2 炭化物粒・粘土ブロックを含む。住居掘り方埋戻し土。

第25図 7号住居(2)

方位 N-9° E(長軸) N-97° E(カマドA)

N-95° E(カマドB) 面積 13.02㎡

床面 礫のやや多い地山を掘り込んでいて、床面の一部に礫が表れている。北東側へ低く傾斜する床面で南西壁直下と8cmの比高差を生じている。東側を中心に不規則な掘り方が見られる。南東隅の貯蔵穴が配される位置にも窪みがあり、遺物の出土も見られたが、深度に乏しく不規則で、貯蔵穴とは認められなかった。

カマド 東壁南寄りの後出カマドAと、東壁中央の前出カマドBの2カ所がある。カマドAは燃烧部が壁際であり、火床は住居床面より4cm窪んでいる。両袖基部にあたる壁際に2カ所の窪みがあり、袖石が据えられていた可能性がある。袖・煙道は残存しない。燃烧部奥に長さ約50cmの細長い礫があり、規模から推定して焚口上面に鳥居状に置かれた石材と思われるが、出土位置から住居廃絶時にカマド天井部を大きく壊した可能性がある。カマドBも燃烧部が壁際であり、火床は住居床面より12cm窪んでいる。構築材の一部が住居内に残り、後出カマドであることが分かる。壁際に2カ所の窪みがあり、南側には袖石が残存している。袖・煙道は残存しない。

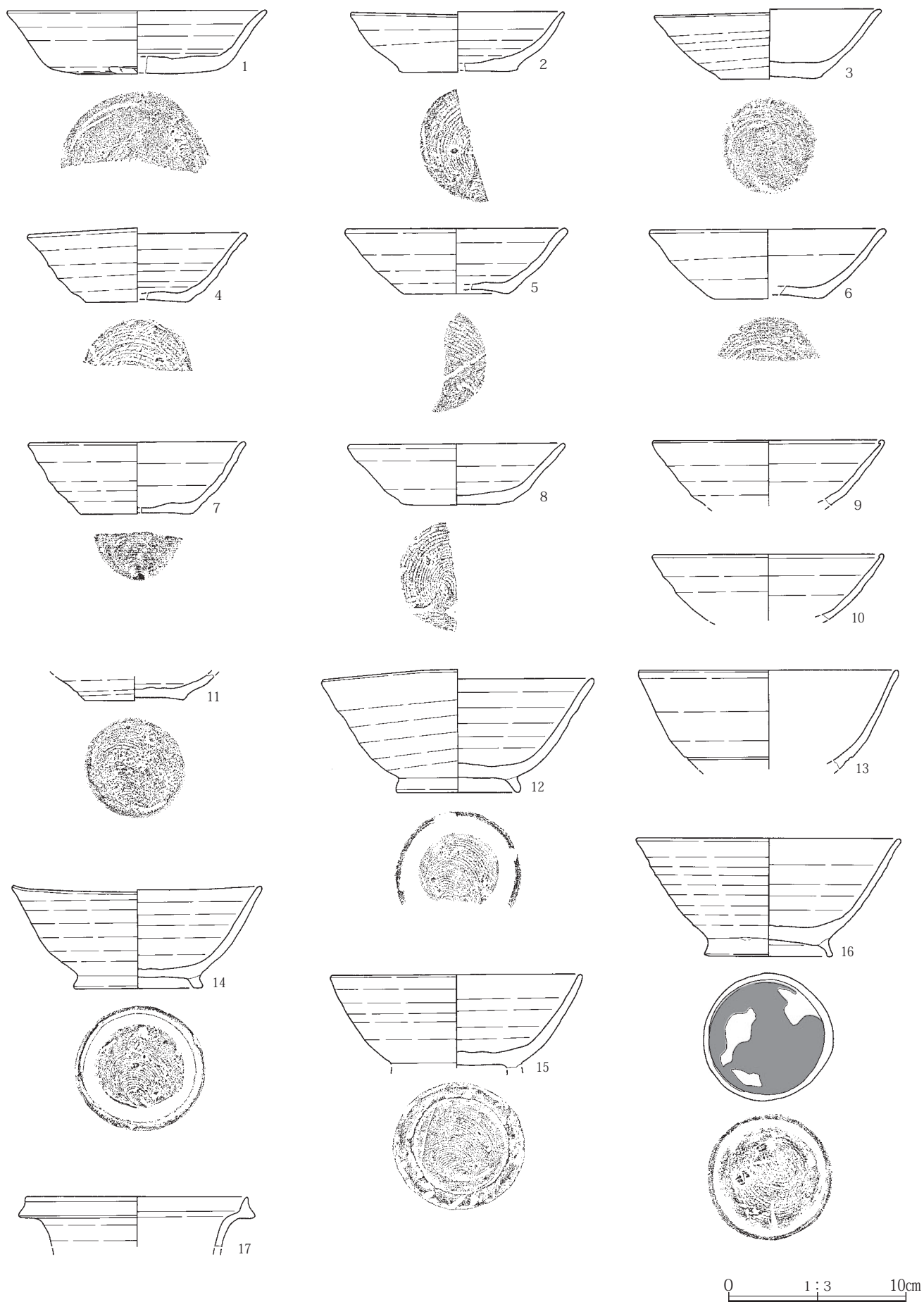
その他 8号住居に後出している。6号土坑と重複する。

ピット・壁溝等は確認できない。カマドB前面に礎盤石状の平坦な礫が据えられている。掘り方底面に直接置くように据えられていて、住居構築当初からの施設であった可能性がある。

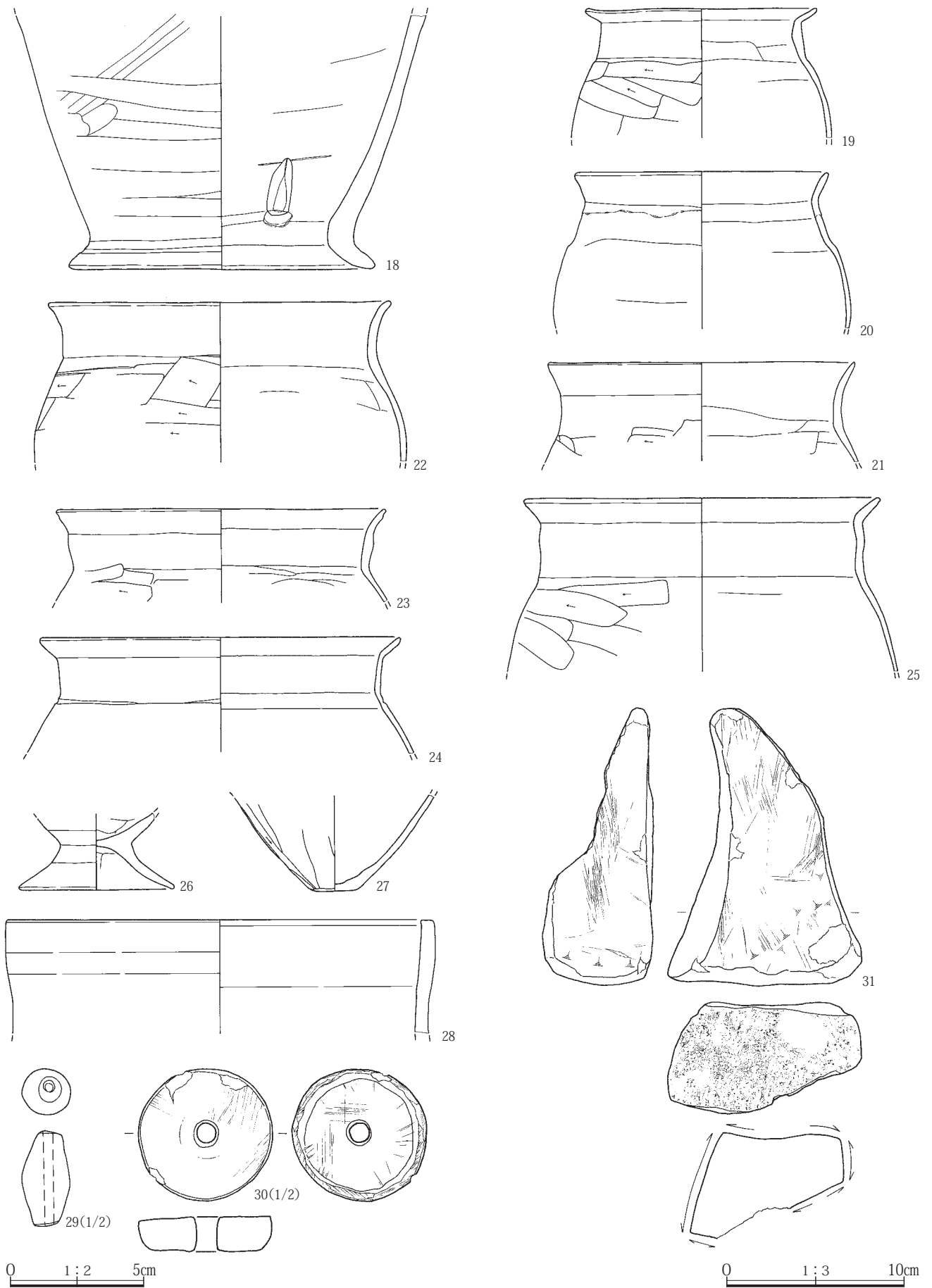
遺物 出土遺物は豊富で住居全域に散らばるようにして出土し31点を図示した。須恵器杯類の出土が顕著で16点を示した。カマド内出土遺物が豊富で、カマドAから須恵器甌18・甕27、カマドBから須恵器杯類2・13、土師器甕20・24・25が出土している。床直上出土の遺物は須恵器杯類1・4・14等で少ない。須恵器椀16は掘り方内出土の遺物だが、外底部に摩耗と朱墨痕が見られ転用硯として使用したようだ。完形の土錘29が南壁際床面より、石製品では完形の紡輪30が西壁際、砥石31が南東隅の掘り方内から出土している。

図示した以外の土器片も多く、951点が出土している。この内5/6近くが土師器で、土師器は壺甕類・須恵器は杯類が主体で5・6号住居に近似した様相である。

所見 煮沸具は土師器コの字状口縁の甕で、羽釜を伴っていない。須恵器杯類は椀・皿の分化が始まる時期と思われる。底径はやや広めで口縁端部の外反は弱い。9世紀中頃の住居と想定できる。



第26图 7号住居出土遺物(1)



第27図 7号住居出土遺物(2)

8号住居

(第28～30図 PL. 6—⑤～⑧、46・47 遺物観察表228・229頁)

東3区西寄り住居群の中央付近に位置し、9世紀代の住居の多い一画にある。

位置 079～084、-973～977グリッドにある。

規模形状 南北軸長4.29m、東西軸長2.37mの長方形を呈している。残存する各隅は丸みが強いが、各辺は直線的で比較的整った形状である。

埋没土・壁 カマドのある東壁側より推積している。

方位 N-13° E(長軸) N-103° E(カマドA)

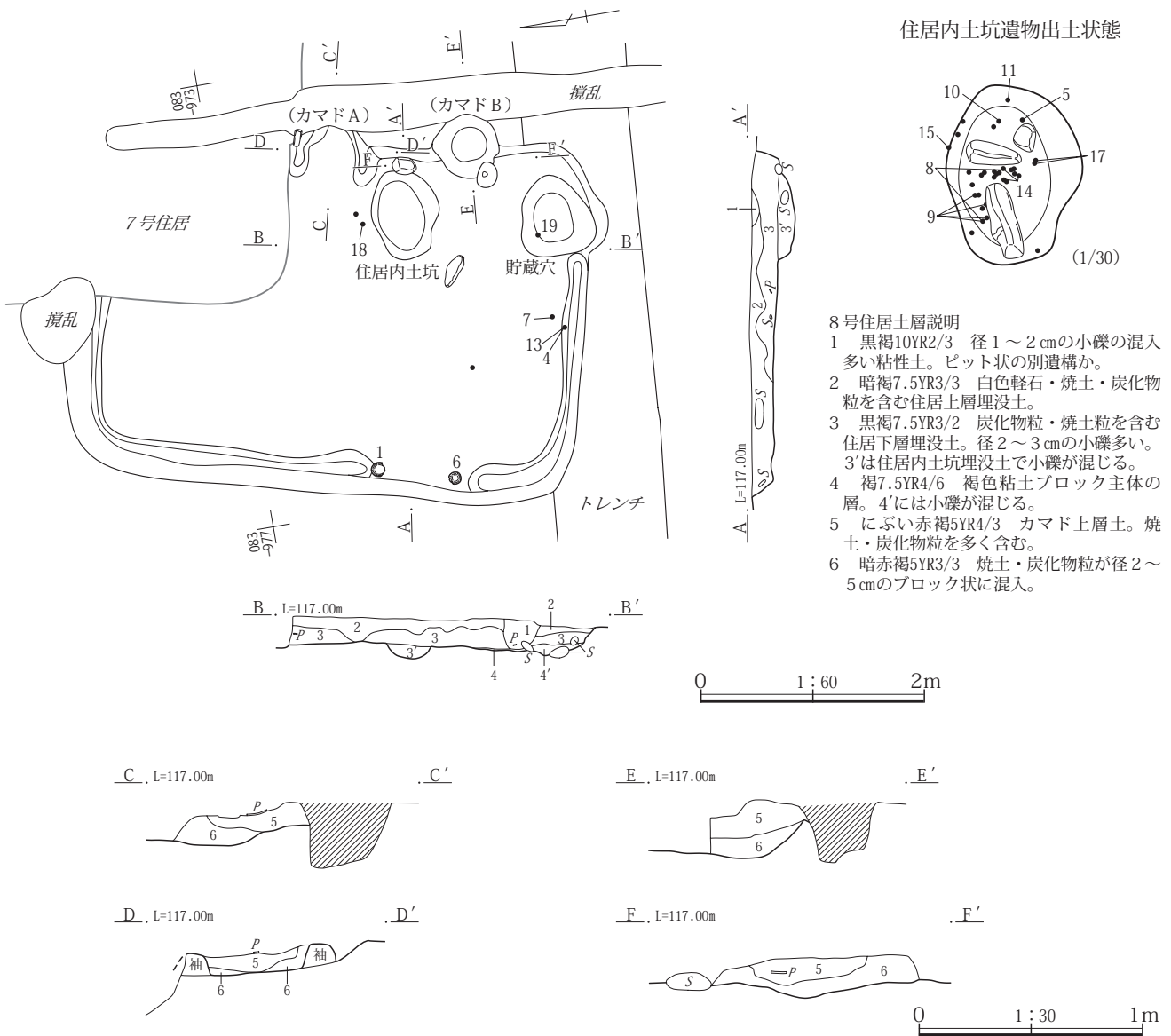
N-95° E(カマドB)

面積 復元[11.88]㎡

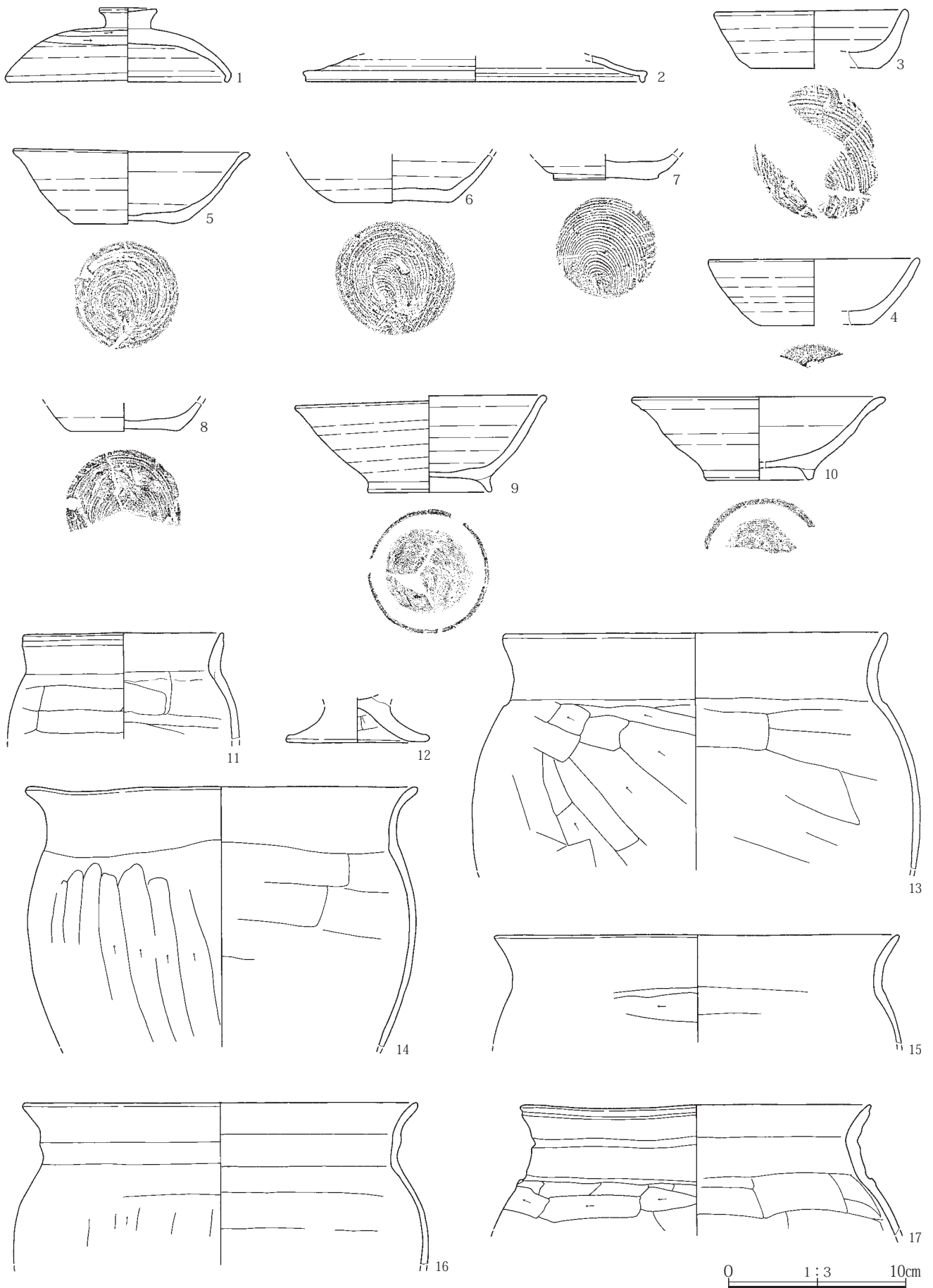
床面 礫の多い地山を掘り込んでいて、床面に礫が表れている。北側へ低く傾斜していて、南壁下と8cmの比高差がある。

壁溝 カマド周辺を除いて壁溝が見られるが、西辺南寄りで途切れる箇所がある。

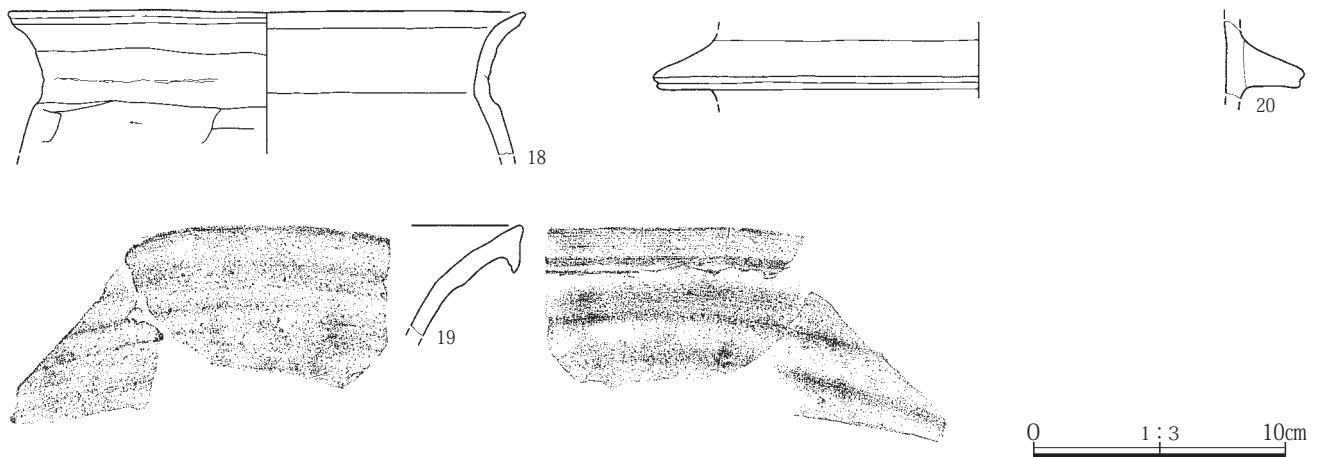
カマド 東壁中央やや北寄りにある後出カマドAと、東壁南寄りにある前出カマドBがある。どちらも煙道が想定される位置を攪乱で壊されている。カマドAは燃烧部が壁際にあり、火床は住居床面より4cm高い位置にある。両袖が残存し後出カマドであることが確認できる。カマドBの燃烧部も壁際にあり、火床は住居床面より3cm窪んでいた。袖は確認できない。



第28図 8号住居



第29図 8号住居出土遺物(1)



第30図 8号住居出土遺物(2)

貯蔵穴 2基のカマドの南脇にはそれぞれ窪みがあって、カマドA脇を住居内土坑、カマドB脇を貯蔵穴とした。住居内土坑は径79×61cmの不整楕円形を呈し、床面からの深さは17cmである。カマド構築材の可能性のある礫が中層から出土している。貯蔵穴は底面楕円形だが上端が南側は住居壁からはみ出した変則的な施設で壁が崩落した可能性がある。上面径72×67cmで、床面からの深さは25cmを測る。

その他 7号住居に前出している。北西側の10号住居も0.5mの近接した位置にある。柱穴は確認できない。

遺物 出土遺物は豊富で土器20点を図示した。住居内土坑は遺物がきわめて豊富で5・8～11・14・15・17が出土し、貯蔵穴からも須恵器甕19が出土している。床面直上遺物は須恵器杯7、土師器甕18などで数は少ない。羽釜20は埋没土内で確認した混入品である。

図示した以外に土器片502点が出土している。この内9割近くを土師器が占めていた。

所見 埋没土の観察からは確認できなかったが、本住居はカマドBを持つ住居からカマドAを持つ住居へと建替えられた可能性がある。住居内土坑に伴う杯類5・9・10は深さのある新しい要素を備えた土器である。住居内土坑をカマドAに伴う貯蔵穴として新住居南東隅付近の施設と想定することができる。

本住居で確実に使用された出土遺物の煮沸具には羽釜を伴っていない。杯類は口縁端部の外反が見られるが高台の付くものが少ない。9世紀中頃から後半の住居と想定できる。

9号住居

(第31・32図 PL. 7-①～④、47 遺物観察表229頁)

東3区西寄り住居群北隅付近に位置している。

位置 086～090、-975～979グリッドにある。

規模形状 南北軸長3.66m、東西軸長3.22mの南北にやや長い長方形を呈している。カマドを挟んで東辺は食い違い、歪んだ形状となっている。

埋没土・壁 焼土等の混入のある住居堆積土らしい埋没土である。人為的な埋戻しの痕跡は認められない。

方位 N-10° E(長軸) N-100° E(カマド)

面積 11.48㎡

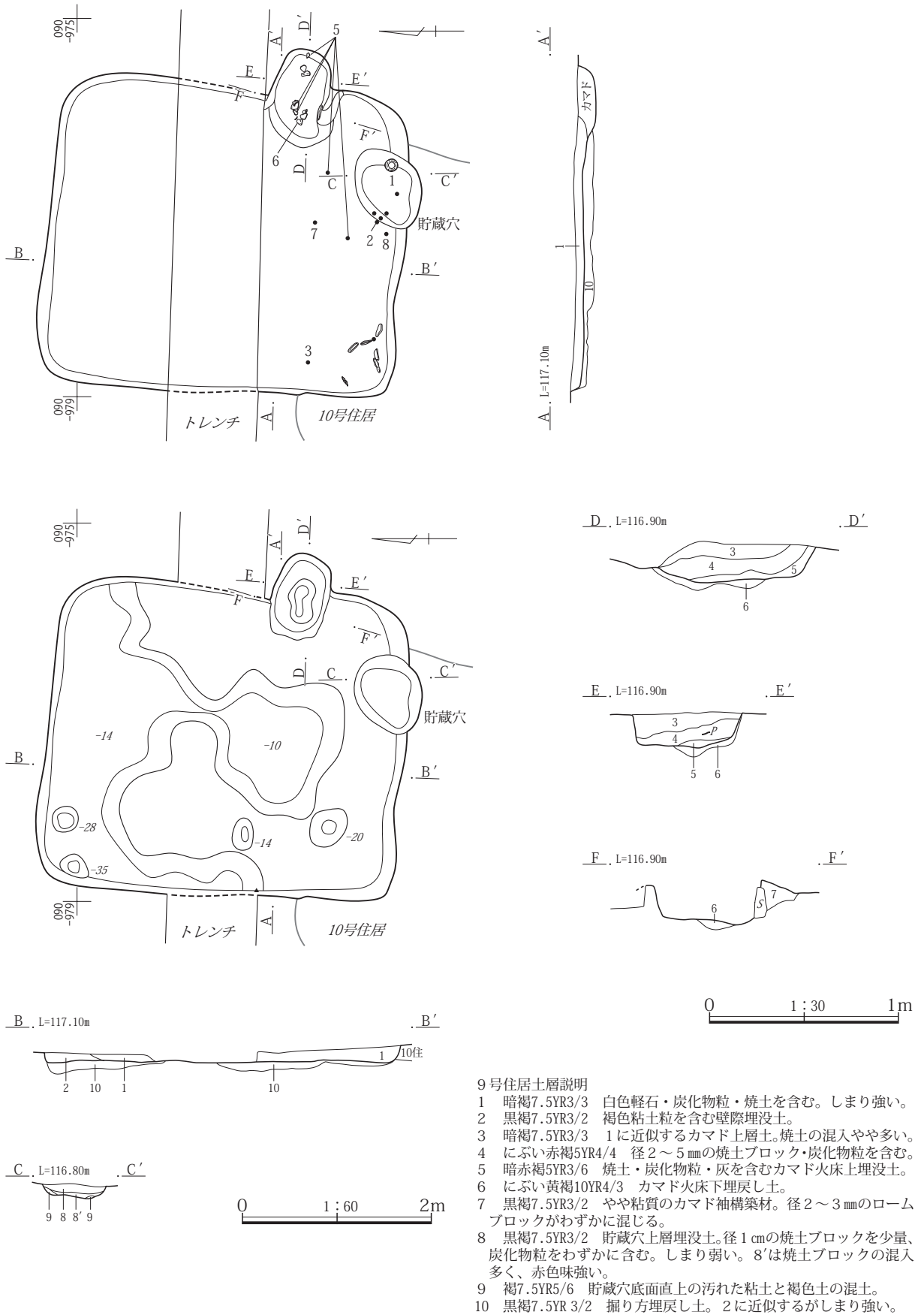
床面 凹凸があり5cm前後の比高差がある。北側を中心に掘り方がある。またピット状の窪みが西側に多いが、主柱穴配置上の窪みはない。

貯蔵穴 南壁下東寄りに不整形の窪みがあり、埋没土はしまりやや欠き住居廃絶時には開口していたと思われる、遺物の出土も多く、貯蔵穴とした。床面からの深さは18cmで底面も凹凸がやや多い。特に南側は住居壁の外側まで達しており、変則的な施設である。

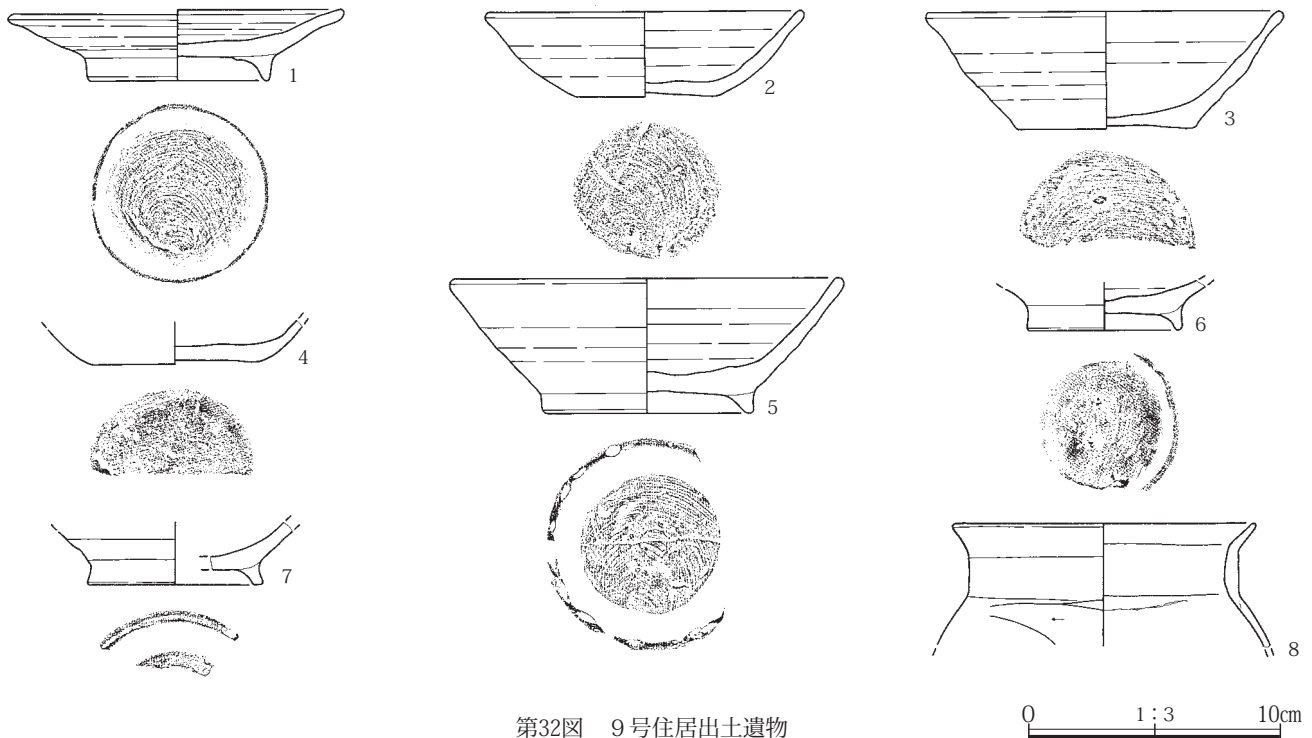
カマド 東壁南寄りにある。燃烧部は壁際から壁外にかけての位置にあり、南袖がわずかに残存していた。火床は壁外にあり、住居床面より11cm窪んでいた。煙道は認められない。

その他 10号住居に後出している。11号住居北東隅ともごく近接している。壁溝は確認できない。

遺物 土器類は須恵器杯類を中心に8点を図示した。須恵器皿1・杯2は貯蔵穴内の出土である。須恵器杯6が



第31図 9号住居



第32図 9号住居出土遺物

カマド内出土で、椀5もカマド内から南壁寄りにかけて散乱して出土した破片が接合した。須恵器杯3、土師器甕8は床直上の出土で、本住居に確実に伴う遺物は比較的豊富である。

図示した以外に土器片276点が出土し、この内ほぼ5/6が土師器であった。土師器は壺甕類、須恵器は杯類がほとんどで、5～7号住居と近似している。また南西隅付近床直上で菰編石が6点出土している。石材は緑色片岩と雲母石英片岩各3点である。

所見 羽釜の出土はなく、杯類に椀皿の分化が見られるが口縁端部は外反せず、9世紀中頃の住居と想定できる。

10号住居

(第33図 PL. 7-⑤・⑥、47 遺物観察表229・230頁)

東3区西寄り住居群北側に位置している。北東隅を攪乱で壊されているが、他の3隅が残存し、旧状をほぼ復元できる。

位置 084～087、-976～979グリッドにある。

規模形状 南北軸長3.53m、東西軸長は3.3m以上である。南辺が北辺より60cm以上短い台形を呈している。

埋没土・壁 強く締まる埋没土であった。壁は緩やかな立ち上がりの部分が多く、旧状を留める壁ではない。

方位 N-7° E(長軸) N-91° E(カマド)

面積 復元[9.16] m²

床面 細かな凹凸が多い床面で、5cm前後の比高差がある。掘り方は認められない。埋没土第2層は水平に近い堆積部分が広く、二次的な床面であった可能性がある。

ピット 2基のピットがあり、南東隅をP1、西壁寄りをP2とした。P1は貯蔵穴の位置にあるが径が小さく、柱穴的である。P2は不明な施設で入口ピットとしては西壁から離れ過ぎている。

カマド 東壁南寄りにある。燃烧部は壁際であり、火床は外側へ向かって高く傾斜し、住居床面より3cm高くなっている。両袖が残存している。煙道は認められない。

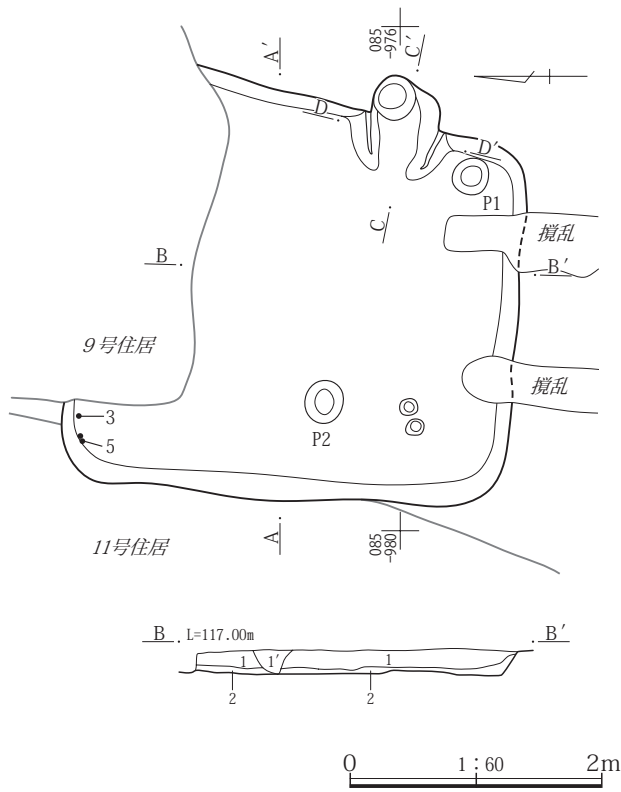
その他 9号住居に前出し、11号住居に後出している。壁溝は確認できない。

遺物 土器8点を図示した。いずれも小破片で埋没土内の土器が多い。床面からやや浮いた状態だが須恵器椀3・5が北西隅壁際出土であり、本住居の年代を示す資料と考えられる。他はすべて埋没土内の出土で、須恵器羽釜8は混入品と考えた。

図示した以外に土器片222点が出土している。この内9割近くが土師器であった。

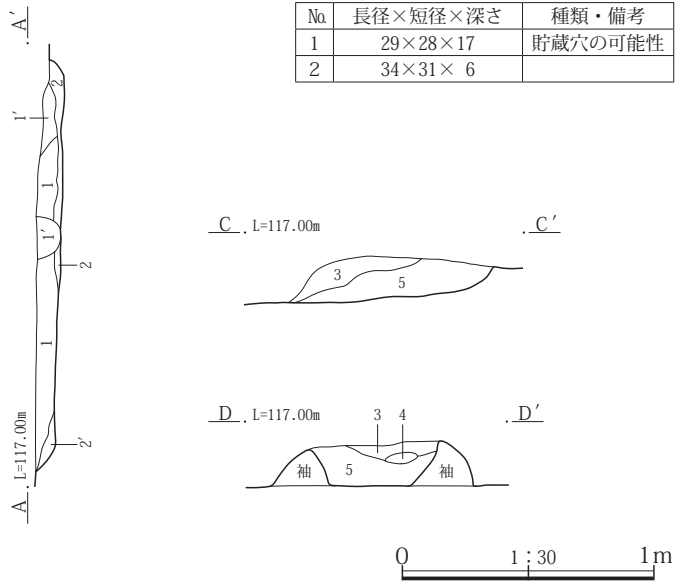
所見 杯類は底面が広く、9世紀中頃の住居と想定できる。重複する9号住居とは近接する時期である。

第三章 調査の内容



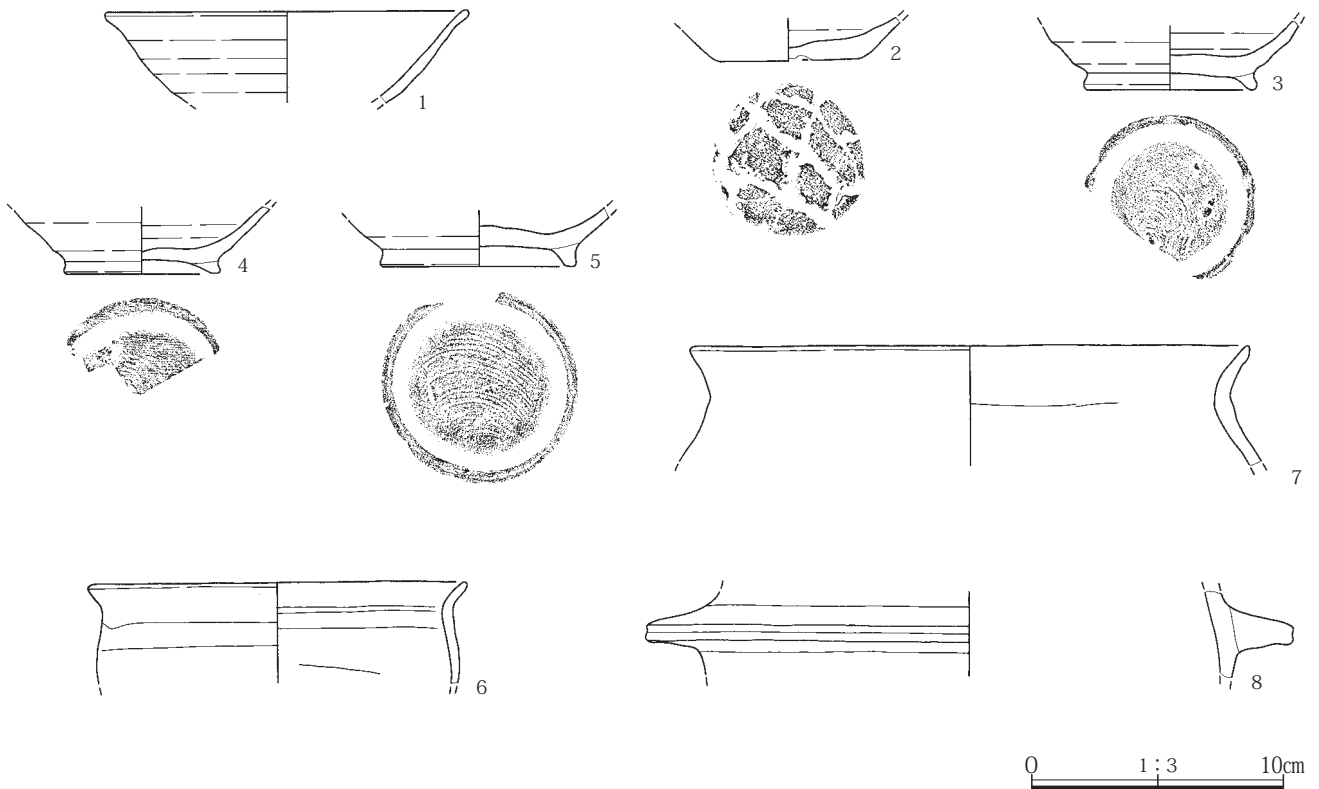
10号住居ピット一覧 (cm)

No.	長径×短径×深さ	種類・備考
1	29×28×17	貯蔵穴の可能性
2	34×31×6	



10号住居土層説明

- 1 黒褐7.5YR3/2 汚れたローム土と微細な白色軽石が混じり、強くしまる。1'は軽石の混入なく黒色味をおびる。ピット状の別遺構埋没土の可能性。
- 2 黒褐7.5YR3/2 1に似るが軽石を含まない床直上埋没土。強くしまる。2'は径2~3mmの焼土ブロックを含む。
- 3 黒褐7.5YR3/2 カマド上層埋没土で径3~5mmの焼土ブロック・炭化物粒を含む。しまり強い。
- 4 赤褐10R4/4 焼土ブロック主体のカマド天井や壁の崩落土。
- 5 灰褐10YR4/2 強くしまった土。カマド埋没土としては焼土・炭化物粒の混入少ない。

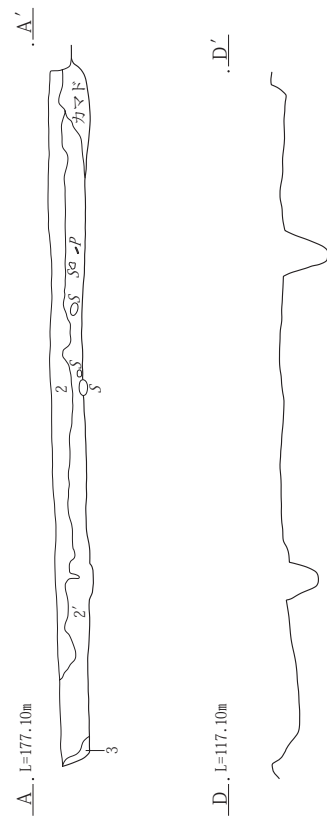
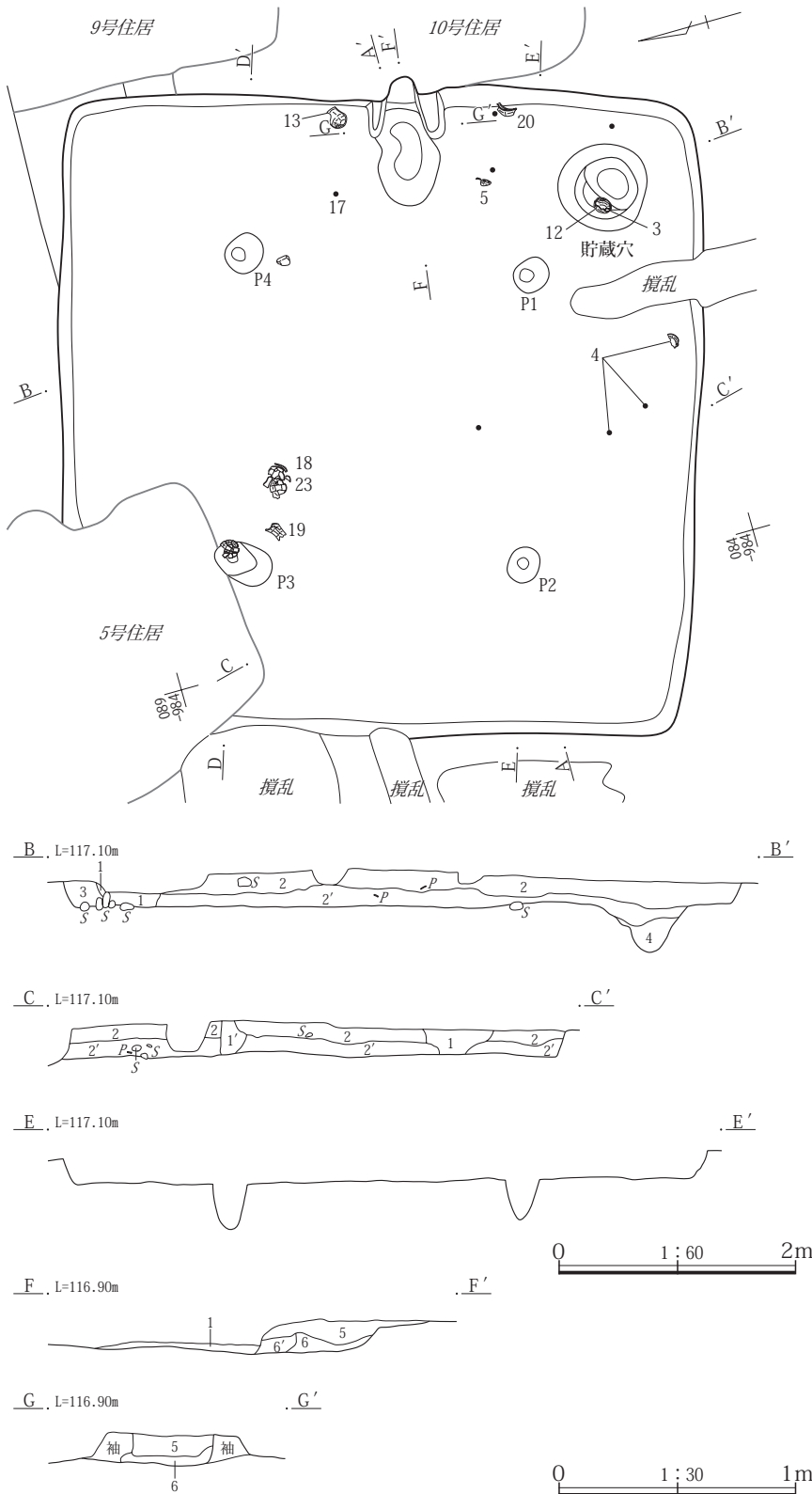


第33図 10号住居と出土遺物

11号住居

(第34~36図 PL. 7-⑦・⑧、47・48 遺物観察表230頁)
4号住居の北側約4mにある。東3区西寄りの古墳時

代後期住居では最も北側に位置している。北西隅を5号住居に壊されているが、旧状を復元するのに問題はない。
位置 083~089、-979~985グリッドにある。



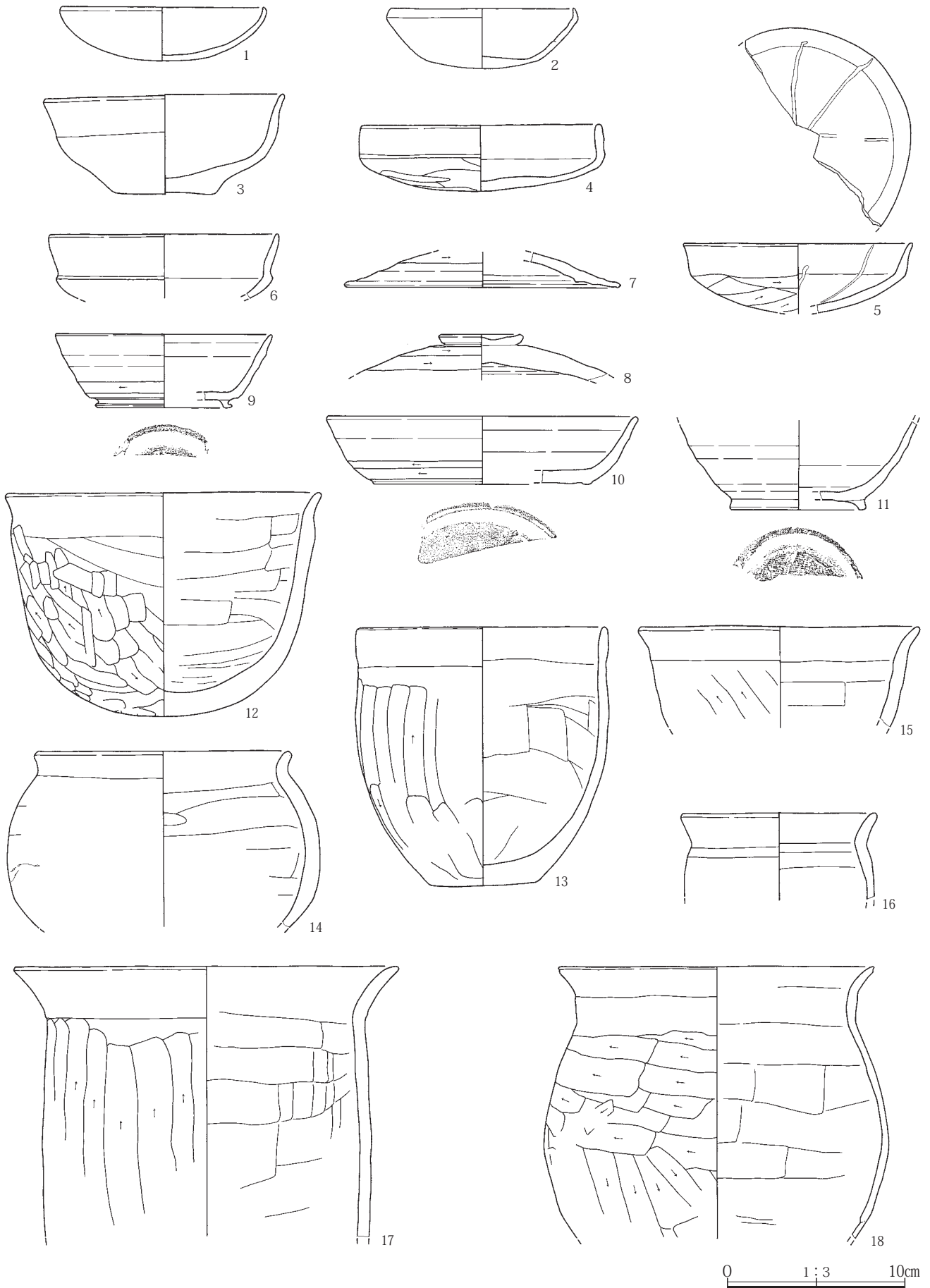
11号住居ピット一覧 (cm)

No.	長径×短径×深さ	種類・備考
1	30×27×36	主柱穴
2	31×26×38	主柱穴
3	50×33×28	主柱穴
4	34×31×39	主柱穴

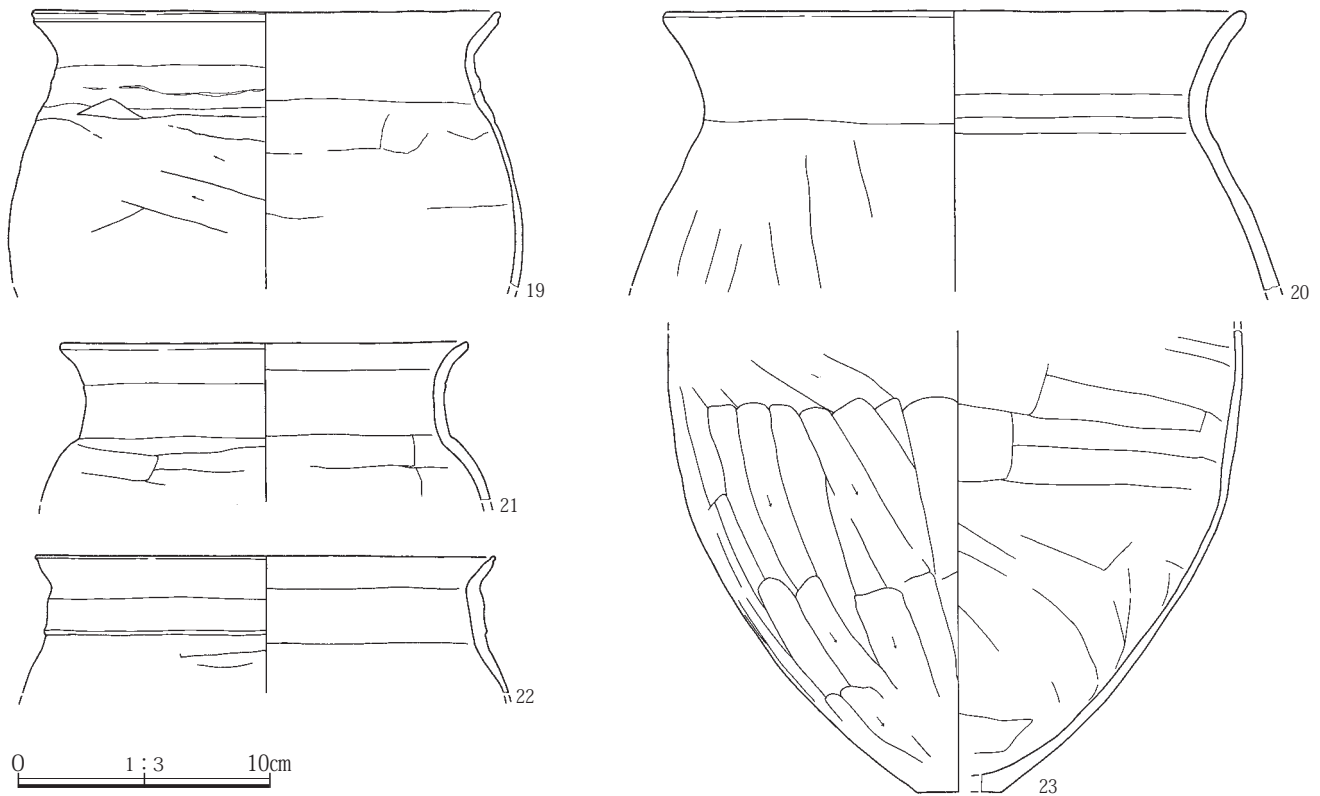
11号住居土層説明

- 1 灰褐7.5YR4/2 褐色粘土・礫を含む別遺構と思われる土層。1'は軽石粒多い。
- 2 暗褐7.5YR3/3 白色軽石多い。焼土・炭化物をわずかに含む。固くしまる。2'は白色軽石少なく、焼土・炭化物粒をやや多く含む。
- 3 褐7.5YR4/3 褐色粘土を含む。固くしまる。
- 4 極暗褐7.5YR2/3 褐色粘土・軽石粒・炭化物粒を含む。
- 5 暗褐7.5YR3/3 焼土・炭化物粒を含む。
- 6 暗褐7.5YR3/3 径2~3mmの焼土・炭化物粒を多く含む火床埋没土。6'は褐色粘土・焼土粒を含む。

第34図 11号住居



第35図 11号住居出土遺物(1)



第36図 11号住居出土遺物(2)

規模形状 南北軸長5.23m、東西軸長5.18mの方形を呈している。各辺は直線的で整美な形状である。

埋没土・壁 水平に近い堆積が見られる。

方位 N-17° E (長軸) N-101° E (カマド)

面積 復元[26.60]㎡ 20号住居・4号住居に次ぐ本遺跡3番目に広い住居になると想定される。

床面 緩やかな凹凸があって北西側で低く、南東側貯蔵穴周辺で高くなる傾向があり、両側で10cmの比高差を生じている。掘り方は認められない。

貯蔵穴 南東隅付近に開口部径76cmのやや不整な円形を呈した貯蔵穴がある。床面からの深さは41cmで、底面は皿底状で狭い。住居廃絶時には埋没していたと思われ、住居下層埋没土と異なる埋没土が見られる。

柱穴 住居四隅からの対角線上に四支柱穴が確認できる。4本とも規模は近似し、底径に乏しい。

カマド 東壁ほぼ中央にある。燃焼部は住居内にあり、火床は住居床面より3cm前後窪んでいる。南袖が残存し、北袖も断面から痕跡を確認できる。煙道は火床から段差をもって立ち上がり、残存範囲では壁外へ10cm張り出ししている。

その他 5・10号住居に前出し、9号住居にもごく近接している。壁溝は認められない。

遺物 出土遺物は豊富で土器23点を図示したが、床直上の出土遺物は土師器杯4・鉢13・甕20など限られている。土師器杯3・鉢12が貯蔵穴内の出土で、これらが本住居に確実に伴う遺物である。須恵器蓋・杯類の7～11やコの字状口縁の土師器甕18～22など、8世紀以降と想定される遺物の混入が目立っている。

図示した以外に土器片825点が出土している。このうち9割以上が土師器であった。また灰釉陶器も1点あり、混入品が含まれている。

所見 本住居に確実に伴う土器では杯類は模倣杯を主体としているが、甕類は長胴化以前のものである。6世紀後半の住居と想定できる。一方、8世紀以降の遺物が埋没土から多量に見られ、土層断面観察では確認できなかったが、竪穴状遺構のようなカマドを伴わない遺構の存在を想定すると、埋没土第2層下の比較的平坦な部分が床面となる可能性があるだろう。

12号住居

(第37図 PL. 8-①、48 遺物観察表230・231頁)

東3区西寄り住居群北隅に位置している。北側は調査区域境にかかり、重複遺構や攪乱が多く、一部しか把握できていないが、出土遺物が多く、住居として扱った。

位置 089・090、-988～990グリッドにある。

規模形状 残存する南北軸長1.05m、東西軸長1.63mで方形を呈すと思われる。南東側が隅付近まで達している可能性があるが、不明瞭な部分が多い。このままの規模では住居とするには小さ過ぎる。

埋没土・壁 残存範囲では水平に近い堆積が見られる。残存壁高は最大でも6cmである。

方位 N-88°W(東西軸)

面積 残存(0.90)m²

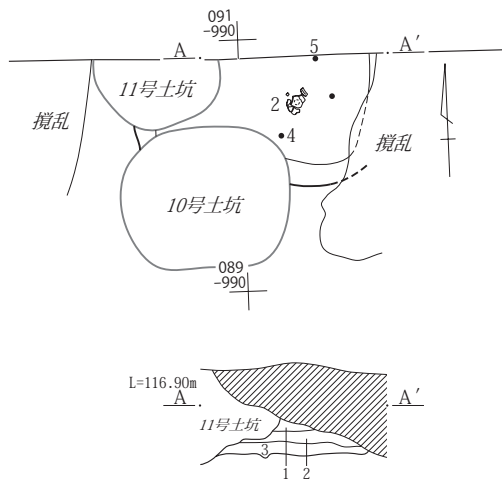
床面 ほぼ水平な床面で、掘り方は確認できない。

その他 10・11号土坑に前出している。カマド・柱穴・壁溝等の施設は確認できない。

遺物 土器5点を図示した。いずれも床面より10cm以上浮いた状態での出土で、確実に本住居に伴うと確認できる遺物はない。

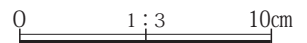
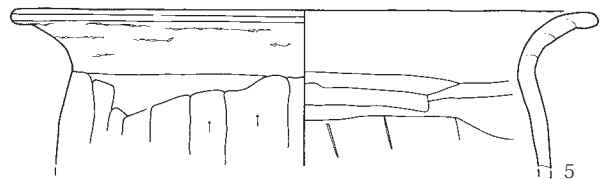
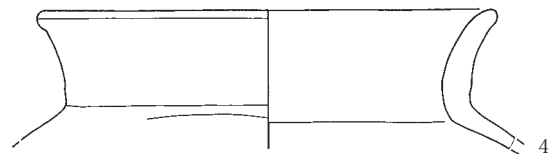
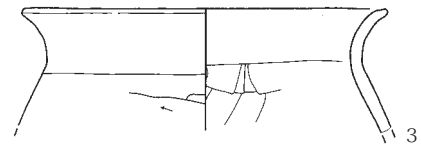
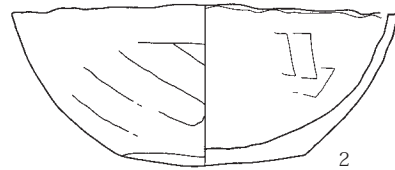
図示した以外の土器片は34点のみで、土師器杯類が含まれるが、須恵器杯類は見られなかった。

所見 遺物は7世紀末から8世紀初頭にかけての時期にほぼ集中しており、この時期の遺構と想定できる。



12号住居土層説明

- 1 黒褐7.5YR3/1 ややしまりある粘性土。上層埋没土。
- 2 暗褐7.5YR3/3 粘土ブロック混じりのややしまりある粘性土。
- 3 褐7.5YR4/3 2層に似るが粘土ブロックの混入量がやや多い。ややしまりある粘性土。



第37図 12号住居と出土遺物

13号住居

(第38・39図 PL. 8-②・③、48 遺物観察表231頁)

東3区西寄り住居群北隅に位置している。北側は調査区境にかかり大半が不明である。

位置 089・090、-962~967グリッドにある。

規模形状 南北残存軸長1.15m、東西軸長3.84mの方形を呈している。各隅は丸みが少なく、各辺も直線的で比較的整美な形状である。

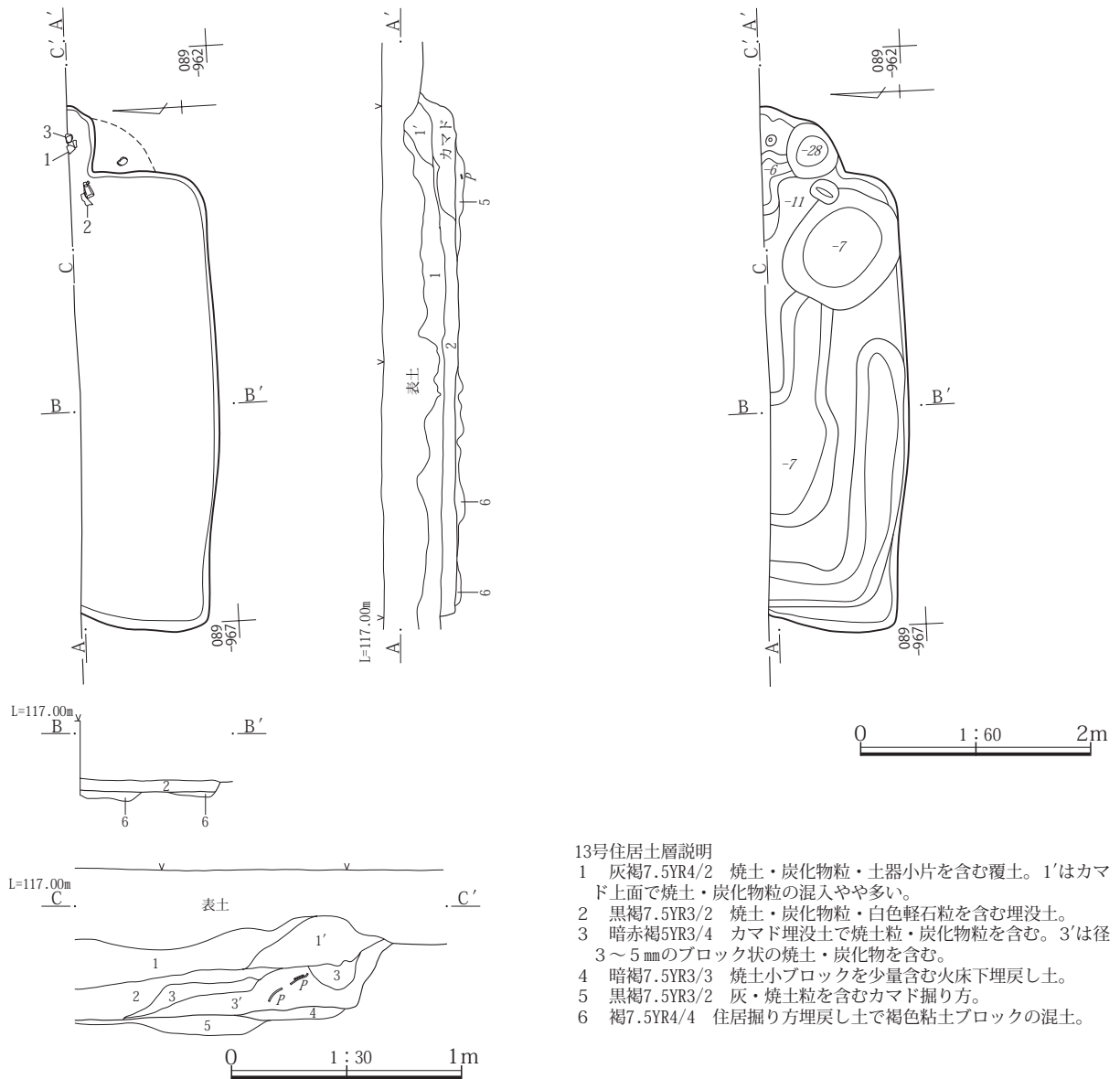
埋没土・壁 ほぼ単層で埋没の経過は不明である。カマド周辺を除くと深度に乏しく、壁高は最も深い西壁でも10cmである。

方位 N-88°W(東西軸・カマドとも)

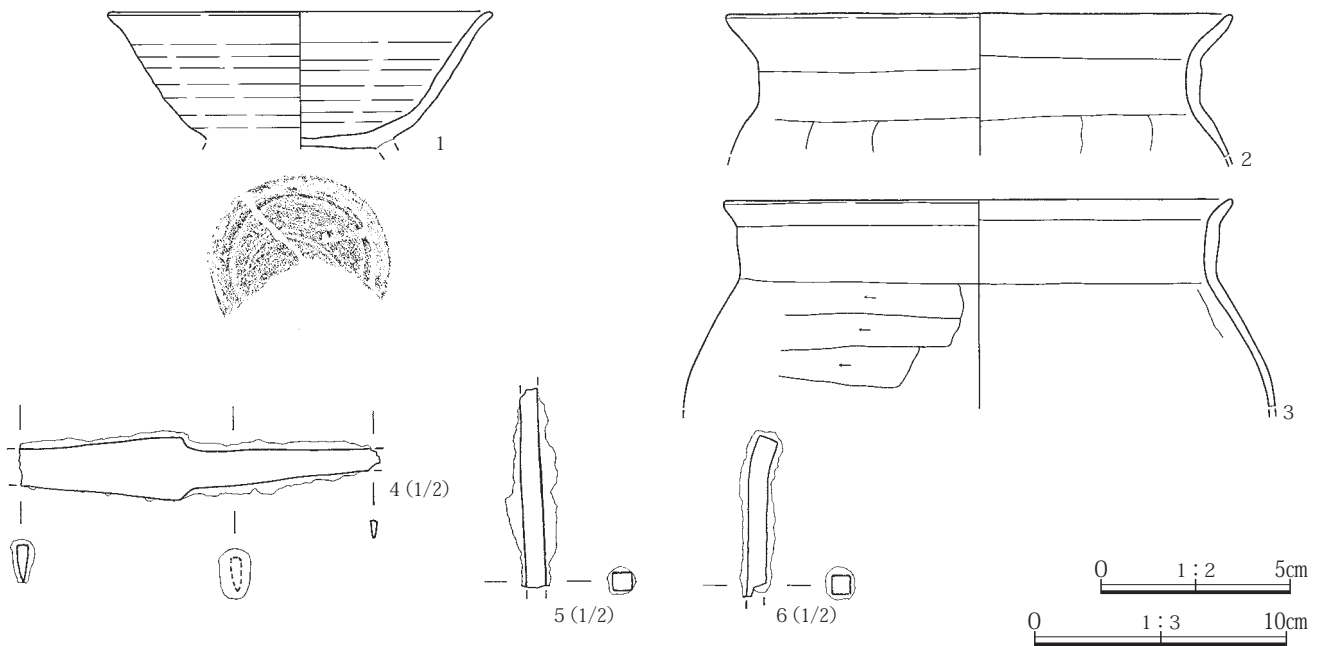
面積 残存(4.37)m²

床面 細かな凹凸はあるが、ほぼ水平な床面である。深度に乏しい不規則な掘り方がある。西壁下と南壁下西半に床面からの深さ3~6cmの直線的な窪みがあり、壁溝があった可能性がある。

カマド 東壁中央やや南寄りに位置していると思われる。調査区境にかかり北側が不明である。燃烧部は壁外にあり、火床は住居床面と同レベルにある。袖部分は残存していない。カマド南脇の壁下にはピット状の窪みがある。袖石を据えた痕跡としては規模が大き過ぎ、住居



第38図 13号住居



第39図 13号住居出土遺物

に前出する施設かカマドに伴う施設か判断できなかった。

その他 柱穴は確認できない。南東隅下にある窪みを床下調査時に確認したが、貯蔵穴とは異なる。

遺物 土器3点と鉄器3点を図示した。土器はカマド内および周辺の出土である。2・3はコの字状口縁の土師器甕で本住居に確実に伴う遺物である。鉄器は埋没土内での確認で、5と6は同一個体の可能性がある。

図示した以外に土器片167点が出土している。この内土師器が5/6以上を占め、5～7・9号住居等と近似した様相が見られる。

所見 出土遺物は少ないが羽釜は見られない。椀は口縁端部が外反し、9世紀後半の住居と想定できる。

14号住居

(第40図 PL. 8-④、48 遺物観察表231頁)

東3区の中央住居群と西寄り住居群の間に位置している。北側は調査区境にかかり全容を把握できていない。地山を過掘削し、東辺を中心に床面の一部を失っている。

位置 087～090、-953～958グリッドにある。

規模形状 南北残存軸長2.90m、東西残存軸長3.46mの方形を呈すと思われる。

埋没土・壁 埋没土はほぼ単層で、上層に水平に近い堆積が見られる。人為的埋戻しの痕跡は見られない。東隅

でピット状の別遺構との重複が認められる。調査区境の北断面からは30cm前後の壁高が確認できる。

方位 N-77° E

面積 残存(7.65)m²

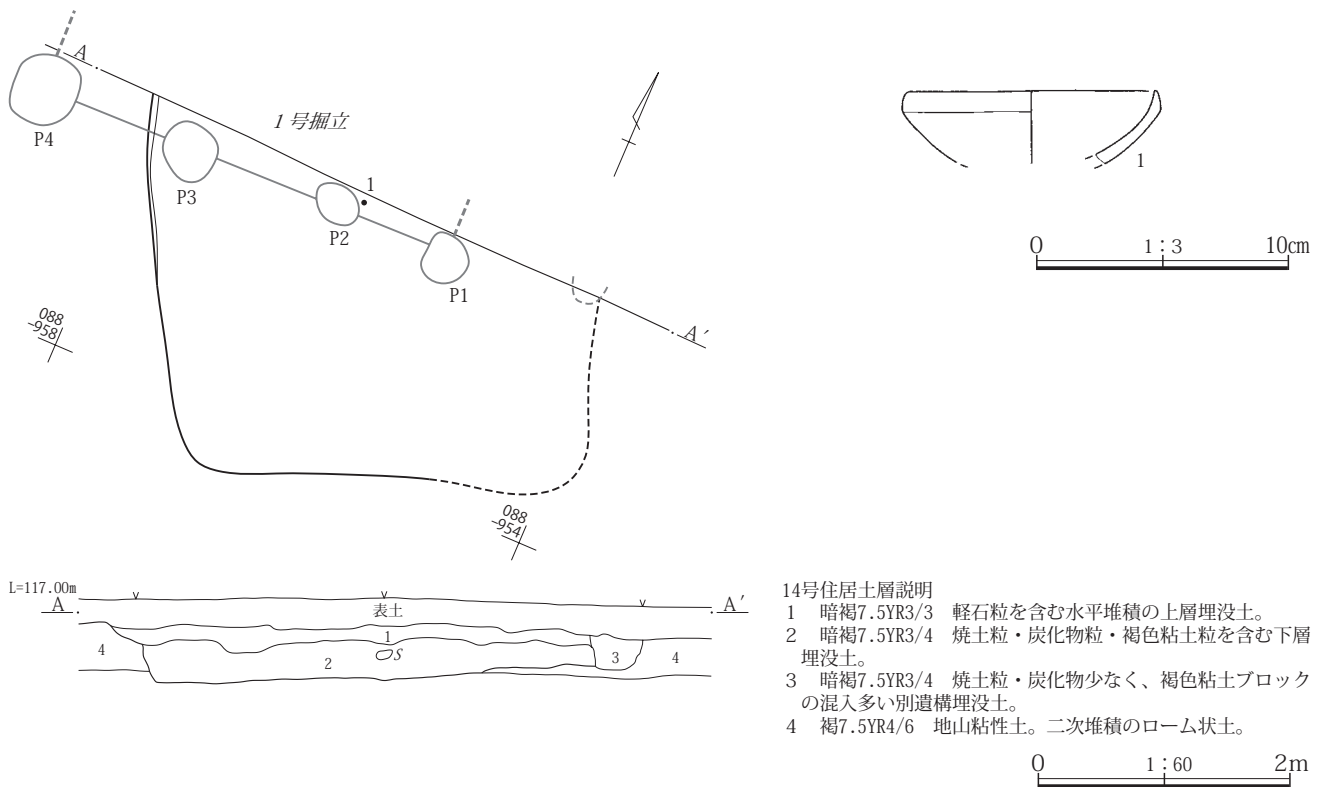
床面 やや凹凸の多い床面で5cm前後の比高差を生じている。掘り方は確認できない。

その他 1号掘立柱建物の痕跡が断面に表れないことから、同建物に後出していると思われる。カマド・柱穴等の施設は確認できない。

遺物 図示できた土器は土師器杯1点のみであった。住居中央の床面から浮いた状態の出土であり、確実に本住居に伴う遺物とは認定できない。特に1号掘立柱P2に近接した位置の出土で後世の混入の可能性がある。

図示した以外の遺物も少なく、土師器片が2点出土したのみである。

所見 本住居の杯は11住居に類例が見られる。出土遺物から6世紀の住居と想定することもできるが、該期の住居としては小規模であり、掘立柱建物との新旧関係からも疑問点が残る。



第40図 14号住居と出土遺物

15号住居

(第41図 PL. 8-⑤、48 遺物観察表231頁)

東3区中央住居群の西隅にある。住居中央から北壁にかけて大きく攪乱を受け、全容は把握できていない。

位置 080~083、-952~956グリッドにある。

規模形状 残存範囲で南北軸長2.74m、東西軸長3.10mの方形を呈している。南側が狭い逆台形状に歪むと想定される。

埋没土・壁 壁際からの自然堆積と思われる。浅い住居で壁高は10cm未満の部分が大半である。

方位 N-81°W **面積** 復元[8.20]㎡

床面 北東側へ低く傾斜する傾向があり、南西隅と6cm前後の比高差がある。住居東側に不規則な掘り方がある。礫の多い地山を掘削していて、掘り方面には多量の礫が表れている。北東隅で確認した円形の窪みは配置から貯蔵穴となる可能性のある施設である。

カマド 北壁側にあると思われるが確認できない。

その他 16号住居とわずかに重複しているが、新旧関係は確認できない。4号溝に前出することを上面で確認している。壁溝・柱穴等の施設は確認できない。

遺物 土器5点を図示した。いずれも小破片である。土師器甕3が壁際の床直上、土師器杯2は床直下の出土遺物で本住居年代を推定するのに適した遺物である。

図示した以外に土器片68点が出土している。この内須恵器が6点含まれ、すべて杯類だった。

所見 小破片からの推定だが、壁際の遺物は古墳時代後期6世紀の遺物と思われる。9世紀代のコの字状口縁土師器甕も出土しているが、東辺にカマドを持たないことから古墳時代住居と想定する。

16号住居

(第42・43図 PL. 8-⑥~⑧、48 遺物観察表231頁)

東3区中央住居群の西隅にある。

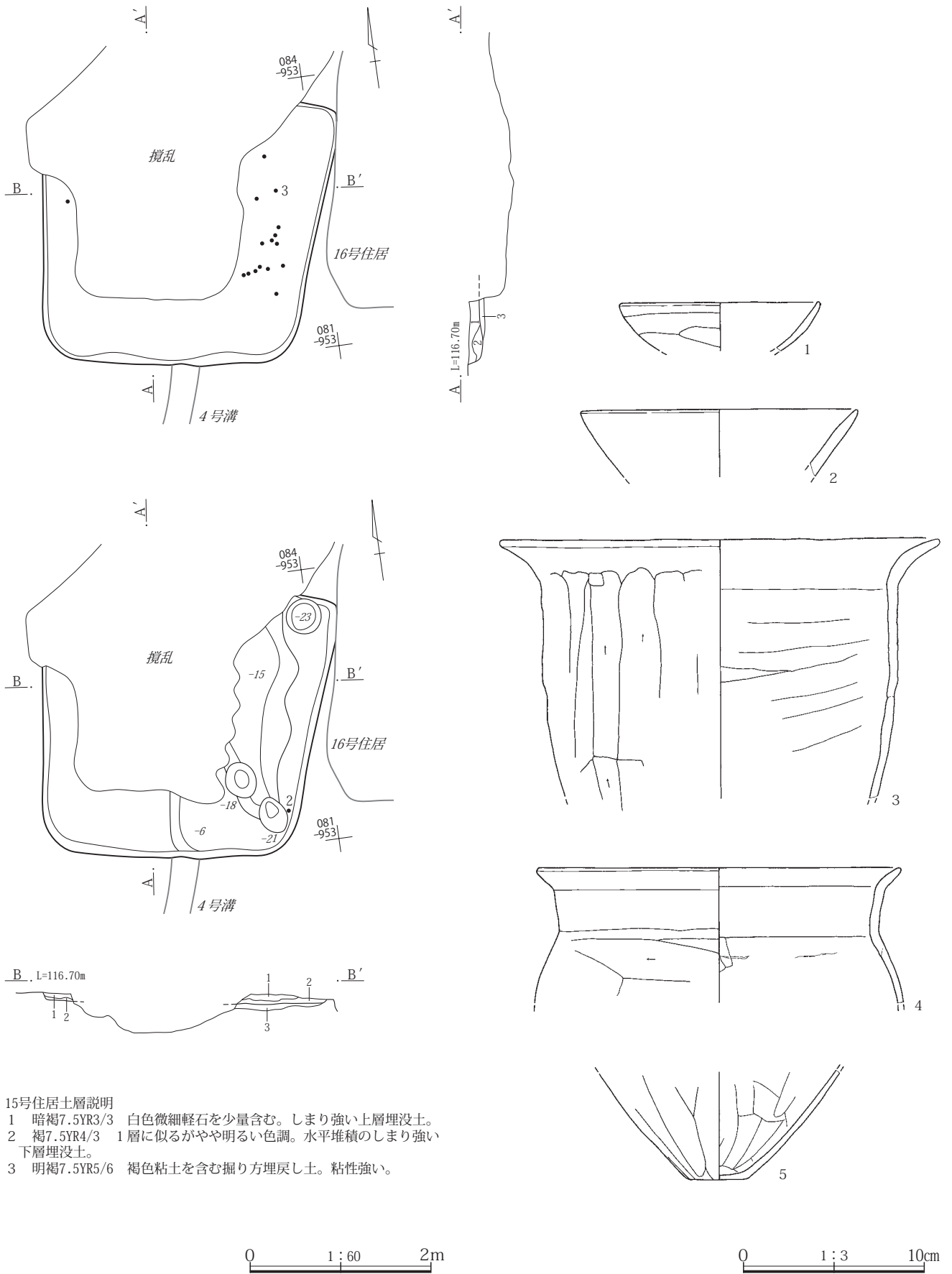
位置 080~084、-949~952グリッドにある。

規模形状 南北軸長3.29m、東西残存軸長2.87mの方形を呈している。東辺が溝状の攪乱により壊されているが、北壁が南壁より50cm短い台形状に歪むと思われる。

埋没土・壁 壁際から堆積するようだが、ほぼ単層の埋没土である。

方位 N-11°E(長軸) N-96°E(カマド)

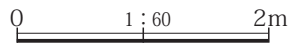
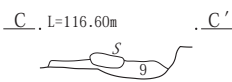
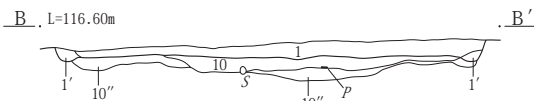
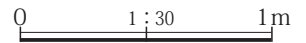
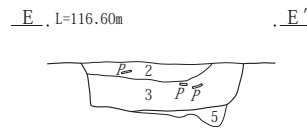
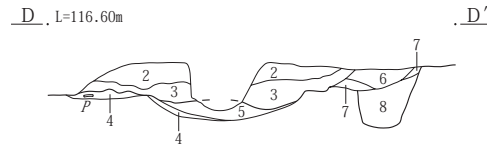
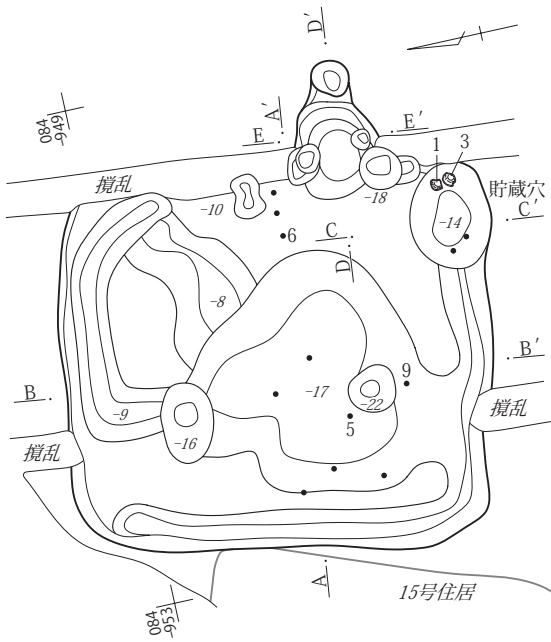
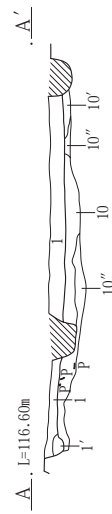
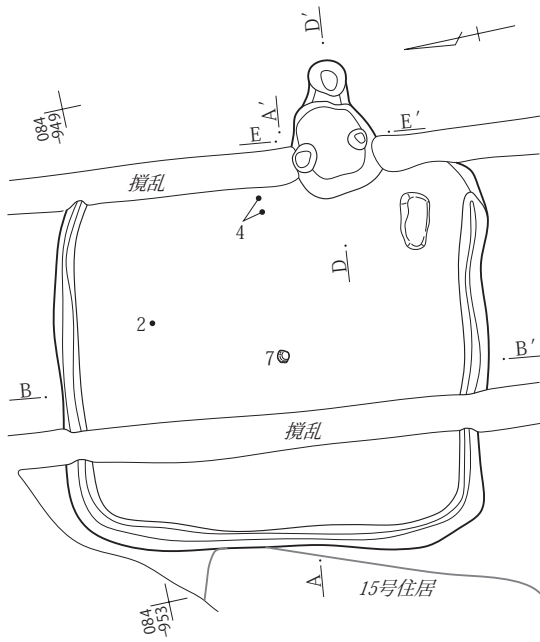
第三章 調査の内容



15号住居土層説明

- 1 暗褐7.5YR3/3 白色微細軽石を少量含む。しまり強い上層埋没土。
- 2 褐7.5YR4/3 1層に似るがやや明るい色調。水平堆積のしまり強い下層埋没土。
- 3 明褐7.5YR5/6 褐色粘土を含む掘り方埋戻し土。粘性強い。

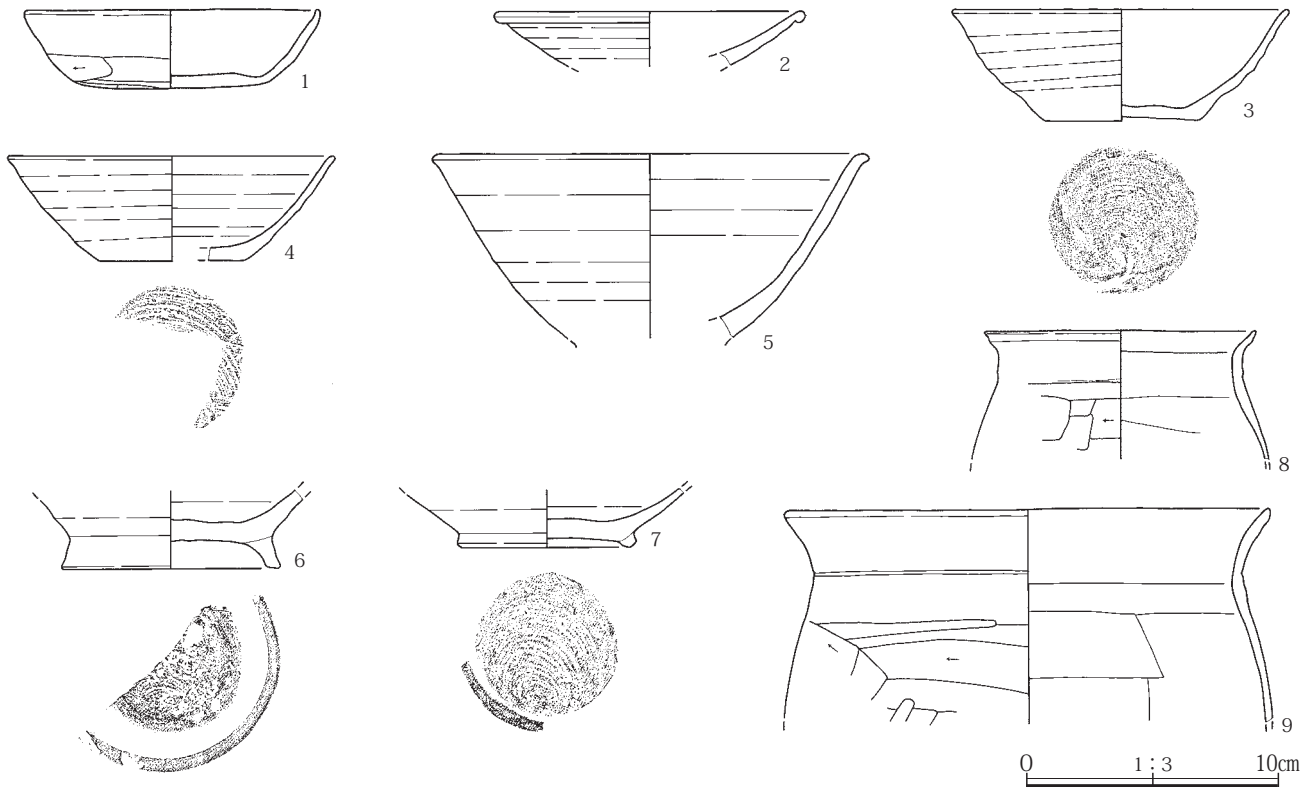
第41図 15号住居と出土遺物



16号住居土層説明

- 1 黒褐10YR2/2 住居埋没土の粘性土。壁際で部分的に見られる1'は径1cmのロームブロックを少量含む。
- 2 黒褐5 YR3/1 焼土・炭化物粒を含むカマド上面埋没土。
- 3 暗赤褐5 YR3/4 焼土を少量含む。
- 4 極暗赤褐5 YR2/4 焼土・炭化物粒を含む火床下埋戻し土。
- 5 暗赤褐5 YR3/3 カマド火床下埋戻し土。
- 6 黒褐10YR2/3 煙道部埋戻し土。
- 7 にぶい黄褐10YR5/3 粘土ブロック多い。煙道部下層埋戻し土。
- 8 黒褐10YR3/2 煙道部窪み埋戻し土。
- 9 暗赤褐5 YR3/2 焼土・炭化物粒・褐色ローム土を含む貯蔵穴付近埋戻し土。
- 10 暗赤褐5 YR3/4 焼土を少量含む掘り方戻し土。10'は焼土・炭化物粒を少量含む。10''は焼土・炭化物粒を含む。

第42図 16号住居



第43図 16号住居出土遺物

面積 復元[9.11]m²

床面 東側へ低く傾斜していて、西壁際と5cm前後の比高差がある。不規則な掘り方がある。また西寄り床下のピット状の窪みは、四支柱穴配置上の2柱穴として大きな齟齬のない位置にある。南東隅付近には礎盤石状の平坦な礫がある。上面が床面から4cm前後の高さに据えられ、下面は掘り方内にある。

貯蔵穴 掘り方調査時に南東隅付近で確認した窪みを貯蔵穴とした。壁溝に前出するようで、深度にも乏しく明瞭な施設ではない。

壁溝 残存範囲では南東隅付近を除いて幅15cm、深さ3~7cmの壁溝が巡っている。南壁下で幅広で深度を増す傾向がある。東壁下にも巡っていた可能性がある。

カマド 東壁南寄りにある。燃烧部は壁際から壁外にかけての位置にあり、火床は住居床面より6cm窪んでいる。袖石を据えた痕跡と思われる窪みが使用面・掘り方面の両方で確認できる。煙道は燃烧部から小さな段をもって立ち上がり、壁外へ70cm張り出すと思われる。また煙道先端部分にはピット状の窪みが先行して穿たれ、カマドとは無縁の土で埋め戻されていたようだ。

その他 15号住居とわずかに重複しているが、新旧関係は不明である。確実な柱穴等の施設は確認できない。

遺物 土器9点を図示した。貯蔵穴内から土師器杯1、須恵器杯3、床面直上から須恵器杯4・椀7が出土し、これらが本住居に確実に伴う遺物と考えられる。

図示した以外に土器片230点が出土している。この内9割近くが壺甕類を主体とする土師器だった。

所見 須恵器杯類は器高を増して椀形となるが口縁端部の外反は弱い。底面も広めである。この特徴より9世紀前半の住居と想定できる。

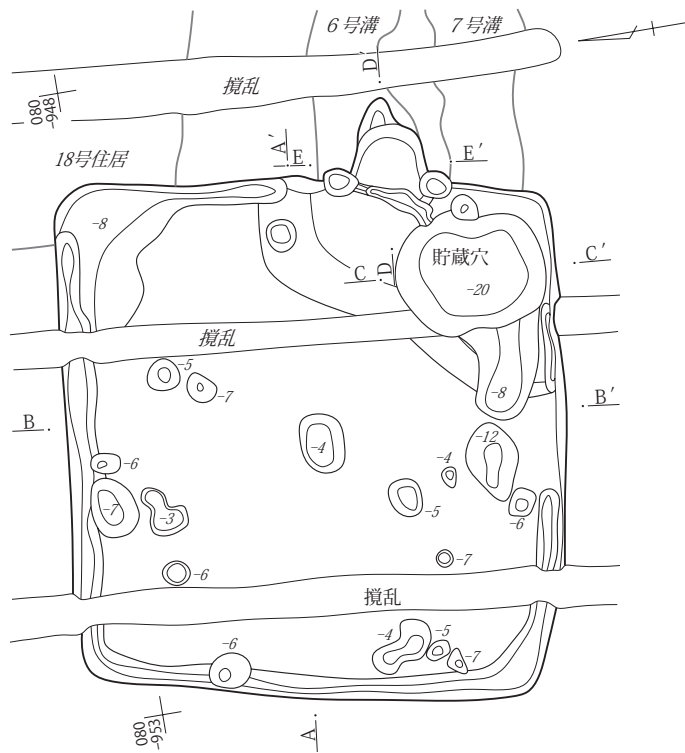
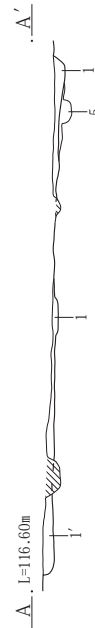
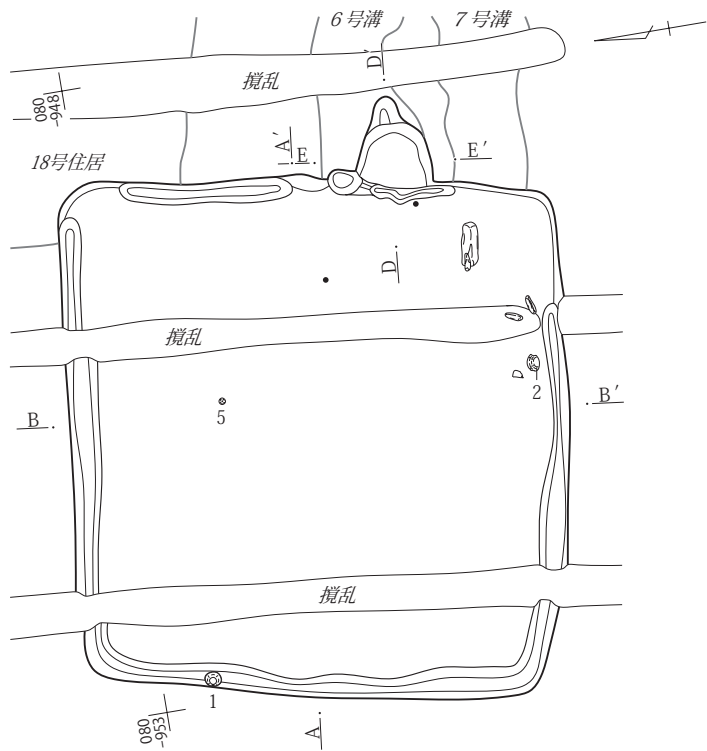
17号住居

(第44・45図 PL.9-①~③、48 遺物観察表231・232頁) 東3区中央住居群の西隅にあり、北側の16号住居とは0.5mの間隔で並んでいる。

位置 076~080、-948~953グリッドにある。

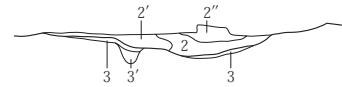
規模形状 南北軸長4.00m、東西軸長3.85mのほぼ正方形を呈している。

埋没土・壁 単層の埋没土で、堆積過程は明らかにできていない。深度に乏しい住居で北・西壁で10cm、東・南



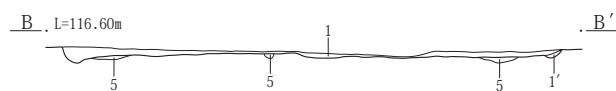
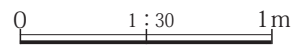
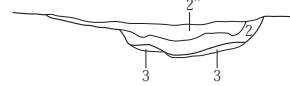
D, L=116.60m

D'



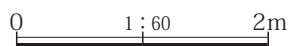
E, L=116.60m

E'



C, L=116.60m

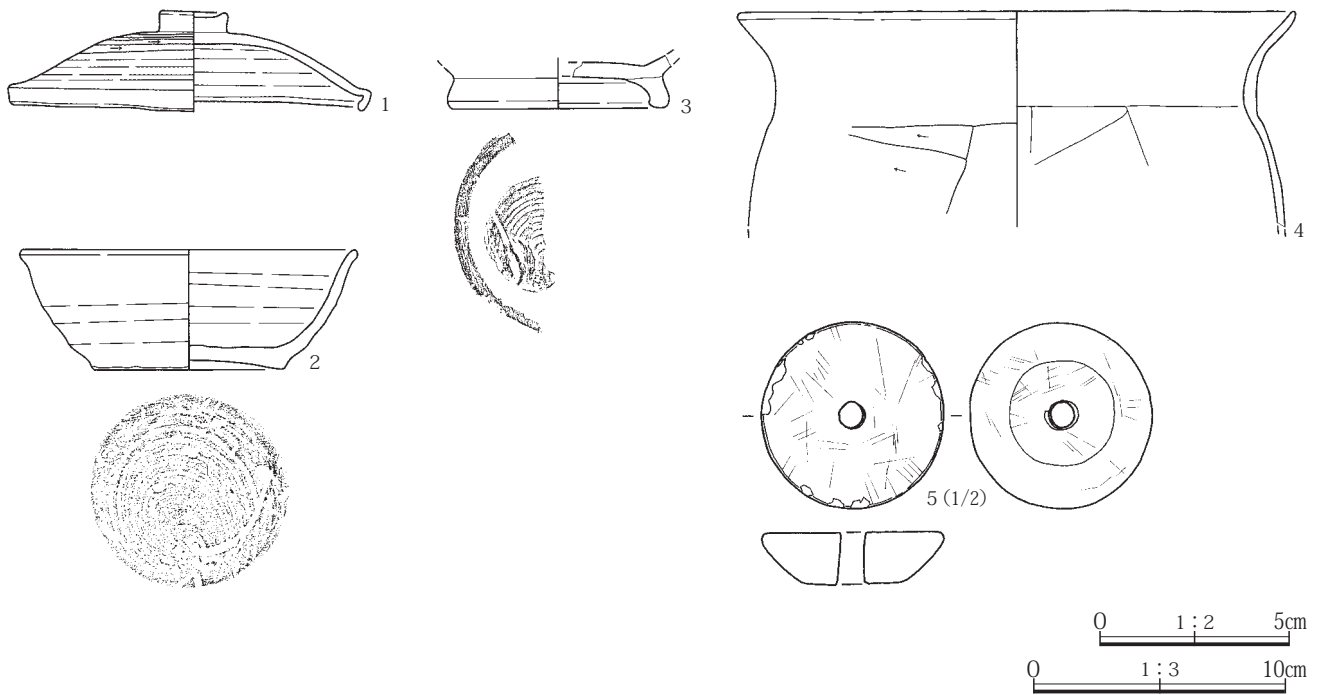
C'



17号住居土層説明

- 1 褐10YR4/4 軽石粒を含む。焼土粒・炭化物粒を少量含む埋没土。1'は壁際に見られ、褐色粘土を含む。
- 2 褐灰5YR4/1 焼土粒・炭化物粒を含む不整なカマド埋没土の粘性土で2''は後出溝に壊された部分。混入物少ない。2'は混入物やや多く、灰を含む。
- 3 明赤褐5YR5/6 焼土を少量含むカマド掘り方埋戻し土の粘性土。3'は壁溝状の窪み部分で混入物少ない。
- 4 暗赤褐5YR3/2 焼土・炭化物粒・褐色粘土を含む貯蔵穴埋没土。
- 5 褐7.5YR4/4 少量の炭化物粒・褐色粘土を含む掘り方埋戻し土。

第44図 17号住居



第45図 17号住居出土遺物

壁で6 cm前後の壁高である。

方位 N-81°W(長軸) N-97°E(カマド)

面積 14.92㎡

床面 細かな凹凸のある床面で、南東隅付近が低くなり住居中心と6 cm前後の比高差がある。この低い位置には掘り方があり、貯蔵穴とした。底面はやや不整で、明瞭な施設ではない。他の部分にはピット状の窪みが多数床下で確認できる。

壁溝 北東隅と南東隅周辺を除いて床面からの最大深さ4 cmの壁溝が巡っている。

カマド 東壁南寄りにある。燃焼部は壁外にあり、火床は住居床面より5 cm低くなっている。煙道は壁外へ65 cm張り出している。袖石を据えたと思われる窪みが2カ所と、壁溝状の窪みを掘り方で確認している。

その他 18号住居に重複するが、新旧関係を明確にできない。6・7号溝に後出する。

遺物 土器4点を図示した。須恵器蓋1・杯2が壁際の床直上出土遺物で本住居に確実に伴う遺物である。他に北寄りの床直上で完形の石製紡輪5が出土した。

図示した以外に土器片190点が出土している。この内約5/6が土師器で、杯類が比較的多数見られた。また、南辺東側の壁際から緑色片岩菰編石が3点出土した。

所見 出土遺物のうち須恵器杯2は口縁端部がわずかに外反するが、底部は比較的広い。甕類に顕著なコの字状口縁が見られず、杯は底径が広く9世紀前半の住居と想定できる。

18号住居

(第46図 PL. 9-④ 遺物観察表232頁)

東3区中央住居群の西隅にある。ピットの多い一画である。粘質土を埋没土とする落ち込みとして確認したが不明瞭な遺構である。規模は住居や竪穴状遺構等に近似するが、床面は明確ではない。住居掘り方の可能性を考え住居として扱った。

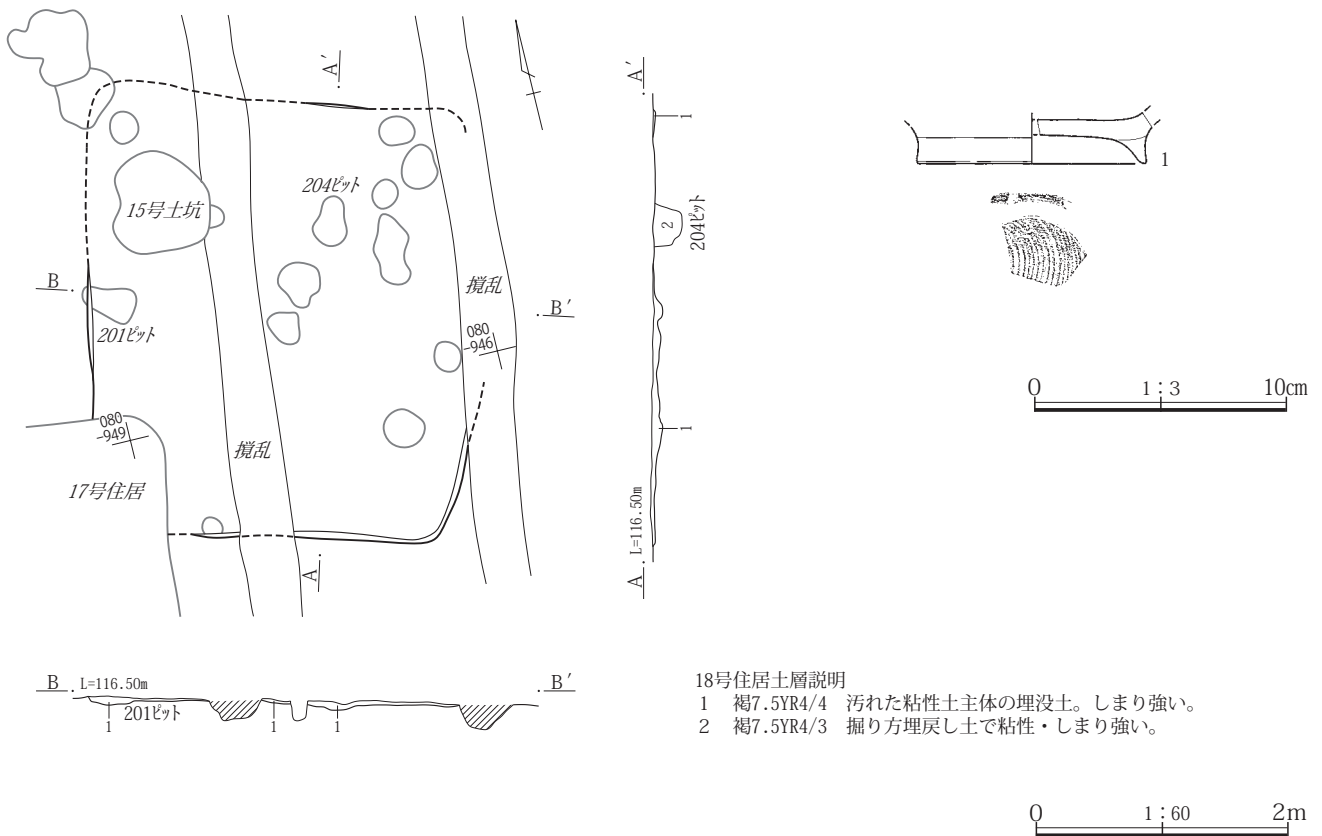
位置 078~082、-945~949グリッドにある。

規模形状 南北軸長3.40m、推定東西軸長3.15mの規模で長方形を呈している。南東隅が鈍角に開いていて、北辺が長い逆台形状に歪む可能性がある。

埋没土・壁 確認できるのは攪拌されたような地山粘性土で掘り方埋戻し土と考えた。壁は南・西側で部分的に4 cmの高さを確認したが、他は1 cm前後のわずかな痕跡である。

方位 N-16°E

面積 推定10㎡前後



第46図 18号住居と出土遺物

床面 凹凸が多く、一部は地山礫の多い面が露出している。住居掘り方底面に似た状況である。

その他 17号住居・15号土坑の他多数のピットと重複するが新旧関係は確認できなかった。カマドの痕跡も確認できていない。ピットの中に本住居の柱穴が含まれる可能性があるが、規則的な四主柱穴配置上のピットは見られない。

遺物 図示できた土器は須恵器碗1のみである。高台はいわゆる足高傾向にあるようで10世紀の遺物となる可能性がある。底径が広い点に齟齬があるが、破片からの復元で底径は明瞭ではない。埋没土内遺物として取り上げたものだが、掘り方内遺物となる可能性がある。

図示した以外の出土遺物も少なく、土器片45点のみであった。

所見 時期を明確にする根拠を持たないが、平安時代10世紀以降の住居と推定できる。

19号住居

(第47図 PL. 9—⑤・⑥、48 遺物観察表232頁)

西2区で確認した住居で、本遺跡で調査した全住居の中で最西端に位置している。最も近い27号住居から西側へ10m離れ、カマドのある住居に限定すれば40号住居から約40m離れている。

位置 091～094、-159～163グリッドにある。

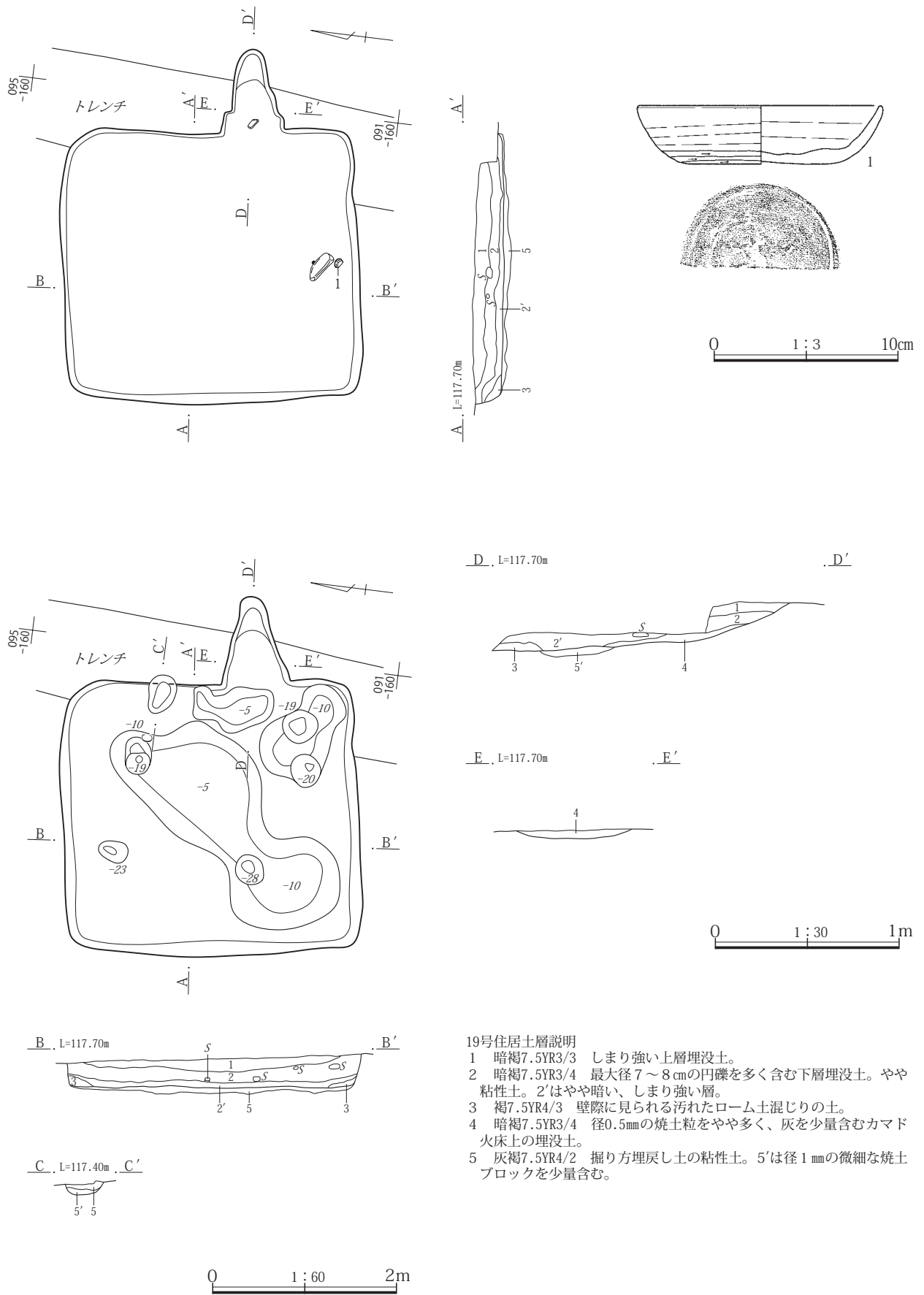
規模形状 南北軸長3.09m、東西軸長2.78mの方形を呈している。各辺は直線的で、比較的整美な形状である。

埋没土・壁 下層は壁際から埋没するが、中層以上では水平に近い堆積で、2層土には礫の混入が多い。人為的な埋戻しの可能性がある。本遺跡の住居では比較的深度に富み、南・西壁は30cm以上の壁高がある。

方位 N-7°W(長軸) N-85°E(カマド)

面積 8.52㎡

床面 住居中央付近が窪む床面で、壁際から5cm前後の比高差がある。不規則な掘り方が住居中央から東壁寄りにかけて見られる。礫の多い地山を掘り込んでいて、掘り方面には多量の礫が表れている。一部ピット状の窪み



第47図 19号住居と出土遺物

があり、東側の2カ所は支柱穴を想定することも可能な配置にあるが、明瞭な施設ではない。

カマド 東壁南寄りにある。トレンチ掘削により上半を失っている。燃烧部は壁外にあり、火床は床面と同レベルから煙道側へ向かって5cm近く高く徐々に傾斜している。燃烧部中央に小礫があるが、火床から若干浮いた状態で、支脚と確認できるものではない。火床下の掘り方は確認できない。煙道は壁外へ90cm張り出している。袖は残存していない。

その他 壁溝・明確な柱穴等の施設は確認できない。南壁寄りに長さ30cmを超える礫があるが、床面から浮いた状態で、床に据えたものではない。

遺物 図示できた土器は須恵器杯1のみで、床面より7cm浮いた状態だが、壁際の遺物で本住居年代推定の根拠となる遺物である。

図示した以外の出土遺物も比較的少なく、土器片57点で、ほとんど土師器であった。

所見 1は底径が口径の6割以上ある底の広い杯で、8世紀前半の住居と想定できる。

20号住居

(第48・49図 PL. 9-⑦・⑧、49・50 遺物観察表232頁)

東3区西寄り住居群東隅にあり、古墳時代後期の4号住居の東側4.5mに位置している。

位置 075～082、-963～969グリッドにある。

規模形状 南北軸長5.57m、東西軸長5.51mの方形を呈している。各辺は直線的だが東辺が西辺より、南辺が北辺よりそれぞれ50cm前後短い、台形状に歪んだ形状となっている。

埋没土・壁 埋没土はほぼ単層で、北側からの礫の混入が顕著である。人為的な埋戻しの可能性がある。壁は上方へ向かって開き気味で、壁高は30cm前後である。

方位 N-7° E(カマド)

面積 30.46㎡ 本遺跡内で最大の面積である。

床面 凹凸のやや多い床面で北西側へ低く傾斜し、南壁下と8cmの比高差がある。礫のやや多い地山を掘り込んでいて、床面の一部には小礫が表れている。掘り方は見られない。

壁溝 カマド下を除いて幅15～24cm、床面からの深さ5cm前後の壁溝が全周している。

柱穴 四支柱穴(P1～4)がある。柱穴は住居プランの歪みに沿わず、南北に長い長方形を作る配置にあり、P4が西壁下より約1.5m離れている。

貯蔵穴 2基の柱穴状の窪みが北東隅付近にもあり、位置より貯蔵穴と考えた。貯蔵穴1はカマド東脇にあり、貯蔵穴2は2基の重複と思われる。住居廃絶時に開口していたか判断する資料に欠く。

カマド 北壁中央やや南寄りにある。燃烧部は壁際から住居内にかけて南北に長く、火床は住居床面より5cm窪んでいる。両袖とも基部付近が残存している。煙道は確認できない。

その他 21号住居に後出している。

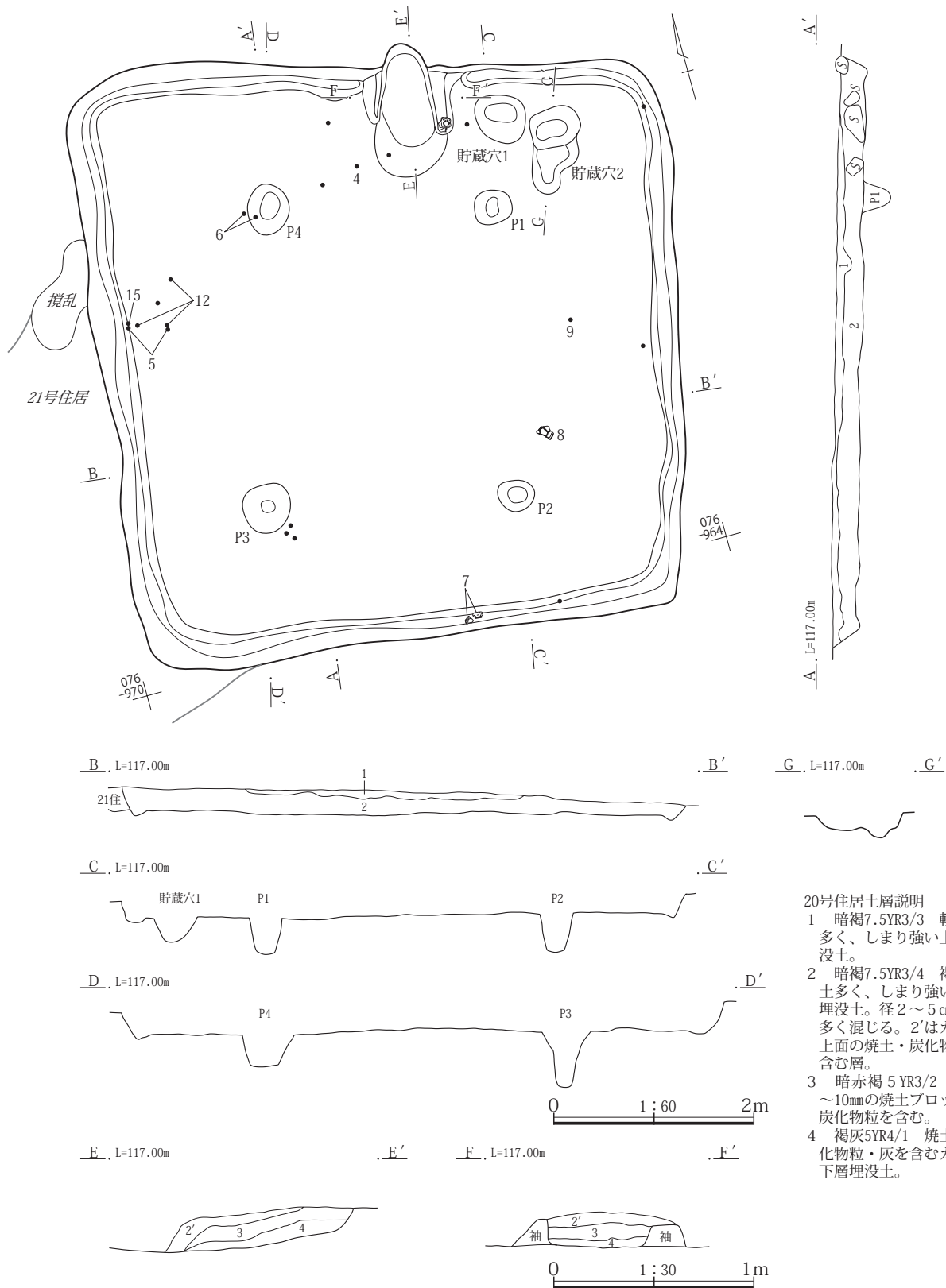
遺物 出土遺物は比較的豊富で住居壁寄りに散在する土器15点を図示した。床直上出土土器は少なく、土師器鉢8のみであるが、鉢5・7は壁に密着するような状態の出土で、P4周辺出土の鉢6を含め本住居に確実に伴う遺物と確認できる。

図示した以外に土器片556点が出土している。98%近くが土師器で、その中の16%が杯類である。

所見 杯類はやや大型化・平底化する傾向が表れる時期の所産で、7世紀後半の住居と想定できる。

20号住居ピット一覧 (cm)

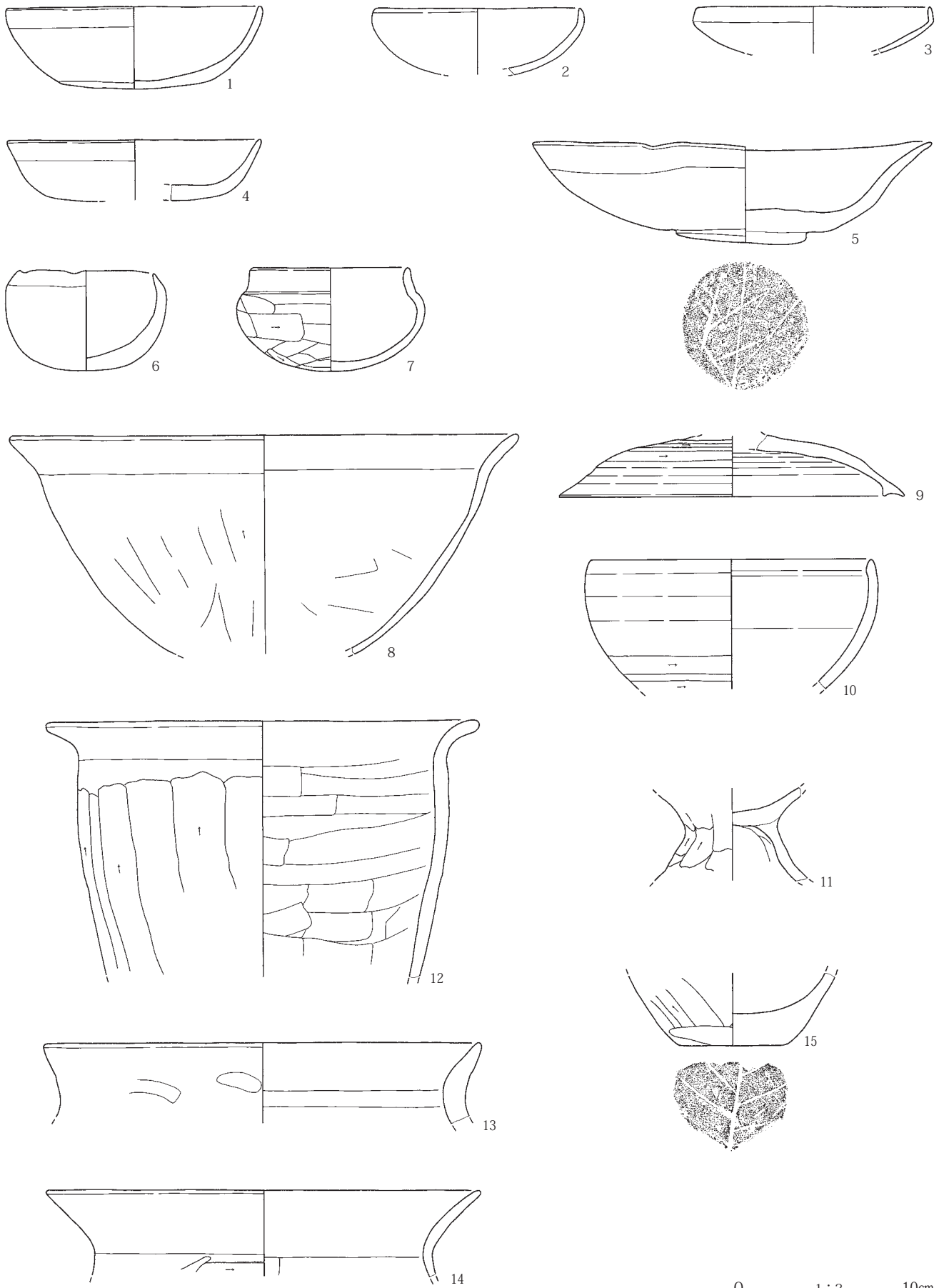
No.	長径×短径×深さ	種類・備考
1	38×33×37	主柱穴
2	37×33×39	主柱穴
3	52×49×57	主柱穴
4	50×42×33	主柱穴



20号住居土層説明

- 1 暗褐7.5YR3/3 軽石粒多く、しまり強い上層埋没土。
- 2 暗褐7.5YR3/4 褐色粘土多く、しまり強い下層埋没土。径2~5cmの礫多く混じる。2'はカマド上面の焼土・炭化物粒を含む層。
- 3 暗赤褐5YR3/2 径5~10mmの焼土ブロック・炭化物粒を含む。
- 4 褐灰5YR4/1 焼土・炭化物粒・灰を含むカマド下層埋没土。

第48図 20号住居



第49図 20号住居出土遺物

21号住居

(第50・51図 PL.10-①~③、49 遺物観察表232頁)

東3区西寄りの、古墳時代後期住居が集中する一画の中央付近にある。

位置 075~079、-968~972グリッドにある。

規模形状 南北軸長3.61m、残存する東西軸長3.40mで柱穴配置から正方形を呈すと思われる。

埋没土・壁 1層土は別遺構埋没土の可能性はある。他はほぼ単層で埋没過程は明瞭にできない。北壁際に多量の礫が見られるが、壁直下では若干浮いている状態で、埋没当初に投げ込まれたと推定できる。残存壁高は20cm前後でほぼ一定である。

方位 N-22°W(長軸) 面積 残存(9.63)m²

床面 掘り方面をそのまま踏み固めたほぼ水平な床面で、地山礫が多数見られる。北西隅に礎盤石状の礫があるが、人為的に置かれたものか判断できなかった。

ピット 四支柱穴配置と考えられる3本のピット(P1~3)を確認した。しかしP3は深度に欠き明瞭な施設ではなく、A断面北側に表れる1層土がこのピット埋没

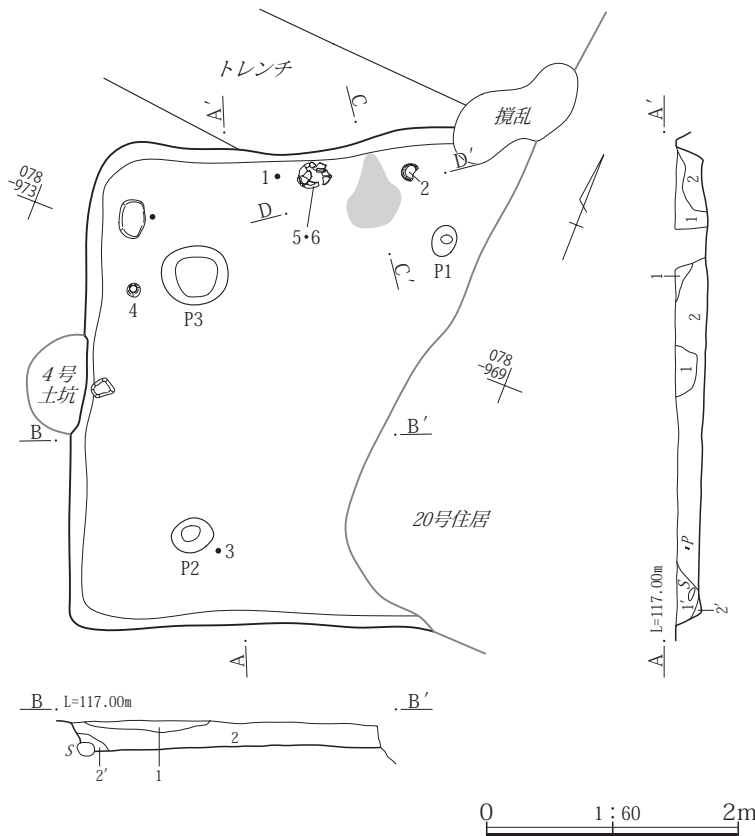
土となる可能性があり、後出する施設とも考えられる。
 カマド 北壁中央やや東寄りに壁直下に焼土が集中して見られ、ここにカマド燃焼部があったと思われる。火床と想定される部分は住居床と同じ高さであり、明瞭な袖部は残存していない。煙道などの壁外への掘り込みは見られないが、壁際はトレンチによって高さ15cm分が削られており、浅い煙道が存在した可能性がある。壁際はカマド上面まで礫が投げ込まれている。

その他 20号住居・4号土坑に前出している。壁溝・貯蔵穴等の施設は確認できない。

遺物 土器6点を図示した。北壁側の礫内に遺物が混入している。礫と共に投げ込まれた可能性のある遺物だが、床直上出土土器が豊富で土師器杯3以外が該当する。土師器甕5・6はカマド脇にあったと想定できる。

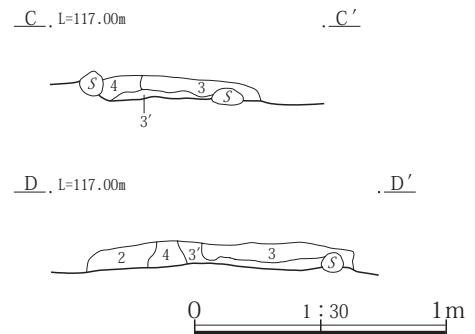
図示した以外に土器片90点が出土している。すべて土師器で須恵器の出土はない。

所見 土師器杯類は大振り of 模倣杯で、甕は長胴化が見られる時期の所産で、6世紀後半の住居と想定できる。確実な古墳時代後期の住居としては小型の遺構である。



21号住居ピット一覧 (cm)

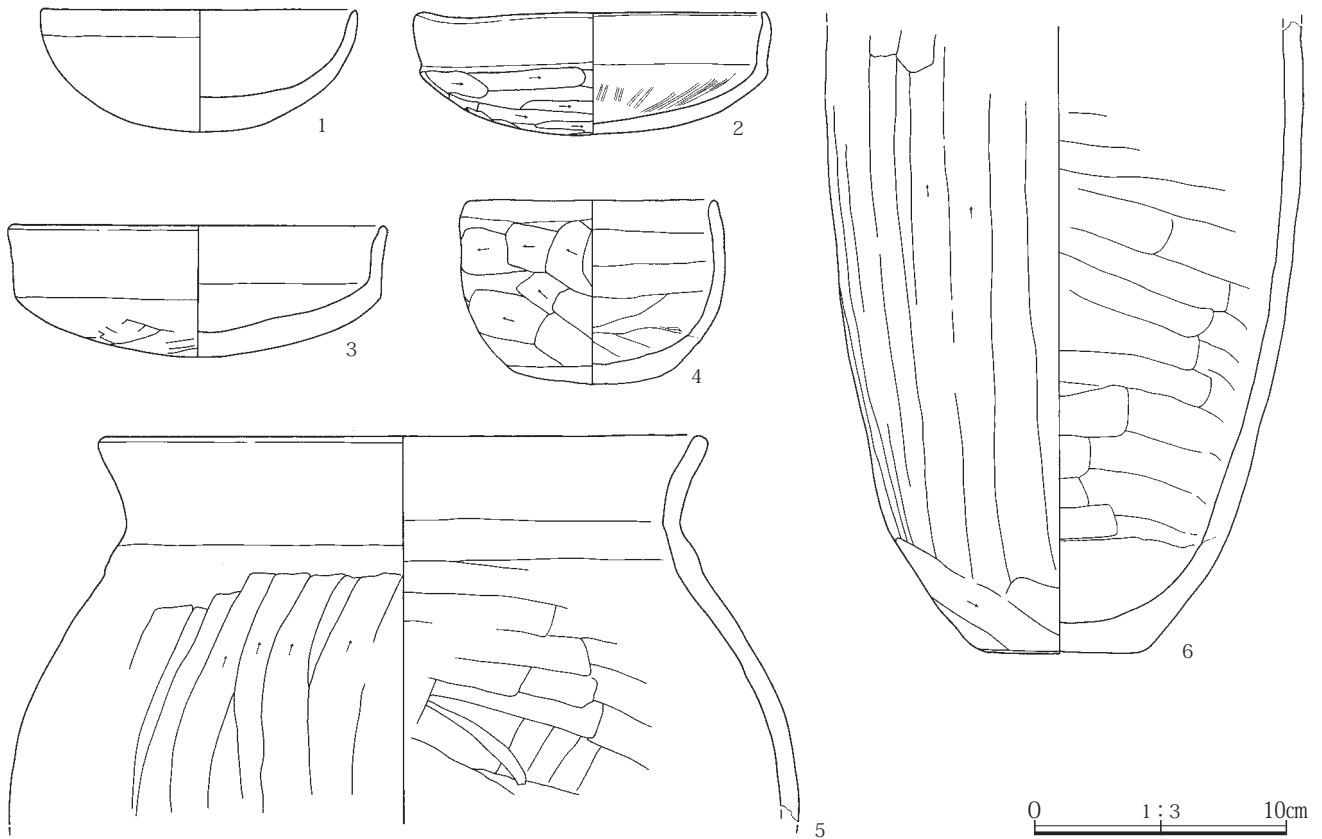
No.	長径×短径×深さ	種類・備考
1	25×19×23	主柱穴
2	32×28×27	主柱穴
3	53×50×5	主柱穴



21号住居土層説明

- 1 黒褐7.5YR3/1 少量の焼土・炭化物粒を含む。土層に不規則に堆積する粘性土。
- 2 黒褐7.5YR3/2 径2~5mmの焼土粒・炭化物粒・軽石を含む下層埋没土。2'は軽石・砂粒を含む壁際埋没土。
- 3 暗赤褐5YR3/2 径3~5mmの焼土ブロック・炭化材を含むカマド上層部分。3'は焼土粒・炭化物粒・灰を含む。
- 4 赤褐5YR4/6 焼土粒・軽石を含むややしまり欠く層。カマド袖部に相当すると思われるが不明瞭。

第50図 21号住居



第51図 21号住居出土遺物

22号住居

(第52図 PL.10-④ 遺物観察表233頁)

東3区西寄りの9世紀代の住居の多い一画にある。調査区境に接し、遺構の大部分は調査区域外となり、後出する5号住居や攪乱のため残存する一部のみの確認である。西側の12号住居確認範囲とは攪乱を挟んで約3m離れている。

位置 089・090、-984～986グリッドにある。

規模形状 調査区境・重複住居・攪乱に囲まれ、調査できた範囲は南壁1.31m部分と床面南北方向1.36m部分のみで形状は明らかにできない。唯一一部が残存する南壁は比較的直線的である。

埋没土・壁 水平に近い堆積が確認でき、二次的な床面があった可能性がある。壁高は20cm前後である。

方位 N-2°W

面積 残存(1.53)m²

床面 掘り方面をそのまま踏み固めたほぼ水平な床面である。

ピット 径23×18cm、床面からの深さ24cmのピット(P1)を確認した。深度には富むが柱穴としては底面が狭い。住居廃絶時には開口していたようだ。

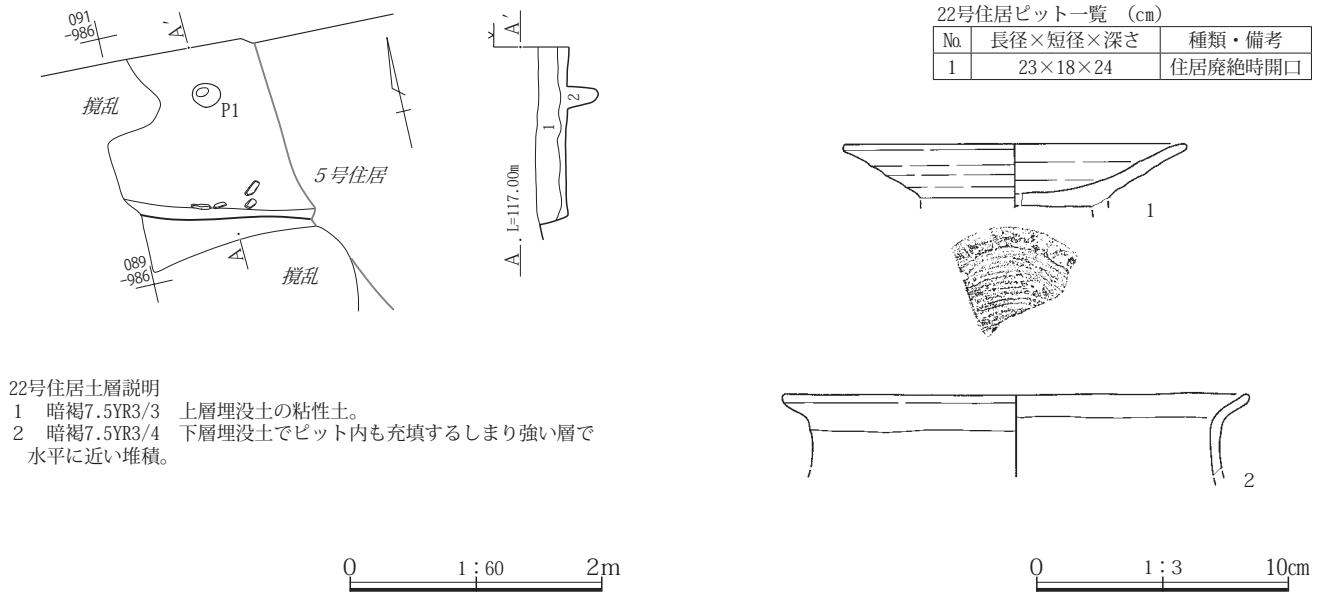
その他 5号住居に前出している。カマド・壁溝等の施設は確認できない。

遺物 図示できた土器は2点のみで、いずれも埋没土内の出土で確実に本住居に伴うと認定できる土器ではない。他に南壁際床直上から菰編石が4点まとまって出土している。石材は雲母石英片岩3点、砂岩1点であった。

図示した以外に土器片100点が出土している。9割が土師器で、杯類が多く49点含まれていた。

所見 出土遺物は口縁端部が外反しない底径の広い須恵器皿とコの字状口縁土師器甕で、9世紀前半の住居と想定できる。攪乱を隔てた西側にある不明瞭な12号住居と床面の高さや埋没土が近似し、同一住居となる可能性を想定したが、軸方向や遺物時期が異なり、別住居とするのが妥当と考えた。

第三章 調査の内容



22号住居土層説明

- 1 暗褐色7.5YR3/3 上層埋没土の粘性土。
 2 暗褐色7.5YR3/4 下層埋没土でピット内も充填するしまり強い層で水平に近い堆積。

第52図 22号住居と出土遺物

23号住居

(第53・54図 PL.10-⑤～⑧、49 遺物観察表233頁)

東3区中央の住居群は北東側に住居の途切れる部分があり、ここに時期不詳の掘立柱建物群が見られる。本住居はこの空白部分に面し、重複する24・37号住居と軸方向を揃えるようにして並んでいる。

位置 079～083、-932～936グリッドにある。

規模形状 南北軸長3.87m、東西軸長3.38mの方形を呈している。南辺は北辺より40cm短い台形状に歪んでいる。各隅は丸みが少なく、各辺は直線的で整った形状になると想定される。

埋没土・壁 埋没土は単層で埋没過程は明瞭にできない。

方位 N-5° E (長軸) N-95° E (カマドA)

N-97° E (カマドB)

面積 復元[12.80]㎡

床面 緩やかに波打つような凹凸があり、10cm近い比高差を生じている。ほぼ全面に不規則な掘り方があり、一部で深度に富む部分や、ピット状に窪む部分がある。

カマド 2基のカマドがあり、東壁中央南寄りをカマドA、東壁北寄りをカマドBとした。

カマドAは燃焼部が壁際であり、火床周辺の床面が周辺床面より3cm前後盛り上がっている。袖や構築材が住居内に見られ、住居廃絶時に残存していたカマドである。煙道部は不明瞭である。

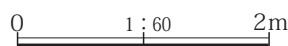
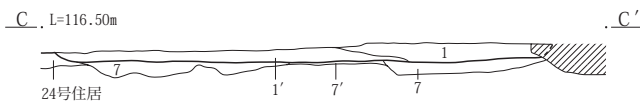
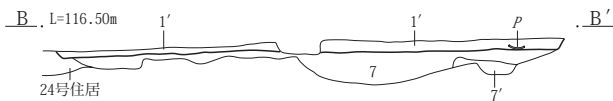
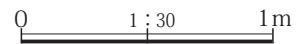
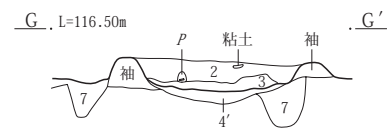
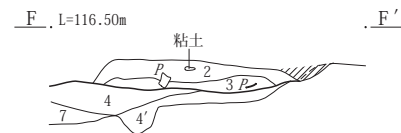
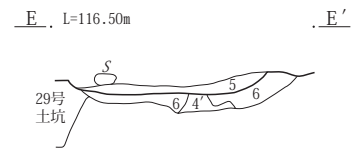
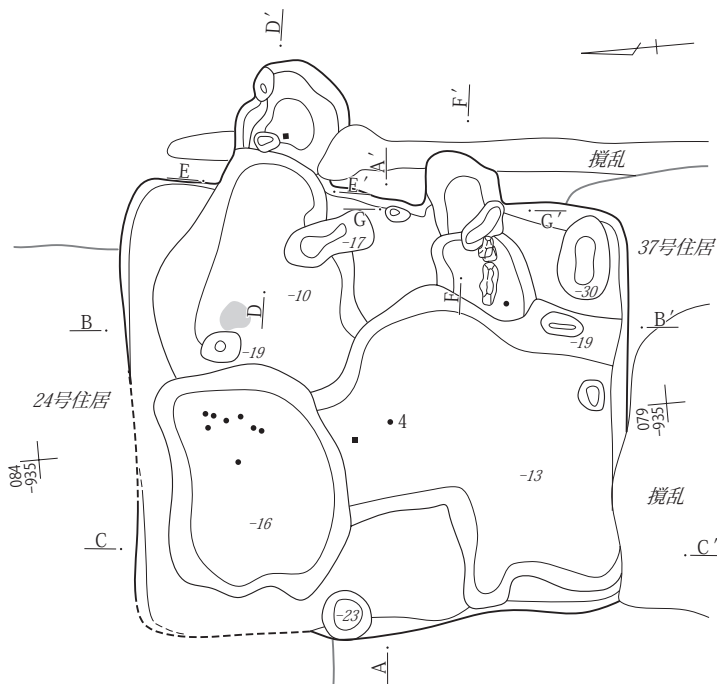
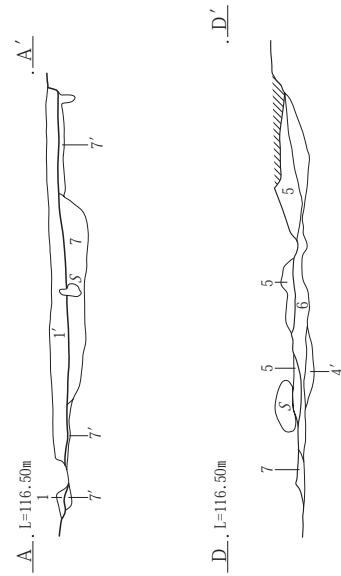
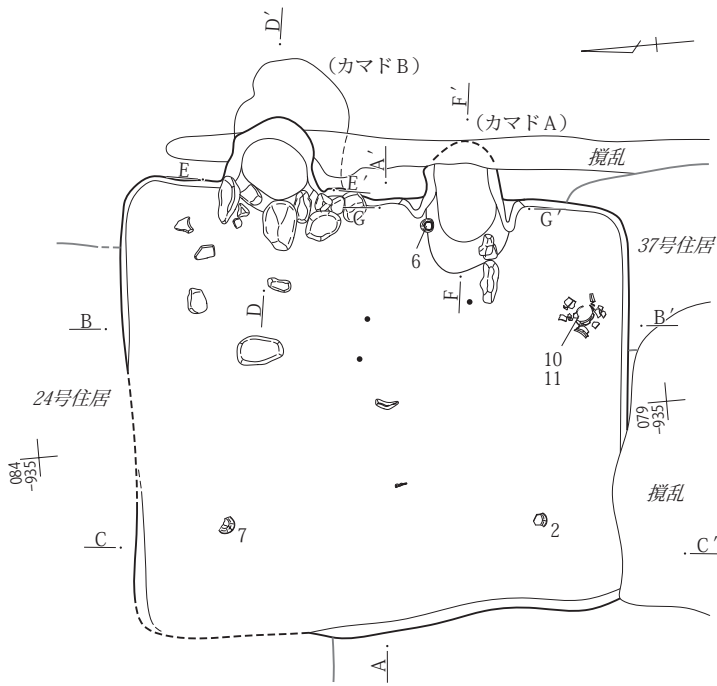
カマドBは燃焼部が壁外にあり、火床は住居床面より3cm前後窪んでいる。住居壁際は礫で燃焼部前面を塞ぐように並べられていて、カマドBは住居廃絶時に使われていなかったことが分かる。煙道部は不明瞭である。

その他 24・37号住居、4号竪穴状遺構、29号土坑に後出している。南東隅の掘り方に、長径67cm・短径43cm・床面からの深さ30cmの東西に長い楕円形の窪みを確認した。底面も比較的平坦で配置から貯蔵穴の可能性もある。また、南壁直下の窪みは配置より入り口ピットとなる可能性がある。カマドB前面約1mにある礫は礎盤石状の平坦な川原石で、上面は住居床面より4cm高い位置にある。壁溝・明確な柱穴等の施設は確認できない。

遺物 土器11点を図示した。本住居に確実に伴うのは須恵器椀で6はカマドA内、7は床直上、8が掘り方埋戻し土内の出土である。

図示した以外に土器片481点が出土している。この内1/4が須恵器であった。また、土師器のうち3割以上が杯類であった。

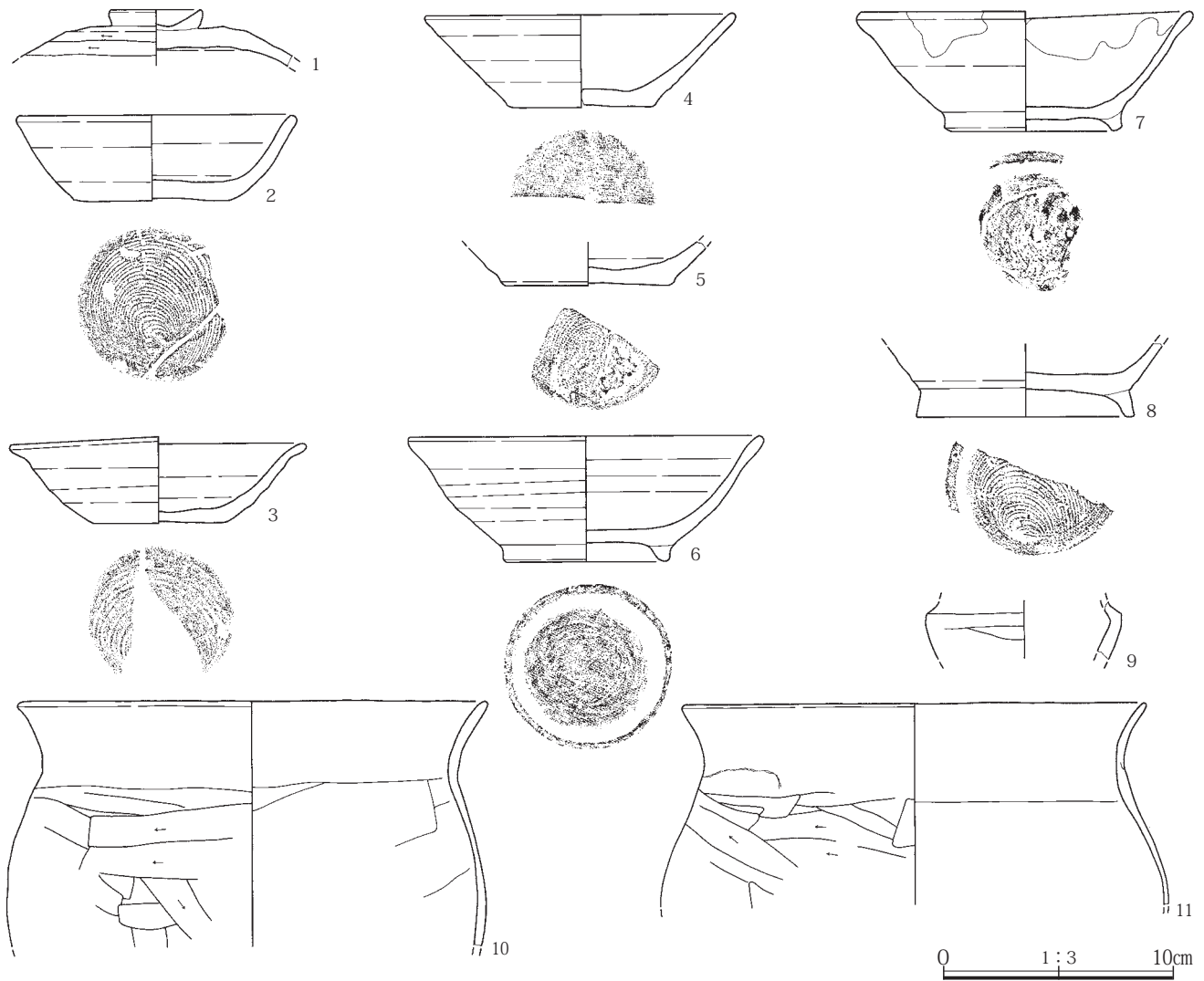
所見 杯類の口縁外反が弱い9世紀中頃の住居と想定できる。須恵器杯2や土師器甕10・11は時期的齟齬があり、混入品と考えられる。南側に隣接する37号住居は8世紀前半の遺構でこの住居から流れ込んだ可能性がある。



23号住居土層説明

- 1 褐7.5YR4/3 径1~2mmの褐色粘土ブロックを含む埋没土。1'は径2~5mmの焼土・炭化物粒を含む。
- 2 にぶい赤褐5YR4/4 焼土・炭化物粒を多く含むカマド上层埋没土。
- 3 暗赤褐5YR3/3 焼土・炭化物粒・灰を少量含むカマド下層埋没土。
- 4 灰褐5YR4/2 褐色粘土・焼土・炭化物粒を含むカマド掘り方埋戻し土。4'は褐色粘土主体で焼土・炭化物粒を散見する。
- 5 暗赤褐5YR3/3 焼土粒・炭化物粒・灰を含むカマドB下層埋没土。火床面は被熱により赤変硬化が見られる。
- 6 暗赤褐5YR3/6 カマド掘り方埋戻し土で炭化物粒・灰多く、焼土粒少ない。
- 7 明褐7.5YR5/6 径1~2mmの褐色粘土粒を多く含む掘り方埋戻し土。7'は褐色粘性土主体。

第53図 23号住居



第54図 23号住居出土遺物

24号住居

(第55図 PL.10-⑧、50 遺物観察表233頁)

23号住居の北西側に重複する住居である。

位置 081~086、-933~937グリッドにある。

規模形状 南北軸長4.28m、東西軸長3.94mの方形を呈す。北東・南西の隅が鋭角で、平行四辺形状に歪む可能性がある。残存部分では各辺に屈曲があるが、各隅の丸みが少ないため直線的で整った形状に見える。

埋没土・壁 不揃いな混入物の多い埋没土で、人為的な埋戻しの可能性がある。残存壁高は2~7cmで立ち上がり部分のみの確認である。

方位 N-5° E

面積 復元[16.94]㎡

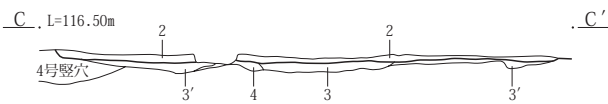
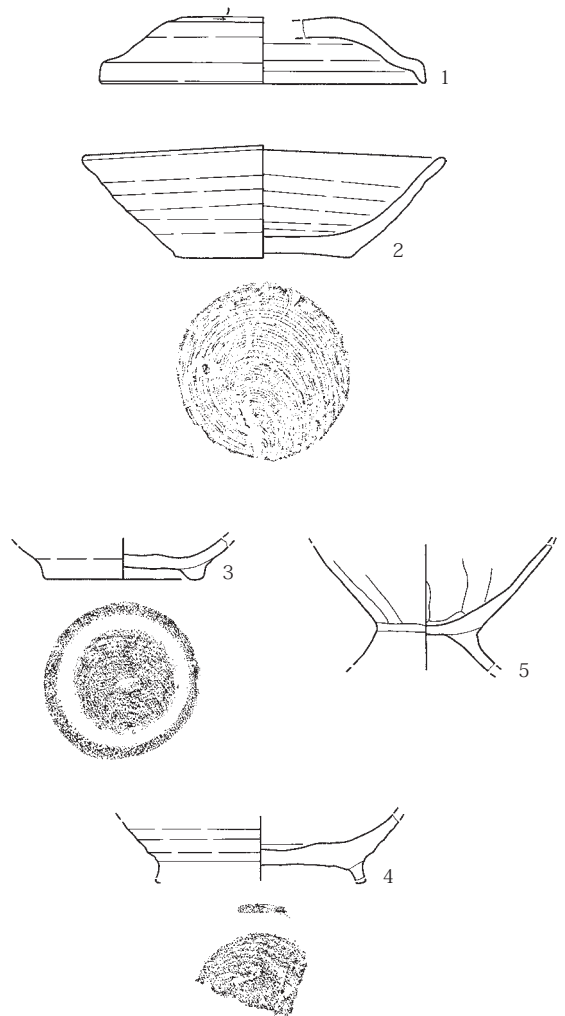
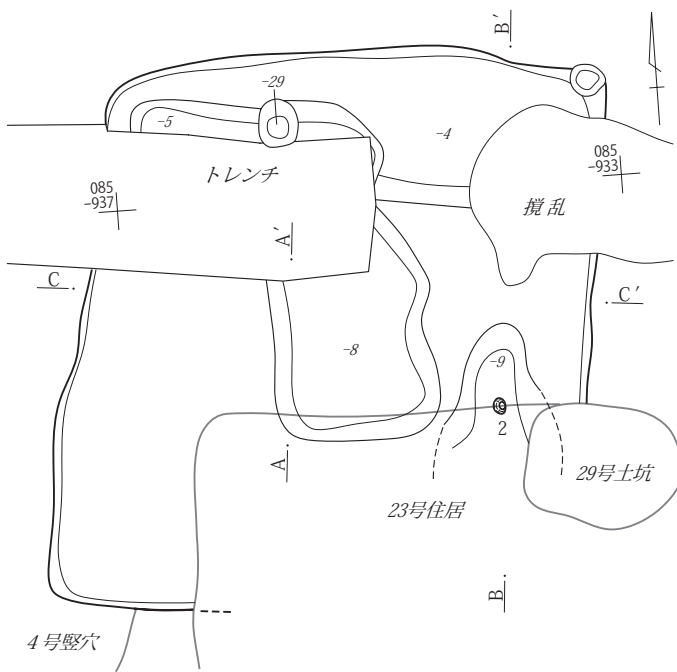
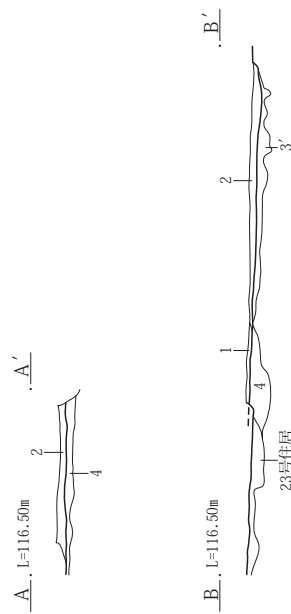
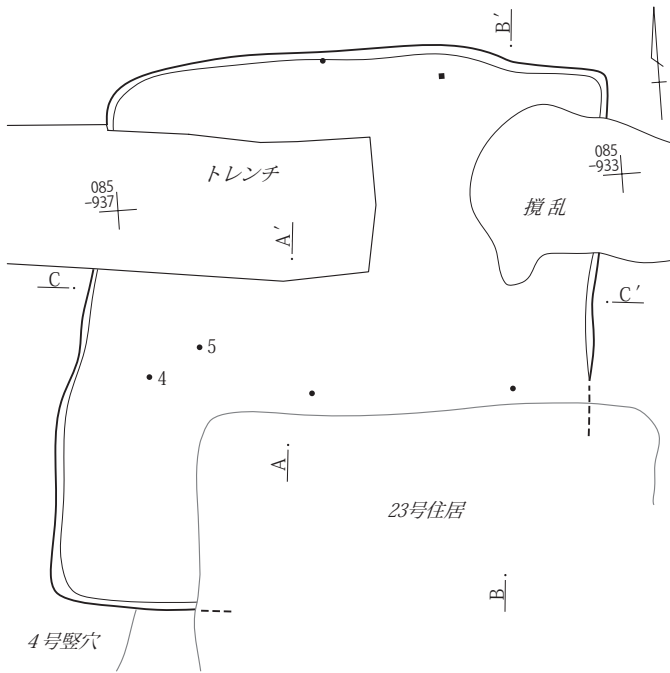
床面 凹凸の多い床面で全体は北東側へ低く傾斜し、南

西隅と10cmの比高差を生じている。不規則な掘り方があり、重複住居掘り方等と区別しにくい部分もあった。

その他 23号住居・29号土坑に前出し、4号竪穴状遺構に後出している。柱穴等の施設は確認できない。カマドは東壁南寄りにあったものが、23号住居や29号土坑に壊されたと想定される。

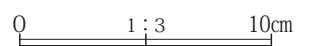
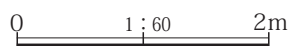
遺物 土器5点を図示した。須恵器椀4、土師器台付甕5は床直上、須恵器杯2は掘り方内の出土で本住居の時期推定に有用な資料と考える。

図示した以外に土器片140点が出土し、この内約3割が須恵器であった。また、灰釉陶器片の混入も見られた。所見 杯類の底面は広めで口縁外反がない、9世紀中頃の住居と想定できる。



24号住居土層説明

- 1 暗褐7.5YR3/3 径2~5mmの焼土・炭化物粒を含む上層埋没土。
- 2 にぶい褐7.5YR5/4 褐色粘土粒を含む下層埋没土。
- 3 褐7.5YR4/6 褐色粘土主体の掘り方埋戻し土。3'は径1~2mmの褐色粘土ブロックを多く含む。
- 4 灰褐7.5YR4/2 地山シルト質土に褐色粘土を少量含む。



第55図 24号住居と出土遺物

25号住居

(第56・57図 PL.11-①~④、50 遺物観察表233・234頁)

東3区中央住居群北東側の住居の途切れる部分にあり、掘立柱建物群に近接している。北側は調査区境に達し、全容を把握できていない。

位置 087~089、-929~932グリッドにある。

規模形状 東西軸長3.34m、南北残存軸長2.27mの方形を呈している。各隅は丸みが強く不整な形状である。

埋没土・壁 粘土ブロックの多い層(2・2'層)が床直上に不均等に見られ、人為的な埋戻しの可能性がある。

壁の立ち上がりは緩やかである。

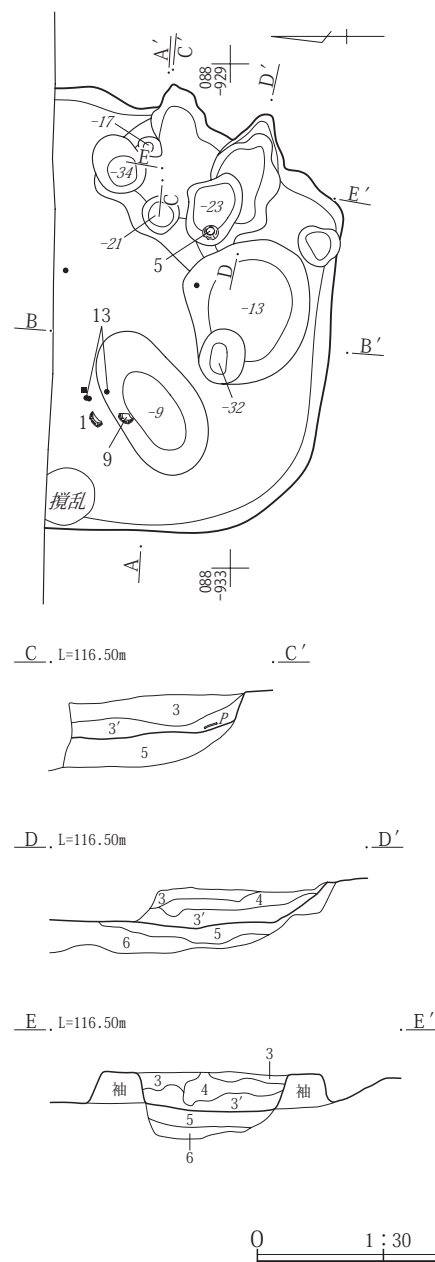
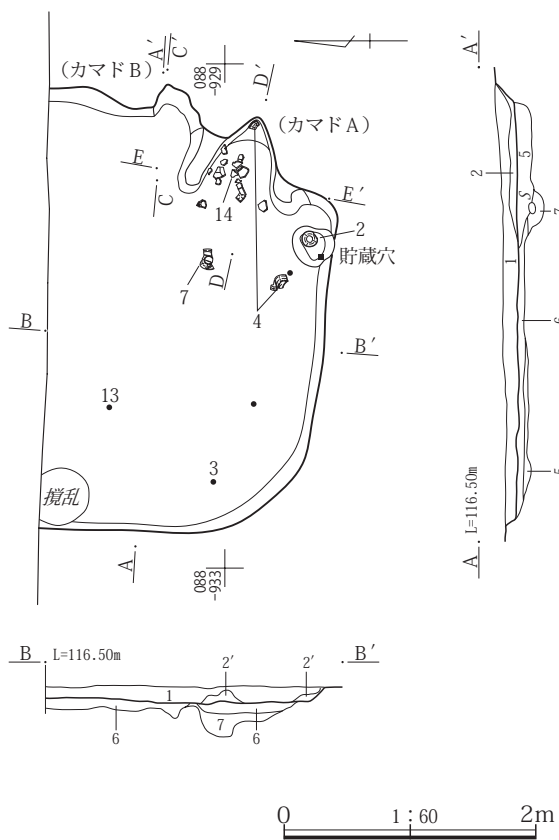
方位 N-88° W(長軸) N-98° E (カマドA)

N-99° E (カマドB) 面積 残存(5.87)m²

床面 細かな凹凸の多い床面で、最大3cmの比高差を生じている。ほぼ全体に掘り方があり、一部で土坑状・ピット状の窪みとなっている。

カマド 東壁南寄りにある。2基のカマドがあり南隅をカマドA、北側をカマドBとした。

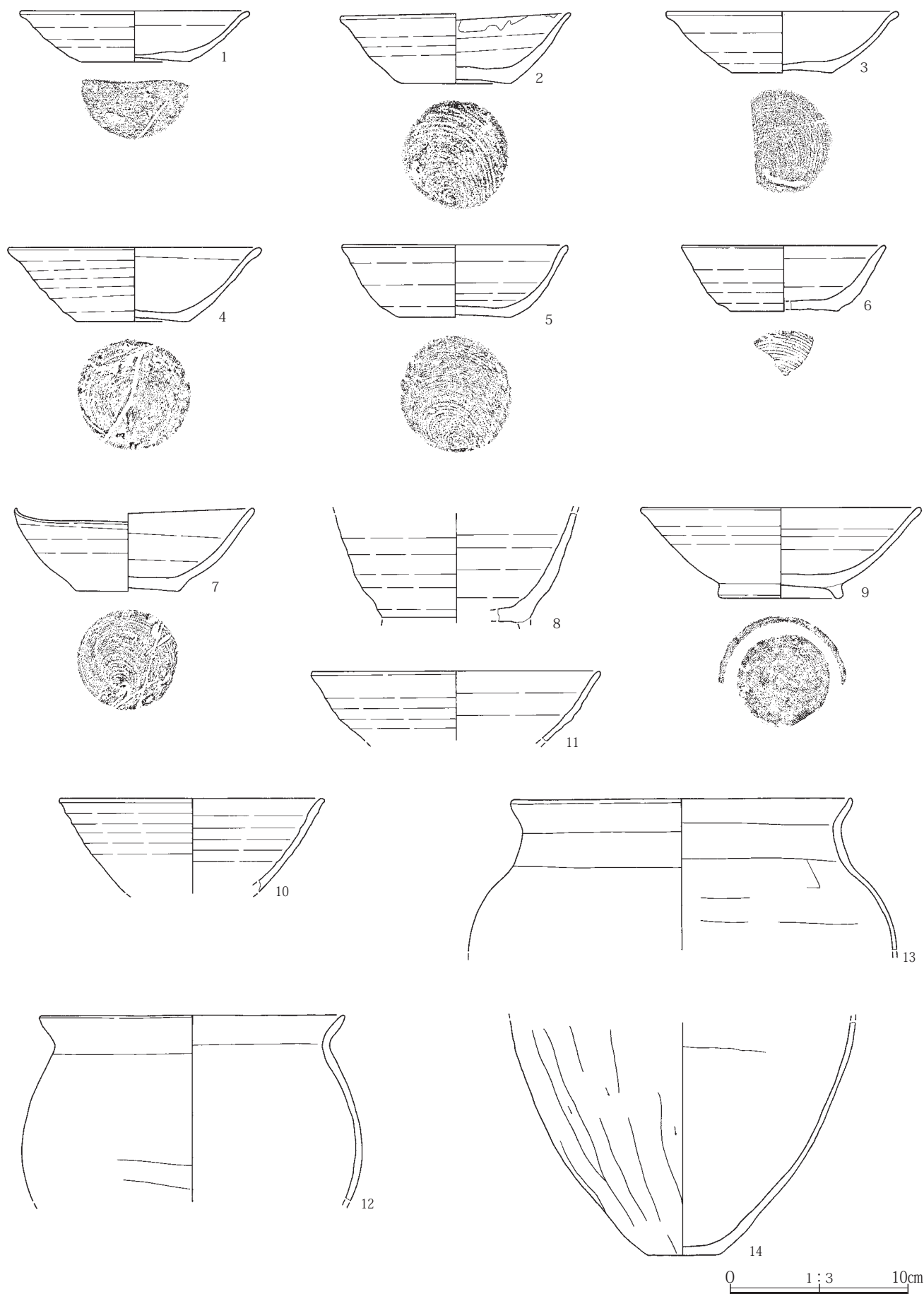
カマドAの燃燒部は壁際であり、火床は住居床面より2cmほど窪んでいる。煙道は確認できない。



25号住居土層説明

- 1 褐7.5YR4/3 径2~5mmの焼土粒・炭化物粒・白色軽石等を含む。
- 2 褐7.5YR4/6 径2~5mmの褐色粘土ブロック多く、焼土粒・炭化物粒を含む壁際埋没土。2'は径1~5cmの褐色粘土ブロックを含む。
- 3 にぶい赤褐5YR4/3 焼土粒・炭化物粒・白色軽石を含む。3'は火床直上埋没土で炭化物粒・灰の混入やや多い。
- 4 赤褐2.5YR4/6 径2~10mmの焼土ブロック・炭化物粒を含む崩落天井の一部か。
- 5 暗赤褐5YR3/2 焼土粒・炭化物粒を含むカマド掘り方埋戻し土。
- 6 褐7.5YR4/3 焼土粒・褐色粘土ブロックを少量含む掘り方埋戻し土。
- 7 暗褐7.5YR3/4 褐色粘土粒・軽石を含む掘り方下層埋戻し土。

第56図 25号住居



第57图 25号住居出土遺物

第三章 調査の内容

カマドBは北隣に重複し、南袖が残存していればカマドA北袖と共有する位置である。燃烧部は壁際から住居内にかけてにあり、火床は住居床面と同レベルにある。

その他 壁溝・柱穴等の施設は確認できない。

遺物 出土遺物は比較的豊富で、土器14点を図示した。須恵器杯2が貯蔵穴内、土師器甕14がカマド内、須恵器杯7がカマド前の床直上での出土で、本住居に確実に伴う土器である。須恵器杯1・5、椀9・11、土師器甕13が掘り方内の出土で床下遺物の豊富さが目立つ。

図示した以外に土器片337点が出土している。この内約15%が須恵器で、杯類がほとんどを占めていた。

所見 羽釜を伴っておらず、杯類底面は広めで口縁の外反も弱い。9世紀中頃の住居と想定できる。

26号住居

(第58図 PL.11-⑤・⑥、50 遺物観察表234頁)

東3区中央の掘立柱建物群内にある。住居の途切れる一画にあるが、カマドのある東辺一部のみ確認で他の3辺を確認できない不明瞭な遺構である。床面を失い、掘り方面まで達している住居の可能性はある。

位置 079~081、-921~924グリッドにある。

規模形状 東辺で長さ2.26mの残存壁が確認できるのみで、規模・形状や面積を推定する資料を持たない。

埋没土・壁・床 明瞭な床面はなく、住居確認段階で掘り方面まで達していると思われる。

方位 N-16° E(長軸) N-75° E(カマド)

カマド 東壁側にある。火床が残存するようで、住居床面より低くなっている。袖・煙道は確認できない。

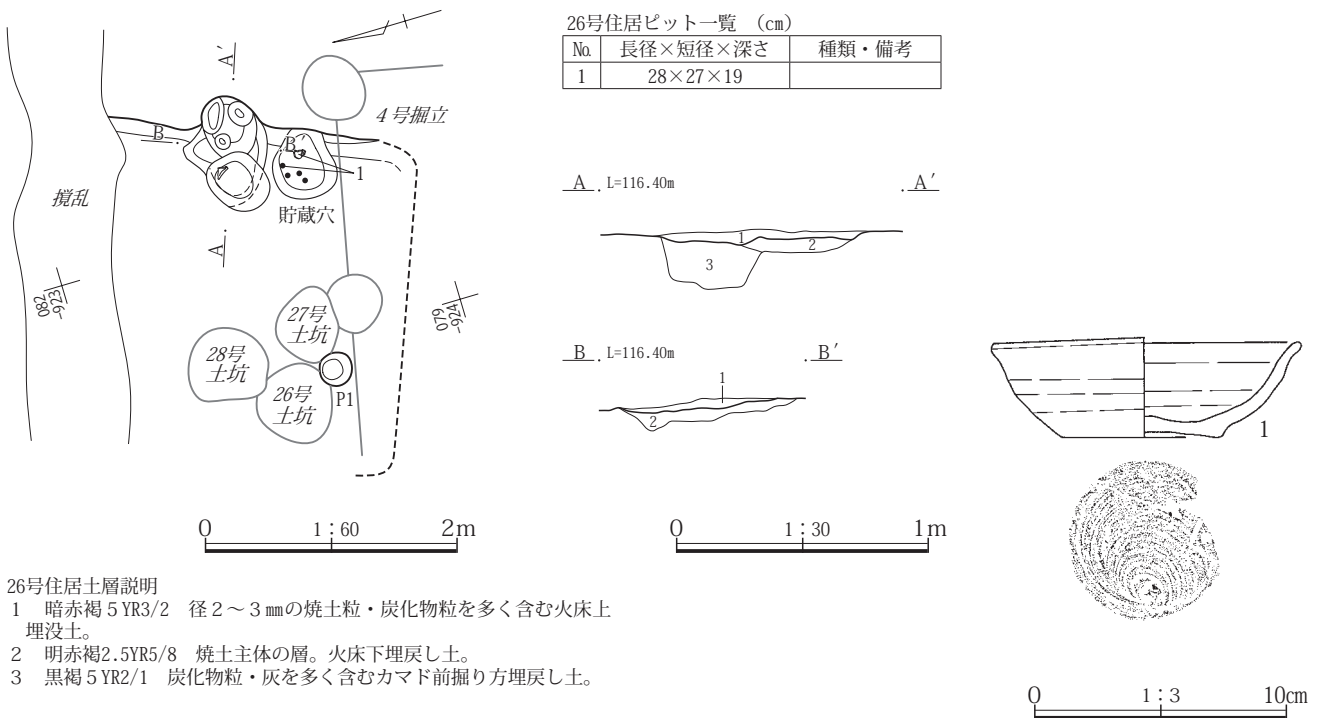
貯蔵穴 カマド南側に隣接して掘り方下面から深さ11cmの楕円形の窪みがあり、遺物の出土も見られることから貯蔵穴を想定した。この場合、カマド南袖を据える空間がほとんど確保できない。

その他 4号掘立柱建物や26~28号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。貯蔵穴西側に径28cmの円形小ピットがあり、P1とした。柱穴となる可能性がある。

遺物 図示できた土器は須恵器杯1点のみである。貯蔵穴内出土の本住居に伴うと認定できる土器である。

図示した以外の遺物はわずかで、土器片7点が出土したのみである。

所見 杯1は底径が口径の約半分で浅めで端部の外反の弱い口縁である。1点の土器からの想定だが、9世紀前半の住居と考える。



第58図 26号住居と出土遺物

27号住居

(第59～62図 PL.11-⑦・⑧、12-①～③、50・51
遺物観察表234・235頁)

西調査区には古墳時代前期の住居や遺物集中出土地点
が点在しているが、互いに離れた位置にある。本住居は
調査区境に接し電柱等の施設があるうえ、西側は粘土採
掘坑に大きく壊され、全容を把握できていない。

位置 084～091、-141～148グリッドにある。

規模形状 南北軸長5.55m、東西推定軸長5.36mの方形
を呈すと思われる。残存する各隅は丸みが少なく、各辺

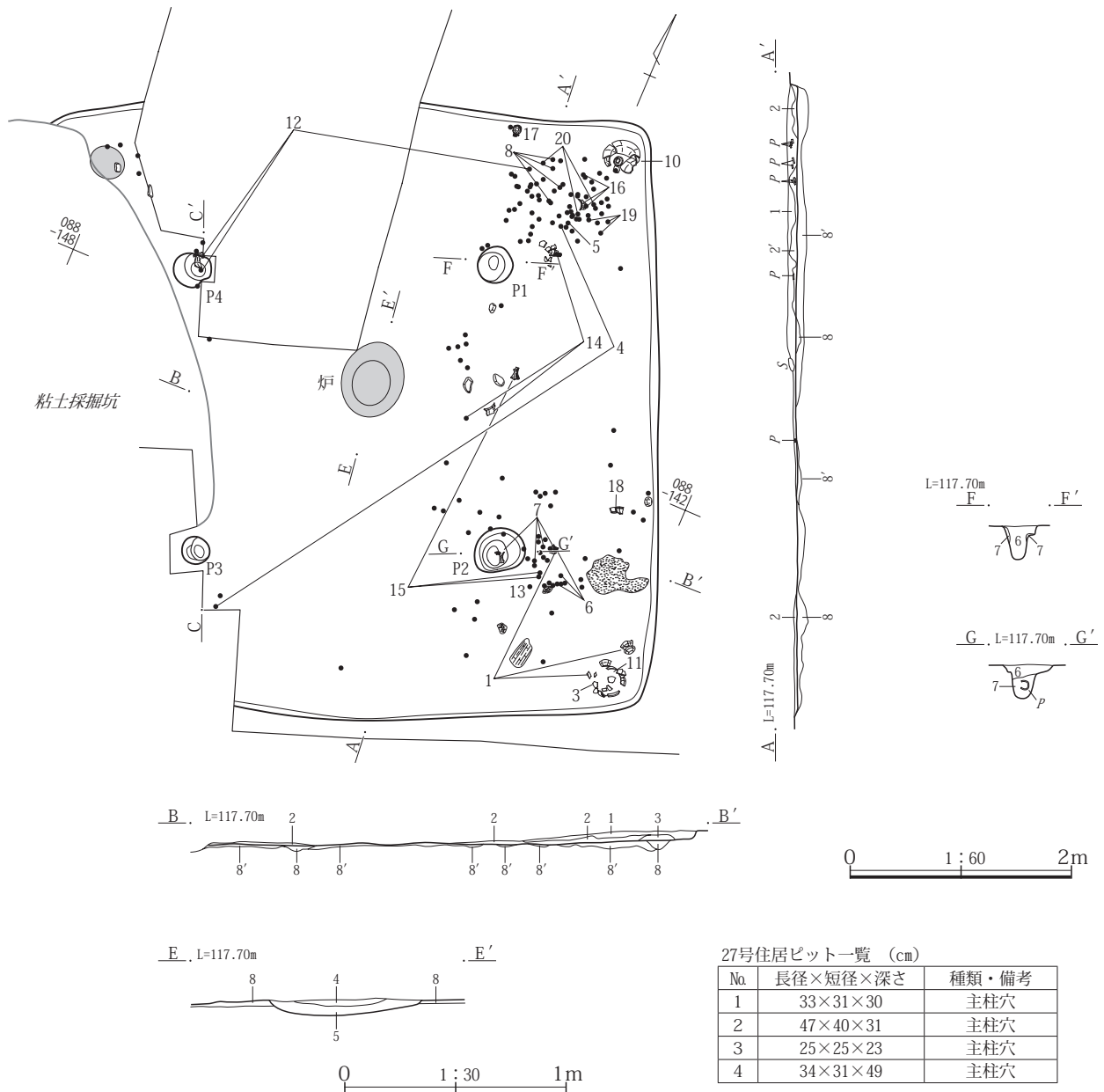
は直線的で整った形状である。

埋没土・壁 深度に乏しい住居であるが、床面直上に不
規則な粘性土の堆積があり、人為的に埋め戻された可能
性がある。

方位 N-25° W 面積 推定30㎡前後

床面 緩やかな凹凸があり、南東隅付近のみ3cm前後高
くなる傾向があるが、比較的水平的な床面である。壁際を
中心に不規則な掘り方がある。

柱穴 ほぼ正方形の配置に穿たれた四支柱穴を確認し
た。住居規模に比して小型で、深度もやや乏しかった。



第59図 27号住居(1)

第三章 調査の内容

西側のP3・4は掘り方調査時に確認したもので、P1・2に比べ締まりの強い埋没土であった。

貯蔵穴 南東隅に径57×54cm・深さ30cmの不整形形を呈した窪みを確認した。底面はやや不整で狭いが、遺物を伴い、配置から貯蔵穴とした。掘り方調査時の確認で、住居廃絶時には埋戻されていたと思われる。

炉 住居中央やや北寄りの被熱面で、あまり明瞭でないが配置から炉と確認した。径70×56cm・深さ7cmの楕円形の掘り込み上に粘性土を埋め戻して火床面としている。枕石の痕跡は認められない。

その他 1号粘土採掘坑に前出している。壁溝等は確認できない。

遺物 浅い住居であるが床面および貯蔵穴内から甕類を主体に多量の土器が見られた。特に北東隅、南東隅周辺の床直上での出土が多く、土師器20点を図示した。炉から離れた位置で出土する煮沸具の多さが目立つ。北東隅周辺に高杯5、小型甕8、壺10、台付甕16・17・19・20がある。南東隅周辺には埴1、高杯3、小型甕6・7、台付甕11があり、貯蔵穴から甕9、台付甕13がある。

図示した以外に土師器片511点が出土している。

所見 炭化材の出土があり、焼失住居の可能性がある。S字口縁甕にはいずれもハケ目が見られず、高杯脚柱部は膨らみが強い。5世紀前半の住居と想定できる。



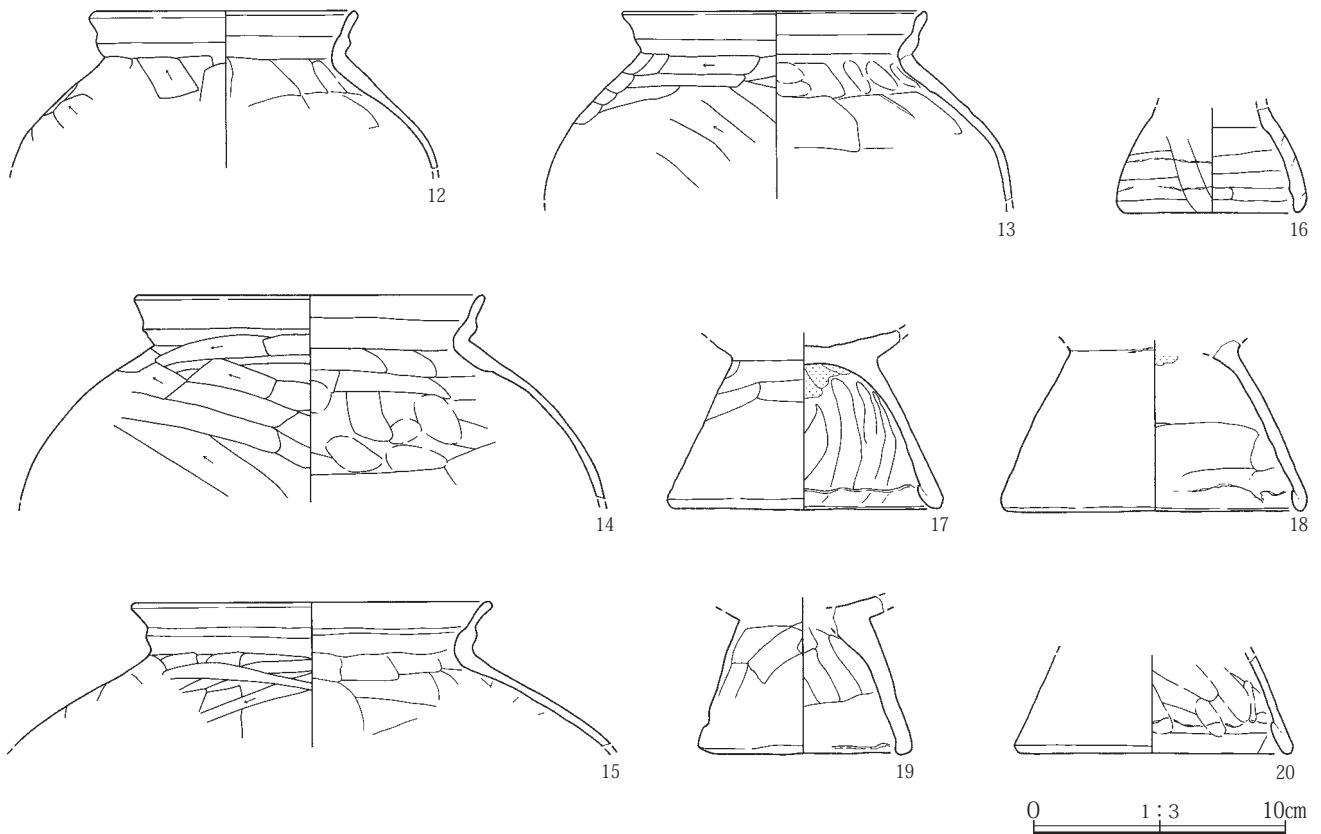
27号住居土層説明

- 1 暗褐7.5YR3/3 ややしまりある粘性土の上層埋没土。
- 2 灰褐7.5YR4/2 ややしまりある粘性土。汚れた粘土ブロックを含む。2'部分ではブロック状に堆積している。
- 3 明褐灰7.5YR7/1 白色粘土ブロック。
- 4 褐7.5YR4/3 焼土を含む。灰の汚れ状のシミ痕が少し残る。あまり明確でないが炉跡と考えられる。
- 5 褐7.5YR4/4 粘性のある土。汚れた粘土を主体とする炉下層土。
- 6 暗褐7.5YR3/3 しまり弱い粘性土で柱穴等の埋没土。6'はしまり強い。6''は6層に似るがやや明るい色調。
- 7 褐7.5YR 4/3 しまり弱い粘性土。粘土ブロックを含む。柱穴の下層や壁際の埋戻し土。
- 8 暗褐7.5YR3/3 ややしまりある粘性土の掘り方埋戻し土。粘土ブロックを含む。8'は粘性強く、汚れた粘土を主体とする。

第60図 27号住居(2)



第61图 27号住居出土遺物(1)



第62図 27号住居出土遺物(2)

28号住居

(第63図 PL.12-④~⑥、51 遺物観察表235頁)

東3区中央住居群の東隅にある。

位置 073~076、-914~917グリッドにある。

規模形状 南北軸長3.24m、東西軸長2.47mの方形を呈している。各隅は比較的丸みが少なく、カマド南脇を除く各辺は直線的で、整った形状である。

埋没土・壁 東側・北側から埋没する自然堆積と思われる。壁高は10cmに満たないが、上面からの断面には20cm前後の壁高が確認できる。

方位 N-2°W(長軸) N-86°E(カマド)

面積 7.98㎡

床面 南壁下がやや高く、住居中央と6cm前後の比高差がある。全体に細かな凹凸が多く、中央付近がわずかに低くなる傾向がある。掘り方は認められない。

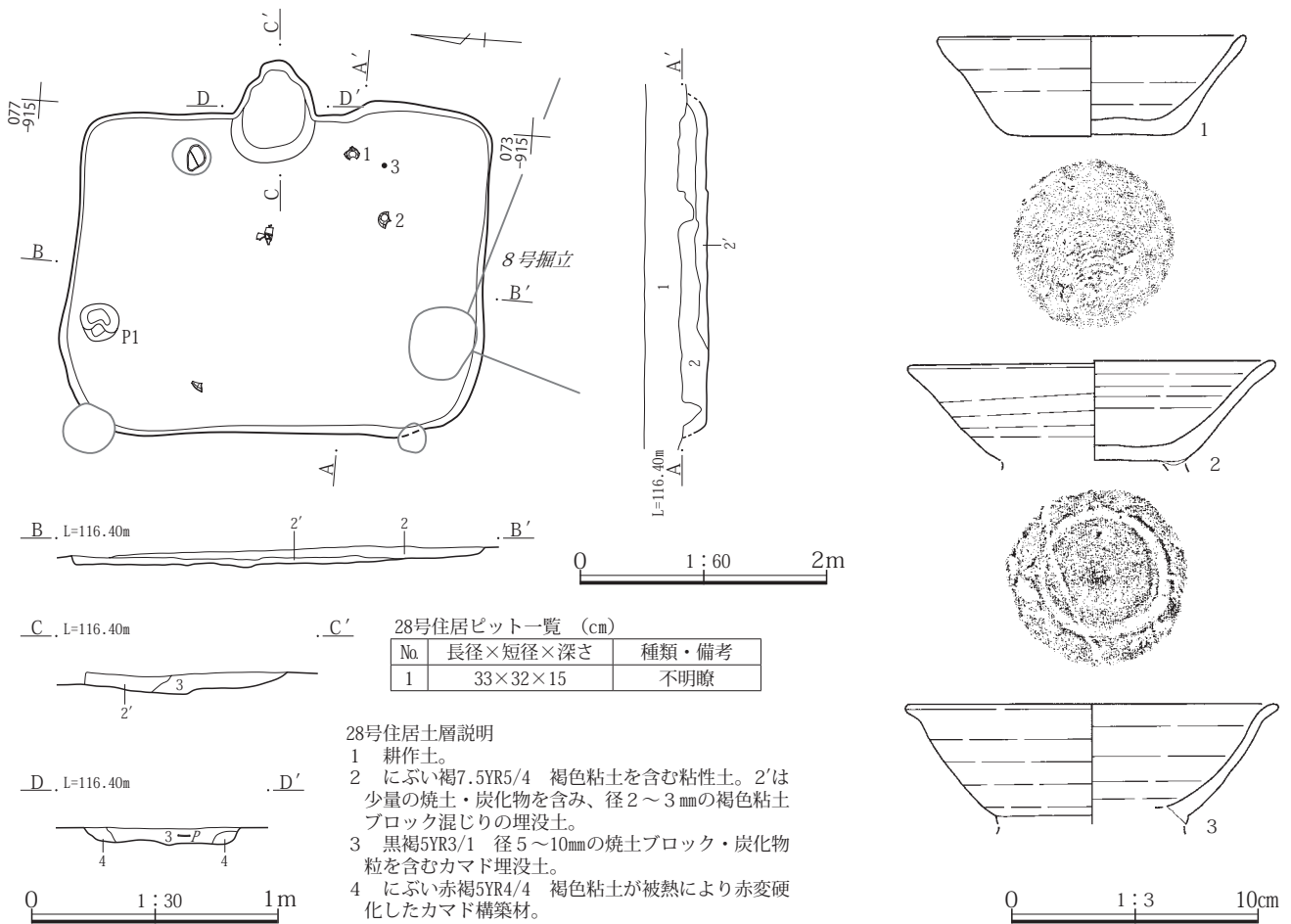
カマド 東壁中央やや北寄りにある。燃烧部は壁際があり、火床は住居床面より2cm窪んでいた。煙道部や袖部は残存しない。

その他 8号掘立柱建物P4に前出している。南西側に隣接する45号住居とは10cmしか距離がなく、同時存在は不可能である。壁溝や支柱穴は確認できない。北壁下の円形の窪みをP1としたが、確実に本住居に伴う施設か不明瞭である。

遺物 南東隅付近で出土した3点を図示した。いずれも床直上で出土した須恵器杯類で、本住居に確実に伴う資料と考えた。

図示した以外の遺物もやや少なく土器片90点の出土である。この内9割近くが土師器で、その中の約8割を壺甕類が占めている。

所見 出土遺物は底径が口径の半分程度で口縁の外反の弱い須恵器杯類でやや高さがあり、9世紀中頃の住居と想定できる。



第63図 28号住居と出土遺物

29号住居

(第64図 PL.12-⑦・⑧、51 遺物観察表235頁)

東3区中央住居群の東隅で、28号住居の北東側1.4mに位置している。

位置 077～080、-911～914グリッドにある。

規模形状 南北軸長2.59m、東西軸長2.27mの方形を呈している。南辺は北辺より50cm短い台形状に歪んでいる。壁高は20cmで、立ち上がりは緩やかである。

埋没土・壁 北壁際に三角堆積と呼ばれる壁際からの堆積が確認でき自然堆積が想定される。

方位 N-19° E(長軸) N-98° E(カマド)

面積 5.63㎡ 全体を計測できた住居内では本遺跡で最少の面積となる。

床面 細かな凹凸があり、西側へ低く傾斜していて東壁下と7cmの比高差がある。地山礫が一部に表れている。掘り方は見られない。

カマド 東壁南寄りにある。燃焼部は壁外にあり、火床

は住居床面より4cm窪んでいる。また焚口前面付近まで広く窪んでいる。住居壁際、袖石の奥側に支脚と思われる礫を据えている。焚口前部分にも細長い礫が見られるが、袖石上に据えた焚口上面の天井礫となり石組み焚口部であった可能性がある。煙道は見られない。

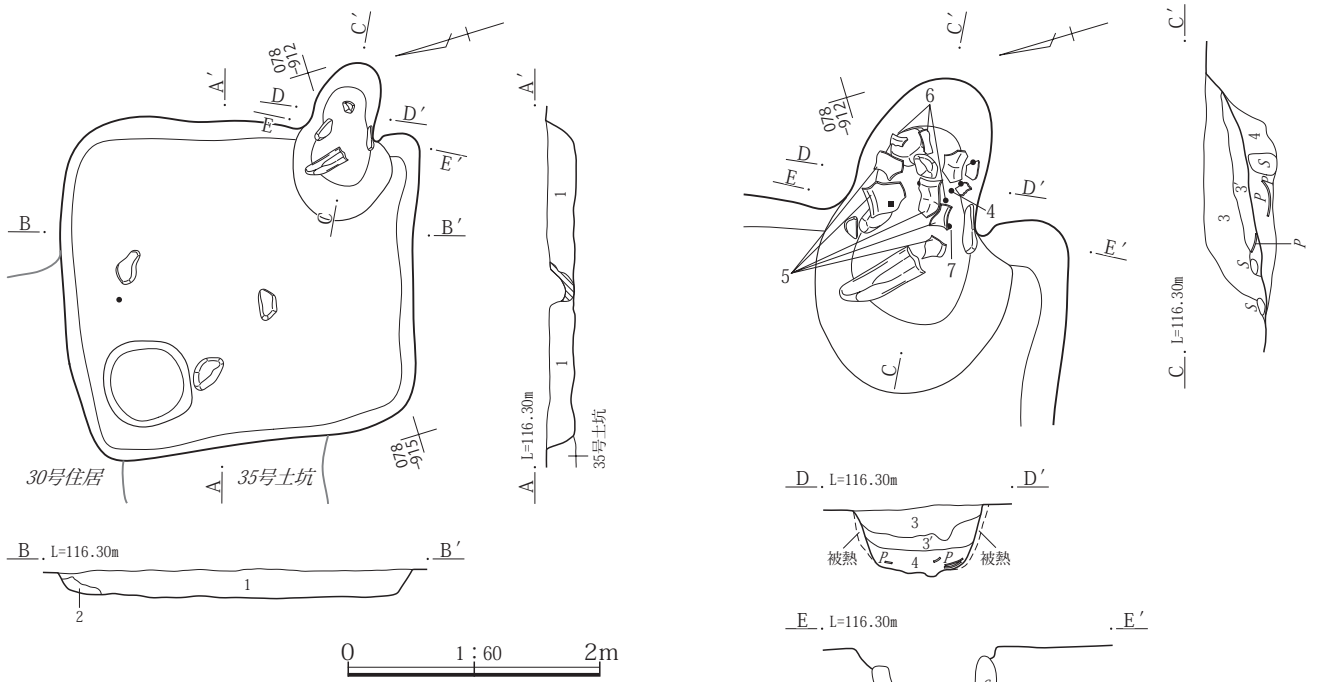
その他 30号住居、35号土坑に後出している。北西隅に径約70cm・床面からの深さ17cmの不整円形を呈した窪みがある。底面は比較的広く平坦で配置より貯蔵穴の可能性はあるが明瞭な施設ではない。壁溝・柱穴等の施設は確認できない。

遺物 土器7点を図示した。カマド出土土器が豊富で須恵器碗4、土師器甕5・6、羽釜7がある。本住居に確実に伴う土器群である。

図示した以外の出土土器片は少なく、67点のみである。

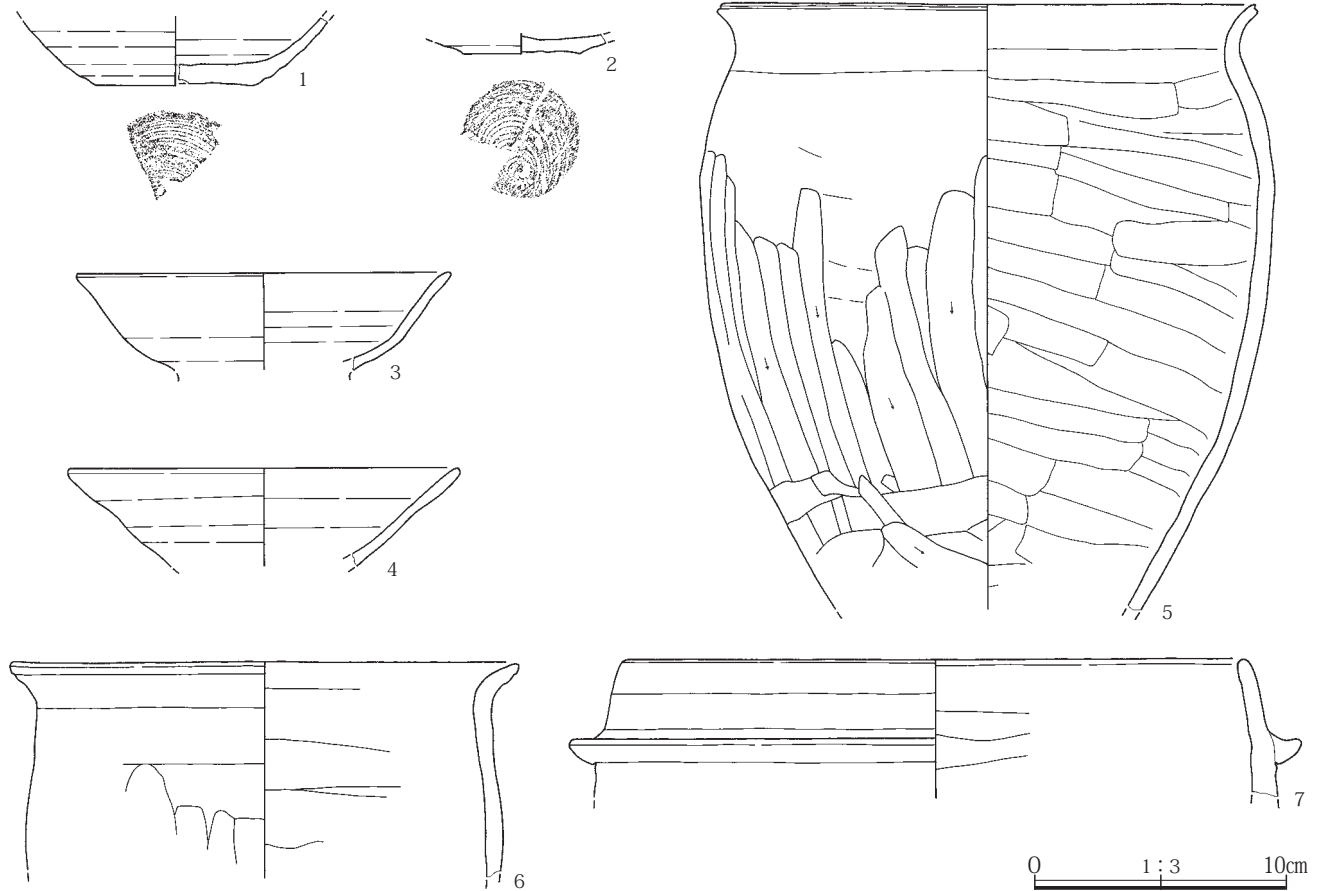
所見 羽釜を伴い、土師器甕類も土釜状になっている。10世紀前半の住居と想定できる。

第三章 調査の内容



29号住居土層説明

- 1 褐7.5YR4/3 焼土・炭化物粒を含む埋没土。
- 2 にぶい褐7.5YR5/3 褐色粘土ブロック主体の壁際埋没土。
- 3 暗赤褐5YR3/2 焼土粒・褐色粘土粒を含むカマド上層埋没土。3'は灰・焼土・炭化物粒を含む。
- 4 灰褐5YR4/2 焼土ブロック・灰を含むカマド下層埋没土。土器片の混入も多い。



第64図 29号住居と出土遺物

30号住居

(第65図 PL.13-① 遺物観察表235頁)

東3区中央住居群の東隅にある。29号住居など後出遺構に壊され残存状態は悪い。

位置 078~083、-912~916グリッドにある。

規模形状 南北軸長4.06m、東西軸長3.54mの方形を呈している。南西隅が鈍角に開いていることから、西辺が東辺より短い台形状に歪むと思われる。各辺は直線的で整った形状である。

埋没土・壁 水平に近い堆積の埋没土で、上面に焼土の混入が多い点が特徴的である。壁高は最も残存状態の良い西壁でも10cm前後である。

方位 N-13° E(長軸) N-116° E(カマド)

面積 復元[13.89]㎡

床面 細かな凹凸が多く、また住居中央付近がやや低くなり、壁際と5cm前後の比高差がある。掘り方は見られない。

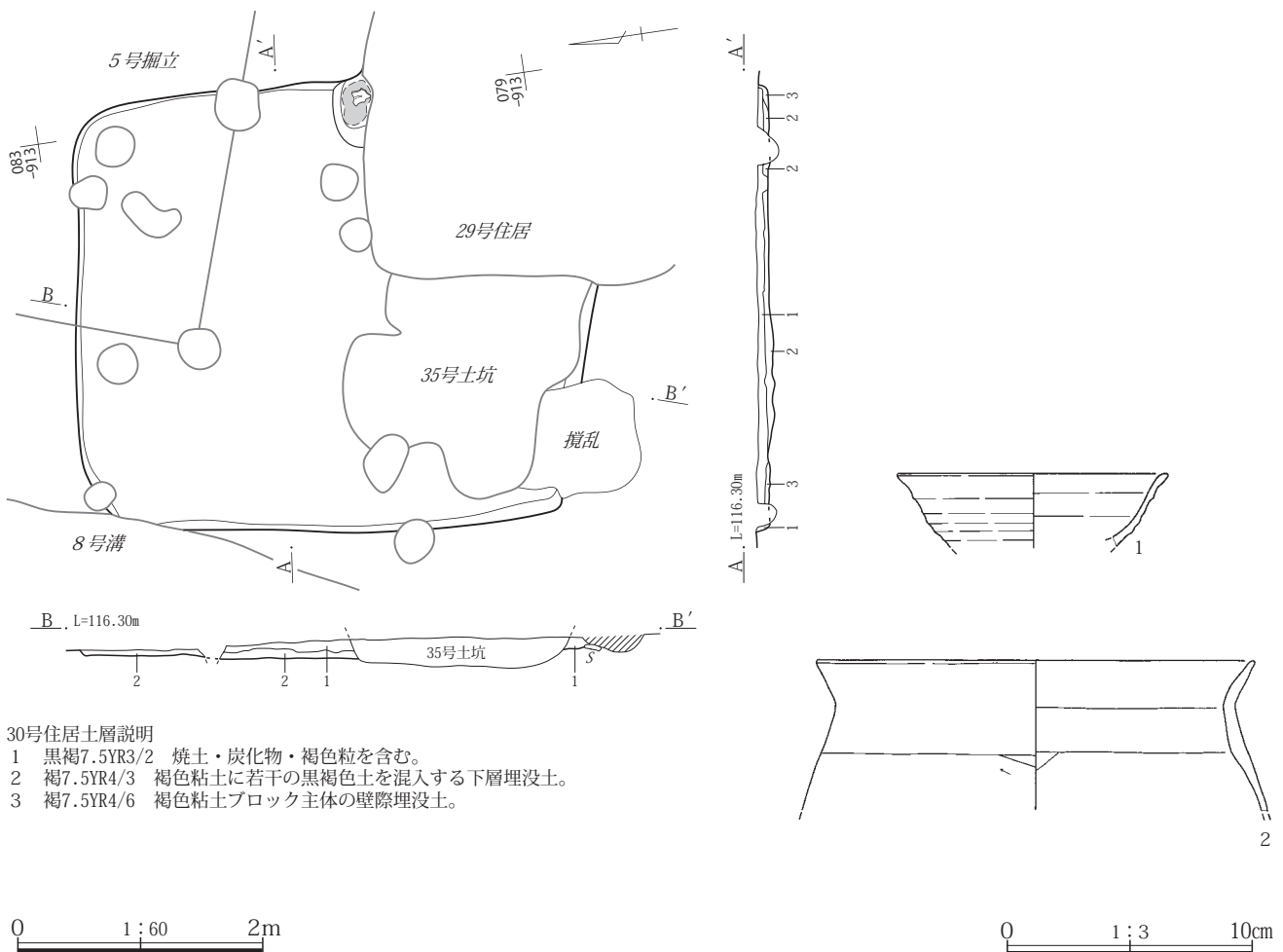
カマド 東壁ほぼ中央にある。南側の大半を後出する29号住居や35号土坑等に壊されている。燃烧部は住居内にある。火床は住居床面より2cm窪んでいて被熱硬化が顕著である。煙道や袖部は確認できない。

その他 29号住居、5号掘立柱建物、8号溝、35号土坑に前出し、36号土坑に後出している。壁溝・柱穴等の施設は確認できない。

遺物 須恵器碗1と土師器甕2を図示した。いずれも埋没土出土の小破片で、確実に本住居に伴うと認定できる土器ではない。

図示した以外の遺物はやや少なく、土器片122点が出土している。この内須恵器は約2割で、ほとんどが杯類である。

所見 出土遺物は確実な資料ではないが、口縁がわずかに外反する杯とコの字状口縁の甕で、9世紀中頃前後の住居と想定できる。



第65図 30号住居と出土遺物

31号住居

(第66・67図 PL.13-②~④、51 遺物観察表235頁)

調査区東端の東5区内でも南東隅にあり、南東側へ低くなる傾斜面に接している。集落の隅付近に作られた住居と思われる。

位置 063~066、-822~826グリッドにある。

規模形状 南北軸長3.15m、東西軸長2.22mの南北に長い長方形を呈す。東辺北側が外側へ湾曲して歪むが、他の各辺は直線的である。

埋没土・壁 水平に近い堆積が見られる。壁は立ち上がり付近のみの確認で、残存壁高は北辺付近で10cm前後だが、他は5cm前後となる。

方位 N-33° E(長軸) N-118° E(カマド)

面積 6.87㎡

床面 比較的平坦な床面であるが、カマド北脇から住居中央にかけてやや高くなり、壁際と3cm前後の比高差がある。掘り方は認められない。

カマド 東壁南寄りにある。燃焼部は壁外にあり、火床

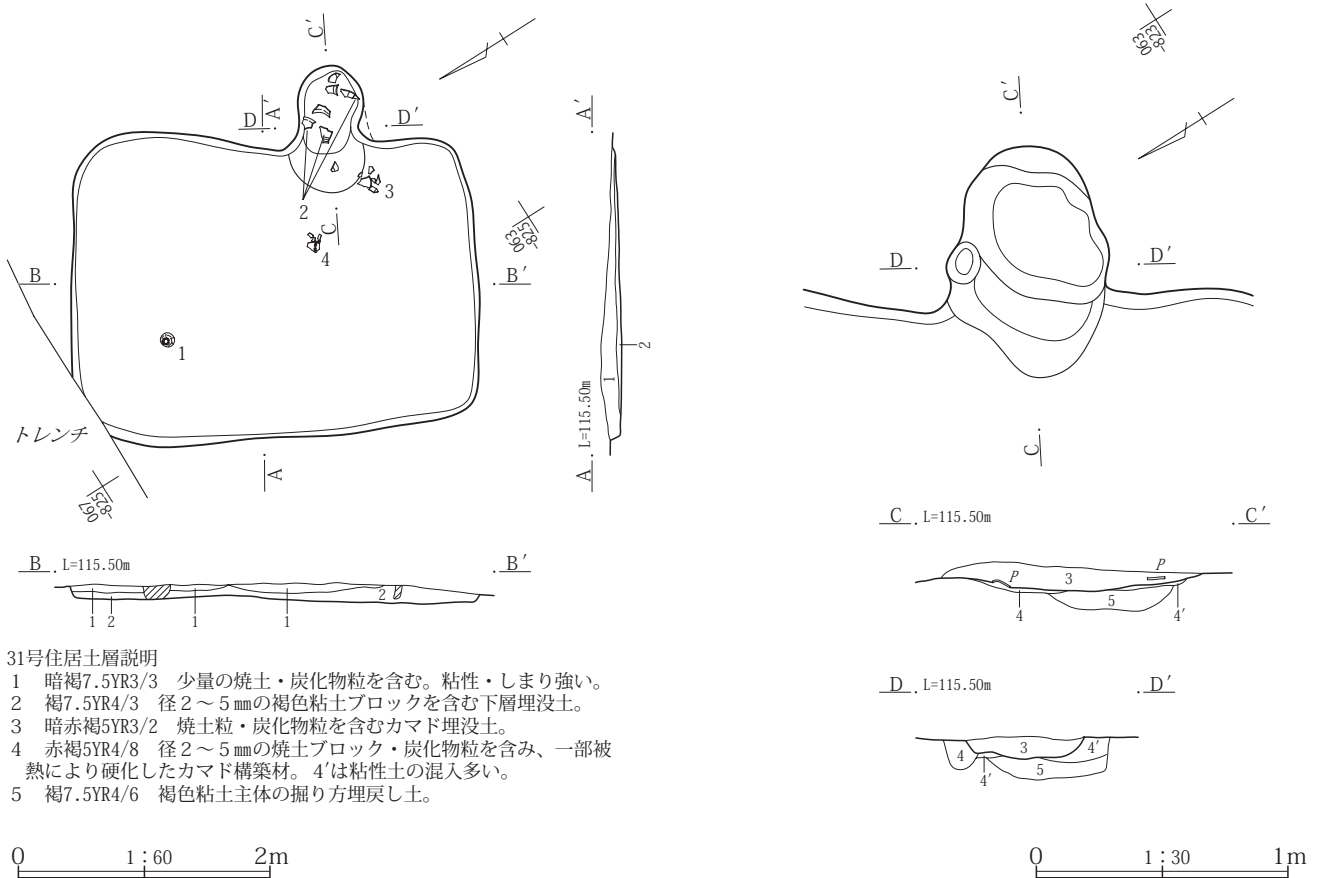
は住居床面より5cm窪んでいる。焚口付近は火床へ向かって緩やかに傾斜している。袖は残存せず、煙道部も確認できない。火床部下に深さ10cm前後の掘り方がある。北側には袖石を据えた痕跡と思われる狭い窪みがあり、壁外へ張出すような焚口の存在も想定できる。

その他 壁溝・柱穴等の施設は確認できない。

遺物 カマド周辺を中心に出土した土器4点と、石製品1点を図示した。カマド内から土師器甕2、カマド前から須恵器甕3・羽釜4を出土した。須恵器椀1は床直上出土で、これらは本住居に確実に伴う遺物である。5は埋没土内出土の緑色片岩の敲石で、本住居に伴う遺物か判断できなかった。

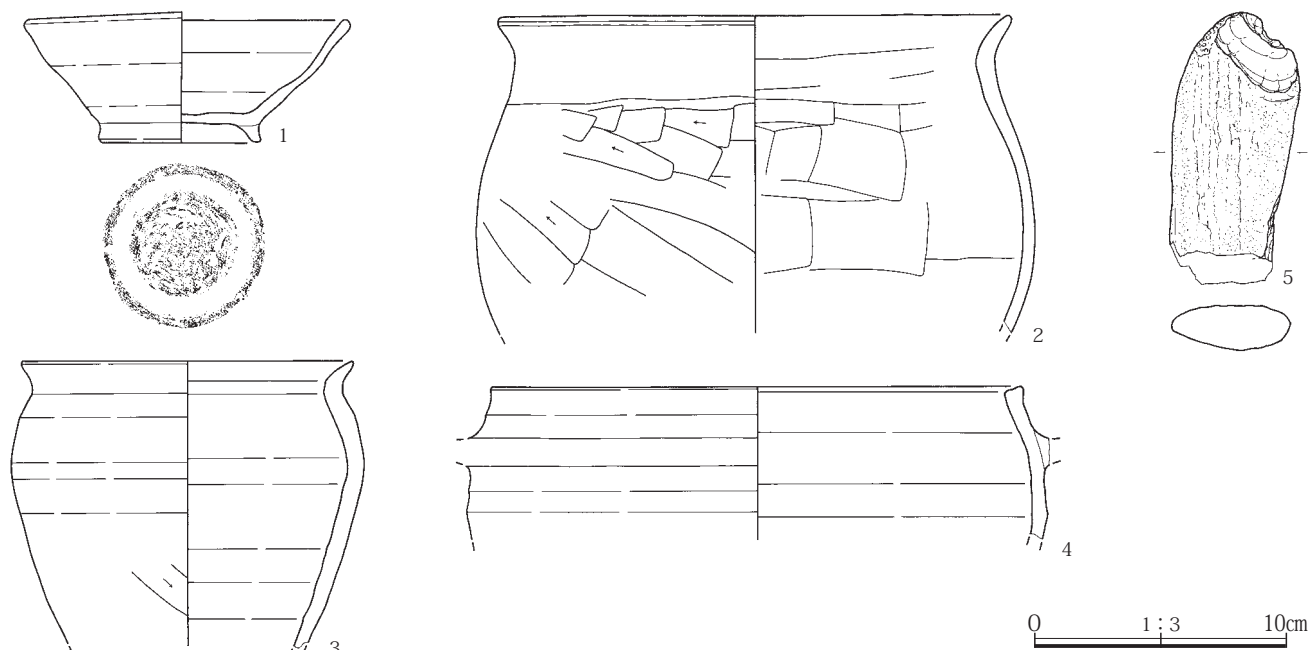
図示した以外の出土土器片も少なく、70点が出土している。このうち約2割が須恵器である。

所見 須恵器羽釜4は住居中央付近の出土で確実な年代推定資料とはならないが、他の遺物との齟齬はなく、9世紀末から10世紀初頭にかけての住居と想定できる。



- 31号住居土層説明
- 1 暗褐7.5YR3/3 少量の焼土・炭化物粒を含む。粘性・しまり強い。
 - 2 褐7.5YR4/3 径2~5mmの褐色粘土ブロックを含む下層埋没土。
 - 3 暗赤褐5YR3/2 焼土粒・炭化物粒を含むカマド埋没土。
 - 4 赤褐5YR4/8 径2~5mmの焼土ブロック・炭化物粒を含み、一部被熱により硬化したカマド構築材。4'は粘性土の混入多い。
 - 5 褐7.5YR4/6 褐色粘土主体の掘り方埋戻し土。

第66図 31号住居



第67図 31号住居出土遺物

32号住居

(第68図 PL.13-⑤~⑧ 遺物観察表236頁)

東5区にあり、31号住居の北西側約5mに位置している。床面直上に広く炭化材や炭化物粒が見られ、焼失住居と思われる。

位置 071~074、-826~830グリッドにある。本遺跡東隅に位置する31号住居の北西側、33号住居の南西側それぞれ約5mの位置にあり、集落分布がやや希薄となる一面に位置している。

規模形状 南北軸長2.85m、東西軸長3.08mの方形を呈している。各隅は丸みが少なく整った形状である。

埋没土・壁 下層では壁際から埋没しており、自然堆積と思われる。残存状態の良い北壁・東壁で垂直に近い立ち上がりが見られる。40cm近い壁高があり、本遺跡では比較的深度に富む住居である。

方位 N-89° E(長軸) N-93° E(カマド)

面積 8.28㎡

床面 細かな凹凸が多いがほぼ水平な床面である。南東付近のみやや窪み、他の部分と3cmの比高差がある。全面に掘り方があるが、上面は炭化物の混入の多い埋戻し土で、下面にあるもう1枚の床面となる可能性がある。北東隅と西壁下が深くなっていてこの部分は明らかな掘り方である。

壁溝 住居西側の深めの掘り方が認められた部分のみ、床面からの深さ3~5cmの壁溝が確認できる。

貯蔵穴 南東隅に不規則な窪みがあり、上面に踏み固めのないことから貯蔵穴として扱った。床面からの深さは最大でも10cmで、南壁に沿って長さ102cm、幅52cmの不整な形状で、不明瞭な施設である。

ピット 南壁直下でP1を確認した。配置より入口施設に伴うピットとなる可能性がある。北東壁寄り掘り方調査時に浅いP2を確認した。主柱穴配置上にあるが、対になる施設は確認できなかった。

カマド 東壁南寄りにある。燃烧部は住居内にあり、火床は住居床面より7cm窪んでいる。袖は粘性土で築き、焚口付近に袖石を据えている。煙道は燃烧部から段をもって立ち上がり、壁外へ65cm張り出している。

その他 10号溝に前出している。

遺物 図示できた土器は須恵器蓋1点で、埋没土の出土であり、確実に本住居に伴うと認定できる土器ではない。

図示した以外に土器片79点が出土している。

所見 時期決定に有効な資料を欠くが、図示した土器はカエリのわずかに残る杯Gの蓋で、7世紀末から8世紀初頭の遺物である。

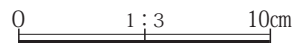
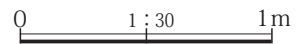
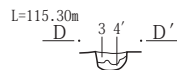
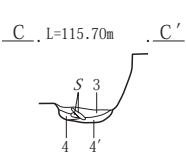
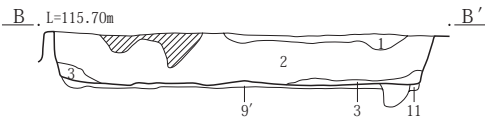
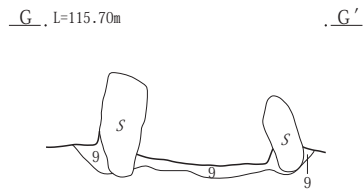
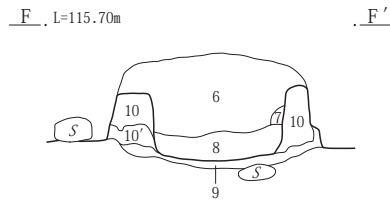
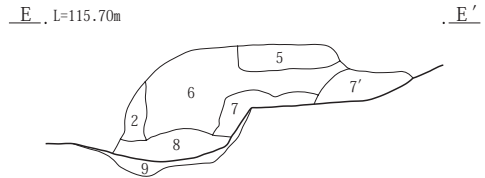
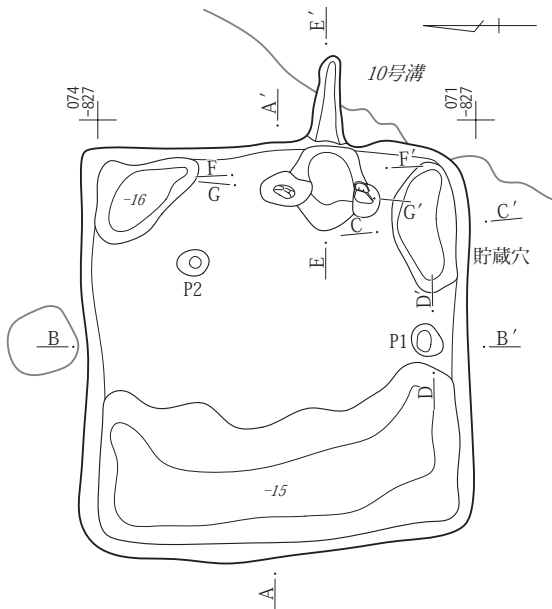
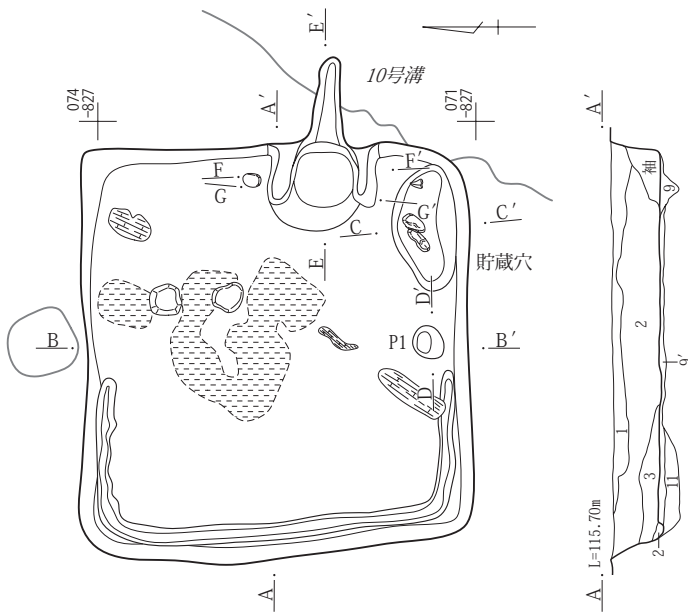
第三章 調査の内容

32号住居ピット一覧 (cm)

No.	長径×短径×深さ	種類・備考
1	28×24×18	入口ピットか
2	27×21×5	住居廃絶時埋没

32号住居土層説明

- 1 暗褐7.5YR3/3 焼土・炭化物粒・ローム粒を含む粘性土。
- 2 褐7.5YR4/6 径2~3mmのロームブロック多くを含む粘性土。
- 3 黒褐7.5YR3/2 焼土・炭化物・ローム粒を含む粘性土で、三角堆積の見られる下層埋没土。
- 4 褐10YR4/4 黒褐色土がブロック状に混入するピット等の下層埋没土。4'は黒色味が強い。
- 5 赤褐2.5YR4/8 焼土ブロック。煙道天井部分か。
- 6 暗褐7.5YR3/3 焼土・炭化物粒・ローム粒を含むカマド埋没土の粘性土。
- 7 にぶい赤褐2.5YR4/3 焼土・炭化物粒を少量含むカマド奥埋没土。7'は褐色粘性土の混入多い。
- 8 黒褐7.5YR3/2 炭化物粒・灰を多く含む粘性土の火床土埋没土。
- 9 黄褐10YR5/6 ローム土主体に焼土・炭化物粒を不均等に含む火床下埋戻し土。9'は混入物少ない掘り方埋戻し土。
- 10 橙7.5YR6/8 褐色粘土主体の袖部。10'はローム土主体。
- 11 褐7.5YR4/3 ローム粒を含む粘性土。床埋戻し土のうち、特に床下土坑状の窪み部分で見られる。



第68図 32号住居と出土遺物

33号住居

(第69図 PL.14-①)

31号住居とともに、本遺跡の東端に位置する住居である。10号溝と攪乱により大半を壊され、カマド周辺のみかろうじて確認できた。

位置 077~080、-822~824グリッドにある。

規模形状 南西辺は明瞭ではないが、想定壁の位置より北東-南西軸長を計測し3.21mとした。北西・南東辺および四隅も残存しない。

埋没土・壁 埋没土は粘性土主体のあまり明瞭ではない単層土である。残存壁高は最大でも4cmである。

方位 N-38° E (南北軸) N-18° E (カマド)

面積 残存(3.19)m²

床面 ほぼ水平な床面である。カマド前面と東隅周辺に掘り方がある。

ピット 南西壁下周辺に窪みがあり、P1・P2とした。入口ピットの可能性がある。

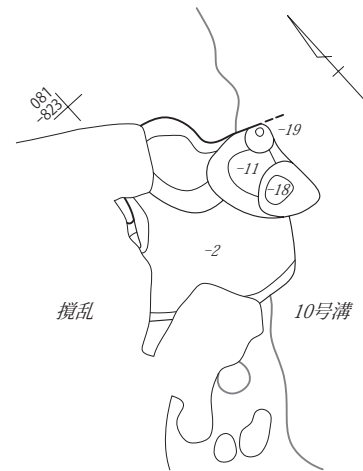
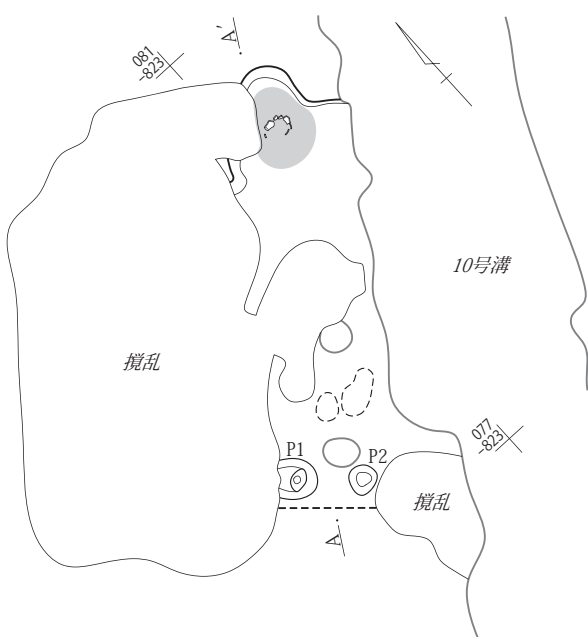
カマド 北東壁側にある。燃烧部は住居内にあり、火床は住居床より5cm窪んでいる。北西袖が想定される位置に地山の5cmほどの高まりが確認できる。袖基部の可能性があるが明瞭ではない。

その他 10号溝に前出している。南西辺寄りにはピット状の窪みが多いが住居床面との新旧関係が確認できていない。南西辺直下の2カ所の窪みは入口ピットとなる可能性があるが、他の窪みは配置より本住居とは無関係な施設と思われる。

遺物 図示に耐える遺物の出土はなかった。

図示した以外には土器片44点が出土している。すべて土師器壺甕類の破片である。

所見 時期を想定する資料をもたない。

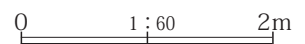


33号住居ピット一覧 (cm)

No.	長径×短径×深さ	種類・備考
1	(30)×32×28	入口ピットか
2	23×22×11	入口ピットか

33号住居土層説明

- 1 にぶい褐7.5YR5/4 汚れた粘土を主体とし、白色軽石を少量含む埋没土。しまりある粘性土。
- 2 褐7.5YR4/3 カマド袖部分と思われる粘性土。
- 3 赤褐10R4/4 焼土ブロックを主体とするカマド崩落土混じりの埋没土。3'は被熱したカマド構築材か。



第69図 33号住居

34号住居

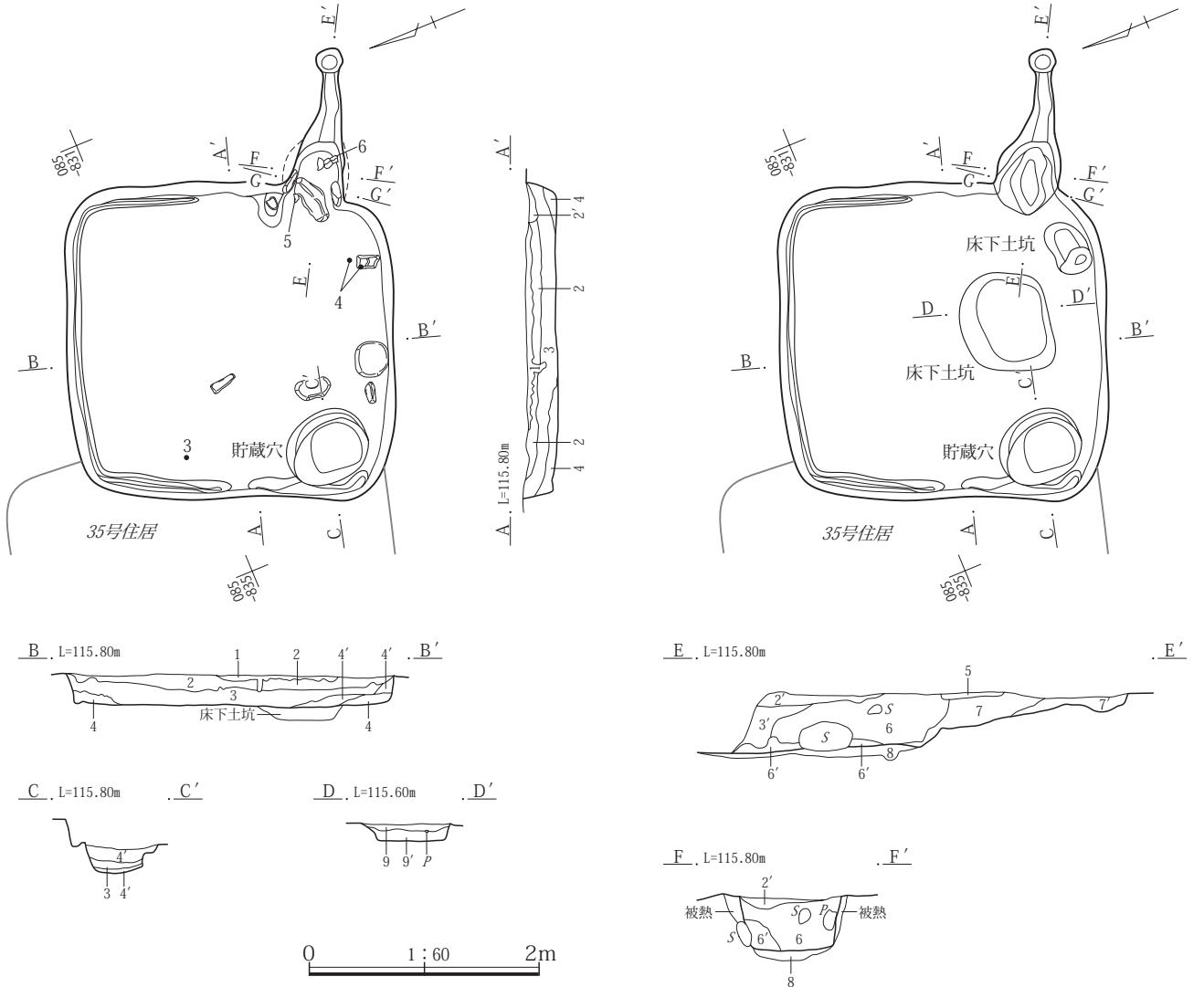
(第70・71図 PL.14-②~⑥、52 遺物観察表236頁)

東5区の北隅付近で、32号住居の北側約9mに位置している。

位置 082~086、-831~834グリッドにある。

規模形状 南北軸長2.73m、東西軸長2.58mの方形を呈す。各隅は丸みが少なく、各辺は直線的で整った形状である。

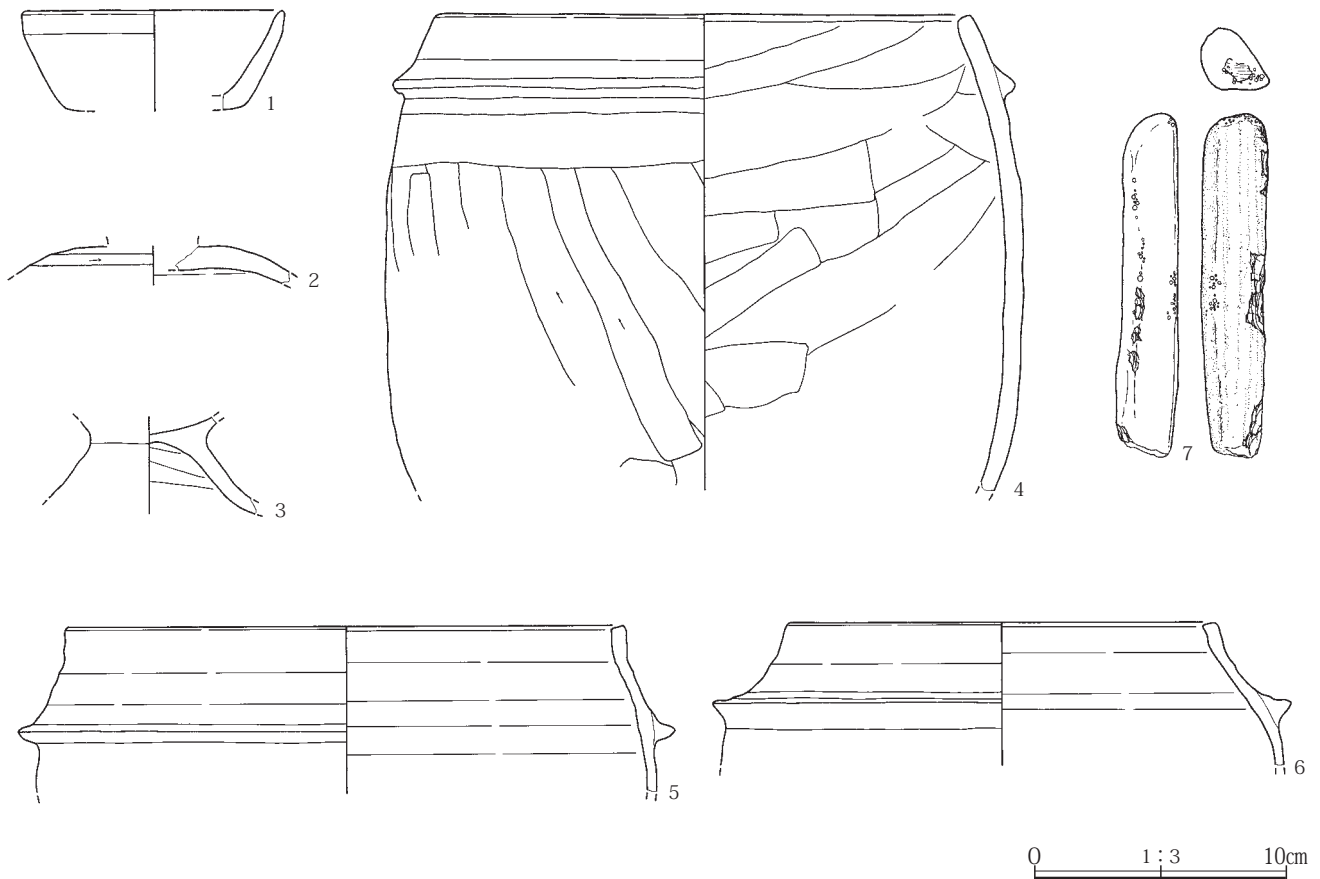
埋没土・壁 下層では各壁とも壁際から埋没しており、自然堆積と思われる。



34号住居土層説明

- 1 黒褐10YR3/1 炭化物粒・ローム粒を多く含む。
- 2 褐7.5YR4/3 少量の軽石を含む粘性土で上層埋没土。2'はAs-A混じる攪乱土。
- 3 褐7.5YR4/6 径1~2cmのロームブロックを含む粘性土。水平堆積する下層埋没土。3'はカマド崩落土が混入する。
- 4 暗褐7.5YR3/3 ローム粒を含む壁際埋没土の粘性土。4'はカマド崩落土が混入し、焼土が混じる。
- 5 赤10R4/8 被熱により赤変硬化した煙道天井部。
- 6 褐7.5YR4/6 径1~2cmのロームブロックを含む粘性土のカマド埋没土。6'は焼土ブロック主体。
- 7 暗褐7.5YR3/4 径5mmの焼土ブロックを多く含む煙道部埋没土。7'は焼土を含まない。
- 8 黒褐7.5YR3/2 焼土ブロック・炭化物を多く含む火床下埋戻し土。
- 9 暗褐10YR3/3 ロームブロックを多量に含む床下土坑埋戻し土でしまり強く貼床状。9'はしまりやや弱い粘性土。

第70図 34号住居



第71図 34号住居出土遺物

方位 N-23° E (長軸) N-119° E (カマド)

面積 6.46㎡

床面 凹凸の比較的小さい床面だが住居中央付近がやや窪み、壁際と5cmの比高差を生じている。掘り方は土坑状の窪みで南東隅とカマド前にあり床下土坑とした。カマド前の床下土坑は開口部の規模が88×79cmで床面からの深さは16cmを測る。上面はロームブロックの多い土で貼床状になっている。南東隅の床下土坑は開口部の規模が48×29cmで床面からの深さは10cmを測る。

壁溝 東辺の南半と南辺を除き深さ2cm前後の浅い壁溝が確認できる。幅も10cm未満の場所が大半である。西壁下中央付近で一部途切れている。

貯蔵穴 南西隅に住居廃絶時に開口していたと思われる土坑状の窪みを確認し、配置より貯蔵穴とした。82×71cmの規模で楕円形を呈している。住居床面からの深さは28cmで底面は皿底状に中央が窪んでいる。東側壁に段差があり、掘り直しの可能性がある。

カマド 東壁南寄りにある。燃焼部は壁外にあり、火床

は住居床面と同じ高さにある。焚口部両脇に袖石を置き、その上に鳥居状に据えた石が落下し残存している。袖は北側にのみ残存している。煙道は燃焼部から小さな段をもって立ち上がり、壁外に110cm張り出している。先端はピット状に窪んでいるが、埋没土は他の煙道部と同一である。

その他 35号住居に後出している。柱穴は確認できない。遺物 土器6点と石製品1点を図示した。羽釜4は壁際床直上の出土でカマド内の羽釜5・6とともに本住居に確実に伴う遺物である。土師器台付甕3も壁際床直上の出土遺物だが、杯1とともに、混入品と思われる。敲石7は埋没土遺物で31号住居にも類例が見られる。

図示した以外に土器片229点が出土している。この内3割近くが須恵器で、他に灰釉陶器片2点がある。

所見 煮沸具は羽釜主体となっていて、10世紀の住居と想定できる。

35号住居

(第72図 PL.14-⑦・⑧、52 遺物観察表236頁)

東5区の北隅付近にある。深度に乏しいうえ34号住居に東壁を壊され、西壁も明確にできない不明瞭な遺構である。

位置 083~087、-833~836グリッドにある。

規模形状 東側半分のみでの確認である。南北軸長3.23m、東西軸長推定2.70mの方形を呈すと思われる。北東隅が鈍角気味に開き、北辺が短い台形状に歪む可能性がある。

埋没土・壁 埋没土は単層である。

方位 N-74°W 面積 復元[8.22]m²

床面 西側は不明瞭である。残存範囲には緩やかな凹凸があり5cm前後の比高差を生じている。中央付近に不整な掘り方があり、ピット状の窪みも見られた。

ピット 掘り方調査時にピット状の窪み2基を確認しP

1・P2とした。住居東壁に平行して並ぶピットで30cm前後の深度があるが、芯々距離は97cmで間隔に乏しく、主柱穴とは考えにくい。P2は2基のピット重複の可能性がある。

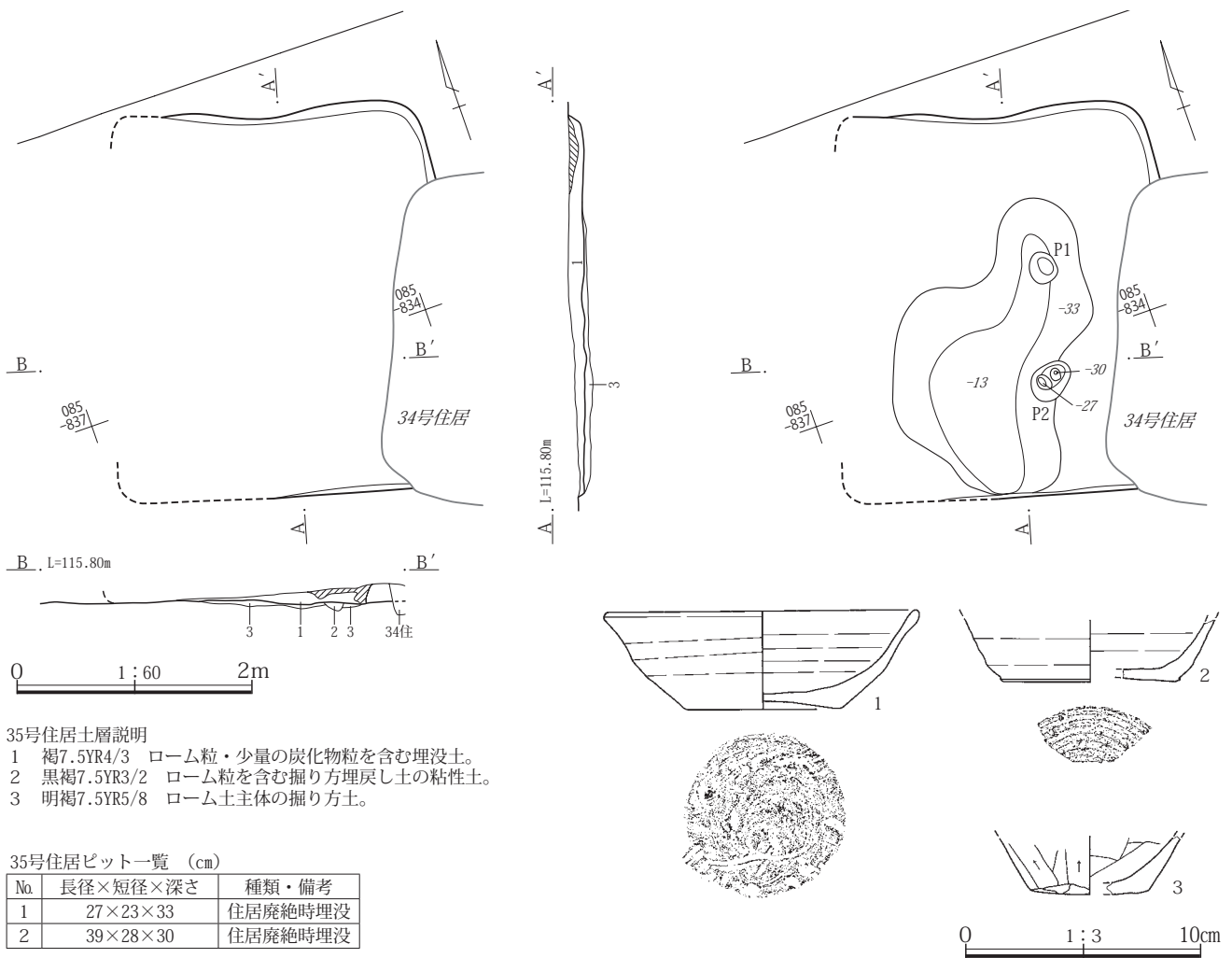
カマド カマド・炉とも痕跡が確認できない。カマドがあれば東壁と思われる。

その他 34号住居に前出している。壁溝・貯蔵穴等の施設は確認できない。

遺物 須恵器杯1・2と土師器甕3の土器3点を図示したが、いずれも埋没土の出土である。

図示した以外には、土師器主体に土器片166点が出土している。

所見 時期推定のための確実な資料をもたないが、杯類は底面が広めで9世紀前半の住居と想定して大きな齟齬はない。



35号住居土層説明

- 1 褐7.5YR4/3 ローム粒・少量の炭化物粒を含む埋没土。
- 2 黒褐7.5YR3/2 ローム粒を含む掘り方埋戻し土の粘性土。
- 3 明褐7.5YR5/8 ローム土主体の掘り方土。

35号住居ピット一覧 (cm)

No.	長径×短径×深さ	種類・備考
1	27×23×33	住居廃絶時埋没
2	39×28×30	住居廃絶時埋没

第72図 35号住居と出土遺物

36号住居

(第73図 PL.15-①・② 遺物観察表236頁)

東4区の住居が散在する一画にあり、本住居北側は広範に住居が途切れている。西辺が調査障害物にかかり、全容を把握できていない。

位置 075～078、-871～875グリッドにある。

規模形状 南北軸長3.07m、東西残存軸長2.23mの方形を呈している。残存する2隅は丸みが少なく、各辺は直線的で整った形状である。

埋没土・壁 埋没土は単層で堆積過程は不明である。残存壁高は5cm未満で立ち上がり基部しか確認できない。

方位 N-34°W(南北軸) N-58°E(カマド)

面積 残存(6.72)m²

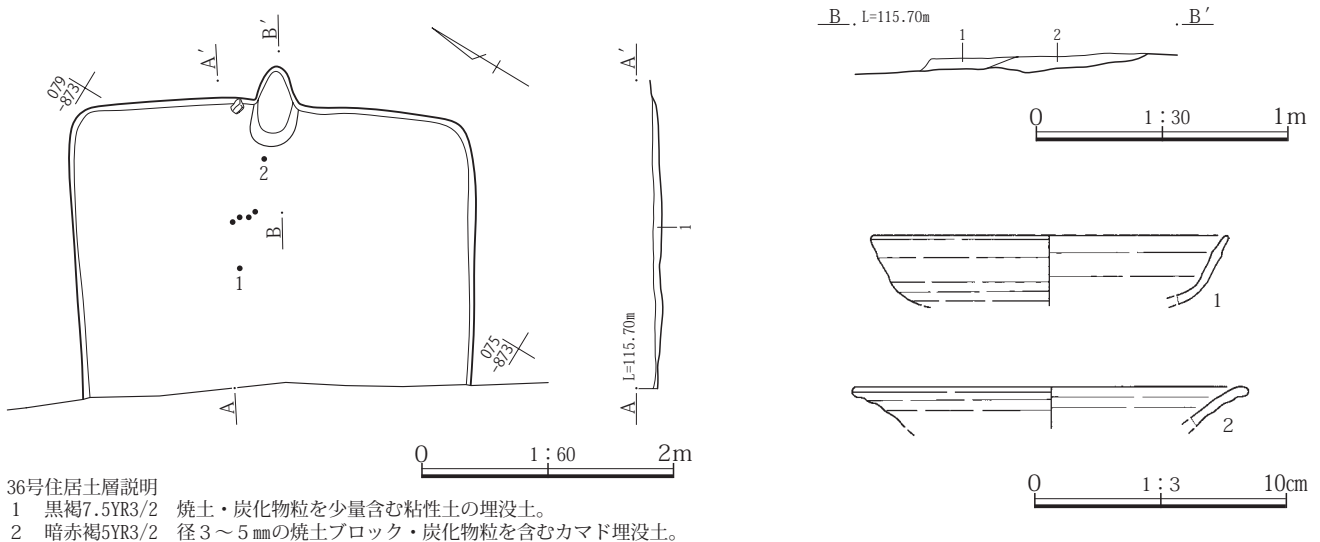
床面 細かな凹凸の多い床面で、中央付近がやや低く、

壁際と2cm前後の比高差がある。掘り方は見られない。
カマド 東壁ほぼ中央にある。燃焼部は壁際で、小規模な火床は住居床より2cm窪んでいる。袖・煙道は確認できない。

その他 西側は調査できなかった。壁溝・柱穴等の施設は確認できない。

遺物 須恵器杯類小破片2点を図示した。どちらも床直上の出土だが、住居中央付近にある杯1に比べ、皿2はカマド前面の出土となり、本住居の時期を示す資料として有用となる。図示した以外の出土遺物はわずかで、土師器壺甕類破片8点のみであった。

所見 出土遺物の年代に齟齬がある。1は底径の広い8世紀、2は口縁の外反する9世紀の遺物である。出土状態から9世紀の住居と推定するが、不確実である。



第73図 36号住居と出土遺物

37号住居

(第74図 PL.15-③・④、52 遺物観察表236頁)

東3区中央の住居群中にある。後出する23号住居や攪乱に大きく壊され、残存状態は悪い。

位置 075～079、-932～934グリッドにある。

規模形状 東辺周辺のみ確認である。南北推定軸長3.70m、東西残存軸長は1.06mで西側を壊す攪乱の範囲から軸長は3.5m以内と想定される。南北にやや長い方形を呈すと思われる。

埋没土・壁 埋没土は単層である。残存壁高が最大でも

6cmの不明瞭な壁である。

方位 N-2°E(南北軸) N-96°E(カマド)

面積 残存(3.45)m²

床面 細かな凹凸の多い床面で、全体では壁際がやや高い傾向があり、カマド前面付近と3cm前後の比高差を生じている。掘り方は認められない。

柱穴 3基のピットを確認している。P1・2は主柱穴配置からは大きく外れ、本住居に確実にともなうか判断できない施設である。P3はカマド前面にあり、本住居に後出する施設の可能性がある。

第三章 調査の内容

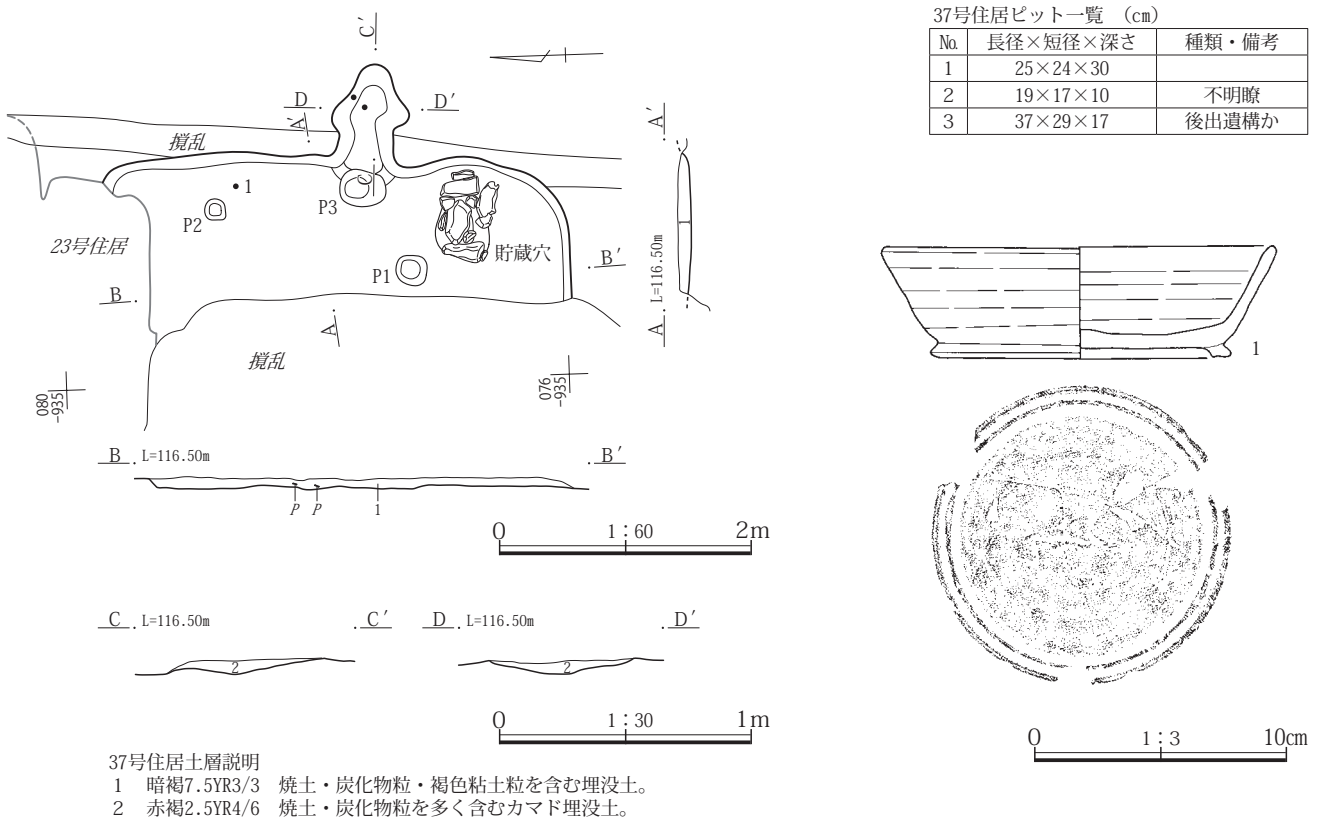
石組み施設 南東隅付近に長軸73cm、短軸47cmの長方形の範囲の石組み状施設が見られた。細長い礫は長軸を南北方向または東西方向に揃え、全体を充填するようにして据えている。長軸方向はカマド軸と近似し底面はほぼ住居の床面にあるため、本住居に伴う施設と思われるが明瞭ではない。石組み下には長軸54cm、短軸42cmの卵型に歪んだ楕円形を呈した窪みがある。配置より貯蔵穴としたが、床面からの深さは9cmで貯蔵穴としては深度に乏しい。礫はこの窪み底面には達していない。

カマド 東壁中央やや南寄りにある。燃烧部は壁外にあり、火床は住居床面より3cm高くなっている。袖および煙道は確認できない。

その他 23号住居に前出している。壁溝は確認できない。

遺物 図示できた土器は須恵器高台付き杯1のみであるが、壁際の床直上出土遺物で本住居に確実に伴う資料である。図示した以外に土器片42点が出土している。

所見 出土遺物は底径の広い大型盤状の杯で、8世紀前半の住居と想定できる。



第74図 37号住居と出土遺物

38号住居

(第75・76図 PL.15-⑤~⑧、52 遺物観察表236頁)

西区の古墳時代前期住居中、最も東側にある。西側・南側が現道にかかり、最大限調査範囲を広げたが、全容を把握できていない。北西側に隣接する39号住居との間隔は1m前後と想定される。

位置 085~091、-101~105グリッドにある。

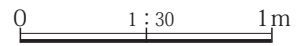
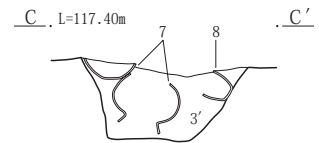
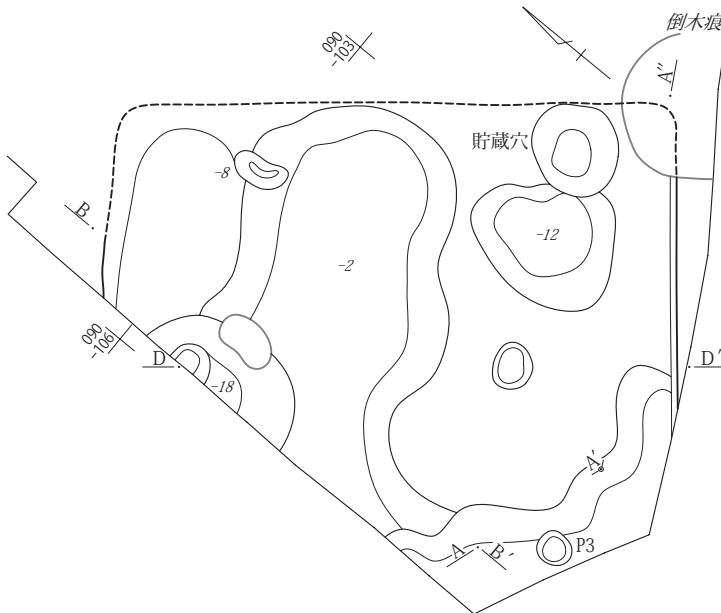
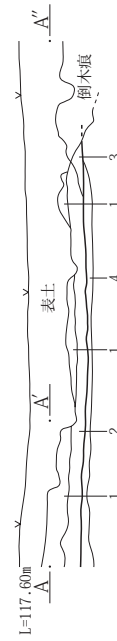
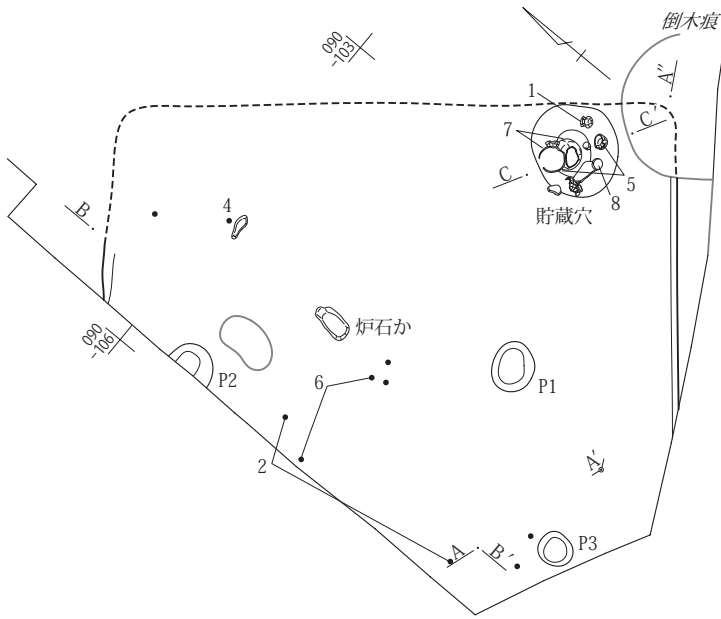
規模形状 北西-南東軸長4.52m、北東-南西残存軸長

4.05mである。北東辺は貯蔵穴や掘り方の範囲から推定した。確認できる隅はないが南東辺は直線的で、整った形状が想定される。調査範囲に西側の支柱穴2基が見られないことから、北東-南西軸長が6m前後の大型長方形住居になると思われる。

埋没土・壁 人為的な埋戻しの痕跡は見られない。

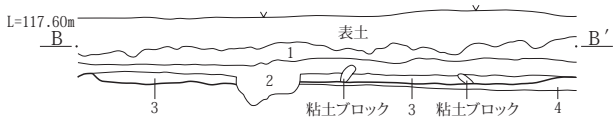
方位 N-36°W **面積** 残存(13.86)m²

床面 踏み固めの弱い不明瞭な床で、遺物出土状態など



38号住居土層説明

- 1 黒褐7.5YR3/2 白色軽石を含む表層土。ややしまりある弱粘性土。
- 2 黒褐7.5YR3/1 粘土ブロックを散見する弱粘性土。基本土層5層。
- 3 黒褐7.5YR3/2 径1cmの粘土ブロックを含む、しまりやや弱い弱粘性の埋没土。3'は貯蔵穴埋没土でしまり弱い。
- 4 黒褐7.5YR3/2 径1cmの粘土ブロックを散見する層。掘り方埋戻し土だがしまり弱い。

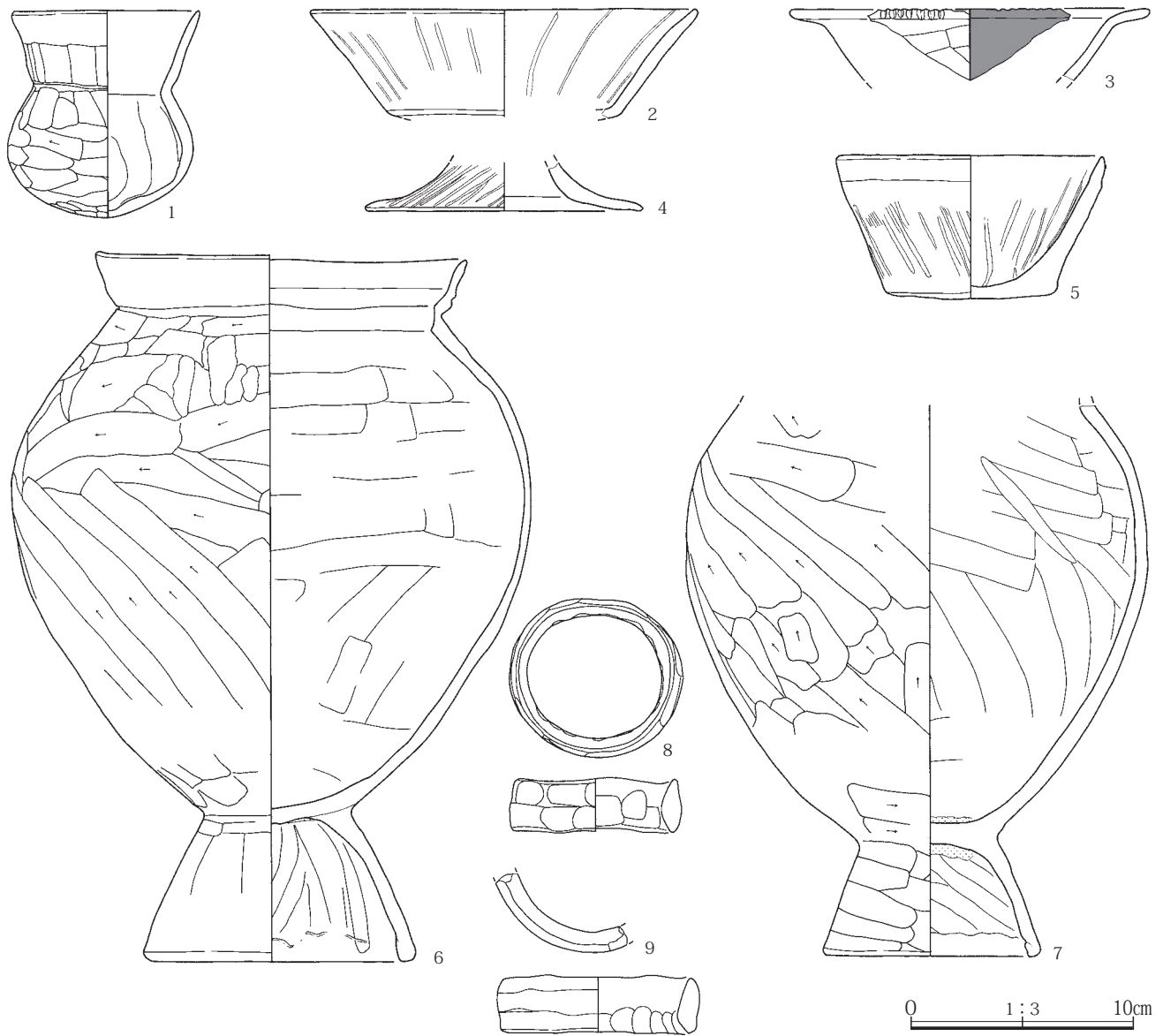


38号住居ピット一覧 (cm)

No.	長径×短径×深さ	種類・備考
1	40×34×16	支柱穴か
2	39×(23)×24	支柱穴か
3	28×26×25	



第75図 38号住居



第76図 38号住居出土遺物

から推定した部分が多い。不規則な掘り方がある。

ピット 3基の小ピットを確認した。P 1・2が四主柱穴の北東側を構成する柱穴なら、住居は北東-南西軸方向の長さが6 m前後の長方形のプランになる。P 3は主柱穴配置に沿ったものではない。

貯蔵穴 東隅が想定される部分に開口部径74×70cm、床面からの深さ33cmの不整円形を呈した窪みがあり、貯蔵穴と思われる。底面は平坦で、多量の遺物が出土した。

炉 調査範囲の中央付近に床面から5 cm浮いた状態であるが平坦な石があり、炉の枕石となる可能性があるが、床面に被熱面や窪みは確認できず不明瞭である。

その他 倒木痕に前出している。壁溝は確認できない。

遺物 土師器7点と土製品2点を図示した。土師器は埴1、鉢5、台付甕7が貯蔵穴内の出土である。北東隅床直上出土の高杯4とともに本住居に確実に伴う土器である。高杯2、台付甕6は住居中央付近だが、床直上付近の出土である。高杯3は赤彩のある弥生土器と思われる、39号住居からの混入の可能性がある。腕輪状土製品が2点あり、完形の8は貯蔵穴内、破片の9は埋没土の出土である。

図示した以外に土師器片179点が出土している。

所見 埴は底部の丸みが強いが頸部が太い。台付甕も胴部最大径が中程にあり、ハケ目が見られない。これらの特徴より5世紀前半の住居と想定できる。

39号住居

(第77・78図 PL.16-①・②、52・53 遺物観察表237頁)

本遺跡唯一の弥生時代の住居で、古墳時代前期の住居が集中する西調査区にある。東側は現道や調査区境にかかり、全容を把握できていない。

位置 087~093、-110~114グリッドにある。

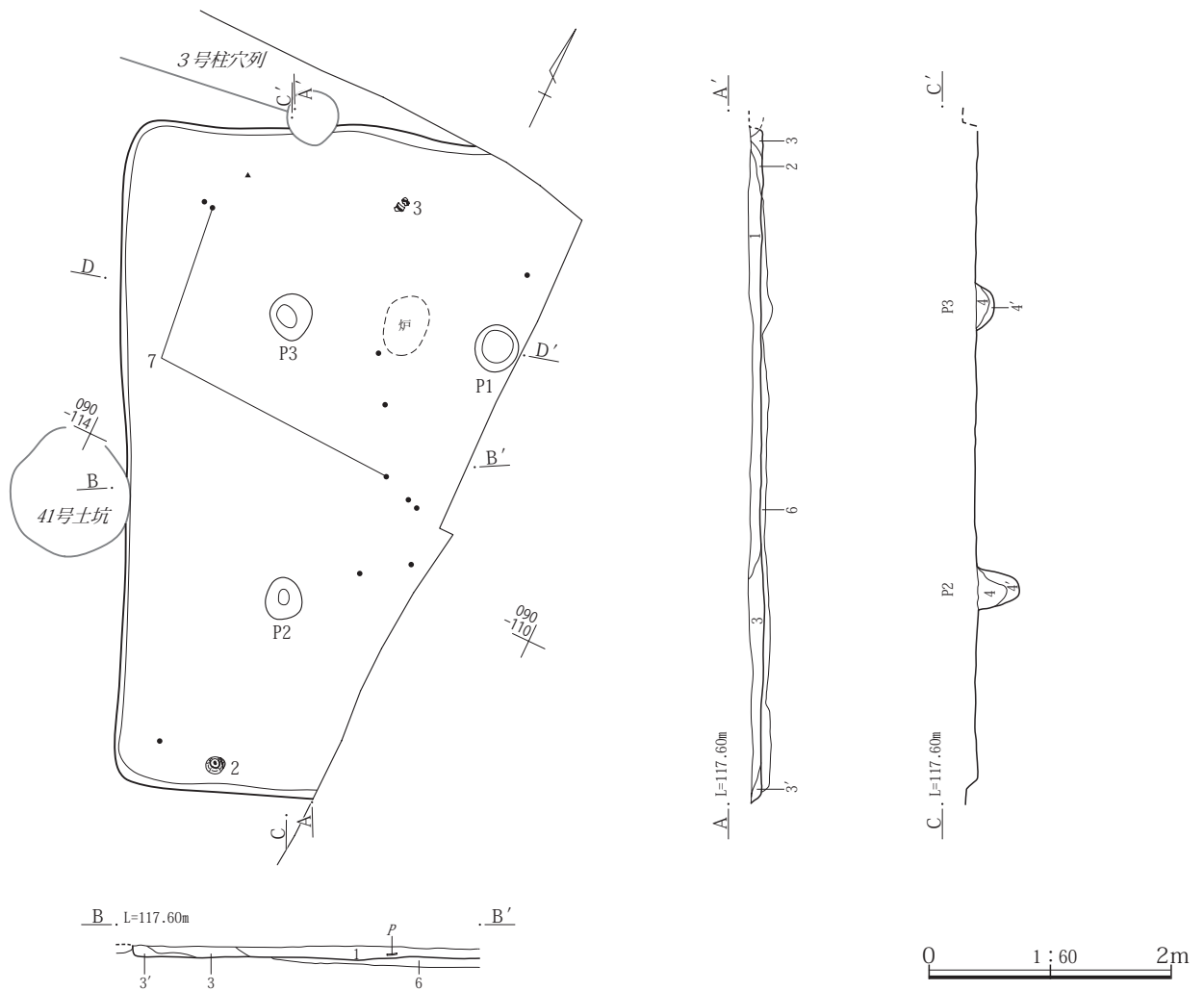
規模形状 南北軸長5.48m、東西残存軸長3.79mで、柱穴配置から想定復元すると東西軸長は4.5m前後の長方

形となる。各隅は丸みが少なく、各辺は直線的で整った形状である。

埋没土・壁 比較的しまりに欠く埋没土で、壁際から自然堆積している。

方位 N-25° W 面積 残存(15.05)m²

床面 礫混じりの地山を掘り込んでいて、床面には南側を中心に多量の礫が見られる。比高差5cm前後の細かな凹凸の多い床面で、踏み固めはあまり強くなかった。浅



39号住居ピット一覧 (cm)

No.	長径×短径×深さ	種類・備考
1	40×36×17	主柱穴
2	35×30×34	主柱穴
3	39×35×14	主柱穴
4	40×33×18	入口ピットか

39号住居土層説明

- 黒7.5YR2/1 しまり弱い土層埋没土。
- 灰褐7.5YR4/2 炭化物粒を少量含む粘性土。
- 灰褐7.5YR4/2 汚れた粘土ブロックを含むしまり弱い下層埋没土。
3'は汚れた粘土を主体とする壁際埋没土。
- 灰褐7.5YR4/2 しまり弱い柱穴埋没土。4'は汚れた砂質土でしまり弱い。
- 黒褐7.5YR3/1 径2~5mmのロームを少量含む柱穴埋没土。緻密でややしまり強い。
- 褐7.5YR4/4 汚れた粘土を主体とする掘り方埋戻し土。ややしまり強い。

第77図 39号住居(1)

第三章 調査の内容

い不規則な掘り方がある。

ピット 四支柱穴のうち、南東隅以外の3本を確認した。掘り方調査時にもピット状の窪み2基を確認している。このうち入口ピットとなる可能性のある南壁近くのピットをP4とした。

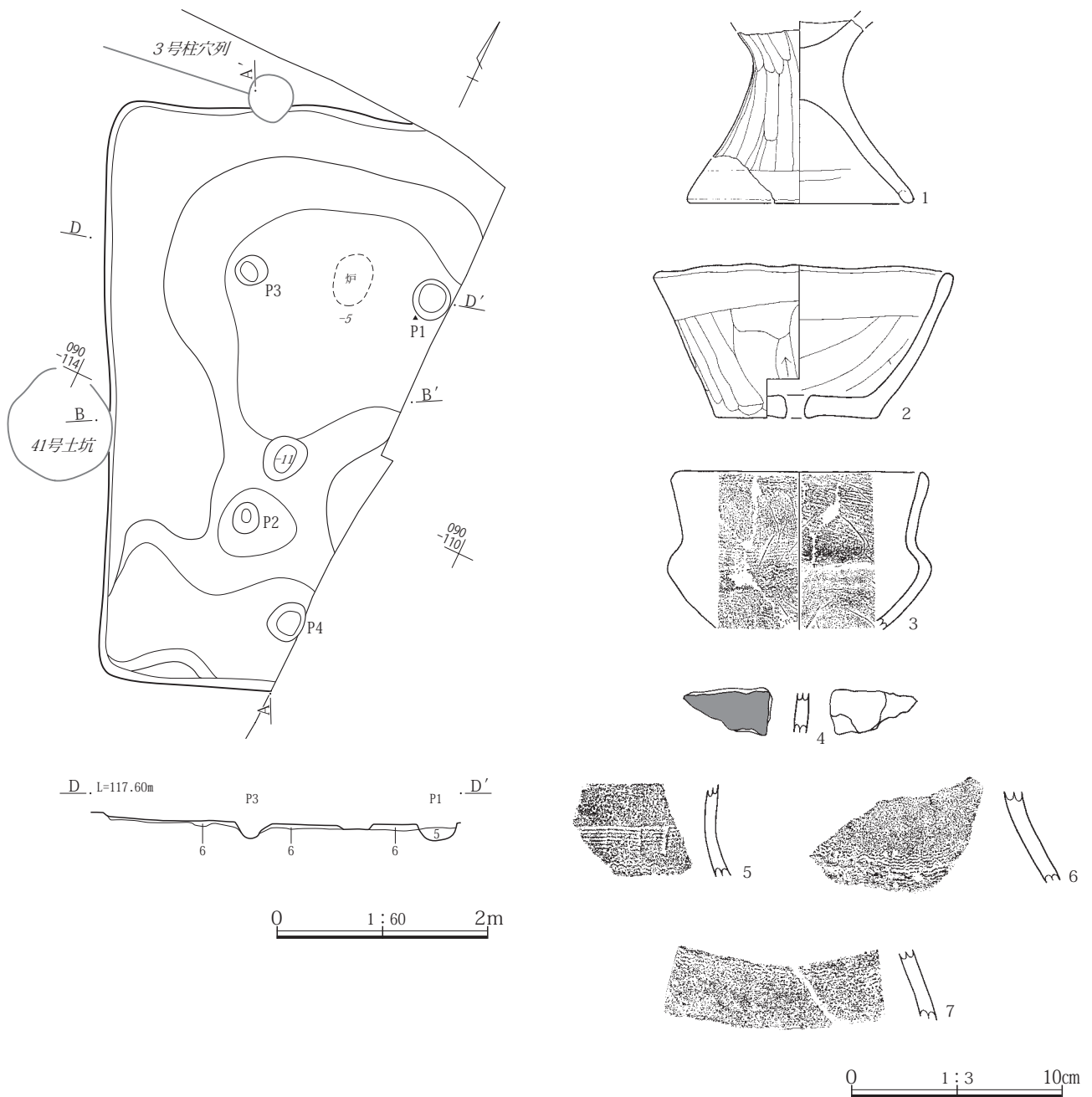
炉 P1-P3の中間にある。径52×35cmの楕円形を呈した緩やかな窪みで、火床中央の最深部は住居床面より5cm低くなっていた。被熱痕は弱く、枕石は痕跡を含め確認できない。

その他 41号土坑、3号柱穴列P1に前出している。壁溝等は確認できない。

遺物 土器7点を図示した。有孔鉢2は床面より7cm浮いた状態だが、南壁直下の出土で完形に復元できた唯一の土器ある。台付甕3は北壁下の床直上出土遺物である。甕7は床面に散乱する破片が接合したもので、これらは本住居に確実に伴う資料である。

図示した以外に土器片26点が出土している。

所見 出土遺物より弥生時代後期中葉の住居と想定できる。



第78図 39号住居(2)と出土遺物

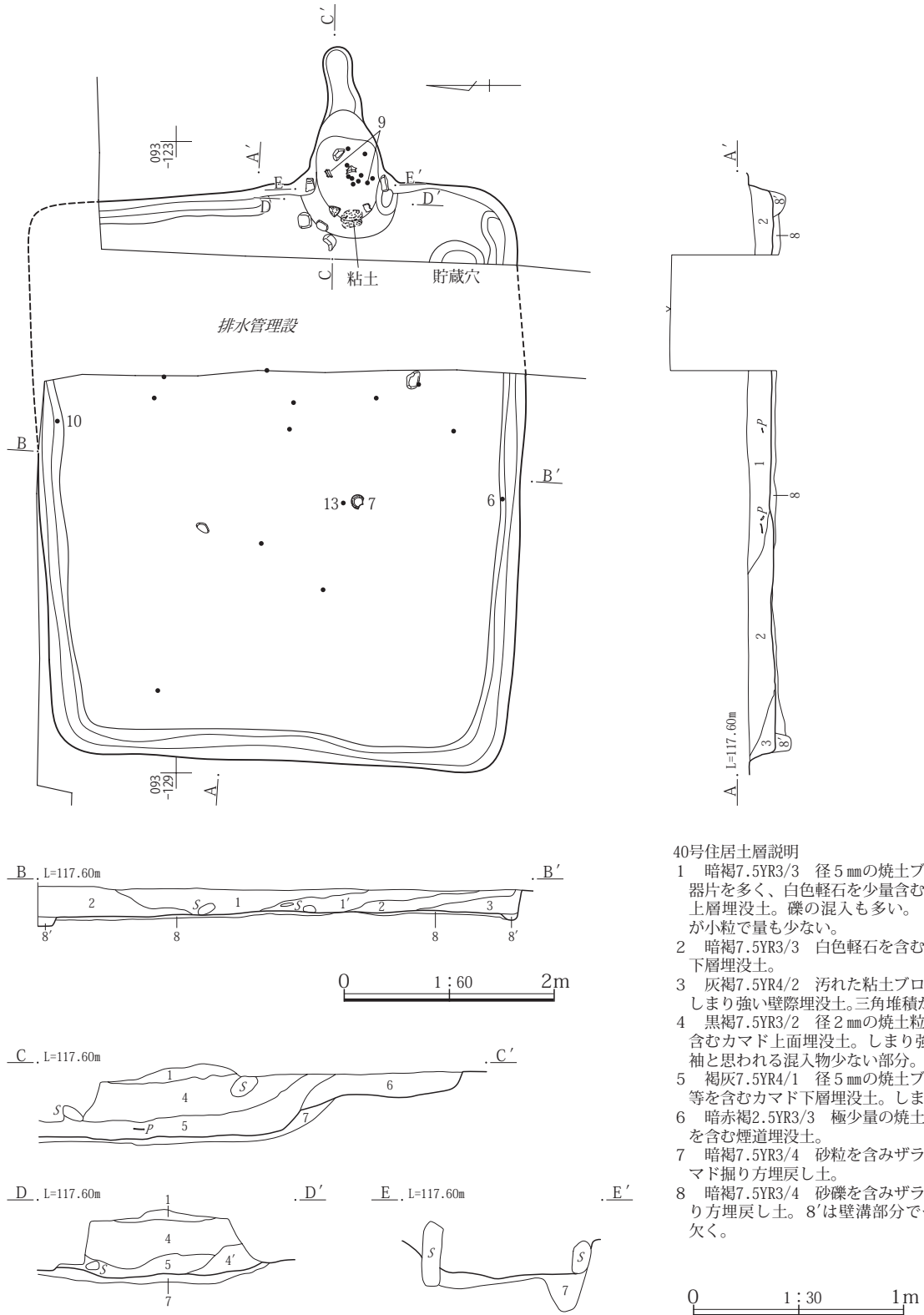
40号住居

(第79～81図 PL.16-③～⑤、53 遺物観察表237頁)

西調査区は住居棟数は少ないが、弥生時代後期から古墳時代前期の東調査区にない住居が見られる。反面、古

墳時代後期以降は本住居を含む2棟のみの確認で、いずれも奈良時代の遺構である。

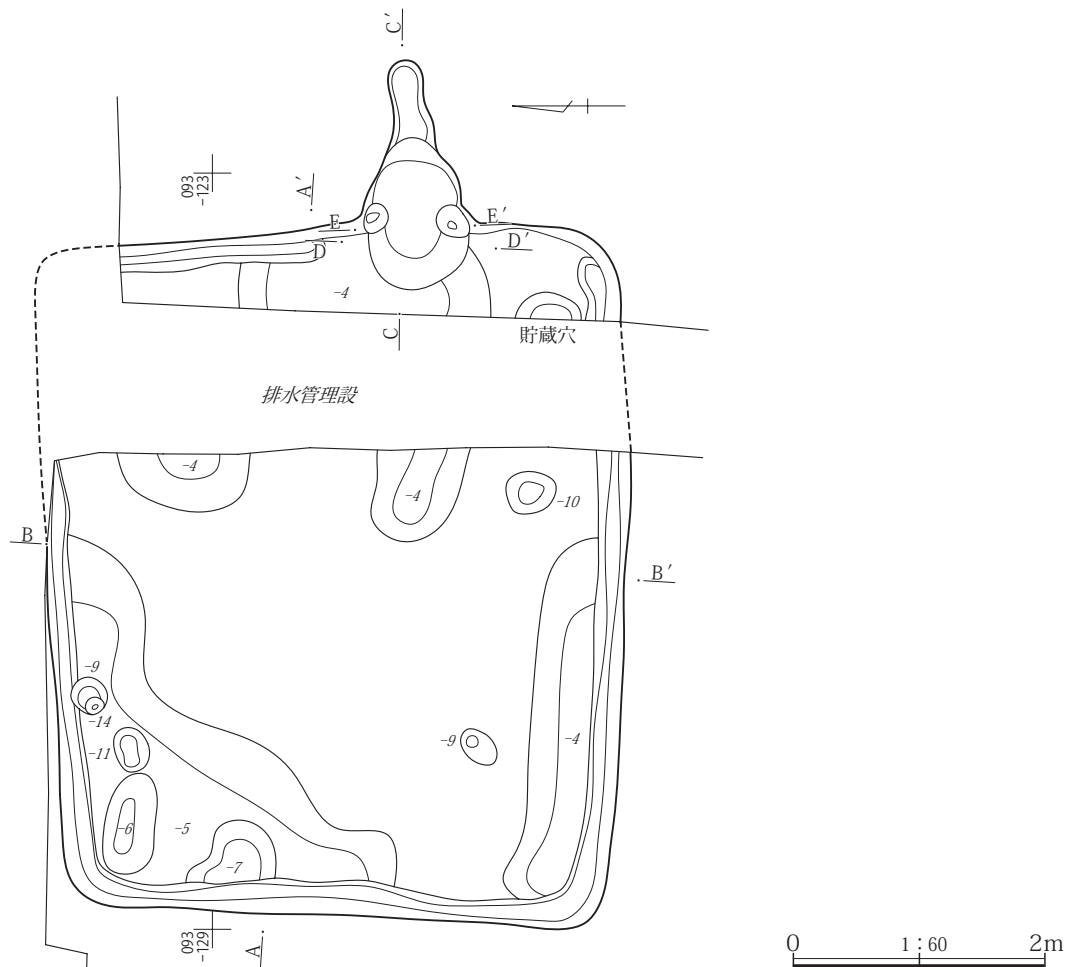
位置 089～094、-122～128グリッドにある。調査区境や障害物にかかり、全容を把握できていない。



40号住居土層説明

- 1 暗褐7.5YR3/3 径5mmの焼土ブロック・土器片を多く、白色軽石を少量含むしまり強い上層埋没土。礫の混入も多い。1'は混入物が小粒で量も少ない。
- 2 暗褐7.5YR3/3 白色軽石を含むしまり強い下層埋没土。
- 3 灰褐7.5YR4/2 汚れた粘土ブロックを含むしまり強い壁際埋没土。三角堆積が見られる。
- 4 黒褐7.5YR3/2 径2mmの焼土粒をわずかに含むカマド上面埋没土。しまり強い。4'は袖と思われる混入物少ない部分。
- 5 褐灰7.5YR4/1 径5mmの焼土ブロック・灰等を含むカマド下層埋没土。しまり弱い。
- 6 暗赤褐2.5YR3/3 極少量の焼土・炭化物粒を含む煙道埋没土。
- 7 暗褐7.5YR3/4 砂粒を含みザラザラするカマド掘り方埋戻し土。
- 8 暗褐7.5YR3/4 砂礫を含みザラザラした掘り方埋戻し土。8'は壁溝部分でややしまり欠く。

第79図 40号住居(1)



第80図 40号住居(2)

規模形状 南北軸長4.49m、東西軸長5.24mの長方形を呈している。残存する各隅は丸みが少なく、各辺は直線的で整った形状である。

埋没土・壁 自然堆積の痕跡が認められる。

方位 N-89° E(長軸) N-86° E(カマド)

面積 復元[22.83]㎡

床面 一部で地山の小礫が露出している。北側へ低く傾斜していて南壁直下と8cmの比高差がある。不規則な掘り方があるが、大半は掘削時の窪みを埋め戻す程度の浅いものである。ピット状の窪みがあるが、支柱穴配置にはなく、深度は10cm以下の不明瞭なものである。

壁溝 カマド周辺を除いて幅13cm前後、深さ25~42cmの明瞭な壁溝が巡っている。ただし、住居廃絶時に埋め戻されていた可能性がある。

貯蔵穴 南東隅に残存範囲で径50cm、床面からの深さ20cmの窪みがあり、配置より貯蔵穴と思われる。

カマド 東壁南寄りにある。燃烧部は壁際から壁外にか

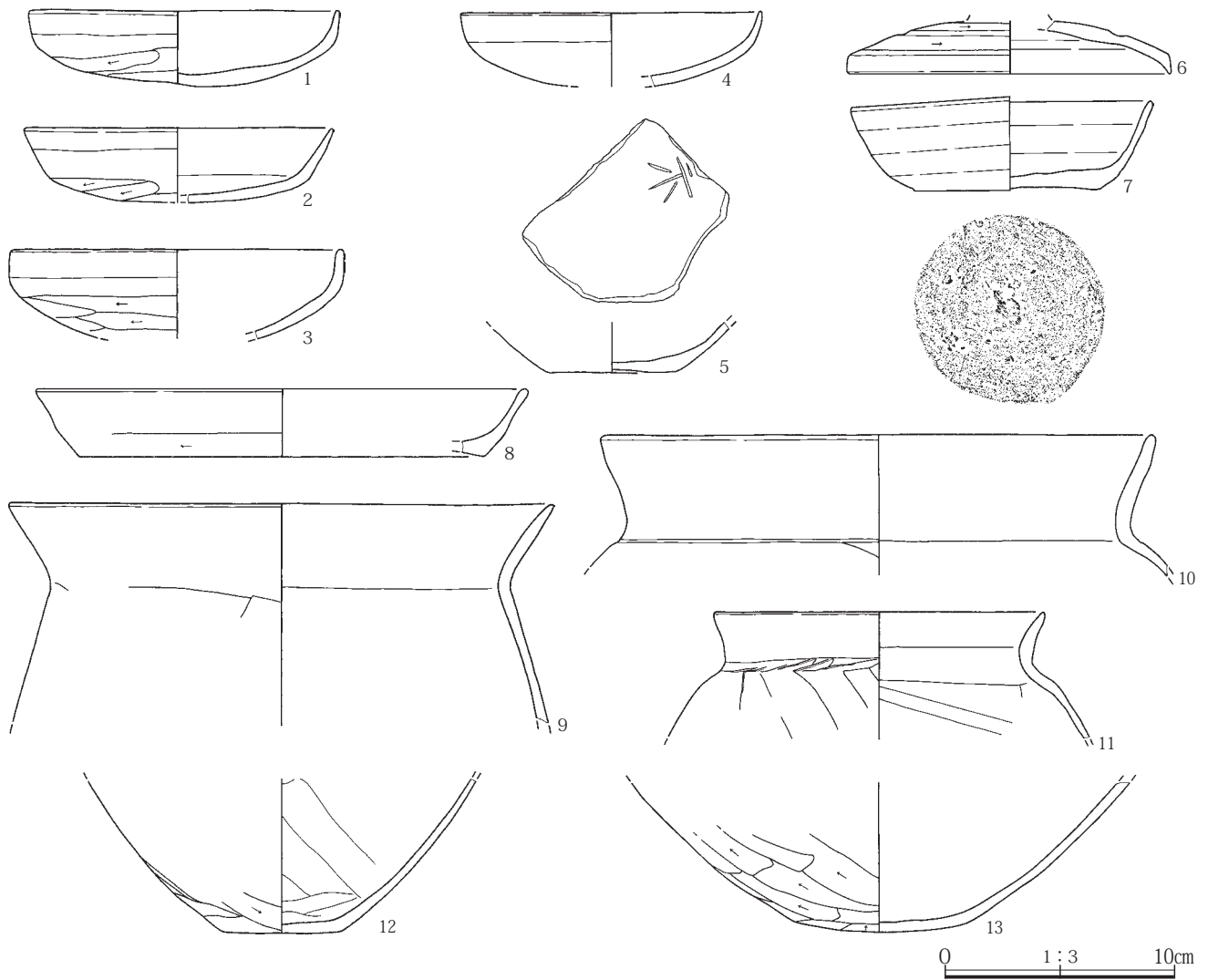
けての位置で、火床は住居床面から2cmほど窪んでいる。埋没土中の焼土や炭化物粒の混入は少ない。煙道は燃烧部から段をもって立ち上がり、壁外へ128cm張り出している。両壁際に袖石が据えられている。南袖基部がわずかに残存するが、北袖は不明瞭である。

その他 柱穴は確認できない。

遺物 出土遺物は比較的豊富で、土器13点を図示した。土師器甕9はカマド内、須恵器蓋6は壁際床直上の出土で本住居に確実に伴う土器である。須恵器杯7は床直上だが住居中央付近の出土である。埋没土内の土師器杯5は混入品と思われるが「示」と記された刻書が見られる。本遺跡唯一の古代の文字資料である。

図示した以外に土器片428点が出土している。須恵器は5点のみで、ほとんどが土師器壺甕類である。

所見 須恵器蓋にはカエリが見られず、須恵器杯は底径は広めで口径の2/3近いがやや小振りである。8世紀中頃の住居と想定できる。



第81図 40号住居出土遺物

41号住居

(第82・83図 PL.16—⑥～⑧、53 遺物観察表237・238頁)

東3区東端にある。周辺は住居の少ない一画で、北側の36号住居と約3m離れ、南側は住居が途切れている。南側をトレンチで失い、全容を把握できていない。

位置 068～072、-875～879グリッドにある。

規模形状 南北残存軸長3.07m、東西軸長3.77mを測る。残存する3辺のうち西辺が外側へ弧状に膨らむが、他は直線的で整っている。南西辺は隅が近いようで、西辺が短い台形状に歪む可能性がある。

埋没土・壁 床面直上に水平に近い堆積が見られる。二次的な床面の可能性があるが、不明瞭である。壁は垂直に近い立ち上がりが見られる。

方位 N-77°W(長軸) N-94°E(カマド)

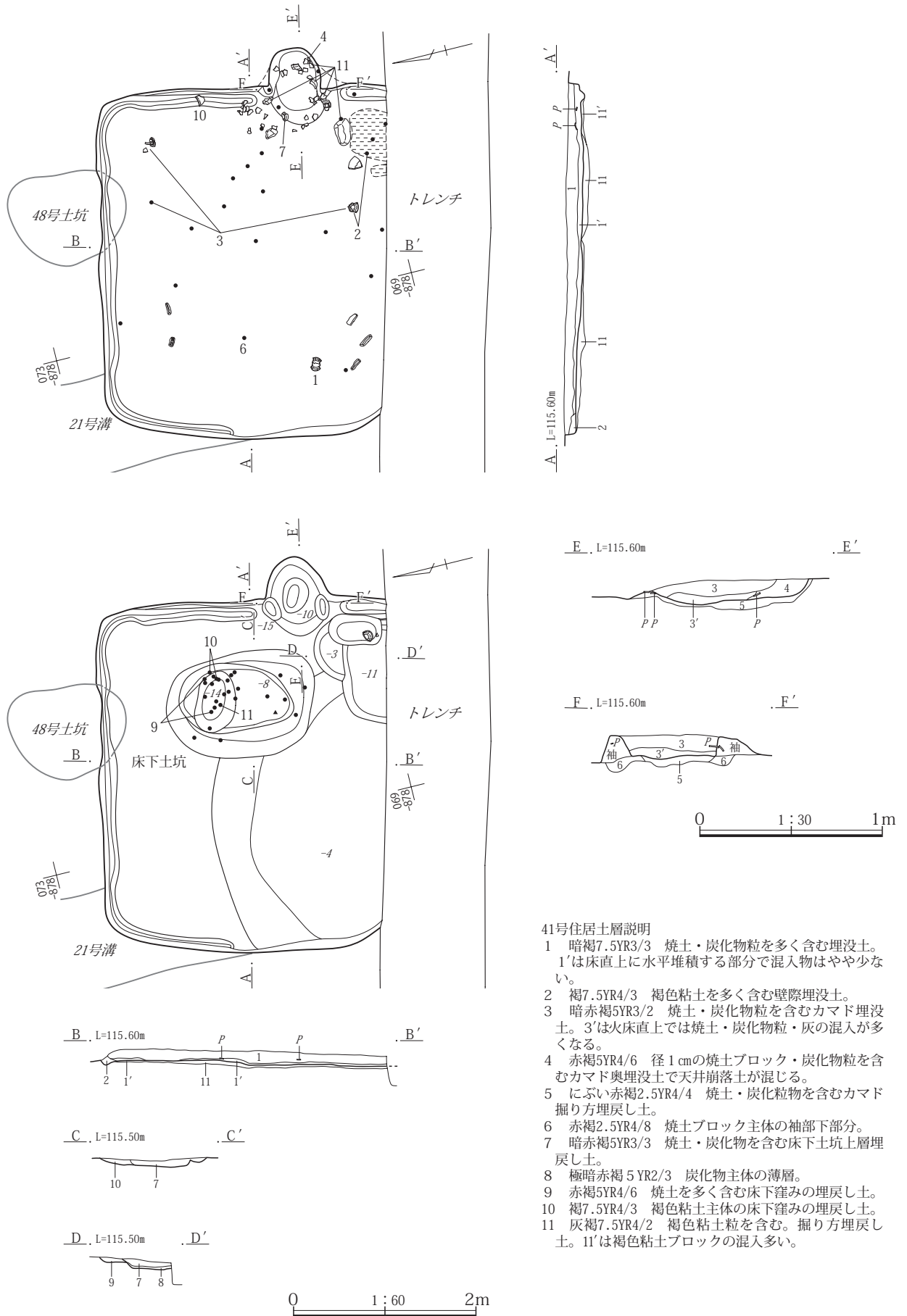
面積 残存(11.23)m²

床面 凹凸が多い床面で中央付近が低く、壁際と最大6cmの比高差がある。南側中心に浅く広い掘り方がある。このうち北東寄りの長軸1.6mの大型掘り込みを床下土坑と呼んだ。カマド周辺の掘り方埋没土には焼土・炭化物粒の混入が多く、カマド排土を埋めた床面の造り直しが行われた可能性がある。

壁溝 残存範囲ではカマド周辺と西壁南半を除いて深さ2～6cmの壁溝が見られる。

カマド 東壁中央にあり、やや南寄りに位置すると想定される。燃烧部は壁際にあり、火床は住居床面より5cm窪んでいる。袖は基部のみ痕跡が見られる。掘り方調査時に壁際に袖石を据えた痕跡と思われる2カ所の窪みを確認しているが、袖石は残存していないので、作り直されたカマドとなる可能性がある。煙道は残存しない。

その他 48号土坑に前出し、21号溝に後出している。ピツ



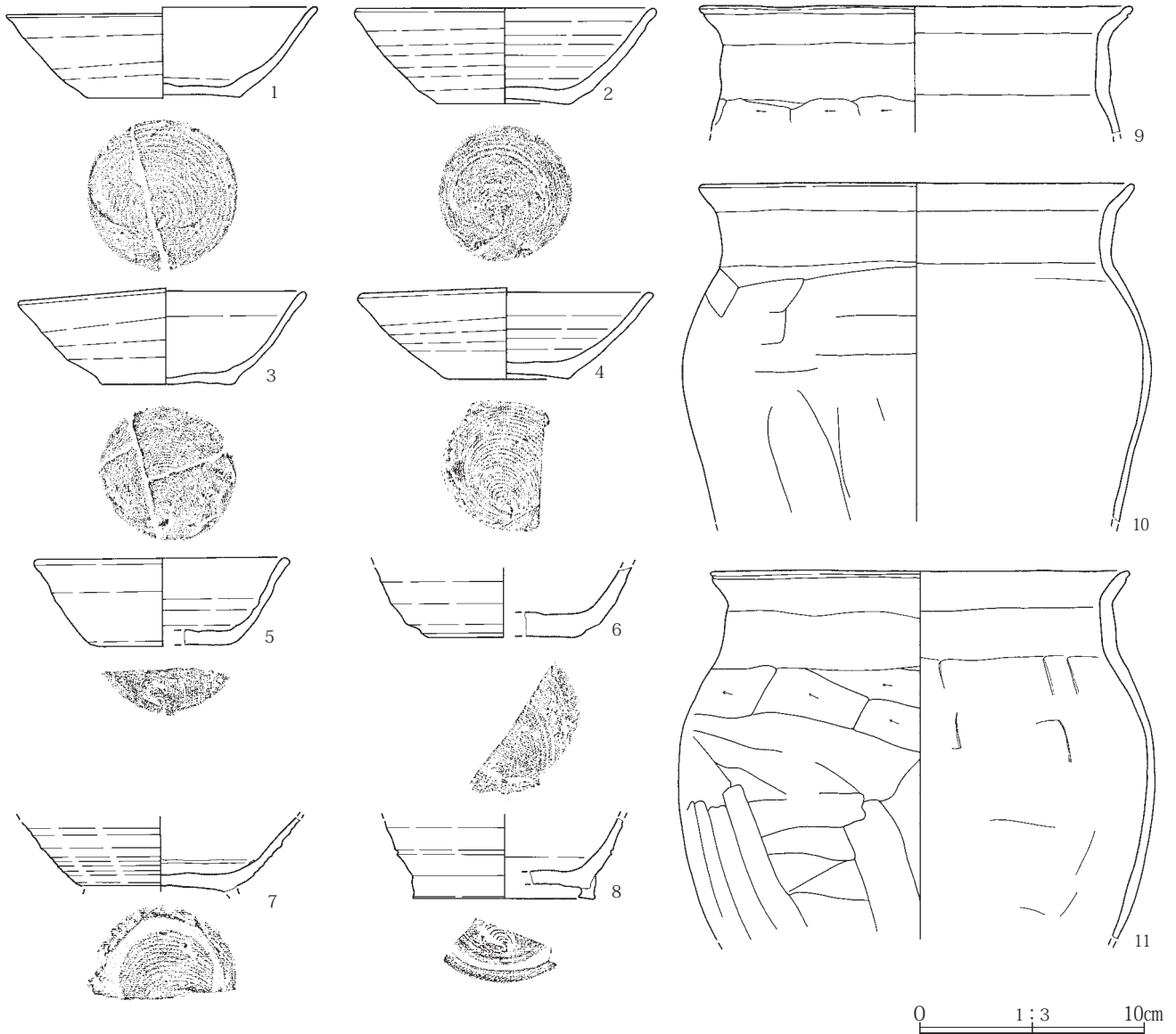
第82図 41号住居

トは確認できない。

遺物 カマド内とその周辺を主体に出土遺物は多く、土器11点を図示した。須恵器杯1・3が床直上、杯4、土師器甕11がカマド内の出土である。菰編石状の礫も住居内に散乱するような状態で出土している。床下土坑内からは土師器9～11の甕類がまとまって出土した。図示し

た以外の出土遺物も豊富で、土器片699点出土した。この内約8割が土師器で、須恵器はほとんどが杯類であった。灰釉陶器が2点混じるなど混入遺物も見られた。

所見 須恵器杯類は椀形への変化が見られるが、口縁の外反は弱い。羽釜は見られず、甕の口縁はコの字状を留めている。9世紀中頃の住居と想定できる。



第83図 41号住居出土遺物

42号住居

(第84図 PL.17-①・②、53 遺物観察表238頁)

東3区東側の住居の少ない一面にあり、本住居北側は広範な住居空白部が広がっている。また北カマドを持つ最も東側にある住居である。

位置 070～073、-889～892グリッドにある。

規模形状 南北軸長3.43m、東西軸長3.17mの南北にやや長い長方形を呈している。北辺はカマドを挟んでやや歪んでいるが、各隅は丸みが少なく、各辺は直線的で整った形状である。

第三章 調査の内容

埋没土・壁 ほぼ単層の埋没土で、堆積過程は明瞭にできない。

方位 N-7° E(長軸) N-3° E(カマド)

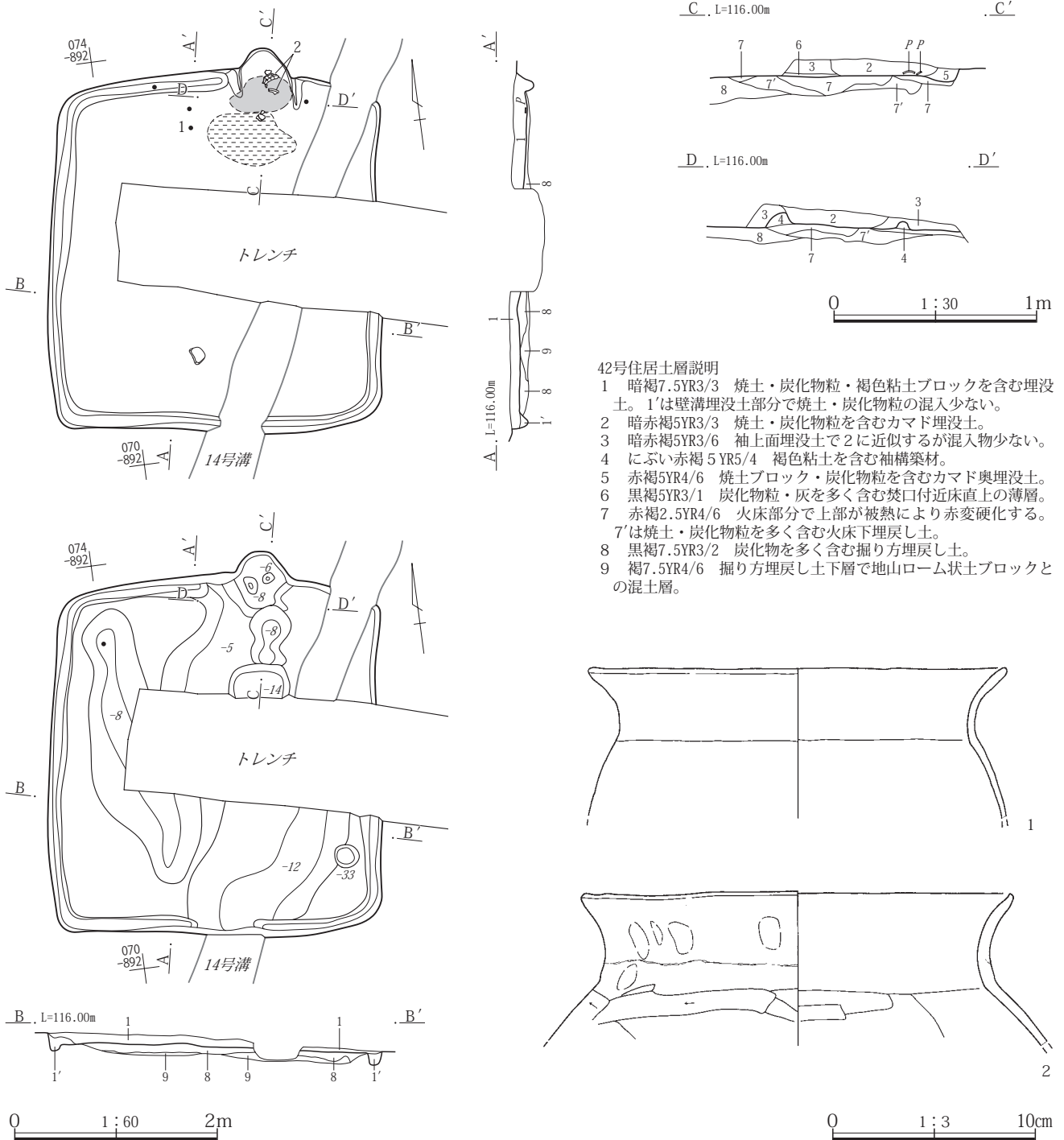
面積 10.32m²

床面 北東側へ低く傾斜していて、南西隅と15cmの比高差がある。四隅付近を除いたほぼ全体に深度に富む不規則な掘り方がある。

壁溝 北東隅周辺を除いて壁溝が巡っている。幅・深さとも15cm前後で、規模が比較的揃った施設である。

カマド 北壁中央やや東寄りにある。燃烧部は壁際であり、火床は住居床面と同じ高さにある。両袖がわずかに残存している。煙道は確認できない。

その他 14号溝に前出している。柱穴は確認できない。北東隅の貯蔵穴が想定される位置を14号溝が壊している



42号住居土層説明

- 1 暗褐7.5YR3/3 焼土・炭化物粒・褐色粘土ブロックを含む埋没土。1'は壁溝埋没土部分で焼土・炭化物粒の混入少ない。
- 2 暗赤褐5YR3/3 焼土・炭化物粒を含むカマド埋没土。
- 3 暗赤褐5YR3/6 袖上面埋没土で2に近似するが混入物少ない。
- 4 にぶい赤褐 5 YR5/4 褐色粘土を含む袖構築材。
- 5 赤褐5YR4/6 焼土ブロック・炭化物粒を含むカマド奥埋没土。
- 6 黒褐5YR3/1 炭化物粒・灰を多く含む焚口付近床直上の薄層。
- 7 赤褐2.5YR4/6 火床部分で上部が被熱により赤変硬化する。7'は焼土・炭化物粒を多く含む火床下埋戻し土。
- 8 黒褐7.5YR3/2 炭化物を多く含む掘り方埋戻し土。
- 9 赤褐7.5YR4/6 掘り方埋戻し土下層で地山ローム状土ブロックとの混土層。

第84図 42号住居と出土遺物

が、住居床面からの深さは5cm前後で、貯蔵穴はなかったと考えられる。

遺物 土師器甕2点を図示した。1は壁寄りの床直上、2はカマド内の出土で、どちらも本住居に確実に伴う土器である。図示した以外に土器片158点が出土したが、ほとんどが土師器壺甕類であった。

所見 甕は薄手で、コの字状口縁となる直前の形状と合わせ、8世紀後半の住居と想定できる。

43号住居

(第85・86図 PL.17-③~⑥、53 遺物観察表238頁)

東3区東側の住居の少ない一画で、42号住居の南西側2.5mに位置している。

位置 065~068、-893~896グリッドにある。

規模形状 南北軸長3.15m、東西軸長3.28mの方形を呈している。北東・南西の両隅がやや鈍角に開いていて、全体は平行四辺形気味に歪んでいる。

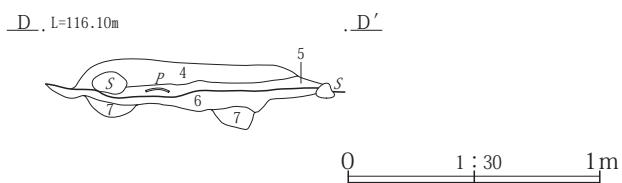
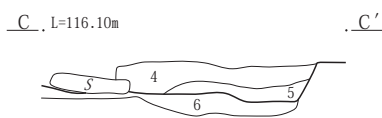
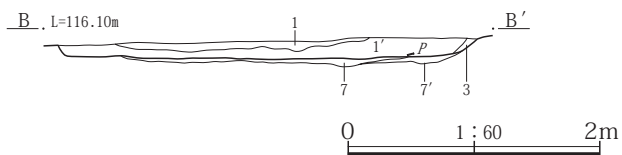
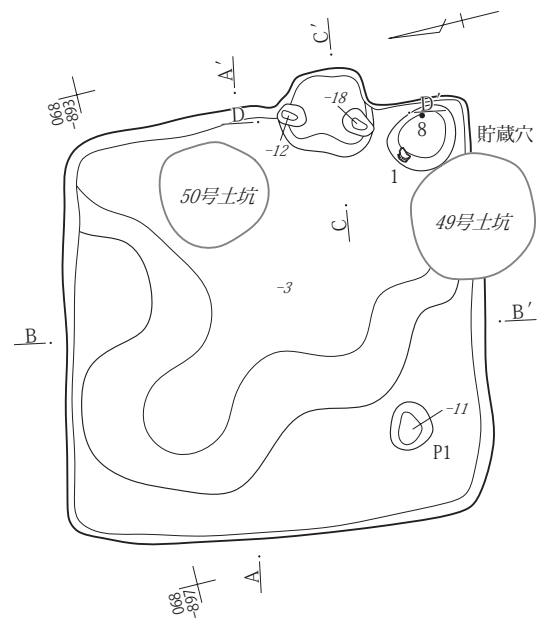
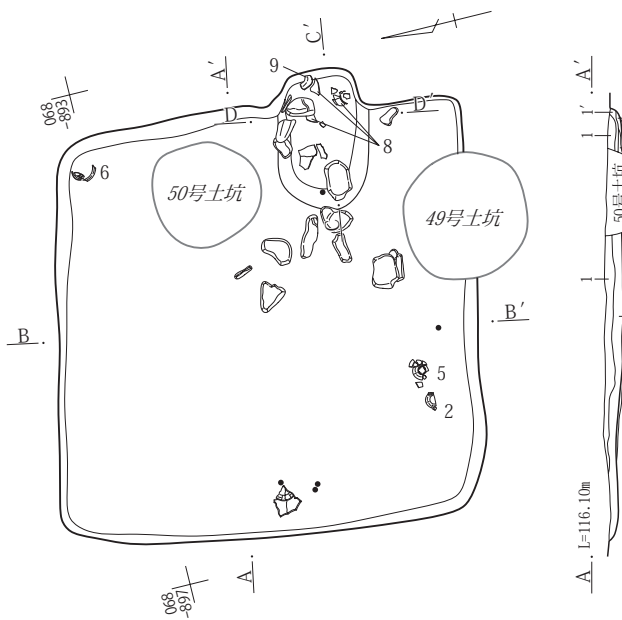
埋没土・壁 レンズ状の堆積が見られ、自然堆積の住居である。壁は緩やかな立ち上がりの部分が多い。

方位 N-79° W(長軸) N-99° E(カマド)

面積 10.09㎡

床面 地山礫混じり層直上の凹凸のある床で、住居中央付近が壁際より5cm前後窪んでいた。住居掘削時の窪みを埋め戻す程度のわずかな掘り方が見られたが、これによって地山礫面を覆っていた。

貯蔵穴 床下調査時に南東隅に径58×47cmの不整楕円形



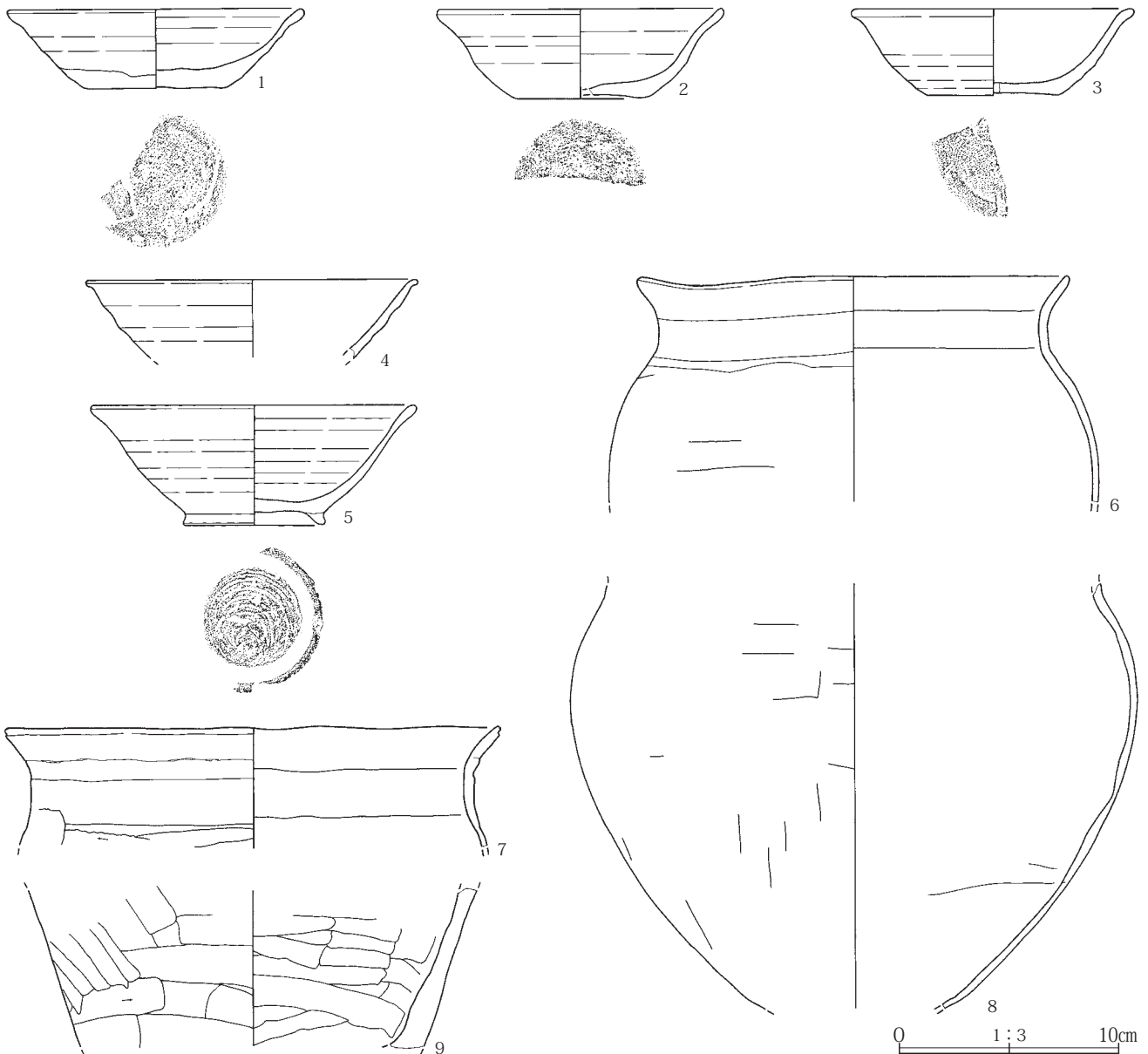
43号住居ピット一覧 (cm)

No.	長径×短径×深さ	種類・備考
1	38×33×11	不明瞭

43号住居土層説明

- 1 暗褐7.5YR3/3 少量の炭化物粒・焼土粒を含む埋没土。1'は焼土粒・炭化物の混入多い。
- 2 褐7.5YR4/4 褐色粘性土に焼土・炭化物粒を不均等に混入するカマド崩落土混土層。
- 3 明褐7.5YR5/6 褐色粘土粒主体。三角堆積の壁崩落土。
- 4 暗赤褐5YR3/2 焼土・炭化物粒を含むカマド上層埋没土。
- 5 暗赤褐5YR3/6 焼土・炭化物粒を多く含むカマド下層埋没土。下部に灰の薄層が見られる。
- 6 極暗赤褐5YR2/3 炭化物粒を多く含む火床下埋戻し土。
- 7 褐7.5YR4/3 褐色粘土粒を含む掘り方埋戻し土。7'は焼土・炭化物粒・軽石を含む。

第85図 43号住居



第86図 43号住居出土遺物

を呈し、床面からの深さ18cmの窪みを確認した。遺物の出土があり、配置より貯蔵穴として扱った。埋没土の記録を欠き、住居廃絶時に開口していたか不明である。

カマド 東壁やや南寄りにある。燃烧部は壁際にあるが、焚口前の窪みが住居内70cmの位置まで広がっている。火床は住居床面より3cm窪んでいる。カマド内からカマド前面にかけての床直上に多量の礫が出土しており、石組みのカマドが住居廃絶時に壊された可能性がある。掘り方調査時にカマド両袖石を据えた痕跡と思われる2カ所の窪みを壁際で確認しているが、袖石は残存せず上面に火床面が見られるので、作り直されたカマドとなる可能性がある。袖・煙道は確認できない。

その他 49・50号土坑に前出している。壁溝は確認できない。床下調査時に南西隅付近に径38cmの不整円形を呈したピット状の窪みを確認しP1とした。床面からの深さ11cmの不明瞭な窪みで、柱穴になるか判断できない。

遺物 土器9点を図示した。杯1は貯蔵穴内、杯2、椀5、甕6が床直上、甕8・9がカマド内出土で、本住居に確実に伴う遺物である。図示した以外の出土遺物も豊富で、土器片631点が出土している。土師器壺甕類主体で須恵器杯類も多く、41号住居に近似した傾向である。

所見 甕類口縁にコの字状の痕跡が残るが、羽釜は見られない。杯類は深めで、口縁端部外反の傾向が見られ始める時期のようで9世紀後半の住居と想定できる。

44号住居

(第87・88図 PL.17-⑦・⑧、54 遺物観察表238頁)

東3区中央東寄りにある。南側は調査区境にかかり全容を把握できていない。

位置 063~066、-911~917グリッドにある。

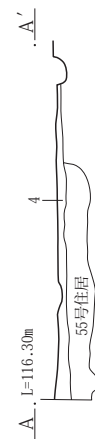
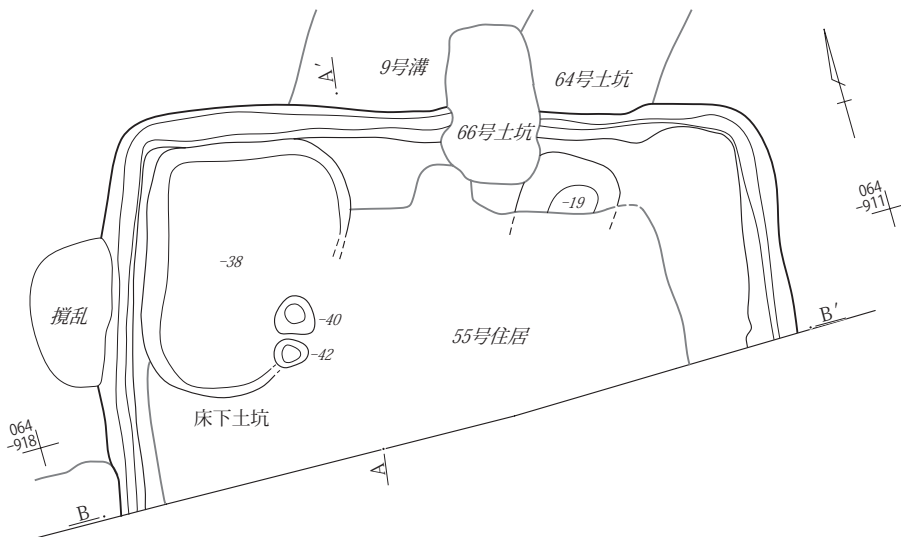
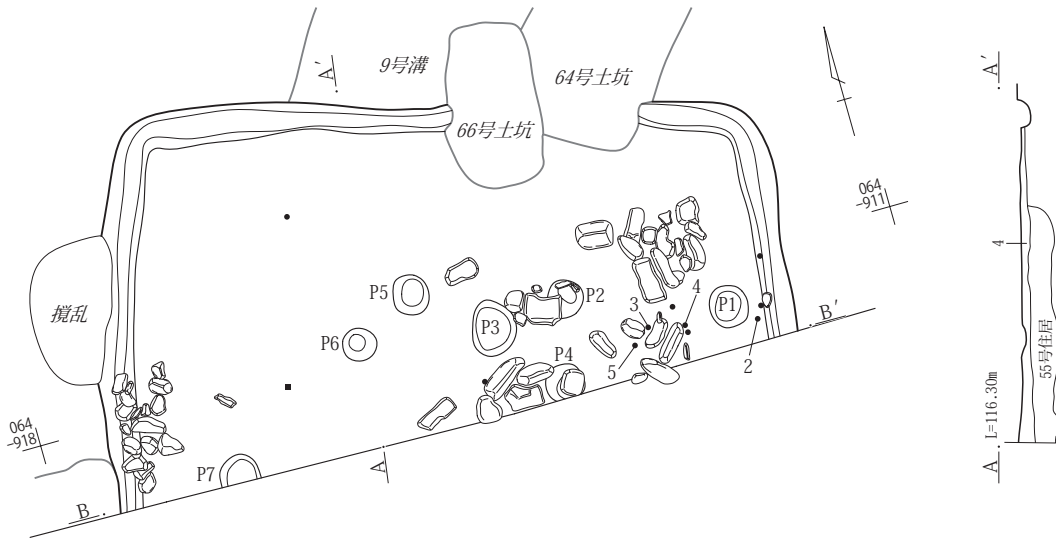
規模形状 南北残存軸長2.52m、東西軸長5.31mの方形を呈している。残存する各隅は丸みが少なく、各辺は直

線的で整った形状である。

埋没土・壁 単層の埋没土で、堆積過程は不明である。

方位 N-78°W 面積 残存(12.94)m²

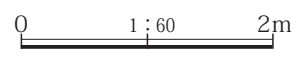
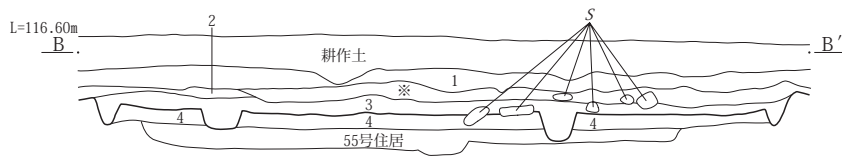
床面 地山礫混じり層直上の凹凸のある床で、住居中央付近が壁際より5cm前後窪んでいた。床面には地山礫より大きな礫が多量に見られ、掘り方内に一部がめり込むような状態の礫も多かった。人為的に運び込まれた礫と



- 44号住居土層説明
- 1 褐7.5YR4/3 軽石粒を多く含む旧表土。基本土層1層。
 - 2 暗褐7.5YR3/3 軽石粒・炭化物粒を含む表層埋没土で西側の不明瞭な窪みへ続く。
 - 3 暗褐7.5YR3/4 焼土粒・炭化物粒を含む埋没土。
 - 4 褐7.5YR4/4 褐色粘土を含み、焼土粒・炭化物粒を散見する掘り方埋戻し土。
- ※ 9号溝埋没土。

44号住居ピット一覧 (cm)

No.	長径×短径×深さ	種類・備考
1	34×31×16	
2	31×28×30	
3	44×36×23	
4	(37)×31×24	南隅調査区外
5	32×29×40	
6	28×26×27	
7	(23)×32×16	南隅調査区外



第87図 44号住居

第Ⅲ章 調査の内容

思われる。全域に深さ10cm前後の掘り方が見られ、地山の礫を除去したようだ。北西隅に方形を呈した深度に富む掘り方があり、床下土坑としたが55号住居との重複部分では明瞭にできなかった。

壁溝 調査範囲には幅25cm前後、床面からの深さ20cm前後の壁溝が全域で確認できる。

ピット 床面に7基、掘り方調査時に2基のピットを確認しているが、いずれも支柱穴配置に沿うものではない。

P 4・7は住居廃絶時に開口していた可能性がある。

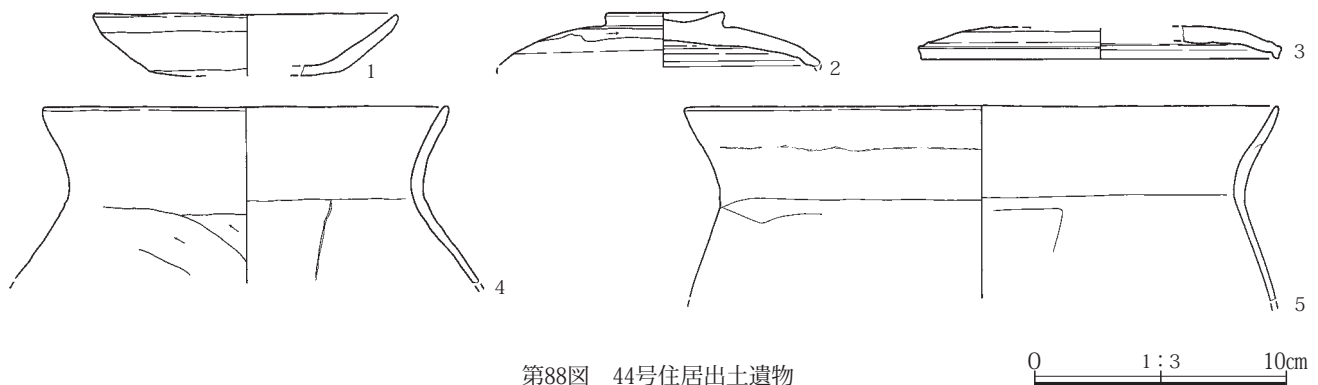
カマド 調査範囲では確認できない。

その他 55号住居に後出し、64・66号土坑、9号溝に前出している。礫には細長いものが含まれるが長さ30cmを超えるものが多く、菰編石ではない。

遺物 礫内に混じるようにして出土した土器5点を図示した。壁際の須恵器蓋2と床直上出土の土師器甕4が本住居の時期推定に適した遺物である。

図示した以外に土師器壺甕類主体の土器片が155点出土している。

所見 甕類口縁はコの字状以前の形状で、須恵器蓋は大きな摘みが付く。8世紀中頃の住居と想定する。



第88図 44号住居出土遺物

45号住居

(第89図 PL.18-①・②、54 遺物観察表238・239頁)

28・29・44号住居等と共に、東3区中央の住居群東隅に位置する住居である。

位置 070~074、-917~920グリッドにある。8号溝脇のピットの多い一画である。

規模形状 南北軸長2.88m、東西軸長2.44mの長方形を呈している。各隅は丸みが強く、不整な形状である。

埋没土・壁 壁際から緩やかに埋没したようで、自然堆積の状況が観察できる。

方位 N-8°E

面積 6.62㎡

床面 地山礫が一部露出している。細かな凹凸の多い不整な床面で、5cm前後の比高差がある。住居掘削時の窪みを埋め戻す程度の弱い掘り方が全面に見られ地山の小礫を覆うようにしている。

ピット 浅く不明瞭なピットを3基確認している。いずれも支柱穴配置に沿った施設ではない。P 1・2は壁際

の焼土下で確認したものである。

カマド カマドは確認できない。東壁側に作られるはずで、南東隅付近に焼土等が多いのは、その痕跡となる可能性がある。

その他 28号住居や8号掘立柱建物P 3が近接位置にあり同時存在は不可能である。壁溝等は確認できない。炭化材の出土はないが南壁下には焼土混じりの埋没土が顕著で、火災住居の可能性はある。

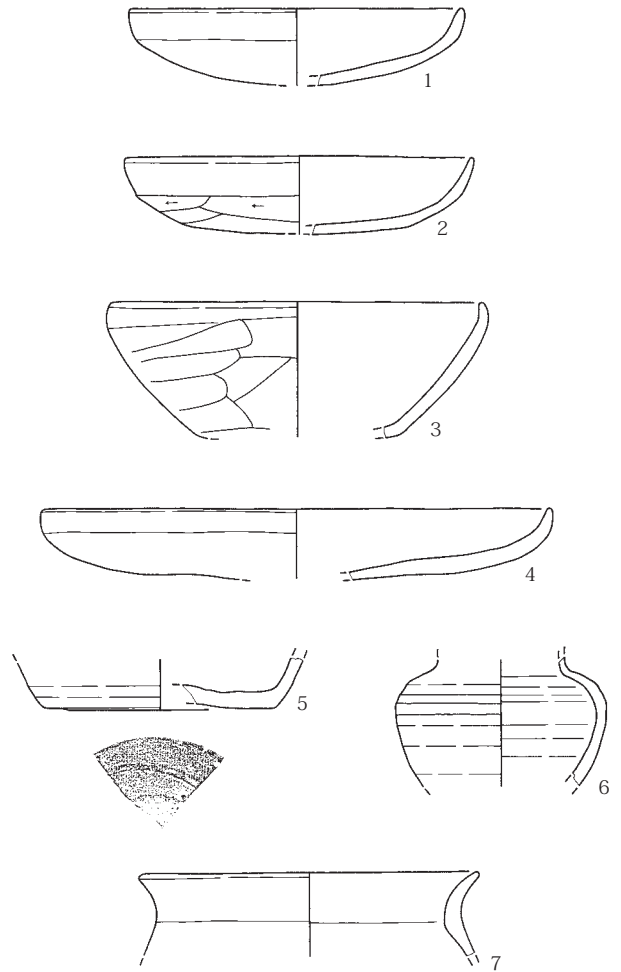
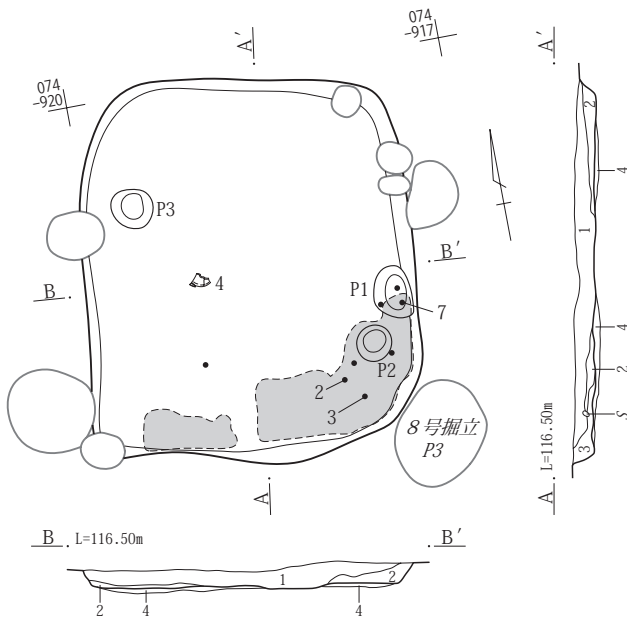
遺物 南東隅付近を中心に土器が出土し、7点を図示した。土師器杯3、盤4は床直上、小型甕7はP 1上床面レベルでの出土で、本住居に確実に伴う土器である。

図示した以外に土器片196点が出土している。この内土師器壺甕類が3/4を占めていた。

所見 出土杯類は口径が広く、盤状の土器も混じり8世紀中頃の住居と想定できる。カマドを持たない竪穴状遺構の可能性もあるが、本住居と同規模のカマドを持つ住居調査例に29・34号住居などがある。

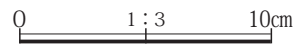
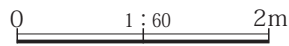
45号住居ピット一覧 (cm)

No.	長径×短径×深さ	種類・備考
1	42×31×4	不明瞭
2	19×18×12	
3	34×31×15	



45号住居土層説明

- 1 暗褐7.5YR3/3 焼土・炭化物粒・軽石を含む上層埋没土。
- 2 褐7.5YR4/4 褐色粘土粒を多く含む下層埋没土。
- 3 暗赤褐5YR3/3 径5mmの焼土ブロックを含む壁際埋没土。
- 4 褐7.5YR4/4 褐色粘土をブロック状に含む掘り方埋戻し土。



第89図 45号住居と出土遺物

46号住居

(第90図 PL.18-③~⑤、54 遺物観察表239頁)

東3区中央住居群の南端にある。南側は調査区境となり、全容を把握できていない。東西両辺は前出する56号住居とほぼ同じ位置にあり、軸方向も近似している。1棟の住居の掘り直しの可能性もあり、56号住居と併せて記載する。

位置 063~065、-928~932グリッドにある。

規模形状 南北残存軸長1.38m、東西軸長3.86m部分が残存している。北東隅は鈍角気味に開いていて、東辺が西辺より短い台形状に歪む可能性がある。

埋没土・壁 壁際のいわゆる三角堆積の後、水平に近い堆積となっている。人為的埋戻しの痕跡は見られない。

方位 東西軸N-83°W

面積 残存(5.31)m²

床面 細かな凹凸があるが、ほぼ水平な床面である。住居掘削時の窪みを埋め戻す程度の弱い掘り方が見られる。56号住居上に貼床は施していないが、掘り方埋戻し土と同質土が同住居上面でもブロック状に観察できる。

その他 56号住居に後出し、62号土坑に前出している。カマド・柱穴・壁溝等の施設は確認できない。

遺物 出土遺物は少なく、図示できた土器は須恵器蓋1点のみだが、北壁に密着して床直上から出土した本住居に確実に伴う土器である。

図示した以外に土器片23点が出土している。ほとんどが土師器で、杯類が全体の1/4を占めていた。

所見 出土遺物はわずかにカエリのある口径の広い蓋で、8世紀前半の住居と想定できる。

56号住居

(第90図 PL.18-⑤)

46号住居掘り方調査時に把握できた住居である。

位置 063・064、-928～932グリッドにある。南側の大半は調査区境にかかり、全容は把握できていない。

規模形状 南北残存軸長0.67m、東西軸長3.33mの残存である。調査できた範囲では東西両辺は46号住居東西辺の直下であり、北辺は同住居南側75cmの位置にほぼ平行に並んでいる。本住居は46号住居の拡張前の住居となる可能性がある。

埋没土・壁 残存するのはわずかだが、単層で確実な人為的埋戻しの痕跡は見られない。

方位 東西軸N-87°W

面積 残存(2.51)m²

床面 比高差4cm程度の細かな凹凸があるが、ほぼ水平な床面である。掘り方は確認できない。

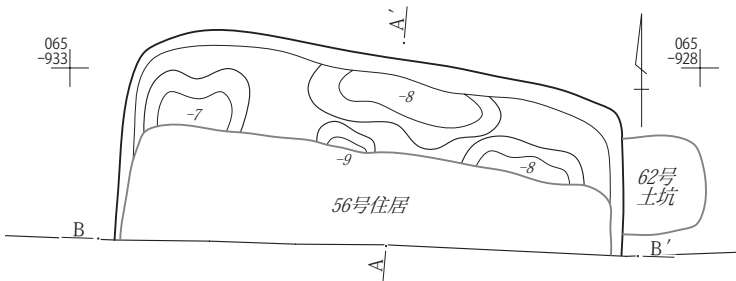
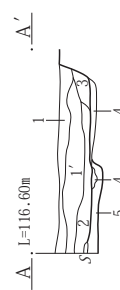
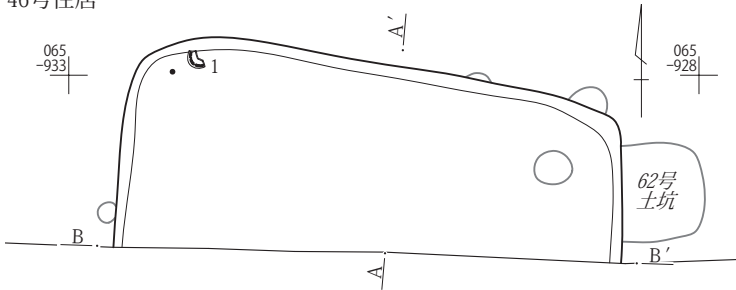
壁溝 北側を中心に、壁直下は床面より2cm前後低くなっていて壁溝の可能性はあるが、あまり明瞭ではない。

その他 46号住居、62号土坑に前出している。カマド・炉およびピット等の施設は確認できない。

遺物 土器の小破片を含め遺物の出土は全くなかった。

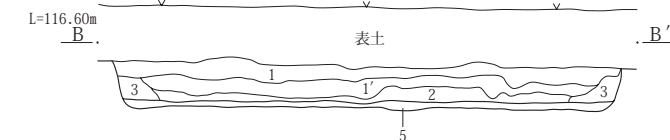
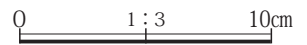
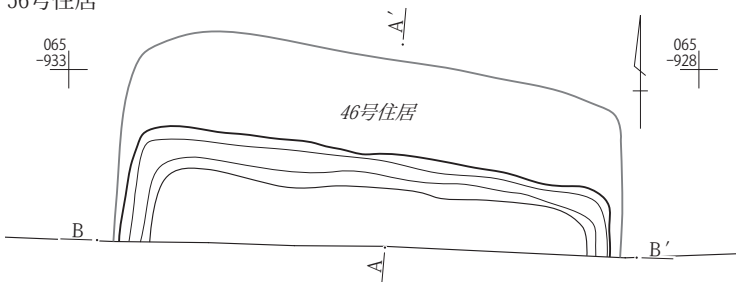
所見 遺構の状況より、46号住居から大きく遡らない時期で、8世紀の住居と想定できる。

46号住居



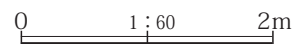
46号住居 1

56号住居



46・56号住居土層説明

- 1 暗褐7.5YR3/3 少量の褐色粘土粒・炭化物を含む上層埋没土。1'は褐色粘土ブロックの混入多い。
- 2 暗褐7.5YR3/4 炭化物粒を含む粘性土の下層埋没土。
- 3 黒褐7.5YR3/1 炭化物粒・褐色粘土粒を含む粘性土の壁際埋没土で三角堆積が見られる。
- 4 橙7.5YR6/8 汚れた粘土ブロック主体の46号住居掘り方埋戻し土。
- 5 黒褐7.5YR3/2 橙色粘土ブロックを多く含む粘性土の56号住居埋没土。



第90図 46・56号住居と46号住居出土遺物

47号住居

(第91図 PL.18-⑥~⑧、54 遺物観察表239頁)

東3区中央の南寄りに位置している。規模が小さいが、遺物の出土もあり住居として扱った。5号竪穴状遺構が南側40cmの位置に近接している。

位置 067~069、-936~940グリッドにある。

規模形状 南北軸長1.93m、東西軸長3.04mの東西に長い長方形を呈している。各隅は丸みが少ないが、各辺は湾曲気味でやや不整な形状である。

埋没土・壁 埋没土は単層で、埋没過程を想定できない。

方位 N-71°W

面積 復元[5.60]m²

床面 細かな凹凸が多い。全体では中央付近が窪み、東西両壁下と5cmの比高差がある。住居掘削時の窪みを埋

め戻す程度の弱い掘り方が全面に見られる。

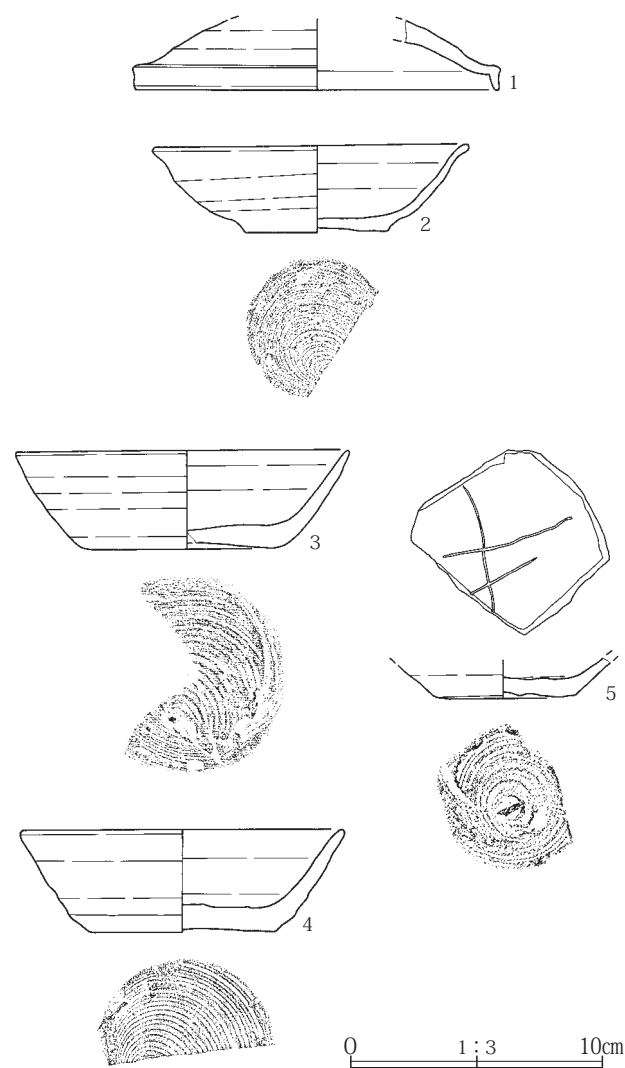
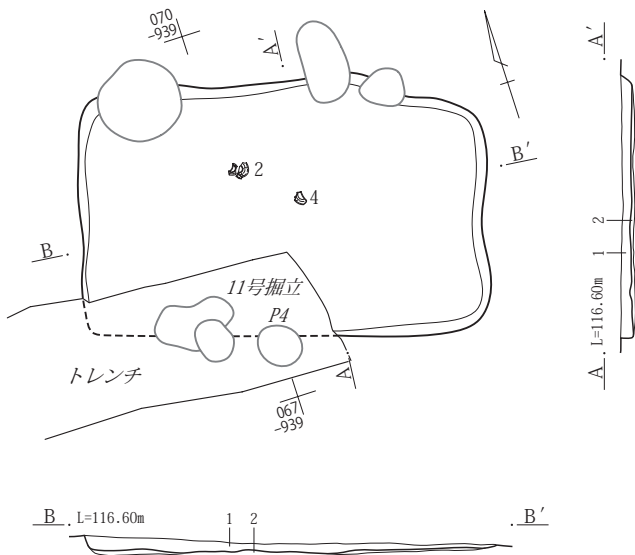
カマド カマド・炉とも痕跡を含め確認できない。

その他 壁溝・ピット等は確認できない。

遺物 土器5点を図示した。いずれも須恵器供膳具類である。杯2・4が床面よりやや高い、住居中央付近から出土した。杯5の内底には焼成後のへラ描きがある。他は埋没土内の確認で、確実に本住居に伴う遺物はない。

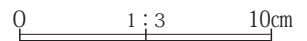
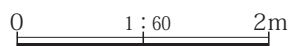
図示した以外の遺物は土師器を主体とする土器片が72点出土している。

所見 出土遺物はいずれも底径がやや広めの9世紀前半頃で、遺構の年代と想定できる。主な住居施設がなく、竪穴状遺構と称す遺構に近い。復元数規模が本遺跡の住居中最も面積は狭い。ただし、ほぼ同面積でカマドのある29号住居の調査例もある。



47号住居土層説明

- 1 暗褐7.5YR3/4 軽石を少量含む住居埋没土。
- 2 暗褐7.5YR3/3 褐色粘土ブロックを多く含む掘り方埋戻し土。



第91図 47号住居と出土遺物

48号住居

(第92・93図 PL.19-①~④、54 遺物観察表239頁)

東3区中央住居群の南寄りにあり、近接する住居が多い。

位置 070~074、-938~942グリッドにある。

規模形状 南北軸長3.37m、東西軸長3.88mの方形を呈している。北辺が南辺より30cm短く、やや台形気味に歪んでいる。各隅は丸みが少なく、整った形状である。

埋没土・壁 中層付近から上層にかけて不揃いな礫の出土がきわめて多い。地山周辺の礫より大きな径30cm大の礫が含まれているが、棒状の礫は少ない。本住居埋没過程で意図的に投げ込まれているが、埋没土は水平に近い堆積で、確実な人為的埋戻しの痕跡は見られない。

方位 N-83°W(長軸) N-97°E(カマド)

面積 12.68m²

床面 凹凸の多い床面で8cm前後の比高差が生じている。部分的にやや深度のある掘り方が見られる。小礫が多い地山を掘り込んでいる。

壁溝 カマド周辺を除いて壁溝が巡っている。深度は一定でなく、北壁下東寄りで床面から10cm以下の部分があ

るが、他は4~6cm前後の部分が多い。

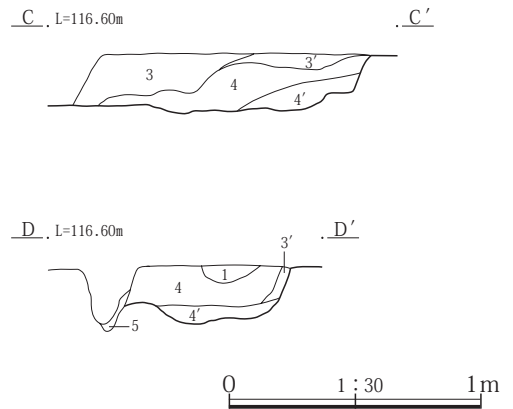
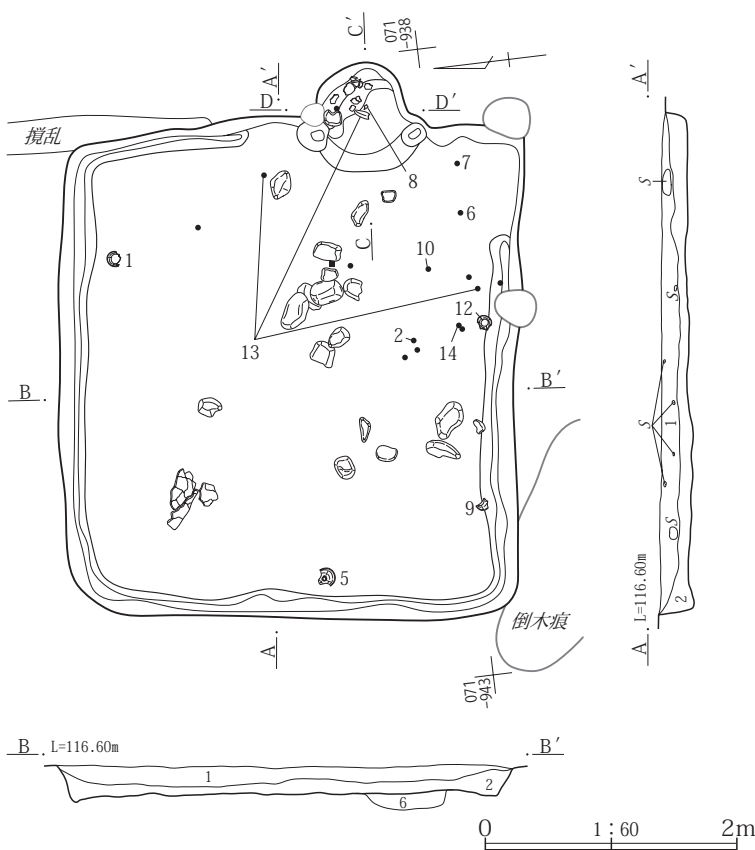
カマド 東壁南寄りにある。燃烧部は壁際にあり、火床は住居床面より3cm窪んでいる。両壁際には袖石の抜き取り痕があり、石組みの焚口であったと思われる。カマド内に礫が多いが、住居埋没土内の礫よりはるかに小粒で、石組み燃烧部構築用石材としても小さい礫である。

その他 倒木痕に後出している。近接する47・50・52号住居とは60cm以内の間隔で、同時存在は難しい。

遺物 出土遺物は比較的豊富で、住居内に散乱する土器14点を図示した。土師器杯1、須恵器蓋5、杯9・12は床面より浮いた状態だが壁間際にあり、杯8はカマド内の出土で本住居に確実に伴う土器である。須恵器蓋7は床下調査時の遺物である。

図示した以外の遺物は土師器片が主体の土器片が320点出土している。

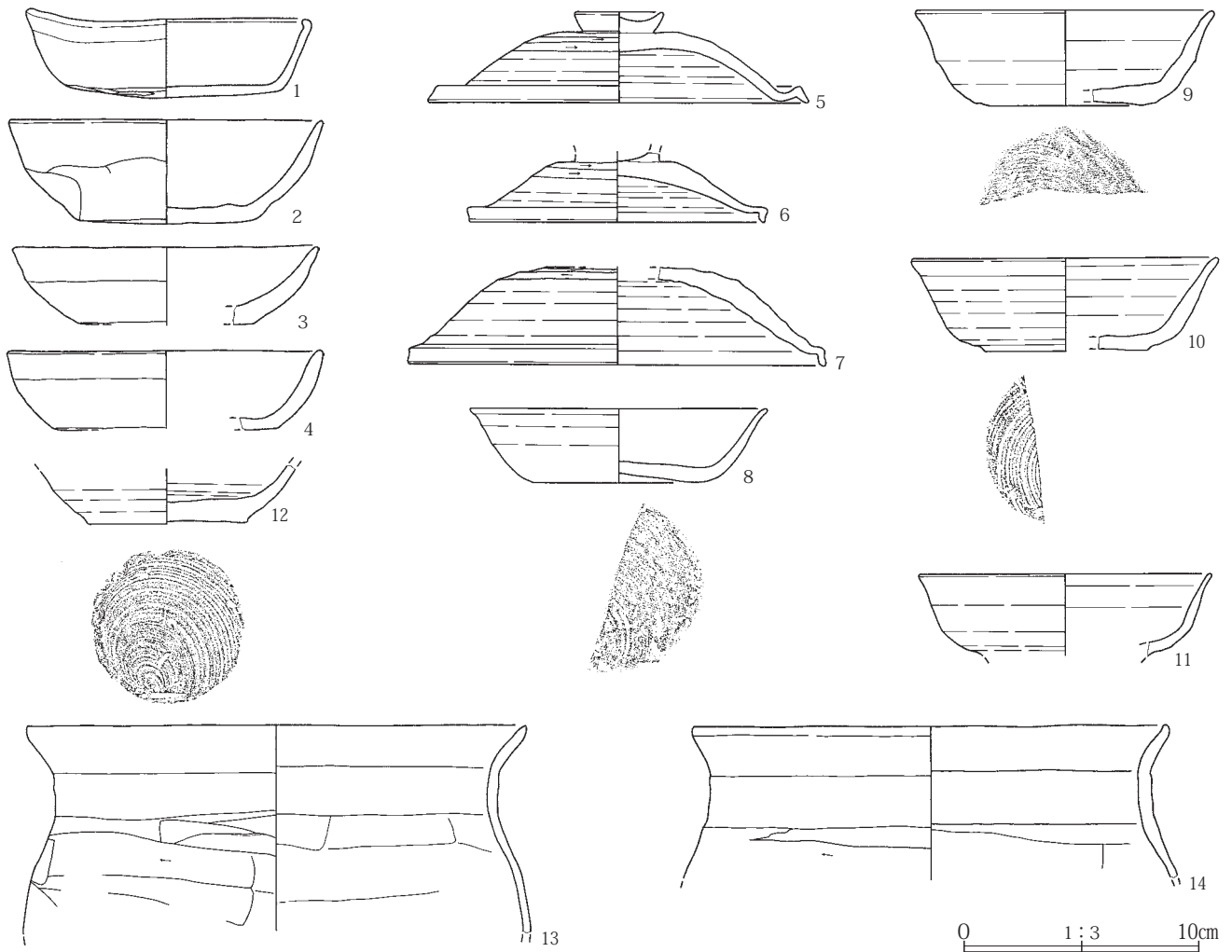
所見 須恵器杯類は底径が広めで椀皿への分化以前の形態で、土師器甕口縁部はコの字状である。9世紀前半の住居と想定できる。



48号住居土層説明

- 1 黒褐7.5YR3/2 粒径不揃いの礫を多く含む、ややしまり強い住居上層埋没土。
- 2 暗褐7.5YR3/4 明褐色土ブロックを含む粘性土の住居下層埋没土。
- 3 褐7.5YR4/3 径2~3mmの焼土ブロックを少量含むカマド上層埋没土。ややしまり強い。3'はやや大粒の焼土ブロックを多く含む。
- 4 暗褐7.5YR3/3 径5mmの焼土ブロックを散見する、しまり弱いカマド下層埋没土。4'は焼土ブロックを多く含む、炭化物粒・灰等が混じる。
- 5 暗褐7.5YR3/3 袖石の抜き取り痕。しまり弱い。
- 6 黒褐7.5YR3/2 径5~10mmの明褐色土ブロックを少量含む。やや粘性の掘り方埋戻し土。

第92図 48号住居



第93図 48号住居出土遺物

49号住居

(第94図 PL.19—⑤～⑧、20—①・②、54 遺物観察表239・240頁)

東3区中央住居群の中央付近に位置している。

位置 070～074、-930～936グリッドにある。

規模形状 南北軸長2.89m、東西軸長5.38mの長方形を呈している。長軸が短軸の1.8倍以上の著しく細長い形状になる。西辺が東辺より30cm短い台形状にやや歪み、各辺は蛇行気味である。

埋没土・壁 ほぼ単層で堆積過程は不明である。

方位 N-82°W(長軸) N-93°E(カマド)

面積 14.93㎡

床面 小礫の多い地山を掘り込んでいる。北東側へ低く傾斜していて、南西隅と12cmの比高差がある。一部にわずかな掘り方があるが、前出する50号住居床面とほぼ同レベルの床面であるため、どちらの住居の掘り方が明確

にできない。中央付近には被熱面があるが、50号住居に伴う施設と思われる。

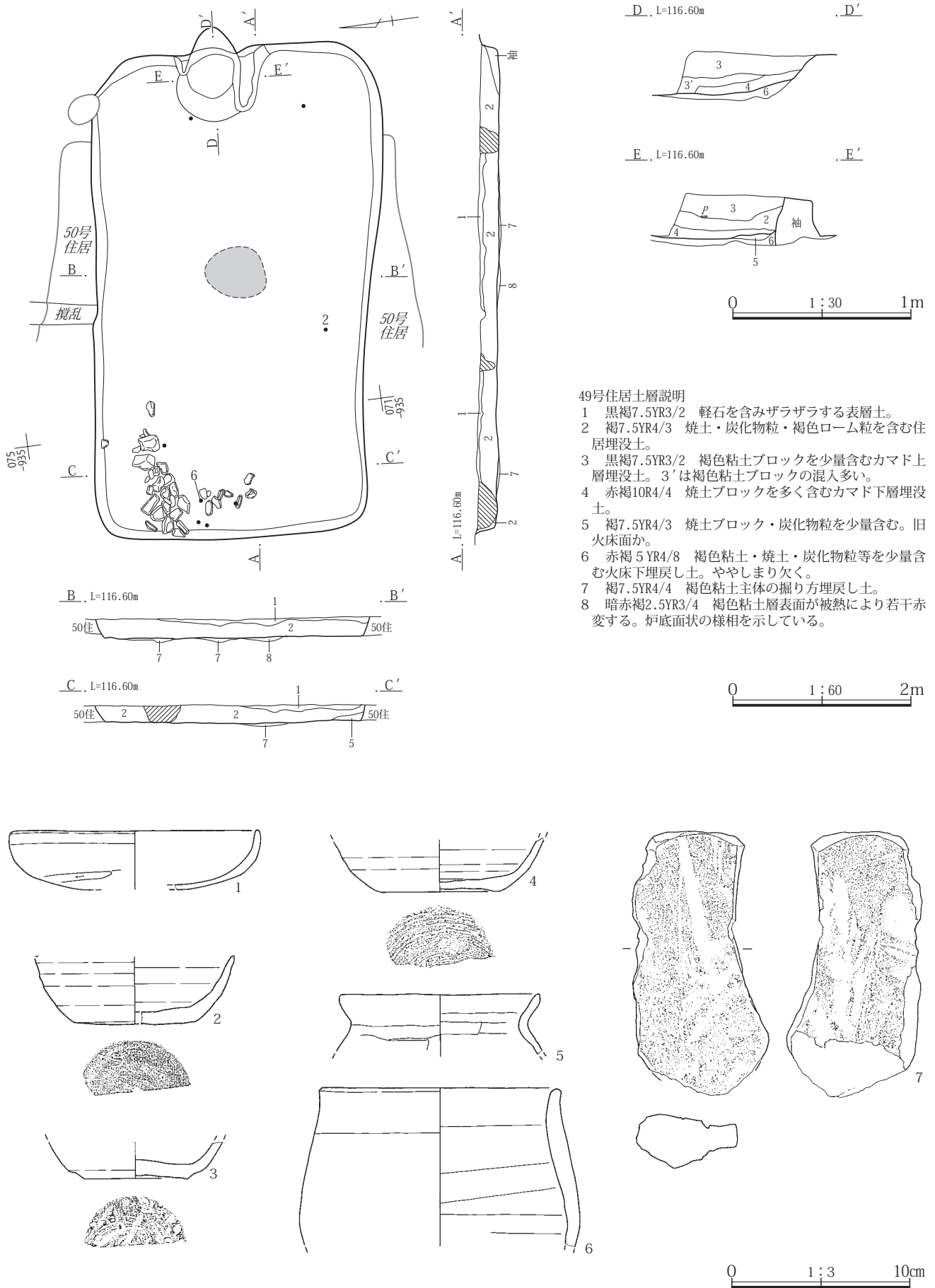
カマド 東壁中央やや北寄りにある。燃烧部は住居内にあり、火床は住居床面より2cm窪んでいる。南袖のみ残存している。煙道は壁外へ23cm張り出している。

その他 50号住居に後出している。壁溝・ピット等は確認できない。西側を中心に多量の礫を出土しているが、地山礫よりはるかに大きな礫で、床面より浮いた状態の出土であった。住居埋没後に廃棄されたものと思われる。

遺物 土器6点と石製品1点を図示した。須恵器杯2、土師器小型甕6が壁寄りの床直上の出土で、本住居の時期推定に有用な土器と考えられる。

図示した以外にも遺物が多く、土器片737点が出土しているが97%を土師器が占めている。

所見 須恵器は底径が広く、8世紀の住居と想定できる。



49号住居土層説明

- 1 黒褐7.5YR3/2 軽石を含みザラザラする表層土。
- 2 褐7.5YR4/3 焼土・炭化物粒・褐色ローム粒を含む住居埋没土。
- 3 黒褐7.5YR3/2 褐色粘土ブロックを少量含むカマド土層埋没土。3'は褐色粘土ブロックの混入多い。
- 4 赤褐10R4/4 焼土ブロックを多く含むカマド下層埋没土。
- 5 褐7.5YR4/3 焼土ブロック・炭化物粒を少量含む。旧火床面か。
- 6 赤褐5YR4/8 褐色粘土・焼土・炭化物粒等を少量含む火床下埋戻し土。ややしまり欠く。
- 7 褐7.5YR4/4 褐色粘土主体の掘り方埋戻し土。
- 8 暗赤褐2.5YR3/4 褐色粘土層表面が被熱により若干赤変する。炉底面状の様相を示している。

第94図 49号住居と出土遺物

50号住居

(第95図 PL.19-⑤・⑧、20-②、54 遺物観察表240頁)

東3区中央住居群の中央付近に位置している。付近に古墳時代前期など炉を伴う時期の遺構はない。

位置 070~075、-931~937グリッドにある。

規模形状 南北軸長4.28m、東西推定軸長5.82mの長方形を呈している。東辺は西辺より70cm短い台形状に歪んでいる。南北両辺は蛇行気味で不整な形状である。

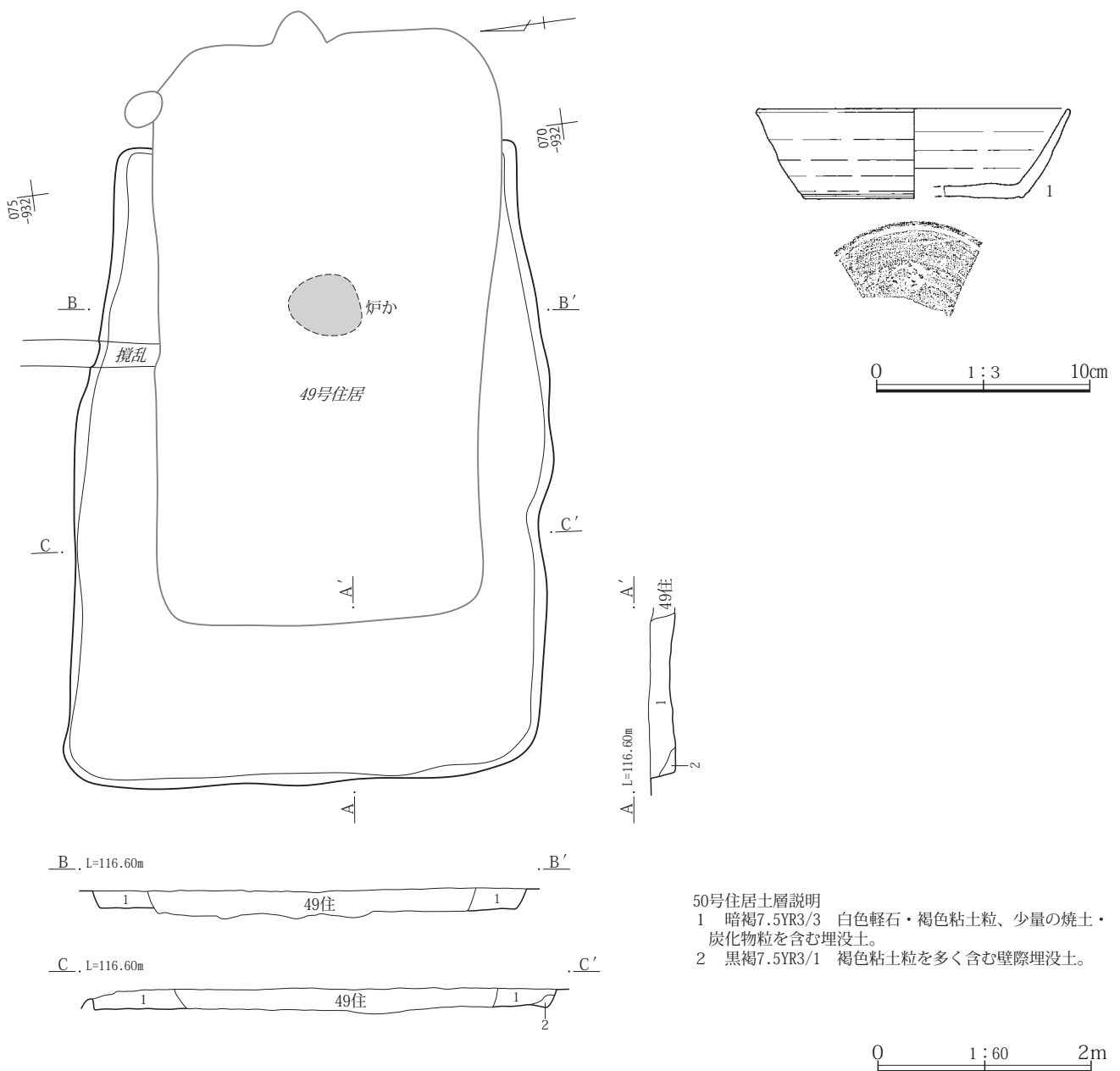
埋没土・壁 南西側壁際にいわゆる三角堆積が見られるが、ほぼ単層の埋没土である。

方位 N-81°W 面積 復元[23.58]㎡

床面 北西側へ低く傾斜していて、南西隅と8cmの比高差がある。掘り方は確認できない。

炉 住居中央東壁寄りにある被熱面が炉となる可能性がある。住居床面は後出の49号住居と同じ高さであり、被熱面がどちらの住居に伴うか明瞭にできないが、同住居はカマドのある住居で、被熱面が炉であれば本住居に伴う施設である。枕石の痕跡は確認できない。

その他 49号住居に前出している。壁溝・ピット・貯蔵穴等の施設は確認できない。



50号住居土層説明
 1 暗褐7.5YR3/3 白色軽石・褐色粘土粒、少量の焼土・炭化物粒を含む埋没土。
 2 黒褐7.5YR3/1 褐色粘土粒を多く含む壁際埋没土。

第95図 50号住居と出土遺物

遺物 図示できた土器は須恵器杯1のみで埋没土内の出土であり、確実に本住居に伴うと認定できる遺物はない。図示した以外の遺物はなく、49号住居遺物が紛れたものと思われる。

所見 出土遺物は大振りで底径の広い8世紀前半の土器で、住居も同じ年代と想定すると、被熱面は炉と推定できなくなる。調査段階で確認できなかったが、被熱面がカマドの痕跡となり、さらに1棟の住居が存在していたとも想定できよう。南辺に見られる屈曲部分が重複の痕跡となる可能性がある。

51号住居

(第96図 PL.20-③・④)

東3区中央住居群の南隅に位置している。調査区境にかかり、北側の一部のみの把握である。5号竪穴状遺構の西側約6mの位置にある。竪穴住居として扱ったが、不明瞭な遺構である。

位置 063・064、-946～-949グリッドにある。

規模形状 南北残存軸長0.73m、東西推定軸長3.31mで、残存する隅は丸みが強い。

埋没土・壁 壁際から埋没した後、水平に近い堆積が見られる。残存壁高は25cm前後で上側では垂直に近い立ち上がりとなっている。

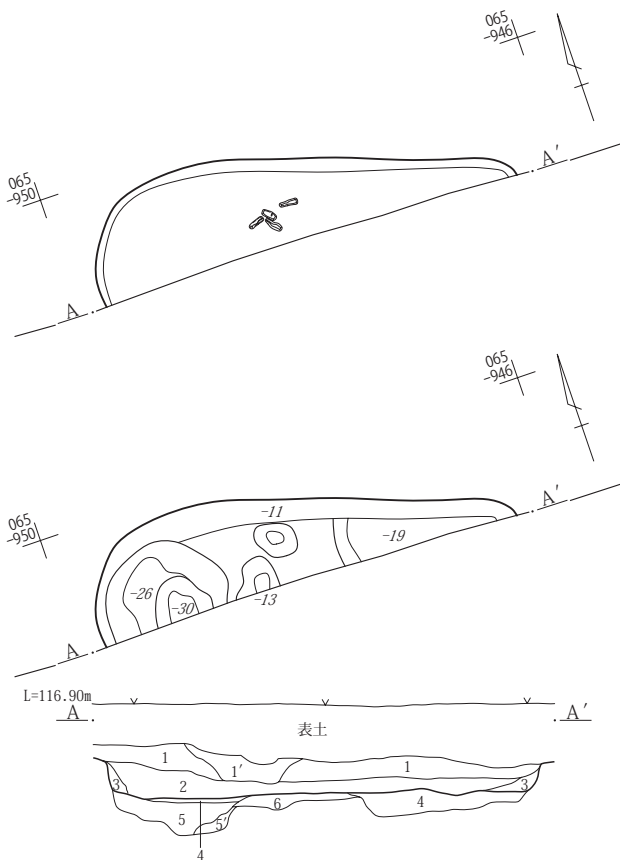
方位 東西軸N-89°W **面積** 残存(1.60)m²

床面 凹凸の多い床で5cmの比高差を生じている。全面に掘り方があり、一部でピット状や床下土坑状にやや深くなっている。

その他 カマドや炉および周溝やピットなどの施設は確認できない。

遺物 土師器壺甕類破片20点が出土しているが、図示に耐えられるものはなかった。北壁下から菰編石が4点まとまって出土している。石材は緑色片岩・黒色片岩各2点であった。

所見 遺物がなく、調査できた範囲にカマド・炉等の施設もなく、時期を推定する資料をもたない。明瞭な掘り方を有す点を除くと、竪穴状遺構と分類した遺構に近い。



51号住居土層説明

- 1 暗褐7.5YR3/3 褐色粘土を含む粘性土の表層土。1'は混入物少ない別遺構の可能性。
- 2 暗褐7.5YR3/4 褐色粘土粒を多く含む粘性土の下層埋没土。
- 3 褐10YR4/4 褐色粘土ブロック主体の壁際埋没土。
- 4 黄褐10YR5/6 褐色粘土を小ブロック状に含む土坑状の掘り方埋戻し土。一部で貼床状。
- 5 暗褐10YR3/4 土坑状の掘り方埋戻し土の粘性土。5'は褐色粘土ブロック主体。
- 6 灰褐7.5YR4/2 褐色粘土を含む粘性土の掘り方埋戻し土。

0 1:60 2m

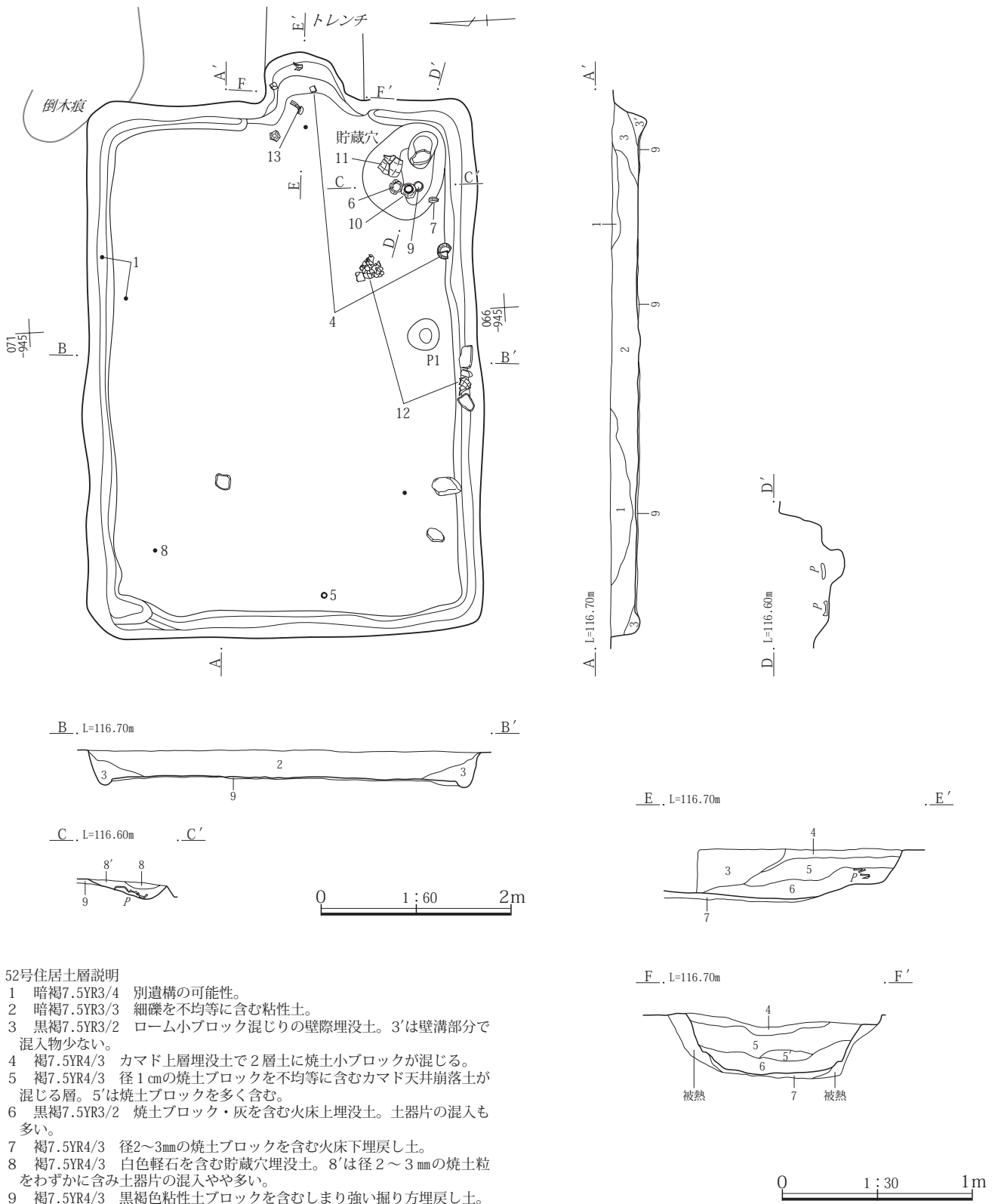
第96図 51号住居

52号住居

(第97・98図 PL.20-⑤~⑧、54・55 遺物観察表240頁)
東3区中央住居群の南側に位置している。

位置 066~070、-942~948グリッドにある。

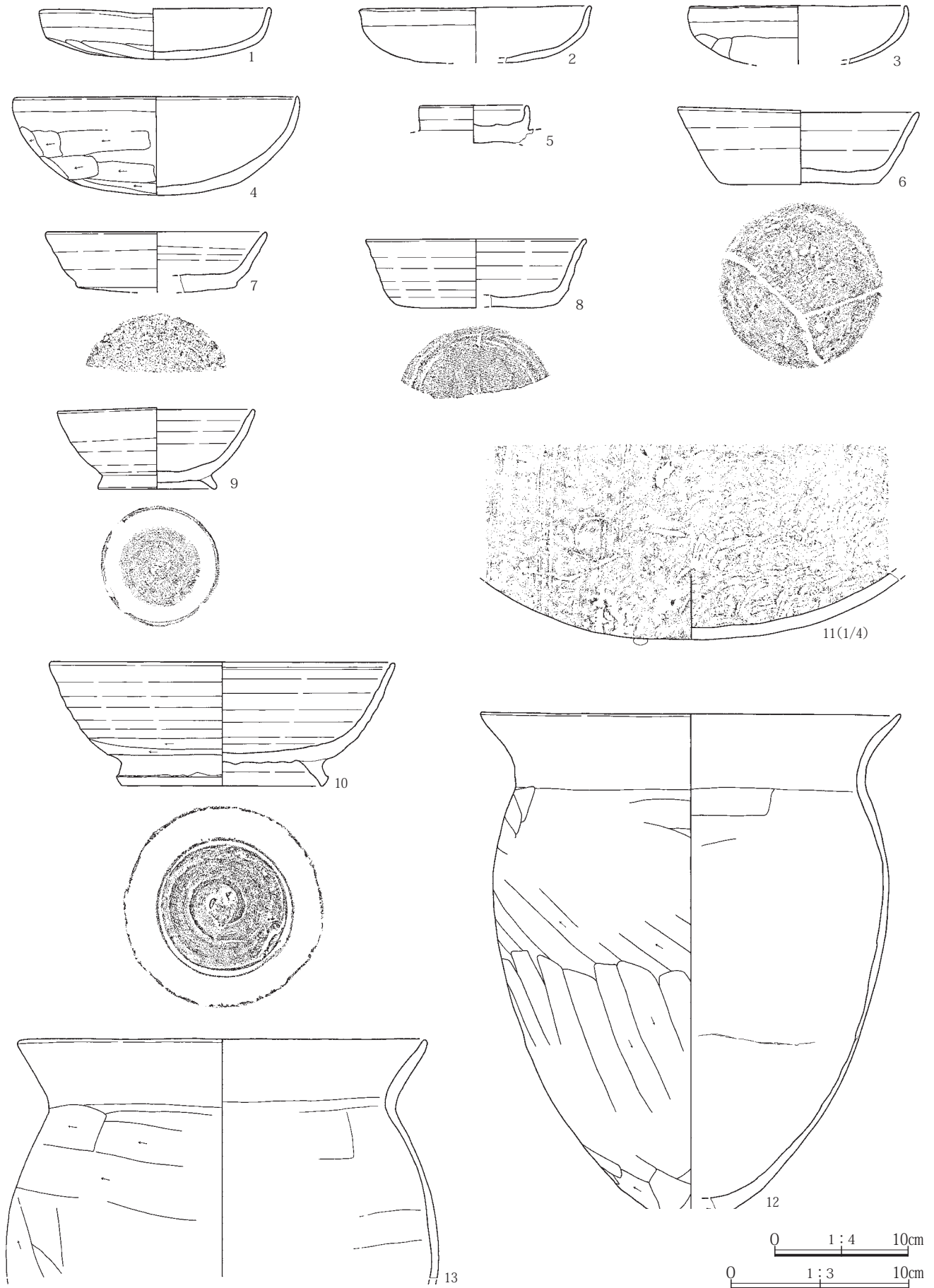
規模形状 南北軸長3.84m、東西軸長5.20mの長方形を呈している。奈良時代以降の竪穴住居では西調査区の40



52号住居土層説明

- 1 暗褐7.5YR3/4 別遺構の可能性。
- 2 暗褐7.5YR3/3 細礫を不均等に含む粘性土。
- 3 黒褐7.5YR3/2 ローム小ブロック混じりの壁際埋没土。3'は壁溝部分で混入物少ない。
- 4 褐7.5YR4/3 カマド上層埋没土で2層土に焼土小ブロックが混じる。
- 5 褐7.5YR4/3 径1cmの焼土ブロックを不均等に含むカマド天井崩落土が混じる層。5'は焼土ブロックを多く含む。
- 6 黒褐7.5YR3/2 焼土ブロック・灰を含む火床上埋没土。土器片の混入も多い。
- 7 褐7.5YR4/3 径2~3mmの焼土ブロックを含む火床下埋戻し土。
- 8 褐7.5YR4/3 白色軽石を含む貯蔵穴埋没土。8'は径2~3mmの焼土粒をわずかに含む土器片の混入やや多い。
- 9 褐7.5YR4/3 黒褐色粘性土ブロックを含むしまり強い掘り方埋戻し土。

第97図 52号住居



第98図 52号住居出土遺物

号住居に次いで大きな住居である。各隅は丸みが少なく、各辺は直線的で整った形状である。

埋没土・壁 壁際からの自然堆積が確認できる。

方位 N-89°W(長軸) N-86°E(カマド)

面積 20.44㎡

床面 小礫の多い地山を掘り込んでいる。細かな凹凸があるがほぼ水平な床面で、貯蔵穴周辺のみやや窪み、他の床面と5cm前後の比高差がある。厚さ2cm前後の薄い貼床状の埋戻し土がほぼ全体で確認できる。

壁溝 明瞭な壁溝がカマド下を除いて全周している。規模は幅25cm前後、深さ35cm前後でほぼ一定し、住居廃絶時まで開口している。

ピット 南壁中央直下に径33cmの不整円形を呈した窪みがあり、P1とした。床面からの深さは17cmで柱穴的ではないが、配置から入口ピットとなる可能性がある。

貯蔵穴 南東隅に径103×83cmの不整楕円形を呈した窪みがあり、遺物の出土も多く貯蔵穴とした。床面からの深さ24cmで底面も狭く、あまり明瞭な施設ではない。

カマド 東壁中央やや南寄りにある。燃烧部は壁際があり、火床は住居床面とほぼ同じ高さにある。袖や煙道は確認できない。

その他 倒木痕に後出している。

遺物 出土遺物は豊富で土器13点を図示した。貯蔵穴内から須恵器杯6、有台杯9・10が出土している。6と9は完形近くまで復元できた。土師器杯2、甕13はカマド内、須恵器蓋5、杯7は床直上出土で、土師器甕12は南壁直下とその周辺の破片が接合した。本住居に確実に伴う遺物である。

図示した以外に土師器81点、須恵器1点が出土している。

所見 須恵器杯類は底径が広い。土師器甕類の口縁部はコの字状に変化する直前の形状である。8世紀後半の住居と想定できる。東西に長い長方形住居には同じ8世紀の49号住居があり、本遺跡に軸方向を揃えるようにして東側6mの位置に並んでいる。

53号住居

(第99・100図 PL.21-①~⑤、55 遺物観察表240・241頁)

東3区中央住居群の南隅で52号住居の南西側約3.5mに位置している。

位置 064~068、-951~956グリッドにある。

規模形状 南北軸長3.32m、東西軸長3.65mの方形を呈している。北東と南西の両隅は鈍角気味に開いていて菱形に歪んでいる。各隅は丸みが少なく、各辺は直線的で比較的整った形状である。

埋没土・壁 下半は西側・北側から一気に堆積していて、人為的埋戻しの可能性がある。本遺跡内の住居では比較的深度に富み、壁高は30cm前後を測る。

方位 N-81°W(長軸) N-100°E(カマド)

面積 11.62㎡

床面 緩やかな凹凸のある床面で住居中央付近が若干窪む傾向がある。壁際を除きほぼ全面に不規則な掘り方が見られるが、埋没土下層に焼土を含む深度に富む部分が3カ所あり、1~3号床下土坑とした。他にも土坑状・ピット状の窪みが多い。

壁溝 カマドや貯蔵穴周辺および南壁直下で部分的に途切れる変則的な壁溝が巡っている。幅は12~33cmで一様ではないが、深さは5cm前後で比較的整っている。

貯蔵穴 南東隅壁際に径63×54cmの楕円形を呈した貯蔵穴を確認した。床面からの深さは36cmで底面は比較的平坦である。住居廃絶時にも開口していたと思われる。

カマド 東壁南寄りにある。燃烧部は壁際にあり、火床は住居床面より4cm窪んでいる。煙道がわずかに残存し、住居壁より65cm張り出している。南北両袖とも残存している。両袖基部付近の床下には窪みがあるが、袖石を据えた痕跡としては大きすぎるようだ。

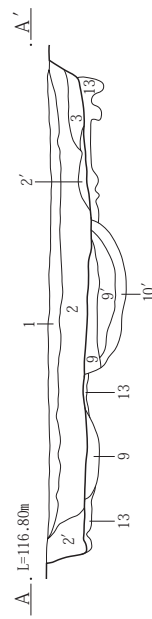
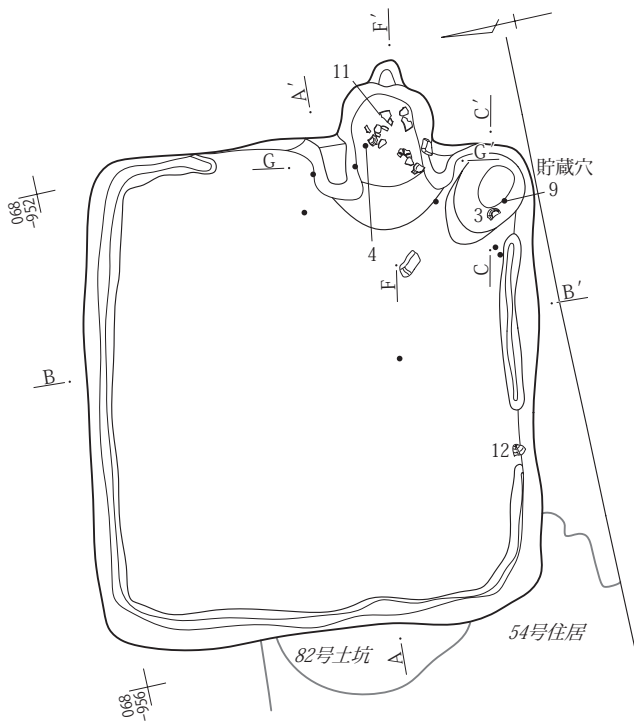
その他 54号住居、82号土坑に後出している。柱穴は確認できない。

遺物 住居南東隅付近を中心に出土遺物は比較的豊富で、土器12点と石製品1点を図示した。須恵器杯4・土師器甕11がカマド内、須恵器杯3・土師器甕9が貯蔵穴内、甕12が壁際の床直上から出土した本住居に確実に伴う土器である。また床下の土坑状の窪みから須恵器杯5・椀6が出土している。

図示した以外の遺物はきわめて多く、土器片1300点が出土している。本遺跡の竪穴住居で60号住居に次ぐ点数となる。このうち須恵器は5%に満たなかった。

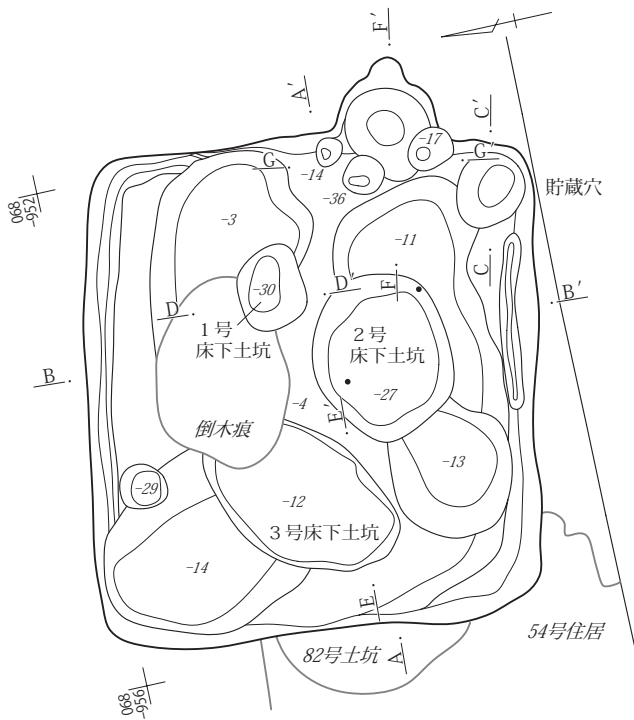
所見 杯類はやや小振りで底径が広く、甕類口縁はコの字状になる前の形状で、8世紀後半の住居と想定できる。

第三章 調査の内容

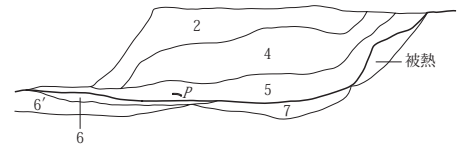


53号住居土層説明

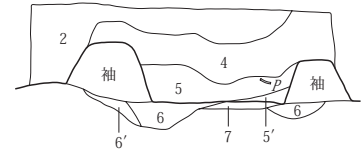
- 1 褐7.5YR4/3 焼土・炭化物粒・軽石を含む表層埋没土。
- 2 黒褐7.5YR3/2 径5mmの焼土ブロック・炭化物粒を含む。2'は褐色粘土ブロックが加わる下層埋没土で貯蔵穴上面まで及ぶ。
- 3 暗赤褐5YR3/6 焼土ブロックを多く含むカマド袖崩落土。
- 4 暗赤褐7.5YR3/6 径5mmの焼土ブロック・炭化物粒を含むカマド上層埋没土。
- 5 極暗赤褐5YR2/3 焼土・炭化物粒を含む火床上埋没土の粘性土。5'は炭化物粒の混入多く、しまり欠く。
- 6 黒褐7.5YR2/2 褐色粘土ブロックを多く含むカマド掘り方埋戻し土でしまり強い。6'は褐色粘土ブロックを少量含む。
- 7 暗赤褐5YR3/6 焼土を主体とする火床埋戻し土。
- 8 灰褐7.5YR4/2 褐色粘土ブロックを多く、焼土粒・炭化物粒を含む粘性土で貯蔵穴下層埋没土。
- 9 黒褐7.5YR3/2 ブロック状の褐色粘土・焼土を少量含む床下土坑埋戻し土でしまり強い粘性土。9'は褐色粘土ブロックを多量に含む。
- 10 黒褐7.5YR3/1 褐色粘土ブロックを少量含むやや粘性の床下土坑埋戻し土。10'は焼土ブロックが多量に加わり、10''は焼土ブロックが多いが粘性土の混入が減る。
- 11 褐7.5YR4/4 褐色粘土ブロックを多く含むやや粘性土。
- 12 黒褐7.5YR3/1 褐色土ブロックを含む粘性土。
- 13 褐7.5YR4/3 明褐色土ブロックを多く含むしまり強い掘り方埋戻し土。



F, L=116.80m

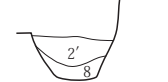


G, L=116.80m

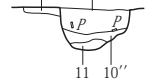


0 1:30 1m

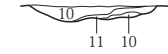
C, L=116.80m



D, L=116.60m

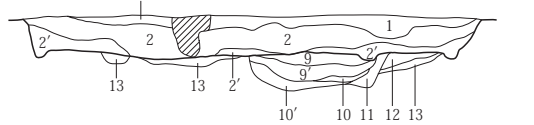


E, L=116.60m

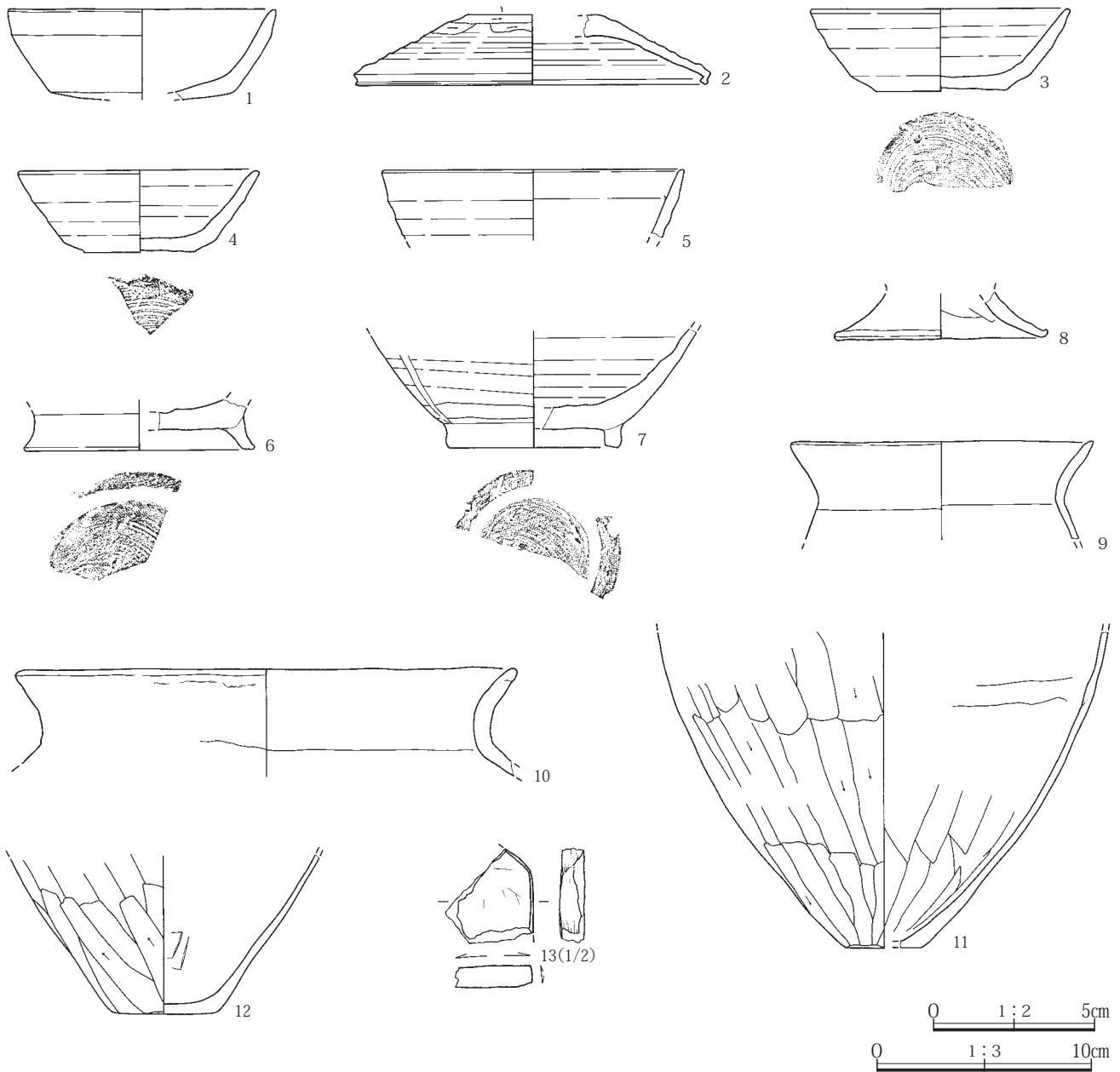


0 1:60 2m

B, L=116.80m



第99図 53号住居



第100図 53号住居出土遺物

54号住居

(第101・102図 PL.21-⑥~⑧、55 遺物観察表241頁)

東3区中央住居群の南西隅にある。東辺の大半を53号住居に壊され、南辺は調査区境にかかり、全容を把握できていない。

位置 064~067、-955~959グリッドにある。

規模形状 南北残存軸長2.89m、東西推定軸長4.3mで、北西隅は丸みが少なく、残存する各辺は直線的で整った形状である。

埋没土・壁 下層に粘性土混じりの層が不均等に堆積

し、人為的な埋戻しの可能性がある。

方位 N-89° W(東西軸) N-96° W(カマド)

面積 残存(10.71)㎡

床面 細かな凹凸の多い床面で5cmの比高差を生じている。小礫のやや多い地山を掘り込んでいる。浅い掘り方がほぼ全体にあり、一部で深度10cm前後の土坑状に窪んでいた。埋戻し土で礫面を覆っているが、貼床と呼べるような明瞭な埋戻しではない。

ピット 床下精査時に主柱穴配置上にある2基の小ピットを確認し、P1・P2とした。主柱穴としてはやや深

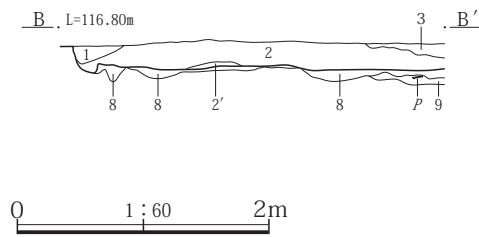
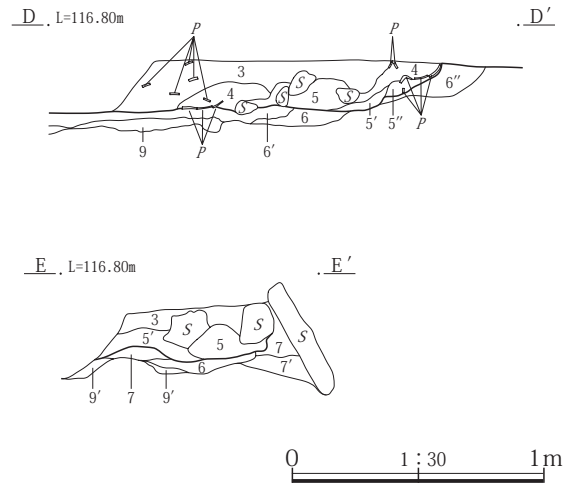
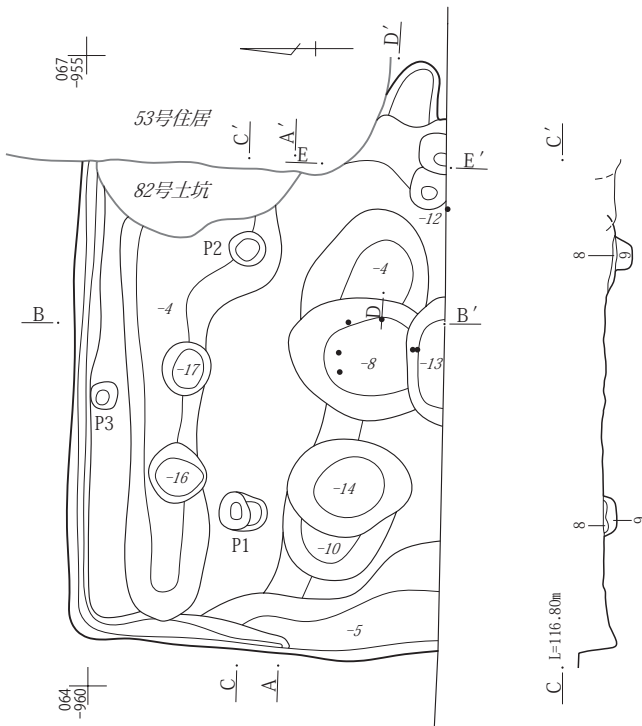
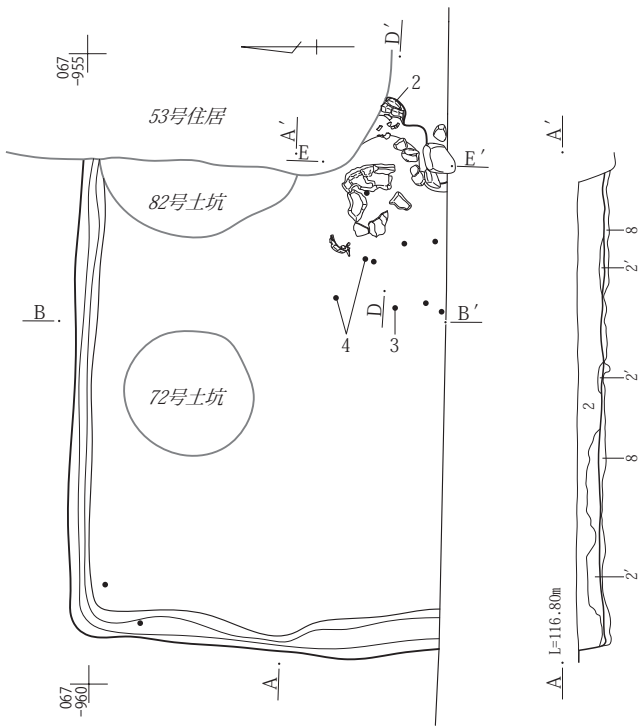
第三章 調査の内容

54号住居ピット一覧 (cm)

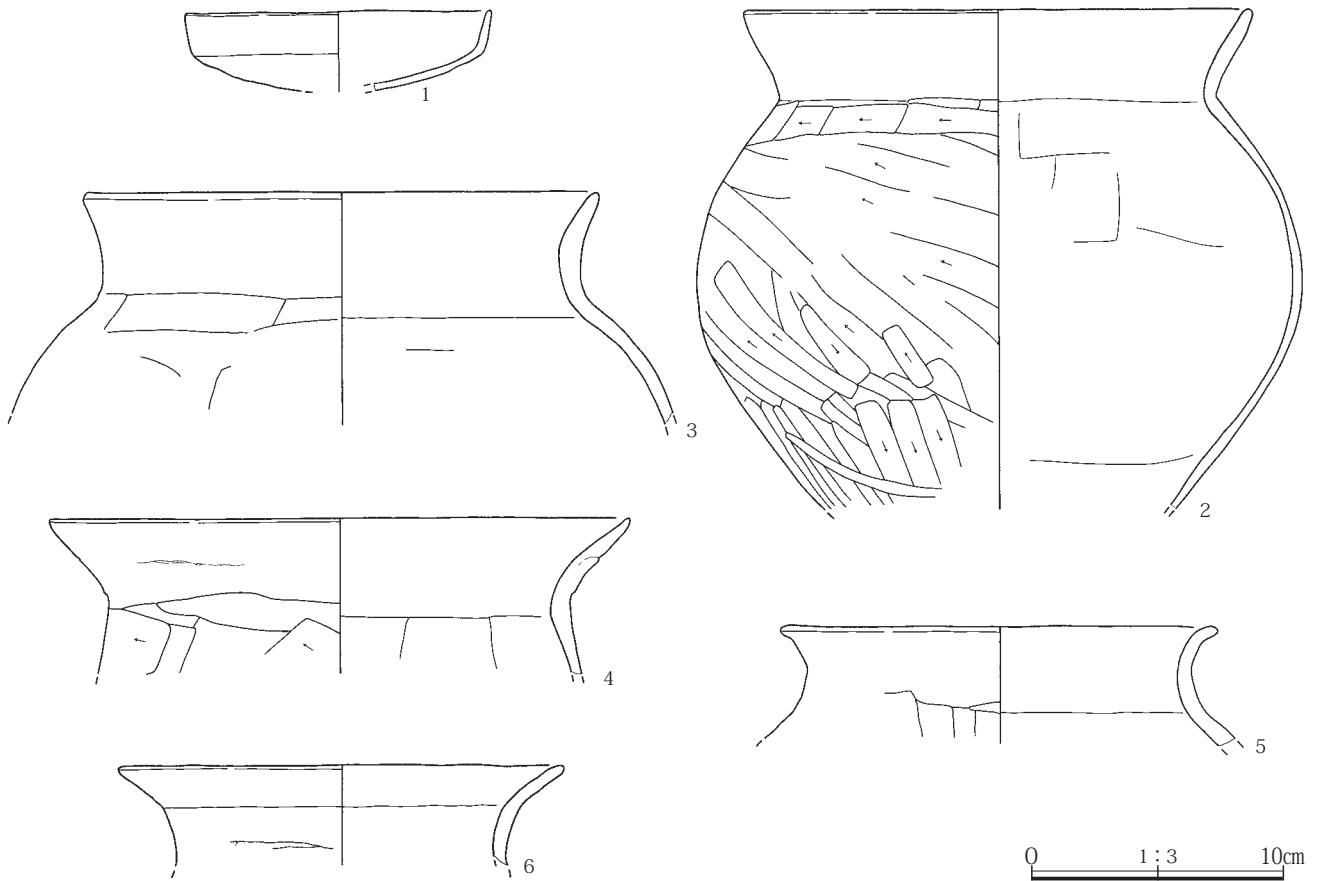
No	長径×短径×深さ	種類・備考
1	31×25×16	主柱穴か
2	28×27×14	主柱穴か
3	22×21×20	壁柱穴か

54号住居土層説明

- 1 黒褐7.5YR3/2 軽石を含むやや砂質土で別遺構の可能性。
- 2 褐7.5YR4/4 軽石・炭化物粒を少量含む上層埋没土。2'は褐色粘土ブロックを多く含む床直上の埋没土で自然堆積ではない。
- 3 灰褐7.5YR4/2 焼土ブロックを少量含み、白色軽石を散見する粘性土でカマド上面埋没土。
- 4 褐灰7.5YR4/1 焼土小ブロックや砂岩質の細礫を含む粘性土で崩落したカマド構築材。左袖付近で土器片の混入多い。
- 5 暗褐7.5YR3/3 灰と多量の焼土ブロックを含む燃焼部直上の埋没土。5'は焼土ブロックを少量含む。5''は煙道先端に据えられた土師器糞内の埋没土を主体としたしまり欠く層。
- 6 赤10R4/6 焼土ブロックを主体とする火床下埋戻し土。6'は径5mmの焼土ブロックやや少なく灰を含む。6''は褐色ブロックをわずかに含む煙道部埋没土。
- 7 黒褐7.5YR3/2 焼土ブロックをわずかに含む袖構築材。7'は袖基部で焼土ブロックやや多くなる。
- 8 褐7.5YR4/3 黒褐色土ブロックを含むしまり強い掘り方埋戻し土。
- 9 灰褐7.5YR4/2 径1cmの焼土ブロック・褐色粘土ブロック・土器片を含む掘り方埋戻し土。9'はカマド下の粘質土。



第101図 54号住居



第102図 54号住居出土遺物

度に乏しい。上面は踏み固められていて住居廃絶時に開口していなかったと思われる。また、北壁直下の壁柱穴となる可能性のある位置の小ピットをP 3とした。P 1・P 2以上の深度がある。

壁溝 残存部分では幅12~22cm、深さ4cm前後の壁溝が確認できる。住居廃絶時まで開口していたようだ。

カマド 東壁中央南寄りと想定される位置にある。53号住居に北半部を壊され残存状態は悪い。火床は住居床より3cm窪んでいた。南袖基部には長さ約50cmの袖石が据えられていた。小礫が燃烧部内側を囲むようにして見られ、カマド前にも大型礫の出土が多く、石組みのカマドであった可能性がある。燃烧部は壁外にあり、煙道は壁外へ70cm張り出している。袖部は残存していない。

その他 53号住居、82号土坑に前出している。72号土坑は北壁近くの本住居内に後出して掘削された土坑だが、床面まで達していない。

遺物 土師器甕類を中心に土器6点を図示した。土師器甕2・4がカマド内およびカマド周辺床直上で出土した

本住居に確実に伴う遺物である。

図示した以外に土器片576点が出土している。図示遺物の傾向と同様にほとんどが土師器壺甕類であった。

所見 出土遺物に須恵器がなく、不明瞭な部分があるが、甕は薄手だがコの字状口縁以前の形状で、8世紀の住居と想定できる。

55号住居

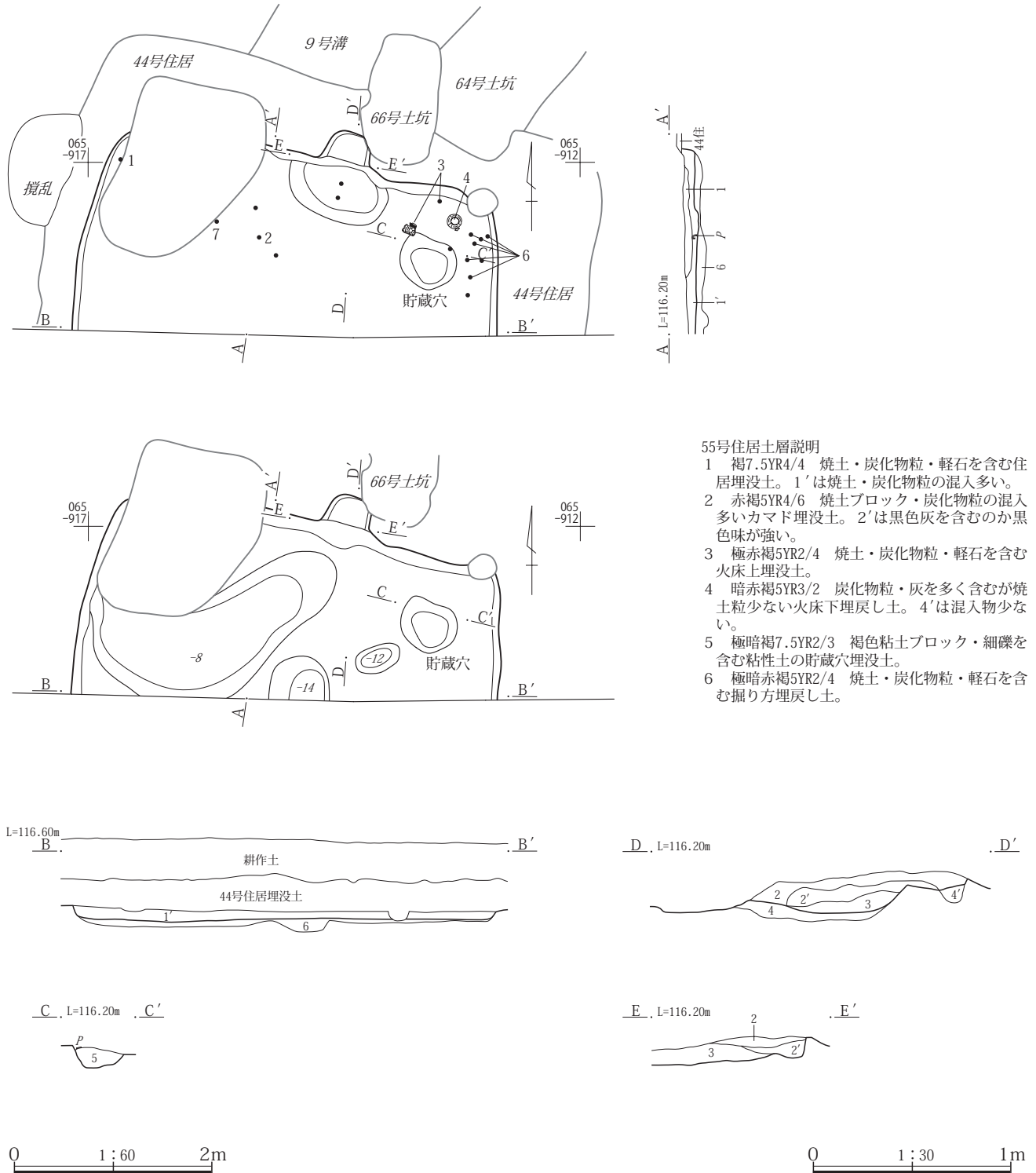
(第103・104図 PL.22-①~④、55・56 遺物観察表241頁)

東3区中央東寄りにある。44号住居下で確認できた住居で、南側が調査区境にかかり全容を把握できていない。

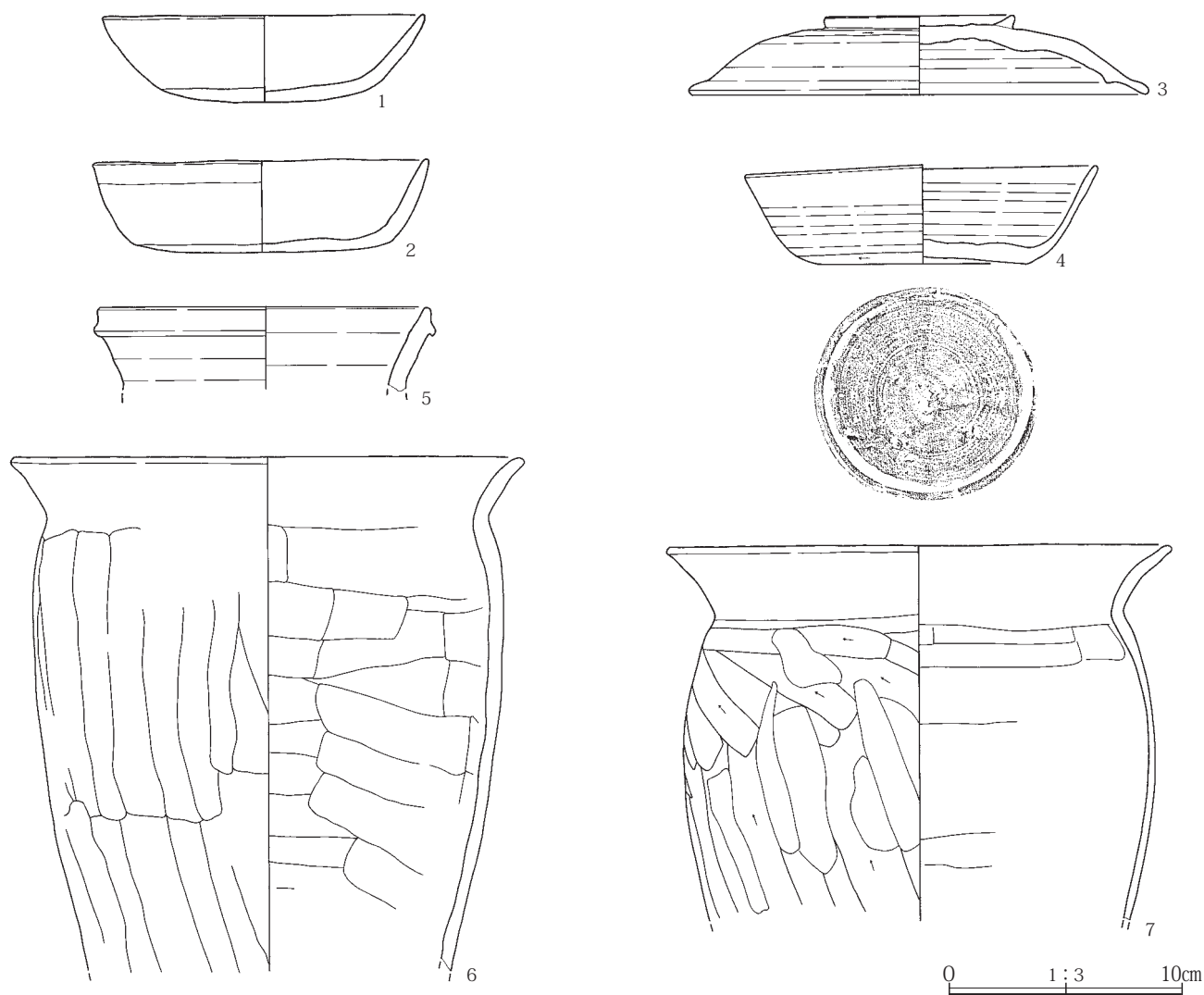
位置 063~065、-912~917グリッドにある。

規模形状 南北残存軸長1.94m、東西軸長4.17mの方形を呈している。北東隅は鈍角気味に開いていて東辺の短い台形状に歪む可能性がある。西辺は弧状に外側へ膨らんでいて、不整な形状である。

埋没土・壁 焼土・炭化物粒の混じる住居埋没土らしい



第103図 55号住居



第104図 55号住居出土遺物

土で、水平に近い堆積である。

方位 N-89°W(長軸) N-13°E(カマド)

面積 残存(7.02)m²

床面 5cm前後の比高差のある凹凸がある。ほぼ全体に掘り方があり、北側ほど深度に富む傾向があった。また部分的に土坑状・ピット状の掘り込みとなっていた。

貯蔵穴 北東隅付近に径60×54cmの不整楕円形を呈す床面からの深さ24cmを測る土坑状の施設があり、貯蔵穴とした。埋没土は掘り方埋戻し土と異なるが、底面はやや不整であり明瞭な施設ではない。

カマド 北壁中央やや東寄りにある。燃焼部は住居内にあり、火床は住居床面より4cm窪んでいる。煙道は燃焼部奥で段差をもって立ち上がり、残存部分では壁外へ29cm張り出している。袖は残存していない。

その他 44号住居、66号土坑、9号溝に前出している。壁溝・柱穴は確認できない。

遺物 土器7点を図示した。土師器杯1・2、須恵器蓋3・杯4、土師器甕7が床直上から出土し、土師器甕6は床面から浮いた状態だが壁に密着するようにして出土する本住居に確実に伴う土器である。

図示した以外に土器片118点が出土している。ほとんどが土師器壺甕類で、須恵器は4点のみであった。

所見 須恵器杯類は底径が広く、蓋も扁平で広い摘みが付く。土師器甕類も長胴化の名残が見られる。これらの特徴から8世紀前半の住居と想定できる。上面にある44号住居に近接した時期の住居となるが、床面が異なり、同一住居の拡幅前後とは考えない。

57号住居

(第105・106図 PL.22-⑤、56 遺物観察表241頁)

東3区西寄り住居群南隅にある。

位置 065~070、-977~981グリッドにある。

規模形状 南北軸長4.19m、東西軸長3.59mの方形を呈している。各隅は丸みがあり、西辺は弧状に外側へ膨らんで、やや不整な形状である。

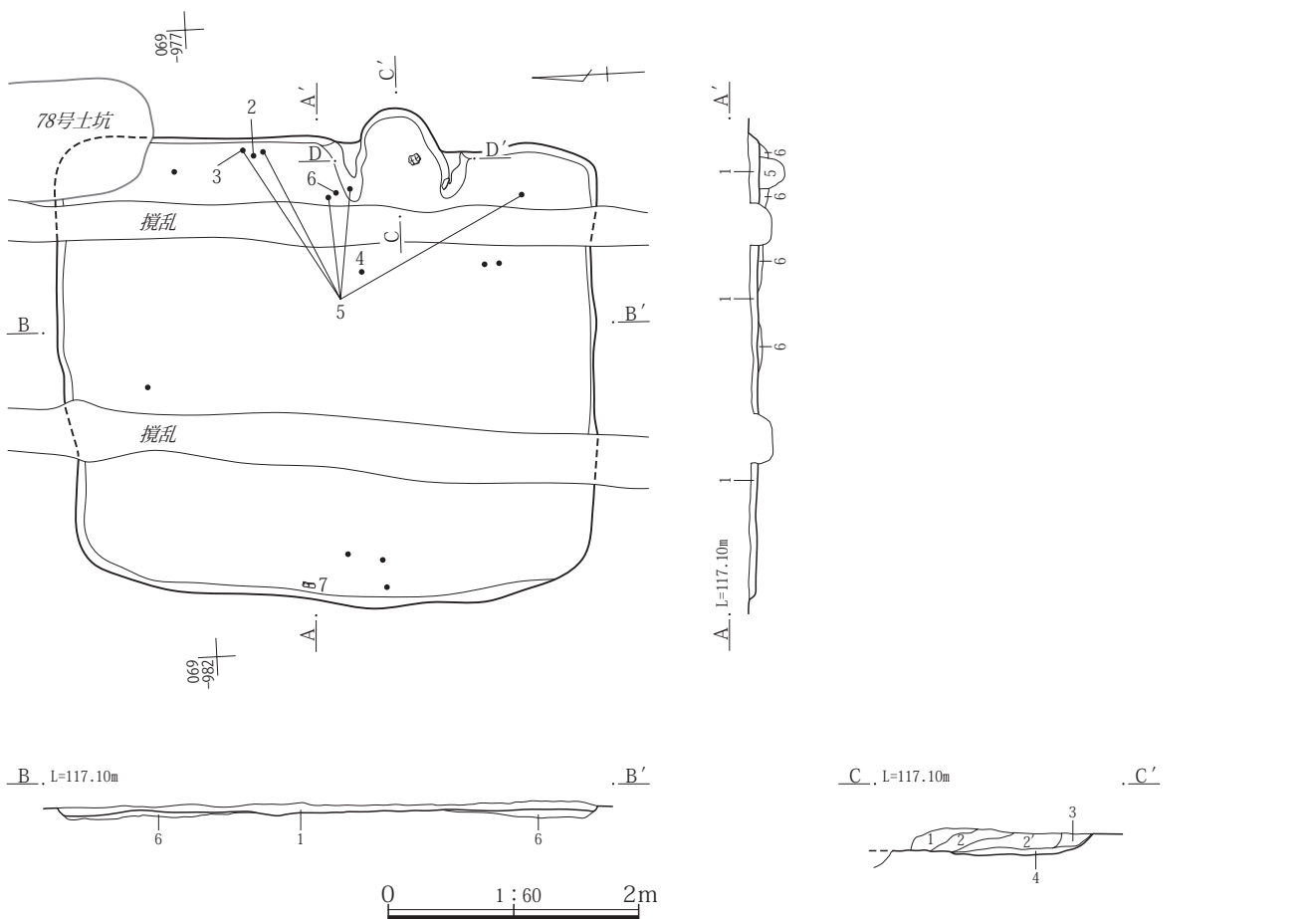
埋没土・壁 埋没土は単層で堆積過程は不明である。

方位 N-5°E(長軸) N-91°E(カマド)

面積 13.88m²

床面 北東側へ低く傾斜していて南西隅と8cmの比高差がある。地山礫の多い一面に築いた住居で、壁寄りを中心に掘り方が見られる。この掘り方の掘削時に地山礫を若干除去したようだが、床面にはまだ多数の礫が表れている。

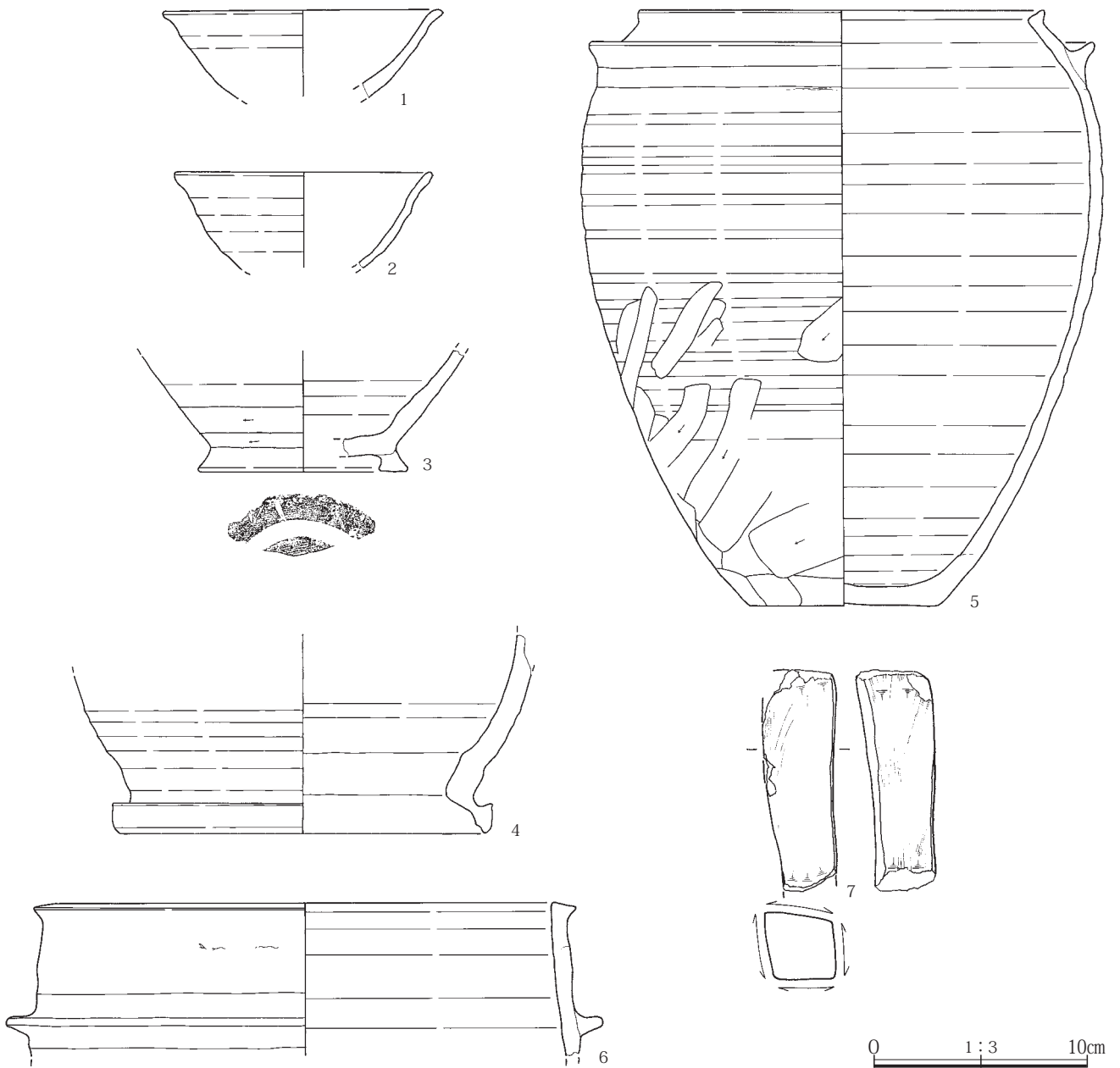
カマド 東壁中央やや南寄りにある。燃烧部は壁際であり、火床は住居床面よりわずかに窪んでいて、最深部でも2cm前後の深度である。煙道は確認できない。南北両袖がわずかに確認できる。火床下に掘り方はなく、掘削面をそのまま火床としている。



57号住居土層説明

- 1 暗褐7.5YR3/3 軽石・焼土・炭化物粒を含む住居埋没土。
- 2 暗赤褐5YR3/6 焼土・炭化物粒を含むカマド上層埋没土。2'は径5mmの焼土ブロック・炭化物を含む。
- 3 褐7.5YR4/6 褐色粘土ブロック主体。一部被熱により赤変硬化した崩落壁を含む煙道部分埋没土。
- 4 にぶい赤褐5YR4/4 焼土粒・炭化物を少量含む火床上埋没土。
- 5 暗褐7.5YR3/4 褐色粘土を含むピット状窪みの埋戻し土。
- 6 にぶい褐7.5YR5/4 褐色粘土主体の掘り方埋戻し土。

第105図 57号住居



第106図 57号住居出土遺物

その他 78号土坑に前出している。壁溝・柱穴等の施設は確認できない。

遺物 カマド周辺から出土した土器6点と石製品1点を図示した。4は羽釜状の鏝のつく須恵器甗の底面付近破片と考えた。カマド周辺の床面直上から須恵器碗2、壺3、甗4、羽釜6が出土し、羽釜5も周辺に散乱した破片から復元できた。いずれも本住居に確実に伴う土器である。砥石7は西壁際床直上出土の遺物である。本遺跡では砥石は5棟の住居から出土しているが、断面が正方

形に近い規格的な大型砥石は本住居と60号住居出土の2点のみで、両住居はいずれも東3区南西隅にある。

図示した以外に土器片169点が出土している。いずれも壺甗類の破片である。

所見 煮沸具は羽釜が占めており、10世紀の住居と想定できる。

58号住居

(第107・108図 PL.22-⑥~⑧、56 遺物観察表242頁)

東3区西寄り住居群内中央南寄りで、2号住居の南側約3m、57号住居の北西側4.5mに位置している。

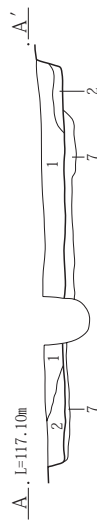
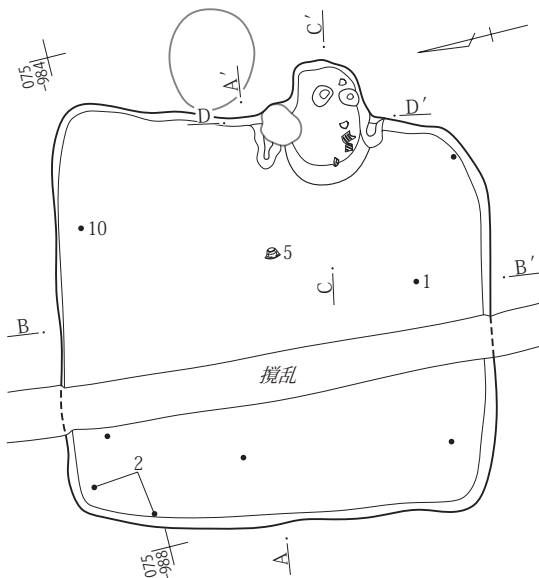
位置 071~075、-984~988グリッドにある。

規模形状 南北軸長3.34m、東西軸長3.09mの方形を呈

している。南辺は北辺より40cm短い台形状に歪んでいる。各辺は小さく蛇行気味でやや不整な形状である。

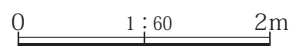
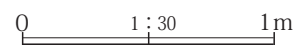
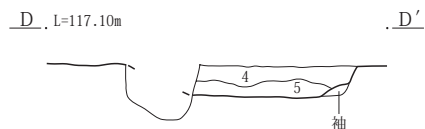
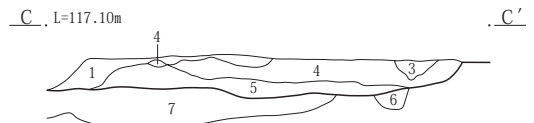
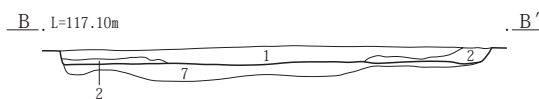
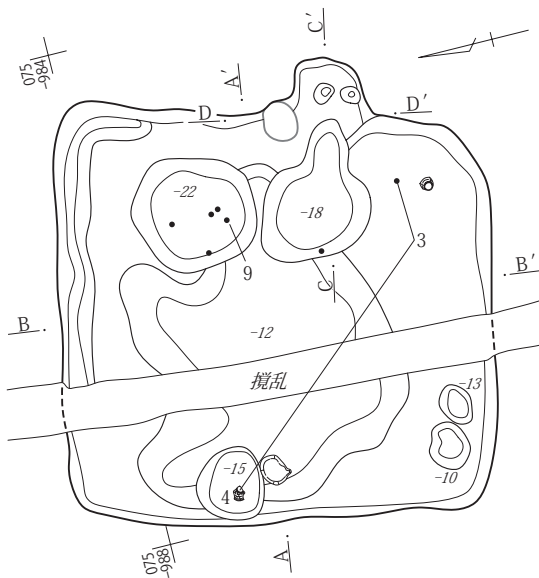
埋没土・壁 壁際のいわゆる三角堆積のあと、全体を単層土が覆っている。明らかな人為的埋戻しの痕跡は見られない。

方位 N-15° E(東西軸) N-101° E(カマド)

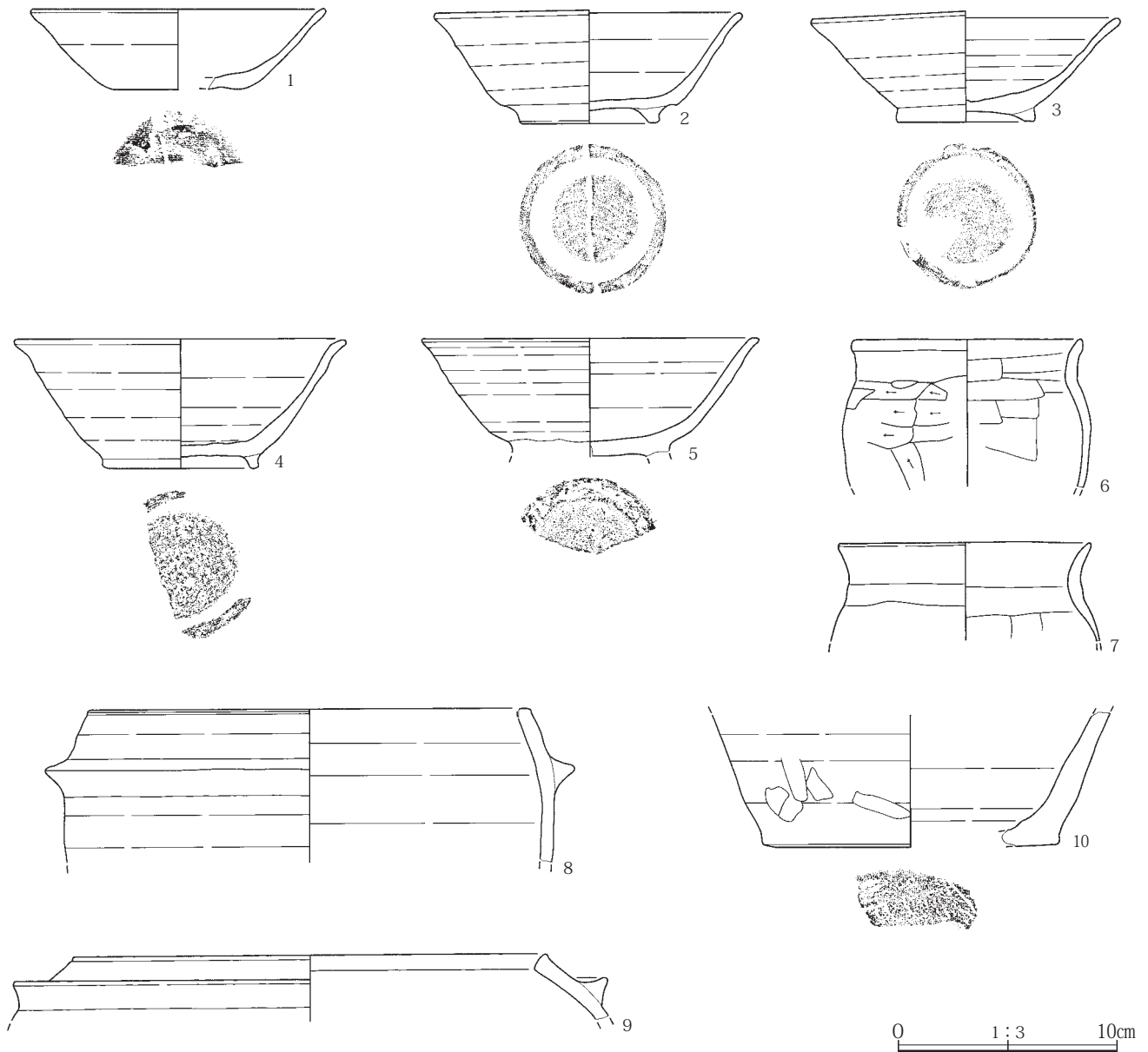


58号住居土層説明

- 1 暗褐7.5YR3/4 明褐色土ブロックを少量含むややしまり弱い住居上層埋没土。
- 2 褐7.5YR4/3 明褐色土ブロックを多量に含むやや粘性の壁際埋没土。三角堆積が見られる。
- 3 暗赤10R3/6 焼土ブロックを多量に含むビット状の窪み。
- 4 暗褐7.5YR3/4 径2~3mmの焼土ブロックを含むやや粘性のカマド上面埋没土。
- 5 黒褐7.5YR2 径3~5mmの焼土ブロック混じりの火床上埋没土で炭化物粒・灰を含む。
- 6 黒褐7.5YR2/2 カマド下ビット状窪み埋戻し土の粘性土。
- 7 暗褐7.5YR3/4 径2~3cmの褐色土ブロックをまだらに含む粘性の掘り方埋戻し土。



第107図 58号住居



第108図 58号住居出土遺物

面積 9.95㎡

床面 北東側へ低く傾斜していて、南西隅と5cmの比高差がある。住居中央付近を中心に不規則な掘り方がある。また北壁直下では壁溝状の窪みを確認した。幅25cm前後で壁溝として違和感はないが、床面からの深さは7~22cmで凹凸が激しい。

カマド 東壁南寄りにある。燃焼部は壁際にあり、火床は住居床面より5cm窪んでいる。煙道は確認できない。両袖基部付近がわずかに残存している。

その他 カマド北袖基部付近がピットにより壊されている。94号土坑が東壁に近接している。柱穴・貯蔵穴等の

施設は確認できない。

遺物 住居の広範囲に散在し、掘り方からも出土した土器10点を図示した。須恵器碗2・羽釜10は北壁際の出土で、碗5は住居中央付近だが床直上の出土で本住居に確実に伴う土器である。床下調査時に須恵器碗3・4、羽釜9が出土した。

図示した以外に土器片203点が出土している。灰釉陶器片2点が含まれている。

所見 煮沸具は羽釜が占め、杯類口縁にも外反が明瞭に見られる。10世紀の住居と想定できる。

59号住居

(第109・110図 PL.23-①・②、56 遺物観察表242頁)

東3区西寄り住居群内で、58号住居の南側約1.5mの位置にある。南西隅付近は不明瞭で、北辺をトレンチにより失っている。

位置 068~070、-985~989グリッドにある。

規模形状 南北残存軸長2.04m、東西軸長3.42mを測る。南北軸長は3m以内で、東西にやや長い長方形を呈すと想定される。南西隅は不明瞭だが鈍角気味にやや開くようで、南辺が短い逆台形気味に歪む可能性がある。

埋没土・壁 地山礫の混入の多い単層埋没土である。最も残存状態の良い東壁でも高さ5cm前後の残存壁高である。

方位 N-87°W(長軸) N-96°W(カマド)

面積 残存(6.91)m²

床面 細かな凹凸が多く、全体では北側へ低く若干傾斜している。地山掘削時の窪みを埋め戻す程度の浅い掘り方が部分的に見られ、上面は強く踏み固められていた。

ピット 西壁際に床面からの深さ17cmの窪みがあり、ピットとした。入口施設となる可能性があるが、掘り方埋戻し土と同じ埋没土である。

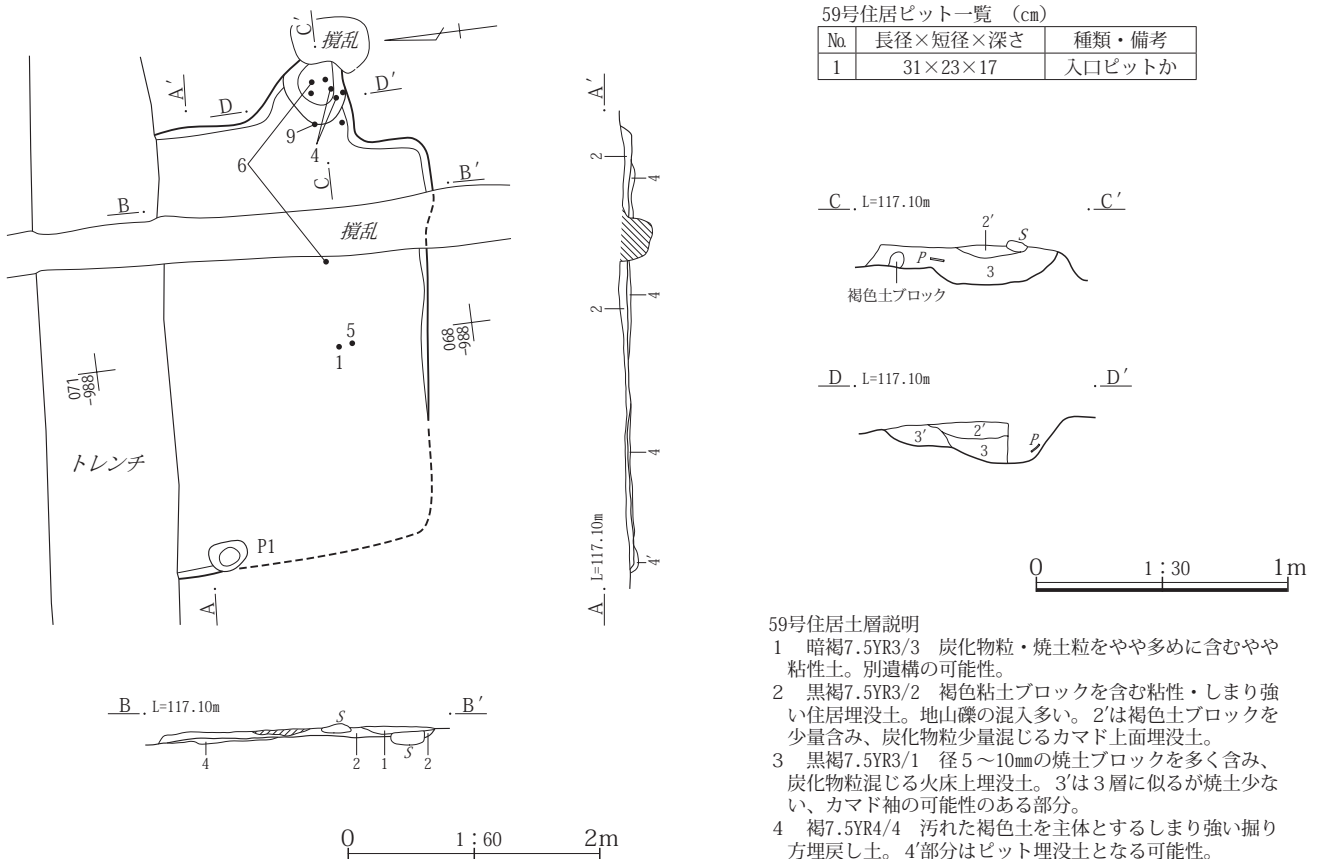
カマド 東壁南寄りにある。燃烧部は壁外にあり、火床は住居床面より10cm窪んでいる。攪乱によって煙道部分は不明瞭である。袖は残存しない。

その他 壁溝・柱穴等は確認できない。

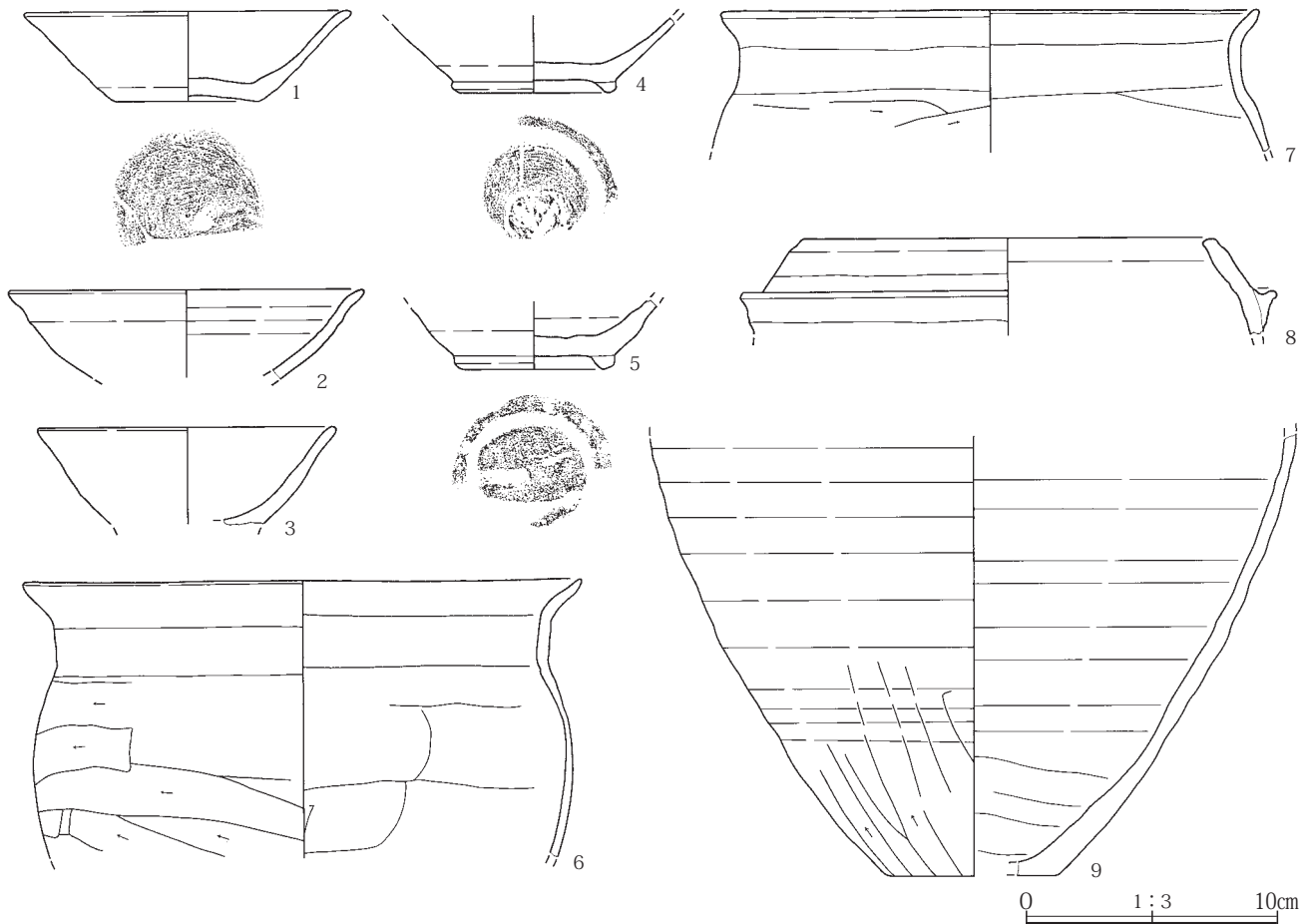
遺物 浅い遺構だが土器9点を図示できた。須恵器椀4、土師器甕6・須恵器羽釜9がカマド内およびカマド周辺床直上出土の本住居に確実に伴う遺物である。須恵器椀5も南壁寄り床直上で出土した。

図示した以外に土器片92点が出土している。土師器壺甕類が主体で土師器杯類の出土はないが、須恵器杯類は14点含まれている。

所見 コの字状口縁甕と羽釜が混在する時期で9世紀末から10世紀初頭の住居と想定できる。



第109図 59号住居



第110図 59号住居出土遺物

60号住居

(第111～113図 PL.23-③～⑧、56・57 遺物観察表242・243頁)

東3区西隅にある。1号住居とともに東調査区最西端に位置しているが、地山の傾斜はほとんど見られない。調査当初、2棟の住居を想定して掘り下げたが、同一住居のカマド作り替えの痕跡と判明した。そのため61号住居は欠番となっている。

位置 071～074、-996～000グリッドにある。

規模形状 南北軸長3.06m、東西軸長3.34mの東西にやや長い長方形を呈している。各隅は丸みがあり、西辺は外側に膨らむように湾曲してやや不整形な形状である。

埋没土・壁 壁際にいわゆる三角堆積が見られるが、その後は全体を単層土が覆っている。

方位 N-88° E (長軸) N-93° E (カマドA)

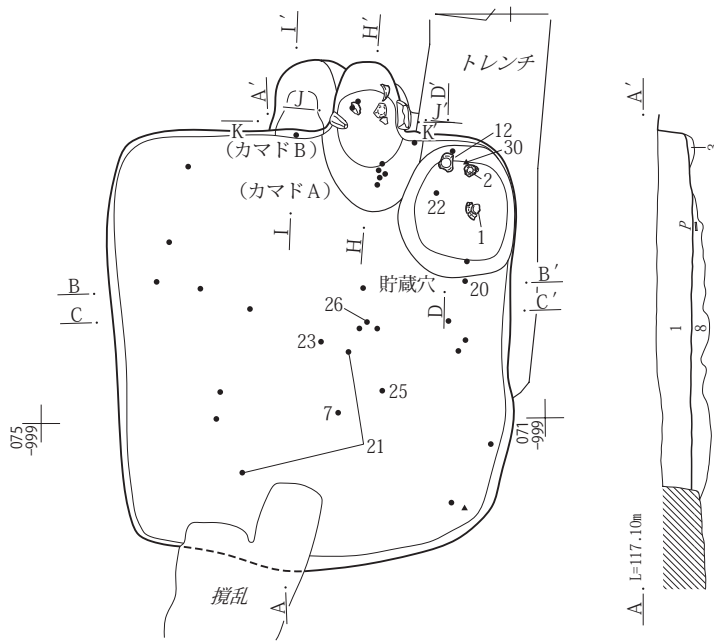
N-92° E (カマドB) 面積 9.66㎡

床面 細かな凹凸があり、南側へ低く傾斜していて北壁

直下と4cmの比高差がある。土坑状の窪みが連なるような掘り方があり、1～6号の床下土坑とした。埋戻し土は共通している。掘り方としては広範囲に多数の遺物の出土が見られる。

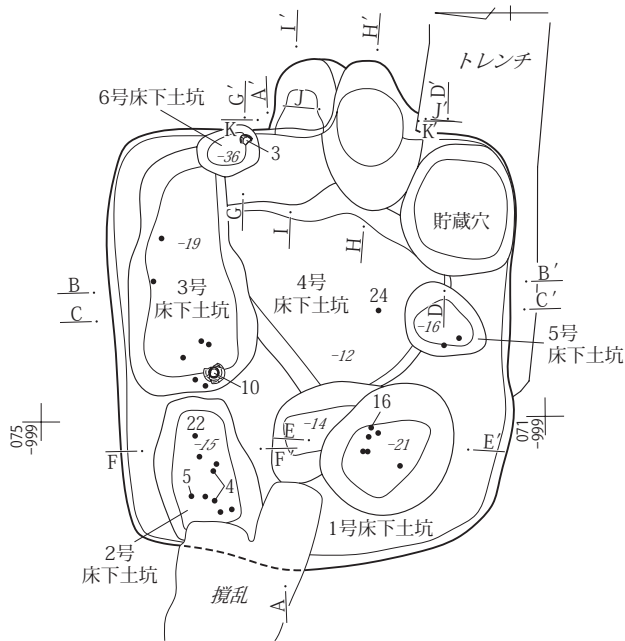
貯蔵穴 南東隅に径105×90cmの不整楕円形を呈した住居床面からの深さ18cmの窪みがあり、配置より貯蔵穴とした。埋戻し土はしまり弱く住居廃絶時に開口していたと思われる、出土遺物もやや多い。

カマド 東壁にあり造り直しの痕跡が確認できた。前出するカマドをB、後出するカマドをAとした。カマドAは東壁南寄りにある。燃烧部は壁際にあり、火床は住居床面より3cm窪んでいた。側壁際に礫が据えられているが、小型で袖石や焚口部を作る礫ではない。煙道・袖は確認できない。カマドBは東壁中央にあり、カマドAに南隅を壊されている。上面は地山と似た土で埋め戻されていた。燃烧部は壁際にあり、火床は住居床面とほぼ同じ高さにある。煙道・袖は確認できない。

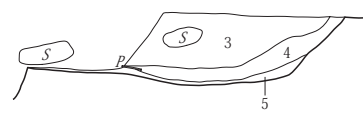


60号住居土層説明

- 1 暗褐7.5YR3/3 径2~5mmの焼土ブロックを含むし
まり強い住居埋没土。1'は焼土粒を含まずしまりやや
強い壁際埋没土。
- 2 黒7.5YR2/1 径5mmの焼土ブロック・灰を多く含
むしまり弱い貯蔵穴埋没土。
- 3 褐7.5YR4/4 径5mmの焼土ブロックを少量含むカマ
ドA上層埋没土。土器片の混入やや多い。3'は旧カマ
ド部分か。
- 4 暗赤褐2.5YR3/4 多量の焼土含むしまり弱いカマ
ドA下層埋没土。
- 5 黒褐7.5YR3/1 径3~5mmの焼土ブロックを含み、
灰が多く混じるため軟らかいカマドA火床直上埋没
土。5'は旧カマド部分か。
- 6 褐灰7.5YR4/1 汚れた地山の土を主体とするしまり
強いカマドB上層埋没土。
- 7 暗赤10R3/4 径3~5mmの焼土ブロックを多く含
み、灰が混じるカマドB下層埋没土。
- 8 暗褐7.5YR3/3 径5~8mmの焼土ブロックを多く、
炭化物粒を散見する掘り方埋戻し土。



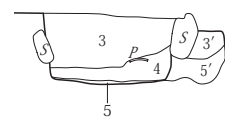
H, L=117.10m H'



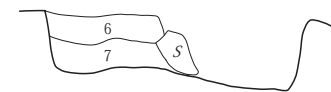
I, L=117.10m I'



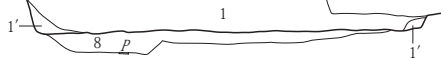
J, L=117.10m J'



K, L=117.10m K'



B, L=117.10m B'



C, L=117.10m C'



E, L=116.90m E' F, L=116.90m F'



D, L=116.90m D'



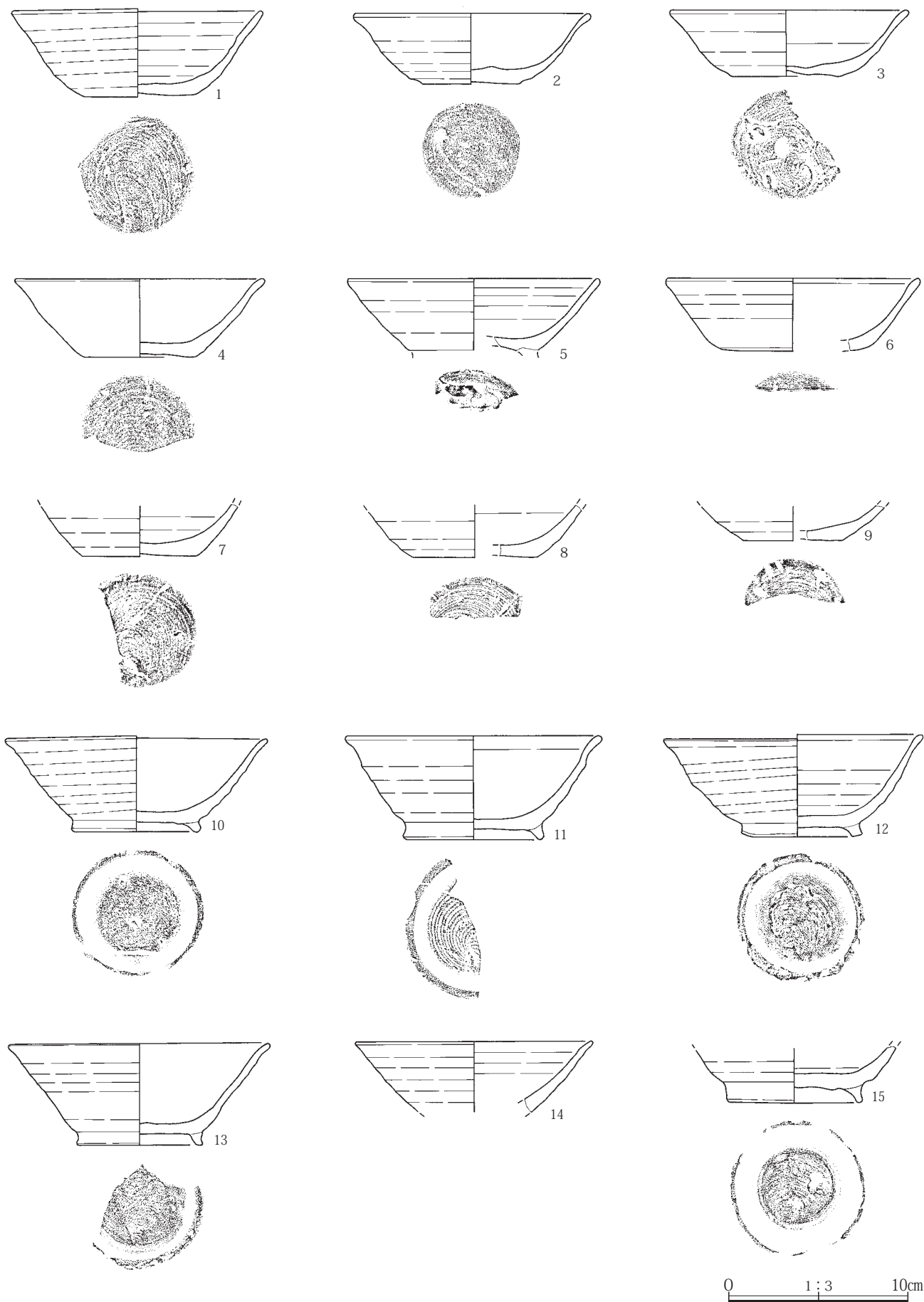
G, L=117.10m G'



0 1:30 1m

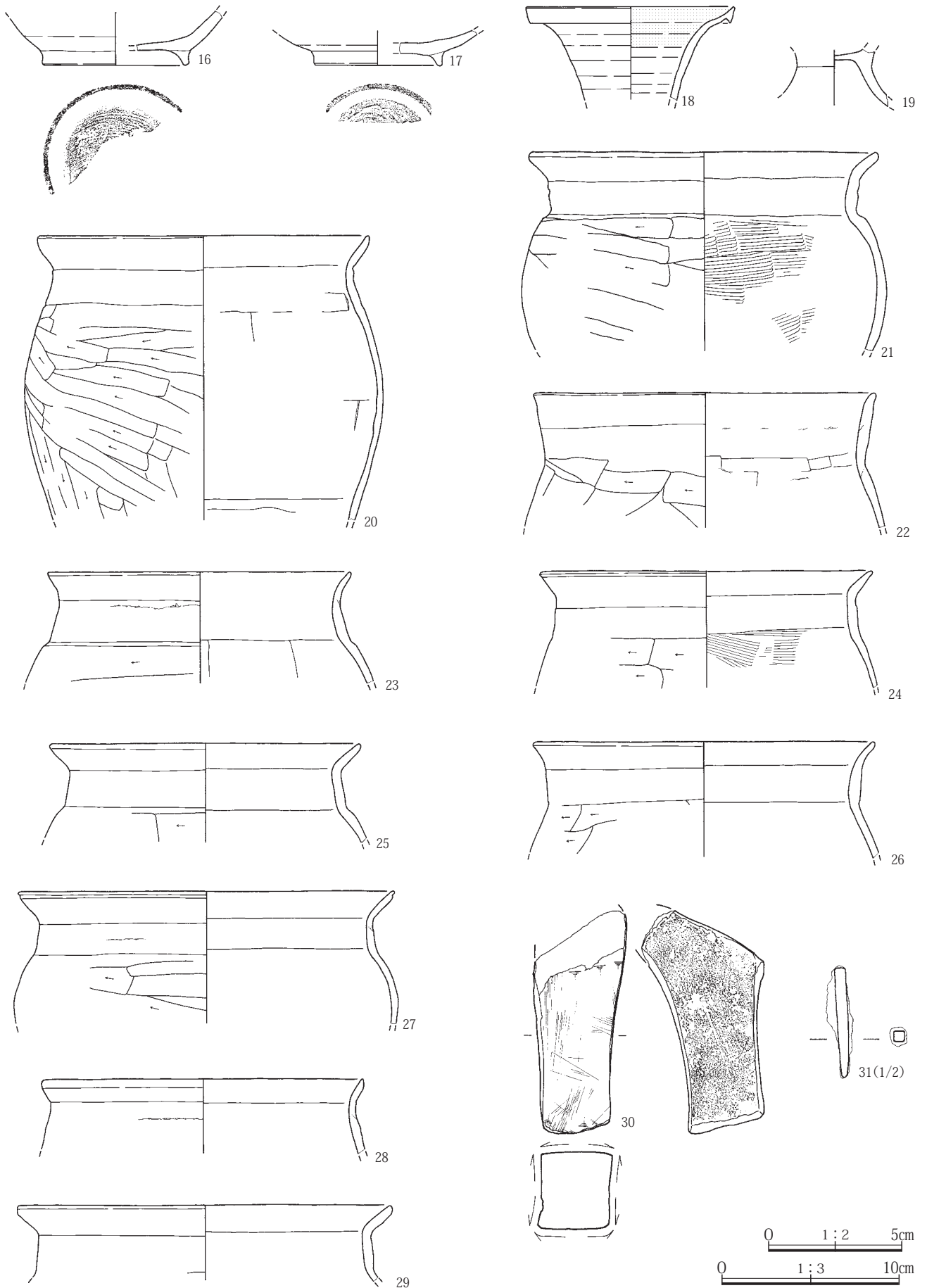
0 1:60 2m

第111図 60号住居



第112図 60号住居出土遺物(1)

第三章 調査の内容



第113図 60号住居出土遺物(2)

その他 北東側の3号住居は上端で10cmの距離に近接していて同時存在は不可能である。

遺物 出土遺物はきわめて豊富で土器29点と石製品・鉄製品各1点を図示した。須恵器杯1・2、椀12、土師器甕22、砥石30は貯蔵穴内、土師器甕20は貯蔵穴西脇の床直上の出土で、これらが本住居に確実に伴う土器である。カマドA埋没土からは須恵器杯6・土師器甕29が出土しているがどちらも小破片である。他に須恵器杯3・4、椀10・16、土師器甕24など床下の土坑状の窪みから出土する土器も多い。下面にもう1棟の住居が存在していたような遺物出土状態であるが、上面の遺物と大きな時間差は看取できない。

図示した以外の遺物も多く、本遺跡の竪穴住居中最大の1566点の土器が出土した。土師器壺甕類が主体で須恵器杯類も多いが、土師器杯類はごくわずかであった。

所見 杯類口縁は外反するものが多いが、椀皿への分化が明瞭ではない。煮沸土器に羽釜は伴っていない。9世紀中頃の住居と想定できる。

62号住居

(第114・115図 PL.24-①~④、57 遺物観察表244頁)

東5区中央南隅付近にある。住居の少ない一画で、東側の31号住居から約7m、北東側の32号住居から約6m、西側63号住居から11mの位置にある。

位置 063~066、-832~836グリッドにある。

規模形状 南北軸長2.94m、東西軸長3.64mの東西にやや長い長方形を呈している。南西隅のみやや丸みが強いが、各辺は直線的で比較的整った形状である。

埋没土・壁 レンズ状の堆積が顕著で、自然堆積が読み取れる。

方位 N-84°W(長軸) N-93°W(カマド)

面積 10.28㎡

床面 カマド前から南東隅周辺が他の床面より10cm近く窪み平坦さを欠いている。不規則な掘り方がほぼ全面に見られ、床面の低い部分下にも広い土坑状の掘り方が確認できる。

貯蔵穴 南東隅に床面からの深さ32cmのピット状の窪みがあり、配置より貯蔵穴とした。底面は平坦で遺物の出土もあるが径51×31cmで貯蔵穴としては小振りである。掘り方調査時の確認で住居廃絶時に開口していたか否か

は不明であるが、西壁際からの出土破片と接合する須恵器有台杯5の出土がある。

カマド 東壁南寄りにある。燃烧部は壁際にあり、火床はカマド前の低い床面よりさらに2cm前後窪んでいる。掘り方調査時に両壁際の窪みを確認しており、礫を据えた痕跡の可能性はある。またカマド内からカマド前面にかけて棒状礫を中心とする多量の礫が出土している。礫は石組みのカマドを築くことができる量であるが、顕著な被熱痕はなく、明瞭ではない。また燃烧部中央付近の火床からやや浮いた状態で平板な礫が水平に置かれている。礎盤石のような石材でカマド内の出土には違和感がある。袖は北側のみ基部周辺が確認できる。煙道は確認できない。

その他 壁溝・柱穴等は確認できない。

遺物 出土遺物は比較的豊富で、土器9点のほか瓦2点、土錘2点、石製紡輪1点を図示した。杯類3・4が床直上出土の本住居に確実に伴う土器である。掘り方からも須恵器杯6、土師器甕8の出土がある。瓦および土錘は本遺跡唯一の出土例であるが住居中央で床面寄り浮いた状態の出土である。図示した以外の遺物も豊富で、土器片704点が出土している。

所見 杯類は口縁の弱い外反が見られ、灰釉陶器の共伴もあり、9世紀中頃の住居と想定できる。

63号住居

(第116・117図 PL.24-⑤~⑧、57 遺物観察表244頁)

東5区の南西寄りにある。住居の少ない一画で、62号住居の西側約11mの位置にある。北東隅付近を攪乱で壊され、全容を把握できていない。

位置 064~067、-846~851グリッドにある。

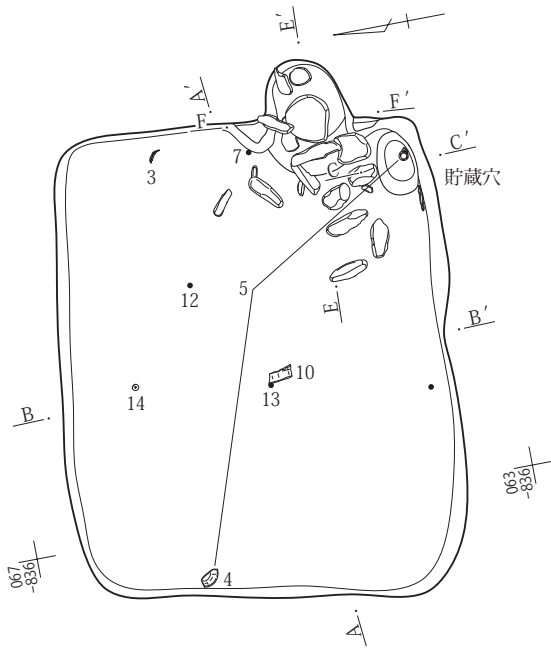
規模形状 南北軸長2.32m、東西軸長3.35mの東西に長い長方形を呈している。東辺はカマドを挟んで若干食い違っている。南辺の両隅は鈍角気味に開いているが、東辺北側は西方へ傾く可能性もあり、形状は推測し難い。

埋没土・壁 住居中央付近から埋没した痕跡が見られ、下層では人為的に埋め戻された可能性がある。

方位 N-82°W(長軸) N-95°W(カマド)

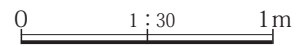
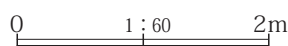
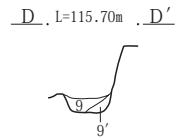
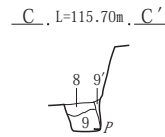
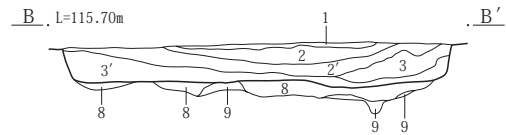
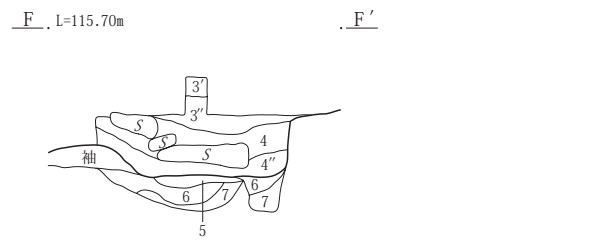
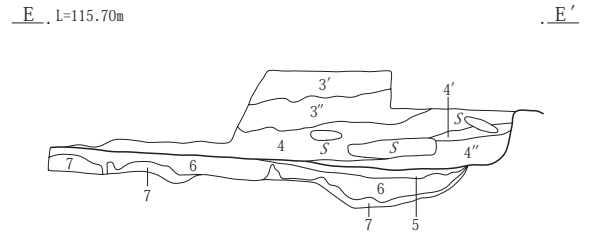
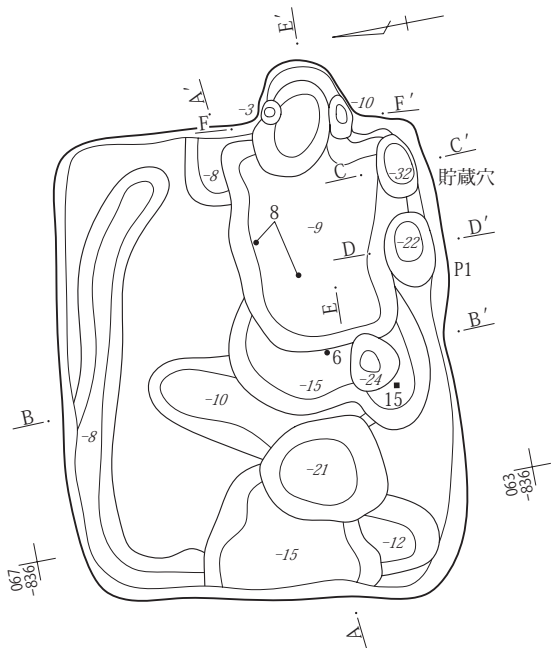
面積 復元[9.60]㎡

床面 比高差4cm前後の細かな凹凸がある。壁側を中心に不規則な掘り方がある。

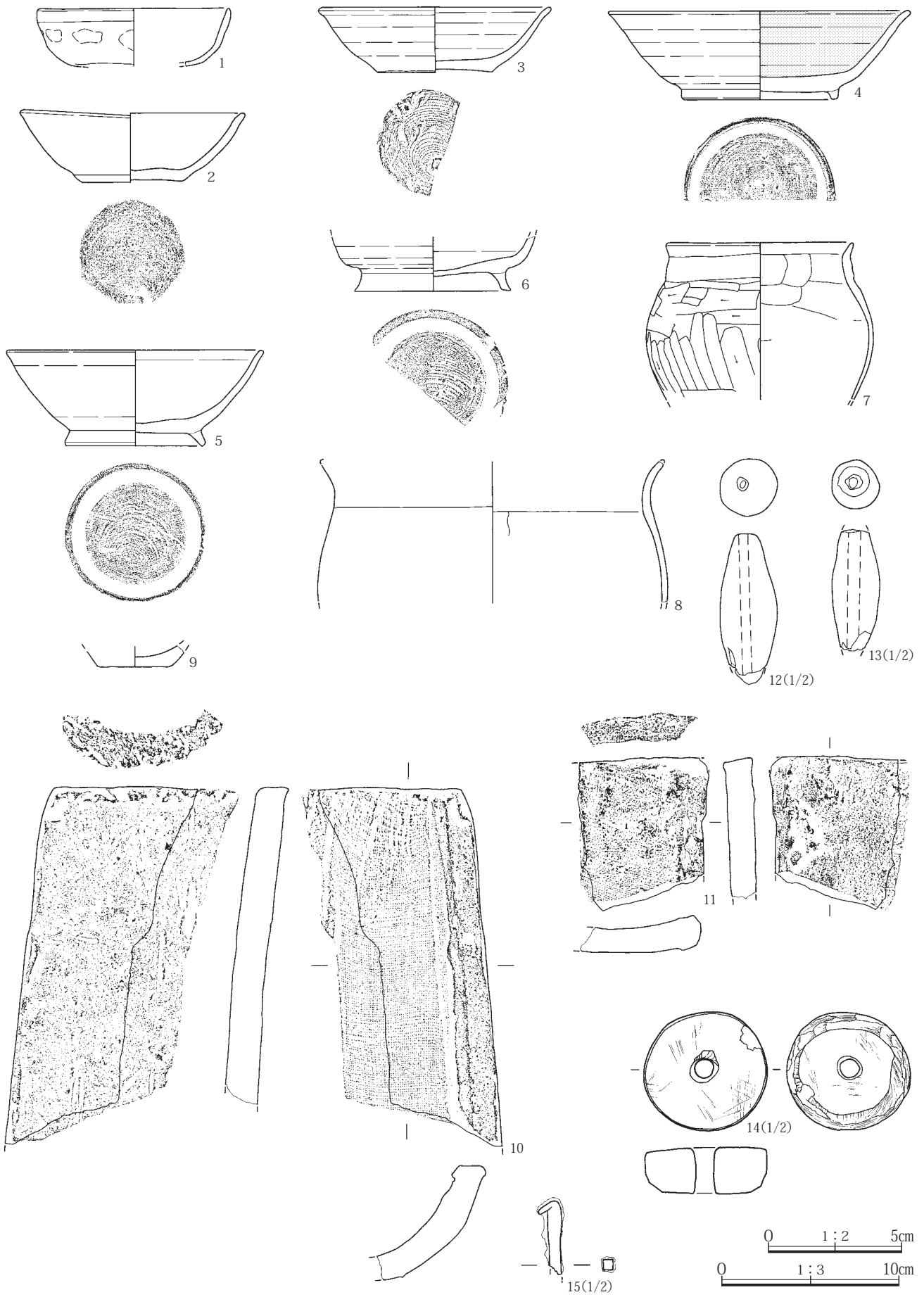


62号住居土層説明

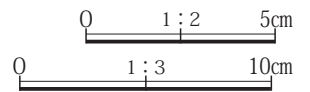
- 1 黒褐7.5YR3/2 混入物少なくしまり強い表層埋没土。
- 2 暗褐7.5YR3/4 1層に近似するが不揃いの焼土・ローム土を不均等に含む層。2'ではローム土やや多い。
- 3 暗褐7.5YR3/3 褐色土ブロックを含む締まり強い層。3'は壁際埋没土でやや大粒のローム状土ブロックが混じる。3''では焼土粒が少量混じる。
- 4 黒褐7.5YR3/2 焼土ブロック・褐色ブロックの混土。カマド埋没土としては焼土・炭化物粒の混入少ない。4'は褐色土ブロックがやや多くカマド構築材が混入した可能性。4''は火床直上埋没土で焼土ブロックを含む。
- 5 赤褐5YR4/6 焼土粒・炭化物粒を含む火床下埋戻し土。
- 6 暗赤褐5YR3/4 褐色粘土ブロック・焼土・炭化物粒を含むカマド掘り方埋戻し土。
- 7 にぶい赤褐5YR4/3 褐色土が被熱により赤変硬化したもので、旧火床の可能性。
- 8 暗褐7.5YR3/3 褐色粘土ブロックを含む粘性土の掘り方埋戻し土。
- 9 にぶい褐7.5YR5/3 地山と思われる径1cmの褐色粘土ブロックを含む掘り方下層埋戻し土。9'は褐色粘土ブロックを主体とする。



第114図 62号住居

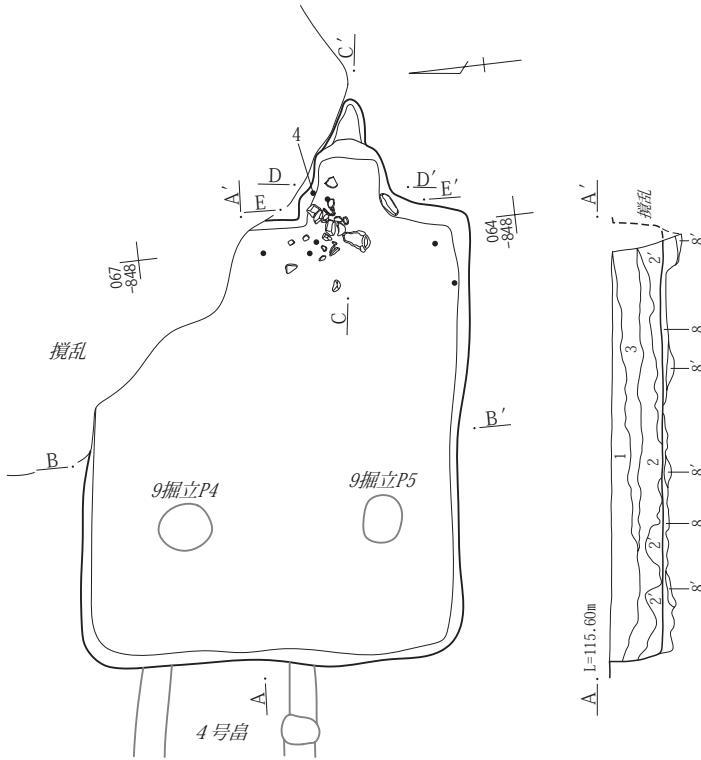


第115图 62号住居出土遺物



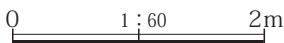
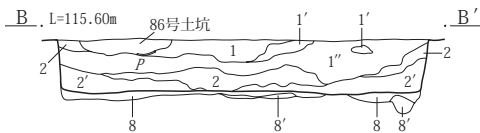
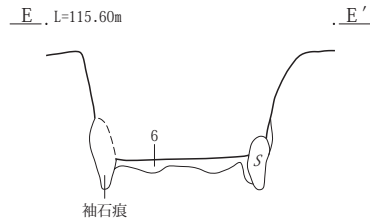
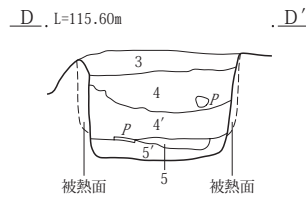
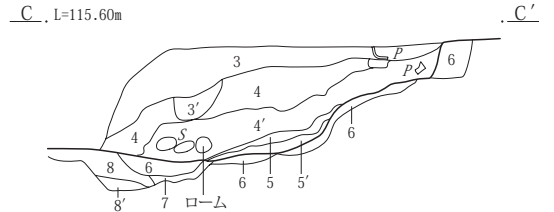
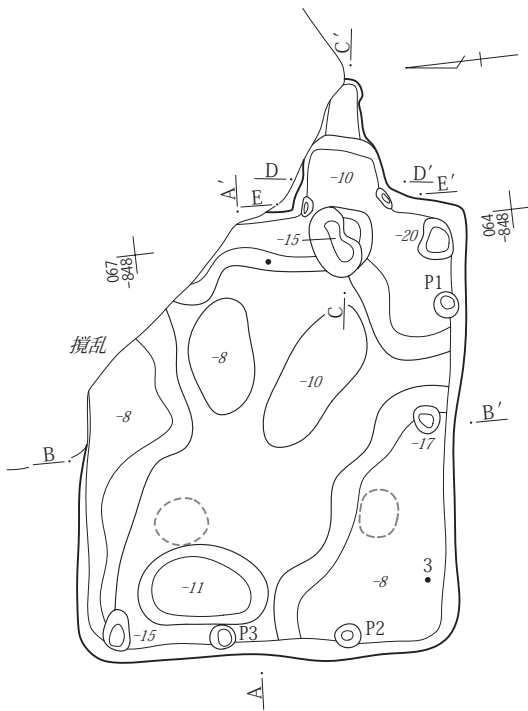
63号住居ピット一覧 (cm)

No.	長径×短径×深さ	種類・備考
1	22×20×46	壁柱穴か
2	21×18×41	壁柱穴か
3	21×20×34	壁柱柱穴か



63号住居土層説明

- 1 暗褐7.5YR3/3 粘性土小ブロックを散見する粘性の表層埋没土。1'は径1～3cmの黄褐色粘土ブロックを多く含む。1''では黄褐色粘土ブロックの混入が不均等で少なくなる。
- 2 暗褐7.5YR3/4 径1～3cmの黄褐色粘土ブロックを多量に含む粘性土。2'は径2～3mmの焼土ブロックをわずかに含む。
- 3 褐灰7.5YR4/1 焼土粒・白色軽石をわずかに含む粘性のカマド上層埋没土。3'は混入物少ない。
- 4 灰褐7.5YR4/2 焼土粒をわずかに、黄褐色粘土粒を含む。粘質。4'は汚れた黄褐色粘土ブロックを多く、焼土粒を少量含む。粘質。
- 5 黒褐7.5YR3/2 焼土ブロックを多く含み、灰が混じるやや粘性土。5'は火床直上で灰を多く含み軟らかい。炭化物粒・焼土を少量含む。
- 6 灰褐7.5YR4/2 径2～3mmの焼土ブロックをまだらに含むカマド掘り方埋戻し土。
- 7 黒褐7.5YR3/2 焼土ブロックを多く含み、灰が混じるカマド掘り方埋戻し土のやや粘性土。
- 8 暗褐7.5YR3/3 黄褐色粘土ブロックを含むしまり強い粘性土。掘り方埋戻し土。8'は暗褐色土ブロックをやや多く含む。



第116図 63号住居

ピット 掘り方調査時に壁際でピット状の窪みを確認し、この内床面からの深度30cm以上の3基をピットとして扱った。西辺のP2・3は壁直下に規則的に配置されていて壁柱穴の可能性はある。南辺東寄りのP1もP2・3と類似した規模である。

カマド 東壁南寄りにある。燃烧部は壁外にあり方形を呈している。火床は住居床面とほぼ同じ高さにある。南壁際に礫が据えられていて、北壁際にも礫を据えた痕跡と思われる窪みがある。石組みの焚口であった可能性がある。煙道は火床から段を作って立ち上がり、壁外へ約

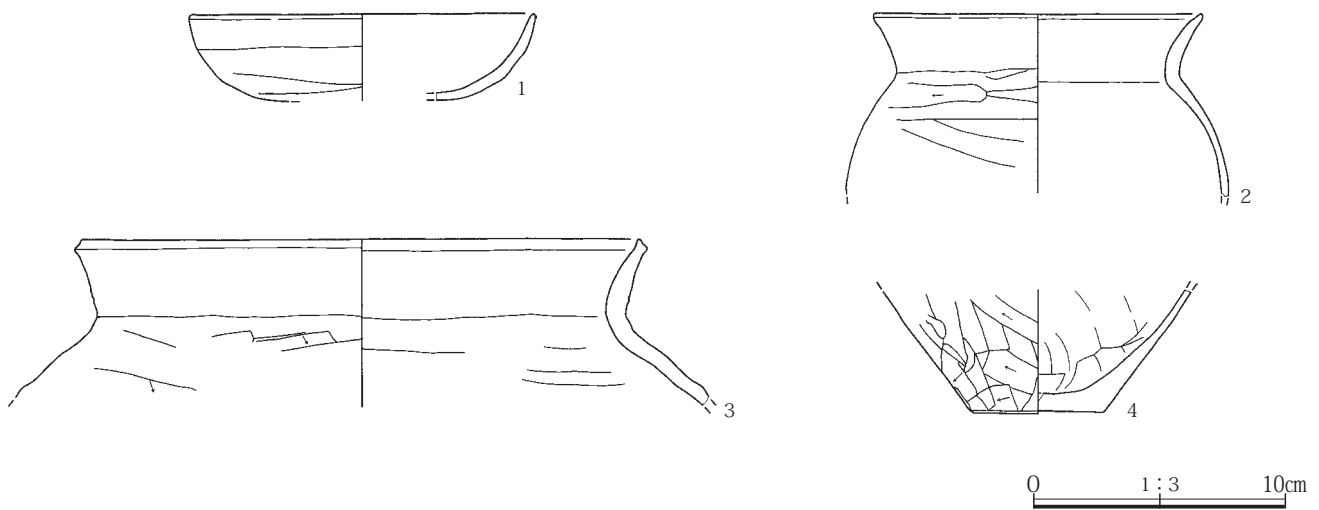
80cm張り出している。袖は確認できない。

その他 86号土坑に前出し、9号掘立柱建物・4号畠と重複する。壁溝等は確認できない。

遺物 土師器4点を図示したが、いずれも小破片である。小型甕2・4がカマド内、甕3が床下出土の遺物である。

図示した以外に土器片208点が出土しているが、ほとんどが土師器片であった。

所見 出土遺物は乏しいが甕口縁がコの字状となる以前の8世紀代の所産で、同時期の住居と想定できる。



第117図 63号住居出土遺物

64号住居

(第118図 PL.25-①~④、57 遺物観察表244頁)

東5区の南西隅で、63号住居の南西約6mの位置にある。南側は調査区域外で住居北半のみの把握である。

位置 061~063、-856~859グリッドにある。

規模形状 南北残存軸長1.59m、東西軸長2.78mで隅丸方形を呈すと思われる。北辺は外側へ張出すように大きく湾曲している。

埋没土・壁 全体に炭化物粒の混入が見られる。

方位 N-88°W

面積 残存(3.89)m²

床面 住居中央が窪んでいて壁直下と8cm前後の比高差がある。住居掘削時の窪みを埋め戻す程度の浅い掘り方がほぼ全面にある。

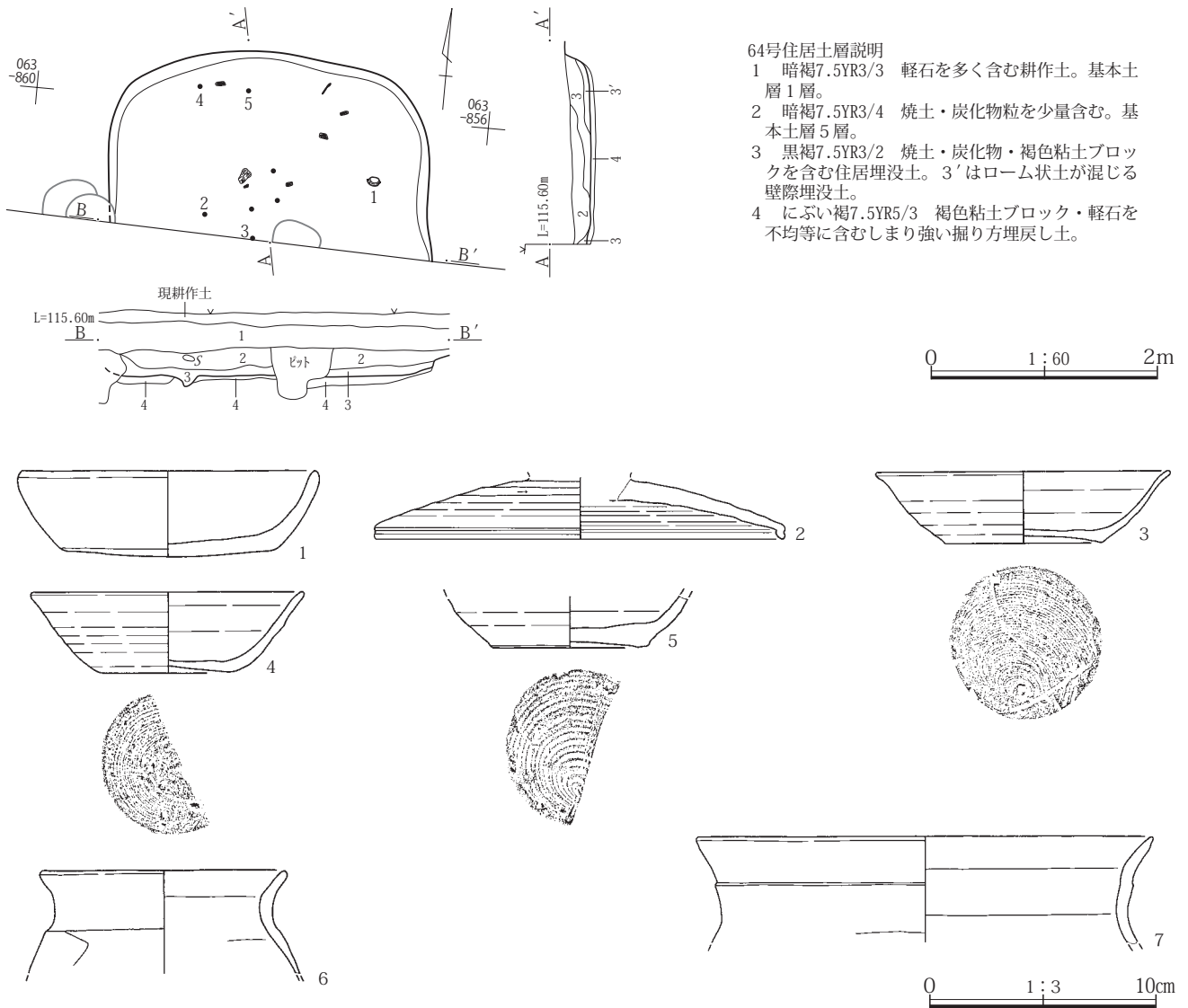
その他 66号住居と115号ピットは同時存在が不可能な近接した位置にある。調査区境にある土坑状の窪みに後出している。

遺物 遺物は住居全域に散乱するようにして出土し、土器7点を図示した。須恵器蓋2、杯4・5が床直上の出土である。

図示した以外に土器片234点が出土している。この内1/3を須恵器杯類が占めていた。

所見 須恵器杯は器高が低めで底径が大きいのが、土師器甕口縁はコの字状になっている。土師器杯1は底径が著しく広い8世紀前半が想定される土器だが混入品と扱えよう。8世末から9世紀初頭の遺構と想定できる。カマドや炉および壁溝等は確認できず、残存範囲では竪穴状遺構と分類した施設なる可能性がある。

第三章 調査の内容



64号住居土層説明

- 1 暗褐7.5YR3/3 軽石を多く含む耕作土。基本土層1層。
- 2 暗褐7.5YR3/4 焼土・炭化物粒を少量含む。基本土層5層。
- 3 黒褐7.5YR3/2 焼土・炭化物・褐色粘土ブロックを含む住居埋没土。3'はローム状土が混じる壁際埋没土。
- 4 にぶい褐7.5YR5/3 褐色粘土ブロック・軽石を不均等に含むしまり強い掘り方埋戻し土。

第118図 64号住居と出土遺物

65号住居

(第119図 PL.25-⑤・⑥)

東5区の西隅にある。調査区境にかかり、遺構東辺のみの把握である。

位置 065～069、-858～860グリッドにある。西側の大半が現道下であり、全容を把握できていない。

規模形状 南北軸長3.52m、東西残存軸長0.80mを測る。各隅は丸みが強く、東辺は外側へ張り出すように湾曲し、不整形な形状である。

埋没土・壁 レンズ状の堆積が見られ、自然堆積と判断できる。

方位 N-17° E

面積 残存(2.37)m²

床面 確認できた範囲では住居中央側が窪んでいる。掘り方は認められない。

ピット 深度に乏しい2基のピットを確認しているが、主柱穴配置上の施設ではない。

その他 カマド・炉および壁溝等は確認できない。

遺物 土器片63点を出土したが図示に耐える遺物はなかった。土師器薄手甕片が主体で奈良時代から平安時代初頭にかけての遺構と思われるが摩滅した破片で混入遺物の可能性もあり、明瞭ではない。

所見 遺物からの時期想定ができなかった。東辺にカマドがないことから奈良・平安時代の住居とは考えにくい。竪穴状遺構と分類した施設の可能性もある。

66号住居

(第120図 PL.25-⑦・⑧)

東5区の南西隅にあり、南東側の64号住居、北側の65号住居に近接している。調査区境にかかり、東側半分の把握である。

位置 062~065、-859~861グリッドにある。西側は現道下であり、全容を把握できていない。

規模形状 南北軸長2.42m、東西残存軸長1.80mを測る。残存する各隅は丸みが強く、各辺は外側へ膨らむように湾曲している。

埋没土・壁 焼土混じりの住居埋没土的な土の水平に近い堆積が見られる。

方位 N-5°E(長軸) **面積** 残存(3.68)m²

床面 細かな凹凸があり3cm前後の比高差が見られるが、全体ではほぼ水平な床面である。住居掘削時の窪みを埋め戻す程度のわずかな掘り方が見られる。

ピット 東壁際に径25×18cm、床面からの深さ24cmの小ピットが見られる。床面段階では不明瞭な施設だったが、東西壁際に2本の支柱穴を置く配置が想定される。

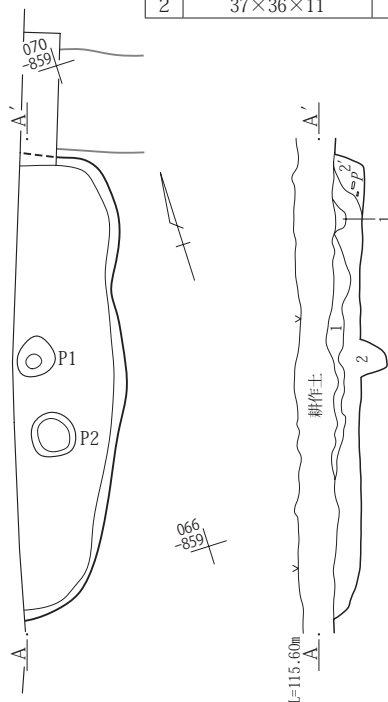
その他 カマド・炉および壁溝等は確認できない。南東側に隣接する64号住居とは上端で約20cmの距離しかなく、同時存在は不可能である。

遺物 51点の土器片を出土したが、図示に耐える遺物はなかった。土師器薄手甕類が主体でコの字状口縁甕頸部片が確認できた。9世紀代の住居と想定されるが確実なものではない。

所見 遺物からの時期決定ができなかった。東辺にカマドがなく、北辺にもカマドがなさそうで、住居ではなく竪穴状遺構と分類した施設の可能性もある。東5区南西隅の64~66号住居は住居として不明瞭な遺構で、東4区の6号竪穴状遺構を含めたこの一画が竪穴状遺構の集中地点となる可能性がある。

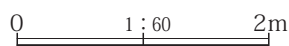
65号住居ピット一覧 (cm)

No.	長径×短径×深さ	種類・備考
1	32×30×23	住居廃絶時開口
2	37×36×11	



65号住居土層説明

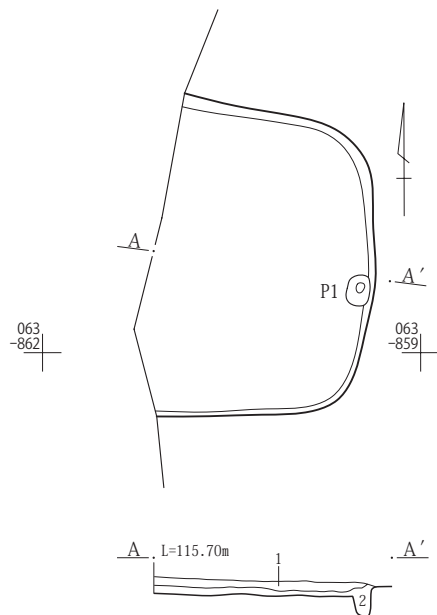
- 1 暗褐7.5YR3/4 焼土・炭化物粒を含む表層埋没土。
- 2 黒褐7.5YR3/2 焼土・炭化物粒・褐色粘土ブロックを含む埋没土。
2'は混入物の多い壁際埋没土。



第119図 65号住居

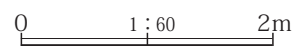
66号住居ピット一覧 (cm)

No.	長径×短径×深さ	種類・備考
1	25×18×24	支柱穴か



66号住居土層説明

- 1 暗褐7.5YR3/4 径5mmの炭化物粒・焼土ブロックを含む粘性土。
- 2 暗褐7.5YR3/3 径2~3mmの焼土ブロックをわずかに含む下層埋没土で水平堆積が見られる。



第120図 66号住居

3 竪穴状遺構

本遺跡では6棟の方形施設を竪穴状遺構と名付けた。住居に比べやや小型で、カマドや炉等の施設がなく住居と考えにくい。豊富な出土遺物の存在、あるいは埋没土に炭化物粒や焼土粒等の混在などがあり、土坑として扱うには躊躇する遺構である。このうち東3区北西隅付近の1～3号竪穴状遺構は重複している。軸方向や規模に類似点があり、同一遺構の数度に及ぶ造り直しの痕跡となる可能性がある。4・5号竪穴状遺構は東3区中央付近に、6号竪穴状遺構は東4区にある。

このような方形遺構には、中世の施設が含まれる場合が多いが、本遺跡出土遺物の時期は奈良・平安時代に限定されている。

竪穴状遺構として扱った以外に、45・47・64～66号住居や42号土坑など、近似した施設がある。

1号竪穴状遺構

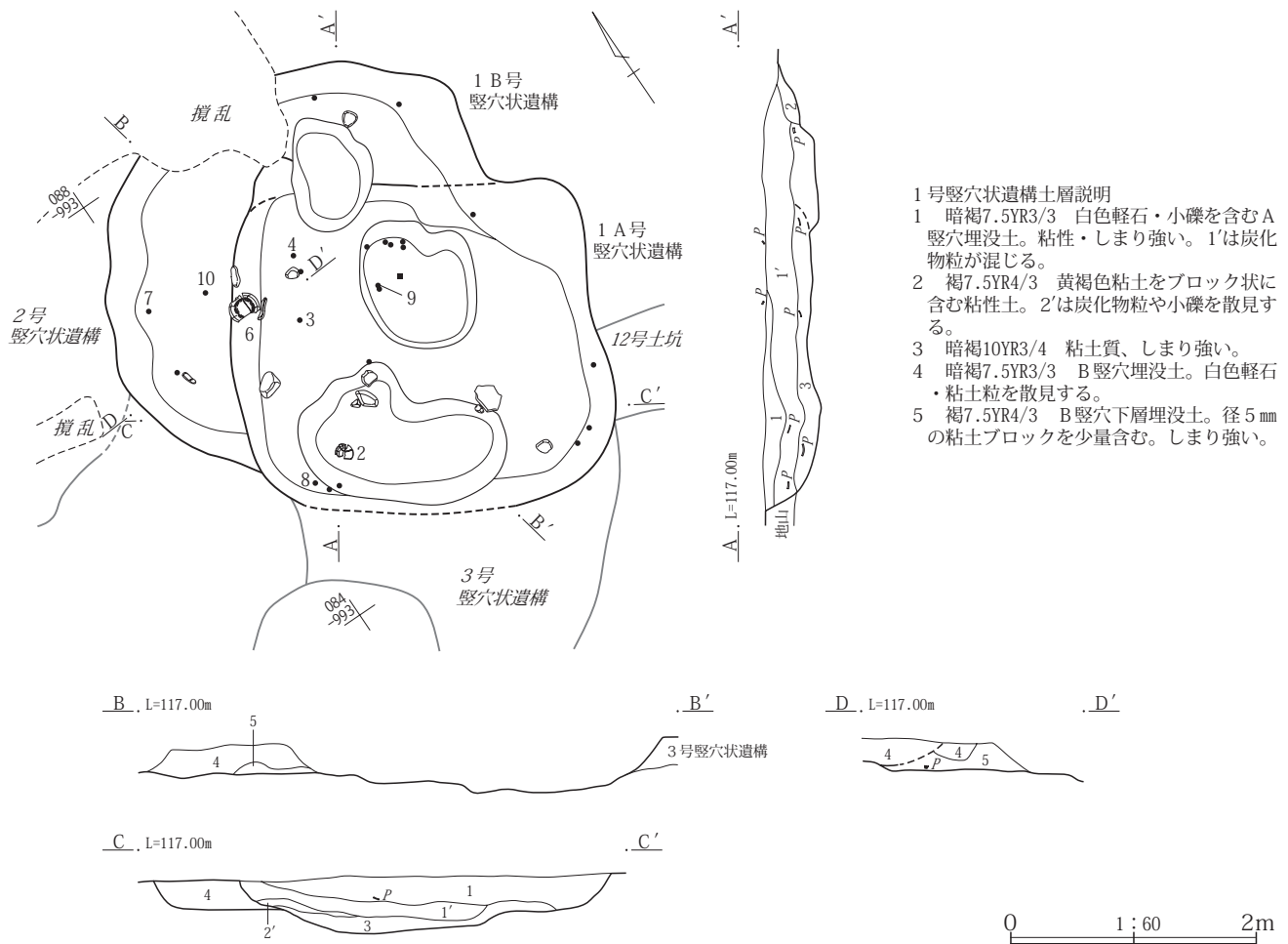
(第121・122図 PL.26-①～④、58 遺物観察表245頁)

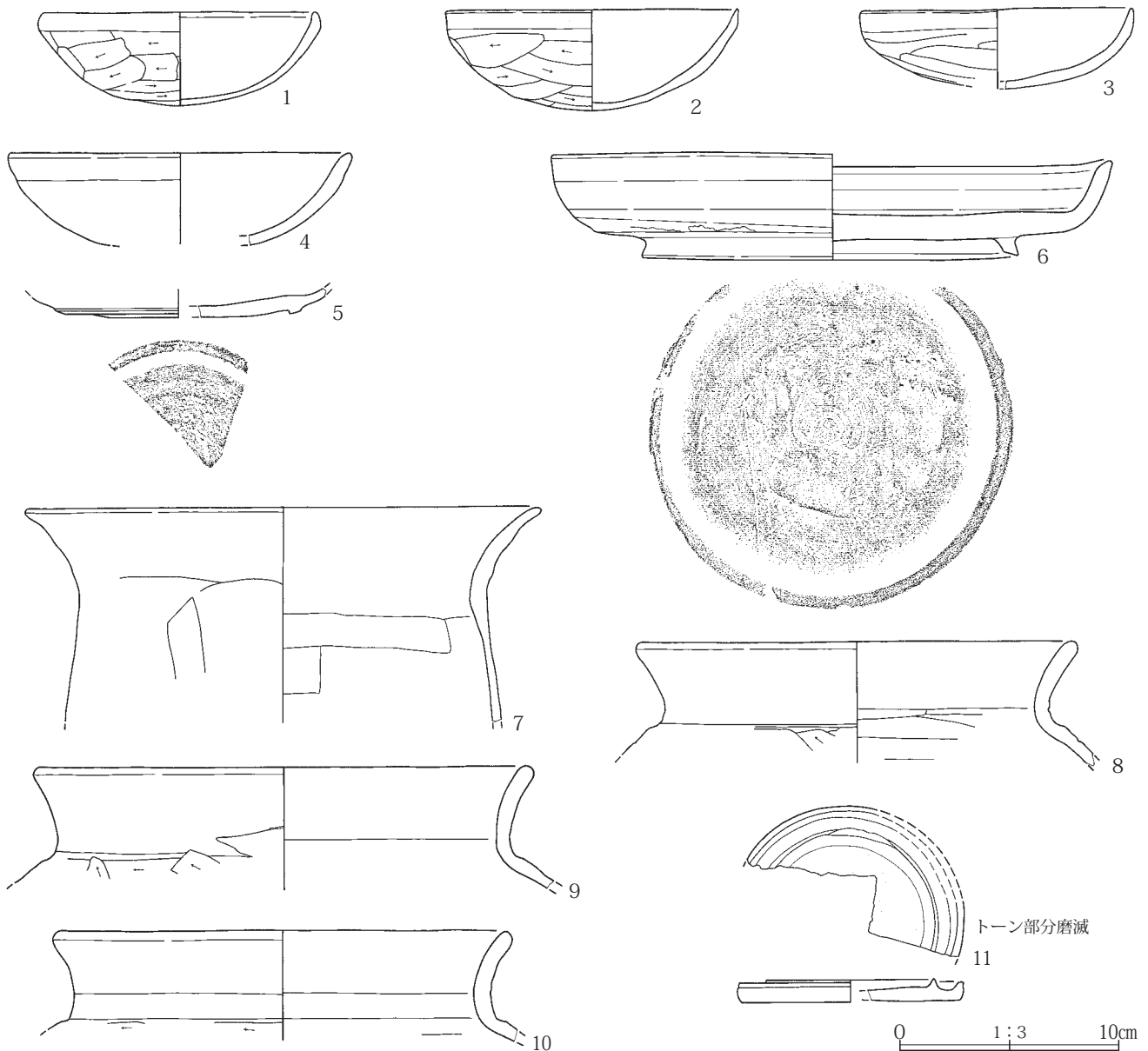
形状からは後出する南側の方形遺構と、前出する北側の円形気味の遺構の重複と思われる。後出部分を1A号竪穴状遺構(A竪穴と略す)、前出部分を1B号竪穴状遺構(B竪穴と略す)と呼称して区別した。

位置 084～088、-989～993グリッドにある。

規模形状 A竪穴は北西-南東軸長3.05m、北東-南西軸長2.65mの方形を呈している。北隅に北東側へ延びる幅1.2mほどの張り出し部がある可能性があるが、明瞭にできなかった。B竪穴は軸長3.2m前後の、円形に近いような隅丸方形を呈すと思われるが不整である。特に東壁側は不明瞭になる。

埋没土・壁 C断面から重複する2基の遺構を想定したが、A断面ではあまり明瞭ではない。人為的埋戻しの痕跡は確認できない。





第122図 1 A・B号竪穴状遺構出土遺物

方位 A竪穴：N-56°W(長軸)

面積 A竪穴：5.55㎡ B竪穴：6.04㎡(復元)

床面 凹凸が多いうえ、土坑状の窪みがある。図示した3カ所の窪みのうち、南西壁下にある窪みは遺構下端に沿って穿たれていて、遺構と同時存在と思われる。他の2カ所の窪みも土層や踏み固めから別遺構と推定する根拠は得られていない。B竪穴では凹凸はやや少ない。

その他 A竪穴は3号竪穴状遺構と12号土坑に後出している。B竪穴は2号竪穴状遺構に後出していたと思われるが不明瞭である。径20cm前後のやや大振りの自然礫が不均等に見られ、A竪穴内では床直上に多く見られた。

遺物 遺構内のほぼ全域に散乱するようにして出土した

11点の土器を図示した。A竪穴では土師器杯3・4、須恵器盤6などが床直上や壁に密着した状態で出土している。土師器杯2は南寄りの窪み底面から10cm上の遺物だが、床面とほぼ同レベルにある。B竪穴でも土師器甕7・10が床直上の出土遺物である。6は本遺跡出土供膳具中最大径の口縁を持つ盤で、11は本遺跡で唯一例の陶硯で埋没土取り上げの遺物である。図示した以外の遺物も豊富で土器561点が出土している。破片数を本遺跡の住居と対比しても十指に数えられる点数である。

所見 盤状の須恵器を伴う8世紀初頭の遺構である。陶硯や盤の出土があるが、煮沸具を伴い、住居と変わらない組成の土器が見られる。

2号竪穴状遺構

(第123図 PL.26-④、58 遺物観察表245頁)

1 B号竪穴状遺構の北西側に重複している。北側を大きく攪乱に壊され、全容を把握できていない。

位置 086~088、-992~995グリッドにある。

規模形状 東西軸方向3.3m以上、南北軸方向2.8m以上の隅丸方形が想定される。1 B号竪穴状遺構同様円形に近い形状の可能性があるが、不明瞭である。

埋没土・壁 下層を中心に人為的な埋戻しのような不整な埋没の痕跡が見られる。

方位 N-66° E(長軸)

面積 3.68㎡(残存) 方形であれば6㎡以上で、6号竪穴状遺構に次ぐ規模になると想定される。

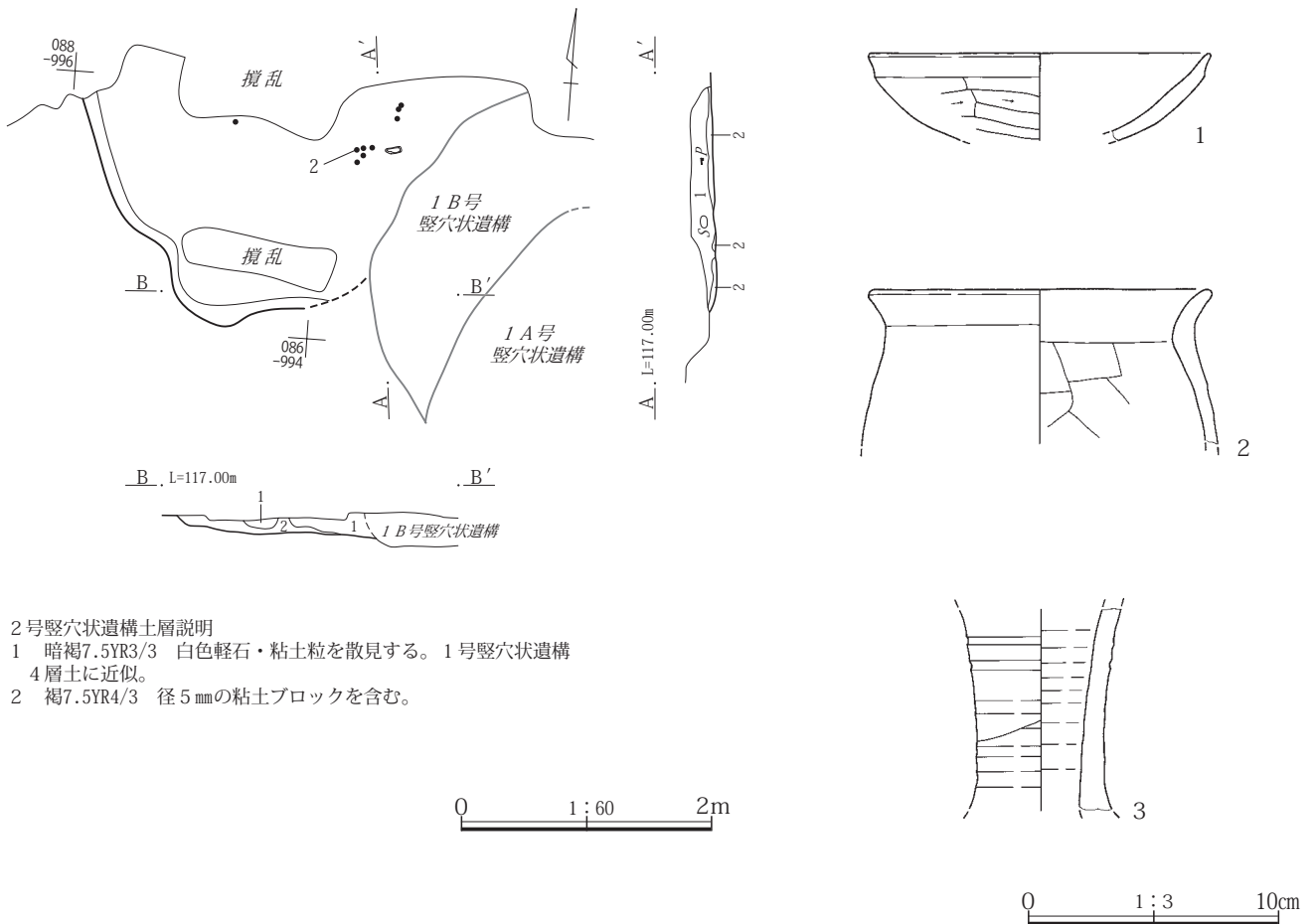
床面 中央の低い皿底状の床面で、凹凸は比較的少ない。

その他 1 B号竪穴状遺構に前出すると思われるが、同遺構とは近似した埋没土で、土層断面の観察でも前後関係は明瞭にできなかった。

遺物 全体が表せるような遺物はなく、破片から復元した3点の土器を図示した。中央東寄り付近は小破片がまとまって廃棄されたような状態で確認され、その内の1点が2で、床上4cmで出土した。遺構中央付近の出土で、本遺構に確実に伴う遺物とは認定できない。

図示した以外の遺物は多く、土器231点が出土している。ほとんどが土師器壺甕類であった。

所見 1号竪穴状遺構に類似した土師器杯があり、同遺構と同時期の8世紀前半の遺構と推定される。



第123図 2号竪穴状遺構と出土遺物

3号竪穴状遺構

(第124図 PL.26-⑤、58 遺物観察表245頁)

1 A号竪穴状遺構の南西側に広がる遺構である。

位置 082~084、-990~993グリッドにある。

規模形状 長軸2.6m以上、短軸2.5mの隅丸方形を呈すと思われる。

埋没土・壁 2号竪穴状遺構に近似した埋没土で、下側は人為的な埋戻しのような不整な層序が見られる。

方位 N-41° E (長軸)

面積 4.61m² (復元)

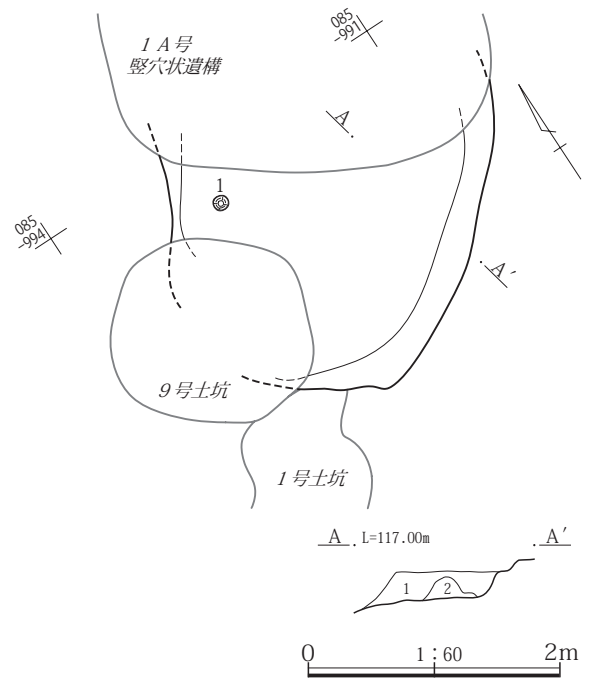
床面 中央の低い皿底状の床面で、細かな凹凸があるが比較的平坦である。

その他 1 A号竪穴状遺構、1・9号土坑に前出している。

遺物 図示できた土器は1点だが、西壁寄り床直上出土の完形土師器杯で本遺構に確実に伴う土器である。

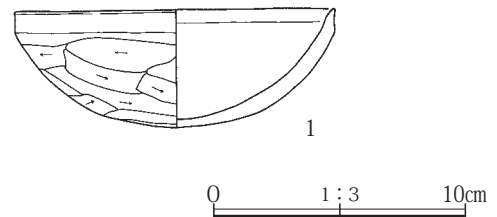
図示した以外に土器89点が出土している。ほとんどが土師器壺甕類であった。

所見 長軸方向が1 A号竪穴状遺構に沿っており、近接した時期の遺構と思われる。出土遺物も1・2号竪穴状遺構に近似した8世紀初頭の所産である。



3号竪穴状遺構土層説明

- 1 暗褐7.5YR3/3 白色軽石・粘土粒を散見する。1号竪穴状遺構4層土に近似。
- 2 灰褐7.5YR4/2 白色軽石・径5mmの粘土ブロックを含む。



第124図 3号竪穴状遺構と出土遺物

4号竪穴状遺構

(第125図 PL.26-⑥ 遺物観察表245頁)

23・24号住居に東側を、試掘トレンチに北側を削られ、全容が不明瞭になっている。長方形の遺構であった可能性があり、規模も他の竪穴状遺構に近似している。南側に細長い土坑状の窪みが続いている。重複する別遺構と思われるが、西壁が繋がっており、張り出し施設の可能性もある。ここでは張り出し部と呼称した。

位置 079~085、-936~938グリッドにある。張り出し部南端は079-937グリッドになる。

規模形状 南北軸3.6m、東西軸2.5m以上の隅丸長方形が想定できる。張り出し部は長さ1.9m、幅0.9mの規模である。

埋没土・壁 壁側から緩やかに、水平に近い堆積が確認でき、人為的な埋戻しの痕跡は認められない。

方位 N-3° E (長軸)

面積 5.60m²

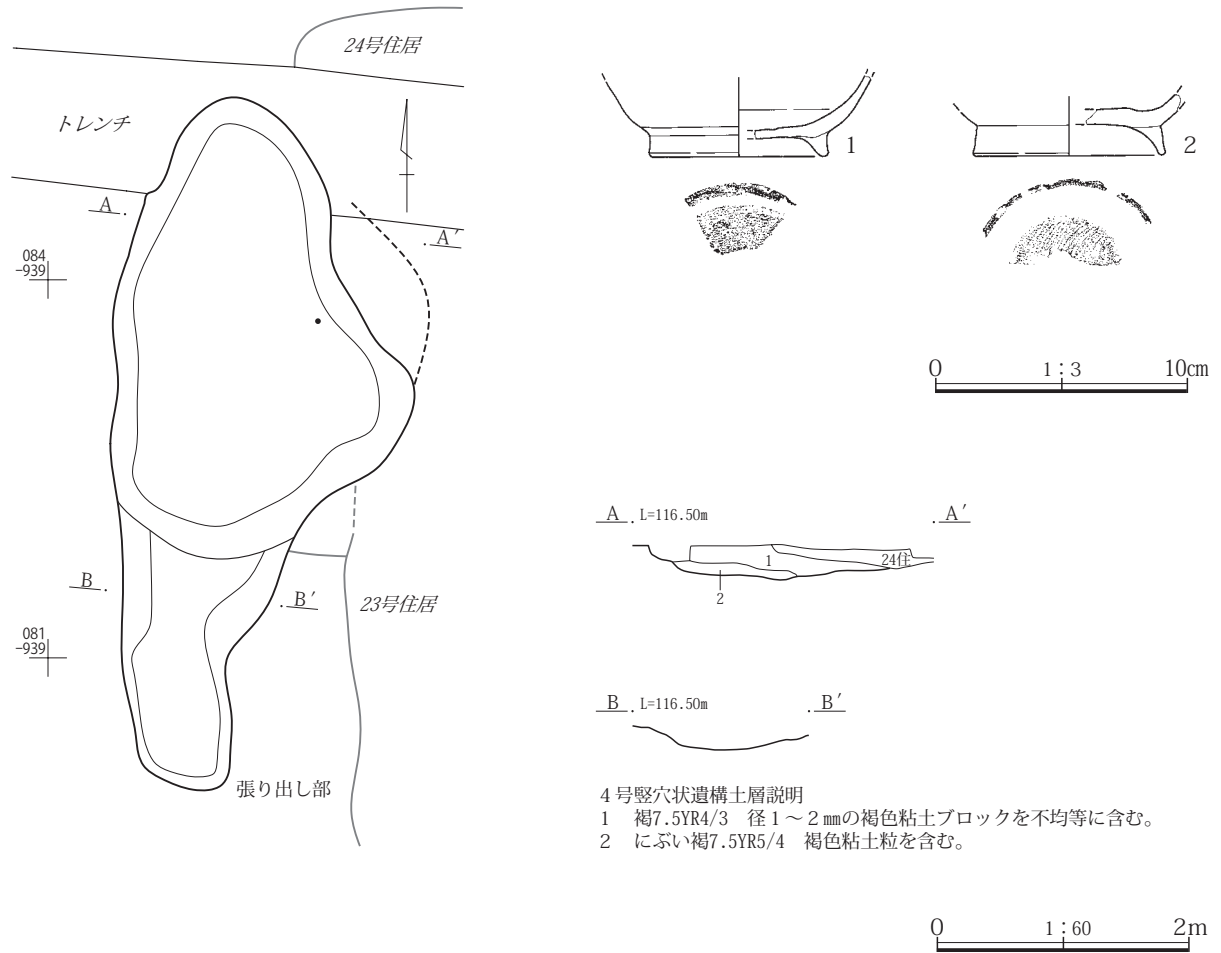
床面 凹凸のやや多い底面で、中央付近の窪みが大きく平坦面は少ない。

その他 24号住居に前出し、23号住居に後出している。

遺物 図示できた土器は2点で、いずれも埋没土内で取り上げた須恵器碗の底部破片である。

図示した以外に土器89点が出土している。須恵器杯類が1/4を占め、他の竪穴状遺構と様相を異にしていた。

所見 遺物が乏しいが、1は底面から口縁にかけての立ち上がり緩やかな9世紀頃の碗である。重複する2棟の竪穴状住居と同時期であり、それらの建物から混入した遺物の可能性もある。他の竪穴状遺構とは形状が異なり、それ以外の性格を推測すると、竪穴状住居の西壁際掘り方となる可能性もある。



第125図 4号竪穴状遺構と出土遺物

5号竪穴状遺構

(第126図 PL.26-⑦・⑧、58 遺物観察表245頁)

4号竪穴状遺構の南側15mの位置にあり、竪穴状遺構の中では比較的整った方形を呈している。

位置 064～066、-937～939グリッドにある。

規模形状 東西軸長2.5m、南北軸長2.1mの長方形を呈し、北東・南西隅が鈍角に開く平行四辺形状に歪んでいる。東辺が屈曲するが、他辺は直線的で整っている。6棟の竪穴状遺構中、最も小型の遺構になると思われる。

埋没土・壁 北側から一気に埋まっており、人為的埋戻しの可能性が高い。

方位 N-86°E(東西軸)

面積 4.23㎡(復元)

床面 床面には凹凸が多く、竪穴住居の床面とは大きく異なっている。

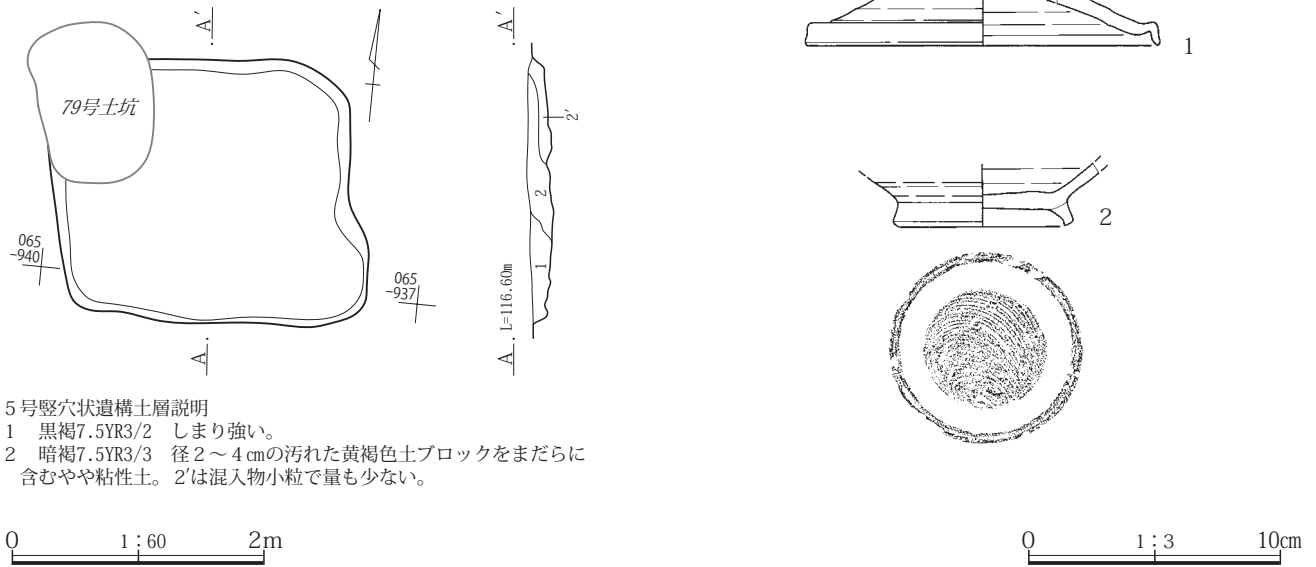
その他 79号土坑に前出している。北側に隣接する47号

住居とは最短の上端で35cmの間隔しかなく、同時存在は不可能である。

遺物 図示できた土器は埋没土内で取り上げた須恵器蓋・碗の2点のみである。

図示した以外に土器131点が出土しているが、ほとんどが土師器であった。

所見 出土遺物に乏しいが、須恵器碗は内側の立ち上がりに丸みがなく、高台もしっかりしている。口径も広くなると思われ、8世紀末から9世紀初頭の所産と推定される。



5号竪穴状遺構土層説明

- 1 黒褐7.5YR3/2 しまり強い。
- 2 暗褐7.5YR3/3 径2～4cmの汚れた黄褐色土ブロックをまだらに含むやや粘性土。2'は混入物小粒で量も少ない。

第126図 5号竪穴状遺構と出土遺物

6号竪穴状遺構 (第127図)

東4区南隅付近にある。西側の4・5号竪穴状遺構から約65m離れている。南西隅が撤去できない施設にかかり、完掘できていない。

位置 070～073、-868-871グリッドにある。

規模形状 東西軸長3.2m、南北軸長2.8mの東西に長い比較的整った長方形を呈している。

埋没土・壁 埋没土の記録を欠く。緩やかに立ち上がる壁である。

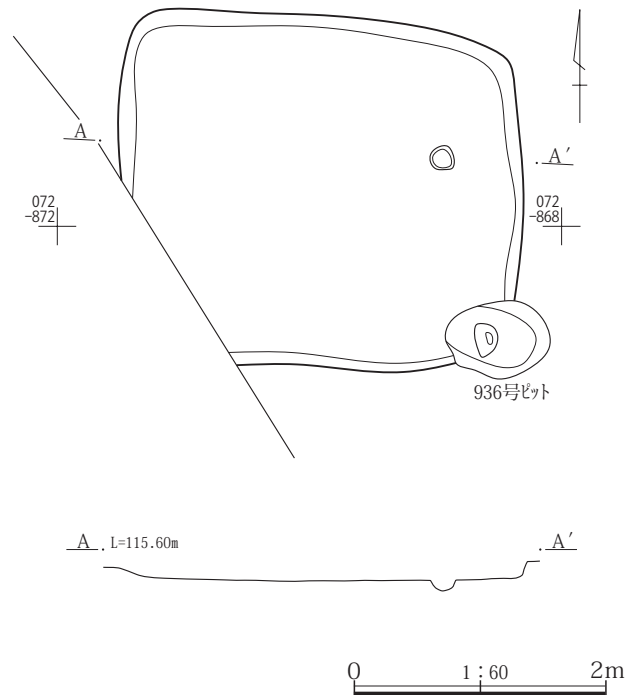
方位 N-88°W(長軸)

面積 7.50㎡(復元)

床面 地山の傾斜に沿って北西側が低く傾斜し、南東隅付近と8cmの比高差がある。踏み固められた痕跡はないが、比較的平坦な床面である。掘り方は認められない。東壁下北寄りに床面からの深さ9cmの窪みがあるが、柱穴的ではない。

その他 出土遺物は全くなかった。南東隅付近で936号ピットと重複している。カマドのような位置にあるが、焼土・炭化物等カマドを推定する痕跡はない。7号掘立柱建物の西側に近接し、西柱筋とは70cmの距離である。

所見 年代を想定する根拠を持たない。7号掘立柱建物とは軸方向がやや近似していて、近接する時代の遺構となる可能性がある。



第127図 6号竪穴状遺構

4 掘立柱建物と柱穴列

本遺跡では掘立柱建物12棟と柱穴列3棟を確認した。遺構の分布は東3～5区および西3区にあり、古代の集落範囲と重複する広い範囲で確認できた。東3区に掘立柱建物9棟と柱穴列1棟があり、最も集中した一画となったが、掘立柱建物の集中地点は竪穴住居分布がやや希薄になる部分であった。なお、以下の本文中では掘立柱建物を略して「建物」と呼称することがある。

本遺跡では約1050基のピット状窪みを確認しているが、この内、掘立柱建物や柱穴列等に含まれると想定できたのは110基あまりで、ほかにも明確にできなかった建物状の施設が残存する可能性がある。

掘立柱建物は遺物を伴わず、年代を推定する鍵層もないことから時期決定の根拠を欠いている。しかし調査範囲内では中・近世の遺物や居住にかかわる遺構が希薄で、本遺跡の掘立柱建物の中に、古代の遺構も含まれていると想定される。

また、建物と柱穴列の軸方向をもとに分類を加えた。建物東面軸方向が真北より東側に15°以上振れている

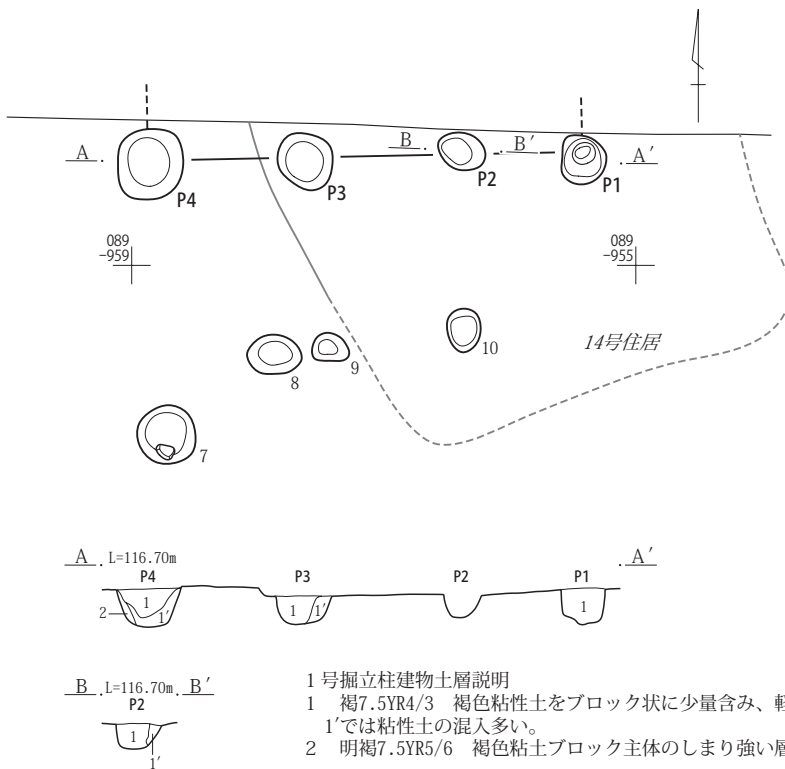
ものを1類、建物東面軸方向の東側への振れが5°以上15°未満のものを2類、東西両方向へ5°未満の範囲で振れているものを3類、西側へ5°以上振れているものを4類とした。なお、東西方向の柱穴列は、軸方向に直行する方向で分類を加えた。建物の平均値は東側へ8°、柱穴列を加えた全施設で東側へ5°となる。

1号掘立柱建物(第128図 PL.27-①~④)

概要 東調査区11棟の建物中、最も西側に位置している。東3区中央西寄り北隅の、調査区境に接した位置にある。当初、個別のピットを想定して調査したが、柱の並びから調査段階で建物としたもので、全体の写真を欠いている。建物南側の側柱列と想定した範囲の確認だが、北側大半は不明であり、掘立柱建物になるとの確認を得られていない。

位置 089・090、-955～959グリッド

規模形状 建物の南側柱と想定した、柱間3間の4本の柱穴からなる。P1～P4の芯々距離で3.44mの規模がある。各ピット間の距離はP1-P2間が96cmと短く、

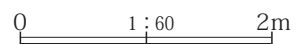


1号掘立柱建物ピット計測表 (cm)

番号	長軸	短軸	深さ	備考
1	41	38	25・29	14住重複・底面に柱痕か
2	39	29	20	14住と重複
3	49	44	25	14住と重複
4	57	51	32	

ピット間隔計測表 (cm)

該当ピット	距離
1-2	96
2-3	125
3-4	123



第128図 1号掘立柱建物

P 2 - P 3・P 3 - P 4 間が120cm台で近似している。東側に庇が付く建物で、P 1 が庇南隅の柱穴となる可能性がある。

軸方向 N-89° E (東西柱列)

柱穴 4本の柱穴は住居との重複のないP 4 が径50cm前後でやや大きい。P 1 のみ底面に柱痕状の窪みが確認できるが、各柱穴断面に柱痕は確認できない。

その他 14号住居埋没土断面に本建物P 1・P 2の痕跡が確認できない。14号住居外側のP 4と、内側のP 1～P 3の埋没土が近似していて住居埋没土がピット内に混入した痕跡も見られないことから、本建物が14号住居(古墳時代か)に前出していた可能性がある。しかし住居床面にあたるP 1～P 3上面部分に踏み固めや炭化物粒・灰等の散布が見られず、新旧関係を明確にできない。

所見 3類。東調査区の建物は南面がやや西側に開くような軸方向にあるが、本建物のみごくわずかに東側に開く方向となっている。反面、西調査区建物や柱穴列ほど西側に開いてはおらず、どの建物とも一致していない。このような軸方向にある遺構は広範囲に探しても52号住居(奈良時代)、1・57号住居(平安時代)、5号竪穴状遺構など数少ない。また本建物と重複する14号住居は時期が不明瞭だが古墳時代の可能性があり、本建物がこれに前出する遺構であれば古墳時代の遺構と想定される。

2号掘立柱建物(第129図 PL.27-⑤～⑩)

概要 調査段階で桁行5間・梁間1軒の変則的な建物を想定したが、整理段階で2間×3間の側柱建物に東西両側に広い庇が付く建物に変更した。東3区の建物の密集する一画にあり、南側の4号建物とは2.7m、北側の6号建物とは2.2mの間隔で近接している。

位置 081～087、-919～929グリッド

規模形状 芯々距離で梁間3.50m、桁行5.75m、両庇の長さ1.82mを測る。南北両桁側とも柱間は183～196cmで比較的近似している。

軸方向 N-9° E (梁方向)

柱穴 北東隅にあたるP 1・P 11と南西隅にあたるP 6・P 13に掘り直しのような痕跡が残る。P 2・P 4～P 6・P 8など底面に柱痕状の窪みが見られる柱穴が多く、P 3・P 4など断面に柱痕が確認できる柱穴もある。また

P 14のみ径15cm前後の礎盤石状の礫が、底面から15cmの高さに充填されるように確認されている。

その他 ピットの多い一画にあり、建物区画内に8基、柱筋上に2基のピットがある他、24・25号土坑など建物区画内に重複する遺構がある。

北側柱筋を東方向に175cm延長した位置に42号ピットがある(第169図)。また、この柱筋から42号ピットで直角に南へ折れて205cmの位置には821号ピットがある。南東隅の柱穴が確認できないため本建物に取り込む確証は得られなかったが、東側へ付属施設が広がる可能性もある。

所見 2類。南面がやや西側に開く、本遺跡の中心的方向を示す建物である。

3号掘立柱建物(第130図 PL.28-①～④)

概要 西調査区で唯一確認できた掘立柱建物で、1間×2間の側柱建物である。

位置 090～093、-136～140グリッド

規模形状 芯々距離で4面とも約2.7mの正方形を呈す小型建物である。

軸方向 N-83° E (梁方向)

柱穴 各柱穴は底面が比較的広く平坦で、近似している。柱痕は見られない。

その他 四隅から外側に張出す位置に各1本のピットが見られる。四隅の各柱穴からピットまでの距離は15号ピットのみ60cm離れた位置にあるが、他は40cm前後で近似している。確認面からの深さはP 13が8cm、P 15が20cm、P 16が12cm、上面をトレンチで失ったP 12が推定18cmでいずれも深度には乏しい。本建物に伴うものか不明だが、付近はピットの少ない一画であり、本建物に関連する施設となる可能性は十分に考えられる。

所見 4類。4類建物は本遺構のみだが、約20m東にある3号柱穴列も東側へ振れており、西調査区の施設に共通する特徴となっている。西調査区南側にある流路跡の埋没谷が建物の正面観に影響を与えた可能性がある。このため遺構が造られた時期は、流路が埋没しきらず、窪地として残存していたことも考えられる。

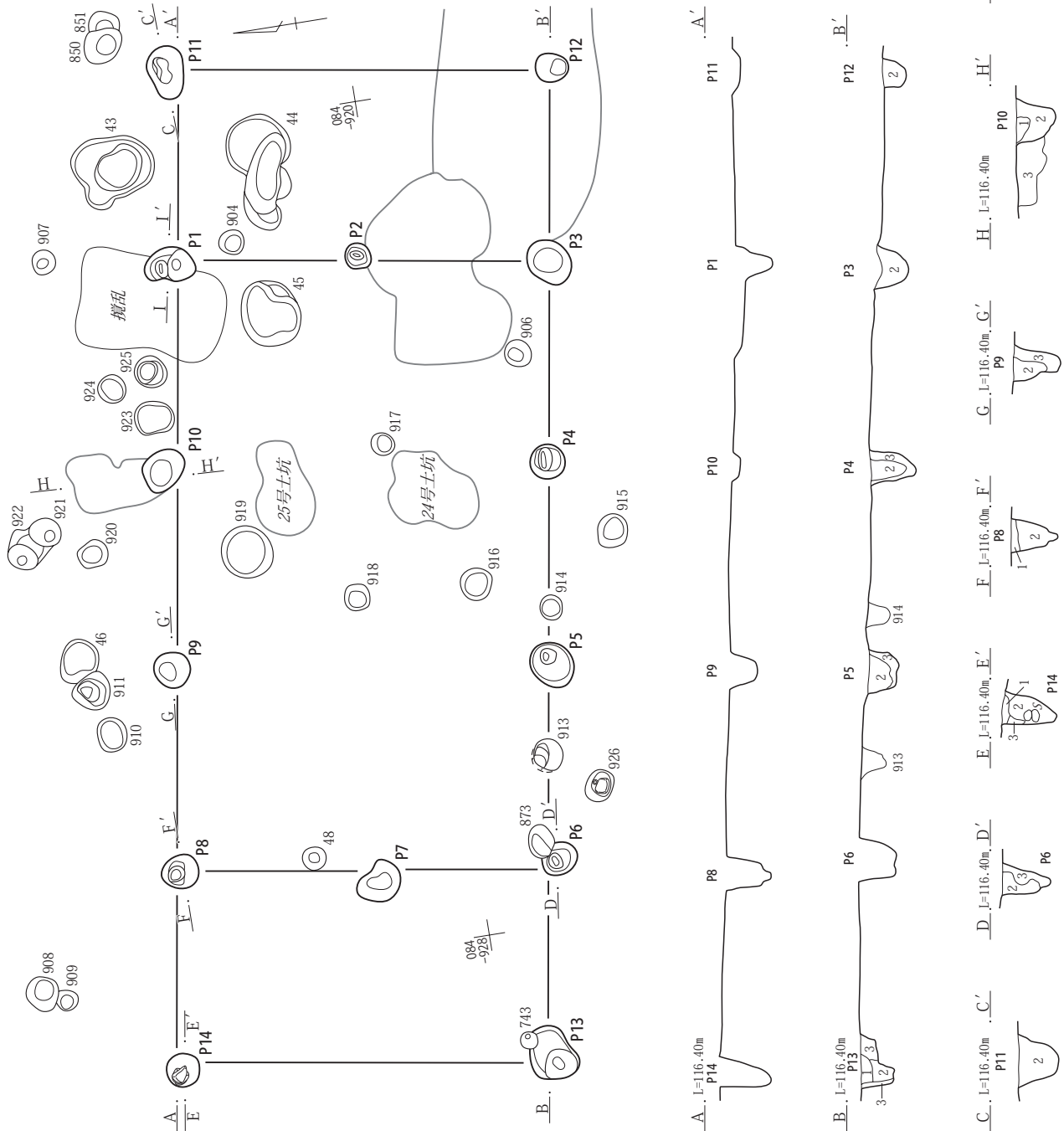
2号掘立柱建物ピット計測表 (cm)

番号	長軸	短軸	深さ	備考
1	48	32	35	建て直しか
2	26	24	25	底面に柱痕か
3	46	37	31	
4	35	33	41	断面に柱痕
5	45	39	50	底面に柱痕か
6	36	30	46	底面に柱痕か
7	44	38	17	
8	36	32	45	
9	35	34	46	底面に柱痕か
10	42	34	38	
11	51	35	39	
12	32	27	35	
13	55	46	50	
14	34	32	50	中層に礎盤石か

ピット間距離計測 (cm)

該当ピット	距離
1-2	170
2-3	182
3-4	189
4-5	192
5-6	183
6-7	158
7-8	196
8-9	192
9-10	191
10-11	196
11-12	184
12-13	367
13-14	185
6-13	184
13-14	351
14-8	188

2号掘立柱建物土層説明
 1 濃い褐7.5YR5/4 表層付近に見られる白色軽石・褐色粘土粒を含むしまり強い層。
 2 暗褐7.5YR3/4 埋没土の中心。白色軽石・褐色粘土粒を含むしまり強い層。
 3 褐7.5YR4/6 根固め土と思われる褐色粘土粒を主体とする層。



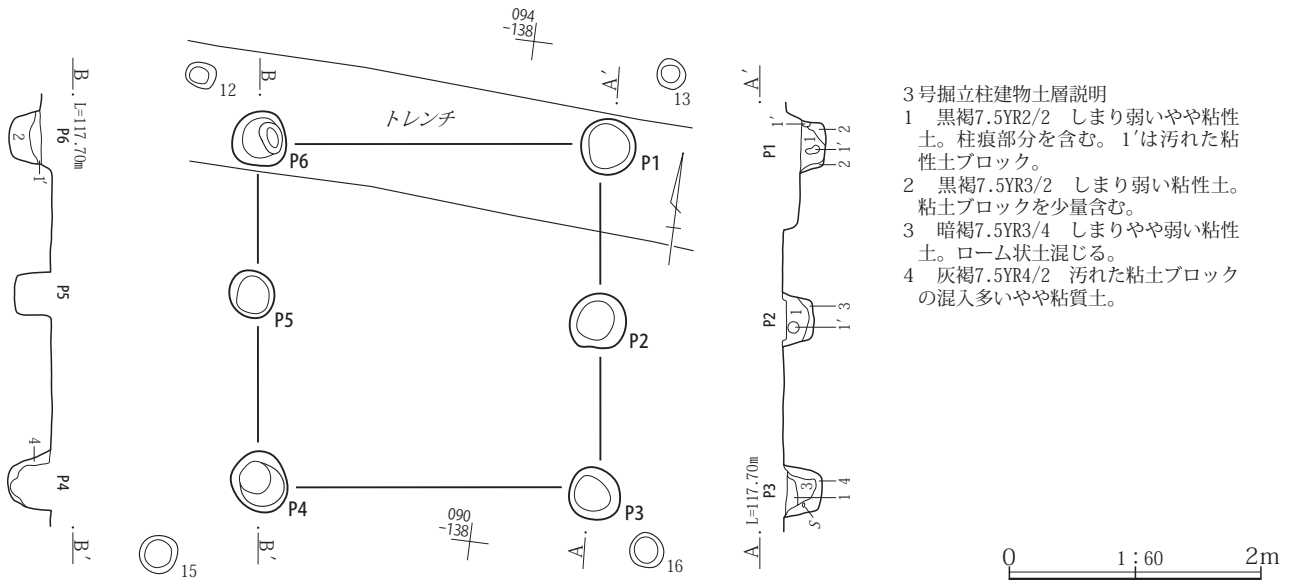
第129図 2号掘立柱建物

3号掘立柱建物ピット計測表 (cm)

番号	長軸	短軸	深さ	備考
1	45	44	22	上側10cm欠く
2	47	44	27	
3	44	41	31	
4	49	43	34	
5	40	36	29	
6	46	45	29	底面に柱痕か

ピット間隔計測表 (cm)

該当ピット	距離
1-2	138
2-3	138
3-4	264
4-5	150
5-6	124
6-1	278



3号掘立柱建物土層説明

- 1 黒褐7.5YR2/2 しまり弱いやや粘性土。柱痕部分を含む。1'は汚れた粘性土ブロック。
- 2 黒褐7.5YR3/2 しまり弱い粘性土。粘土ブロックを少量含む。
- 3 暗褐7.5YR3/4 しまりやや弱い粘性土。ローム状土混じる。
- 4 灰褐7.5YR4/2 汚れた粘土ブロックの混入多いやや粘質土。

第130図 3号掘立柱建物

4号掘立柱建物(第131図 PL.28-⑤~⑦)

概要 比較的平面規模の大きなピットから2間×2間の側柱建物を想定した。東3区の建物の密集する一画にあり、北側の2号建物との間隔は2.7mである。付近は多数の土坑を確認した一画で、P7は当初土坑を想定した遺構であった。またP4・P5も重複土坑の調査によって確認された柱穴である。

位置 075~080、-921~926グリッド

規模形状 芯々距離で東西辺が3.60m、南北辺が3.85mの正方形に近い建物である。南辺中央にあるP4が西側へ大きく逸れるのを最大として、各柱穴の間隔は不均等になっている。

軸方向 N-12°E(東・西辺)

柱穴 各柱穴は底面が広く平坦で、本建物同様正方形を呈す3号建物に類似している。柱痕は確認できない。

その他 埋没土の観察を欠いている。26号住居や18~20号土坑と重複する柱穴があるが、これら遺構との新旧関係は把握できていない。重複遺構上面で各柱穴が確認さ

れていないことから、柱穴が前出する可能性がある。建物区画内のピットは1基のみで、周辺のピット密度と比べて重複ピットは少ない。

所見 2類。

5号掘立柱建物(第132図 PL.29-①・②)

概要 調査段階では2間×2間の側柱建物を想定した。572号ピットを含めれば総柱建物となる可能性もある。P1・P8の北側柱筋に並ぶ柱穴に礎盤石状の平坦な礫が据えられていることを特徴としている。この観点で本建物西側を注視すると、南北両柱筋の延長線上に礎盤石を有す2基のピットが確認でき、P9・P10を底として想定した。8号溝のため上側は不明瞭で、P9・P10間に柱穴は確認できず、この部分を西側の梁とする確証は得られないが、2間×3間の建物となる可能性もある。東3区の建物の密集する一画の東隅にあり、建物区画内に18基のピットが見られた。

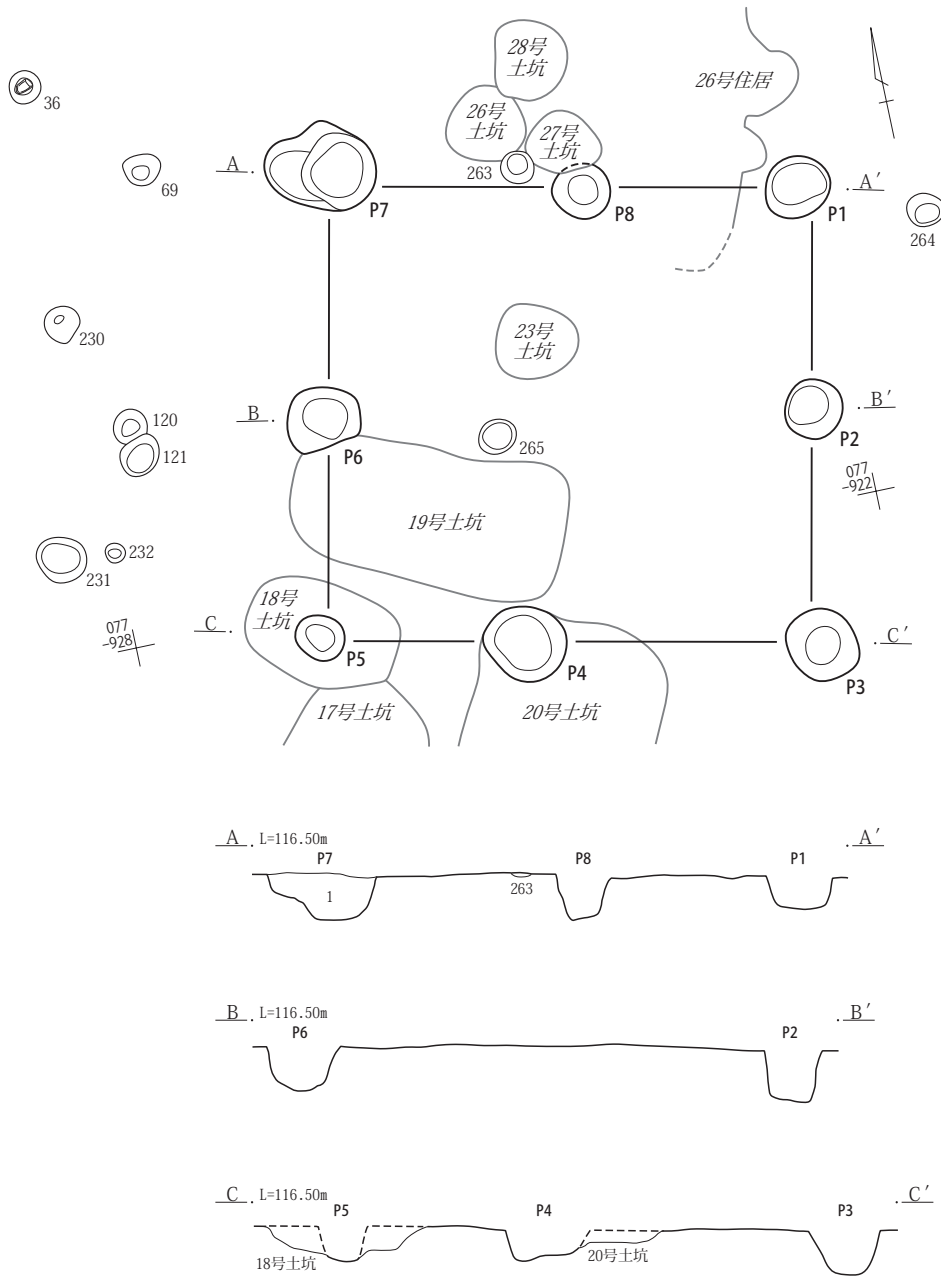
第三章 調査の内容

4号掘立柱建物ピット計測表 (cm)

番号	長軸	短軸	深さ	備考
1	55	48	25	
2	48	45	43	
3	58	54	36	
4	64	59	22	20土坑と重複
5	40	35	27	18土坑と重複
6	61	49	35	19土坑と重複
7	89	69	37	複数柱穴の重複
8	46	44	37	27土坑と重複

ピット間隔計測表 (cm)

該当ピット	距離
1-2	176
2-3	187
3-4	235
4-5	164
5-6	174
6-7	200
7-8	209
8-1	172



4号掘立柱建物土層説明

- 1 褐7.5YR4/4 軽石粒・褐色粘性土粒を含むしまりやや強い層。



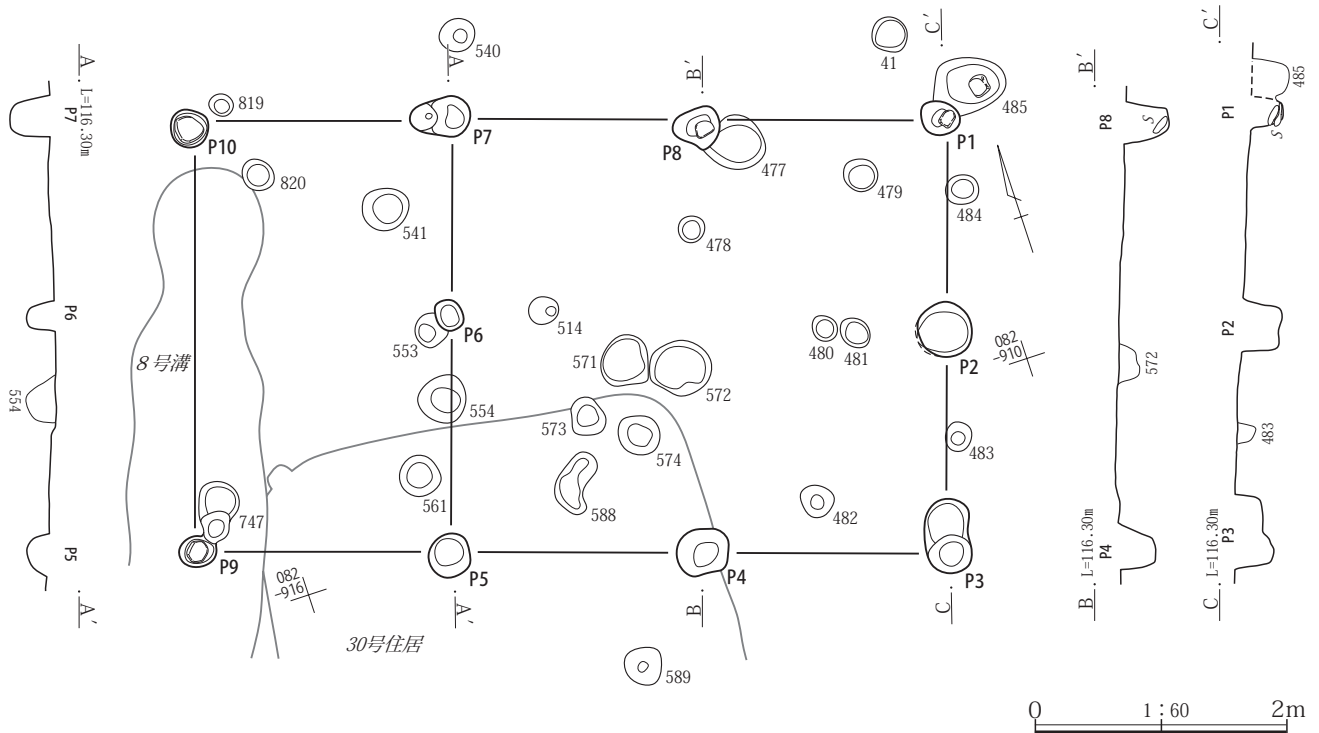
第131図 4号掘立柱建物

5号掘立柱建物ピット計測表 (cm)

番号	長軸	短軸	深さ	備考
1	32	27	26	底面付近に礎盤石
2	44	45	30	
3	59	37	31	建て直し
4	44	40	34	30住と重複
5	34	33	19	30住と重複
6	25	21	23	
7	49	33	38	建て直し
8	38	35	33	底面付近に礎盤石・477ピットと重複
9	31	26	39	底面付近に礎盤石
10	32	31	24	底面付近に礎盤石

ピット間隔計測表 (cm)

該当ピット	距離
1-2	167
2-3	164
3-4	194
4-5	199
5-6	191
6-7	157
7-8	202
8-1	194
5-9	198
9-10	345
10-7	202



第132図 5号掘立柱建物

位置 080~085、-910~916グリッド

規模形状 2間×3間を想定すると梁間3.45m、桁行6.00mで、桁行2間だと3.95mになる。

軸方向 N-19° E (梁間方向)

柱穴 P3・P7に掘り直しと思われる痕跡が見られ、P1・P8~10の4基は底面付近に礎盤石状の平坦な礫が据えられている。

その他 30号住居・8号溝等と重複するが、新旧関係を把握する記録を欠く。

所見 1類。全建物中、最も東側へ振れた南北軸となる建物である。

6号掘立柱建物(第133図 PL.29-③~⑦)

概要 比較的規模の大きな柱穴の並びから建物を把握した。調査区境にかかり建物南隅のみの調査である。南辺は柱4本分の確認で、全容を把握できたと思われる。東辺は柱2本分の確認で、北側にさらに広がるものと思われる。東3区の建物の密集する一画の北隅にあるが、重複遺構は少ない。

位置 086~088、-914~921グリッド

規模形状 芯々距離で南辺は6.75mを測る。2間×3間の側柱建物で、P1が梁間の中央にあると想定すると梁間推定値は3.7mとなる。

軸方向 N-13° E (東辺)

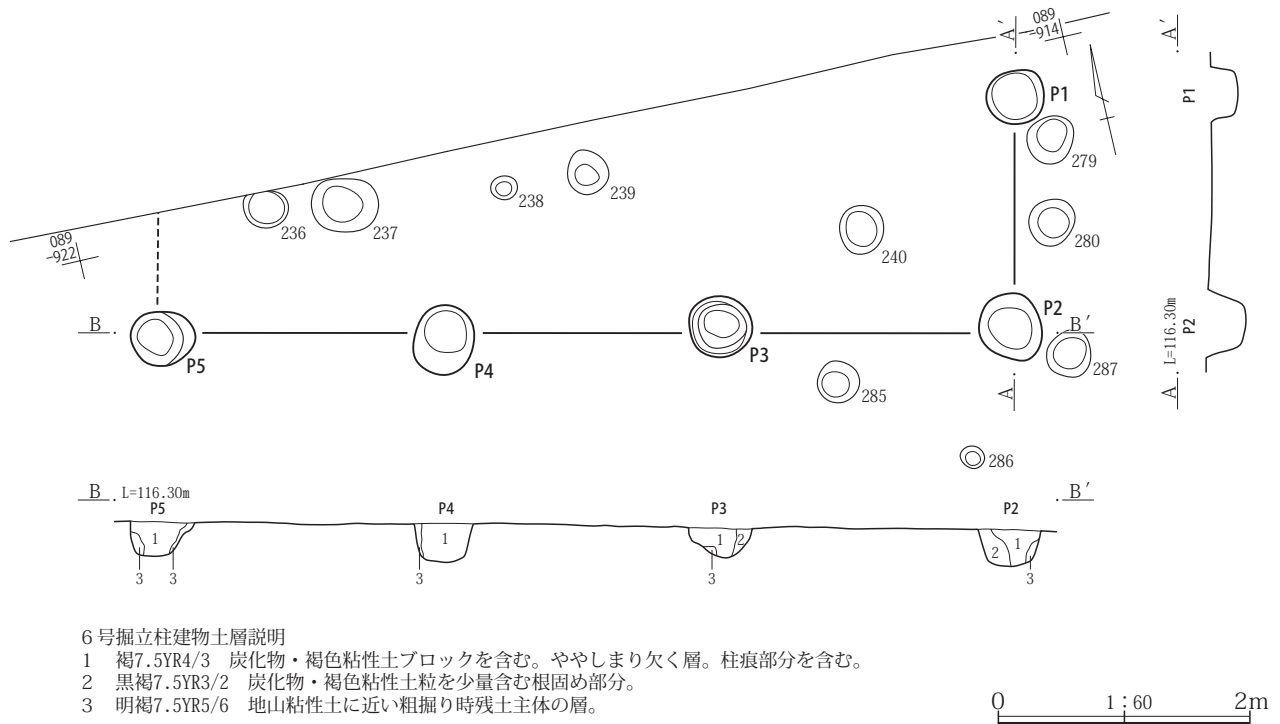
第Ⅲ章 調査の内容

6号掘立柱建物ピット計測表 (cm)

番号	長軸	短軸	深さ	備考
1	47	45	22	
2	56	49	31	断面に柱痕か
3	51	50	26	底・断面に柱痕か
4	56	47	32	
5	52	43	30	

ピット間隔計測表 (cm)

該当ピット	距離
1-2	183
2-3	231
3-4	217
4-5	223



第133図 6号掘立柱建物

柱穴 各柱穴は底面が比較的広く平坦で、近似している。

P 2 断面に柱痕らしい痕跡が見られる。

その他 南側柱筋の東側延長線上には規模がやや小規模になるが469号・471号ピットが等間隔で繋がっている(第147図)。本建物に係わる施設となる可能性がある。建物区画内に5基のピットがあるが、他の重複遺構はない。

所見 2類。南側に隣接する2号建物と軸方向が近似している。

7号掘立柱建物(第134図 PL.30-①~⑤)

概要 東4区で唯一確認できた建物で、やや大型のピットが繋がっている。調査区境にかかり、東半部は不明である。西辺2間×北辺2間以上が想定できる。東3区の建物群と40m以上離れているが、東5区の9号建物とは10m以内の距離にある。

位置 068~072、-864~868グリッド

規模形状 芯々距離で西辺は3.65mを測る。P 7が本建物に伴うのであれば、北辺は3.35m以上の規模になる。

軸方向 N-6°E(西辺)

柱穴 底面に柱痕状の窪みを持つ柱穴が多く、P 1~P 5までの主な柱穴全てに見られた。断面にもP 1・P 2・P 5に柱痕が見られる。ただしP 2断面の柱痕は外側に建て直したような柱痕で本建物柱筋から南側へ逸れている。北柱筋上の東隅調査区際でわずかに調査した柱穴をP 7とした。柱筋上にあり隣接する柱穴P 5との間隔も規則的だが、深度に乏しく、調査できた範囲では不明瞭な施設である。P 6も本建物に伴うか明瞭ではない。

その他 建物区画内に重複遺構は少ない。45号土坑と重複するが、新旧を確認する資料を伴っていない。47号土坑も一部が柱筋上にかかる遺構である。P 4の西側約50cmに近接して6号竪穴状遺構がある。

所見 2類。

7号掘立柱建物ピット計測表 (cm)

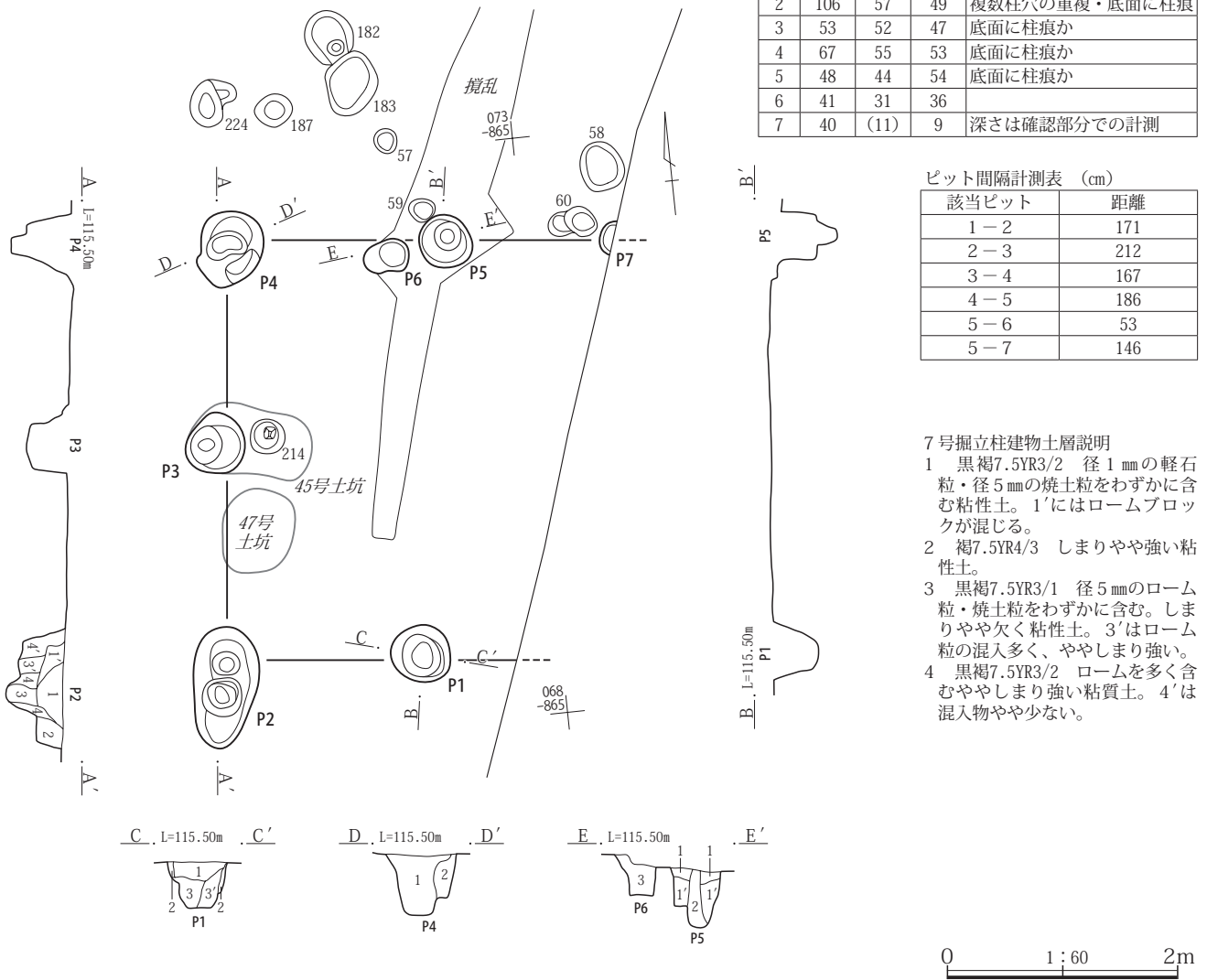
番号	長軸	短軸	深さ	備考
1	52	50	40	底面に柱痕か
2	106	57	49	複数柱穴の重複・底面に柱痕
3	53	52	47	底面に柱痕か
4	67	55	53	底面に柱痕か
5	48	44	54	底面に柱痕か
6	41	31	36	
7	40	(11)	9	深さは確認部分での計測

ピット間隔計測表 (cm)

該当ピット	距離
1-2	171
2-3	212
3-4	167
4-5	186
5-6	53
5-7	146

7号掘立柱建物土層説明

- 1 黒褐7.5YR3/2 径1mmの軽石粒・径5mmの焼土粒をわずかに含む粘性土。1'にはロームブロックが混じる。
- 2 褐7.5YR4/3 しまりやや強い粘性土。
- 3 黒褐7.5YR3/1 径5mmのローム粒・焼土粒をわずかに含む。しまりやや欠く粘性土。3'はローム粒の混入多く、ややしまり強い。
- 4 黒褐7.5YR3/2 ロームを多く含むややしまり強い粘質土。4'は混入物やや少ない。



第134図 7号掘立柱建物

8号掘立柱建物(第135図 PL.30-⑥~⑧)

概要 東3区建物群の南東隅にある建物で、規模の大きな柱穴を繋ぎ1間×1間の変則的な建物を想定した。本遺跡では唯一例となる。ただし、本建物南側には、西側柱筋の延長線上に428号ピット、東側柱筋の延長線上に436号ピットがある(第146図)。両ピットとも複数ピットが重複する不明瞭な遺構だが、これらが本建物に繋がり南北に長い1間×2間の建物となる可能性がある。

位置 069~073、-913~917グリッド

規模形状 東西辺2.60m、南北辺2.75mの正方形に近い規模の比較的整った建物である。南側に広がれば東西辺は4.8m前後になる。

軸方向 N-17°E(東辺)

柱穴 P1は重複する3基のピットのため輪郭がやや不明瞭だ。各柱穴とも底面は広く、類似している。断面記録のあるP4に柱痕らしい痕跡が観察できる。

その他 28号住居に重複し、45号住居南東隅に接している。57号土坑と重複するほか、区画内に85・439・443号ピットなどがある。

所見 1類。北側約8mにある5号建物に近似した方向で、両建物の東側柱筋がほぼ直線的に繋がっていることが注目される。北西側約7mにある4号建物の方向もやや近い値である。

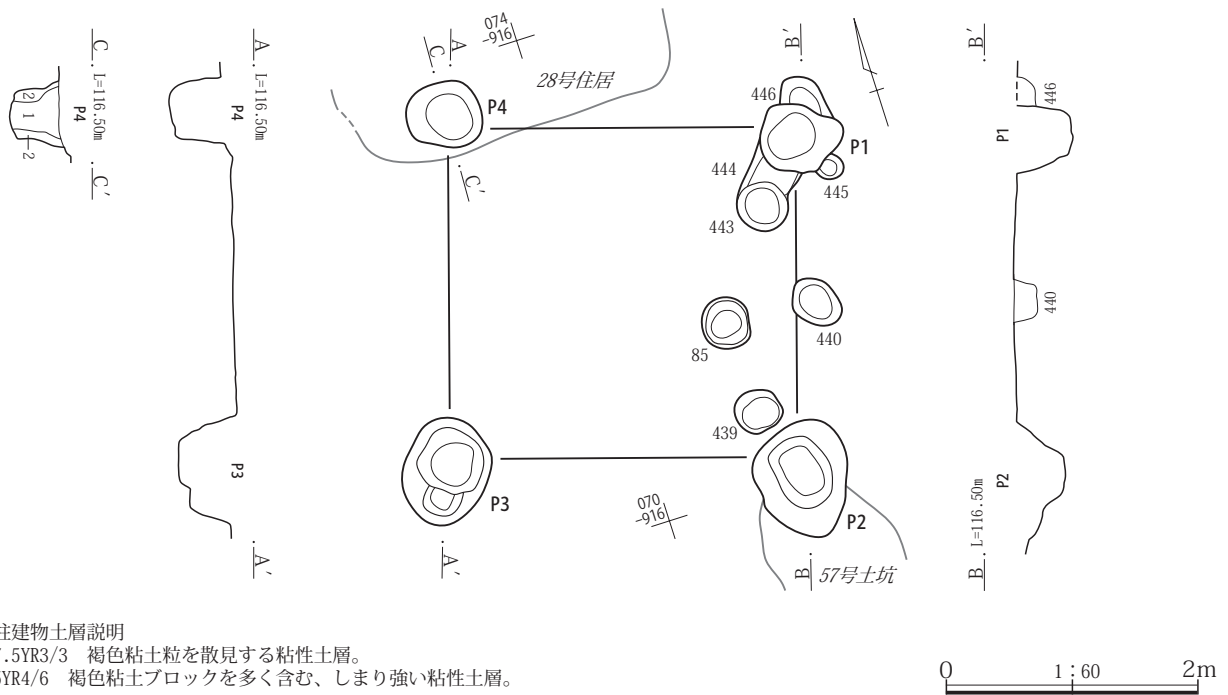
第三章 調査の内容

8号掘立柱建物ピット計測表 (cm)

番号	長軸	短軸	深さ	備考
1	67	58	43	
2	91	77	41	57土坑と重複
3	85	66	47	建て直しか
4	59	53	39	28住と重複・断面に柱痕

ピット間隔計測表 (cm)

該当ピット	距離
1-2	273
2-3	286
3-4	283
4-1	283



8号掘立柱建物土層説明

- 1 暗褐7.5YR3/3 褐色粘土粒を散見する粘性土層。
- 2 褐7.5YR4/6 褐色粘土ブロックを多く含む、しまり強い粘性土層。

第135図 8号掘立柱建物

9号掘立柱建物(第136図 PL.31-①~⑤)

概要 東5区西寄りにあり、本遺跡の掘立柱建物中、最も東側にある。調査時は2間×2間の側柱建物としたが、整理段階で北側に拡張し、2間×3間で変則的な束柱が付く、南北に長い側柱建物に変更した。

位置 063~069、-850~854グリッド

規模形状 芯々距離で南辺4.15m、東辺5.40mの南北に長い側柱建物である。当初北柱筋側柱を想定したP11は西側へ偏り過ぎていて、P12とともに変則的な束柱へと変更した。しかし、P12は深度に乏しい不明瞭なピットである。深度30cmの745号ピットもP5・P9間の束柱となる可能性がある。

軸方向 N-1°E(東辺)

柱穴 P1・P5等を除き、底面に明確な柱痕状の窪みが見られるものが多い。しかしこれらは柱筋上に正確に並ばず、特に西辺の歪みは顕著である。P8は2基のピットの重複だが、P8'とした柱痕のない西側の窪みのほうが柱筋上にある。P3は2カ所の柱痕状窪みがあるが、

北側の窪みが柱筋上に位置している。

その他 8世紀と推定される63号住居・中世以降と推定される4号畠と重複するが、新旧関係を把握できていない。P3は119号ピットに後出している。

所見 3類。本建物全体を総柱建物と想定するのは、P11・P12および745号ピットの配置が不規則で難しいと考えた。

10号掘立柱建物(第137図 PL.31-⑥~⑧)

概要 整理段階に東西に長い2間×3間の建物を想定し、新たに番号を付けた施設である。東3区に単独で建つ1号建物の東側約8m、密集する建物群の西隅にある2号建物の西側約11mで、両建物の中間付近に建っている。

位置 082~087、-940~947グリッド

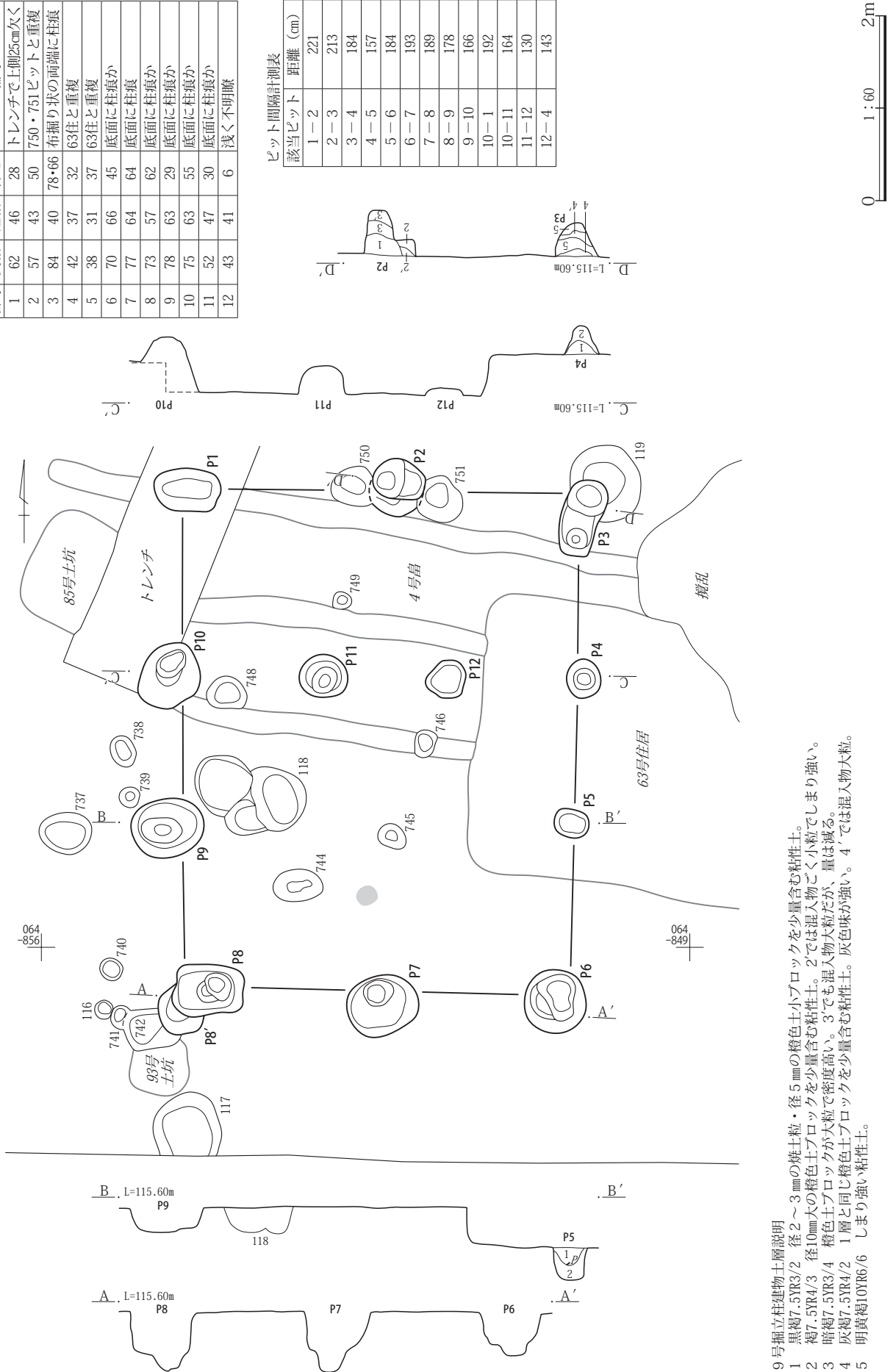
規模形状 梁間4.10m、桁行6.50mの南面する建物となる。南東隅にあるP3が南側へ逸れている。西辺が変則的で柱筋上にあるP14が北側へ大きく偏り、中央に近い

9号掘立柱建物ピット計測表 (cm)

番号	長軸	短軸	深さ	備考
1	62	46	28	トレンチで上側25cm欠く
2	57	43	50	750・751ピットと重複
3	84	40	78・66	布張り状の両端に柱痕
4	42	37	32	63住と重複
5	38	31	37	63住と重複
6	70	66	45	底面に柱痕か
7	77	64	64	底面に柱痕
8	73	57	62	底面に柱痕か
9	78	63	29	底面に柱痕か
10	75	63	55	底面に柱痕か
11	52	47	30	底面に柱痕か
12	43	41	6	浅く不明瞭

ピット間隔計測表

該当ピット	距離 (cm)
1-2	221
2-3	213
3-4	184
4-5	157
5-6	184
6-7	193
7-8	189
8-9	178
9-10	166
10-11	192
10-11	164
11-12	130
12-4	143



- 9号掘立柱建物土層説明
- 1 黒褐7.5VR3/2 径2~3mmの焼土粒・径5mmの焼土小ブロックを少量含む粘性土。
 - 2 褐7.5VR4/3 径10mm大の焼土小ブロックを少量含む粘性土。2'では混入物ごく小粒でしまり強い。
 - 3 暗褐7.5VR3/4 焼土小ブロックが大粒で密度高い。3'でも混入物大粒だが、量は減る。
 - 4 灰褐7.5VR4/2 1層と同じ焼土小ブロックを少量含む粘性土。灰色味が強い。4'では混入物大粒。
 - 5 明黄褐10YR6/6 しまり強い粘性土。

第136図 9号掘立柱建物

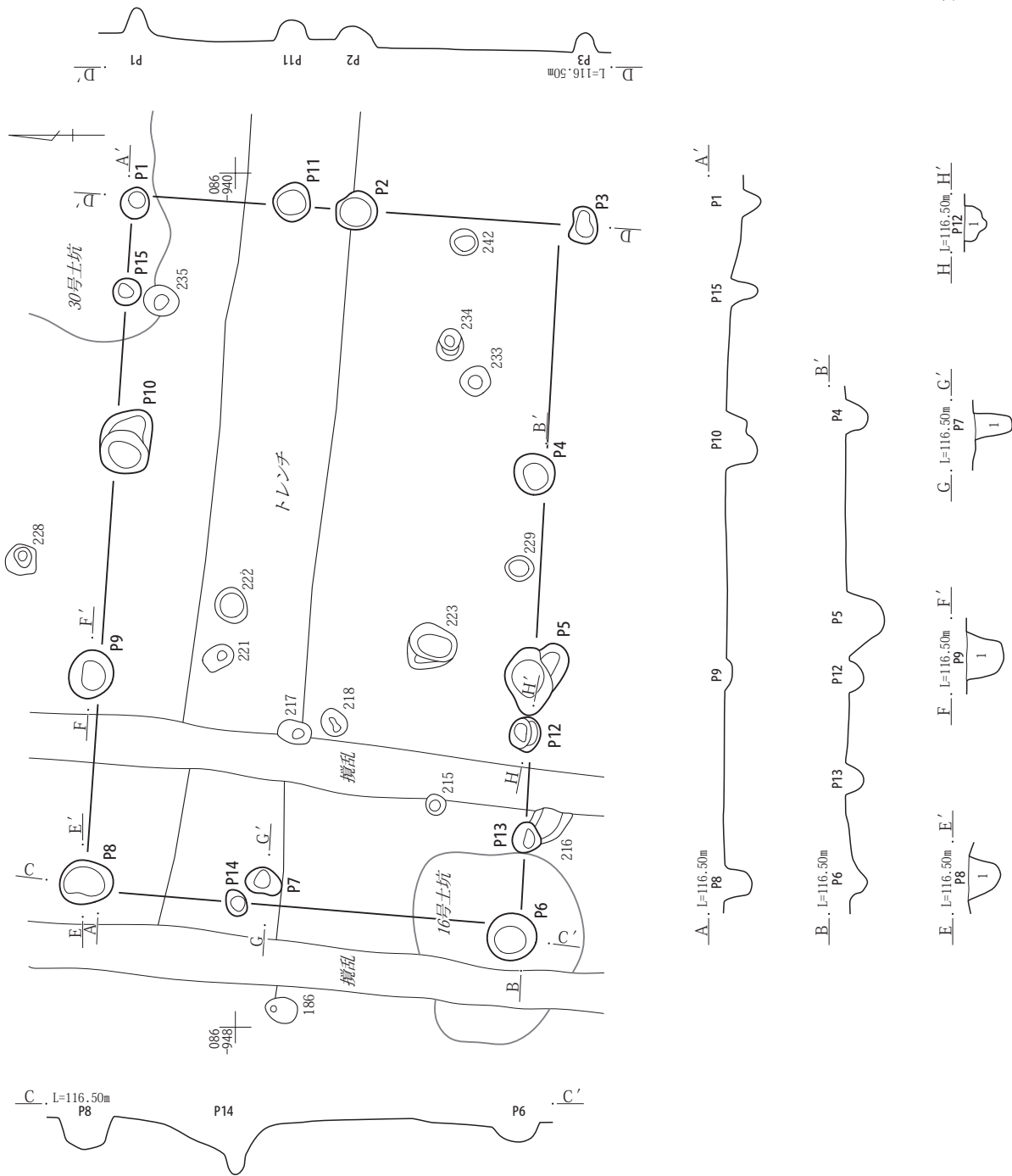
第三章 調査の内容

10号掘立柱建物ピット計測表 (cm)

番号	長軸	短軸	深さ	備考
1	29	27	41	30土坑と重複
2	38	36	20	
3	35	26	18	
4	38	37	35	
5	64	49	33・25	柱穴2基の重複
6	47	43	24	16土坑と重複
7	34	26	42	
8	50	42	31	
9	45	39	37	
10	62	47	29・19	柱穴2基の重複
11	36	34	17	上側10cm欠く
12	32	29	18・7	柱穴2基の重複か
13	31	28	18	
14	26	19	20	上側30cm欠く
15	26	25	25	30土坑と重複

ピット間隔計測表 (cm)

該当ピット	距離
1-2	210
2-3	218
3-4	238
4-5	190
5-6	245
6-7	242
7-8	166
8-9	189
9-10	214
10-1	240



10号掘立柱建物土層説明
 1 褐7.5YR4/4 しまり強い粘性土。径2～5mmの粘土小ブロックを不均等に含む。

第137図 10号掘立柱建物

P 7は建物内側に逸れている。どちらのピットが西梁間の側柱を構成するかは判断できない。東辺では中央付近にあるP 2と北側に逸れるP 11が柱筋状に並んでおり、P 2とP 7、P 11とP 14が対になる可能性がある。南北の両側それぞれの桁行上には小規模な柱穴のP 12・P 13とP 15が柱筋上に並んでいて建物柱穴として扱ったが、確実に本建物に伴う根拠はない。

軸方向 N-4° E (東辺)

柱穴 P 5・P 10は重複もしくは抜柱の痕跡が残るやや大型柱穴だが、他は比較的小型な底面に柱痕の残らない柱穴である。

その他 16・30号土坑と重複する。また建物区画内には222号ピットなど11基のピットがある。

所見 3類。南西側に隣接している16・17号住居など平安時代の住居と近似した軸方向にある。

11号掘立柱建物(第138図)

概要 整理段階に東西に長い1間×2間で、南西隅の柱穴は確認できていないが、東西両側に広い庇が付く変則的な建物を想定した。付近は東3区中央南寄りの住居密集地点だが、ピットは比較的少ない。4号掘立柱建物の南西側約9mに位置し、建物密集地点からやや離れた一画にある。

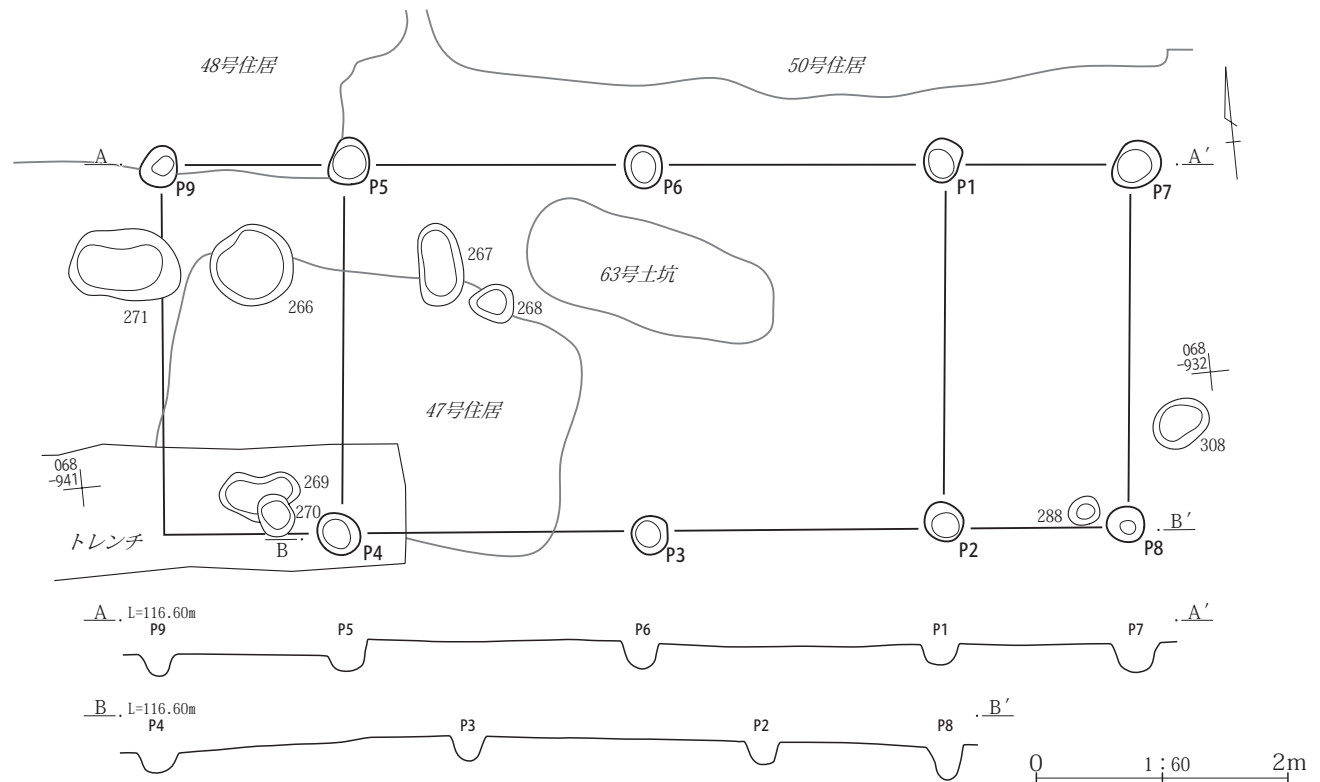
位置 066~070、-932~940グリッド

規模形状 桁行4.85m、梁間2.95m、庇の長さ1.40mの東西に長い側柱建物である。各柱穴は柱筋上に並び、柱穴間隔も一定で、本遺跡の建物では規則的な柱穴配置の建物である。

軸方向 N-6° E

柱穴 直径30cm前後のやや小型の柱穴からなる。掘り直し・重複等の痕跡はなく、底面に柱痕も認められない。

11号掘立柱建物ピット計測表 (cm)					ピット間隔計測表 (cm)	
番号	長軸	短軸	深さ	備考	該当ピット	距離
1	34	28	17		1-2	291
2	32	29	20		2-3	248
3	31	29	20		3-4	251
4	36	32	18	上側10cm欠く	4-5	289
5	37	32	28	48住壁と重複	5-6	240
6	34	30	23		6-1	237
7	40	34	24		1-7	150
8	31	28	29		2-8	148
9	33	28	34	48住壁と重複	5-9	148



第138図 11号掘立柱建物

南西隅の底部分柱穴が想定される地点はトレンチによって地山が削られている。トレンチの深さは10cm前後で、それ以内の深度の柱穴であれば存在した可能性がある。

その他 47・48号住居と重複している。建物区画内には63号土坑、267号ピットを含め5基のピットがある。北側40cmには50号住居が近接している。

所見 2類。時期推定の資料を欠くが、48・50号住居等周辺平安時代住居と近似した軸方向にあり、この時期の遺構と推定しても配置から生じる違和感はない。

12号掘立柱建物(第139図 PL.31-⑨)

概要 東3区やや東寄りにある15・16号溝は道の両側溝の可能性のある施設だが、道に沿った柵状の施設を探索した結果、建物となる可能性のある施設を整理段階で想定した。南北両側に1間×2間の建物が梁間方向を繋ぐように並び、長屋門のような配置を考えた。別個の2棟の建物、あるいは著しく細長く不自然な点が多いが、2間×3間の総柱建物となる可能性もある。

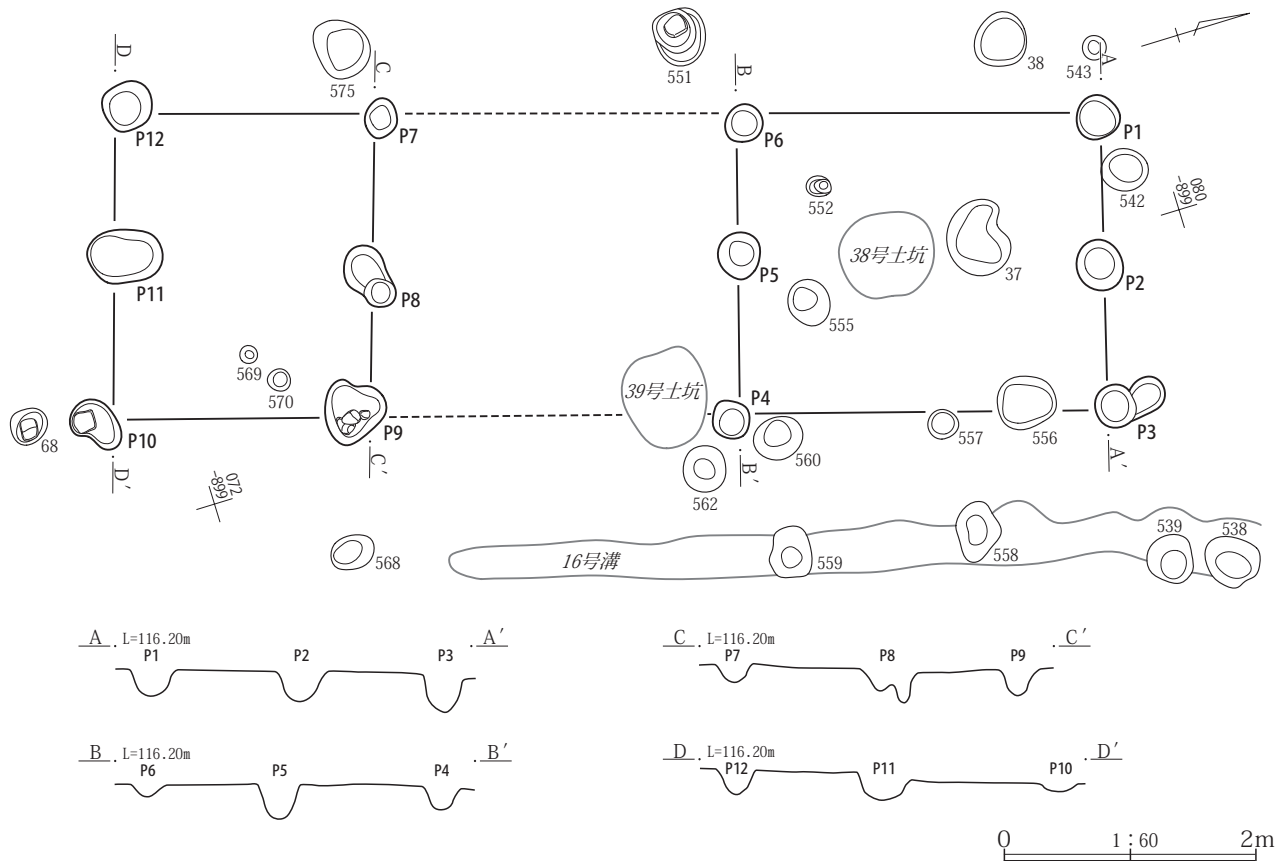
位置 071~079、-897~892グリッド

12号掘立柱建物ピット計測表 (cm)

番号	長軸	短軸	深さ	備考
1	35	34	22	
2	41	36	24	
3	33	32	31	柱穴2基の重複か
4	29	29	16	
5	38	34	28	
6	30	30	8	
7	33	26	16	
8	53	34	28・19	柱穴2基の重複
9	50	47	23	東隅に栗石
10	46	33	12	南隅に礎盤石
11	59	43	11	
12	39	36	20	

ピット間隔計測表 (cm)

該当ピット	距離 (cm)
1-2	117
2-3	118
3-4	292
4-5	130
5-6	112
6-1	289
7-8	127
8-9	108
9-10	211
10-11	130
11-12	115
12-7	209
4-9	295
6-7	291



第139図 12号掘立柱建物

規模形状 南北2棟の建物を想定した場合、北建物は梁間2.9m、南建物は梁間2.1mで、桁行は両建物とも2.4m前後になる。北建物が梁間より桁行が大きい不自然な建物となる。1棟の建物であれば桁行7.8m、梁間2.4mの建物で、門であれば合間2.9mとなる。

軸方向 N-16° E

柱穴 やや小型の柱穴が多く、底面に柱痕の残るものがない。南側建物ではP9には栗石状に径15cm前後の礫が見られ、P10南隅には礎盤石状の平板な礫が底面直上に据えられている。

その他 16号溝西側80cm前後の位置に方向を揃えるようにして並んでいる。建物区画内に38・39号土坑、37・552号ピット等がある。

所見 1類。本建物を門と想定して繋がる柱列を探索すると、東柱筋延長線上ではP10の南1.3m・3.2m・5.4m・7.8mに684号・687号・66号・664号のピットが並んでいる(第147図)。一方、西柱筋延長線上ではP12の南1.1m・3.2m・5.1m・8.3mに591号・682号・675号・74号のピットが並んでいる。門から続く柵のように見えるが、建物北側にはこのような痕跡はない。また4・5・8号建物など建物密集地点東側の建物群と軸方向が近似している。なお本建物を門とした場合、通路が想定される東西方向に繋がる硬化面や、路面状の凹凸等は確認できない。

1号柱穴列(第140図 PL.32-①~⑤)

概要 5本の連続するピットを柱穴列とした。東3区の掘立柱建物の多い地点の東側にある。

位置 076~084、-907・908グリッド

規模形状 芯々距離で7.65mの柱筋上に全柱穴が配置されている。

方向 N-8° E

柱穴 底面に柱痕の残らない近似した柱穴である。P5下層に礎盤石状の平坦な小礫が見られる。

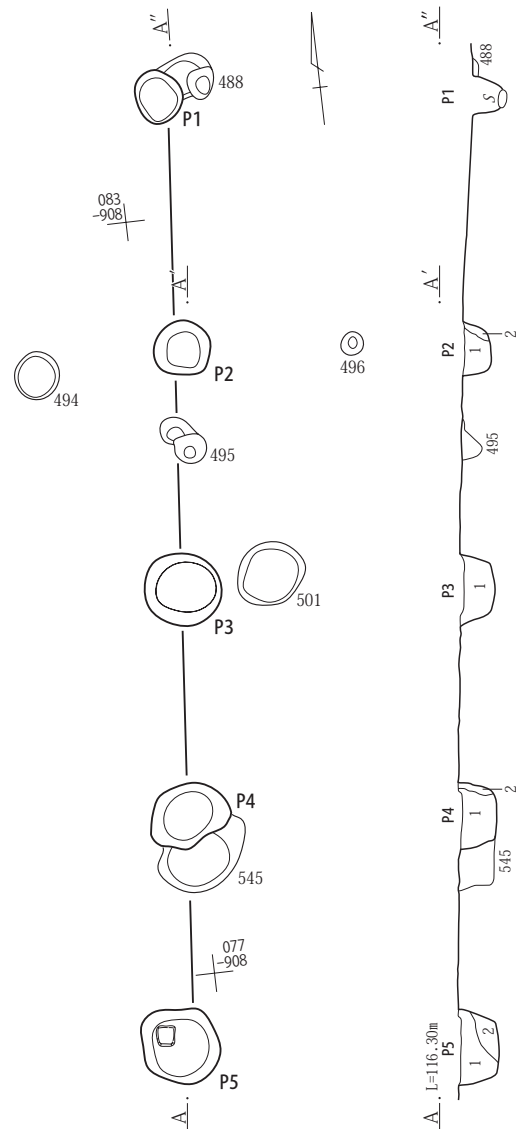
その他 P4が545号ピットと重複している。495号ピットが柱筋上にあるが、深度に欠く小ピットで本柱列とは別遺構と考えた。南側には9号溝があり、この部分で本柱穴列の延長部分が把握し難くなっている。北側に柱穴列が繋がる可能性は低い。

1号柱穴列ピット計測表 (cm)

番号	長軸	短軸	深さ	備考
1	67	61	36	柱穴2基以上か
2	64	47	34	
3	61	58	31	
4	46	44	25	545ピットと重複
5	42	37	25	西隅に礎盤石

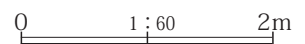
ピット間隔計測表 (cm)

該当ピット	距離
1-2	201
2-3	191
3-4	178
4-5	183



1号柱穴列土層説明

- 1 黒褐7.5YR3/2 径3~10mm前後の炭化物・焼土・褐色粘土ブロックなど雑多な混入物を含む。
- 2 褐7.5YR4/4 褐色粘土ブロック主体のしまりある粘性土。



第140図 1号柱穴列

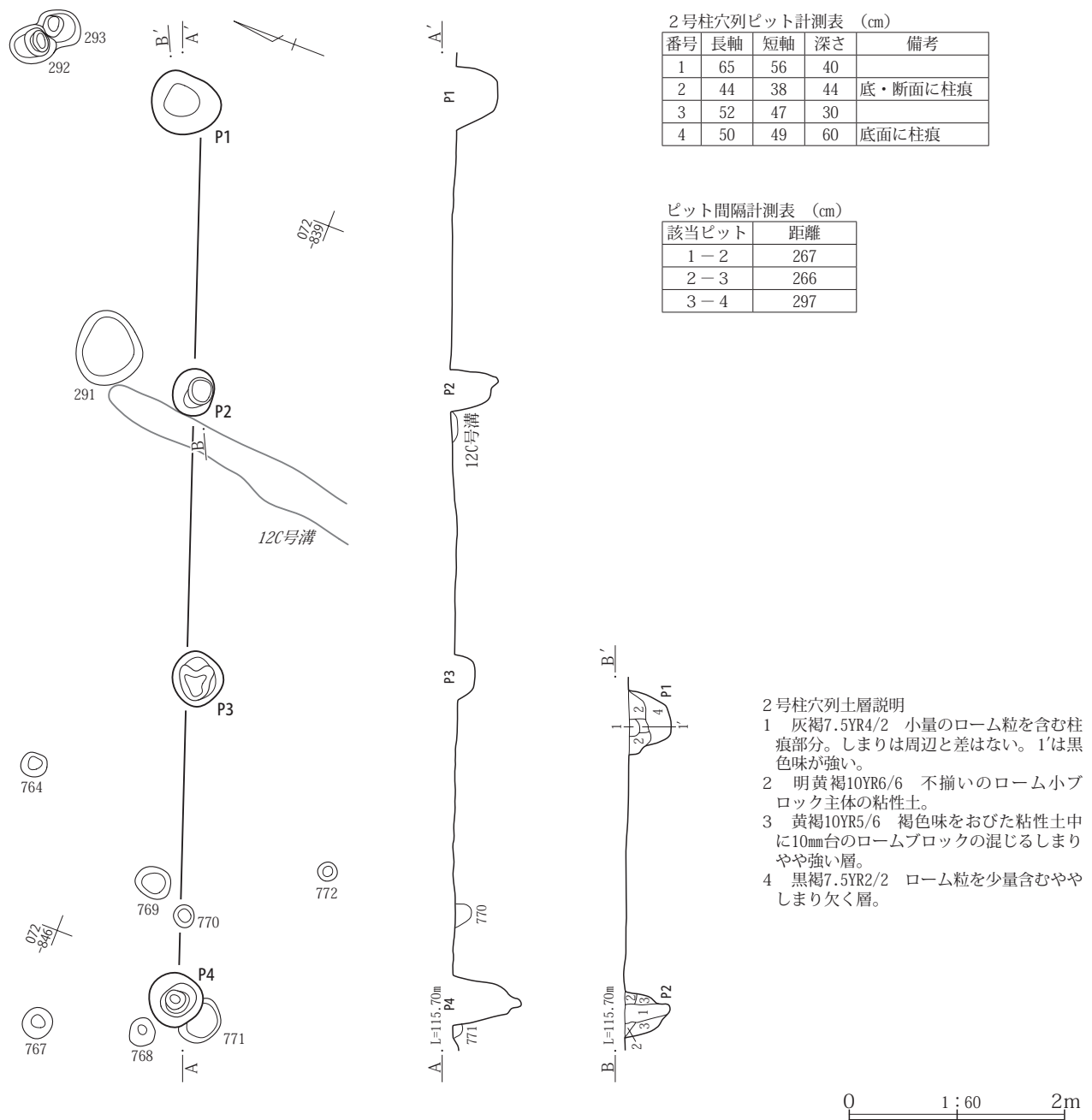
所見 2類。西側2.5mの5号建物、東側7mの12号建物など隣接する建物とは軸方向がやや離れ、5号建物のさらに西側の2号建物と近似した方向にある。P1から直角に西側へ折れた方向へ柱穴列の繋がりを探すと、約12mの位置で2号建物の北側柱筋へ達している。

2号柱穴列(第141図 PL.32-⑥~⑧)

概要 東5区のピットの少ない一面にある、4本の柱穴が並ぶ施設である。建物・柱穴列の中で最も東側に位置する施設である。明瞭な柱穴からなり、調査段階では建物になることと想定して柱穴の繋がりを探したが、建物は把握できなかった。

位置 070~073、-838~846グリッド

規模 芯々距離で8.35mの柱筋上に全柱穴が配置されている。



第141図 2号柱穴列

方向 N-69° E

柱穴 比較的深度に富み、特にP4は本遺跡の全ての建物、柱穴列の中で最大深度の柱穴である。P2・4の底面に柱痕状の窪みがある。

その他 12号溝北隅付近を横切る。9号掘立柱建物の北東側約4mにある。P4が771号ピットと重複し、768号ピットに近接する。770号ピットが柱筋上にあるが、規模が小さく別遺構と考えた。

所見 分類上4類となるが、同類の3号建物や3号柱穴列の軸方向からは大きく離れた方向の施設である。道の西側溝の可能性のある東5区北側の13号溝とは、直角に近い角度にある。

3号柱穴列(第142図 PL.32-⑨)

概要 西5区のピットのほとんどない一画で、規則的に

一列に並ぶ3本の柱穴を柱穴列とした。調査区境付近にあり、掘立柱建物の南側柱となる可能性もある。

位置 092・093、-113~117グリッド

規模 芯々距離で4.22mの柱筋上に全柱穴が一列に並び、柱穴間隔も規則的である。

方向 N-83° E

柱穴 各柱穴とも規模・形状が近似し、底面も広く平坦で共通している。

その他 39号住居と重複しているが、新旧関係を把握するための記録を欠いている。

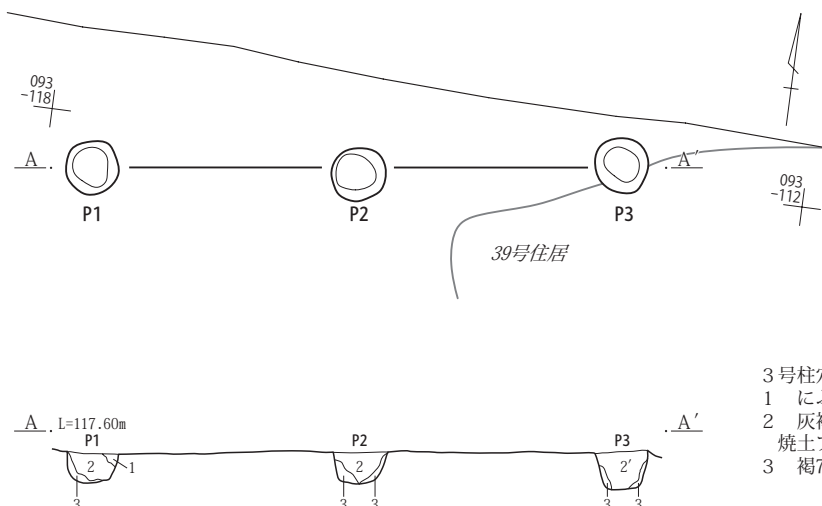
所見 1類。西側約19mの位置にある3号掘立柱建物と同じ軸方向にある。本柱穴列の柱筋を西側に延長すると、同建物南側に張出したような配置にあるP15・P16付近を通過する。また、西調査区で奈良平安時代の唯一の竪穴住居となる19号住居(8世紀)は、西側40m以上離れた位置にあるが、近似した軸方向にある。

3号柱穴列ピット計測表 (cm)

番号	長軸	短軸	深さ	備考
1	43	41	24	
2	43	42	25	
3	42	41	32	39住壁と重複

ピット間隔計測表 (cm)

該当ピット	距離
1-2	210
2-3	212



3号柱穴列土層説明

- 1 にぶい褐7.5YR5/4 P1にのみ見られるやや粘性土。
- 2 灰褐7.5YR4/1 混入物の少ない粘性土。2'はP3に見られる焼土ブロックが混じる層。
- 3 褐7.5YR4/3 汚れた粘土混じりのしまり強い層。

第142図 3号柱穴列

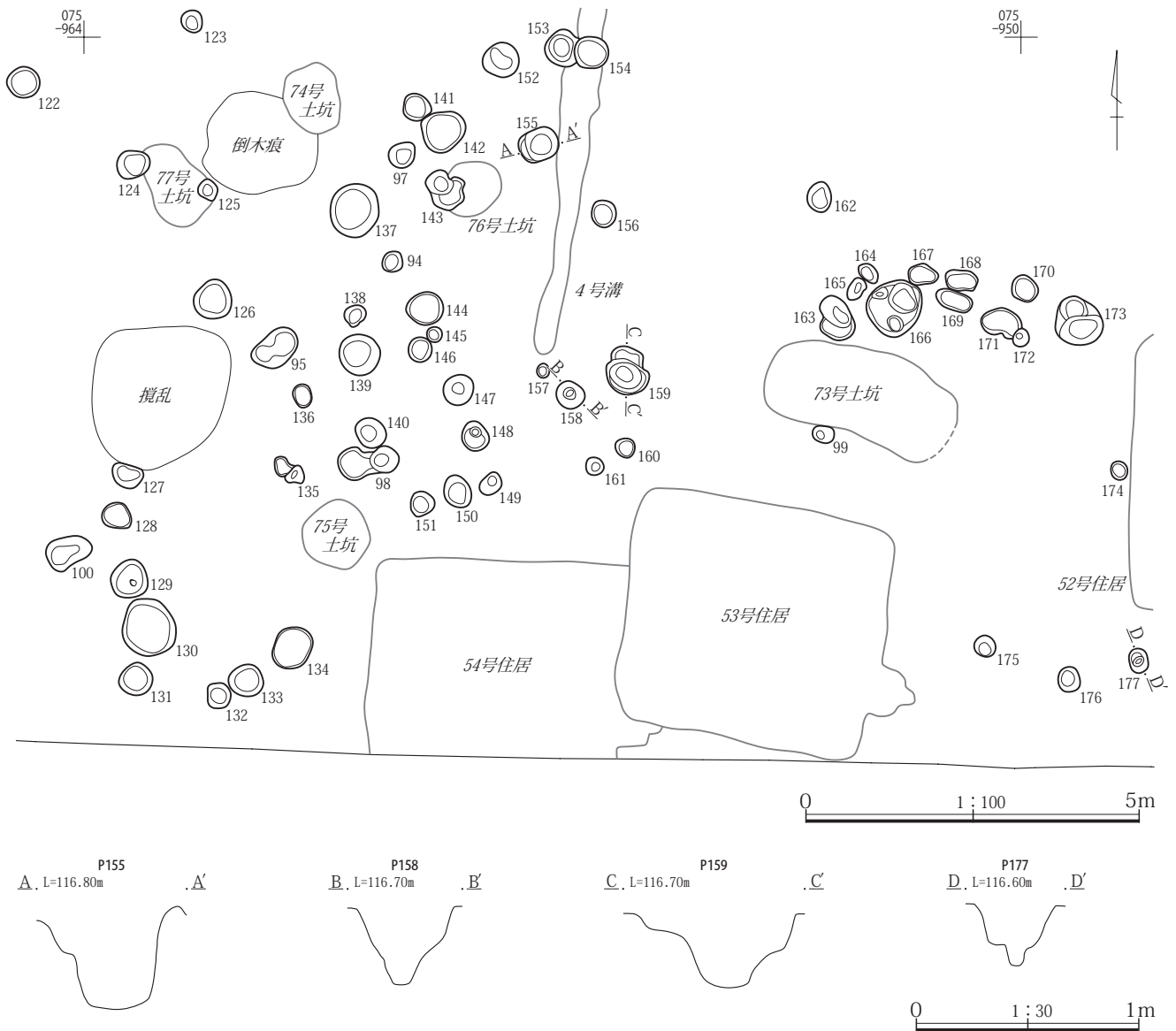
5 ピット

(第143～149図 PL.58 遺物観察表245・246頁)

柱穴状の窪みで掘立柱建物・柱穴列として繋がらなかった遺構をピットとして扱った。土坑に近い規模のものが含まれるが、調査時の分類は変更しなかった。ピットは調査区域全体で1000基以上確認したが、不明瞭なものが多く、大半は平面図上に記録したのみである。調査段階でピット番号を付したのは121基で、主に遺物出土のあったピットを対象としている。これらのうち後に掘立柱建物の柱穴として削除したものが8基あり、本文5頁の表1に記した。

個別ピットの計測値を一覧表(表5・159～172頁)に記すため整理過程で122番以降のピット番号を新たに付した。また、ピットを掘立柱建物柱穴へ移行したためできた欠番を併せて埋めていった。形状が著しく歪んでいたり、深度3cmに満たない底面が不明なピットは除外し、総計で941号ピットまでの番号を付けた。これらの中で特徴的なピット26基について、レベリングの値から断面を復元し1/30で示した。

ピット類の平面形状と配置を一括して示すため、ピット密集部分として6カ所を選び、第143～148図に縮率1/100で図示した。その他に掘立柱建物・溝・畝等の平面図中にも上記図に掲載できなかったピットを記した



第143図 ピット群(1)

が、これらの縮率は主体となる遺構図縮率に沿ったもので一様ではない。散在する他のピットは抽出して示すことができなかったものが大半で、全体図(付図)のみの記載となった。

ピットの分布は東調査区に多く、中でも3区8号溝西岸南側(第146図)・9号溝東岸南側(第147図)等で特に分布密度の高い一画があった。反面3区東隅や4区などにはピットの少ない一画もあった。また西調査区では極端



第144図 ピット群(2)

第Ⅲ章 調査の内容

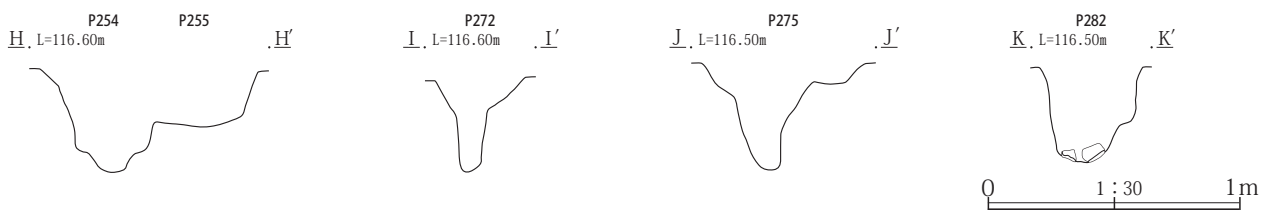
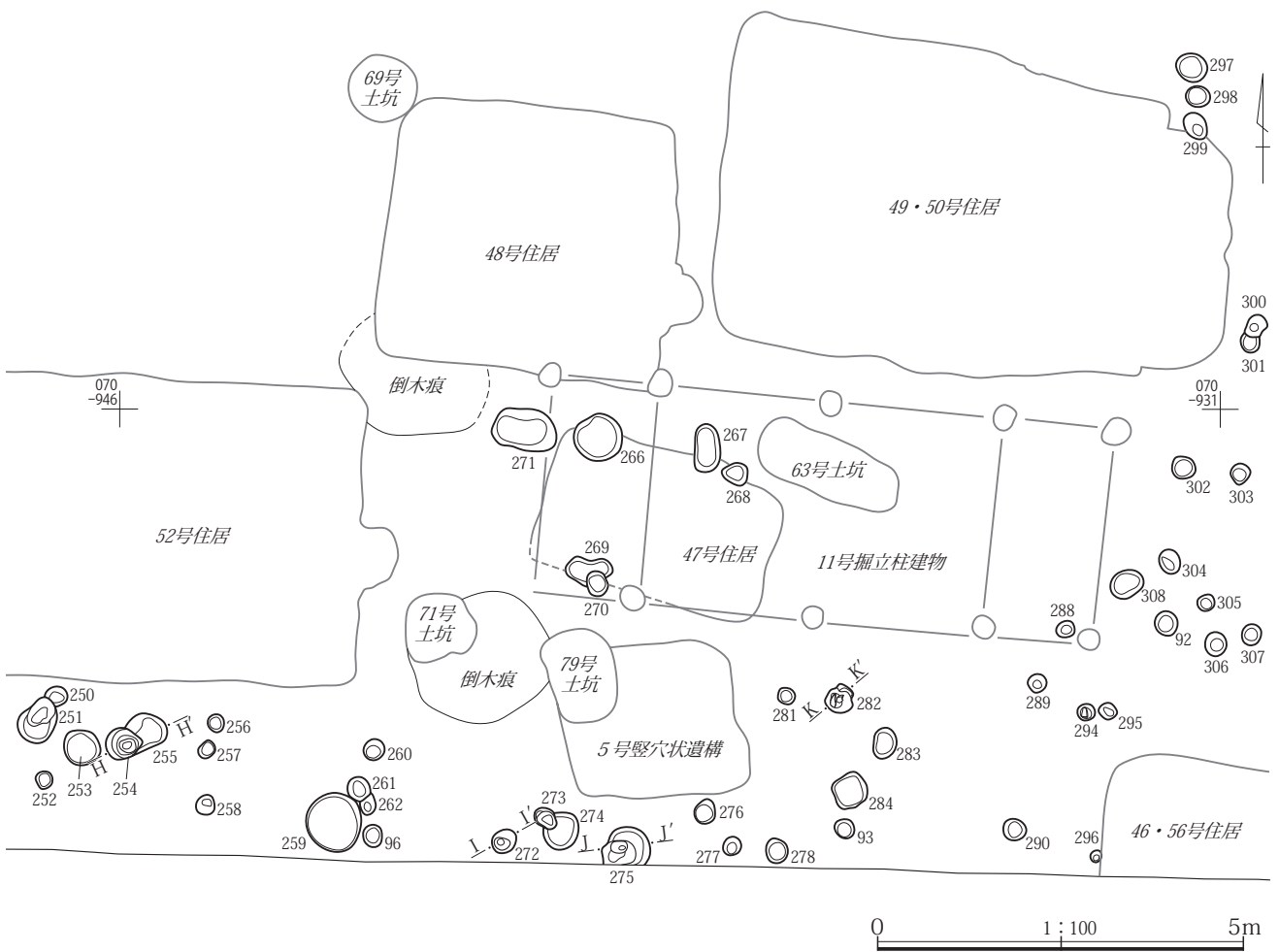
にピットが少なかった。

ピット規模を概観すると、径30cm前後の小型のものが大半であった。特に深度には乏しく、40cm以上のものは13基で、50cm以上のものは1基もなかった。

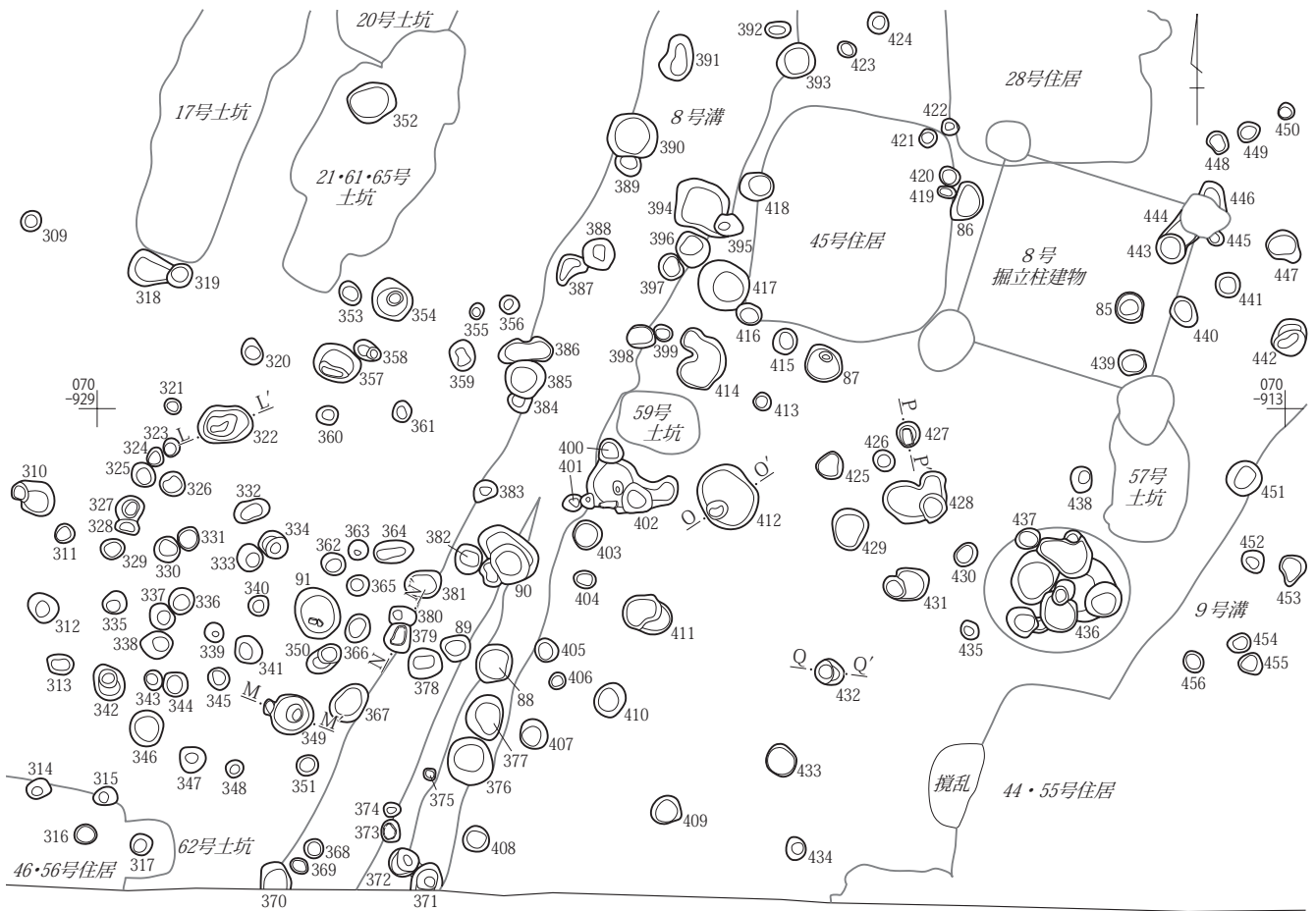
ピット内に礎盤石と呼べるような扁平な自然石を底面付近に水平に据えたものがあった。これらは特に建物や柱穴列を復元する主要な目安としたが、個別ピットとして残されたものが11基あった。36・68・373・379・485・551・599・640・649・823・844号ピットがこれに

あたる。また282号ピットのように栗石状の礫の混入の見られる遺構もある。

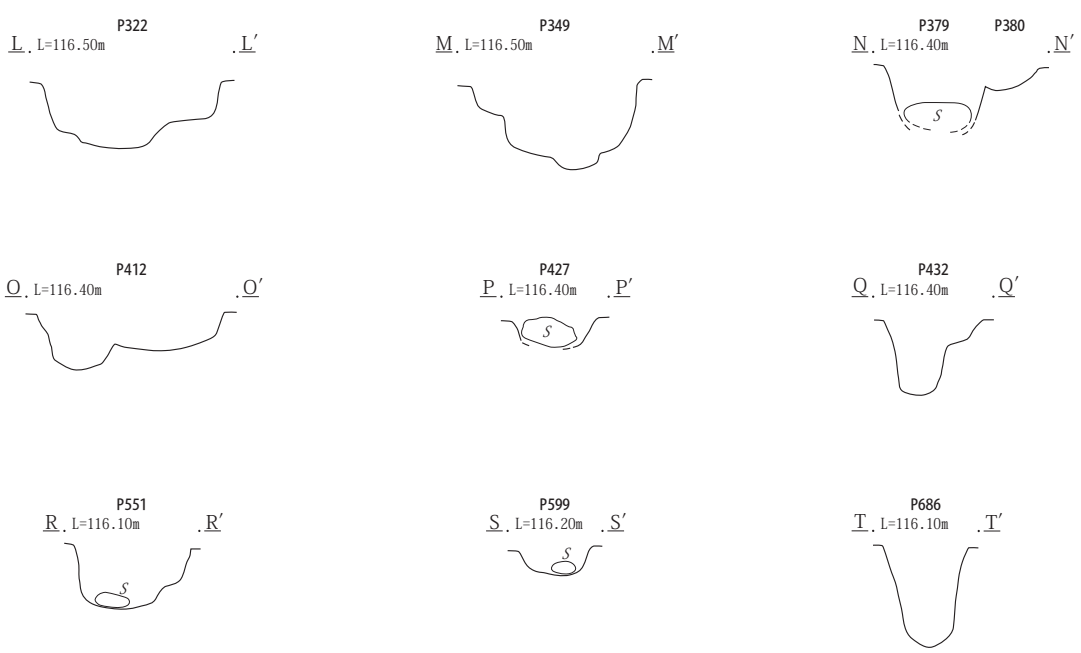
径が20cm未満ものを極小ピットと呼んだ。157号ピットなど35基が該当するが、これら的大半では底面が極めて細く先端が尖るような状態で、杭の打設痕と考えた。深度に乏しいものが多く、遺構確認面のかなり上面より穿たれた痕跡と思われる、近世以降の所産と考えられる。他に径30cm前後でも底面が尖るように細いピットは185号ピットなど8基あった。



第145図 ピット群(3)



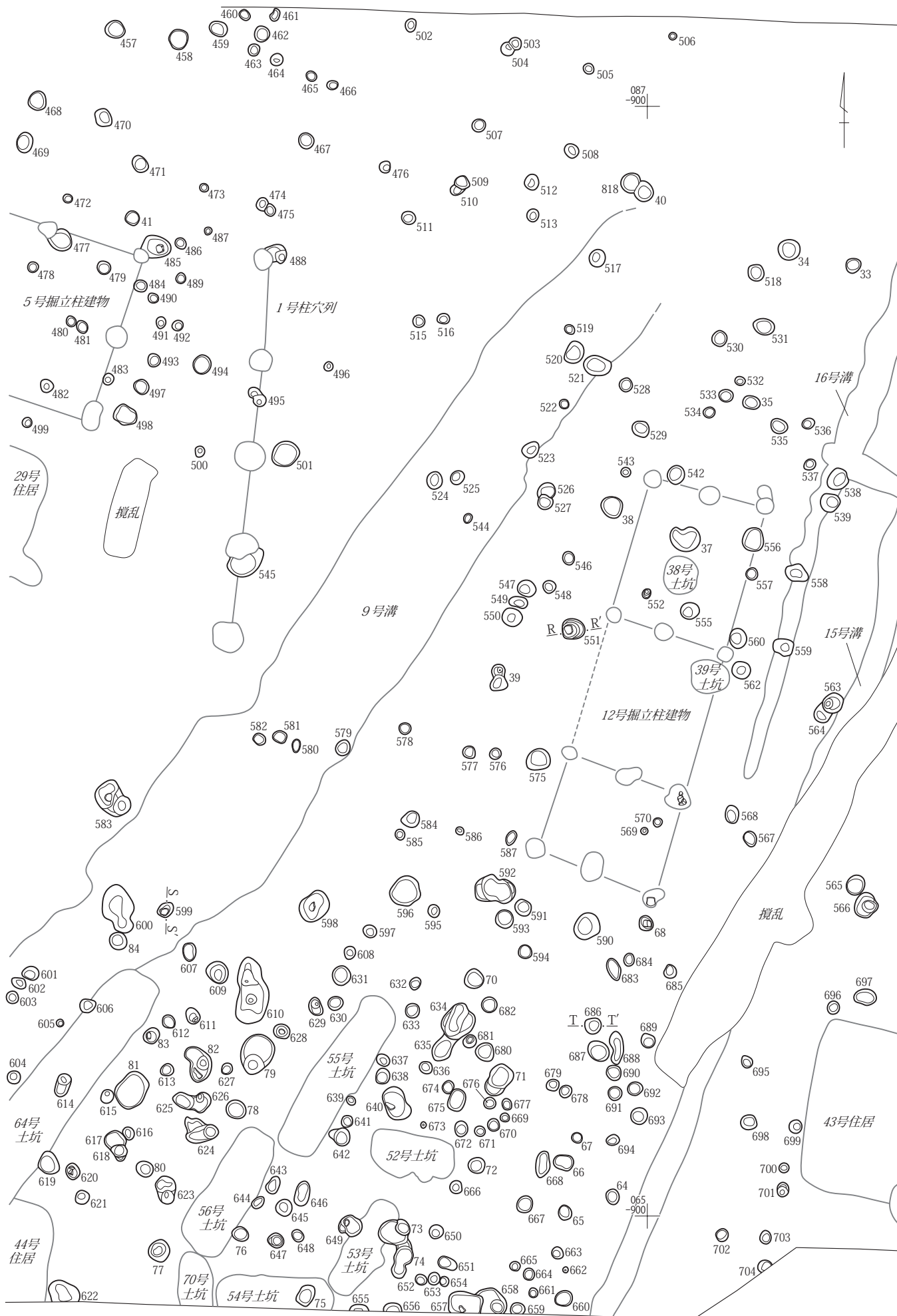
0 1 : 100 5m



P551・P599・P686の平面図は第147図内にある

0 1 : 30 1m

第146図 ピット群(4)

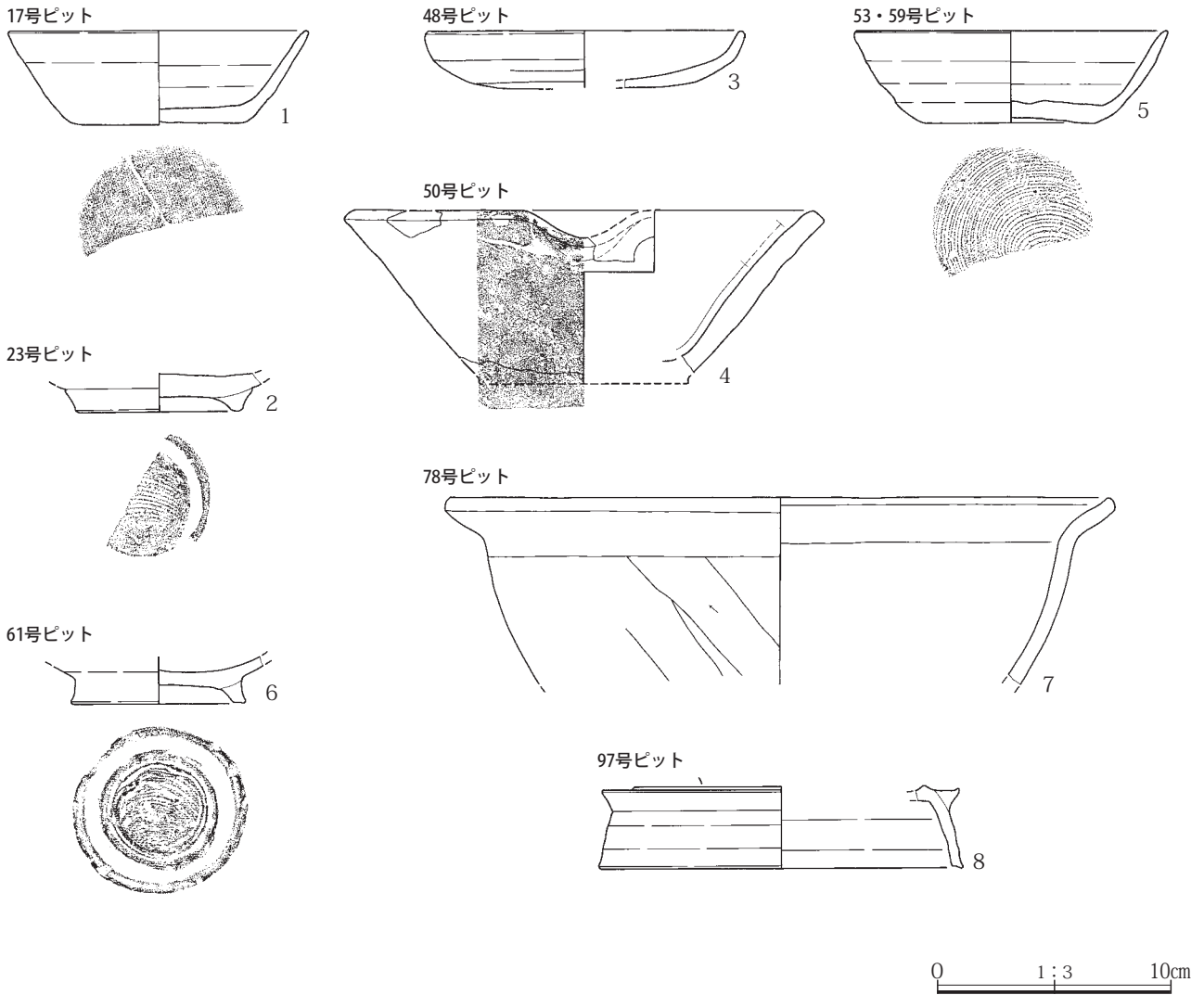


第147図 ピット群(5)



第148図 ピット群(6)

第三章 調査の内容



第149図 ピット出土遺物

出土遺物があったのは土器類を出土した66基で、他に石製品破片の可能性のある石類が3基から出土した。遺物は小破片が主体で、図示に耐える土器8点を第149図に一括して示した。他に縄文時代の石鏃が106号ピットから出土しているが、この遺物は第193図に他の縄文時代遺物と共に扱った。図示した土器を出土したピットに竪穴住居との重複はない。土器はいずれも1/2個体以下の破片で直接遺構の年代を示しうる資料ではない。また、1基から複数の図示遺物を出土したピットもなかった。50号ピット出土の片口鉢4が中世と思われる遺物で、他はすべて奈良・平安時代の土師器・須恵器である。注目される遺物に97号ピット出土の須恵器蓋小片8がある。骨蔵器蓋と想定されるもので、本遺跡では唯一の出土例となる。

図示できなかつた土器片は胴部片や微細片などが中心で、摩滅が進んでいる破片も多く、時期の不明瞭なものが多かった。遺物の時期が明らかにできたものは平安時代の遺物が大半で、弥生時代や中・近世と確認できる遺物は一片もなかった。古墳時代の破片を出土した遺構に4・28・32・41号ピット、奈良時代の破片を出土した遺構に11・45・91号ピットがある。

表5 ピット一覧(第143～149図 PL.58 遺物観察表245・246頁) (cm)

No.	平面図	位置	形状	長軸×短軸×深さ	備考
1		104、-000	楕円形か	43×(17)×39	底面に柱痕。東側は調査区域外。平安期の土師器1片出土。
2		099、-000	円形	32×(16)×28	東側は調査区域外。土師器微細片2片出土。
3		097・098-000	楕円形	52×33×33	土師器2片出土。
4	第166図	094、-001	楕円形	35×28×33	3号溝と重複。土師器8片出土。
5	第166図	093、-001	楕円形	36×28×27	土師器9片出土。
6	第166図	092、-000・001	楕円形	62×61×13	土師器2片出土。
7	第128図	087、-958	円形	48×46×10	南隅に小礫。
8	第128図	088、-957・958	楕円形	43×31×16	
9	第128図	088、-957	不整楕円形	30×22×17	
10	第128図	088、-956	円形	35×26×10	14号住居内。
11	第167図	078、-956	楕円形	58×49×30	土師器3片出土。
12	第130図	093、-140	楕円形	24×20×8	3号掘立柱建物P6北西に張出すような位置。
13	第130図	093、-136	円形	25×23×8	3号掘立柱建物P1北東に張出すような位置。
14	第144図	085、-948・949	円形	58×48×17	184号ピットと接す。土師器微細片2片出土。
15	第130図	089、-140	円形	32×30×20	3号掘立柱建物P4南西に張出すような位置。
16	第130図	089・090、-136	円形	28×26×12	3号掘立柱建物P3南東に張出すような位置。
17	第172図	070、-828	円形	39×38×13	第149図須恵器杯1。
18	第172図	068、-824・825	楕円形	50×42×14	土師器2片、須恵器1片出土。
19	第172図	069、-831・832	楕円形	32×28×9	南東側の804号ピットと接す。土師器2片出土。
20	第172図	074、-828・829	不整円形	58×55×26	平安期の土師器8片、須恵器8片出土。
21	第174図	074・075、-836	双円形	88×49×32	2基の重複ピット。平安期の土師器1片、須恵器4片出土。
22	第174図	076、-835・836	円形	34×32×30	摩滅した土師器1片出土。
23	第174図	084、-839・840	楕円形	38×28×7	13号溝西壁と重複。第149図須恵器椀2。
24		086、-849	円形	33×28×30	土師器1片、須恵器2片出土。
25	第148図	073・074、-849・850	不整円形	85×83×28	土坑状。平安期の土師器4片、須恵器3片出土。
26	第148図	075、-852・853	不整長円形	99×58×12	土坑状。古墳時代後期の可能性のある土師器7片出土。
27	第174図	080、-840・841	円形	30×29×22	須恵器1片出土。
28	第174図	080、-839	不整円形	45×42×24	南東側の871号ピットと接す。古墳後期土師器高杯など2片出土。
29	第174図	078・079、-841・842	円形	29×26×23	底面北西側へ偏る。土師器1片出土。
30	第173図	087、-863	円形	46×43×35	底面に柱痕状の深さ19cmの窪み。土師器微細片1片出土。
31	第173図	084・085、-864	楕円形	52×41×15	平安期の土師器4片、須恵器1片出土。
32	第177図	086、-870	楕円形	34×28×22	古墳後期土師器高杯1片出土。
33	第147・176図	083、-895・896	円形	32×29×20	土師器3片出土。
34	第147図	083・084、-896・897	円形	44×42×22	土師器2片出土。
35	第147図	080・081、-897・898	長円形	35×26×26	須恵器1片出土。
36	第131図	081、-927・928	円形	28×26×35	底面直上に礎盤石状の平坦な礫を据える。土師器2片出土。
37	第147図	078、-898・899	双円形	61×50×20	2基の重複ピットか。12号掘立柱建物区画内。平安期土師器・須恵器各1片出土。
38	第147図	078・079、-900	楕円形	43×41×26	土師器微細片1片出土。
39	第147図	075、-902・903	双円形	51×35×23	2基の重複ピットか。土師器微細片1片出土。
40	第147図	085、-899・900	円形	41×38×30	818号ピットと重複。土師器5片出土。
41	第132・147図	084、-910	円形	30×28×27	古墳期の丸底土師器杯1片出土。
42	第169図	085、-917	楕円形	43×40×17	土師器1片出土。
43	第129図	085・086、-919・920	不定形	75×68×35	複数ピットの重複か。土師器3片出土。
44	第129図	084・085、-919・920	楕円形	62×60×34	重複ピット有り。2号掘立柱建物区画内。平安期の土師器5片、須恵器1片出土。
45	第129図	084・085、-921・922	不整形	65×55×25	複数ピットの重複か。2号掘立柱建物区画内。平安期の土師器・須恵器各1片出土。
46	第129図	087、-924・925	不整楕円形	43×36×31	911号ピットと重複。平安期の須恵器1片出土。
47		088、-927・928	円形	39×36×40	底面狭い。土師器1片、須恵器2片出土。
48	第129図	085、-926・927	円形	23×22×18	2号掘立柱建物区画内。第149図土師器杯3。
49	第169図	077・078、-920・921	不整円形	74×65×27	土師器6片出土。
50		081・082、-924	隅丸方形	35×29×32	第149図在地系土器片口鉢4。
51	第179図	064・065、-880・881	楕円形	45×41×30	
52	第144図	087・088、-947	楕円形	31×25×15	古墳時代と思われる土師器1片出土。
53	第144図	077、-946・947	楕円形	40×37×9	第149図須恵器杯5。他に須恵器1片。6号溝と重複。
54		077、-958	円形	21×20×12	土師器器小片1片出土。
55		076、-959	双円形	62×51×36	2基のピットの重複または抜柱痕か。平安期の土師器7片、須恵器1片出土。
56		072・073、-010・011	楕円形	46×41×21	小礫。
57	第134図	072・073、-865・866	円形	22×20×25	土師器小片1片出土。
58	第134図	072、-864	楕円形	43×38×28	7号掘立柱建物北柱筋付近。
59	第134図	072、-865	円形	22×21×22	7号掘立柱建物P5に接する。
60	第134図	072、-864	双円形	30×23×28・18	2基の小ピットの重複。7号掘立柱建物北柱筋至近。平安期の須恵器2片出土。
61	第179図	072、-879	円形	33×31×14	第149図須恵器椀6。他に須恵器1片。
62	第179図	065、-881・882	楕円形	51×45×36	土師器3片出土。
63	第179図	064、-881・882	円形	33×31×25	平安期の土師器4片、須恵器1片出土。
64	第147・176図	065、-900	円形	30×25×20	土師器6片出土。
65	第147・176図	064・065、-901	円形	29×28×19	平安期の土師器4片、須恵器2片出土。

第三章 調査の内容

No.	平面図	位置	形状	長軸×短軸×深さ	備考
66	第147図	065・066、-901	長円形	40×31×10	土師器3片出土。
67	第147図	066、-901	円形	22×20×14	土師器小片1片出土。
68	第139・147図	070、-899・900	円形	31×28×15	底面上4cmに礎盤石状の平坦な礫を据える。土師器2片出土。
69	第131図	080、-925	円形	30×25×18	4号掘立柱建物北柱筋の西側延長線上。摩滅した土師器2片出土。
70	第147図	069、-903	円形	39×38×23	土師器2片出土。
71	第147図	067、-902・903	不整形	65×44×28	2基のピットの重複か。土師器3片出土。
72	第147図	065・066、-903	楕円形	33×32×20	土師器2片出土。
73	第147図	064、-904・905	不整円形	62×58×29	小礫混じる。複数の重複ピットか。平安期の土師器6片、須恵器2片出土。
74	第147図	063・064、-904・905	双円形	66×35×25	複数の重複ピットか。平安期の土師器14片、須恵器3片出土。
75	第147図	063、-906	隅丸長方形	43×30×25	54号土坑と重複。土師器微細片6片出土。
76	第147図	064・907・908	楕円形	33×26×21	56号土坑と重複。土師器微細片2片出土。
77	第147図	064、-909	円形	44×43×31	土師器1片出土。
78	第147図	066・067、-907・908	円形	41×36×20	第149図土師器鉢7。他に土師器1片。
79	第147図	067・068、-907・908	楕円形	81×64×36	2基の重複ピットか。土師器小片3片出土。
80	第147図	065・066、-909・910	円形	35×30×25	土師器3片出土。
81	第147図	067、-909・910	隅丸長方形	73×59×17	615号ピットと接す。土師器2片出土。
82	第147図	067・068、-908・909	双円形	69×49×38	小礫。複数の重複ピットか。土師器1片出土。
83	第147・171図	068、-909・910	楕円形	34×28×20	小礫。
84	第147・171図	070、-910	円形	36×34×22	9号溝・600号ピットと重複。土師器10片、須恵器2片出土。
85	第135・146図	071、-914・915	楕円形	42×38×34	8号掘立柱建物区画内。土師器1片出土。
86	第146図	072・073、-917	不整楕円形	56×38×28	45号住居と重複。419号ピットと接す。土師器14片出土。
87	第146図	070、-918・919	不整円形	52×49×23	45号住居南壁に近接。土師器・須恵器各1片出土。
88	第146・169図	066、-923	不整形	55×48×34	8'号溝と重複。土師器15片、須恵器1片出土。
89	第146・169図	066、-923・924	不整形	41×38×26	8C号溝東際と重複。土師器5片出土。
90	第146・169図	067・068、-923	不整形	54×45×29	8号溝と重複。2基のピットか。382号ピットと接す。土師器9片出土。
91	第146図	066・067、-925・926	円形	70×59×31	小礫混じる。土師器1片出土。
92	第145図	066・067、-931	円形	34×31×21	土師器4片、須恵器1片出土。
93	第145図	064、-935・936	円形	28×25×16	土師器2片出土。
94	第143図	071、-959	円形	34×31×13	土師器3片、須恵器2片出土。
95	第143図	069・070、-960・961	長円形	74×48×22・20	2基のピットの重複か。
96	第145図	064、-942	楕円形	31×26×18	
97	第143図	072・073、-959	不整楕円形	43×37×20	第149図須恵器有蓋壺の蓋8。
98	第143図	068、-959	円形	44×40×39・21	2基のピットの重複か。140号ピットと接す。土師器2片出土。
99	第143図	068・069、-952・953	長円形	32×26×28	73号土坑南壁に接す。土師器・須恵器各1片出土。
100	第143図	066・067、-963・964	楕円形	69×48×18	2基のピットの重複か。土師器小片2片出土。
101		066、-993	円形	30×27×31	土師器4片、須恵器1片出土。
102		066・067、-994	円形	30×27×33	土師器7片、須恵器4片出土。
103		070、-990・991	円形	20×18×19	土師器4片、須恵器1片出土。
104		067、-992・993	楕円形	78×69×19	土師器4片、須恵器3片出土。
105		069、-994	円形	28×26×22	底面に柱痕。土師器・須恵器各2片出土。
106		069・070、-995・996	楕円形	67×62×31	第193図石鏃12。
107		071、-001・002	長円形	66×41×12	土師器・須恵器各1片出土。
108		072、-002・003	不整楕円形	92×52×14	須恵器2片出土。
109		073、-983・984	楕円形	80×68×26	土師器4片、須恵器2片出土。
110	第148・185図	072、-856	不整楕円形	38×31×32	土師器3片出土。
111	第148・185図	072、-854・855	円形	46×44×21	708号ピット、4号畝①畝間と重複。土師器1片出土。
112	第148図	069・070、-857	不整円形	88×87×39	2基のピットの重複か。
113	第148図	064・065、-856・857	不整楕円形	75×62×12	729号ピットと近接。土師器2片、須恵器1片出土。
114	第148図	064、-858	不整楕円形	43×35×16	734号ピットと近接。土師器7片出土。
115	第148図	063・064、-856	不整楕円形	43×32×13・7	複数ピットの重複か。中央南寄りに柱痕状の窪み。
116	第136・148図	063、-855	円形	21×19×20	741ピットと重複。土師器1片、須恵器2片出土。
117	第136・148図	061・062、-854	不整形	73×(69)×14	土坑状。南側は調査区域外。9号掘立柱建物西柱筋南側延長線上。土師器15片、須恵器3片出土。
118	第136・148図	065、-853	不定形	73×59×42	3基以上の重複ピット。9号掘立柱建物区画内。土師器2片出土。
119	第136・148図	068・069、-849・850	円形	133×127×17	土坑状。9号掘立柱建物P3に重複で、前出の同建物ピットの可能性。土師器9片、須恵器6片出土。
120	第131図	078、-927	円形	28×27×11	121号ピットと重複。
121	第131図	078、-927	楕円形	37×29×16	120号ピットと重複。
122	第143図	074、-964・965	円形	49×45×8	
123	第143図	075、-962	円形	33×31×15	
124	第143図	072・073、-963	不整円形	48×42×32	77号土坑北西隅と重複。
125	第143図	072、-962	円形	29×27×20	77号土坑と重複。
126	第143図	070・071、-961・962	不整円形	58×55×16	
127	第143図	068、-963	不整円形	45×38×32	
128	第143図	067、-963	不整楕円形	50×38×7	
129	第143図	066・067、-963	不整円形	56×53×30	底面直上に小礫。
130	第143図	065・066、-962・963	楕円形	87×77×11	底面広く平坦で土坑状。
131	第143図	065、-962・963	円形	50×48×30	
132	第143図	064・065、-961・962	円形	37×34×17	133号ピットと接す。

No.	平面図	位置	形状	長軸×短軸×深さ	備考
133	第143図	065、-961	円形	52×47×30	西側の132号ピットと接す。
134	第143図	065・066、-960・961	楕円形	63×53×6	底面広く平坦で土坑状。
135	第143図	068、-960・961	不整双円形	53×29×16	2基の小ピット。東側ピットは底面ごく狭く、杭打設痕か。
136	第143図	069、-960	楕円形	35×25×12	
137	第143図	071・072、-959・960	楕円形	80×71×22	
138	第143図	070、-959・960	不整円形	32×28×14	
139	第143図	069・070、-959・960	円形	61×60×20	
140	第143図	068・069、-959	楕円形	47×41×23	南側の98号ピットと接す。
141	第143図	073・074、-958・959	円形	41×39×16	142号ピットと接す。
142	第143図	073、-958	不整円形	63×59×25	北側の141号ピットと接す。
143	第143図	072、-958	不整円形	60×53×39	ピット2基の重複か。76号土坑と重複。
144	第143図	070・071、-958・959	円形	54×48×13	
145	第143図	070、-958	円形	23×22×12	146号ピットと接す。
146	第143図	070、-958・959	円形	36×34×19	北東側の145号ピットと接す。
147	第143図	069、-958	円形	47×43×23	
148	第143図	068・069、-957・958	楕円形	44×39×26	底面に径17cm・深さ6cmの柱痕状の窪み。
149	第143図	068、-957・958	楕円形	35×27×10	
150	第143図	067・068、-958	楕円形	49×39×41	
151	第143図	067・068、-958・959	円形	37×35×17	
152	第143・167図	074、-957・958	円形	53×51×32	
153	第143・167図	074・075、-956・957	円形	55×53×33	4号溝、154号ピットと重複。
154	第143・167図	074、-956	円形	50×46×24	4号溝、153号ピットと重複。
155	第143・167図	073、-956・957	隅丸方形	59×47×40	西側に抜柱痕状の稜あり。4号溝とわずかに重複。
156	第143・167図	072、-956	楕円形	40×36×17	
157	第143・167図	069・070、-957	楕円形	21×18×13	極小ピットで杭打設痕か。4号溝南端先に位置。
158	第143図	069、-956	円形	42×38×35	底面狭い。
159	第143図	069・070、-955・956	不整楕円形	71×62×35・10	北側と東側に稜。重複ピットまたは抜柱痕の可能性。
160	第143図	068・069、-955・956	円形	29×29×10	
161	第143図	068、-956	円形	28×26×14	
162	第143図	072、-952・953	楕円形	45×37×20	
163	第143図	070・071、-952	双円形	67×51×26・7	ピット2基の重複か。
164	第143図	071、-952	楕円形	34×21×16	165号ピットと接す。
165	第143図	071、-952	楕円形	35×22×13	北東側の164号ピットと接す。
166	第143図	070・071、-951・952	不整円形	85×78×25	土坑状の窪み内に3基以上の柱痕状の窪み。167号ピットと接す。
167	第143図	071、-951	不整楕円形	44×32×8	南西側の166号ピットと接す。
168	第143図	071、-950・951	楕円形	47×30×11	169号ピットと接す。
169	第143図	070・071、-950・951	楕円形	55×27×20	北側の168号ピットと接す。
170	第143図	070・071、-949・950	円形	41×36×12	
171	第143図	070、-949・950	不整楕円形	61×41×10	172号ピットと重複。
172	第143図	070、-949・950	円形	27×23×27	極小ピットで杭打設痕か。171号ピットと重複。
173	第143図	070・071、-948・949	不整円形	75×69×24	ピット2基の重複か。
174	第143図	068、-948	円形	29×25×10	52号住居西壁中央付近に近接。
175	第143図	065、-950	円形	33×31×20	
176	第143図	065、-949	楕円形	36×31×24	
177	第143図	065、-948	楕円形	37×27×28	底面中央に柱痕状の深さ10cmの窪み。
178	第144図	088、-947	楕円形か	25×21×12	攪乱により北半を欠失。
179	第144図	086・087、-948	楕円形	27×24×18	
180	第144図	086、-947・948	円形	28×27×12	トレンチにより上方9cm分を欠失。
181	第144図	086、-948	楕円形	23×20×11	トレンチにより上方8cm分を欠失。
182	第134図	073・074、-866	楕円形	56×47×34	南に柱痕状の深さ5cmの窪み。183号ピットと重複。
183	第134図	073、-866	楕円形	(45)×40×35	182号ピットと重複。
184	第144図	085、-948	不整円形	34×30×17	西側の14号ピットと接す。トレンチにより北側上方を欠失。
185	第144図	085、-948	円形	21×17×11	極小ピットで杭打設痕か。トレンチにより北側上方を欠失。
186	第137・144図	085、-947	楕円形	30×23×33	底面北へ偏りごく狭く、杭打設痕状。
187	第134図	073、-866・867	楕円形	33×28×32	
188	第144図	084・085、-949	円形	26×23×23	189号ピットと重複。
189	第144図	084、-949	円形	31×25×11	188号ピットと重複。
190	第144図	084・085、-948・949	円形	28×27×18	
191	第144図	084、-948・949	不定形	65×45×27・8	ピット3基以上の重複か。192号ピットと接す。
192	第144図	084、-948	不整円形	22×21×17	北西側の191号ピット、南西側の195号ピットと接す。
193	第144図	083・084、-948	円形	21×20×22	194号ピットと重複。195号ピットと接す。
194	第144図	083、-948	不整楕円形	43×30×12	193号ピットと重複。195号ピットと接す。
195	第144図	083・084、-948・949	不定形	58×50×6	ピット2基以上の重複か。192・193・194号ピットと接す。
196	第144図	082・083、-948・949	不定形	62×60×12	ピット3基以上の重複か。197号ピットと重複。
197	第144図	082、-948	不整円形	46×43×6	18号住居北西隅、197号ピットと重複。
198	第144図	083、-949	円形	19×17×15	極小ピットで杭打設痕か。
199	第144図	082、-949	楕円形	57×48×12	16号住居カマドと重複。
200	第144図	082、-948	円形	25×22×15	18号住居内の小ピット。
201	第144図	080・081、-948・949	不整楕円形	42×28×6	18号住居内でピット2基重複の可能性。

第三章 調査の内容

No.	平面図	位置	形状	長軸×短軸×深さ	備考
202	第144図	080、-947	不整楕円形	27×23×17	18号住居内でピット2基重複の可能性。
203	第144図	080・081、-947	不整円形	35×33×21	18号住居内。
204	第144図	081、-946・947	楕円形	39×27×21	18号住居内。
205	第144図	081、-946	楕円形	28×22×25	18号住居北壁際。
206	第144図	081、-946	不整楕円形	34×28×27	18号住居内。
207	第144図	081、-946	楕円形	23×19×16	18号住居内。
208	第144図	080・081、-946	不整楕円形	56×29×15	18号住居内でピット2基重複の可能性。
209	第144図	079・080、-946	円形	25×22×12	18号住居内。
210	第144図	079、-946・947	円形	31×29×11	18号住居内。
211	第144図	079、-948	円形	18×15×9	極小ピットで杭打設痕か。18号住居南壁際。
212	第144・168図	077・078、-946・947	楕円形	28×24×22	
213	第144図	078、-945・946	円形	27×25×9	
214	第134図	070、-867	円形	31×30×39	7号掘立柱建物区画内。45号土坑と重複。
215	第137・144図	084、-945・946	円形	20×19×11	10号掘立柱建物区画内。極小ピットで杭打設痕か。
216	第137・144図	082・083、-945・946	楕円形	39×31×13	10号掘立柱建物P13と重複。攪乱により東隅を壊される。
217	第137・144図	085、-945	楕円形	31×20×26	10号掘立柱建物区画内。
218	第137・144図	084・085、-945	円形	26×22×19	10号掘立柱建物区画内。
219	第144図	081・082、-944・945	円形	27×25×18	
220	第144図	080、-945	円形	30×30×28	18号住居東壁際。
221	第137・144図	086、-944	楕円形	29×21×19	10号掘立柱建物区画内。トレンチにより上方8cm分を欠失。
222	第137・144図	085・086、-943・944	円形	33×29×26	10号掘立柱建物区画内。トレンチにより上方6cm分を欠失。
223	第137・144図	083・084、-944	不整円形	46×43×34	10号掘立柱建物区画内。北西側に抜柱痕状の稜あり。
224	第134図	073、-867	双円形	42×41×9・6	楕円形ピット2基の重複。深度乏しく不明瞭。
225	第144図	080、-944	円形	25×23×20	226号ピットと重複。
226	第144図	080、-944	楕円形か	30×24×15	225・227号ピットと重複。
227	第144図	080、-944	円形	33×30×23	226号ピットと重複。
228	第137・144図	087・088、-943	円形	31×30×41	底面中央は杭打設痕状に深さ15cmの狭い窪みがある。
229	第137・144図	086、-943	楕円形	27×22×22	10号掘立柱建物区画内で南柱筋付近。
230	第131図	079、-927・928	円形	30×29×34	底面狭く杭打設痕状。
231	第131図	077、-928	円形	41×36×25	
232	第131図	077、-927・928	円形	18×16×19	極小ピットで杭打設痕状。
233	第137・144図	083、-941・942	円形	28×25×27	10号掘立柱建物区画内。
234	第137・144図	080、-941	楕円形	30×25×38	10号掘立柱建物区画内。ピット2基の重複あるいは西側に抜柱痕。
235	第137・144図	086、-941	楕円形	33×28×36	10号掘立柱建物区画内で北柱筋付近。30号土坑と重複。
236	第133図	088・089、-920	円形	37×(30)×14	6号掘立柱建物区画内。
237	第133図	088・089、-919・920	楕円形	53×42×7	6号掘立柱建物区画内。
238	第133図	088、-918	円形	22×19×26	6号掘立柱建物区画内。
239	第133図	088、-917・918	円形	36×33×23	6号掘立柱建物区画内。
240	第133図	087・088、-915・916	円形	39×35×20	6号掘立柱建物区画内。
241	第144図	083、-939	円形	30×30×31	
242	第137・144図	083、-940	円形	27×24×13	10号建物区画内で東柱筋付近。
243	第144図	080・081、-940	双円形	35×27×31・18	ピット2基の重複。
244	第144図	077・078、-941・942	不整楕円形	43×27×23	
245	第144図	077、-942	楕円形	34×29×17	
246	第144図	075・076、-941・942	円形	43×43×26	
247	第144図	078、-939	不整円形	40×36×31	底面狭く杭打設痕状。248号ピットと接す。
248	第144図	078、-938・939	楕円形	71×32×43	北側の247号ピットと接す。東壁が緩やかで柱を倒した痕跡か。
249	第144図	076、-939	円形	37×33×27	
250	第145図	065・066、-946・947	円形	30×27×11	251号ピットと重複。52号住居南壁際。
251	第145図	065・066、-946・947	楕円形	64×48×23・18	ピット2基の重複か。250号ピットと重複。
252	第145図	064・065、-946・947	円形	24×23×8	
253	第145図	065、-946	円形	50×45×16	
254	第145図	065、-945・946	不整円形	49×41×41・37	255号ピットと重複。底面中央が柱痕状に4cm窪む。
255	第145図	065、-945	楕円形	57×52×23	254号ピットと重複。
256	第145図	065、-944	円形	24×21×14	
257	第145図	065、-944	楕円形	25×20×14	
258	第145図	064、-944	円形	27×24×23	
259	第145図	063・064、-942・943	円形	78×73×13	底面広く土坑状。261・262号ピットと接す。
260	第145図	065、-942	円形	29×27×23	
261	第145図	064、-942	円形	35×30×30	262号ピットと重複。南西側の259号ピットに接す。
262	第145図	064、-942	楕円形	29×21×23	261号ピットと重複。南西側の259号ピットに接す。
263	第131図	079・080、-924	円形	27×26×19	4号掘立柱建物北柱筋に接す。26・27号土坑と重複。
264	第131図	078・079、-921	円形	30×27×13	
265	第131図	077・078、-924	円形	31×27×15	4掘立柱建物区画内。19号土坑北壁至近。
266	第138・145図	069、-939	円形	66×62×9	底面広く、土坑状。47号住居北西隅と重複。11号掘立柱建物区画内。
267	第138・145図	069、-937・938	楕円形	64×33×31	47号住居北壁と重複。11号掘立柱建物区画内。
268	第138・145図	068・069、-937	不整円形	35×30×12	47号住居北壁と重複。11号掘立柱建物区画内。
269	第138・145図	067、-939	双円形	63×37×9	ピット2基重複か。47号住居南壁、270号ピットと重複。11号掘立柱建物区画内。

No.	平面図	位置	形状	長軸×短軸×深さ	備考
270	第138・145図	067、-939	楕円形	34×27×16	47号住居南壁等と重複。トレンチで上方8cm分欠失。11号掘立柱建物南柱筋に接す。
271	第138・145図	069・070、-940	楕円形	86×53×6	底面広く、土坑状。47号住居北西隅際。11号掘立柱建物西柱筋に接す。
272	第145図	063・064、-940	楕円形	34×30×38	底面中央杭打設痕状に細く深い。
273	第145図	064、-940	楕円形	33×26×25	北西側に抜柱痕か。274号ピットと重複。
274	第145図	064、-939・940	円形	49×47×12	273号ピットと重複。
275	第145図	063・064、-938・939	不整形円形	68×60×42	ピット2基の重複か。南側は調査区域外。
276	第145図	064、-937・938	楕円形	34×28×20	5号竪穴状遺構南壁際。
277	第145図	063・064、-937	円形	26×25×21	
278	第145図	063・064、-936・937	楕円形	35×28×21	
279	第133図	088、-914	円形	40×37×24	6号掘立柱建物P1に近接。
280	第133図	087、-914	円形	38×35×18	
281	第145図	065・066、-936・937	円形	25×22×16	
282	第145図	065・066、-936	円形	38×36×36	下層に小礫。北東側に抜柱痕か。
283	第145図	065、-935	楕円形	42×30×8	
284	第145図	064・065、-935・936	隅丸方形	46×43×7	
285	第133図	086、-916	円形	34×33×11	
286	第127図	070・071、-868	楕円形	83×64×16	6号竪穴状遺構と重複。
287	第133図	086、-914	円形	38×35×16	6号掘立柱建物B柱筋東側延長線上。
288	第138・145図	066・067、-932・933	円形	26×21×19	11号掘立柱建物区画内でP8の至近。
289	第145図	066、-933	円形	25×25×14	
290	第145図	064、-933	円形	31×29×25	2号柱穴列P2付近。
291	第141・174図	073、-840・841	円形	69×62×23	12号溝に接す。
292	第141・174図	074・075、-838	楕円形	44×36×44・19	293号ピットと重複。南側に柱痕状の窪み。
293	第141・174図	074・075、-838	楕円形	42×38×40・34	292号ピットと重複。北側に柱痕状の窪み。
294	第145図	065、-932	円形	24×22×12	底面からやや浮いた状態の小礫。
295	第145図	065、-932	円形	26×23×13	西側の294号土坑に近接。
296	第145図	064、-932	円形	17×14×6	46号住居西壁に接す。深度乏しいが極小ピットで杭打設痕か。
297	第145図	074、-931	円形	41×37×22	
298	第145図	074、-931	円形	33×28×23	
299	第145図	073・074、-931	楕円形	39×28×28	49号住居北東隅と重複。
300	第145図	070・071、-930	楕円形	32×27×30	49号住居南東隅に近接。301号ピットと重複。
301	第145図	070・071、-930	円形	28×25×8	49号住居南東隅に近接。300号ピットと重複。
302	第145図	069、-931	円形	33×31×14	
303	第145図	068・069、-930	円形	29×26×17	
304	第145図	067・068、-931	楕円形	33×26×16	
305	第145図	067、-931	円形	24×22×11	
306	第145図	066、-930・931	円形	32×29×30	
307	第145図	066・067、-930	円形	28×24×31	
308	第138・145図	067、-932	楕円形	46×37×18	11号掘立柱建物東柱筋付近。
309	第146図	072、-929・930	円形	29×26×11	
310	第146図	068・069、-929・930	楕円形	59×45×11・7	ピット2基の重複か。西側は極小ピットで杭打設痕状。
311	第146図	068、-929	円形	27×25×7	深度乏しく、不明瞭。
312	第146図	067、-929	楕円形	41×35×15	
313	第146図	066、-929	楕円形	36×27×10	
314	第146図	064、-929	円形	30×25×27	46号住居北壁と重複。
315	第146図	064、-928・929	楕円形	32×24×25	46号住居北壁と重複。
316	第146図	064、-929	円形	30×27×29	46号住居内。
317	第146図	063・064、-928	円形	30×28×36	62号土坑内。
318	第146図	071・072、-927・928	不整形楕円形	60×48×7	17号溝南端付近。319号ピットと重複。
319	第146図	071、-927・928	円形	35×29×20	17号溝南端付近。318号ピットと重複。
320	第146図	070、-926・927	楕円形	35×27×36	
321	第146図	069・070、-927・928	円形	23×20×7	
322	第146図	069・070、-926・927	楕円形	71×50×27・18	二段底状。
323	第146図	069、-927・928	楕円形	27×21×17	324号ピットと近接。
324	第146図	069、-928	円形	26×23×20	325号ピットと接す。
325	第146図	068・069、-928	円形	33×30×19	北東側の324号ピットと接す。
326	第146図	068・069、-927・928	円形	33×31×20	
327	第146図	068、-928	円形	39×34×22	328号ピットと重複。
328	第146図	068、-928	楕円形	31×18×18	327号ピットと重複。
329	第146図	067・068、-928	円形	32×28×8	
330	第146図	067・068、-927・928	円形	35×32×27	331号ピットと接す。
331	第146図	068、-927	円形	31×29×18	南西側の330号ピットと接す。
332	第146図	068、-926・927	楕円形	49×28×14	
333	第146図	067・068、-926・927	円形	36×33×21	
334	第146図	067・068、-926	円形	39×35×19	北西側の稜は抜柱痕か。
335	第146図	067、-928	円形	32×29×13	
336	第146図	067、-927・928	円形	35×33×19	337号ピットと接す。
337	第146図	067、-927・928	楕円形	36×30×9	北東側の336号ピットと接し、南側の338号ピットとも近接。

第三章 調査の内容

No.	平面図	位置	形状	長軸×短軸×深さ	備考
338	第146図	066、-927・928	楕円形	43×37×18	337号ピットと近接。
339	第146図	066・067、-927	円形	27×25×11	底面狭く杭打設痕状。
340	第146図	067、-926	円形	29×27×9	
341	第146図	066、-926・927	楕円形	40×35×28	
342	第146図	066、-928・929	楕円形	50×39×33・25	底面中央に径25cm・深さ8cmの柱痕状の窪み。
343	第146図	066、-928	円形	27×23×25	344号ピットと接す。
344	第146図	066、-927・928	円形	36×33×23	西側の343号ピットに接す。
345	第146図	066、-927	円形	30×27×10	
346	第146図	065、-928	円形	48×44×8	
347	第146図	065、-927	円形	37×36×18	
348	第146図	065、-927	円形	25×23×8	
349	第146図	065・066、-926	楕円形	67×53×35	底面中央に径22cm・深さ5cmの柱痕状の窪み。
350	第146図	066、-925・926	楕円形	50×32×31	ピット2基の重複。
351	第146図	065、-926	円形	30×29×12	
352	第146図	073・074、-924・925	隅丸方形	60×50×33	21・61・65号土坑と重複。
353	第146図	071、-925	楕円形	34×27×18	
354	第146図	071、-924・925	楕円形	59×53×25・16	底面中央に径21cm・深さ6cmの柱痕状の窪み。
355	第146図	071、-923	楕円形	22×18×9	
356	第146図	071、-923	円形	25×24×18	
357	第146図	070、-925・926	楕円形	61×50×32	358号ピットと接す。
358	第146図	070、-925	楕円形	38×27×20・14	2基のピットか。南西側の357号ピットと接す。
359	第146図	070、-923・924	楕円形	39×33×14	
360	第146図	069・070、-925・926	円形	28×26×13	
361	第146図	069・070、-924・925	円形	29×27×20	
362	第146図	067・068、-925	円形	32×30×16	
363	第146図	067・068、-925	円形	28×27×25	底面狭く杭打設痕状。
364	第146図	067・068、-924・925	楕円形	52×31×20	
365	第146図	067、-925	円形	31×28×8	
366	第146図	066・067、-925	楕円形	39×32×11	
367	第146・169図	065・066、-925	楕円形	57×43×17	8 C号溝西際と重複。
368	第146・169図	063・064、-925・926	円形	27×26×21	8 C号溝西際と重複。
369	第146・169図	063、-926	楕円形	27×20×21	8 C号溝西際と重複。
370	第146・169図	063、-926	楕円形	48×43×26	8 C号溝西際と重複。南側は調査区域外。
371	第146・169図	063、-924	楕円形	(47)×40×32	8'号溝南端と重複。南側は調査区域外。372号ピットと接す。
372	第146・169図	063・064、-924・925	円形	40×37×35・9	南西側に抜柱痕の可能性のある稜。8'号溝南端。371号ピットと接す。
373	第146・169図	064、-924・925	楕円形	29×24×-	礎盤石状の扁平な礫あり。8 C号溝東際と重複。
374	第146・169図	064、-924・925	円形	23×19×20	8 C号溝東際と重複。
375	第146・169図	065、-924	円形	17×14×10	8 C号溝と8'号溝の間。極小ピットで杭打設痕状。
376	第146・169図	064・065、-923・924	円形	63×58×36	8'号溝と重複。
377	第146・169図	065・066、-923・924	楕円形	60×49×30	8'号溝と重複。
378	第146・169図	066、-924	隅丸方形	45×39×32	8 C号溝底面付近。
379	第146・169図	066・067、-924・925	楕円形	39×36×-	底面直上に礎盤石状の扁平な礫。8 C号溝西際・380号ピットと重複。
380	第146・169図	067、-924・925	楕円形	35×(25)×20	8 C号溝西際・379号ピットと重複。
381	第146・169図	067、-924	楕円形	49×37×21	8 C号溝西際と重複。
382	第146・169図	067・068、-923・924	円形	40×35×27	8 C号溝底面付近。東側の90号ピットに接す。
383	第146・169図	068・069、-923	楕円形	34×29×20	8 C号溝西壁際と重複。
384	第146・169図	069・070、-923	円形か	32×31×14	8号溝西壁際、385号ピットと重複。
385	第146・169図	070、-922・923	円形	53×51×21	8号溝西壁際、384・386号ピットと重複。
386	第146・169図	070、-922・923	楕円形	71×32×15	2基のピットの可能性。8号溝西壁際、385号ピットと重複。
387	第146・169図	071、-922	不定形	45×38×29	8号溝西壁、388号ピットと重複。
388	第146・169図	072、-922	円形	43×41×27	8 B号溝南隅、387号ピットと重複。
389	第146・169図	073、-921・922	楕円形か	36×30×29	8 B号溝西際、390号ピットと重複。
390	第146・169図	073、-921・922	円形	68×64×42	8号溝西際、389号ピットと重複。
391	第146・169図	074・075、-920・921	不整楕円形	61×43×34	8 B号溝北隅と重複。
392	第146・169図	075、-919	楕円形	33×21×24	8'号溝東壁と重複、837号ピットと接す。
393	第146・169図	074、-919	円形	51×44×17	8'号溝東際と重複。
394	第146・169図	072・073、-920・921	隅丸方形	90×70×32	8'号溝、395号ピットと重複。
395	第146・169図	072、-920	楕円形	37×30×32	8号溝東際、394号ピットと重複。
396	第146・169図	071・072、-920・921	不整円形	48×42×28	8'号溝東際と重複。397号ピットと接す。
397	第146・169図	071・072、-921	楕円形	35×28×23	8'号溝東際と重複。北側の396号ピットに接す。
398	第146・169図	071・072、-921	楕円形	37×28×16	8'号溝東際と重複。399号ピットと接す。
399	第146・169図	071・072、-921	楕円形	26×21×18	西側の398号ピットに接す。
400	第146・169図	069、-921・922	円形	33×32×19	8'号溝東際に近接。402号ピットと重複。
401	第146・169図	068、-922	楕円形	27×23×19	8'号溝、402号ピットと重複。
402	第146・169図	068・069、-921・922	不定形	119×71×22	4基以上のピットの重複。8'号溝、400・401号ピットと重複。
403	第146・169図	068、-922	円形	39×39×12	8'号溝東際に近接。
404	第146・169図	067、-922	楕円形	29×23×9	
405	第146・169図	066、-922・923	円形	32×29×25	8'号溝東壁とわずかに重複。
406	第146・169図	066、-922	円形	23×21×11	

No.	平面図	位置	形状	長軸×短軸×深さ	備考
407	第146・169図	065、-922・923	円形	40×36×30	
408	第146・169図	064、-923・924	円形	35×34×31	8'号溝東際に近接。
409	第146図	064、-921	円形	41×40×15	
410	第146図	065・066、-921・922	楕円形	46×39×33	
411	第146図	066・067、-921	楕円形	66×50×22・8	ピット2基の重複か。
412	第146図	068・069、-920	楕円形	86×74×23	南西隅に径25cm、深さ11cmの柱痕状の窪み。
413	第146図	069・070、-919・920	円形	25×23×30	
414	第146図	070・071、-920・921	不定形	83×66×16・14	2基の楕円形ピットの重複か。
415	第146図	070・071、-919	円形	34×31×20	45号住居南壁に近接。
416	第146・169図	071、-920	楕円形	35×27×22	45号住居南西隅と重複。417号ピットとわずかに重複。
417	第146・169図	071、-920	円形	70×61×11	45号住居南西隅、416号ピットとわずかに重複。
418	第146図	072・073、-919・920	楕円形	45×37×22	45号住居西壁と重複、8号溝東際に接す。。
419	第146図	072、-917	楕円形	26×15×23	45号住居東壁と重複、東側の86号ピット、北側の420号ピットに接す。
420	第146図	073、-917	円形	28×25×19	45号住居東壁と重複、南側の419号ピットに接す。
421	第146図	073、-917	円形	26×24×20	45号住居北東隅と重複。
422	第146図	073、-917	円形	23×21×19	28号住居西壁と重複、45号住居北東隅と接す。
423	第146・169図	074、-918・919	楕円形	25×20×14	
424	第146・169図	075、-918	円形	30×28×20	
425	第146図	069、-918・919	不整円形	37×36×10	
426	第146図	069、-918	円形	30×27×27	
427	第146図	069、-917・918	円形	33×31×9	底面付近に礎盤石状の平坦な礫を据える。
428	第146図	068・069、-917・918	不定形	83×59×17・8	ピット3基の重複か。
429	第146図	068、-918・919	円形	54×49×11	
430	第146図	067・068、-917	楕円形	35×27×10	
431	第146図	067、-917・918	不整楕円形	60×43×24・10	ピット2基の重複。
432	第146図	066、-918・919	楕円形	39×34×30	東側は抜柱痕か。
433	第146図	065、-919	円形	44×41×21	
434	第146図	063・064、-919	円形	30×25×36	
435	第146図	066・067、-917	円形	27×23×20	
436	第146図	066～068、-915・916	不定形	-×-×32	径1.5mの範囲にピット9基以上が集中した地点。
437	第146図	068、-916	円形	33×26×13	南側の436号ピットに接す。
438	第146図	068・069、-915	楕円形	33×28×30	
439	第135・146図	070、-914・915	円形	39×37×19	8号掘立柱建物区画内。
440	第135・146図	071、-914	楕円形	43×34×18	8号掘立柱建物東柱筋に接す。
441	第146図	071、-913	円形	34×34×27	
442	第146・171図	070、-912・913	円形	50×46×21・7	ピット2基の重複あるいは北側からの抜柱痕か。
443	第135・146図	071・072、-914	円形	40×38×37	8号掘立柱建物区画内。444号ピットと重複。
444	第135・146図	072、-914	楕円形か	(60)×40×23	8号掘立柱建物区画内。同建物P1・443ピットと重複。
445	第135・146図	072、-913・914	円形	22×20×16	8号掘立柱建物P1と重複。
446	第135・146図	072・073、-913・914	楕円形か	(46)×33×16	8号掘立柱建物P1と重複。
447	第146図	071・072、-912・913	不整円形	49×41×11	
448	第146図	073、-913・914	円形	30×27×10	
449	第146図	073、-913	円形	30×26×14	
450	第146図	073・074、-912・913	円形	22×21×13	
451	第146・171図	068・069、-913	円形	46×43×22	9号溝西壁と重複。
452	第146・171図	067・068、-913	円形	31×29×22	9号溝と重複。
453	第146・171図	067・068、-912・913	不定形	41×35×19	9号溝と重複。
454	第146・171図	066、-913	楕円形	32×24×24	9号溝と重複。
455	第146・171図	066、-913	円形	32×29×23	9号溝と重複。
456	第146・171図	066、-914	円形	30×27×26	9号溝と重複。
457	第147図	088、-910	円形	38×35×26	
458	第147図	088、-909	円形	39×37×31	
459	第147図	088、-908	楕円形	37×29×22	
460	第147図	088、-907・908	楕円形	23×19×9	
461	第147図	088、-907	不整楕円形	25×17×9	
462	第147図	088、-907	円形	31×30×28	
463	第147図	088、-907	円形	23×22×17	
464	第147図	087・088、-907	円形	26×23×17	底面狭く杭打設痕状。
465	第147図	087、-906	円形	22×19×12	
466	第147図	087、-906	円形	22×17×18	
467	第147図	087、-906	円形	31×29×24	
468	第147図	086・087、-911・912	円形	37×35×26	
469	第147図	086、-912	楕円形	40×31×28	
470	第147図	086、-910	円形	35×31×30	
471	第147図	085・086、-909・910	楕円形	35×27×35	
472	第147図	085、-911	円形	19×16×6	極小ピットで杭打設痕か
473	第147図	085、-908	円形	18×17×21	極小ピットで杭打設痕か
474	第147図	084・085、-907	円形	26×24×19	475号ピットと重複。
475	第147図	084・085、-907	円形	24×21×12	474号ピットと重複。

第三章 調査の内容

No.	平面図	位置	形状	長軸×短軸×深さ	備考
476	第147図	085、-905	円形	24×22×22	
477	第132・147図	084、-911	円形	47×43×27	5号掘立柱建物P8と重複。
478	第132・147図	083、-912	円形	22×21×20	5号掘立柱建物区画内。
479	第132・147図	083、-910	円形	27×25×25	5号掘立柱建物区画内。
480	第132・147図	082、-911	円形	21×19×6	5号掘立柱建物区画内。481号ピットと接す。
481	第132・147図	082、-911	楕円形	26×21×16	5号掘立柱建物区画内。西側の480号ピットと接す。
482	第132・147図	081、-911・912	円形	27×25×21	5号掘立柱建物区画内。
483	第132・147図	081、-910	円形	23×19×14	5号掘立柱建物東柱筋に接す。
484	第132・147図	083、-909・910	円形	26×23×16	5号掘立柱建物東柱筋に接す。
485	第132・147図	083・084-990・910	楕円形	57×45×31	底面直上に礎盤石状の平坦な礎。5号掘立柱建物P1に重複。
486	第147図	084、-909	円形	23×20×8	
487	第147図	084、-908	円形	16×15×8	深度に欠くが極小ピットで杭打設痕か。
488	第140・147図	083・084、-907	楕円形	45×27×23	1号柱穴列P1に重複。東隅に柱痕状の窪み。
489	第147図	083、-909	円形	21×19×13	深度に欠くが極小ピットで杭打設痕か。
490	第147図	083、-909	円形	22×19×9	深度に欠くが極小ピットで杭打設痕か。
491	第147図	082、-909	楕円形	23×19×8	
492	第147図	082、-909	円形	22×20×8	
493	第147図	081・082、-909	円形	26×25×18	
494	第140・147図	081・082、-908・909	円形	37×35×26	
495	第140・147図	081、-907	双円形	42×24×17・13	1号柱列柱筋上。ピット2基の重複
496	第140・147図	081、-906	円形	19×17×9	深度に欠くが極小ピットで杭打設痕か。
497	第147図	081、-909・910	円形	31×27×23	
498	第147図	080・081、-910	不整楕円形	47×37×27	
499	第147図	080、-912	円形	20×18×13	
500	第147図	080、-908	円形	22×19×18	小ピットで底面狭く杭打設痕状。
501	第147図	079・080、-906・907	円形	56×49×22	1号柱列P3に近接。
502	第147図	088、-904	楕円形	26×21×20	
503	第147図	088、-902	円形	25×20×22	504号ピットと重複。
504	第147図	088、-902	円形	27×25×21	503号ピットと重複。
505	第147図	087、-901	円形	22×20×7	深度に欠くが極小ピットで杭打設痕か。
506	第147図	088、-899	円形	16×15×9	深度に欠くが極小ピットで杭打設痕か。
507	第147図	086、-903	円形	26×24×18	
508	第147図	086、-901	円形	29×26×15	
509	第147図	085、-903	円形	30×25×26	510号ピットと重複。
510	第147図	085、-903	円形	29×21×21	509号ピットと重複。
511	第147図	084、-904	円形	29×25×18	
512	第147図	085、-902	円形	31×28×21	
513	第147図	084、-902	円形	26×23×19	
514	第132図	083、-913	円形	23×22×25	5号掘立柱建物区画内。底面狭く東側に偏る。
515	第147・171図	082、-904	円形	25×24×9	
516	第147・171図	082、-903・904	円形	24×21×8	
517	第147・171図	083・084、-900・901	円形	34×31×24	9号溝と重複。
518	第147図	083、-897	円形	34×32×17	
519	第147・171図	082、-901	円形	21×17×15	9号溝と重複。
520	第147・171図	081・082、-901	楕円形	44×34×23	9号溝と重複。
521	第147・171図	081・082、-900・901	楕円形	55×39×35	9号溝東壁と重複。
522	第147・171図	080・081、-901	円形	19×18×24	極小ピットで杭打設痕状。9号溝と重複。
523	第147・171図	080、-902	楕円形	35×28×17	9号溝東壁と重複。
524	第147・171図	079、-904	円形	34×30×25	9号溝と重複。
525	第147・171図	079、-903	楕円形	29×24×24	9号溝と重複。
526	第147・171図	079、-901・902	円形	38×32×27	527号ピットと重複。
527	第147・171図	079、-901・902	円形	31×30×34	526号ピットと重複。
528	第147・171図	081、-900	円形	27×25×21	
529	第147図	080、-899・901	円形	34×30×29	
530	第147図	082、-898	円形	32×30×14	
531	第147図	082、-897	楕円形	41×31×15	
532	第147図	081、-898	円形	20×16×10	
533	第147図	081、-898	円形	28×24×13	
534	第147図	080・081、-898	円形	23×21×12	
535	第147・176図	080、-897	楕円形	34×28×23	
536	第147・176図	080、-896	楕円形	25×20×20	
537	第147・176図	079、-896	楕円形	25×20×20	
538	第139・147・176図	079、-896	円形	44×38×16	16号溝と重複。
539	第139・147・176図	078・079、-896	円形	39×37×16	16号溝と重複。
540	第132図	085、-913	円形	29×27×17	5号掘立柱建物A柱筋北側延長線上。
541	第132図	084、-914	円形	38×35×22	5号掘立柱建物区画内。
542	第139・147図	079、-899	円形	36×33×28	12号掘立柱建物A柱筋に接す。
543	第139・147図	079、-900	円形	19×19×13	極小ピット。12号掘立柱建物A柱筋の西側延長線上。
544	第147・171図	078、-903	円形	19×16×23	極小ピット。9号溝と重複。

No.	平面図	位置	形状	長軸×短軸×深さ	備考
545	第140・147図	077・078、-907・908	楕円形	75×(50)×31	1号柱穴列P4に前出。同建物前出ピットの可能性。
546	第147図	077・078、-901	円形	26×23×13	
547	第147図	077、-902	不整円形	36×32×23	
548	第147図	077、-901・902	円形	25×24×11	12号掘立柱建物B柱筋の西側延長線上付近。
549	第147図	077、-902	楕円形	37×20×36	
550	第147図	076・077、-902	円形	40×35×19	
551	第139・147図	076、-901	円形	44×39×24	西側に広い柱痕状の窪みあり、底面直上に礎盤石状の平坦な礫据える。
552	第139・147図	077、-899・900	楕円形	20×16×21	極小ピットで杭打設痕状。12号掘立柱建物区画内。
553	第132図	083、-914	円形	28×27×23	5号掘立柱建物P6と重複。
554	第132図	082・083、-914	円形	39×38×26	5号掘立柱建物A柱筋に接す。
555	第139・147図	076・077、-898・899	円形	37×32×34	12号掘立柱建物区画内。
556	第139・147・176図	078、-897・898	楕円形	46×42×15	12号掘立柱建物東柱筋に接す。
557	第139・147・176図	077、-897・898	円形	25×23×9	12号掘立柱建物東柱筋に接す。
558	第139・147・176図	077、-896・897	不整楕円形	48×36×21	16号溝と重複。
559	第139・147・176図	076、-897	不整隅丸方形	40×34×24	16号溝と重複。
560	第139・147・176図	076、-898	楕円形	40×33×33	12号掘立柱建物東柱筋に接す。
561	第132図	082、-914・915	円形	33×32×13	5号掘立柱建物区画内。
562	第139・147・176図	075、-897・898	円形	36×33×26	12号掘立柱建物西柱筋付近。
563	第147・176図	074・075、-896	円形	43×38×22	西側底面に柱痕状の窪み。15号溝西壁に接する。564号ピットと重複。
564	第147・176図	074・075、-896	円形	39×35×15	563号ピットと重複。
565	176図	071、-895・896	円形	40×35×15	566号ピットに接す。
566	176図	070、-895	不整隅丸方形	48×45×20	東側壁際に深さ9cmの柱痕状の窪み。565号ピットに接す。
567	第147・176図	072、-897・898	楕円形	31×24×11	
568	第139・147・176図	072・073、-898	楕円形	35×27×14	16号溝の南側延長線状。
569	第139・147図	072、-899・900	円形	14×13×12	極小ピットで杭打設痕状。12号掘立柱建物区画内。
570	第139・147図	072、-899	円形	19×17×9	極小ピットで杭打設痕状。12号掘立柱建物区画内。
571	第132図	082・083、-912・913	不整円形	43×42×17	5号掘立柱建物区画内。572号ピットと接す。
572	第132図	082、-912	円形	49×44×21	5号掘立柱建物区画内。571号ピットと接す。
573	第132図	082、-913	不整円形	30×27×14	30号住居と重複。5号掘立柱建物区画内。
574	第132図	082、-912・913	円形	35×32×13	30号住居と重複。5号掘立柱建物区画内。
575	第139・147図	073・074、-901・902	不整楕円形	49×41×24	12号掘立柱建物西柱筋付近。
576	第147図	074、-902・903	円形	23×21×10	
577	第147図	074、-903	円形	26×24×9	
578	第147・171図	074、-904	円形	24×23×12	
579	第147・171図	074、-905・906	円形	31×28×11	9号溝東壁と重複。
580	第147・171図	074、-906・907	楕円形	25×15×12	9号溝と重複。
581	第147・171図	074、-907	楕円形	27×23×21	9号溝と重複。
582	第147・171図	074、-907	楕円形	25×20×15	9号溝と重複。
583	第147・171図	072・073、-910	不整隅丸方形	71×51×17・13	ピット2基の重複か。西側底面直上に小礫据える。
584	第147図	072、-904	円形	36×32×22	
585	第147図	072、-904	円形	22×18×10	
586	第147図	072、-903	円形	17×15×11	極小ピットで杭打設痕状。
587	第147図	072、-902	楕円形	30×18×14	12号掘立柱建物D柱筋西側延長線上。
588	第132図	081・082、-913	双円形	47×28×12	ピット2基の重複か。30号住居、5号掘立柱建物と重複。
589	第132図	080、-912	円形	31×30×23	30号住居と重複。底面狭い。
590	第147図	070、-900・901	不整円形	54×49×20	
591	第147図	070・071、-902	円形	35×31×13	
592	第147図	071、-902・903	双円形	79×51×25	ピット2基の重複か。
593	第147図	070・071、-902・903	円形	37×35×19	
594	第147図	070、-902	円形	27×26×19	
595	第147図	070・071、-904	円形	27×23×23	
596	第147図	071、-904・905	不整円形	60×55×11	底面広く土坑状。
597	第147図	070、-905	円形	27×24×13	
598	第147図	070・071、-906	不整楕円形	65×55×19	底面中央付近に小礫据える。
599	第147・171図	070・071、-909	楕円形	35×26×14	底面直上に礎盤石状の平坦な礫を据える。9号溝と重複。
600	第147・171図	070・071、-910	双円形	97×59×19	ピット2基の重複か。9号溝と重複。南側84号ピットに接す。
601	第147・171図	069、-912	円形	33×27×25	9号溝と重複。
602	第147・171図	069、-912	楕円形	31×21×17	9号溝と重複。
603	第147・171図	069、-912	円形	25×25×19	9号溝と重複。
604	第147・171図	067、-912	円形	26×25×23	64号土坑際の9号溝と重複。
605	第147・171図	068、-911	円形	15×15×16	極小ピットで杭打設痕状。9号溝と重複。
606	第147・171図	069、-910・911	楕円形	32×26×19	9号溝・64号土坑西壁と重複。
607	第147・171図	070、-908・909	楕円形	35×25×15	
608	第147図	070、-905・906	楕円形	26×21×13	
609	第147図	069・070、-908	円形	45×41×28	断面漏斗状。
610	第147図	068～070、-907・908	不定形	130×61×35・21	複数ピットの重複か。杭打設痕状の極小ピットが混じる。
611	第147図	068・069、-908・909	楕円形	32×26×16	底面直上に小礫据える。
612	第147・171図	068、-909	楕円形	29×24×13	
613	第147図	067、-909	円形	26×23×15	

第三章 調査の内容

No.	平面図	位置	形状	長軸×短軸×深さ	備考
614	第147・171図	066、-911	楕円形	46×27×28	ピット2基の重複または南側からの抜柱。64号土坑と重複。
615	第147・171図	067、-910	円形	28×23×24	底面狭い。東側の81号ピットに接す。
616	第147図	066、-910	楕円形	26×23×12	南西側の617号ピットに接す。
617	第147図	066、-910	隅丸方形	61×41×16	618号ピットと重複。616号ピットに接す。
618	第147図	066、-910	不整円形	32×24×28	南側に抜柱痕状の窪み。617号ピットと重複。
619	第147・171図	065・066、-911・912	円形	45×39×25	64号土坑東壁と重複。
620	第147図	065、-911	楕円形	32×26×17	底面付近に小礫。
621	第147図	065、-911	円形	29×27×26	
622	第147図	063、-911	楕円形	(65)×50×17	南側は調査区域外。
623	第147図	065、-909	楕円形	54×39×28・24	ピット2基の重複。
624	第147図	066、-908・909	不定形	61×48×24・15	ピット3基の重複か。
625	第147図	067、-909	楕円形	42×27×15	626号ピットと重複。
626	第147図	067、-908・909	楕円形	48×35×24	北隅に深さ8cmの柱痕状窪み。625号ピットと重複。
627	第147図	067、-908	円形	24×21×15	
628	第147図	068、-907	円形	32×28×14	底面直上に礎盤石状の小礫据える。
629	第147図	068・069、-906	楕円形	36×24×16	2段底状で北側に細い深さ9cmの窪み。
630	第147図	069、-906	円形	29×27×15	
631	第147図	069、-905・906	円形	39×36×16	
632	第147図	069、-904	円形	26×21×12	
633	第147図	068・069、-904	円形	29×28×23	
634	第147図	068・069、-903・904	楕円形	73×61×29	635号ピットと重複。681号ピットに近接。
635	第147図	068、-903・904	楕円形	60×38×23	634号ピットと重複。
636	第147図	067・068、-904	円形	27×23×10	
637	第147図	067・068、-905	楕円形	28×21×9	55号土坑東壁に接す。
638	第147図	067、-905	楕円形	30×25×24	637号土坑の南に近接。
639	第147図	067、-905	円形	19×16×12	極小ピット。55号土坑東壁に接す。
640	第147図	066・067、-904・905	不定形	65×45×30	南西側に礎盤石の可能性のある平坦な礫。
641	第147図	066、-905・906	円形	24×23×15	南側の642号ピットに近接。
642	第147図	066、-905・906	不整楕円形	42×35×24	西側に抜柱痕状の稜。北側の641号ピットに近接。
643	第147図	065、-907	不整楕円形	36×25×3	
644	第147図	065、-907	楕円形	28×18×3	56土坑東壁に接す。
645	第147図	064・065、-907	円形	33×32×20	
646	第147図	065、-906・907	楕円形	49×27×27	
647	第147図	064、-907	円形	32×28×32	断面漏斗状。
648	第147図	064、-906・907	楕円形	25×21×19	
649	第147図	064、-905・906	不整楕円形	45×41×23・11	複数ピットか。西側底面直上に礎盤石状の礫。53号土坑西壁と重複。
650	第147図	064、-904	円形	28×27×26	
651	第147図	063・064、-903・904	楕円形	39×25×19	東壁が緩やかで、抜柱もしくは柱傾斜の痕跡か。
652	第147図	063、-904	円形	24×20×13	653号ピットに接す。
653	第147図	063、-904	円形	25×23×23	652・654号ピットに接す。
654	第147図	063、-903・904	円形	19×17×8	西側の653号ピットに接す。
655	第147図	063、-905	円形か	38×[12]×31	南半調査区域外。
656	第147図	063、-904・905	円形か	34×[18]×26	南半調査区域外。
657	第147図	063、-903	隅丸方形	64×(46)×35	南隅調査区域外。南側底面直上に小礫。658号ピットと重複。
658	第147図	063、-902・903	円形か	67×[55]×29	南半調査区域外。東側に柱痕状の深さ10cmの窪み。657号ピットと重複。
659	第147・176図	063、-902	円形か	29×(25)×9	南半調査区域外。
660	第147・176図	063、-901	円形	35×31×2	
661	第147・176図	063、-902	円形	19×17×6	極小ピット。
662	第147・176図	063、-901	円形	12×11×11	極小ピットで杭打設痕。
663	第147・176図	064、-901	円形	24×21×20	
664	第147図	063、-902	円形	23×21×2	
665	第147図	063・064、-902	円形	21×17×13	
666	第147図	065、-903	円形	25×23×21	
667	第147図	065、-902	円形	35×30×12	
668	第147図	065・066、-901・902	楕円形	53×27×12	
669	第147図	066、-902	円形	18×17×7	極小ピット。
670	第147図	066、-902・903	円形	25×23×10	
671	第147図	066、-903	円形	22×20×18	
672	第147図	066、-903	楕円形	30×24×23	
673	第147図	066、-904	円形	12×11×5	深度乏しいが極小ピットで杭打設痕状。
674	第147図	067、-903・904	円形	25×23×3	675号ピットに接す。
675	第147図	067、-903	楕円形	43×31×4	674号ピットに接す。
676	第147図	067、-903	円形	24×23×12	
677	第147図	067、-902	円形	22×18×6	
678	第147図	067、-901	円形	25×23×11	
679	第147図	067、-901・902	円形	26×23×16	
680	第147図	068、-903	不整円形	37×35×15	
681	第147図	068、-903	円形	27×23×18	断面漏斗状。634号ピットに近接。
682	第147図	069、-902・903	円形	30×29×19	

No.	平面図	位置	形状	長軸×短軸×深さ	備考
683	第147図	069・070、-900	楕円形	45×24×6	
684	第147図	069・070、-900	円形	25×21×6	
685	第147・176図	069、-899	円形	27×24×17	
686	第147図	068、-900・901	円形	32×31×40	
687	第147図	068、-900・901	楕円形	45×36×31	
688	第147図	067・068、-900	不整双円形	64×25×16	ピット2基重複の可能性。
689	第147・176図	068、-899・900	円形	30×27×12	
690	第147図	067、-900	円形	31×29×17	
691	第147図	067、-900	円形	27×27×9	
692	第147・176図	067、-900	円形	30×26×18	
693	第147・176図	066・067、-899・900	円形	33×32×11	
694	第147・176図	066、-900	不整円形	25×21×13	
695	第147・176図	067・068、-897・898	円形	25×21×9	
696	第147・176図	068・069、-896	円形	25×24×9	43号住居北東隅に近接。
697	176図	069、-895	楕円形	43×31×11	
698	第147・176図	066、-897・898	楕円形	39×31×17	
699	第147・176図	066、-896・897	円形	27×25×20	43号住居西壁に近接。
700	第147・176図	065・066、-897	円形	19×19×17	極小ピットで杭打設痕状。
701	第147・176図	065、-897	楕円形	28×22×15・10	ピット2基の重複か。
702	第147・176図	064、-898	円形	25×23×15	
703	第147・176図	064、-897	楕円形	27×22×18	
704	第147・176図	063・064、-897	円形か	29×(22)×21	南東側は調査区域外。
705	第148図	072、-857	楕円形	67×41×45・23	ピット2基の重複か。
706	第148・185図	072、-855・856	円形	19×17×21	極小ピット。
707	第148・185図	072、-855	円形	17×15×30	極小ピットで杭打設痕状。
708	第148・185図	072、-855	円形	55×(50)×31	111号ピットと重複。
709	第148・185図	072、-854	楕円形	44×43×46	4号畠北隅の畝間①と重複。
710	第148・185図	071、-856	楕円形	39×28×27	
711	第148・185図	071、-855	楕円形	62×30×21	4号畠畝間②、95号土坑北東側に近接。
712	第148・185図	070・071、-854・855	楕円形	77×45×32	西側に深さ10cmの柱痕状の窪み。
713	第148・185図	070、-854・855	円形	51×47×22	95号土坑東側に近接。
714	第148図	070、-855	楕円形	28×20×7	95号土坑内。
715	第148図	070、-855	楕円形	23×21×2	96号土坑内。
716	第148図	070・071、-856	円形	24×17×12	97号土坑内。
717	第148・185図	070・071、-856	円形	31×30×14	
718	第148図	071、-857	楕円形	30×23×12	
719	第148図	070、-857・858	円形	31×29×26	底面狭い。
720	第148・185図	069・070、-856	円形	39×34×30	
721	第148・185図	069・070、-855	円形	27×25×9	底面狭い。
722	第148・185図	069、-855・856	円形	57×55×23	
723	第148・185図	069、-856・857	円形	46×43×44・29	東側に柱痕状の深さ15cmの窪み。
724	第148図	069、-857・858	楕円形	65×41×46	90号土坑と重複。
725	第148図	068、-857・858	円形	34×25×15	90号土坑南壁と重複。
726	第148図	068、-858	円形	25×23×7	
727	第148図	067・068、-857	円形	27×25×18	
728	第148図	067、-858	円形	25×23×17	
729	第148図	065・066、-856・857	円形	49×47×12	南東側113号ピットに近接。
730	第148・185図	066、-856・857	円形	23×20×9	
731	第173図	086・087、-864	楕円形	36×28×22	
732	第173図	086・087、-862・863	楕円形	26×22×19	底面狭い。
733	第148図	065、-858・859	楕円形	36×25×10	
734	第148図	064、-858	楕円形	39×32×17	南側114号ピットに近接。
735	第148図	062、-859	円形か	46×[17]×9	736号ピット、土坑状の窪みと重複。
736	第148図	061・062、-859	円形か	36×[22]×43	南半は調査区域外。64号住居、735号ピット、土坑状の窪みと重複。
737	第136・148図	065、-855・856	楕円形	55×43×15	
738	第136・148・185図	065・066、-854・855	楕円形	34×25×18	
739	第136・148図	065、-854・855	円形	23×23×20	9号掘立柱建物P9に近接。
740	第136・148図	063、-855	円形	25×23×11	
741	第136・148図	063、-855	円形	25×(20)×20	116・742号ピットと重複。
742	第148図	062・063、-854・855	隅丸方形か	(59)×43×23	93号土坑、741号ピットと重複。
743	第129図	083、-928・929	円形	18×17×27	2号掘立柱建物P13に重複。
744	第136・148図	064、-852・853	楕円形	53×33×26	9号掘立柱建物区画内。
745	第136・148図	065、-852	楕円形	32×25×30	9号掘立柱建物区画内。
746	第136・148・185図	066、-851	楕円形	29×23×20	9号掘立柱建物区画内。4号畠と重複。
747	第132図	082・083、-916	楕円形	49×32×33・25	ピット2基の重複。5号掘立柱建物P9と重複。
748	第136・148・185図	066、-853・854	楕円形	41×35×31	9号掘立柱建物区画内でP10に近接、4号畠と重複。
749	第136・148・185図	067、-852	円形	20×19×18	9号掘立柱建物区画内。極小ピット。4号畠と重複。
750	第136・148・185図	068・069、-852	円形	49×44×61	9号掘立柱建物P2、4号畠と重複。
751	第136・148・185図	068・069、-851	円形	51×47×27	9号掘立柱建物P2、4号畠と重複。

第三章 調査の内容

No.	平面図	位置	形状	長軸×短軸×深さ	備考
752	第148・185図	069・070、-851・852	双円形	43×29×29・14	2基の小ピット。
753	第148・185図	070、-851	円形	35×31×29	
754	第148・185図	069、-850	円形	23×22×19	
755	第148・185図	069・070、-849	楕円形	39×33×16	
756	第148・185図	071・072、-851・852	円形	49×40×26	
757	第148図	076、-846	円形	23×19×12	
758	第148図	075、-846	円形	22×20×33	底面狭く杭打設痕状。
759	第148図	075、-847	円形	50×49×73	
760	第148図	075、-846	円形	41×39×43	
761	第148図	075、-845	円形	29×26×10	
762	第148図	074、-847	円形	24×23×29	
763	第148・174図	073、-842	円形	31×30×42	底面狭く杭打設痕状。
764	第141・148図	072、-844	円形	25×23×22	
765	第148図	072、-848	円形	24×23×20	766号ピットと近接。
766	第148図	071・072、-848	円形	25×23×30	北側の765号ピットと近接。
767	第141・148図	071、-846・847	円形	29×28×30	
768	第141・148図	070・071、-846	円形	26×23×31	2号柱穴列P 4に近接。
769	第141・148図	071、-845	楕円形	33×28×9	2号柱穴列柱筋に近接。
770	第141・148図	070・071、-845	円形	21×19×13	2号柱穴列柱筋上。
771	第141・148図	070、-846	円形	43×(31)×11	2号柱穴列P 4と重複。
772	第141・148図	069、-844	円形	18×17×11	極小ピットで杭打設痕状。
773	第148図	068・069、-842	円形	35×31×44・25	二段底状。上層に小礫。
774	第148図	065、-844	円形	14×13×21	極小ピットで杭打設痕。周辺は小ピットが多い。
775	第148図	065、-843	円形	18×16×13	
776	第148図	064・065、-843	円形	14×13×12	極小ピットで杭打設痕状。
777	第148図	064、-848	円形	22×20×17	63号住居南東隅に近接。
778	第148図	062・063、-848・849	円形	24×23×19	
779	第148図	064、-844・845	円形	19×17×16	
780	第148図	063・064、-844	楕円形	36×27×25	
781	第148図	063、-842・843	円形	25×23×15	91号土坑北壁に近接。
782	第176図	078、-893・894	円形	29×28×10	
783	第148図	062、-845	円形	17×15×9	
784	第148図	062、-845	円形	18×16×12	
785	第148図	061、-842・843	楕円形	36×27×7	南端は調査区域外。
786	第172図	085・086、-823	楕円形	48×39×16	
787	第172図	083・084、-824	円形	46×43×17	
788	第172図	083・084、-823	円形	37×33×26	
789	第172図	084、-822	円形	39×35×20	
790	第172図	081、-826	円形	56×51×48	
791	第172図	081、-825	円形	34×33×16	
792	第172図	079・080、-821	楕円形	59×53×14	10号溝西壁と重複。
793	第172図	078、-823	楕円形か	(25)×24×8	33号住居内。
794	第172図	077・078、-822・823	不整楕円形	82×65×19	底面狭い。33号住居・10号溝西壁と重複。
795	第172図	077・078、-823	楕円形	39×22×11	33号住居内か。
796	第172図	075、-827	円形	29×26×18	トレンチにより上方4cm分欠失。
797	第172図	074・075、-827	円形	38×34×29	トレンチにより上方5cm分欠失。
798	第172図	075、-825	円形	28×26×12	トレンチにより上方5cm分欠失。
799	第172図	074・075、-825	円形	29×24×12	トレンチにより上方6cm分欠失。
800	第172図	074、-826	円形	32×28×10	
801	第172図	072・073、-826	円形	29×27×15	32号住居煙道先端部に接す。10号溝と重複。
802	第172図	070、-827	楕円形	39×33×14	10号溝西壁と重複。
803	第172図	070、-830・831	円形	44×40×19	
804	第172図	068・069、-831	円形	24×22×18	北西側の19号ピットに接す。
805	第172図	068、-832	楕円形	26×20×14	
806	第172図	066、-830	楕円形	33×29×15	
807	第172図	065、-828	楕円形	31×26×44	
808	第172図	065、-826	楕円形	26×21×25	
809	第172図	064、-826	円形	27×25×31	
810	第165図	119・120、-000	楕円形	64×42×10	
811	第166図	093、-002	円形	21×19×6	極小ピットで杭打設痕状だが、深度乏しく不明瞭。
812	第166図	092、-002	楕円形	19×13×7	極小ピットで杭打設痕状だが、深度乏しく不明瞭。
813	第166図	092、-002	円形	18×17×8	極小ピットで杭打設痕状だが、深度乏しく不明瞭。
814	第166図	091・092、-001	不整隅丸方形	53×39×19	土坑状。
815	第167図	078、-957・958	楕円形	44×41×12	
816	第167図	076・077、-957	楕円形	50×45×14	
817	第133・169図	085、-916	円形	28×25×19	
818	第147図	085、-900	円形	40×38×26	40号ピットと重複。
819	第132・169図	085、-915	円形	20×17×9	8号溝北側延長線上。
820	第132・169図	085、-915	円形	28×24×8	8号溝北端に接す。5号掘立柱建物区画内。

No.	平面図	位置	形状	長軸×短軸×深さ	備考
821	第169図	083、-917・918	円形	41×40×22	
822	第169図	080、-918	楕円形	40×31×26	8号溝西壁に重複。
823	第169図	080、-916	楕円形	37×31×28	底面上10cmに礎盤石状の平坦な礫を据える。30号住居西壁と重複。
824	第169図	080、-916・917	楕円形	35×27×32	中央に柱痕状の深さ12cmの円形窪み。
825	第169図	080、-919・920	円形	30×25×11	
826	第169図	079・080、-920	円形	49×47×20	
827	第169図	079、-919・920	円形	41×39×20	
828	第169図	079、-919・920	円形	33×27×16	
829	第169図	078、-918・919	円形	37×33×20	底面狭い。8号溝と重複。
830	第169図	078、-918	円形	27×25×14	8号溝東壁に接す。
831	第169図	077、-919	楕円形	45×35×27	8号溝西壁と重複。
832	第169図	077、-919・920	不整楕円形	30×27×27	8号溝と重複。
833	第169図	077、-920	不整楕円形	49×33×28	8号溝西壁と重複。
834	第169図	076、-920	円形	24×22×14	8号溝西壁と重複。
835	第169図	076、-920	円形	30×28×8	北東側の834号土坑に近接。
836	第169図	075・076、-920	円形	44×40×25	8号溝と重複。
837	第169図	075、-919・920	円形	37×34×-	8号溝間に位置。南側392号ピットに接す。
838	第169図	078、-916	円形	27×26×15	
839	第169図	077・078、-915	楕円形	35×29×23	中央に杭打設痕状の深さ9cmの窪み。
840	第169図	077、-915・916	楕円形	55×43×26	841号ピットと重複。
841	第169図	077、-915	円形か	32×[14]×21	840・842号ピットと重複。
842	第169図	077、-915	楕円形	40×31×29	841号ピットと重複。
843	第169図	076、-917・918	円形	23×19×22	
844	第169図	076、-917	円形	41×40×14	底面上6cmに礎盤石状の平坦な礫を据える。28号住居北西隅と重複。
845	第169図	075、-918	楕円形	35×25×18	846号ピットに近接。
846	第169図	075、-917・918	不整楕円形	35×27×17	845号ピットに近接。847号ピットに接す。
847	第169図	075、-917	不整楕円形	41×33×8	28号住居西壁に近接。846号ピットに接す。
848	第169図	078・079、-920	円形	30×26×16	
849	第169図	078、-920・921	円形	34×31×16	
850	第129図	086・、-918・919	楕円形	41×34×22	851号ピットと重複。
851	第129図	086・、-918	円形か	29×[18]×12	850号ピット重複の西半不明。
852	第174図	086・087、-842・843	楕円形	31×25×17	
853	第174図	085、086-844	円形	35×31×16	
854	第174図	085、-843	円形	29×27×30	東側に底面狭い杭打設痕状の窪み。
855	第174図	086、-840	円形	25×23×13	13号溝西壁と重複。
856	第174図	085、-840	円形	27×26×16	857号ピットに近接。
857	第174図	085、-840	円形	29×27×15	北側の856号ピットに近接。
858	第174図	085、-839	円形	23×20×11	13号溝東壁に接す。
859	第174図	087、-838・839	楕円形	27×19×19	
860	第174図	083、-843	円形	51×45×22	
861	第174図	083、-842	楕円形	34×29×12	
862	第174図	083・084、-840	円形	27×23×17	
863	第174図	083・084、-839	円形	25×22×19	13号溝西壁とわずかに重複。
864	第174図	083、-837	円形	26×25×16	
865	第174図	082・083、-839	円形	29×27×28	13号溝西壁と重複。
866	第174図	079、-841	円形	23×21×12	
867	第174図	079、-841	円形	24×23×18	
868	第174図	079、-840・841	円形	33×29×31	
869	第174図	079・080、-839・840	円形	55×49×27	二段底状で中央に深さ6cmの窪み。870号ピットと重複。
870	第174図	079・080、-839	円形	40×36×17	869号ピットと重複。
871	第174図	080、-839	楕円形	29×23×16	北西側の28号ピットに接す。
872	第174図	079、-839・840	円形	22×21×22	
873	第129図	083、-926	楕円形	31×25×38	2号掘立柱建物P6に重複。
874	第177図	087、-872	円形	26×23×27	
875	第177図	086・087、-872	円形	29×25×10	
876	第177図	084・085、-872	楕円形	33×27×18	
877	第177図	083・084、-872	円形	32×29×14	
878	第177図	083、-872	楕円形	35×24×27	底面狭い。
879	第179図	078・079、-879・880	円形	31×29×13	
880	第179図	075・076、-880・881	円形	52×50×17	南側に深さ9cmの円形柱痕状の窪み。
881	第179図	076、-879	円形	22×21×11	小ピットで底面狭く杭打設痕状。
882	第179図	076、-878	円形	26×21×11	
883	第179図	074、-879・880	円形	33×32×8	
884	第179図	072、-880	円形	36×33×34	
885	第179図	069・070、-872	円形	54×52×33	22B号溝西壁と重複。
886	第179図	067・068、-872	円形か	25×[13]×35	底面狭く杭打設痕状。トレンチにより南半を欠失。
887	第181図	062、-006	円形	27×26×9	
888	第181図	059、-006	円形	23×21×7	
889	第181図	059、-006	円形	28×27×10	底面狭い。

第三章 調査の内容

No.	平面図	位置	形状	長軸×短軸×深さ	備考
890	第181図	059、-006・007	円形	21×19×13	
891	第182図	081、-850・851	円形	25×19×23	
892	第182図	080・081、-850・851	円形	23×19×16	底面狭い。
893	第182図	081、-849・850	楕円形	31×24×31	
894	第182図	080、-850	円形	25×25×17	底面狭く杭打設痕状。
895	第182図	081、-849	円形	27×25×19	トレンチにより上半10cm分を欠く。
896	第182図	080、-849	円形	25×21×22	トレンチにより上半12cm分を欠く。
897	第182図	081、-847・848	円形	30×28×21	底面中央に深さ9cmの杭打設痕状の窪み。1号畝畝間①と重複。
898	第182図	081、-844	円形	33×31×25	南側に深さ6cmの円形柱痕状の窪み。
899	第182図	080・081、-843・844	円形	30×29×17	
900	第182図	079、-843・844	円形	27×25×37	
901	第182図	078・079、-843・844	円形	33×30×24	
902	第182図	078、-845	円形	33×29×34	
903	第182図	079、-841	円形	23×20×12	
904	第129図	085、-921	円形	24×23×10	2号掘立柱建物区画内。
905	第174図	084・085、-839	楕円形	25×24×24	13号溝と重複。
906	第129図	082、-922	円形	27×25×25	2号掘立柱建物区画内。
907	第129図	087、-920・921	円形	24×22×36	
908	第129図	088、-927・928	円形	34×31×53	909号ピットと重複。
909	第129図	087・088、-927・928	円形	21×20×15	908号ピットと重複。
910	第129図	087、-925	円形	32×28×11	
911	第129図	087、-924・925	円形	37×35×37	二段底で中央は9cm窪む。46号ピットと重複。
912	第172図	078、-823・824	楕円形	23×19×17	小ピット。33号住居内。
913	第129図	083、-926	円形	31×29×31	2号掘立柱建物南柱筋上。北側へ向かって傾斜して穿たれる。
914	第129図	082・083、-624・925	円形	24×21×13	2号掘立柱建物南柱筋上。
915	第129図	082、-924	円形	33×30×19	南側の50号ピットに近接。
916	第129図	083、-924	円形	31×31×20	2号掘立柱建物区画内。
917	第129図	084、-923	円形	23×21×11	2号掘立柱建物区画内。
918	第129図	084、-924	円形	27×26×24	2号掘立柱建物区画内。
919	第129図	085、-923・924	円形	51×49×14	2号掘立柱建物区画内。
920	第129図	087、-923	円形	28×26×13	
921	第129図	087、-923	円形	30×26×38	底面狭い。922号ピットと重複。
922	第129図	087、-923	楕円形	45×(40)×14・38	ピット2基の重複か。921号ピットと重複。
923	第129図	086、-922	楕円形	38×31×18	2号掘立柱建物北柱筋に近接。
924	第129図	086、-922	円形	27×25×19	
925	第129図	086、-922	円形	32×30×40	北側に深さ14cmの柱痕状の窪み。
926	第129図	082、-926	円形	32×25×17	底面上7cmに礎盤石状の礎を据える。
927	第172図	077、-823・824	楕円形	29×23×25	33号住居内。
928	第174図	078、-835・836	楕円形	35×25×30	
929	第174図	076・077、-836・837	楕円形	32×28×15	
930	第174図	076、-836	円形	29×27×16	
931	第174図	070、-839・840	楕円形	33×31×11	
932	第174図	068、-841・842	楕円形	67×44×11	12C号溝南端に近接。
933	第175図	073・074、-892	円形	25×24×20	
934	第175図	076、-888	円形	31×30×26	14B号溝西壁と重複。
935	第179図	064、-881	円形	31×29×11	
936	第174図	082・083、-840	楕円形	38×27×33	33・37号土坑と重複。底面狭い。
937	第174図	082・183、-839・840	楕円形	30×23×18・7	37号土坑と重複。重複する2基のピットの可能性。
938	第174図	081、-840	円形	37×33×37・20	37号土坑と重複。重複する2基のピットの可能性。
939	第174図	081、-841	円形	37×35×16	37号土坑南側に接している。
940		080、-929	円形	36×32×21	2号掘立柱建物西柱筋を南へ延長した約2.7mに位置。
941		088、-933・934	円形	32×31×38	底面狭いが深度に富む。東3区北端。

6 土坑

(第150～162図 PL.33～38、58 遺物観察表246頁)

本遺跡で調査した遺構のうち、土坑として扱ったのは95基である。分布には偏りが著しく、東2区以西で希薄になっている。東調査区では東2区に単独の1基43号土坑を最西隅の遺構としている。西調査区は22号・41号・42号土坑3基のみである。残る91基が東3区以東に集中している。本報告ではこれらを一括して第150～160図に示し、個別の内容について表6(本文187～189頁)に示した。

埋没土の記載については図中に以下のような土坑共通のアルファベット大文字の土層番号をつけ、付帯事項を算用数字で、混入物についてアルファベット小文字で追記した。それ以外の土層については個別の土坑に記した。

(基本分類)

- A : にぶい褐7.5YR5/3周辺色調の粘性土。
- B : 褐7.5YR4/3周辺色調の粘性土。
- C : 灰褐7.5YR4/2周辺色調の弱粘性土。
- D : 暗褐7.5YR3/4周辺色調の弱粘性土。
- E : 黒褐7.5YR2/2周辺色調の弱粘性土。
- F : にぶい赤褐5YR5/4周辺色調の非粘性土。
- G : にぶい黄褐10YR5/4周辺色調の粘性土。
- H : 暗赤褐5YR4/3周辺色調の非粘性土。

砂質土の場合、記号に'を付けた。

(付帯事項)

- 1 : 締まり強い層
- 2 : 締まりやや強い層
- 3 : 締まりやや弱い層
- 4 : 粒状の堆積土

(混入物)

- a : テフラ(As-A)
- b : テフラ(As-B)
- c : テフラ(As-C)
- d : 不明軽石
- e : ローム粒 f : ロームブロック
- g : 粘土小ブロック(径5mm大)
- h : 白色粘性土ブロック(径20mm大)
- i : 褐色粘性土ブロック(径20mm大)

j : 細礫(径3mm大)

k : 小礫(径10mm大)

l : 焼土粒 m : 焼土ブロック

n : 炭化物粒

o : 不揃いの炭化材

混入物がわずかな場合、記号に'を付けた。

混入物が多い場合、記号にアンダーバーを付けた。

アルファベット小文字については一つの層に複数の記載となる場合がある。

一覧表には、個別土坑の位置・計測値のほか、下記の形状分類、その他説明を記した。

本遺跡の土坑を平面形態から不整な形状のものも含めて、円形・楕円形・長方形・方形・不定形に大別しアラビア数字で示した。さらに以下のように規模を算用数字で示し、両者を併せて分類した。

I類 : 円形土坑。不整な5基を含め23基の土坑をこの類とした。規模を概観すると直径75～90cmおよび105～120cmに集中が見られるので、直径131cm以上の極大型をI-1類、直径101～130cmの大型をI-2類、直径70～99cmの中型をI-3類、直径69cm以下の小型をI-4類とした。

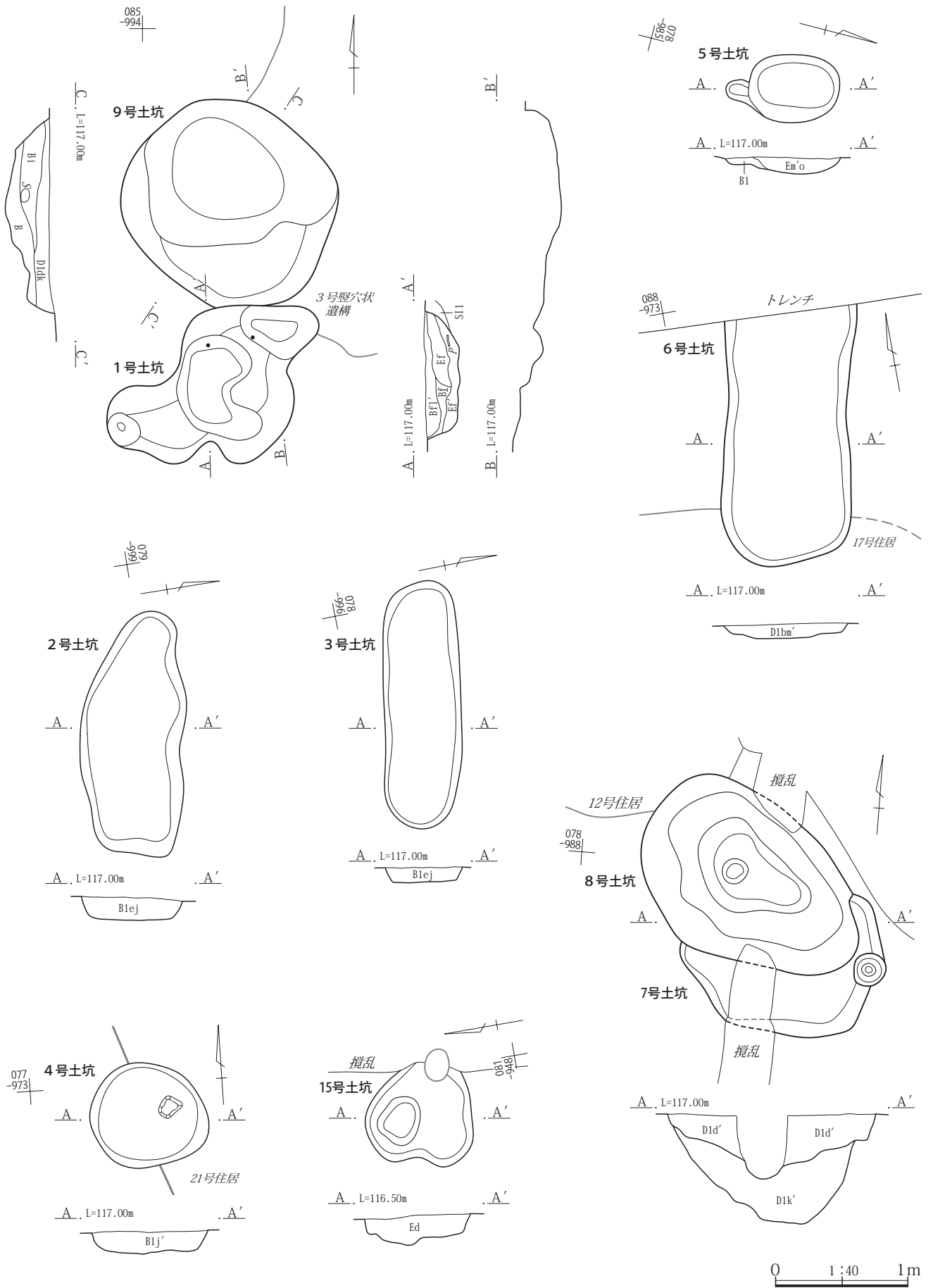
II類 : 長軸が短軸の1.2倍以上ある楕円形土坑。13基をこの類に含めたが大半は不整な形状である。この類では規模を概観しても大きな集中が見られず、長軸が120cm前後と180cm前後に小さな集中が見られた。これより長軸151～200cmの大型をII-1類、長軸101cmから150cmの中型をII-2類、長軸100cm以下の小型をII-3類とした。

III類 : 長軸が短軸の1.3倍以上ある長方形土坑。全土坑中、最も数が多く、不整な7基を含め45基をこの類とした。この類には直軸130cm前後と直軸190cm前後に大きな集中が見られた。また直軸150cmを境に大きさが二分できそうであった。これより長軸241cm以上の極大型をIII-1類、長軸181～240cmの大型をIII-2類、長軸151～180cmの中型をIII-3類、長軸121～150cmの小型をIII-4類、長軸120cm以下の極小型をIII-5類とした。

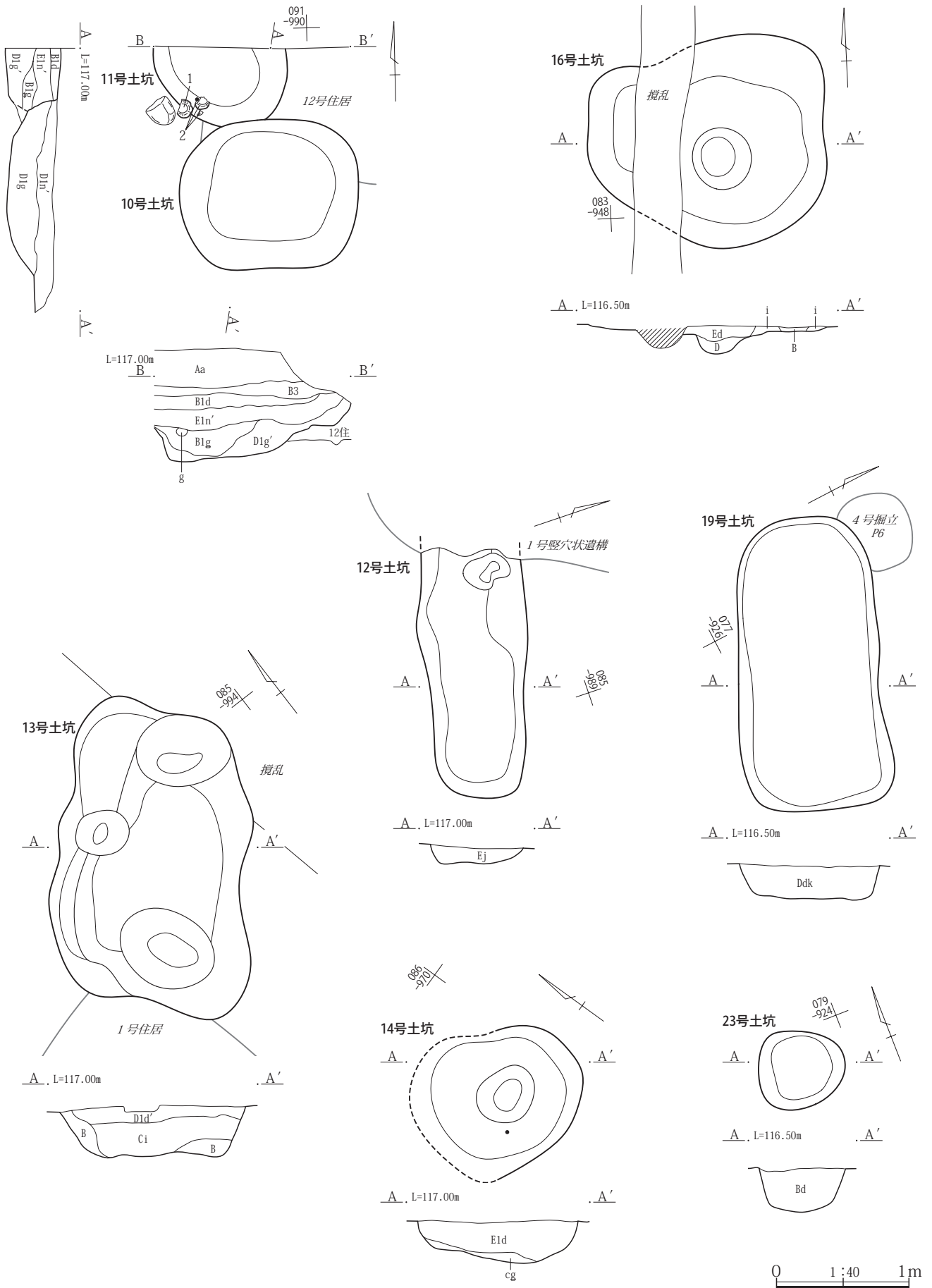
IV類 : 長軸が短軸の1.3倍以下の方形土坑。7基が該当する。このうち93号土坑のみ長軸68cmと極小型で、他は長軸123～170cmの規模でIII類に充てれば中型から小型に相当する規模であった。

V類 : I～IV類に含まれない不定形土坑をこの類とし

第三章 調査の内容

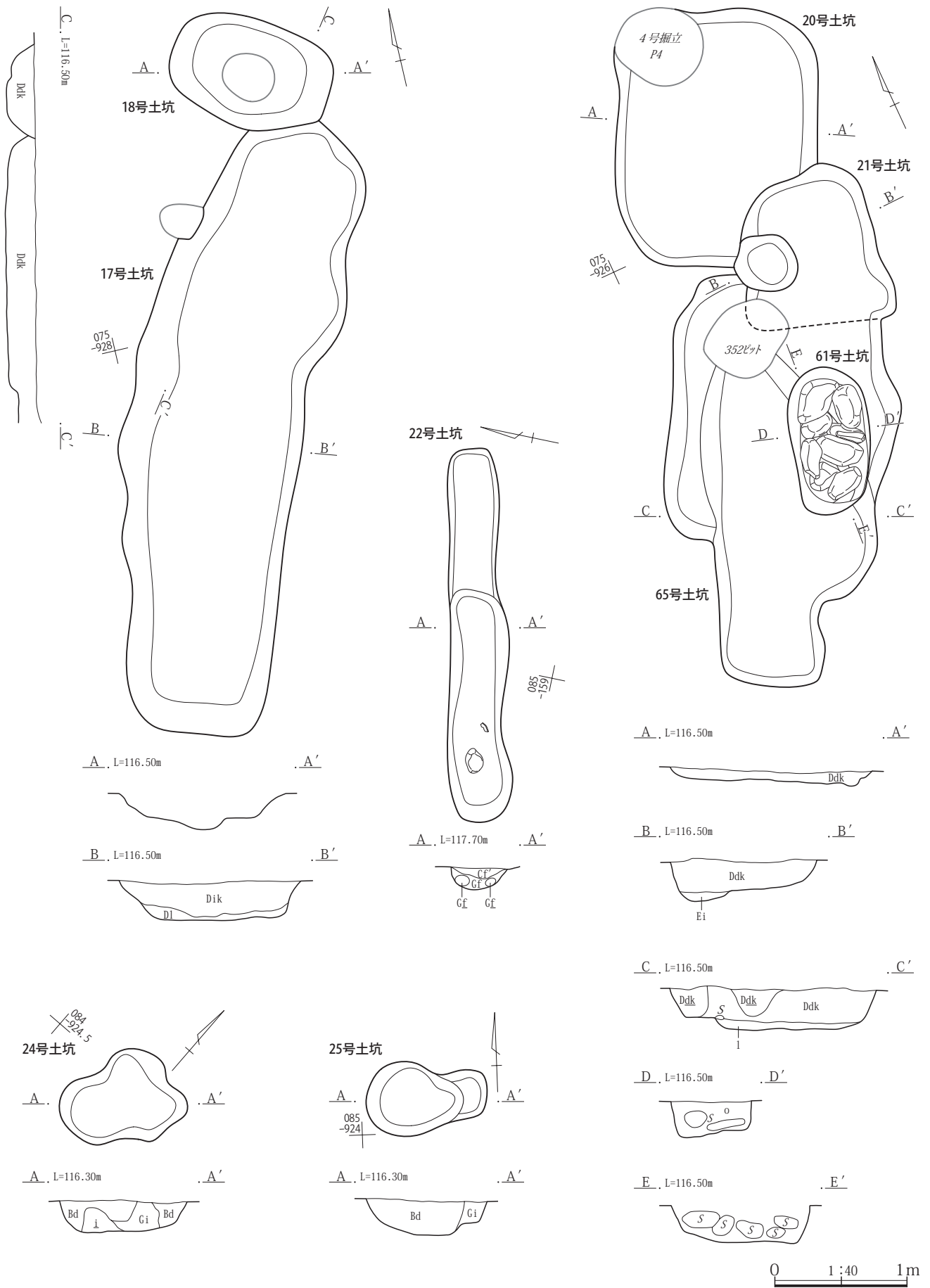


第150図 土坑(1~9・15号)

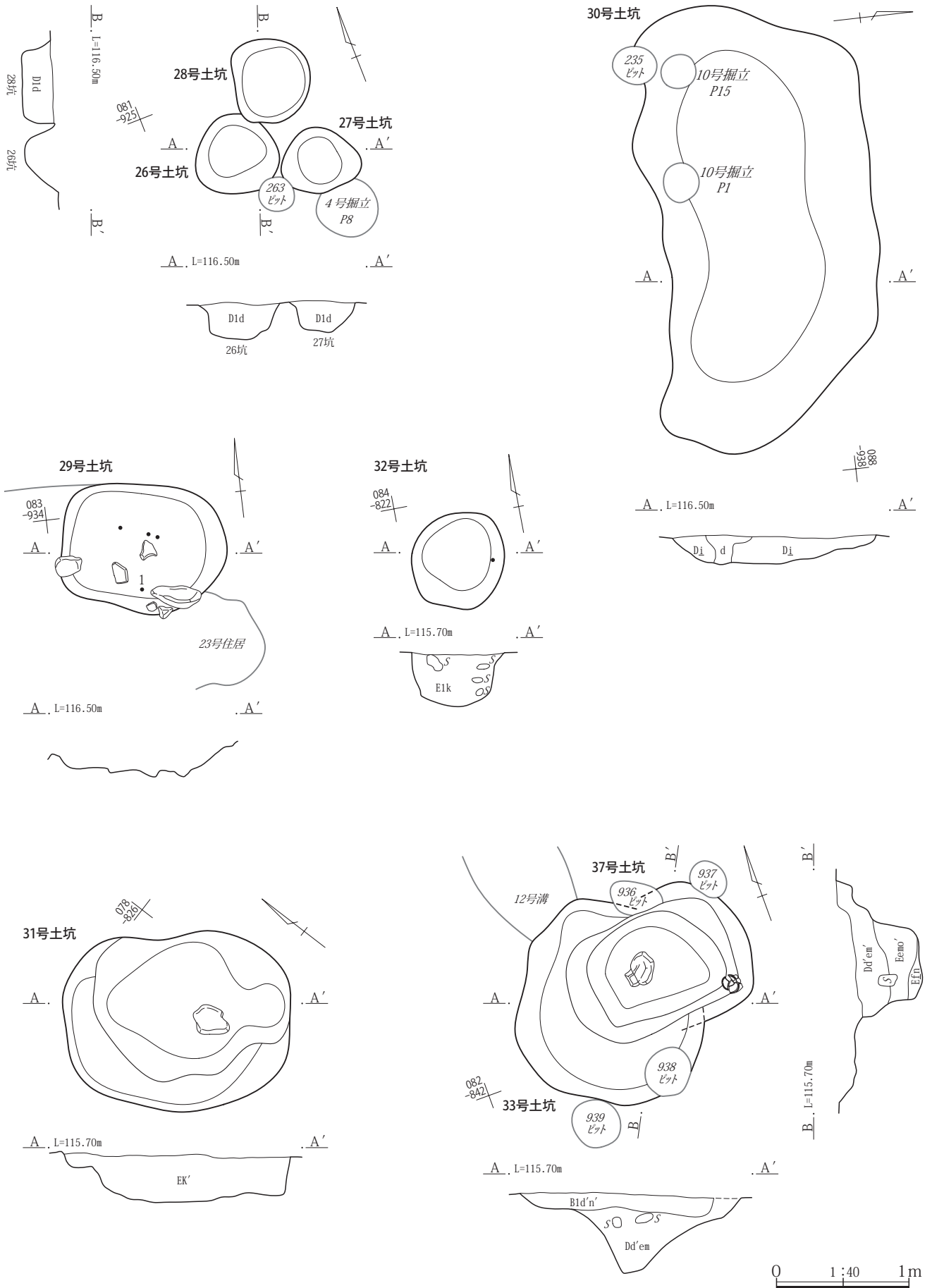


第151图 土坑(10~14·16·19·23号)

第三章 調査の内容

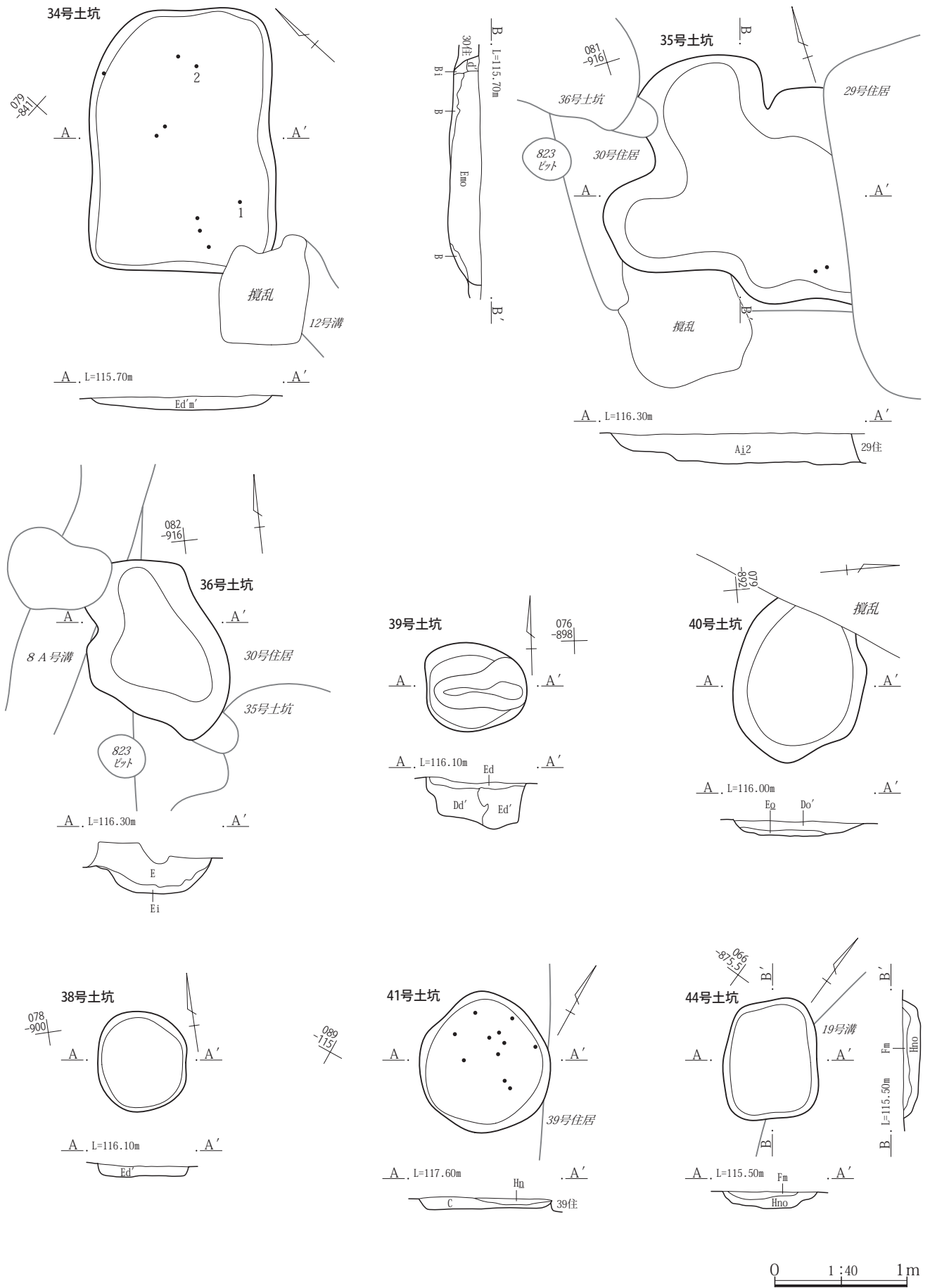


第152図 土坑(17・18・20～22・24・25・61・65号)

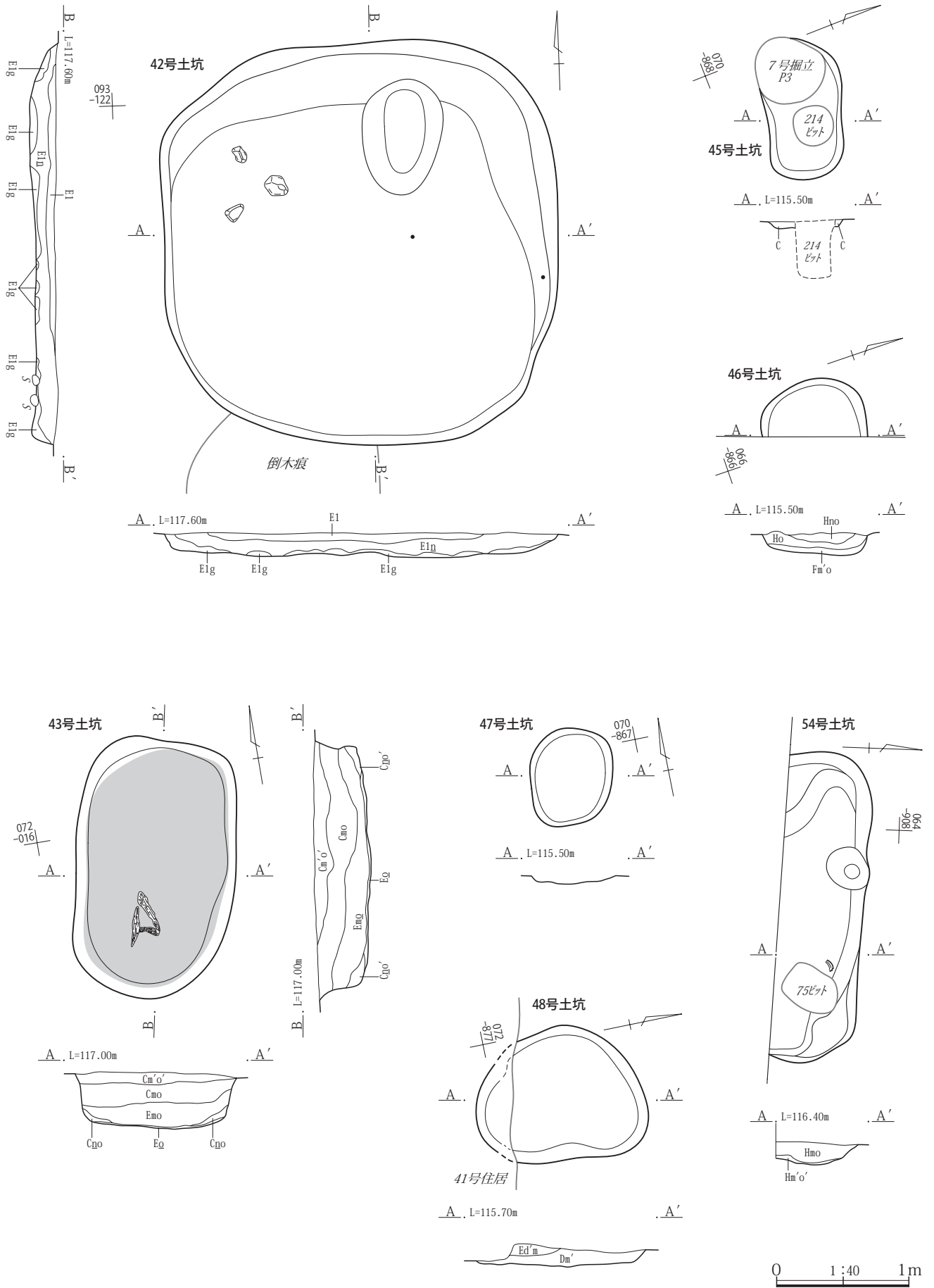


第153図 土坑(26~33・37号)

第三章 調査の内容

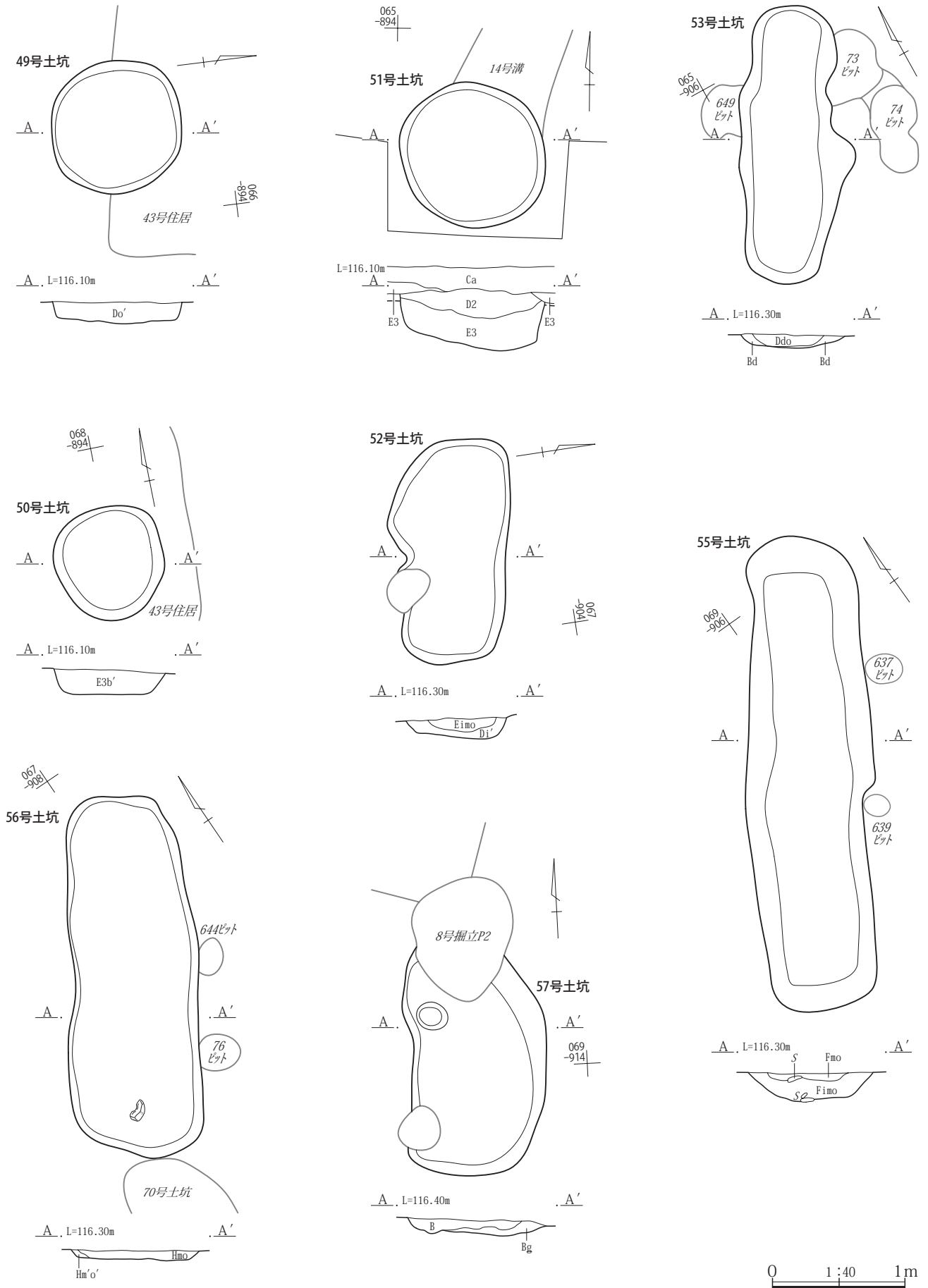


第154図 土坑(34~36・38~41・44号)

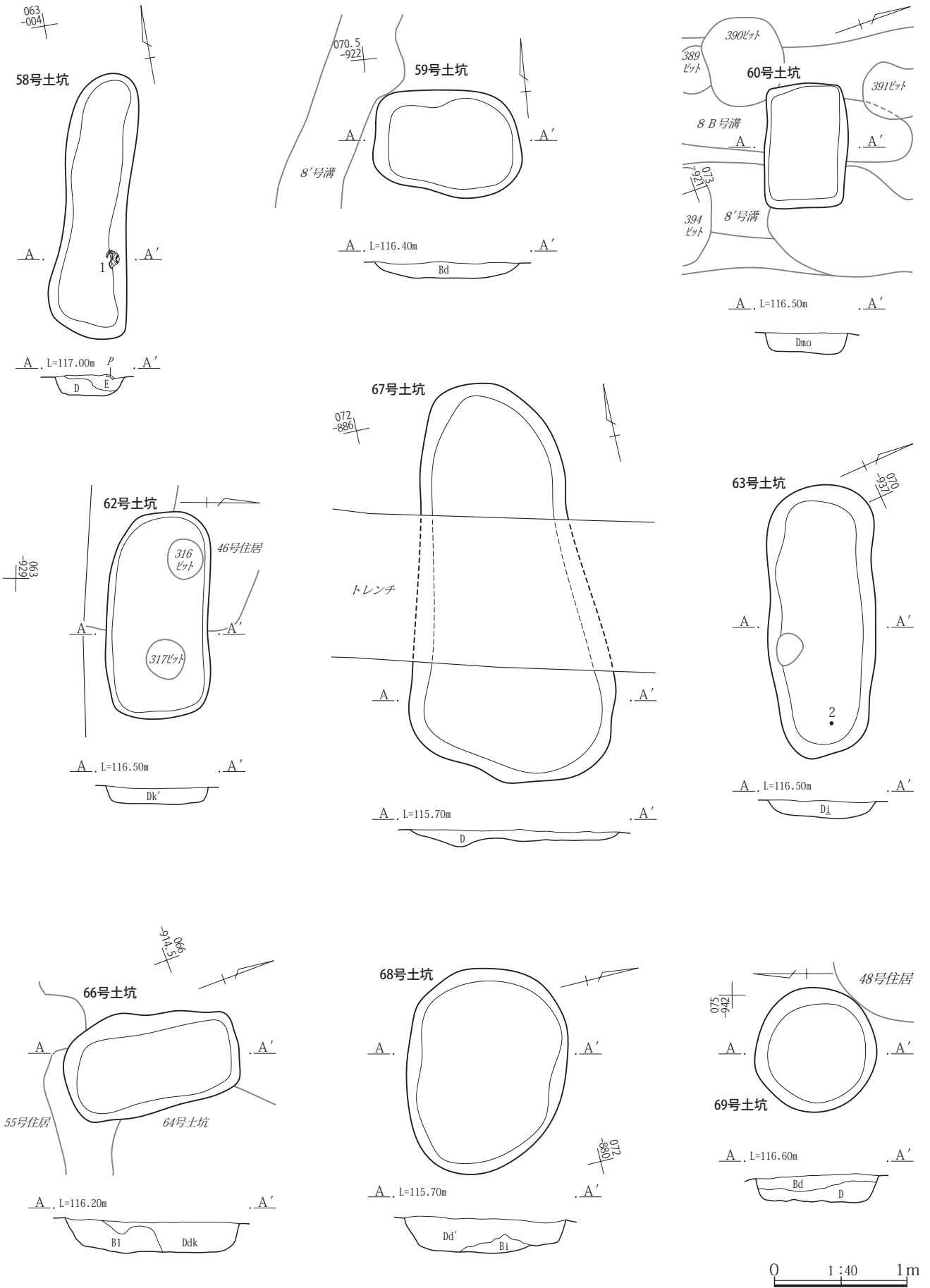


第155图 土坑(42·43·45~48·54号)

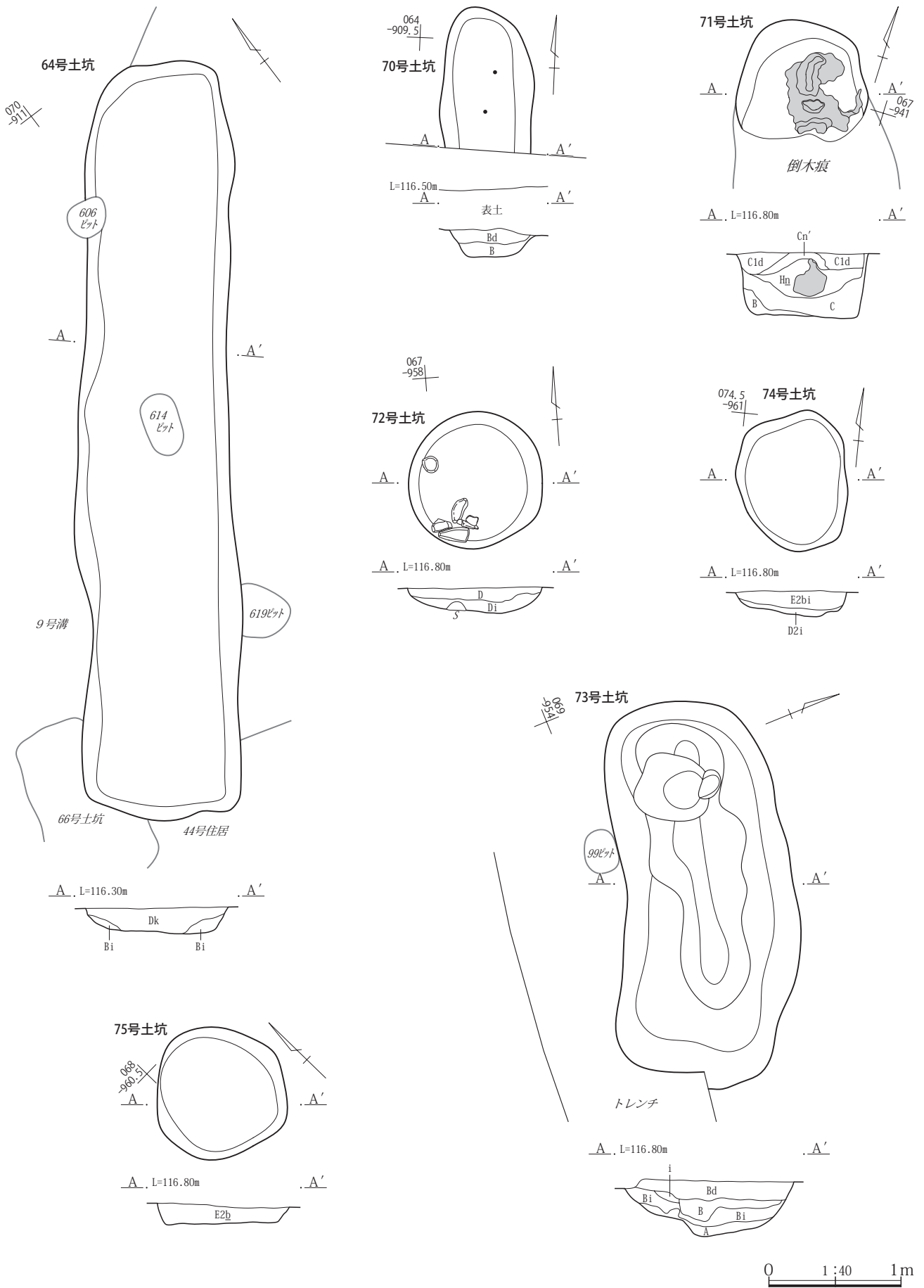
第三章 調査の内容



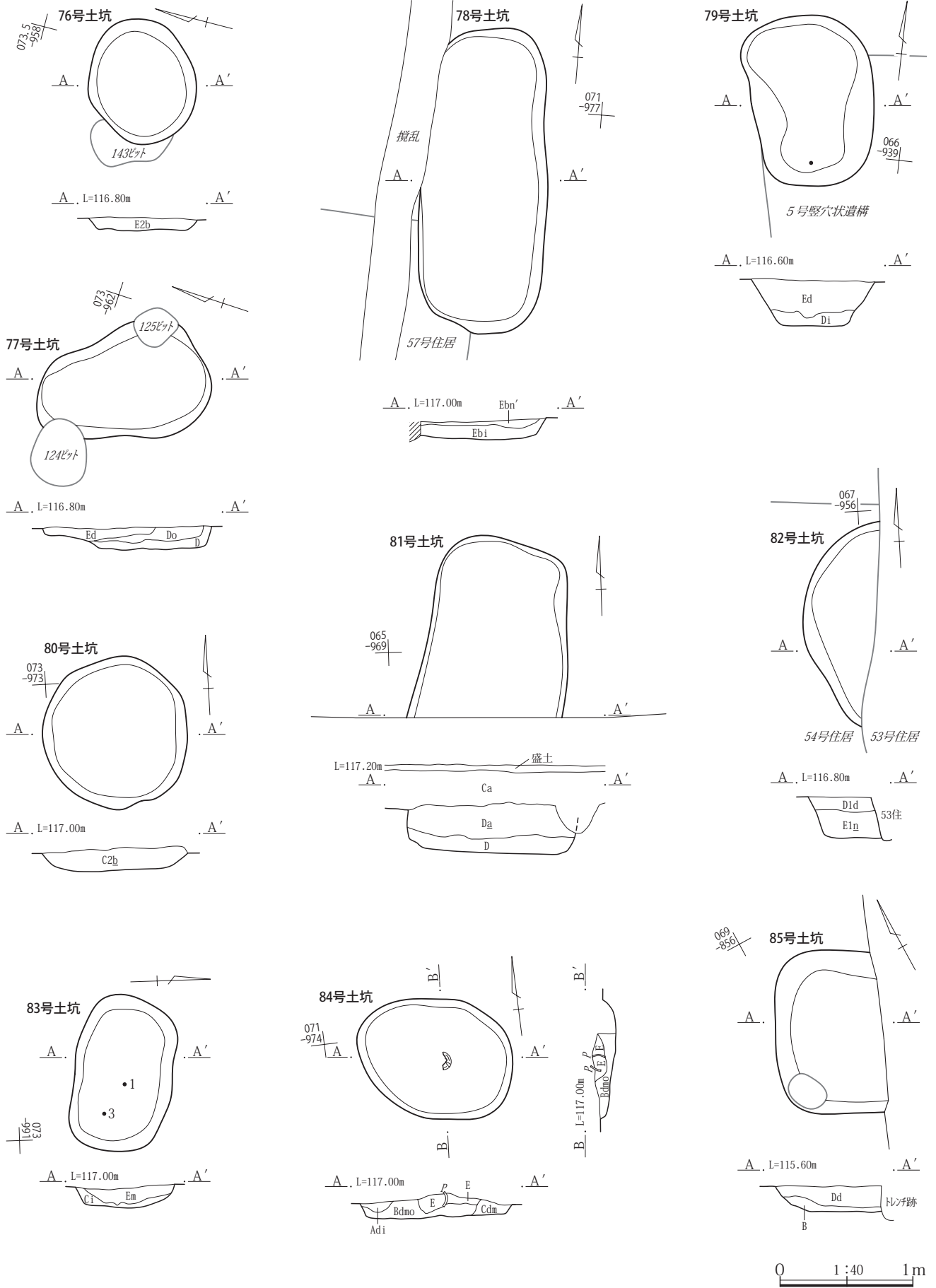
第156図 土坑(49~53・55~57号)



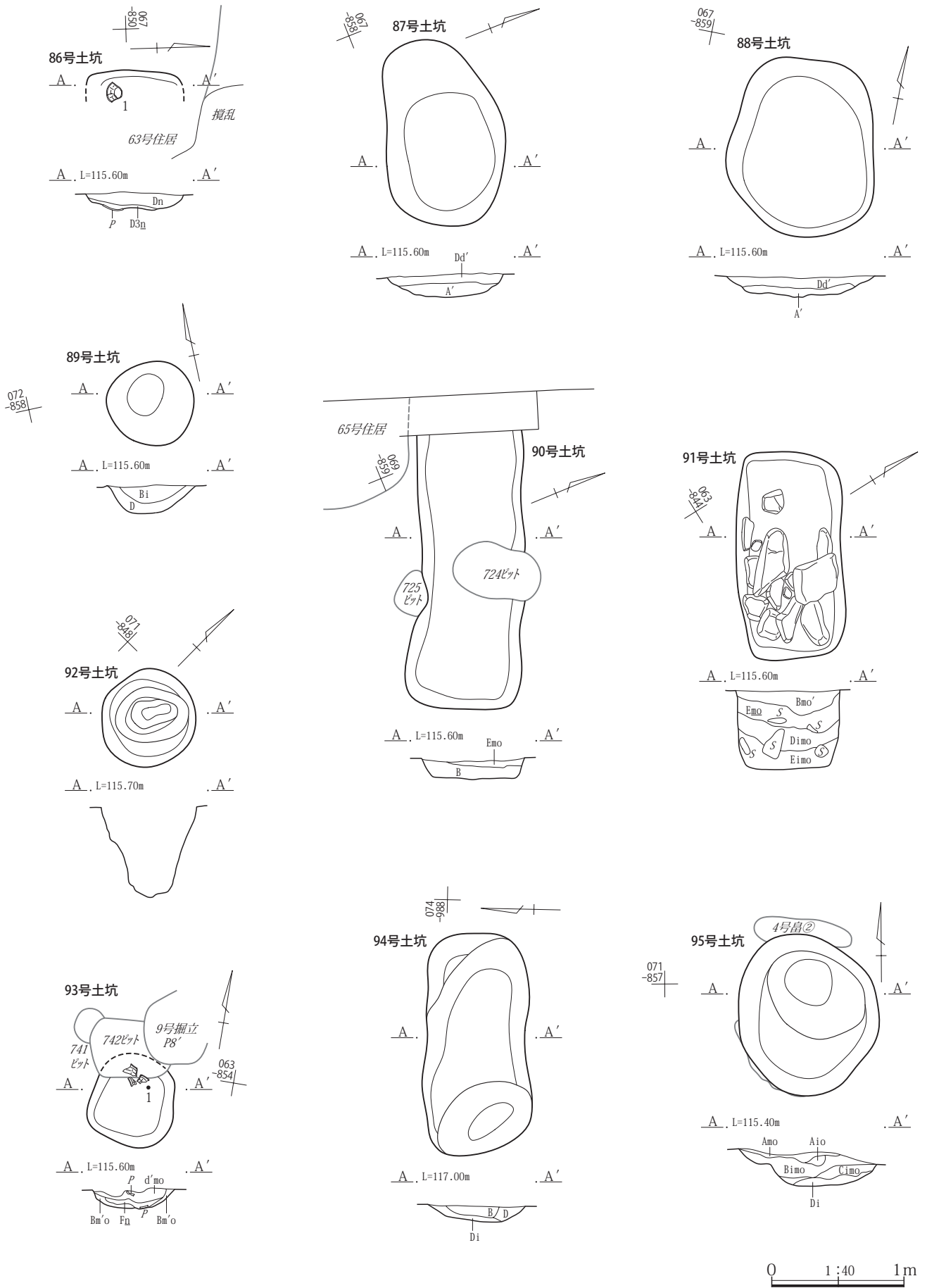
第157図 土坑(58~60・62・63・66~69号)



第158図 土坑(64・70~75号)

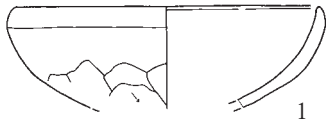


第159図 土坑(76~85号)

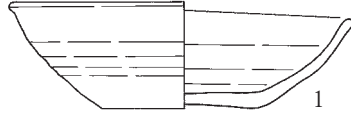


第160図 土坑(86~95号)

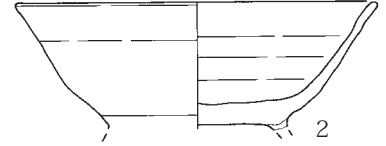
10号土坑



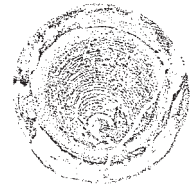
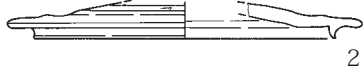
11号土坑



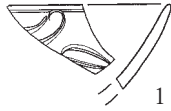
11号土坑



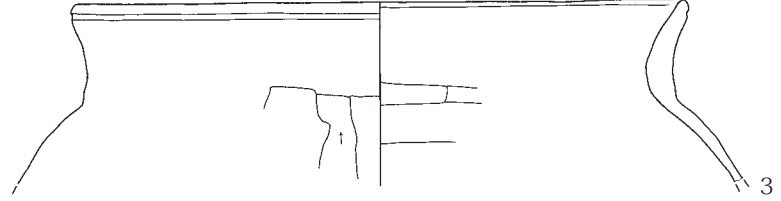
10号土坑



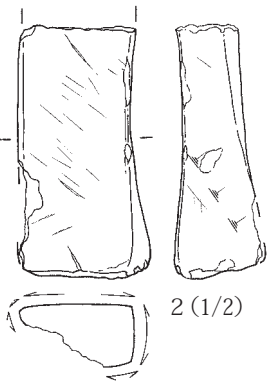
17号土坑



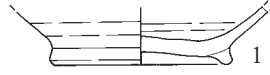
11号土坑



17号土坑



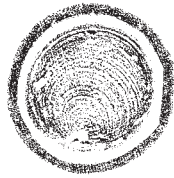
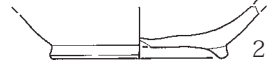
29号土坑



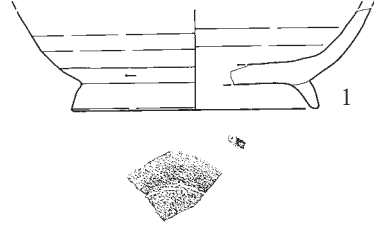
30号土坑



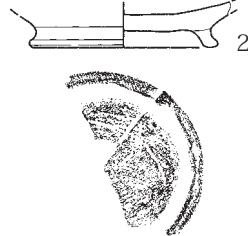
30号土坑



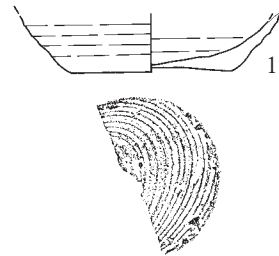
34号土坑



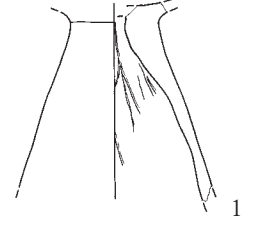
34号土坑



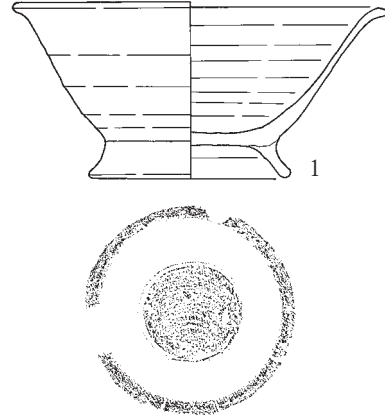
35号土坑



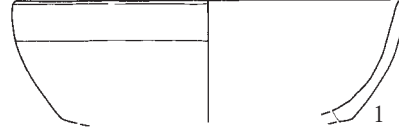
42号土坑



58号土坑



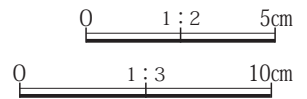
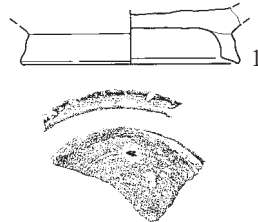
63号土坑



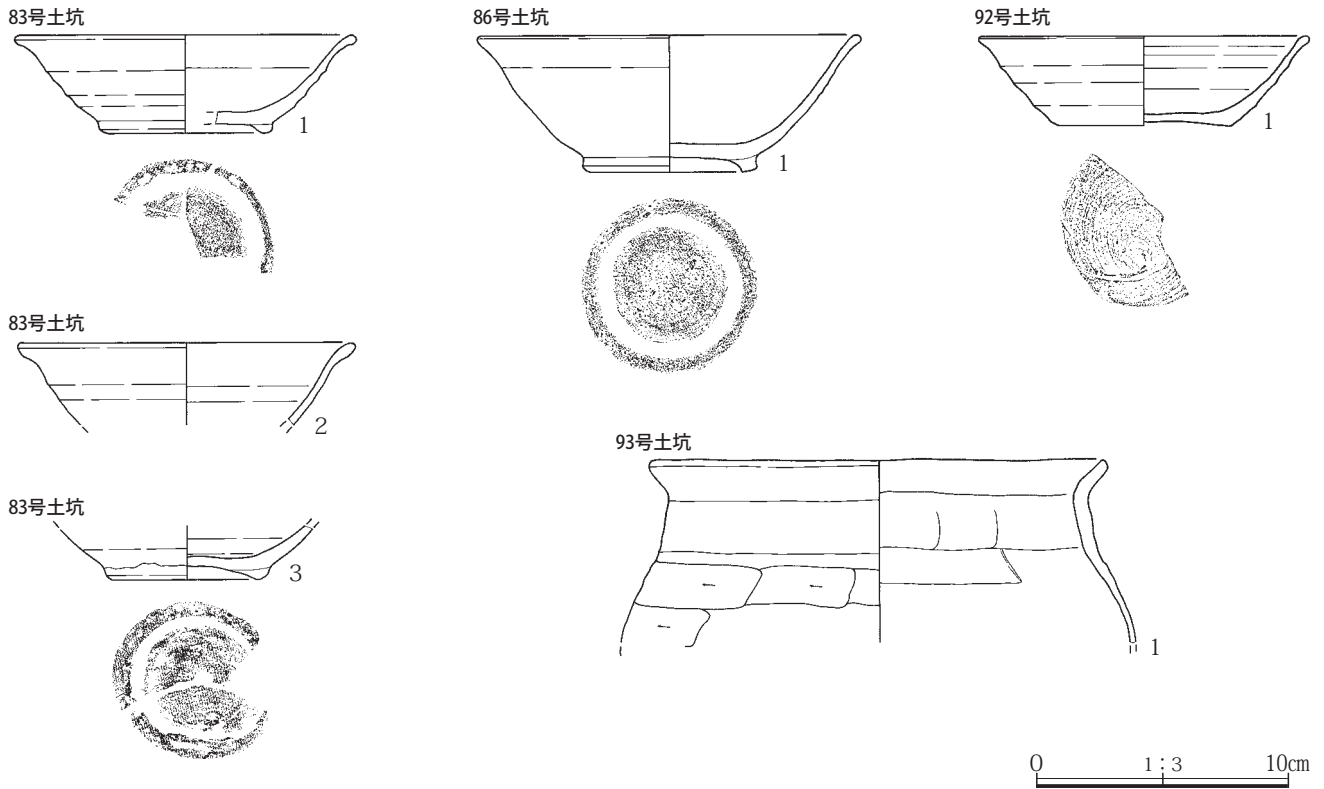
63号土坑



69号土坑



第161图 土坑出土遺物(1)



第162図 土坑出土遺物(2)

た。7基が該当する。

埋没土から時期が推定できる土坑に、As-Bの混入から中世以降と推定できる72・75・76・80・81号土坑がある。このうち72・76・80の3基がI-2類に含まれている。

重複住居から時期推定できる土坑に、41号住居に前出する48号土坑と53号住居に前出する82号土坑の2基である。41号住居は9世紀、53号住居は8世紀と想定され、両土坑ともI類(円形)の土坑である。

図示できた遺物は15基の土坑から出土した24点で、第161・162図に一括して示した。奈良・平安時代の遺物がほとんどだが、42号土坑に古墳時代前期、10号土坑に古墳時代末の土器、17号土坑に中世の舶載磁器が見られる。西調査区にある42号土坑は竪穴状遺構に分類することも可能な形状の遺構である。10号土坑は7世紀末から8世紀頃の12号住居に後出する遺構で、出土遺物はこの住居からの混入品と思われる。他に11・29・69号土坑の3基の遺物が重複または近接する住居からの混入の可能性がある。前述6基を除いた土坑9基のうち、30・34・58・63・83・86号の6基がⅢ類(長方形)の土坑で、V類(不定形)とした35号土坑も複数のⅢ類土坑が重複した遺構

の可能性がある。出土遺物が確実にそれぞれの土坑にともなうものと確定できないが、古代の土坑にⅢ類の土坑が多くなる見通しを立てられよう。他にI類・Ⅳ類(方形)土坑が1基ずつ含まれている。反面、中世以降に多いⅡ類(楕円形)土坑は見られなかった。

表6 土坑一覧(第150~162図 PL.33~38・58 遺物観察表246頁) (cm)

No.	挿図	位置(X、-Y)	長軸×短軸×深さ	埋没土と遺物	備考
	写真	形状(分類)	軸方向		
1	第150図 PL.33-①	081・082、-992~994 不定形(V類。楕円形土坑 の重複か)	178×109×12~23 N-60°E	出土土器は平安期土師器11片、須恵器7 片。	3基以上の小規模な土坑やピットからなる 遺構の可能性。底面不整。3号竪穴状遺構 に後出。9号土坑とわずかに重複。
2	第150図 PL.33-②	078・079、-996~998 不整長方形(Ⅲ-2類)	182×74×19 N-76°W	単層。出土土器は平安期土師器15片、須 恵器5片。	底面比較的平坦。
3	第150図 PL.33-③	078、-994~996 隅丸長方形(Ⅲ-2類)	186×58×15 N-79°W	2号土坑と近似。出土遺物なし。	2号土坑の東0.7mに軸方向を揃えて並ぶ。 底面平坦。
4	第150図 PL.33-④	076・077、-971・972 円形(I-3類)	90×79×10 N-66°W	単層。出土遺物なし。	21号住居に後出。底面比較的平坦。
5	第150図 PL.33-⑤	078・079、-984・985 楕円形か(Ⅱ-3類)	85×52×10 N-16°W	出土遺物なし。	浅い掘り込みと長径70cmの楕円形掘り込み があり、重複する2基土坑の可能性。
6	第150図 PL.33-⑥	085~087、-971・972 隅丸長方形(Ⅲ-2類)	(190)×93×17 N-100°E	単層。出土土器は平安期の小片で土師器 15片、須恵器5片。	トレンチにかかり北隅不明。底面凹凸多い。 7号住居に後出か。
7	第150図 PL.33-⑦	076・077、-985~987 不整楕円形か(Ⅱ-1類か)	156×107×27 N-88°W	上層が本土坑埋没土か。出土遺物は時期 不明の須恵器微細片1片。	8号土坑に後出か。
8	第150図 PL.33-⑦	077・078、-985~987 不整楕円形(Ⅱ-1類)	187×123×105 N-52°W	下層が本土坑埋没土か。出土遺物なし。	2号住居・7号土坑に前出か。
9	第150図 PL.33-①	082~084、-992~994 不整形円形(I-1類)	163×158×30 N-86°E	出土土器は奈良・平安期の土師器8片。	3号竪穴状遺構に後出、1号土坑とわずか に重複。
10	第151図 PL.33-⑧	089・090、-989・990 隅丸長方形(Ⅳ類)	135×112×22 N-86°W	第161図土師器杯1・須恵器蓋2。 他に土師器8片。	12号住居・11号土坑に後出。
11	第151図 PL.33-⑧	090、-990・991 楕円形か(Ⅱ-2類)	102×(60)×23 N-75°W	第161図須恵器杯1・椀2、土師器甕3。 他に土師器10片、須恵器11片。	北側は調査区域外。12号住居に後出、10号 土坑に前出。
12	第151図 PL.33-⑨	083・084、-988~990 隅丸長方形(Ⅲ-2類)	(185)×77×22 N-73°W	単層。出土土器は平安期土師器6片、須 恵器1片。	3号竪穴状遺構と重複。
13	第151図 PL.33-⑩	083~085、-994~996 不整隅丸長方形(Ⅲ-2類)	218×146×42 N-42°E	出土土器は土師器34片、須恵器3片で古 墳時代末の破片あり。	1号住居と重複。ピット状の窪みがあり底 面不整。2基の重複土坑の可能性。
14	第151図 PL.33-⑪	084・085、-969~971 不整楕円形(Ⅱ-2類)	132×104×41 N-47°W	出土土器は土師器12片、須恵器2片で古 墳時代末の破片あり。	底面は二段底状。
15	第150図 PL.33-⑫	081・082、-947・948 不定形(V類)	86×80×19 N-32°W	単層。出土土器は時期不明土師器・須恵 器微細片各1片。	18号住居に後出か。底面は二段底状。
16	第151図 PL.33-⑬	082~084、-946~948 不整楕円形か(Ⅱ-1類)	179×161×10 N-87°W	掘り直しのような縦位の境あり。出土土 器は平安期の土師器3片、須恵器1片。	
17	第152図 PL.33-⑭	071~076、-925~928 不整長方形(Ⅲ-1類)	473×130×35 N-25°E	第161図青磁碗1・砥石2。他に時期不明 の土師器7片、須恵器2片。	18号土坑に前出か。平面形は「く」の字状に 屈曲し、2基の重複土坑の可能性。
18	第152図 PL.33-⑮	076・077、-925~927 隅丸長方形(Ⅲ-4類)	123×81×23 N-57°W	出土遺物なし。	4号掘立柱建物と重複、17号土坑に後出か。
19	第151図 PL.34-②	076~078、-924~926 隅丸長方形(Ⅲ-2類)	221×106×24 N-63°W	単層。出土土器は須恵器3片で古墳・平 安各期が混在。	4号掘立柱建物P6に後出か。底面平坦。
20	第152図 PL.34-③	074~076、-923~925 隅丸長方形(Ⅲ-2類)	194×151×12 N-32°E	単層。出土遺物なし。	4号掘立柱建物P4・21号土坑と重複。
21	第152図 PL.34-③	073~075、-924・925 台形状か(Ⅲ-4類)	123×97×17 N-29°E	20号土坑に近似。出土遺物なし。	20号土坑と重複。65号土坑に前出。ピット 状の窪みに後出か。
22	第152図 PL.34-④	085・086、-157~160 長方形(Ⅲ-3類が2基か)	175×43×17 (115)×38×13 N-76°E	西側土坑中層に礫。出土遺物なし。	形状の近似した2基の土坑の重複。全体で は長さ281cm。
23	第151図 PL.34-⑤	078・079、-924 不整形円形(I-4類)	65×58×26 N-75°W	単層。出土遺物なし。	
24	第152図 PL.34-⑥	083・084、-923・924 不定形(V類)	96×66×24・14 N-50°E	掘り直しのような縦位の境あり。出土土 器は時期不明の土師器・須恵器各1片。	複数の重複ピット状掘り込みの可能性。
25	第152図 PL.34-⑦	084・085、-923 双円形(V類)	91×53×26 N-87°E	出土遺物なし。	2基の重複するピット状の遺構。西側が後 出。
26	第153図 PL.34-⑧	080、-924 円形(I-4類)	63×60×29 N-76°E	単層。出土遺物なし。	26号住居・28号土坑と重複。ピット状の遺構。
27	第153図 PL.34-⑧	079・080、-923・924 円形(I-4類)	58×49×23 N-63°W	単層。26号土坑に近似。出土土器は平安 期の須恵器2片。	26号住居・4号掘立柱建物P8と重複。ピット 状の遺構。
28	第153図 PL.34-⑧	080・081、-923・924 円形(I-4類)	63×58×24 N-19°E	単層。26号土坑に近似。出土土器は時期 不明の土師器1片。	26号住居・26号土坑と重複。ピット状の遺構。
29	第153図 PL.34-⑨	082・083、-932・933 隅丸長方形(Ⅳ類)	124×97×20 N-77°W	第161図須恵器椀1。他の破片なし。	23号住居に後出するようかマカド周辺の礫 が混入している。底面凹凸激しい。
30	第153図 PL.34-⑩	086~088、-938~941 不整長方形(Ⅲ-1類)	328×160×29 N-83°W	第161図須恵器椀1・2。他に土師器36片、 須恵器10片。	底面不整。
31	第153図 PL.34-⑪	076~078、-825~827 隅丸長方形(Ⅲ-3類)	170×133×38 N-40°W	単層。底面直上に平板な礫。出土土器は 時期不明の土師器6片。	底面やや不整で複数の重複土坑の可能性あ るが、埋没土では区別できない。
32	第153図 PL.34-⑫	083、-821 円形(I-3類)	72×68×41 N-25°E	単層。小礫の混入やや多い。出土土器は 時期不明の土師器3片。	ピット状の遺構。底面は皿底状。
33	第153図 PL.35-①	081~083、-840・841 隅丸長方形(Ⅳ類)	145×139×17 N-30°E	出土土器は土師器16片、須恵器3片で平 安期と思われる。	12号溝、936・938・939号ピットと重複、37 号土坑に後出。
34	第154図 PL.35-②	076~078、-839~841 長方形(Ⅲ-2類)	197×135×11 N-50°E	単層。第161図須恵器椀1・2。他に土師 器37片、須恵器29片。	12号溝と重複か。

第三章 調査の内容

No.	挿図	位置 (X、-Y)	長軸×短軸×深さ	埋没土と遺物	備考
	写真	形状 (分類)	軸方向		
35	第154図 PL.35-③	078~080、-914~916 不定形(V類)	(225)×(194)×11 N-20°W	第161図須恵器椀1。他に土師器27片、須恵器4片。	3基以上の長方形土坑の重複か。29・30号住居と重複。
36	第154図 PL.35-④	080・081、-915・916 不定形(V類)	142×100×30 N-15°W	出土遺物なし。	2基の長方形土坑の重複か。30号住居に後出、8号溝に前出。
37	第153図 PL.35-①	081~083、-839~841 隅丸長方形(Ⅲ-5類)	106×(66)×60 N-6°W	礫混入する。出土土器は時期不明の土師器12片。	936・937号ピットと重複、33号土坑に前出。
38	第154図 PL.35-⑤	077・078、-898・899 不整形円形(I-3類)	75×64×10 N-4°W	単層。出土土器は時期不明の土師器1片。	
39	第154図 PL.35-⑥	075・076、-898・899 不整形円形(I-3類)	75×68×16 N-88°W	出土土器は時期不明の土師器1片。	
40	第154図 PL.35-⑦	078・079、-890・891 楕円形(Ⅱ-2類)	(115)×97×12 N-71°W	出土土器は時期不明の土師器微細片10片。	攪乱により西側不明瞭。
41	第154図 PL.35-⑧	088・089、-113・114 円形(I-2類)	107×99×6 N-33°W	出土土器は平安期土師器16片、須恵器1片。	39号住居と重複。
42	第155図 PL.35-⑨	090~093、-118~121 隅丸長方形(Ⅳ類)	302×296×21 N-10°E	礫混入する。第161図土師器高杯1。他に土師器27片、須恵器2片。	竪穴状遺構状。倒木痕上に掘削。
43	第155図 PL.35-⑩	070~072、-014・015 隅丸長方形(Ⅲ-2類)	194×121×42 N-16°E	焼土・炭化物等を多量に含む。出土土器は時期不明の土師器・須恵器各1片。	底面比較的平坦。壁面被熱。
44	第154図 PL.35-⑪	065・066、-874・875 方形(Ⅳ類)	89×71×14 N-36°W	焼土・炭化物粒混入。出土土器は時期不明の土師器7片。	19号溝と重複。
45	第155図 PL.35-⑫	070、-866~868 隅丸長方形(Ⅲ-5類)	105×62×6 N-66°W	出土土器は平安期土師器13片・須恵器2片。	7号掘立柱建物P3に前出。
46	第155図 PL.35-⑬	066・067、-865・866 円形か(I-3類)	81×(45)×13 N-10°E	焼土・炭化物粒少量混入。出土土器は平安期土師器8片・須恵器1片。	東側は調査区外。
47	第155図 PL.35-⑭	069・070、-867 楕円形(Ⅱ-3類)	82×62×6 N-17°E	出土土器は土師器3片・須恵器1片で平安期。	7号掘立柱建物と重複。
48	第155図 PL.35-⑮	071~073、-875~877 不整形円形(I-2類)	125×107×12 N-6°W	出土土器は土師器7片・須恵器5片で平安期。	41号住居に前出。底面平坦。
49	第156図 PL.36-①	064・065、-894・895 円形(I-2類)	102×97×20 N-84°W	単層。炭化物粒少量混入。出土土器は土師器18片・須恵器6片で平安期。	43号住居に後出。底面平坦。
50	第156図 PL.36-②	066・067、-893・894 円形(I-3類)	86×81×18 N-0°	単層。出土遺物なし。	43号住居と重複。
51	第156図 PL.36-③	063・064、-892・893 円形(I-2類)	114×105×33 N-48°W	出土遺物なし。	14号溝と重複。
52	第156図 PL.36-④	065・066、-903~905 不整形長方形(Ⅲ-3類)	170×90×19 N-75°W	出土土器は時期不明の土師器14片。	
53	第156図 PL.36-⑤	063~065、-904~906 長方形(Ⅲ-2類)	209×78×14 N-32°E	出土土器は時期不明の土師器微細片4片。	73号ピットと重複。
54	第155図 PL.36-⑥	063、-906~908 隅丸長方形か(Ⅲ類か)	234×(63)×14 N-89°W	焼土・炭化物粒少量混入。出土土器は古墳時代の土師器1片。	75号ピットと重複。南側は調査区域外。
55	第156図 PL.36-⑦	066~069、-905~907 長方形(Ⅲ-1類)	358×92×26 N-33°E	出土遺物なし。	
56	第156図 PL.36-⑧	064~066、-907~909 長方形(Ⅲ-1類)	271×94×12 N-31°E	出土土器は土師器16片、須恵器4片。	76号ピットと重複。南側は調査区域外。
57	第156図 PL.36-⑨	068・069、-914・915 不整形長方形(Ⅲ-3類)	(180)×100×17 N-2°W	出土土器は時期不明の土師器4片。	8号掘立柱建物P2と重複。底面不整。
58	第157図 PL.36-⑩	060~062、-003・004 長方形(Ⅲ-2類)	198×52×15 N-16°E	第161図須恵器椀1。他に土師器4片。	
59	第157図 PL.36-⑪	069・070、-920・921 長方形(Ⅲ-5類)	111×79×14 N-76°W	単層。出土遺物なし。	
60	第157図 PL.36-⑫	073・074、-920・921 長方形(Ⅲ-5類)	93×63×24 N-68°W	出土土器は時期不明の土師器微細片7片。	8号溝に後出。
61	第152図 PL.36-⑬⑭	072・073、-924・925 隅丸長方形(Ⅲ-5類)	111×58×27 N-30°E	長さ30cm前後の礫を配置する。出土遺物なし。	65号土坑に後出。
62	第157図 PL.36-⑮	063・064、-927~929 長方形(Ⅲ-3類)	156×76×26 N-88°W	単層。出土土器は時期不明の土師器2片。	46・56号住居に後出。
63	第157図 PL.37-①	068・069、-935~937 隅丸長方形(Ⅲ-2類)	205×81×17 N-63°W	第161図須恵器杯1・2。他に土師器40片、須恵器5片。	
64	第158図 PL.39-⑧	064~069、-909~913 長方形(Ⅲ-1類)	570×120×27 N-37°E	出土遺物なし。	種イモ等の貯蔵穴か。44号住居、9号溝と重複。66号土坑に後出。
65	第152図 PL.37-②	071~074、-924~926 長方形か(Ⅲ-1類か)	(312)×172×32 N-29°E	出土土器は土師器10片・須恵器3片で時期不明。	複数の長方形土坑の重複か。21号土坑に後出、61号土坑に前出。
66	第157図 PL.37-③	064~066、-913・914 長方形(Ⅲ-4類)	132×78×26 N-9°E	出土遺物なし。	44・55号住居、9号溝と重複。64号土坑に前出。
67	第157図 PL.37-④	069~072、-884~886 不整形長方形(Ⅲ-1類)	302×151×12 N-11°E	出土土器は時期不明の土師器3片。	
68	第157図 PL.37-⑤	070・071、-880・881 楕円形(Ⅱ-1類)	156×120×27 N-68°W	出土土器は土師器1片・須恵器2片で奈良期。	
69	第157図 PL.37-⑥	073・074、-941・942 円形(I-3類)	94×92×21 N-76°E	第161図須恵器高台付杯1。他に土師器8片、須恵器1片。	48号住居北東隅に接している。

No	挿図	位置 (X、-Y)	長軸×短軸×深さ	埋没土と遺物	備考
	写真	形状 (分類)	軸方向		
70	第158図 PL.37-⑦	063・064、-908・909 隅丸長方形か(Ⅲ-4類か)	(107)×67×16 N-5°W	出土土器は時期不明の土師器49片。	南側は調査区域外。
71	第158図 PL.37-⑧⑨	066・067、-941・942 不定形(V類)	105×99×46 N-32°E	焼土ブロックを含む。出土遺物なし。	倒木痕上に穿つ。
72	第158図 PL.37-⑩	065・066、-957・958 円形(I-2類)	104×100×23 N-11°E	礫の混入多い。出土土器は土師器11片・須恵器3片で平安期。	54号住居・2基の小ピットに後出。
73	第158図 PL.37-⑪	068~070、-950~953 不整長方形(Ⅲ-1類)	292×126×31 N-71°W	出土遺物なし。	複数土坑の重複か。
74	第158図 PL.37-⑫	073・074、-960・961 不整楕円形(Ⅱ-2類)	101×78×16 N-21°W	出土土器は土師器4片・須恵器6片で時期不明。	
75	第158図 PL.37-⑬	066~068、-959・960 円形(Ⅱ-2類)	105×100×18 N-8°W	単層。As-Bの混入多い。出土土器は土師器8片・須恵器3片で時期不明。	
76	第159図 PL.37-⑭	072・073、-957・958 円形(I-2類)	94×80×12 N-53°E	単層。As-B混じる。出土土器は土師器5片・須恵器1片で時期不明。	
77	第159図 PL.37-⑮	072・073、-962・963 不整長方形(Ⅲ-4類)	129×90×19 N-43°W	出土土器は土師器3片・須恵器1片で時期不明。	
78	第159図 PL.38-①	069~071、-977・978 長方形(Ⅲ-2類)	228×95×18 N-3°W	出土土器は土師器12片・須恵器2片で平安期。	57号住居に後出。
79	第159図 PL.38-②	065~067、-939・940 不整長方形(Ⅲ-4類)	128×90×23 N-19°W	出土遺物なし。	5号竪穴に後出。
80	第159図 PL.38-③	072・073、-971~973 円形(I-2類)	115×108×14 N-7°E	単層。As-Bの混入多い。出土土器は土師器16片・須恵器6片で時期不明。	
81	第159図 PL. -	064・065、-967・968 長方形か(Ⅲ-2類か)	(135)×107×6 N-2°E	水平に近い堆積。As-Bの混入多い。出土土器は時期不明の土師器微細片5片。	南側は調査区域外。
82	第159図 PL. -	065・066、-955・956 円形か(I-1類か)	157×(55)×12 N-4°E	出土土器は時期不明の土師器微細片2片。	53号住居に前出し、54号住居に後出。
83	第159図 PL.38-④	073・074、-990~992 隅丸長方形(Ⅲ-5類)	115×75×13 N-74°W	焼土粒混入。第162図須恵器碗1~3。他に土師器10片、須恵器17片。	
84	第159図 PL.38-⑤	070・071、-972・973 楕円形(Ⅱ-2類)	120×93×12 N-67°W	焼土・炭化物粒混入。出土土器は土師器10片。	
85	第159図 PL.38-⑥	067・068、-855・856 長方形か(Ⅳ類か)	123×(81)×19 N-26°E	出土土器は土師器4片、須恵器1片で時期不明。	トレンチにより南東側破損。
86	第160図 PL.38-⑦	066・067、-849 長方形か(Ⅲ類か)	72×(25)×12 N-1°E	第162図須恵器碗1。他の遺物なし。	63号住居に後出。
87	第160図 PL.38-⑧	066・067、-856・857 不整楕円形(Ⅱ-2類)	142×89×19 N-80°W	出土遺物なし。	
88	第160図 PL.38-⑨	065・066、-857・858 不整隅丸長方形(Ⅲ-4類)	134×111×14 N-9°W	出土土器は土師器2片、須恵器1片で平安期。	
89	第160図 PL.38-⑩	071・072、-856・857 円形(I-4類)	65×64×21 N-28°W	出土遺物なし。	底面皿底状でピットに近い。
90	第160図 PL.38-⑪	068~070、-857~859 長方形(Ⅲ-2類か)	(208)×78×20 N-63°W	上層に焼土混入。出土土器は土師器5片、須恵器1片で平安期。	西側は調査区域外。
91	第160図 PL.38-⑫	062~064、-842~844 長方形(Ⅲ-3類)	156×80×60 N-58°W	礫の混入顕著。焼土・炭化物の混入多い。出土土器は時期不明の土師器・須恵器各5片。	底面平坦。
92	第160図 PL.38-⑬	070・071、-847 円形(I-3類)	74×71×68 N-46°W	第162図須恵器杯1。他に土師器4片、須恵器1片。	
93	第160図 PL.38-⑭	062・063、-854・855 隅丸長方形(Ⅳ類)	68×65×9 N-9°E	第162図土師器甕1。他に土師器8片。	ピットと重複。
94	第160図 PL.38-⑮	073・074、-988・989 隅丸長方形(Ⅲ-3類)	166×76×12 N-87°E	出土土器は土師器微細片1片のみ。	
95	第160図 PL. -	070・071、-855・856 円形(I-2類)	116×108×49 N-33°W	焼土・炭化物粒含む。出土遺物なし。	3基の小ピットに前出。

7 粘土採掘坑

(第163図 PL.58 遺物観察表247頁)

概要 西3区にある不整な落ち込みで、底面の一部に掘削工具痕が見られた。礫混じり層の直上で掘り下げを止め、オーバーハング状に壁面をくり抜いている部分があることから、地山粘性土の採掘坑を想定した。南側は現道にかかり全容を把握できていない。

位置 084~089、-146~153グリッド

規模形状 確認できる範囲で東西7.5m以上、南北4.8mの規模がある。南隅にわずかに現れる上端と思われる部分が確実なものであれば、長軸方向N-60°W前後の隅丸長方形となる可能性がある。深さは北西壁直下の礫層まで達した部分で64cmを測る地点があるが、他は深い部分で35cm、浅い部分で25cm前後である。

出土遺物 土器小破片を中心に遺物が少量出土し、2点

第三章 調査の内容

を図示した。1は8世紀初頭の須恵器蓋で、調査範囲内には約8m北西側に離れた19号住居まで該期遺構はない。2は土師器有孔鉢で北西側の深度に富む掘り込み内の出土だが、北東側に重複する27号住居からの混入と思われる。図示した以外に土師器22点が出土している。

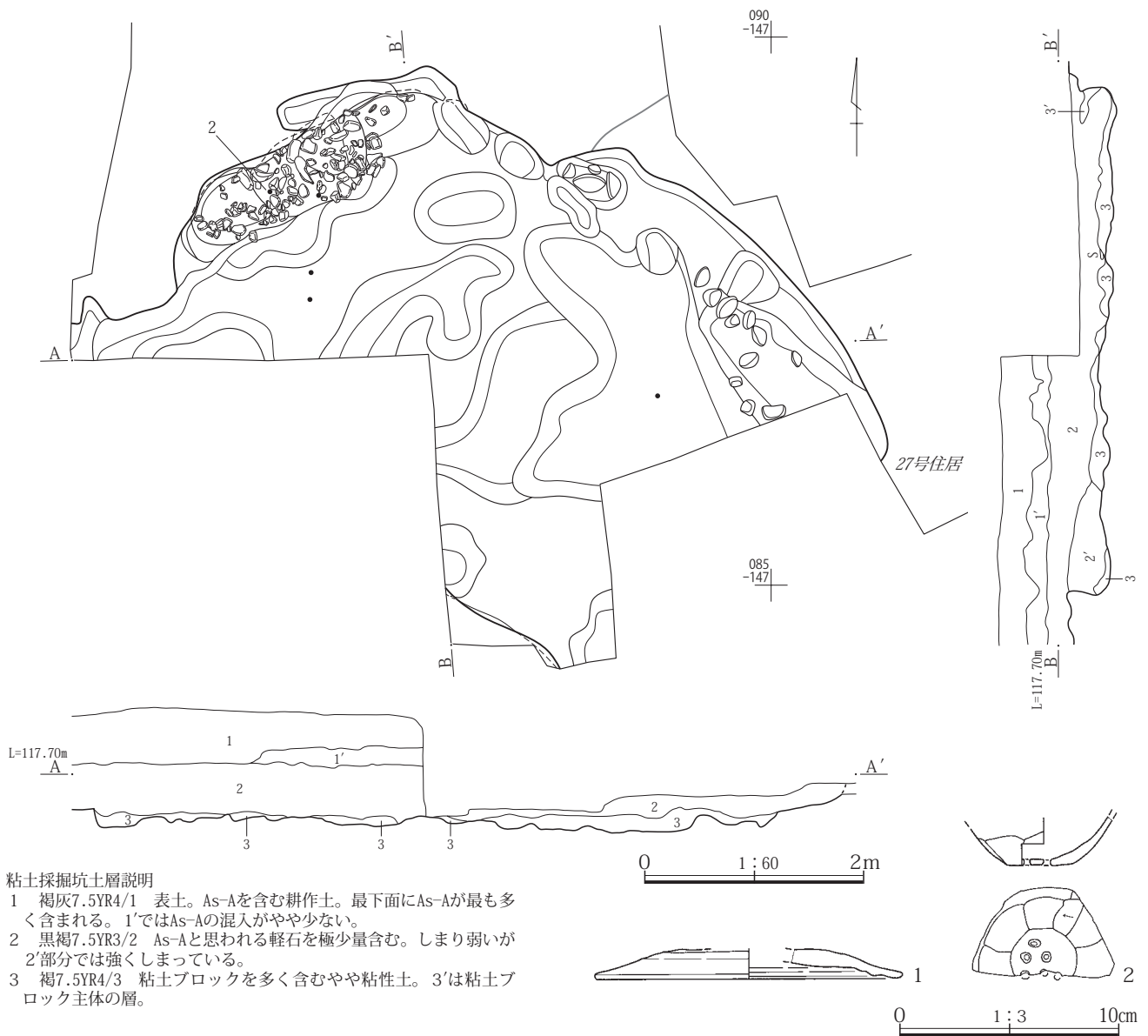
その他 古墳時代前期の27号住居に後出している。北東辺直下の窪み内には掘削工具痕と思われる痕跡が確認できる。最大幅25cm、深さ4～7cmの規模で先端に丸みがある鋤先のような工具痕と思われる。

所見 埋没土は2層土にまでごくわずかにAs-Aらしいパミスを含むが、同パミスの極大値は上層にある。2層に混じるAs-Aは上面から浸み込んだものとし、本土坑の時期を天明三年(1783)段階では埋没の終えた、近世前

期以前と想定できる。

ここで得られる土は褐色味の強い粘性土であるが、混入物が多いうえ緻密さは十分ではなく、土器類など窯業製品の原料には適さないと思われる。古代カマド構築材を採掘した可能性もあるが、住居掘り方段階で同様の粘性土は採掘されるので、大規模な採掘坑は不要と考える。

遺構規模を現状の上端範囲を直線的に繋ぎ、長軸6m、短軸4m前後の隅丸長方形を想定し、深さ30cm前後の掘り込みから7m前後の粘性土が得られたと推測できる。規模の大きさから中・近世家屋の土壁等に用いた粘性土の採掘坑と想定するのが妥当と考えるが、明確な根拠は得られていない。



- 粘土採掘坑土層説明
- 1 褐灰7.5YR4/1 表土。As-Aを含む耕作土。最下面にAs-Aが最も多く含まれる。1'ではAs-Aの混入がやや少ない。
 - 2 黒褐7.5YR3/2 As-Aと思われる軽石を極少量含む。しまり弱いが2'部分では強くしまっている。
 - 3 褐7.5YR4/3 粘土ブロックを多く含むやや粘性土。3'は粘土ブロック主体の層。

第163図 粘土採掘坑と出土遺物

8 溝

溝は東調査区で見られる施設で、形状や想定される機能・確認された面も一様ではない。調査段階で22条の溝を把握し番号を付けたが、時期を明瞭にできるものはほとんどなかった。5号溝は整理段階で土坑に変更したため欠番となっている。竪穴住居に後出するものが多く、中世以降の施設が主体のようである。

1号溝(第164図 PL.39-①、59 遺物観察表247頁)

東調査区西側埋没谷上、東1区南西隅の遺構のごく少ない一画にある。溝は両隅とも調査区境にかかり全容を把握できていない。

位置 北西端は073、-029グリッドに、南東端は068、-025グリッドにある。

形状規模 ほぼ直線的で形状の一定した溝である。残存する範囲で長さ5.7m、幅38~49cm、深さ13~30cmを測る。

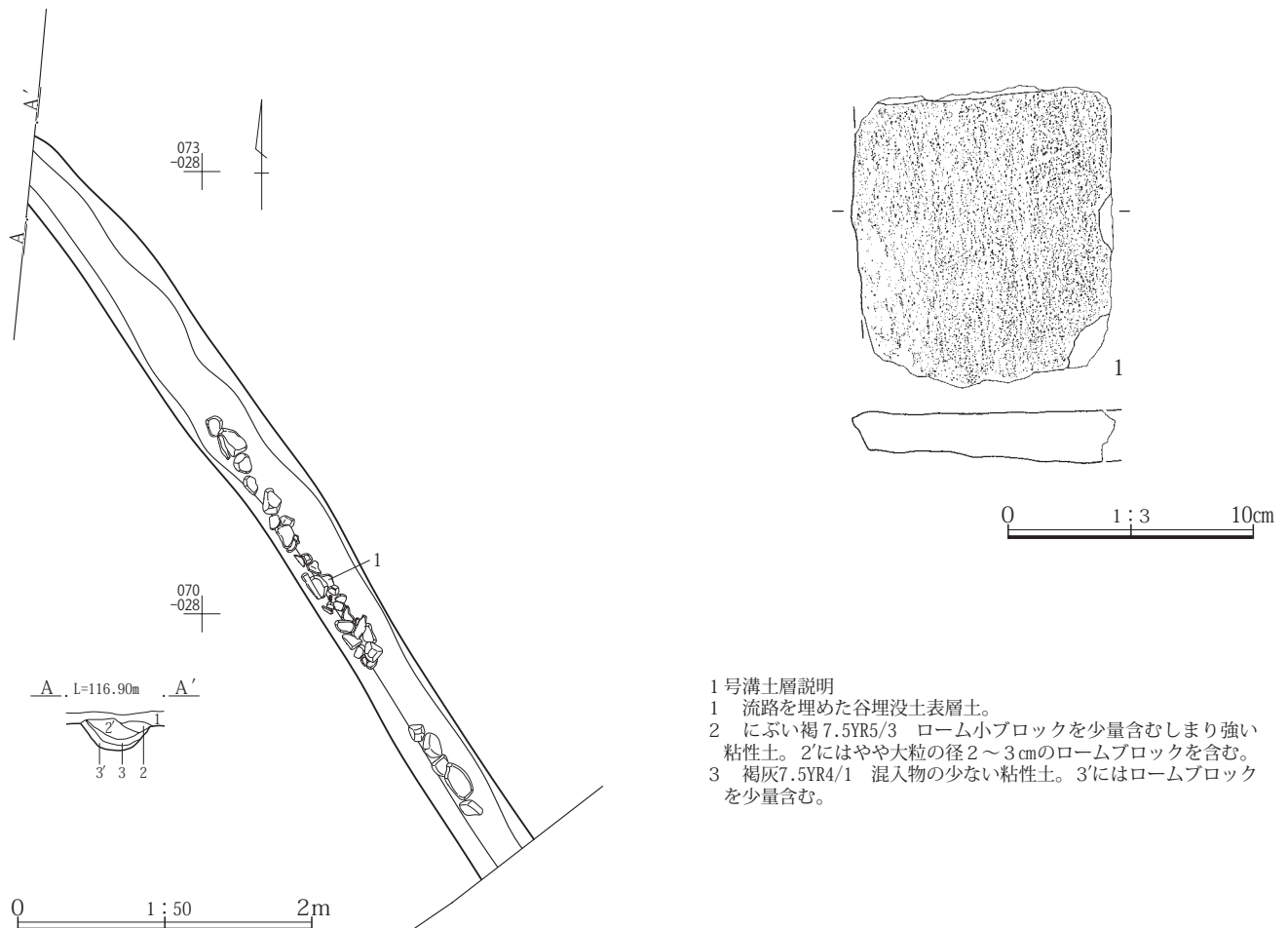
底面は比較的狭くレベルは緩やかに波打つような凹凸があるが、全体では南東側へ低く傾斜して勾配は1.8:100である。

方位 N-35° W

埋没土 自然堆積と思われ、水流や人為的埋戻しの痕跡はない。南西側壁に沿って約3mの長さに渡って川原石の出土が多い部分がある。石の底面レベルは溝底面から2~6cm高く、溝が埋没する当初の段階で人為的に並べられたような配置にある。自然堆積状の北西隅部分と合致していない。

遺物 土器類は小破片を含め出土していない。礫の中に緑色片岩製板碑片が2点混じり、その内の1点を図示した。板碑表面は摩滅がすすみ、他所から運ばれた遺物と考えられる。

備考 本溝は出土遺物より中世以降の施設と確認できる。底面がやや広く水路状だが、底面傾斜は地山の傾斜とは逆行している。



1号溝土層説明

- 1 流路を埋めた谷埋没土表層土。
- 2 にぶい褐7.5YR5/3 ローム小ブロックを少量含むしまり強い粘性土。2'にはやや大粒の径2~3cmのロームブロックを含む。
- 3 褐灰7.5YR4/1 混入物の少ない粘性土。3'にはロームブロックを少量含む。

第164図 1号溝と出土遺物

2号溝(第165図 PL.39-②・③)

北側拡張区埋没谷上の遺構の少ない一画にある。両隅とも調査区境にかかり全容を把握できていない。

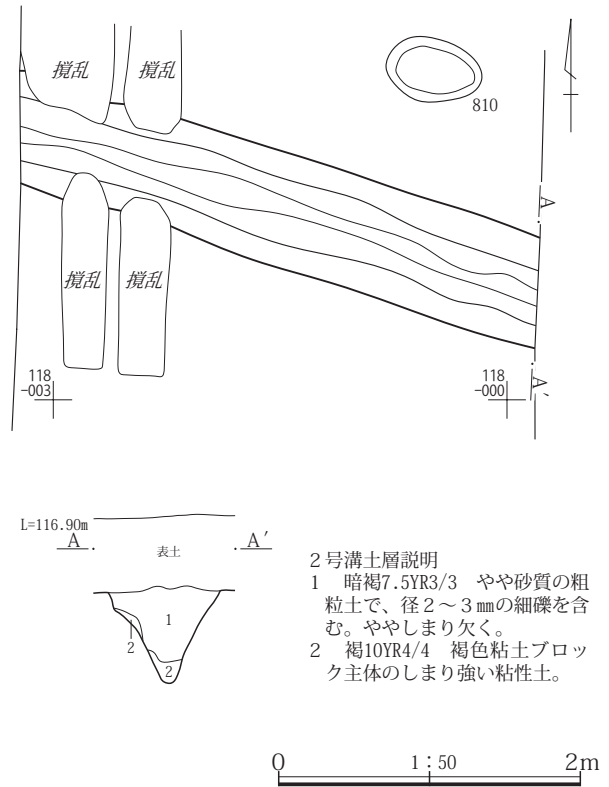
位置 西端は120、-003グリッドに、東端は118、-999グリッドにある。

形状規模 ほぼ直線的で形状の一定した深度に富む溝である。残存する範囲内で長さ3.6m、幅69~74cm、深さ51~61cmを測る。底面は狭く、断面はV字状を呈している。底面レベルはほぼ水平で調査範囲内での勾配は確認できない。

方位 N-72° W

埋没土 水流や人為的埋戻しの痕跡はない。

備考 出土遺物はなく、埋没土にも時期を想定するための鍵層は認められない。表土の厚い地点だが、その直下で本溝を確認でき、近世の遺構と想定される。規模や深度に富む断面形状は畠と荒地の間に見られる根切り溝と呼ばれる施設に近い。明瞭な施設だが調査範囲には本溝の東側延長部分は見られない。本溝と関連が想定される遺構を探すと、約90m東に離れるが8号溝がほぼ直交する走向にある。



- 2号溝土層説明
- 1 暗褐7.5YR3/3 やや砂質の粗粒土で、径2~3mmの細礫を含む。ややしまり欠く。
 - 2 褐10YR4/4 褐色粘土ブロック主体のしまり強い粘性土。

第165図 2号溝

3号溝(第166図 PL.39-④)

北拡張区南隅の埋没谷東端付近で、2号溝の約25m南側にある。溝北東隅は北東側へ緩やかに低くなる傾斜面にかかり、途切れている。南西隅は調査区境にかかり全容を把握できていない。本溝を南西側へ9m延長した位置で東1区に至るが、本溝の続きは確認できない。

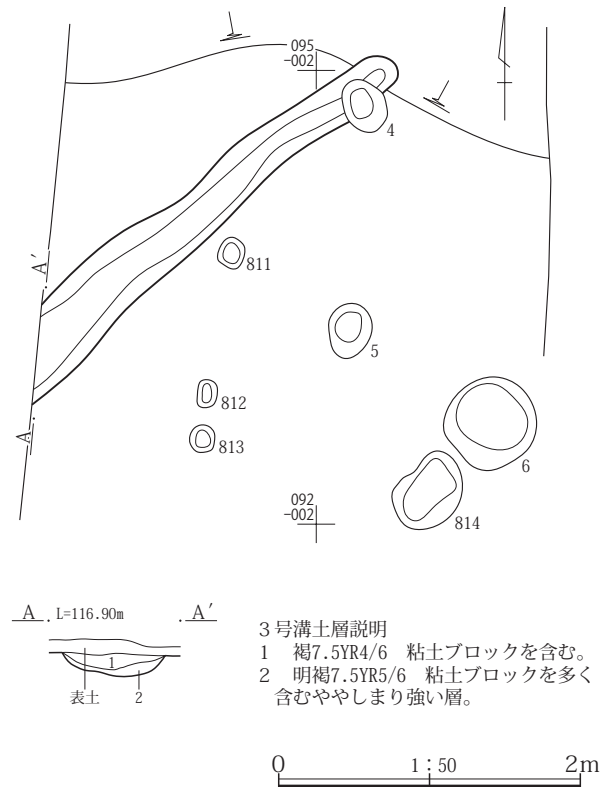
位置 北東端は095、-001グリッドに、南西端は092、-003グリッドにある。

形状規模 ほぼ直線的で形状の比較的一定した溝である。底面が比較的広い。残存する範囲内で長さ3.1m、幅25~46cm、深さ1~16cmを測る。底面レベルは高低差6cmの凹凸があり、全体での勾配は確認できない。

方位 N-50° E

埋没土 自然堆積と思われる。水流や水の溜まり、および人為的埋戻しの痕跡はない。

備考 出土遺物はない。4号ピットと重複している。本溝の走向は埋没谷周辺の等高線に沿っているが、底面の状態など水路的ではない。



- 3号溝土層説明
- 1 褐7.5YR4/6 粘土ブロックを含む。
 - 2 明褐7.5YR5/6 粘土ブロックを多く含むややしまり強い層。

第166図 3号溝

4号溝(第167図 PL.39-⑤)

細いが比較的長さのある溝である。南隅は確認できるが、北隅は広い攪乱に壊され全容を把握できていない。周辺に溝はみられない。

位置 北端は081、-954グリッドに、南端は070、-957グリッドにある。

形状規模 緩やかな蛇行が見られ、途中小さく「く」の字状に屈曲している。屈曲を挟んだ南北両側ではほぼ直線的な走向の、浅く底面のやや広い溝である。残存する範囲で長さ11.8m、幅23~59cm、深さ2~7cmを測る。攪乱の北側で本溝の延長部分は確認できず、全長は17m以下である。底面レベルは高低差3cmの凹凸があり傾斜は見られない。

方位 N-12° E (全体)

埋没土 As-Aの可能性のある軽石が含まれる。水流や人為的埋戻しの痕跡はない。

備考 出土遺物はない。15号住居に後出している。東3区の西寄り住居群と中央住居群を区切るような位置にあるが、埋没土より近世以降の施設と思われる。

6号溝(第168図 PL.59 遺物観察表247頁)

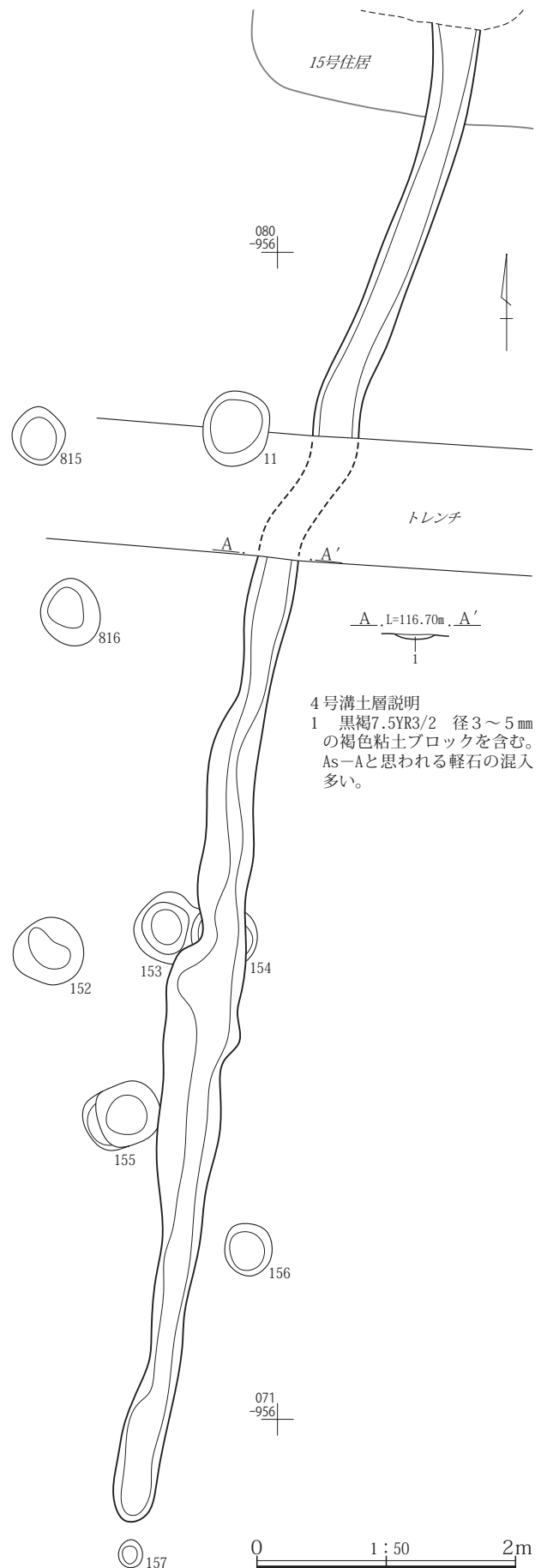
位置 東端は077、-946グリッドにあり、西端は078、-949グリッド付近で不明瞭になるが、17号住居上面の077、-951グリッド付近でも痕跡が確認できる。

形状規模 外形に歪みが大きい、全体ではほぼ直線的な溝である。残存する範囲で長さ2.8m、幅44~84cm、深さ2~7cmを測る。17号住居の南北断面観察で本溝の延長部分と思われる窪みが確認できるが、同住居西壁までは達しておらず、長さは1.4m以上、3.2m以内の範囲で増加すると思われる。底面は西側へ低く傾斜していて勾配は2.2:100である。

方位 N-77° W

埋没土 焼土粒や土器細片が見られるが、17号住居カマドを壊したための混入と思われる。水流や人為的埋戻しの痕跡はない。

備考 17号住居と53号ピットに後出する。平安時代の土師器杯1を図示した。17号住居カマド先端から東へ約1m離れた位置の出土である。同住居と近似した時期の遺物で同住居からの混入品の可能性もあり、本溝に確実に



4号溝土層説明
1 黒褐7.5YR3/2 径3~5mmの褐色粘土ブロックを含む。As-Aと思われる軽石の混入が多い。

第167図 4号溝

第三章 調査の内容

伴う遺物とは確定できない。他に土師器片22点、須恵器片4点の出土があるが、いずれも17号住居からの混入と思われる。

7号溝(第168図)

土坑と変わらない規模だが、6号溝の南30cm前後の位置に平行に並ぶ施設で、溝として扱った。

位置 東端は076、-947グリッドにあり、西端は076、-949グリッドで17号住居と重複した付近から不明になる。

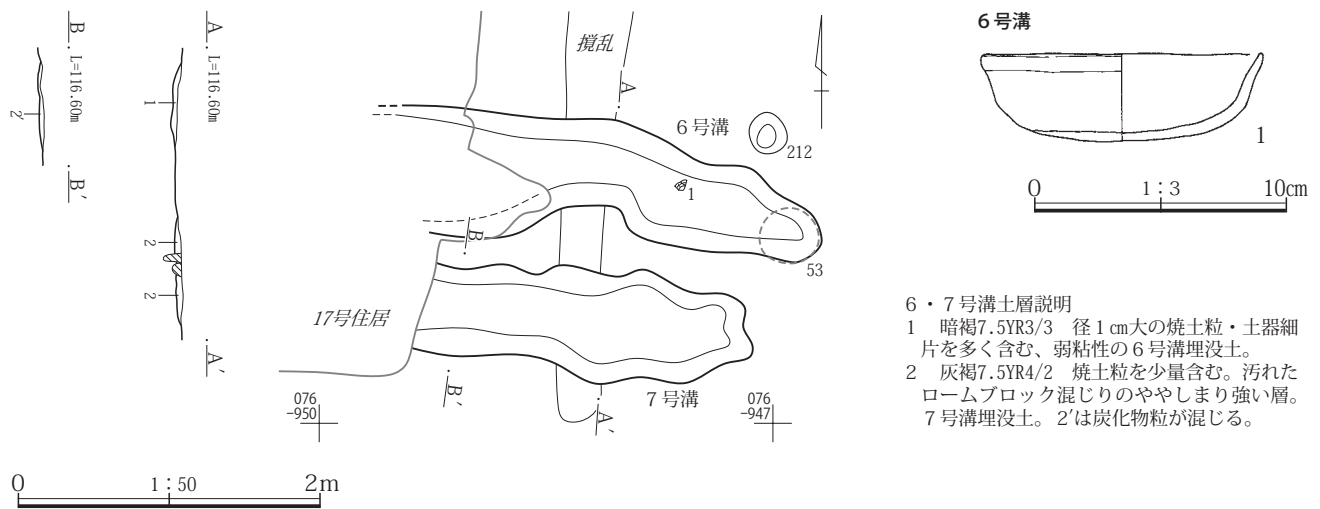
形状規模 6号溝同様に外形に歪みが大きい、全体では直線的な溝である。残存する範囲で長さ2.1m、幅47

～72cm、深さ2～4cmを測る。17号住居の南北断面観察で本溝延長部分は確認できず、長さが1.3m以上増加することはないと思われる。底面は細かな凹凸があるが全体ではほぼ水平で、勾配は確認できない。

方位 N-86° W

埋没土 6号溝ほどではないが焼土粒を含む。水流や人為的埋戻しの痕跡はない。

備考 17号住居に後出している。17号住居南壁に平行する走向にあり、同住居の時期に近似する平安時代の遺構となる可能性がある。土師器9点、須恵器1点の小破片が出土している。平安時代の遺物で、17号住居からの混入品の可能性がある。



第168図 6・7号溝と6号溝出土遺物

8号溝

(第169・170図 PL.39-⑥・⑦、59 遺物観察表247頁)

東調査区中央のピット密集部分にある。南側は調査区境に達し全容を把握できていない。区画溝と思われる数度の掘り直し痕跡が確認できる。そのため浅く広い底面をもつ部分を8号溝とし、北側東脇の幅狭な掘り込みをA溝、中央付近の幅狭な掘り込みをB溝、南側の広い掘り込みをC溝と呼んだ。さらに南半部分で見られる東側に分岐した走向部分を8'号溝として区別した。

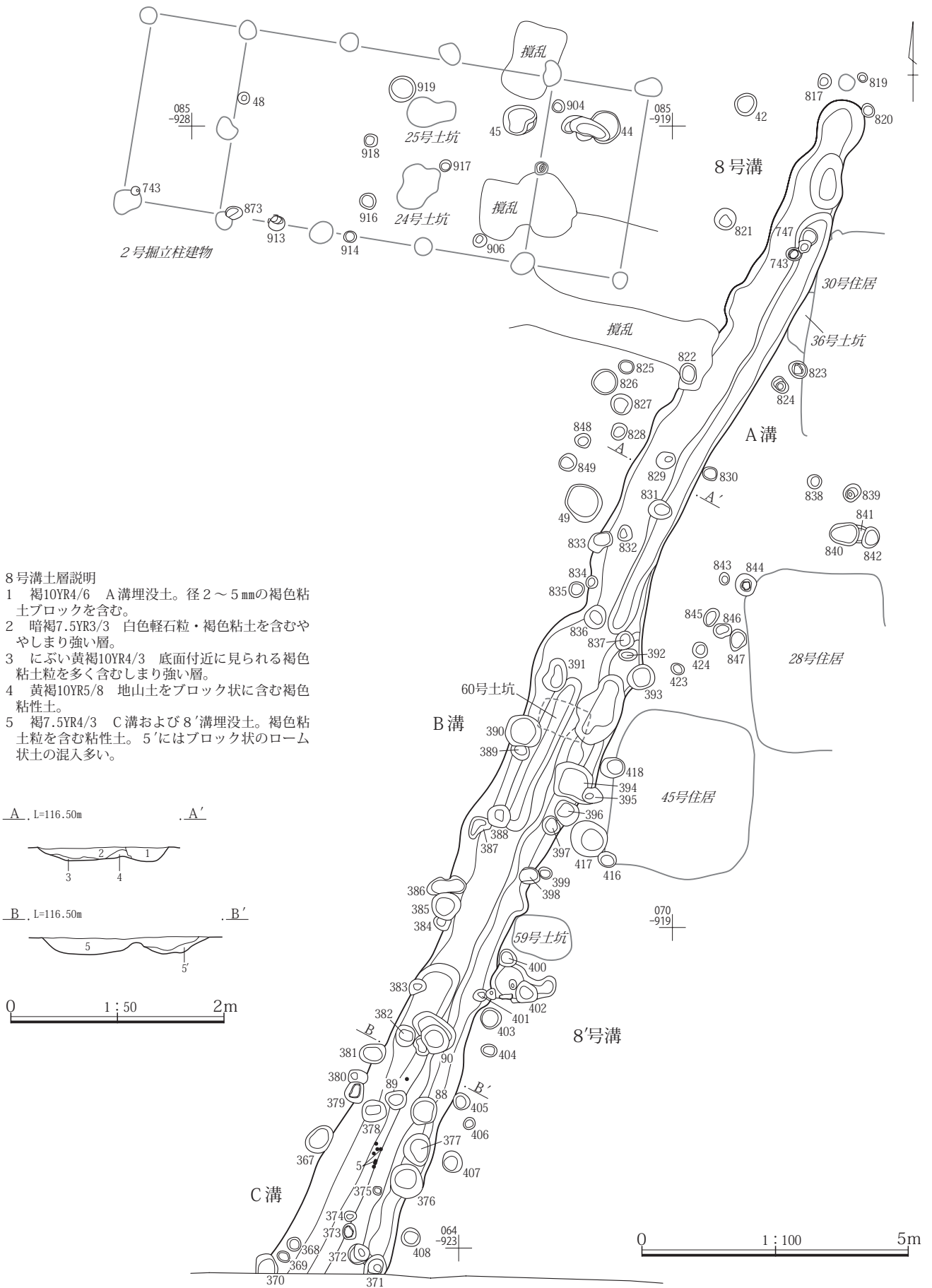
(8号溝)

位置 北端は085、-915グリッドにあり、南端はC溝と重なり、063、-926グリッドで調査区境に達している。

形状規模 残存する範囲で長さ23.9m、幅63～182cm、深さ2～11cmを測る。底面は地山傾斜に沿って北側へ低く傾斜していて勾配は1.3:100である。A溝は全長8.4m、幅35～46cm、深さ18cmで、底面は北側へ低く傾斜している。B溝はA溝と約1mの間隔を置いて、掘り込まれている。全長3.1m、幅41～46cm、深さ20cm前後を測る。A溝の走向延長線上よりやや西に寄った8号溝の中央部分に位置している。C溝は8号溝とほぼ同じ幅があり、A・Bと異なった掘り込みである。残存する範囲では長さ6.4m、幅90cm前後、深さ14cm前後を測る。

方位 N-23° E

埋没土 水流や人為的埋戻しの痕跡はない。A溝は後出



第169図 8号溝

する掘削であることが確認できる。

遺物 土器1～5を図示した。1・3・4が7世紀末から8世紀前半、2・5が9世紀の遺物で広い年代幅の土器が混在している。いずれも小破片で遺構の年代を特定する資料とはなり得ない。他に土師器片115点、須恵器片7点の出土がある。古墳時代後期から平安時代までの多様な土器が見られる。

備考 溝は長さに富むが、住居や掘立柱建物との重複がほとんどなく、30号住居の北西隅がわずかにかかるのみである。反面、ピットとの重複はきわめて多く、30基以上の重複が確認できる。

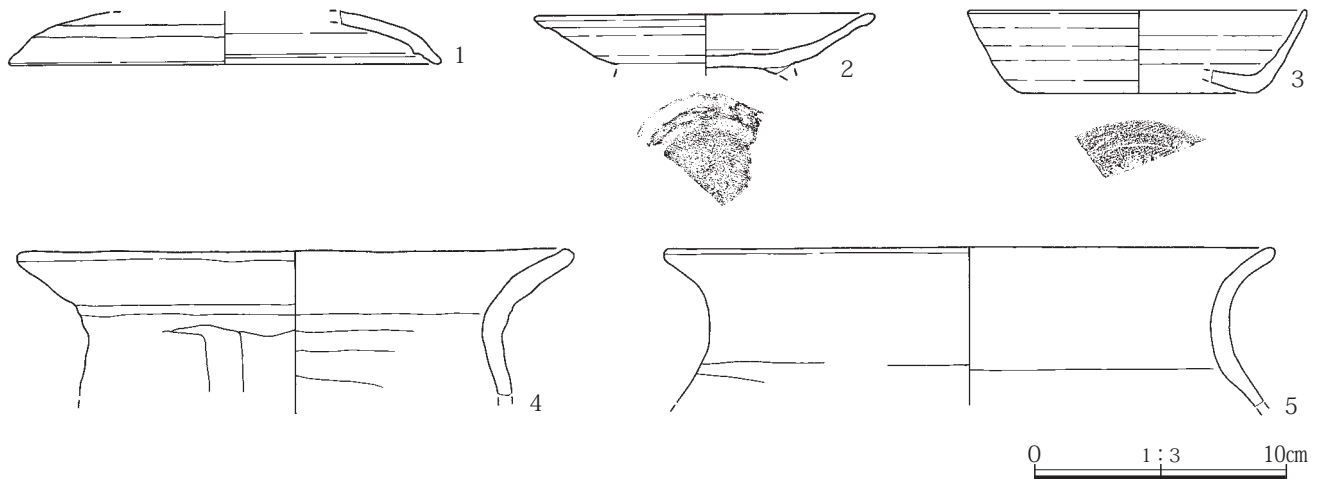
(8'号溝)

位置 北端は073-920グリッド付近で確認でき、南側は063-924グリッドで調査区境に達しているが、輪郭が不明瞭になり溝南端部付近に近接しているようだ。

形状規模 残存する範囲で長さ10.7m、幅46～65cm、深さ15cm前後である。底面は地山傾斜に沿って北側へ低く傾斜している。

埋没土 8号溝と同一の埋没土である。

備考 8号溝とは南隅で離れていることから同溝が埋没した後に掘削されたものと思われる。



第170図 8号溝出土遺物

9号溝(第171図 PL.39-⑧、59 遺物観察表247頁)

東調査区中央付近にある浅いがきわめて幅の太い溝である。北側は遺構の少ない一画にあるが、南西隅付近は住居やピットが密集している。また南西隅は調査区境にかかり、全容を把握できていない。

位置 北東端は084、-900グリッドにあり、ここより北東側は不明瞭になる。南西端は063、-917グリッド付近にある。

形状規模 輪郭は不整だが、全体では直線的な溝となっている。残存する範囲で長さ26.7m、幅173～295cm、深さ2～17cmを測る。底面は比較的平坦で中央付近が窪む傾向があり、壁際と3cm前後の比高差がある。薄い箱状の断面形状は全体を通じて近似している。全体では地山傾斜に沿って北東側へ低く、ごく緩やかに傾斜していて勾配は0.7:100である。

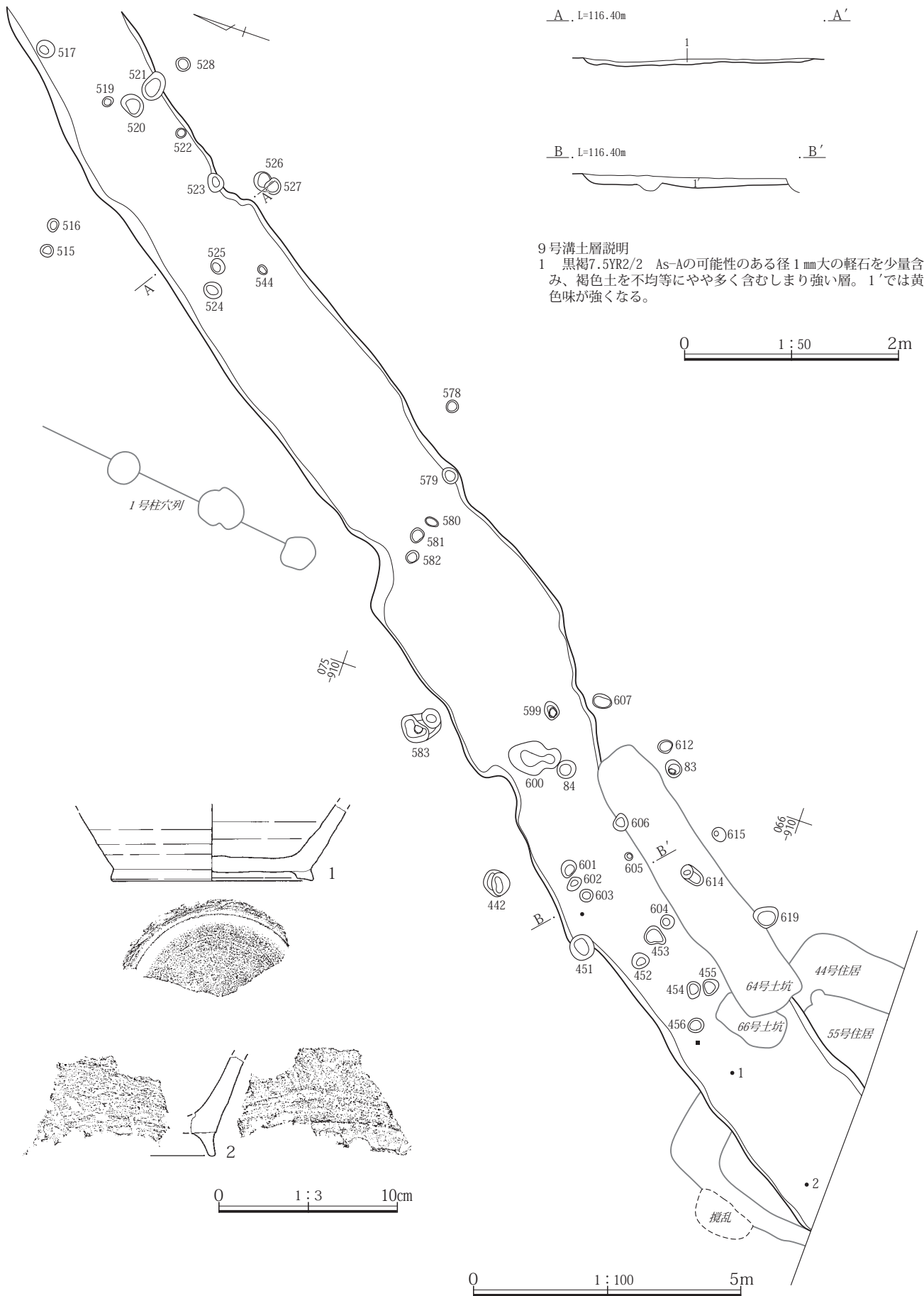
方位 N-37° E

埋没土 水流や人為的埋戻しの痕跡はない。

遺物 遺物の出土は南側でやや多く、このうち須恵器壺1・2を図示した。他に奈良・平安時代の土師器102点、須恵器6点の出土があるが、小破片がほとんどであった。44号住居など重複住居からの混入と思われる。

備考 44・55号住居に後出し、64号土坑に前出している。64号土坑は本溝と長軸方向を揃えていて、東脇に掘削した種イモ等の貯蔵穴となろう。

明瞭な硬化面はないが、規模や形状から推定して道状の窪み、あるいは上面にあった道の痕跡と考えられる。東4区と5区および東1区と2区の境にある現道とほぼ平行した走向にあるようで、比較的新しい近世以降の施設の可能性がある。



9号溝土層説明

1 黒褐7.5YR2/2 As-Aの可能性のある径1mm大の軽石を少量含み、褐色土を不均等にやや多く含むしまり強い層。1'では黄色味が強くなる。

第171図 9号溝と出土遺物

10号溝(第172図 PL.39-⑨)

東5区の東隅にある遺構で、遺跡全体でも最も東隅で確認された溝である。掘り直しが見られ、後出のA溝と前出のB溝に別けた。北東隅は調査区境にかかり、地山の低くなる南隅でも不明瞭で、全容を把握できていない。

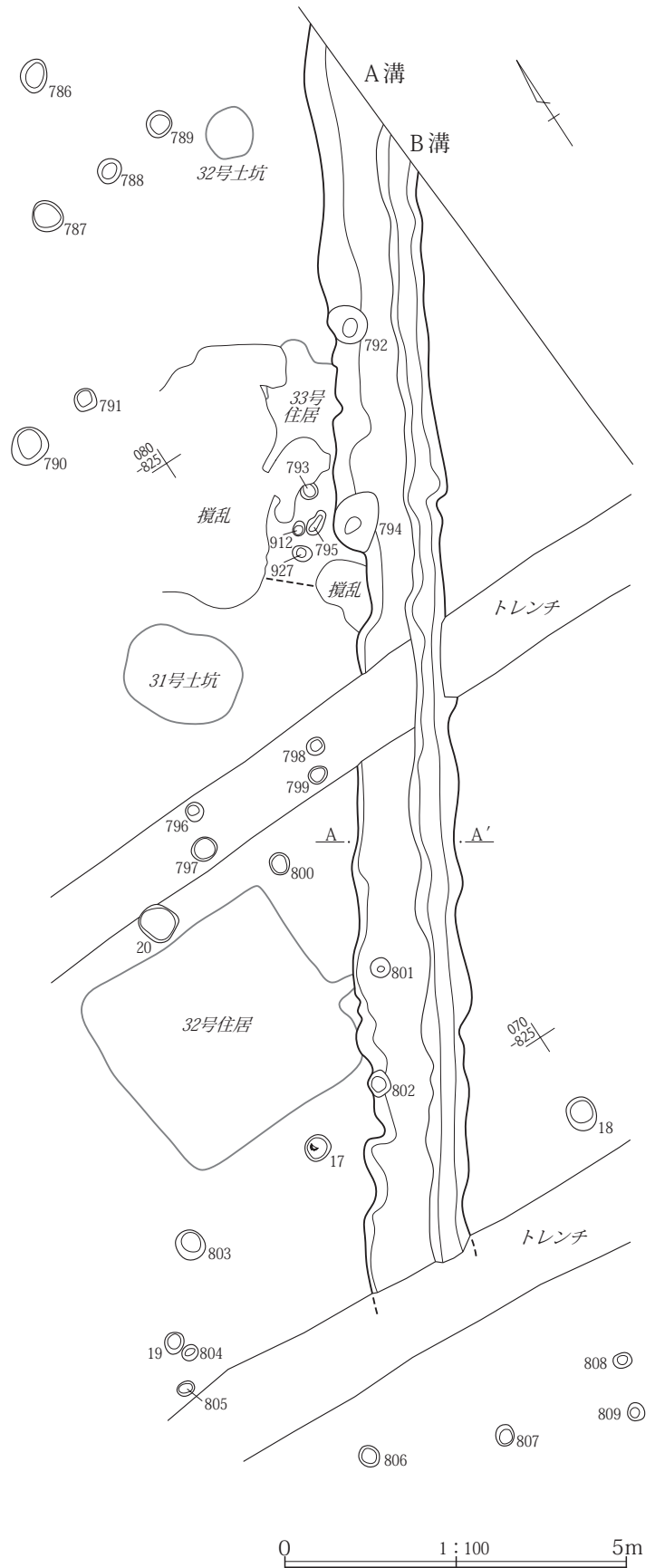
位置 北東端は084、-819グリッドに、南端は067、-827グリッドにある。

形状規模 当初の溝は幅細のやや深い溝(B溝)で、大半が埋没した後、北西側に浅くやや幅太に拡幅している(A溝)。A溝は部分的に西隅がやや深くなる傾向がある。B溝を併せて道の両側溝を想定したが、全体の規模からは難しい。残存する範囲でA溝は長さ18.1m、全体幅105~163cm、深さ3~14cmを測る。B溝は幅38~71cm、深さ15~24cmである。底面レベルはA溝では高低差6cm前後の凹凸があるが、全体ではほぼ水平で勾配は確認できない。B溝は南側へ低く緩やかに傾斜していて勾配は0.9:100である。

方位 N-31° E

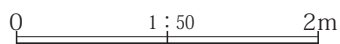
埋没土 As-Aの可能性のある軽石が混じる。B溝は人為的埋戻しの可能性がある。

備考 32・33号住居に後出している。9号溝同様に現道と平行した走向で、比較的新しい施設と思われる。本溝西側50cm前後の位置に793・795・798・799号等の小ピットが並ぶように確認できる。ピット間隔は不規則だが、柵状の施設が平行して取り付けられていた可能性がある。出土遺物は小破片を含めて見られなかった。



10号溝土層説明

- 1 黒褐7.5YR3/2 As-Aの可能性のある軽石粒・ローム粒を含む粘性土。A溝埋没土。
- 2 明褐7.5YR5/8 1層と同じ軽石粒を少量、ローム粒を多く含む。B溝上層埋没土。
- 3 褐7.5YR4/4 軽石粒を少量含むB溝下層埋没土。



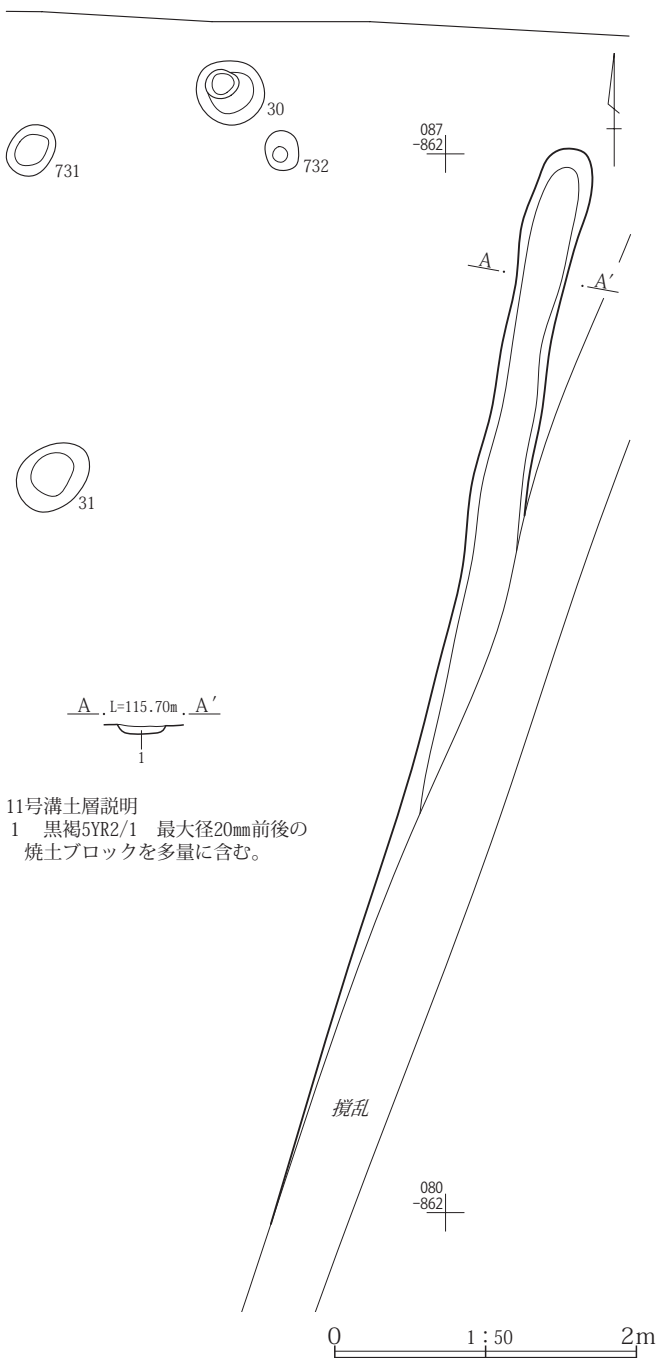
第172図 10号溝

11号溝(第173図 PL.40-①)

東4区北東隅の遺構の少ない一画にある。南側を攪乱によって削られ全容を把握できないが、残存部分では直線的な溝である。

位置 北端は087、-861グリッドに、南端は080、-863グリッドにある。

形状規模 残存する範囲で長さ7.1m、幅35cm前後、深さ3~11cmを測る。底面レベルは高低差3cm前後の凹凸があるが全体ではほぼ水平で、勾配は確認できない。



第173図 11号溝

方位 N-11° E

埋没土 焼土の混入がやや多く見られる。住居カマド等との重複がなく、不自然な単層埋没土であり、人為的埋戻しの可能性がある。

備考 本溝西側約10mにある17号溝、約30m西側にある15号溝など小規模な溝が近似した長軸方向で並んでいる。いずれも水路的な溝ではなく、畠外縁部など区画溝的な施設が考えられる。近世遺構と想定される9・10号溝の走向とは異なり、軽石の混入も見られないことから近世前半以前の遺構と推測する。出土遺物には平安時代の土師器6点、須恵器3点が見られた。

12号溝(第174図 PL.40-②)

東5区北西側で確認した溝で3カ所に分断されているが、弧状に繋がる1条の溝と考え全体を12号溝とし、北側よりA溝・B溝・C溝と分けて記載する。北側は調査区境にかかり全容を把握できていない。

位置 A溝北端は087、-842グリッド、南端は082、-841グリッドにある。B溝北端は076、-840グリッド、南端は074、-841グリッドにある。C溝北端は073、-841グリッド、南端は069、-841グリッドにある。

形状規模 A溝は直線的で残存する範囲で長さ4.6m、幅38~67cm、深さ4~12cmを測る。3本の溝の中で最も規模が大きい。B溝も直線的で残存する範囲で長さ2.2m、幅34~48cm、深さ3~10cmを測る。C溝は幅狭で東側へ膨らむようにわずかに湾曲していて全長4.4m、幅15~39cm、深さ3~8cmを測る。底面はA・C溝で中央がやや深くなり、B溝は北側へ低く傾斜していて勾配は2.4:100である。

方位 A溝：N-15° W B溝：N-9° E

C溝：N-11° E

埋没土 A・B溝は同質の単層で、C溝のみ炭化物粒混じりの異なる自然堆積土層である。As-Aの可能性のある軽石を含む。水流の痕跡はない。

備考 A溝南端は33・37号土坑、B溝北端は34号土坑と重複している。C溝は2号柱穴列と重複している。土師器16点、須恵器8点が出土しているが、微細片がほとんどであった。

13号溝(第174図 PL.40-②)

12号溝の東側に約1.2mの間隔を保つようにして並ぶ直線的な溝である。同溝との間隔は北隅のみやや広がるが、全体では道の両側溝状の対になる施設と考えられる。北隅は調査区境にかかり、全容を把握できていない。

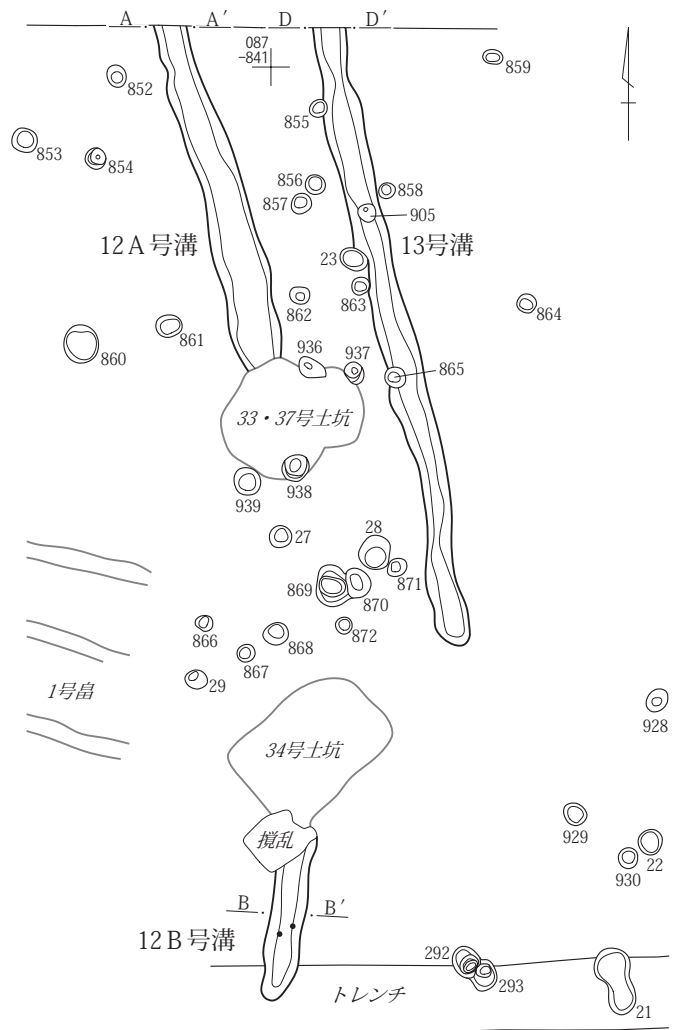
位置 北端は087、-840グリッドに、南端は079、-838グリッドにある。

形状規模 残存する範囲で長さ8.3m、幅32~52cm、深さ5~12cmを測る。底面レベルは高低差5cm前後の緩やかに波打つような凹凸があり、勾配は確認できない。

方位 N-12° W

埋没土 12A号溝と近似した単層の埋没土で、水流の痕跡はない。

備考 23号ピット等と重複している。12号溝との間に硬化面や地山の窪みなどは確認できないが、道の両側溝と推定する。路面と推定される12号溝との間部分にも857号ピット等、多数のピットが見られる。この道の西側に1号畠があり、土地利用の変換点となっている可能性がある。出土遺物には土師器11点、平安時代の須恵器1点があった。



14号溝(第175図 PL.40-③)

東3区東寄りにある幅細で長い溝である。途中約1mの間隔で確認できない部分があるが、溝の規模や走向から同一の溝と考え全体を14号溝とし、隙間を挟んだ北側をA溝、南側をB溝と分けて記載した。

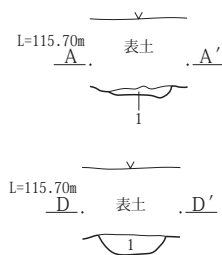
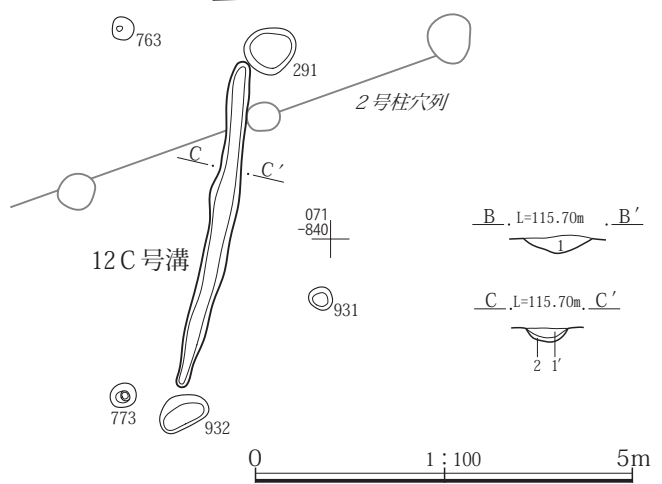
位置 A溝北端は084、-883グリッドに、南端は077、-887グリッドにある。B溝北端は076、-888グリッドに、南端は064、-892グリッドにある。

形状規模 A溝は西側へ膨らむように小さく湾曲していて全長7.9m、幅41~65cm、深さ4~18cmを測る。B溝は直線的で全長13.0m、幅42~73cm、深さ3~17cmを測る。底面レベルは緩やかな凹凸があるが、全体ではA溝は北側へ低く傾斜していて勾配は1.4:100、B溝では2.3:100である。

方位 A溝：N-29° E B溝：N-24° E

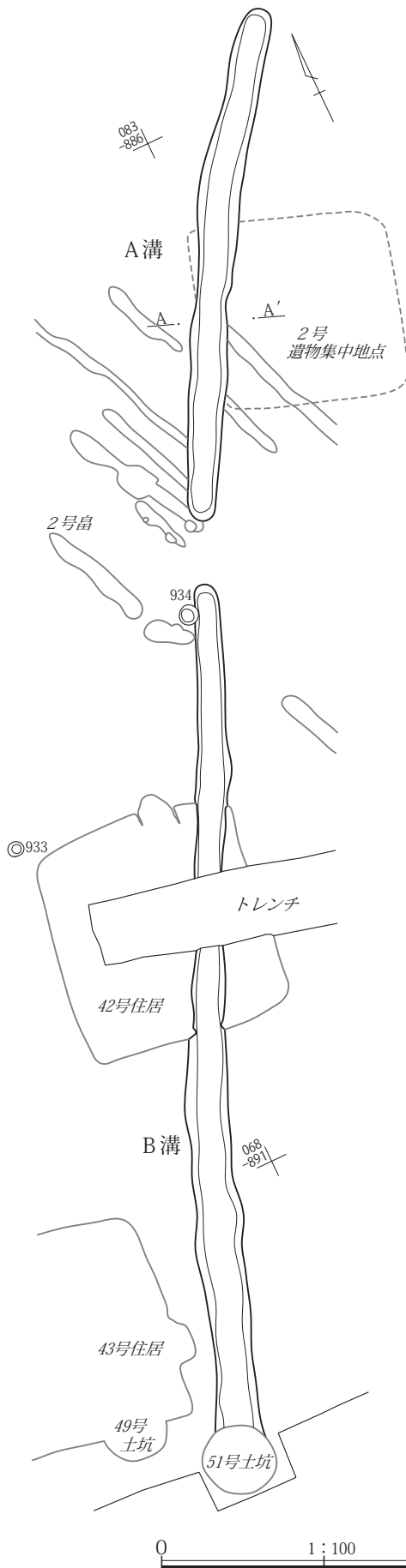
埋没土 水流や人為的埋戻しの痕跡はない。埋没土にAs-Aと思われる軽石の混入が多い。

備考 A溝は2号土器集中地点に後出し、2号畠と重複



12・13号溝土層説明
 1 黒褐7.5YR3/2 径1mm大の軽石をわずかに含む粘性土。12・13号の両溝に共通して見られる。1'は12C号溝土層に見られる炭化物粒が混じる、黄色味がやや強い層。
 2 暗褐色土7.5YR3/3 褐色粘土混じりのややしまり強い層で、炭化物粒を含む。

第174図 12・13号溝



している。A断面に畠の痕跡がなく、畠にも後出すると思われる。B溝は42号住居に後出している。南隅で51号土坑と重複しているが、この土坑重複部分で溝南側が途切れており、同土坑とは同時存在の可能性はある。東4・5区を区切る現道と近似した走向で、As-Aの可能性のある軽石を含み、江戸時代後期以降の溝である。土師器35点、須恵器4点を出土した。平安時代の遺物が主体で2号遺物集中地点などからの混入と思われる。

15号溝(第176図 PL.40-④)

攪乱によって約5mにわたり不明な部分があるが、連続する1条の溝と考えられる。南隅は調査区境にかかり全容を把握できていない。16号溝の東側に平行していて、道の両側溝状である。

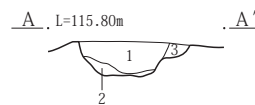
位置 北端は084、-893グリッドに、南端は062、-900グリッドにある。

形状規模 東側へ膨らむように小さな湾曲があるがほぼ直線的な溝で、残存する範囲で長さ23.3m、幅42~61cm、深さ8~17cmを測る。底面は比較的平坦で、地山の傾斜より緩やかに北側へ低く傾斜していて勾配は0.9:100である。

方位 N-18°E

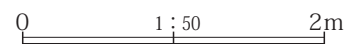
埋没土 水流や人為的埋戻しの痕跡はない。

備考 8号溝の東21m前後の位置に近似した軸方向で並んでいる。年代を推測する根拠を持たないが、同溝と近似した時期の施設となる可能性がある。土師器3点が出土している。



14号溝土層説明

- 1 暗褐7.5YR3/3 As-Aの可能性のある白色軽石粒を多く含み、ザラザラしている。
- 2 極暗褐7.5YR2/3 底面付近に見られる粘質土で軽石粒の混入は少ない。
- 3 暗褐7.5YR3/4 白色軽石粒を含むややしまり強い層で、2号畠畝間部分の可能性。



第175図 14号溝

16号溝(第176図 PL.40-④)

15号溝の西側に隣接し、道の両側溝状である。15号溝の屈曲により同溝からの距離は北側で90cm、南側で120cmとなり、若干差が生じている。

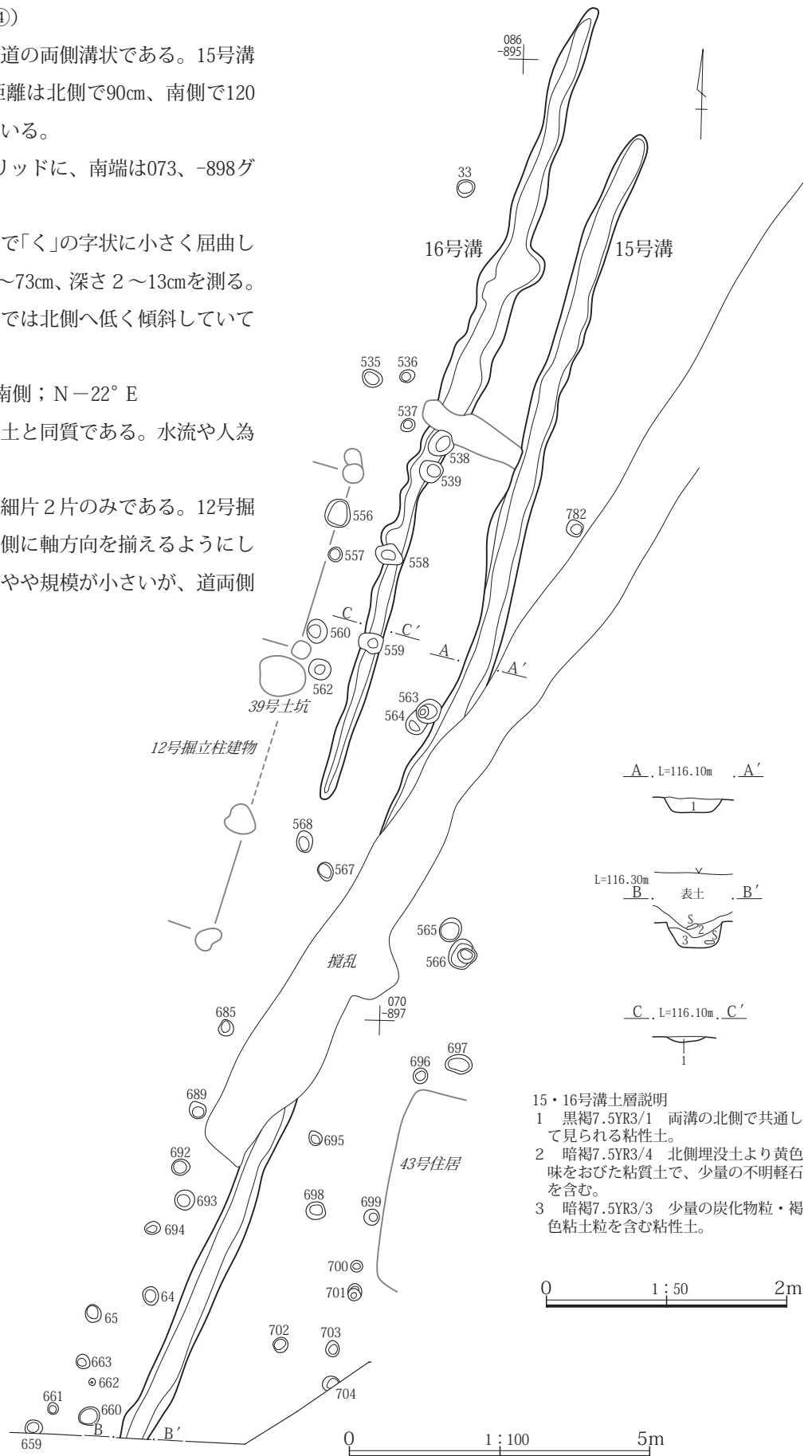
位置 北端は086、-894グリッドに、南端は073、-898グリッドにある。

形状規模 中央南寄り付近で「く」の字状に小さく屈曲している。全長13.9m、幅25~73cm、深さ2~13cmを測る。凹凸の少ない底面で、全体では北側へ低く傾斜している。勾配は2.3:100である。

方位 北側; N-17° E 南側; N-22° E

埋没土 15号溝北側の埋没土と同質である。水流や人為的埋戻しの痕跡はない。

備考 出土遺物は土師器微細片2片のみである。12号掘立柱建物が本溝の約1m西側に軸方向を揃えるようにして並んでいる。15号溝よりやや規模が小さいが、道両側溝として違和感はない。



第176図 15・16号溝

17号溝(第177図 PL.40-⑤)

東4区にあり、11号溝西側約10m付近にほぼ平行に並んでいる。遺構の少ない一画だが、本溝周辺のみピット状の遺構が見られる。北隅は調査区境にかかり、全容を把握できていない。

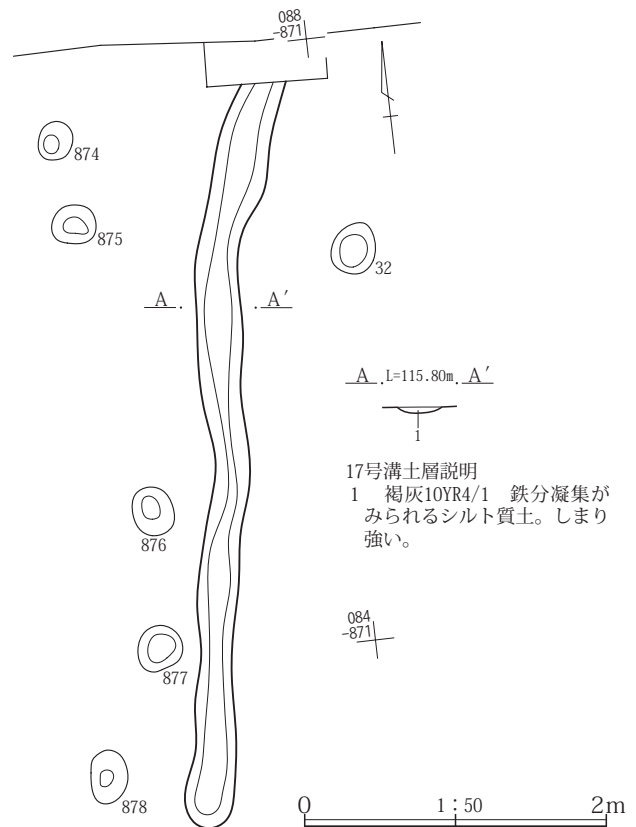
位置 北端は087、-871グリッドに、南端は082、-872グリッドにある。

形状規模 小さく蛇行し、特に北側は東方へ屈曲している。残存する範囲で長さ4.9m、幅21~35cm、深さ2~13cmを測る。底面レベルは高低差3cmの凹凸があるが、全体の勾配は確認できない。

方位 N-11° E

埋没土 鉄分凝集がみられるが、上面からの影響のようで、本溝埋没土に水流や人為的埋戻しの痕跡はない。

備考 南側約11mの南3区に19号溝がある。本溝とは規模や軸方向が異なるがほぼ延長線上にあり、関連する施設と思われる。区画溝的な性格が想定される。出土遺物はない。



第177図 17号溝

18号溝(第178図 PL.40-⑥)

東2区南寄りの遺構の少ない一画にある。北西側は調査区境にかかり全容は把握できていない。

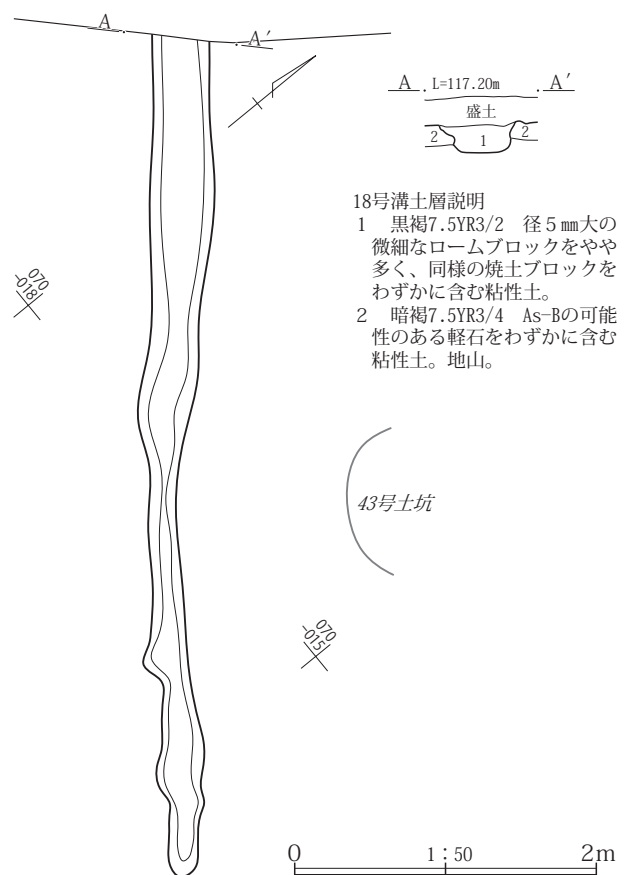
位置 北西端は072、-018グリッドに、南東端は068、-014グリッドにある。周辺は南西側へ向かって低くなり、等高線に平行する走向である。

形状規模 ほぼ直線的な浅い溝で、残存する範囲で長さ5.6m、幅18~43cm、深さ2~7cmで、規模は一様ではない。底面レベルは高低差4cmの凹凸があるが、全体の勾配は確認できない。

方位 N-51° W

埋没土 単層で水流や人為的埋戻しの痕跡はない。

備考 As-Bに後出すると思われる以外の年代を推定する根拠を持たないが、比較的上層から掘り込まれているようで、近世以降の区画溝と思われる。出土遺物はない。



第178図 18号溝

19号溝(第179・180図 PL.40-⑦、59 遺物観察表247頁)

東3区東隅にある。21・22溝など溝のやや密集した一面にある。南側は調査区境にかかり、全容を把握できていない。本溝延長線を北側へ辿ると17号溝に至り、同溝と関連する施設になる可能性がある。

位置 北端は071、-873グリッドに、南端は062、-872グリッドにある。

形状規模 西側へ膨らむように湾曲する幅太の溝で、残存する範囲で全長8.7m、幅99~161cm、深さ11~30cmを測る。数度の掘り直しがあるようで底面は不整で高低差4cm前後の凹凸がある。

方位 北側：N-11°E 南側：N-4°W

埋没土 水平の堆積が観察され、自然堆積と思われるが上層に炭化物粒や焼土の混入が見られる。竪穴住居との重複はないが、全域に渡って土器の混入もやや多かった。

遺物 出土遺物は比較的多く溝のほぼ全域から出土し、土器1~8を図示した。他に土師器138点、須恵器48点があり、溝の中では最も多い遺物量だった。遺物は9世紀の所産で供膳具・煮沸具ともに豊富であった。住居遺物が投げ込まれたような状態と想定できる。

備考 本溝西側約2mにある41号住居は、本溝出土遺物と近似した時期の遺物を出土している。22B号溝とは本遺跡唯一の溝間重複だが、前後関係は把握できなかった。44号土坑に前出している。東調査区東側掘立柱建物群(7・9号掘立柱建物)の西側を画するような配置となっている。

21号溝(第179・180図 PL.40-⑨、59 遺物観察表247頁)

東3区東隅にあり、19号溝の西側3~4mに隣接し、同溝南側とは近似した走向にある。南側は調査区境にあり、北側は地山傾斜に呑み込まれるようにして途切れる。

位置 北端は075、-878グリッドに、南端は064、-878グリッドにある。

形状規模 輪郭は不整だが、全体ではほぼ直線的な溝となっている。残存する範囲で長さ10.9m、幅71~148cm、深さ13~23cmを測る。底面レベルは高低差13cmの凹凸があるが、全体での勾配は確認できない。

方位 N-5°W

埋没土 水流や人為的埋戻しの痕跡はない。

遺物 9世紀中頃の41号住居に前出している。図示した須恵器杯1は同住居掘り方に伴う可能性はあるが、底径が広く、住居遺物より古い8世紀後半ころの土器で、本溝の時期を示す遺物となる可能性もある。

備考 東3区中央以東、調査区東隅の東5区まで本溝と近似する軸方向の施設がなく、本溝の年代について補強する資料は得られない。

22号溝(第179図 PL.40-⑩)

東3区の東隅にある。東4区との境に沿って並ぶ2本の溝は途中約4.5mの隙間があるが、走向がほぼ同じで規模は幅がやや異なるが、同一の22号溝とした。北西側をA溝、南東側をB溝とした。

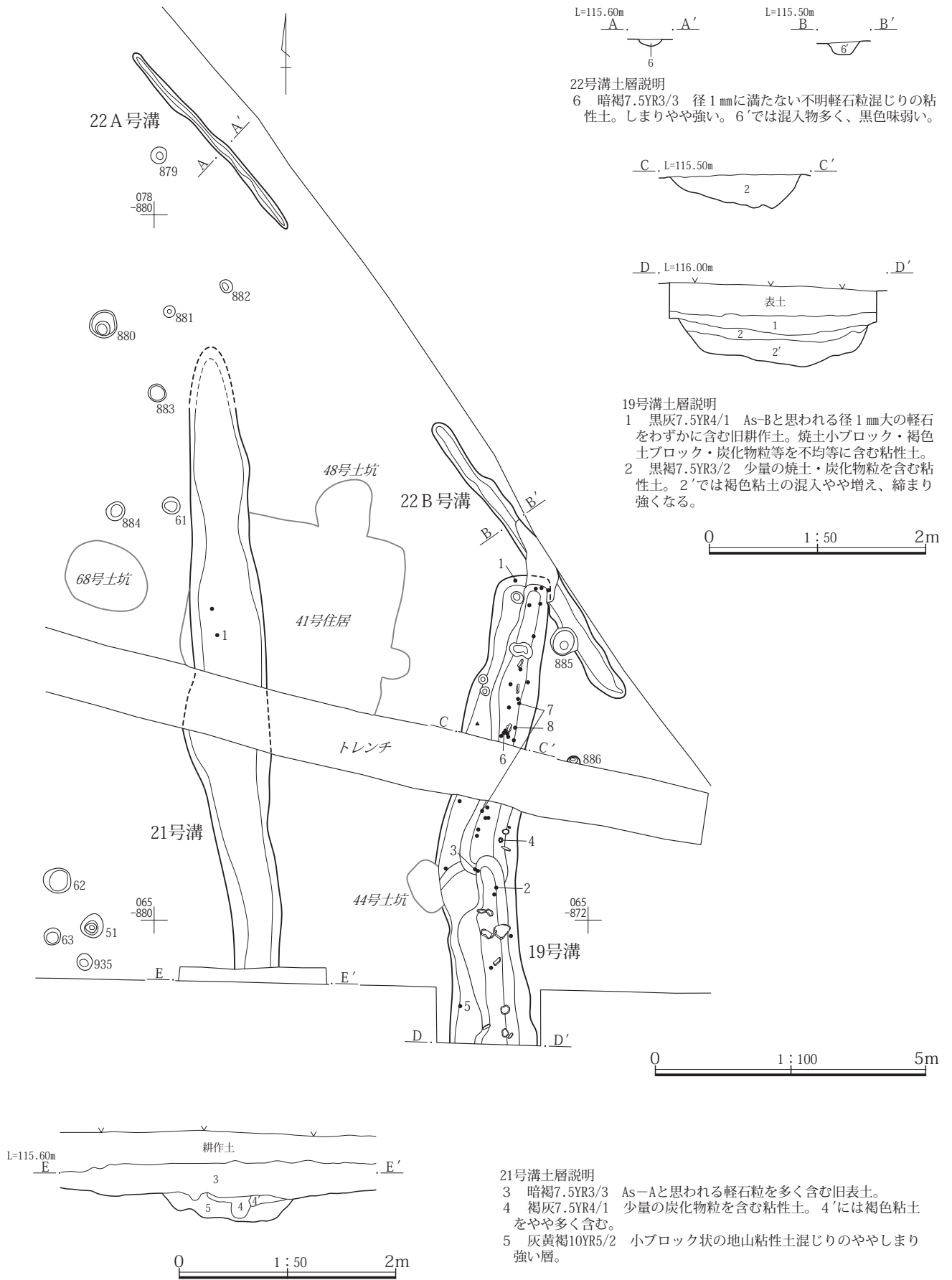
位置 A溝北西端は080、-880グリッドに、南東端は077、-877グリッドにある。B溝北西端は074、-874グリッドに、南東端は069、-871グリッドにある。

形状規模 A溝は全長4.3m、幅15~23cm、深さ2~8cmを測る。幅狭で、調査段階当初では西側にある2号畠と繋がる畝間を想定していた。B溝は幅広で全長6.1m、幅27~53cm、深さ3~10cmを測る。底面レベルは高低差cmの凹凸がある。A B両溝の全体では南東側へ低く傾斜していて勾配は1.2:100である。

方位 A溝：N-42°W B溝：N-36°W

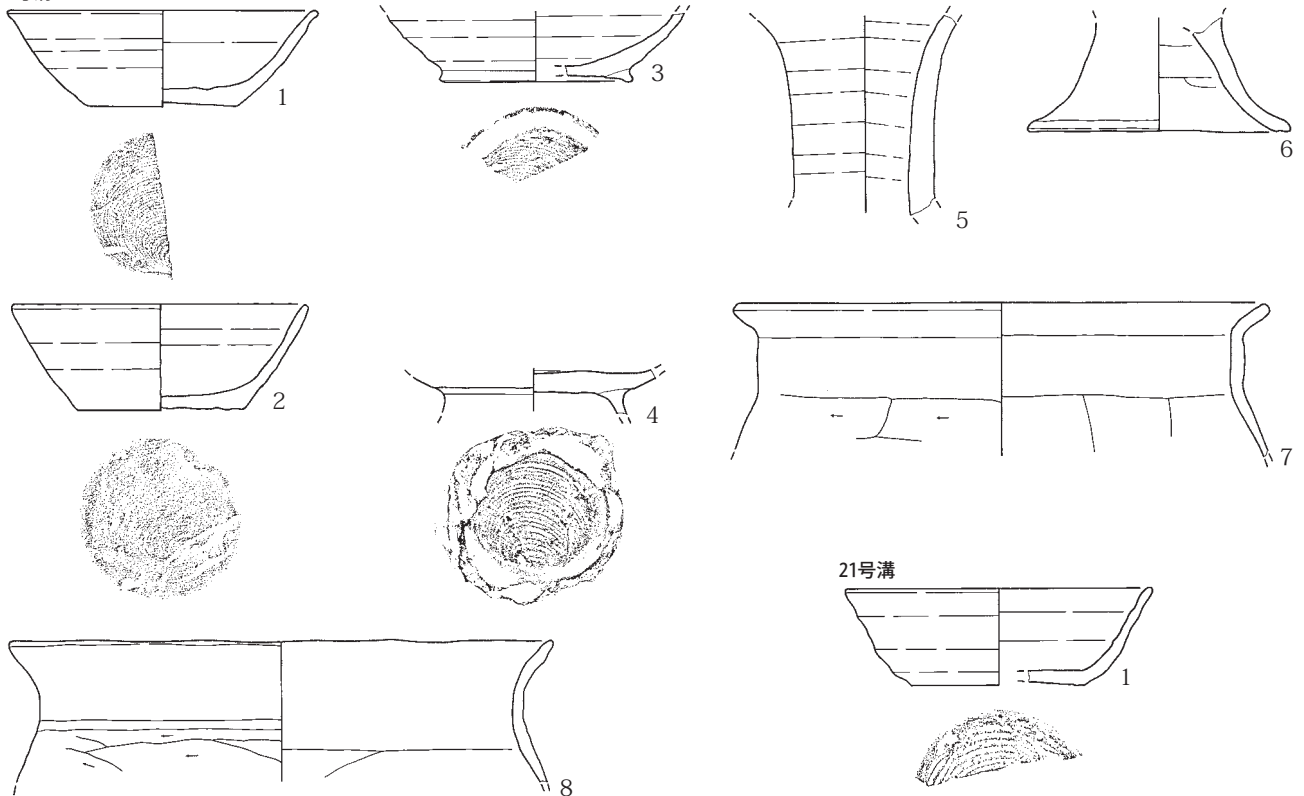
埋没土 水流や人為的埋戻しの痕跡はない。

備考 出土遺物はない。東3・4区を区切る下水道施設に平行しており、近世以降の区画に沿った新しい施設となる可能性がある。



第179図 19・21・22号溝

19号溝



第180図 19・21号溝出土遺物

20号溝(第181図 PL.40-⑧)

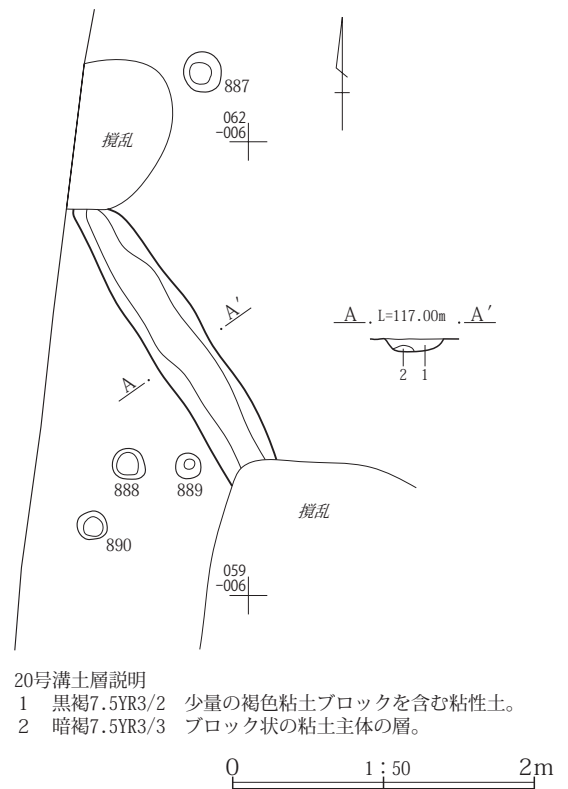
東3区南側拡張区の比較的遺構の少ない一画にある。南東側は広い攪乱のため不明瞭である。北西側も攪乱にかかっているが、端部付近まで把握できたと思われる。
位置 北西端は061、-007グリッドに、南東端は059、-005グリッドにある。

形状規模 直線的な幅細の溝で残存する範囲で長さ2.1m、幅23~40cm、深さ4~9cmを測る。南東側攪乱先に本溝の続きは確認できず、直線的な溝であればこの先2.5m以内で途切れる。底面レベルは細かな凹凸があり全体での勾配は確認できない。

方位 N-33°W

埋没土 ブロック状の堆積土が見られ、人為的埋戻しと思われる。

備考 平安時代の土師器3点、須恵器1点を出土している。付近に該期の住居等はないが、埋没土内の小破片で、本遺構に伴う遺物とは認定できない。本溝延長線を北西側へ辿ると東2区の18号溝に至る。軸方向が異なるが規模は近似しており、同溝と関連する施設になる可能性がある。



20号溝土層説明

- 1 黒褐7.5YR3/2 少量の褐色粘土ブロックを含む粘性土。
- 2 暗褐7.5YR3/3 ブロック状の粘土主体の層。

第181図 20号溝

9 畠

本遺跡では畝間もしくは耕作痕と思われる平行して連続する3条以上の細い溝状の窪みを4カ所で確認し、畠として扱った。耕作痕となる可能性のある窪みを含んでいるが、すべて畝間と呼称した。すべての畠で畝部分は全く確認されず、畝間のみ把握である。どの畠も東調査区での確認であるが、西隅は東3区南拡張部分、東側は東5区にあり広範囲に広がっている。このうち2カ所が東5区にあった。いずれの畠も遺物の出土が全くなく、火山灰等の鍵層も確認されず、年代を確定する根拠を持たない。

各畠の畝間には1条ずつ○数字で番号を付け、説明の助とした。

1号畠(第182図 PL.41-①・②)

東5区北西寄りの、ピット以外に遺構の少ない一画にある。4本の畝間のみの確認で畝間③と④は連続する畝間の可能性がある。

位置 077～081、-842～852グリッド

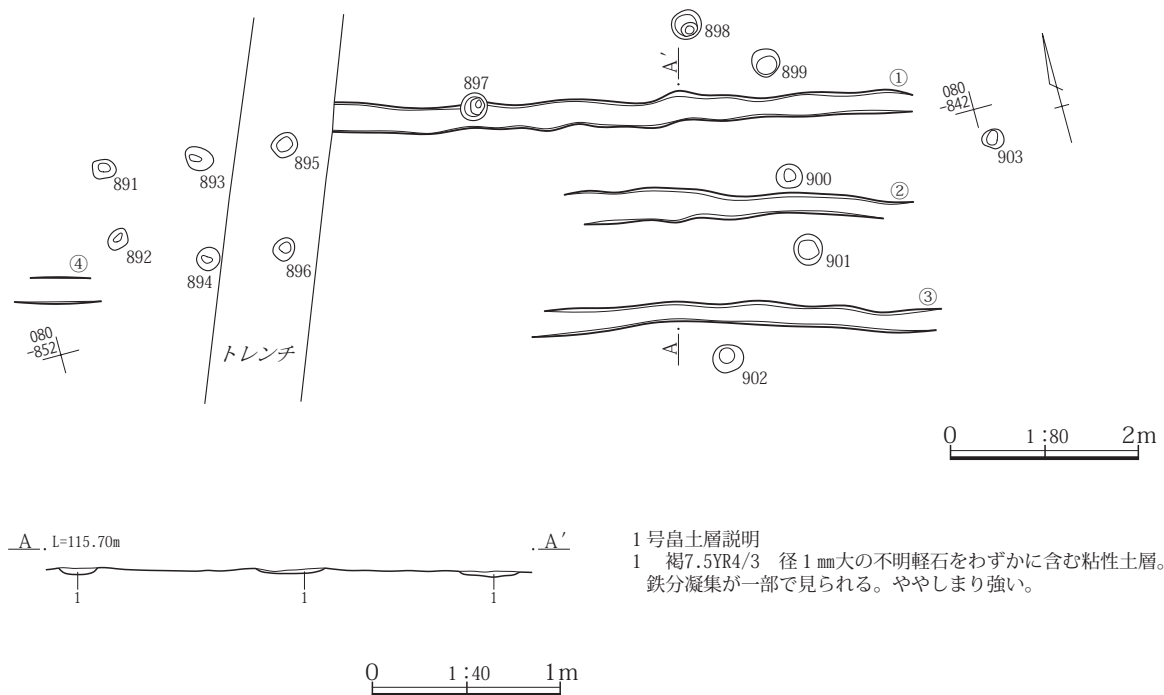
方位 N-76° W

規模形状 全体の長さが9.9m、幅2.5mを測る。各畝間は直線的で、底面が広く、深度の乏しい近似した遺構である。畝間の間隔も芯々距離で100～120cmを測り、広めで一定している。

備考 畝間の作る区画内とその周辺に12基のピットがあった。いずれも15cm以上の深度があり、畠に係わる耕作痕や作物の痕跡とは考えにくい。また東側には12・13号溝が造る道両側溝状の施設が見られる。また、南側約11mには4号畠が広がっている。

1号畠畝間計測表 (cm)

番号	長さ	幅	深さ	方向
①	613	20～32	1～3	N-78° W
②	369	18～35	1～2	N-74° W
③	435	19～28	1～2	N-75° W
④	93	25～28	1	N-74° W



第182図 1号畠

2号畝(第183図 PL.41-③・④)

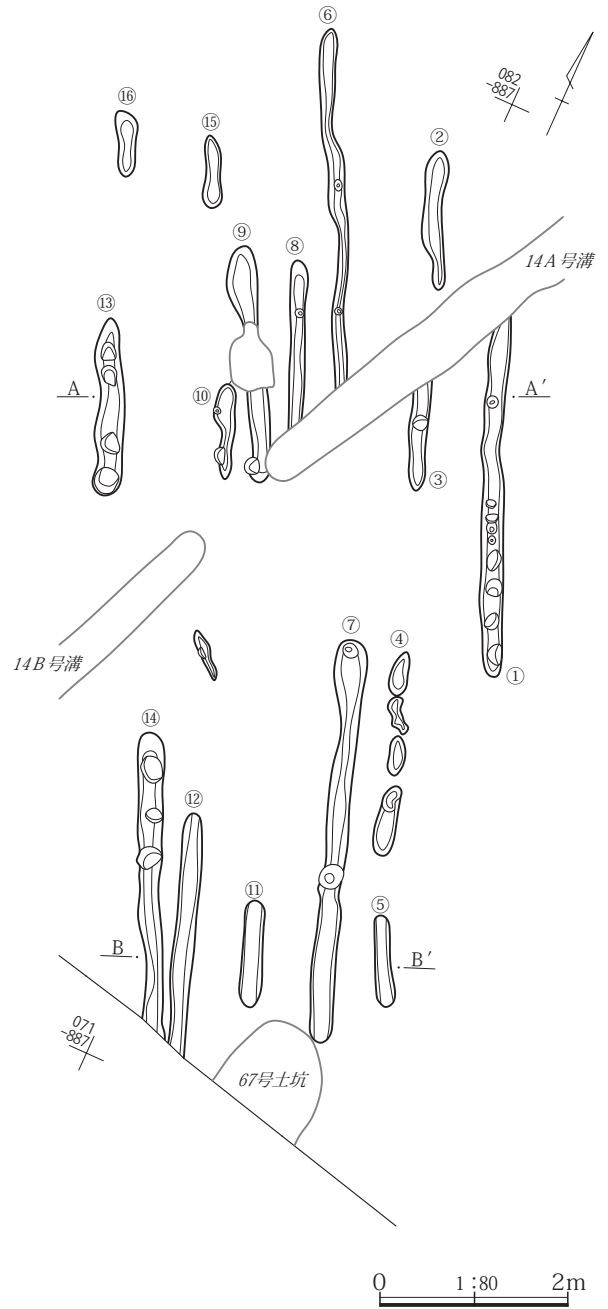
東3区東隅付近の遺構のやや少ない一画にある、本遺跡内で最も広い畝である。ただし、各畝間は比較的幅狭で、畝間の間隔や方向も一様でなく、2時期以上の畝と思われる、さらに耕作痕が混じる可能性がある。畝間②と③、および④と⑤は連続する畝間の可能性がある。

位置 071～081、-884～890グリッド

方位 ⑦N-19°W ⑭N-26°W

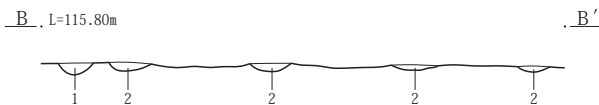
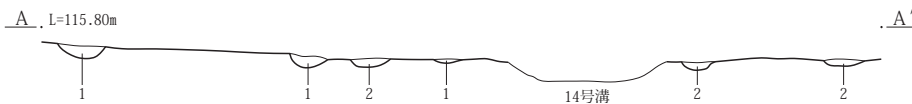
規模形状 全体の長さが10.8m、幅4.3mを測る。各畝間の形状は⑫のように直線的なものが多いが、⑥のように蛇行するものがある。④は途中3カ所で途切れる窪みを1条の畝間として扱った。

備考 ①の南側、⑬、⑭の北側等に掘削工具痕と思われる連続した窪みが見られる。畝間底面から3cm前後の深さで、明瞭な窪みではない。平安時代の土器を出土する2号土器集中地点に後出し、時期不明の14号溝に前出すると思われる。



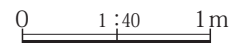
2号畝畝間計測表 (cm)

番号	長さ	幅	深さ	方向
①	385	18～26	1～4	N-22° W
②	147	12～25	1～4	N-24° W
③	109	16～20	4	N-21° W
④	215	10～22	2～6	N-18° W
⑤	96	15～20	1～2	N-30° W
⑥	381	11～18	1～3	N-26° W
⑦	425	18～35	1～7	N-20° W
⑧	181	13～18	1～4	N-25° W
⑨	251	15～32	3～5	N-29° W
⑩	101	13～22	3～8	N-22° W
⑪	113	20～23	1～4	N-21° W
⑫	256	17～23	1～7	N-30° W
⑬	187	23～32	7～13	N-23° W
⑭	325	18～28	4～8	N-25° W
⑮	77	13～19	6～7	N-24° W
⑯	70	16～23	5～9	N-23° W



2号畝土層説明

- 1 黒褐10YR3/2 シルト質土層。径1mm大の不明軽石をわずかに含む。斑状に鉄分凝集が見られる。しまり強い粘性土層。
- 2 黒褐7.5YR3/2 やや黄色味をおびる、1に近似した層。



第183図 2号畝

3号畠(第184図 PL.41-⑤)

東3区西隅の南側拡張部分の遺構の少ない一画にある。東西幅の狭い調査地点で、南隅は調査区境にあたり全容を把握できていない。付近は北側へわずかに低くなる傾斜面で、畝間は等高線に直交する走向となっている。東側にある畝間①・②は長さに乏しく、畝間とするには疑問も残る。畝間③～⑥および⑦・⑧は連続する畝間と思われる。

位置 053～057、-004～007グリッド

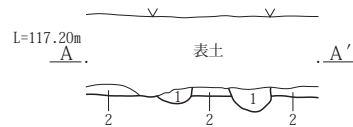
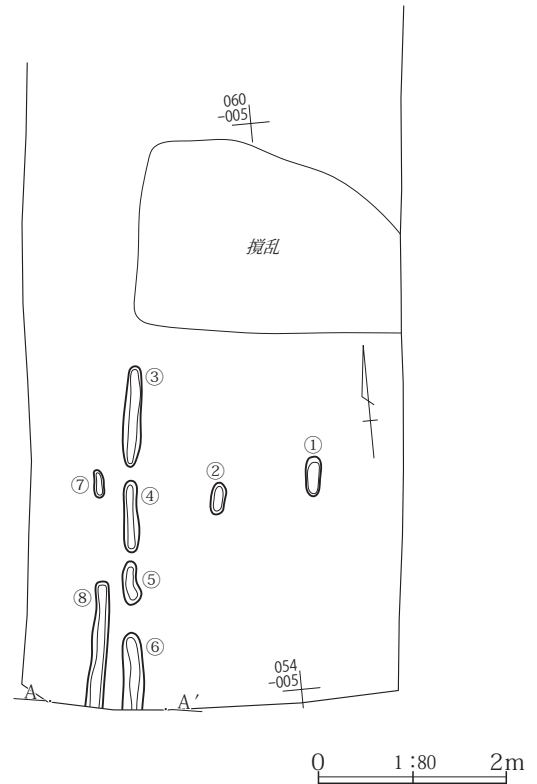
方位 ④N-7°E ⑧N-10°E

規模形状 全体の長さが3.6m、幅が2.4mを測る。①・②は長さ40cm前後の小規模なものだが、方向が他の畝間と同じで、一連の畠畝間と考え全体を畠とした。

備考 他の畠から大きく離れており、最も近い東側の2号畠からも115mの距離がある。年代を想定する根拠を持たない。表土面から40cm以上深度のある確認面での検出だが、西側に隣接する現道に沿った畝間方向で、比較的新しい遺構の可能性もある。断面図2層に見られる軽石はAs-Aの可能性はあるが、明確にできなかった。①・②・⑦はごく小規模な窪みで、畝間下にある耕作具による掘削痕部分が確認された可能性もある。また①・②・④の畝間間隔が100cm前後で一定しているが、⑦・⑧は東側畝間④・⑥に近接し、時期の異なる畝間と考えられる。

3号畠畝間計測表 (cm)

番号	長さ	幅	深さ	方向
①	42	15～17	4	N-9°E
②	34	14～16	6	N-7°E
③	107	14～20	2～5	N-7°E
④	76	13～16	1～2	N-4°E
⑤	46	14～19	3～4	N-3°E
⑥	82	19～22	2～8	N-4°E
⑦	29	17～21	2	N-1°W
⑧	134	24～29	1～4	N-9°E



3号畠土層説明

- 1 黒褐7.5YR3/1 少量の軽石を含む畝間内埋没土。ややしまりある粘性土。
- 2 暗褐7.5YR3/3 褐色粘土・軽石粒を含む粘性土。

第184図 3号畠

4号畠(第185図 PL.41-⑥・⑦)

東5区南西隅の、遺構の密集する一画にある。付近はごくわずかな起伏があるが、ほぼ平坦な地形である。

位置 066~072、-849~856グリッド

方位 N-82°W

規模形状 全体の長さが6.5m、幅6.0mを測る。畝間①・②は長さ70cm前後の小規模なものだが、方向が他の畝間と同じで、一連の畝畝間と考えた。各畝間は直線的で、畝間間隔は③~⑤および①・②間とも120cm前後で共通し、畝間方向も近似した遺構である。

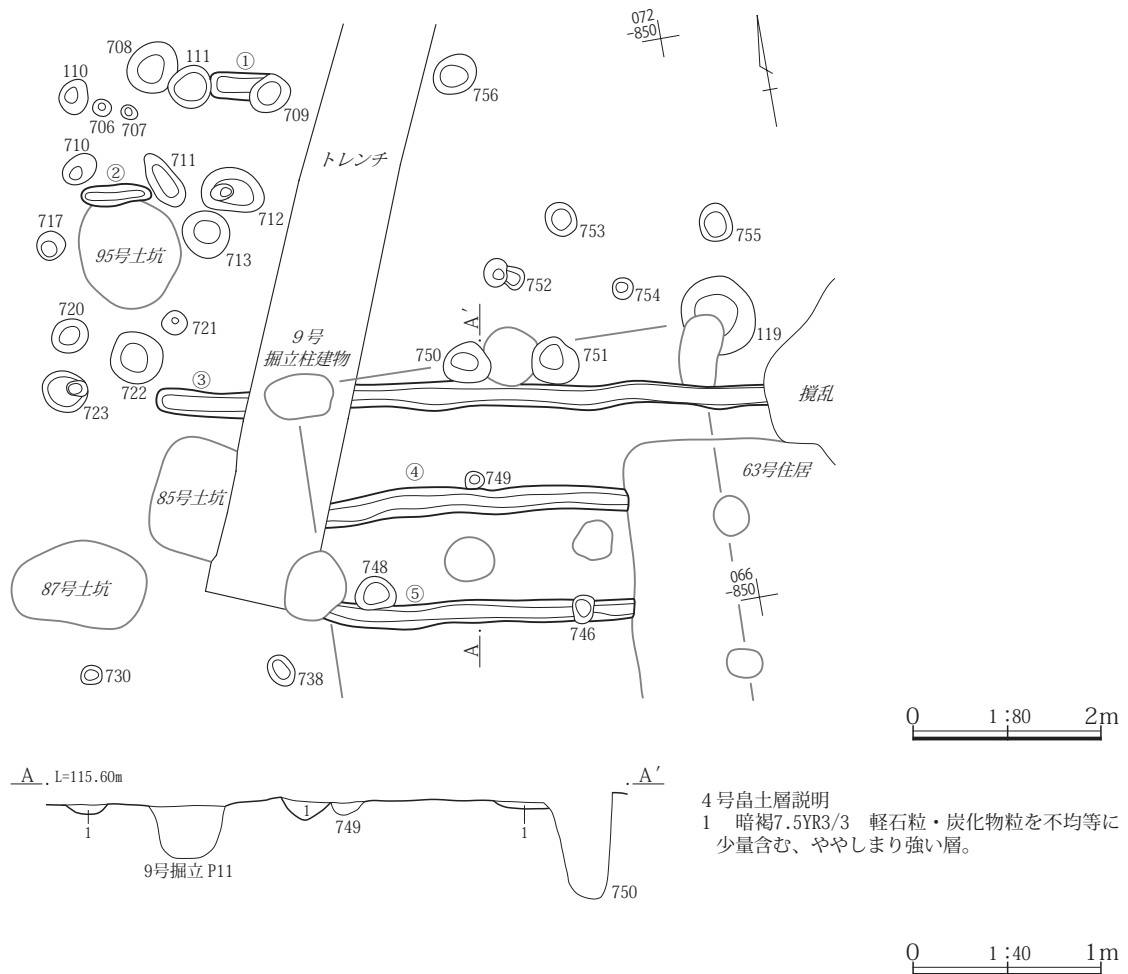
備考 1号畠の南側約11mにある。1号畠とは12・13号

溝が造る道両側溝状施設の西側に位置する点が共通している。また方向は1号溝と5°前後の差で近似している。

1号畠は幅25cm前後、畝間間隔120cm前後で本畠と規模はほぼ等しく、同一の畠となる可能性がある。同一畠であれば南北の長さ約16mの広範な規模の畠となる。9号掘立柱建物に前出する可能性のある750号ピットに前出すると思われるが明瞭ではない。8世紀と推定される63号住居と重複しているが、同住居の埋没土に本畠の畝間が確認できず(第116図B断面)、住居に前出する可能性がある。

4号畠畝間計測表 (cm)

番号	長さ	幅	深さ	方向
①	62	27~29	16	N-79° W
②	74	16~22	7	N-80° W
③	645	20~31	1~12	N-81° W
④	319	23~31	4~13	N-83° W
⑤	327	19~25	3~12	N-81° W



4号畠土層説明
1 暗褐色7.5YR3/3 軽石粒・炭化物粒を不均等に少量含む、ややしまり強い層。

第185図 4号畠

10 遺物集中地点

本遺跡では遺物が集中して出土した2カ所の地点について、包含層ではなく遺物集中地点と名付け、細かな記録を残しながら遺物取上げを行った。床面や炉などの施設は確認できなかったが、遺物出土範囲が竪穴住居と近似した規模で、平地住居のような遺構の存在が想定される地点である。

1号遺物集中地点

(第186～188図 PL.42-①～③、59・60 遺物観察表247・248頁)

調査範囲最西端の西1区西隅で確認した。重機による調査区の掘削中に遺物出土が多いことに気づき、掘削を中止した地点で、東側を失っている。西側も調査区境に達し、一部拡張して遺構・遺物の確認に努めたが全容を把握できていない。

位置 090～093、-181～183グリッドにある。

規模形状 遺物が集中して出土したのは南北約3m、東西約1.7mの範囲である。

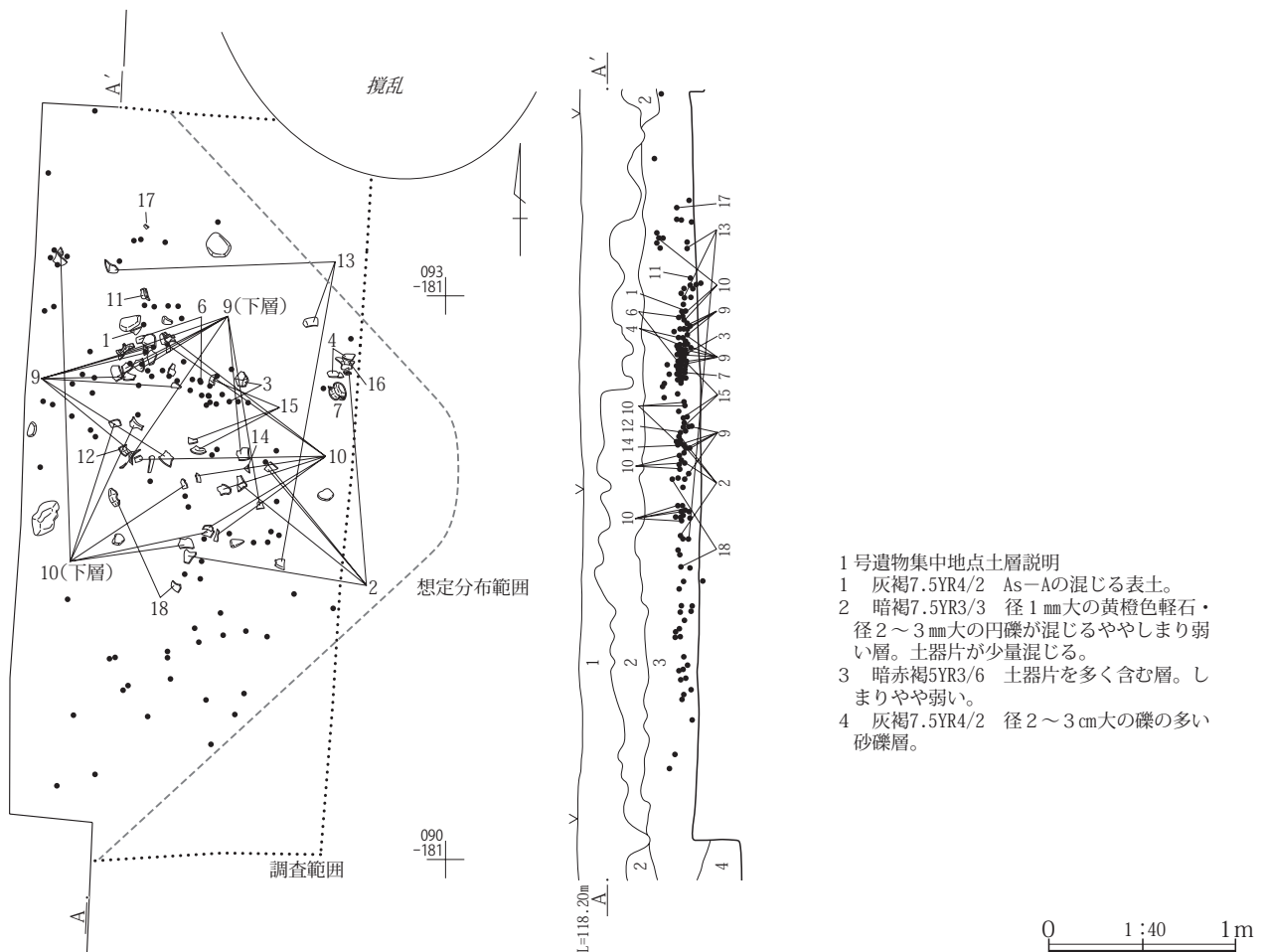
埋没土・壁 拡張調査する前の調査区境壁面によって表土からの堆積土を観察しているが、壁の立ち上がりや床面の硬化面、掘り方埋戻し土等は確認できなかった。

床面 遺物の垂直分布をA断面に示した。出土遺物の高さから標高117.80m付近に床面があったと想定されるが、直接床面を示唆する痕跡は認められない。

その他 古式土師器を出土した27号住居からは35m、奈良時代の土器を出土した19号住居からは18m、それぞれ西側に離れている。

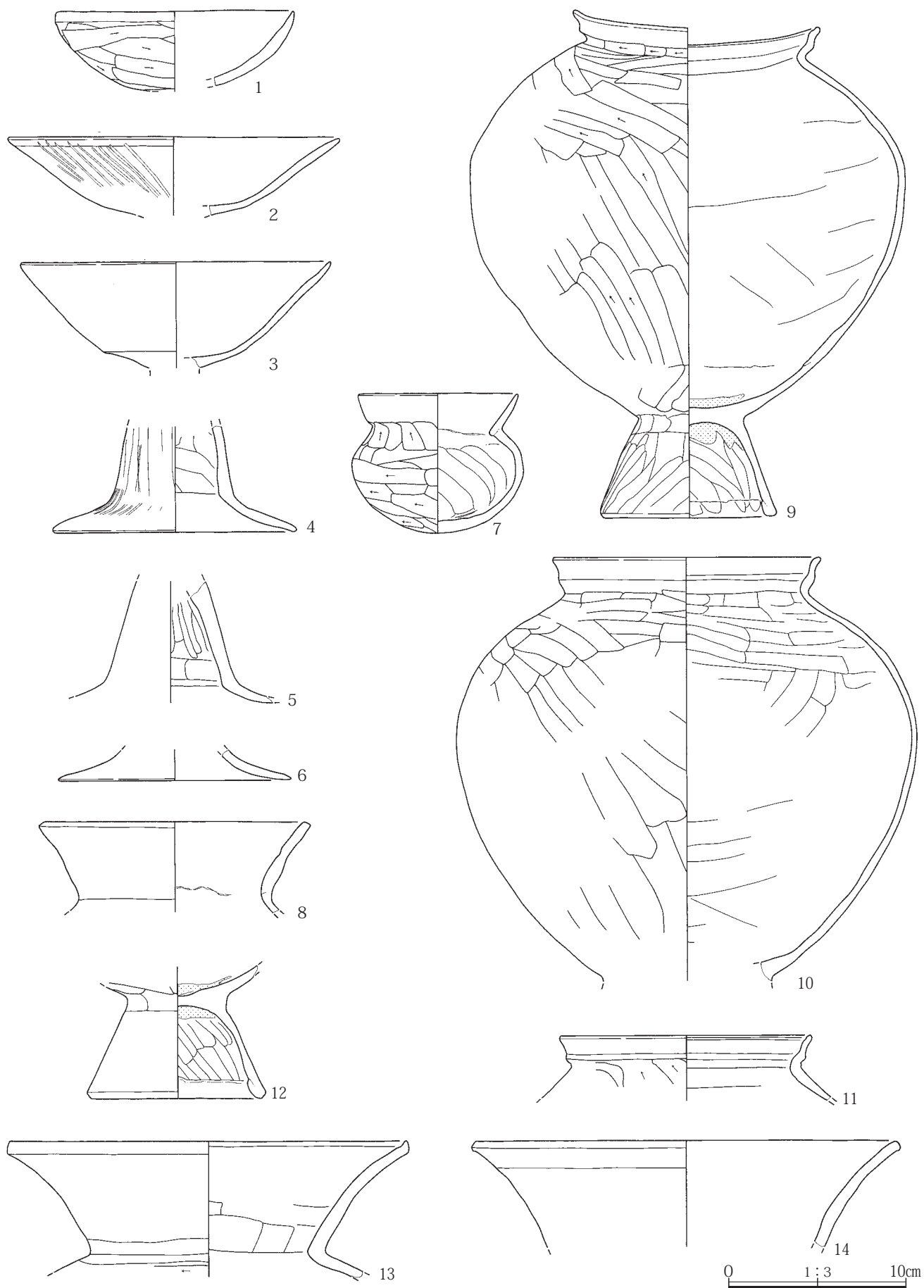
遺物 古式土師器14点を図示した。台付甕9～12の出土もあり、供膳土器と煮沸土器の揃った住居遺物として齧齶のないセットである。集中地点の外側や、やや上位からの出土が主体だが、奈良時代の土器も見られ4点(15～18)を図示した。

図示した以外の破片はほとんどが古式土師器で、甕類219点、杯類73点の土師器片が出土している。

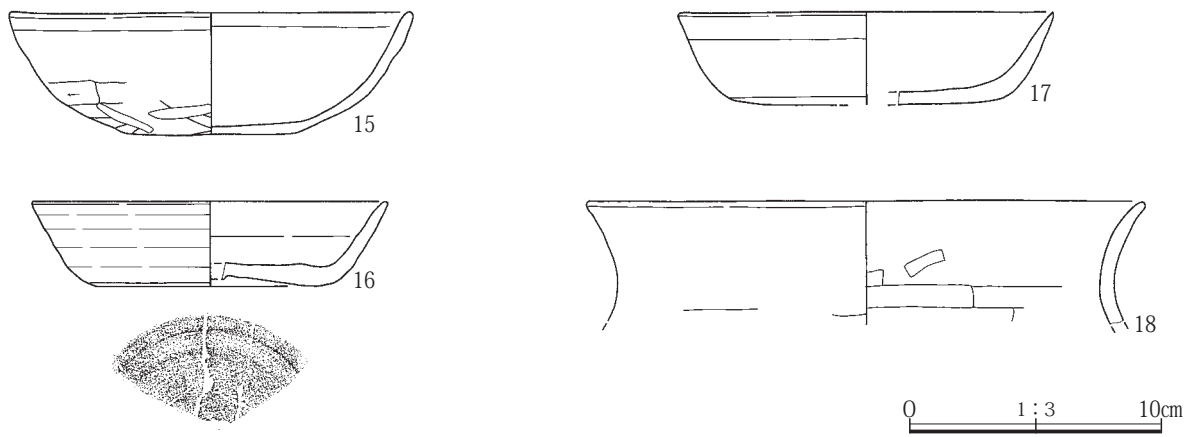


- 1号遺物集中地点土層説明
- 1 灰褐7.5YR4/2 As-Aの混じる表土。
 - 2 暗褐7.5YR3/3 径1mm大の黄橙色軽石・径2～3mm大の円礫が混じるややしまり弱い層。土器片が少量混じる。
 - 3 暗赤褐5YR3/6 土器片を多く含む層。しまりやや弱い。
 - 4 灰褐7.5YR4/2 径2～3cm大の礫の多い砂礫層。

第186図 1号遺物集中地点



第187図 1号遺物集中地点出土遺物(1)



第188図 1号遺物集中地点出土遺物(2)

所見 出土遺物は4世紀台の土器を中心としている。遺物出土範囲の外端を結んで輪郭を想定すると、図の薄破線のような方形プランとなる。軸方向N-42° W前後が想定され、古式土師器を出土した27・38号住居と同じ西側へ振れた方向である。ただし両住居には明瞭な柱穴があり、本遺構をこれらと同様の竪穴住居と想定するには疑問点が多い。

2号遺物集中地点

(第189～191図 PL.42-④～⑥、60 遺物観察表248・249頁)

東3区東隅の竪穴住居が途切れる一画にある。14号溝や2号畠によって遺物が散乱した可能性がある。

位置 遺物が集中して出土する範囲は078～081、-883～885グリッドであるが、少量ながら確認できる範囲は南端で073、-883グリッド、北端で082、-884グリッドまで広がっている。

規模形状 遺物が集中して出土する範囲は東西長3.0m、南北幅2.8m前後の方形区画が想定され、破線で示した。

面積 想定した範囲は8.3㎡前後となる。

床面 遺物の垂直分布をA断面に示した。遺物出土高から標高115.65m前後に床面があったと想定される。硬化面や炭化物粒の散布等の床の汚れなど、住居通有の床面の特徴は確認できなかった。また掘り方・カマドの痕跡も全く見られなかった。

その他 14号溝に前出している。2号畠にも前出すると想定される。埋没土の観察を欠いている。柱穴・壁溝な

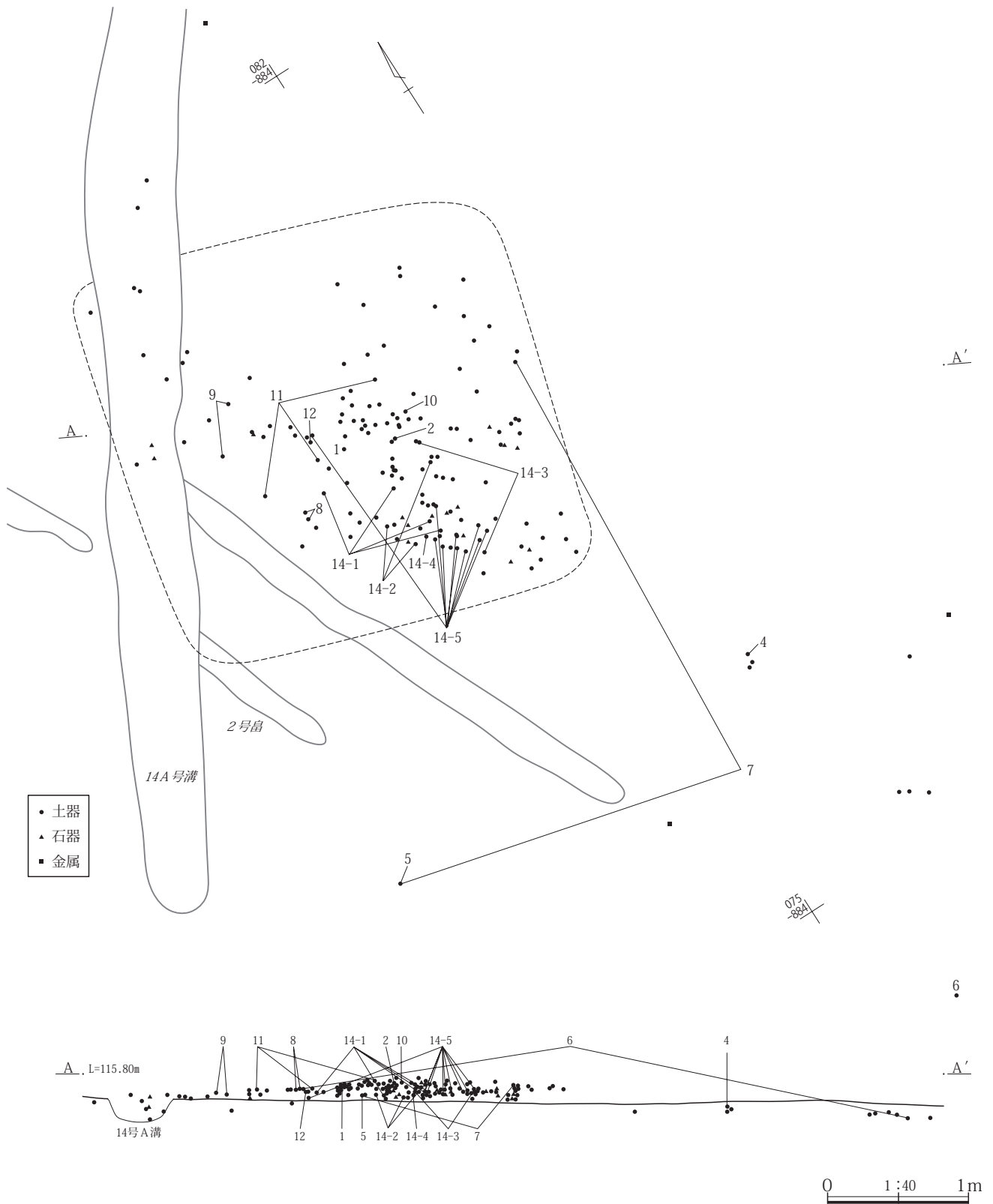
どの施設は確認できなかった。

遺物 土器13点を図示した。6・7など土器集中部分と南西側に離れて出土した資料の接合があり、土器集中部から耕作などで広く散乱した過程が想定できる。煮沸土器が少なく、図示に耐えるものがなかった。

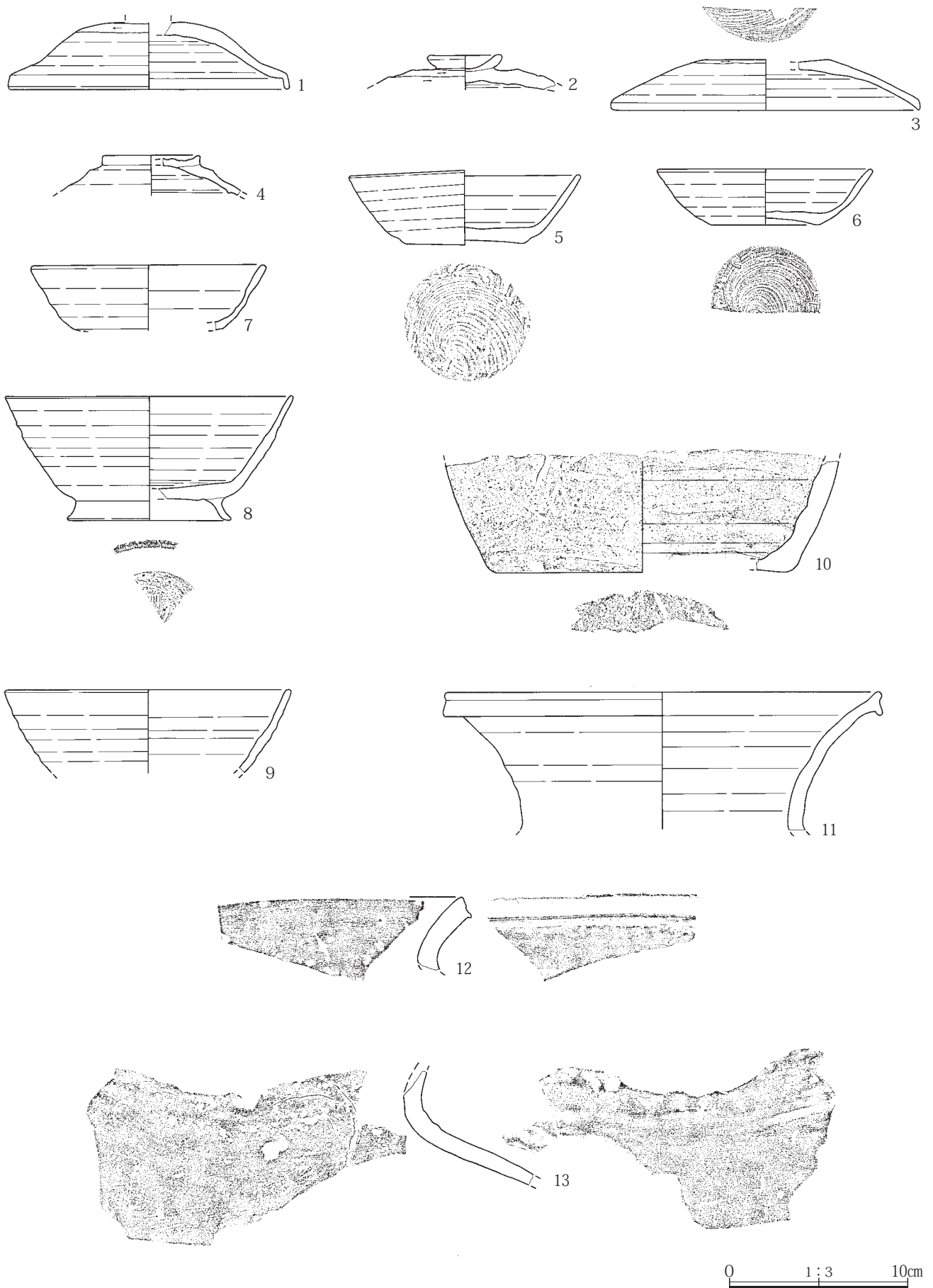
注目される遺物にカマド形土器14がある。同一個体と思われる破片が広範囲に散乱するようにして出土している。想定図を頁右上に記したが、掛口付近の破片は全く見られないうえ、幅・奥行などの規模が復元できるまで接合できず、大きさに根拠のあるものではない。5カ所の破片を図示し枝番号を付した。焚口周辺の底部分や底部など特徴的な破片を示したもので、14-1は焚口上面、14-2は右側面付近とともに底を伴い、14-2下端は底部まで達している。14-4・5は底部破片で接地面は直線的であり、カマド形土器の平面形が方形であったことが分かる。14-3は丸窓部分があり、側面に取っ手ではなく把持孔が開けられていたことが分かる。

図示した以外に221点の土器が出土した。このうち180点が須恵器で、壺甕類の多さが顕著だった。また、周辺からは鉄器の微細な破片の出土があった。錆により形状が不明瞭な近代以後の釘類と思われる図示を行っていない。

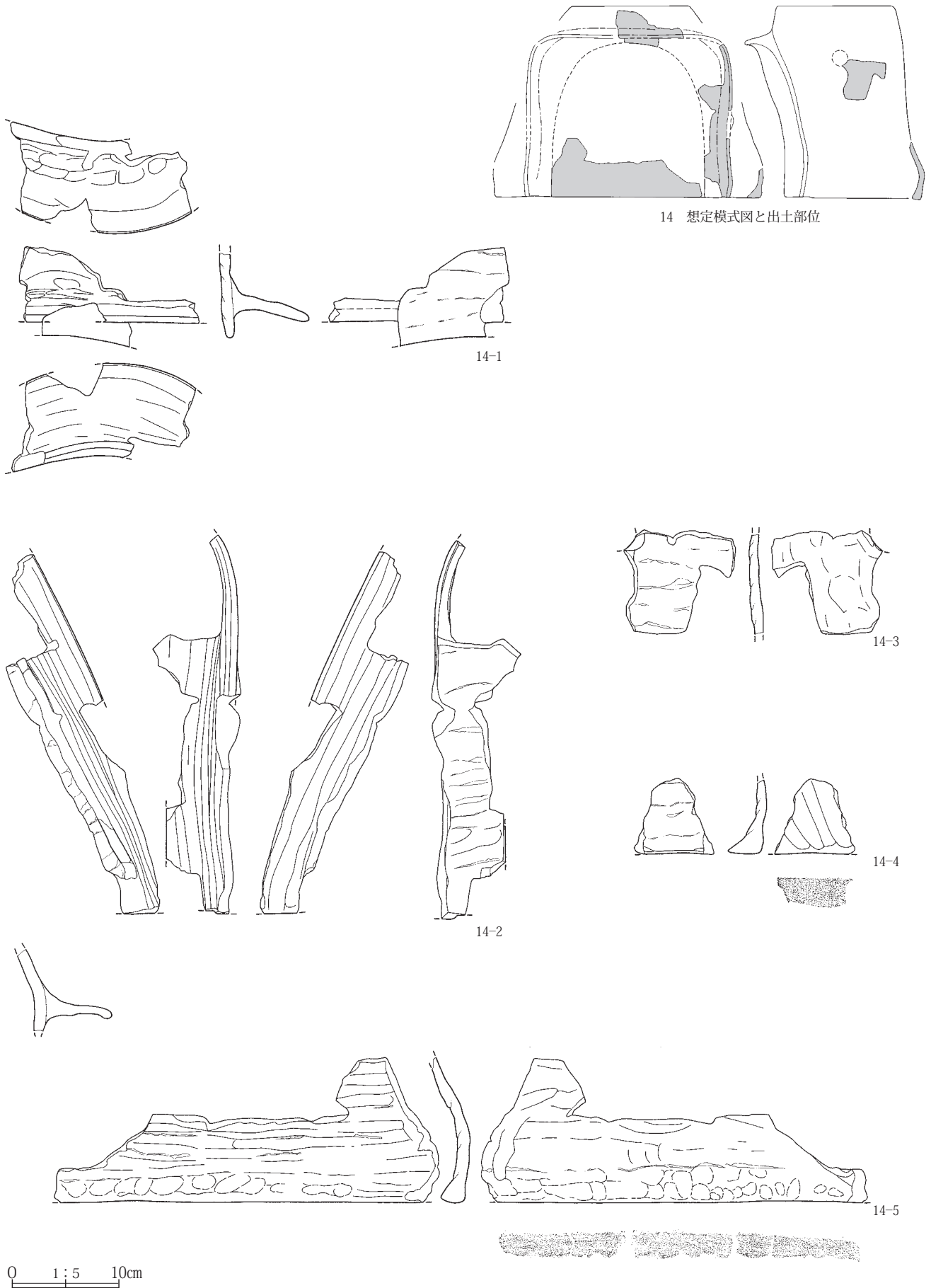
所見 杯類の口縁端部に外反傾向が見られない9世紀前半の所産と思われる。カマド形土器14の出土があるが、煮沸形態の土器は乏しく、須恵器類の出土が目立っている。その他に祭祀が想定されるような特殊遺物の出土はないが、通常の竪穴住居とは異なる施設であったと想定される。



第189図 2号遺物集中地点



第190図 2号遺物集中地点出土遺物(1)



第191図 2号遺物集中地点出土遺物(2)

11 遺構外の遺物

遺構に伴わず出土した遺物、および明らかに混入品とわかる遺構内の遺物、および倒木痕など遺構として扱わなかった場所での出土遺物をここで扱った。古墳時代以降の遺物は第192図に示した。縄文時代の遺構は確認されていないが、出土遺物が若干あり第193図に一括して示した。

古墳時代以降の遺物(第192図 PL.61 遺物観察表249頁)

土器16点、銭貨1点を図示した。2は接合しなかった2点から復元した古式土師器高杯で、西2区西隅付近の出土である。付近の該期遺構では東側約20mの27号住居や西側約15mの1号遺物集中地点がある。須恵器杯類6～8は古墳時代後期の4号住居出土遺物で混入遺物として扱った。まとまって出土していることから、同住居上層に9世紀前半頃の住居が重複していた可能性がある。須恵器杯9は古墳時代の11号住居から出土した平安時代の遺物である。重複する5号住居からの混入遺物と思われる。灰釉陶器碗13は8世紀前半と想定される1号竪穴状遺構上層の出土品で、混入遺物として扱った。その他遺構外では土師器約1020点、須恵器約220点の出土があるが、ほとんどが東調査区で出土している。中世の土器・陶磁器類は1点もなく、近世遺物も総数15点できわめて少なかった。

銭貨16は東3区西寄り084、-948グリッド出土の開元通寶で、本遺跡出土唯一の銭貨である。このグリッドには64号土坑と194・196号ピットなどがあるが、攪乱の影響の強い一画でもある。

縄文時代の遺物(第193図 PL.61 遺物観察表250頁)

本遺跡の調査では、縄文時代の遺構は確認されておらず、土器と石器が遺跡内に散見されたのみである。遺物の内訳は、縄文土器は、西調査区の古墳時代前期の住居跡周辺から加曾利E式土器が22点と、その他の調査区から18点、型式不明の中期土器が7点、堀之内式土器が23点である。縄文土器については小片が多く、型式認定が困難なものもあった。

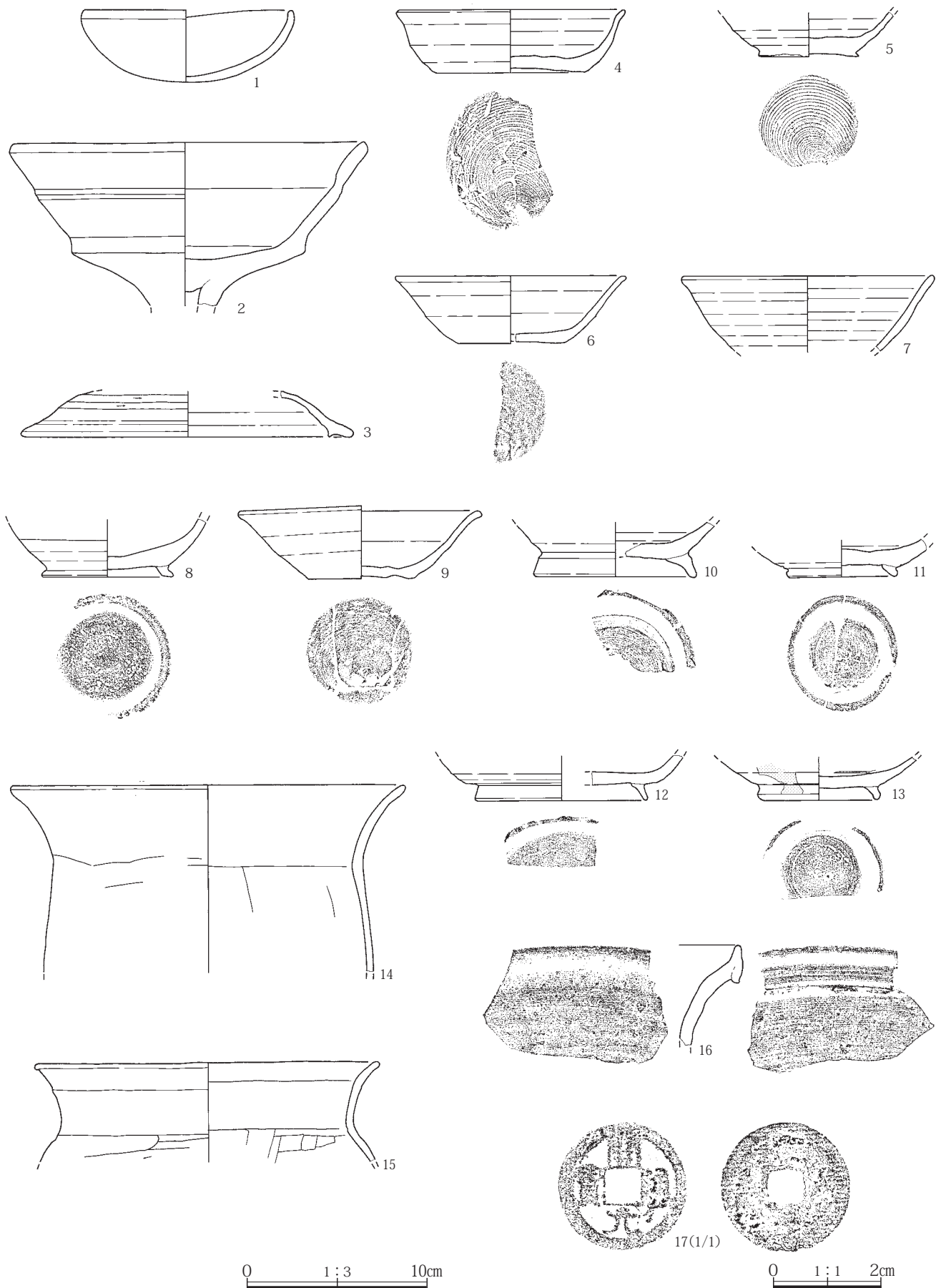
石器は石核4点、加工痕のある剥片4点、石鏃3点、打製石斧4点が出土している。出土遺物のうち、図化に

耐えられる18点を第193図に示した。

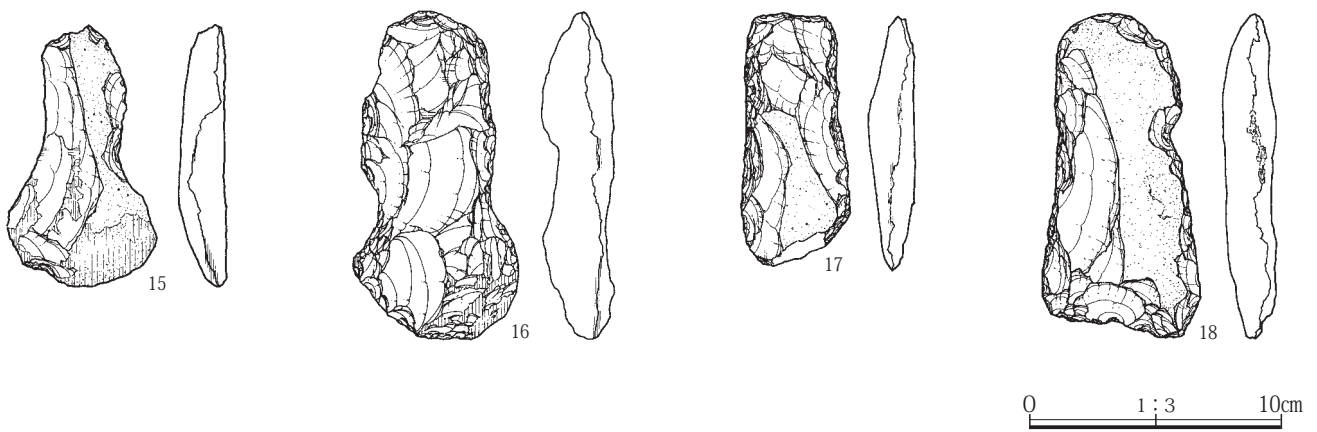
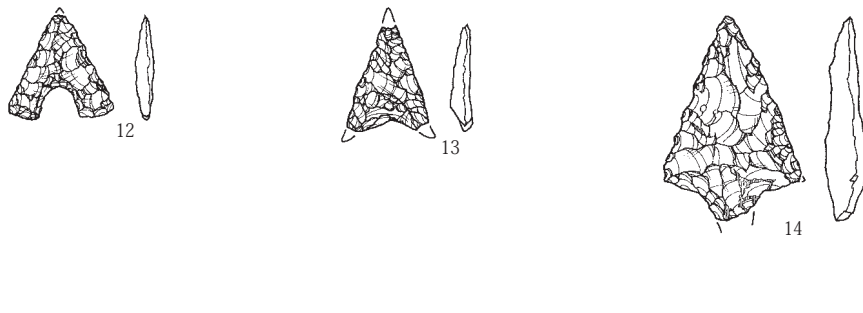
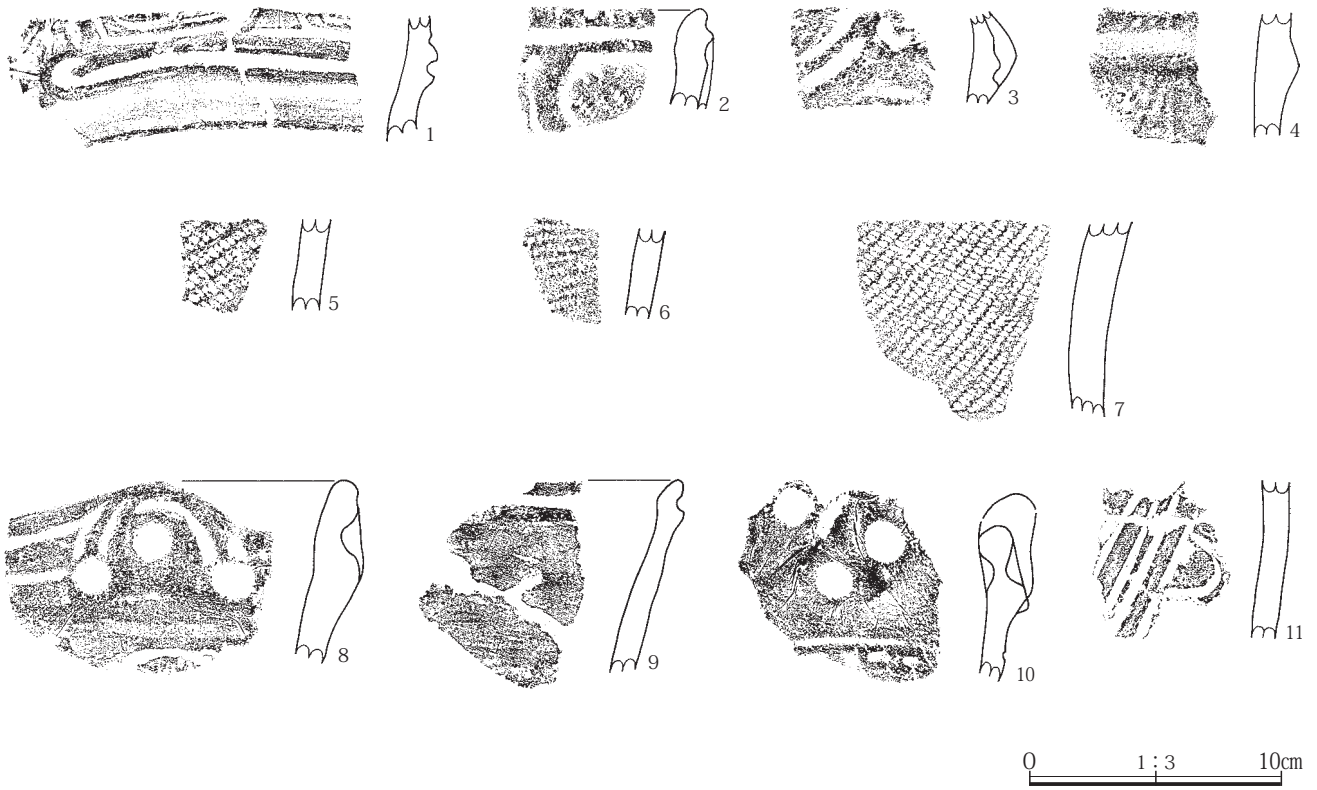
土器のうち1～7は加曾利E式土器に比定されるものである。1～3は口縁部の破片資料である。口縁部文様の楕円区画が肥厚し、頸部に無文帯を持つなどの特徴から、加曾利E2式に位置付けられる。4は頸部に縄文施文が見られやや新しい様相が認められることから加曾利E3式の範疇に入ると考えられる。5～7は縄文を縦位に施文している土器で、焼成や土器の色、縄文施文などの特徴から加曾利E2式に比定される。8～12は後期堀之内式土器である。8は口縁波長部にC字状の沈線文や刺突文を施文する特徴から堀之内1式である。9と11は同一個体で、口唇部下に単沈線を廻らす堀之内1式土器である。10は口縁部にC字状及び8字状の突起を貼付し、円形の押圧を加えることなどから後続する堀之内2式と思われる。

石器のうち12～14は石鏃である。12、13は凹基無茎鏃である。14は平基有茎鏃で、基部を欠損している。剥離は丁寧なされている。15～18は打製石斧である。15は撥形の石斧で側縁部がノッチ状に加工されている。16は分銅形で左辺側面が摩耗しており、使用面と考えられる。土器4と同一遺構からの出土である。17は短冊形で刃部が斜めになっている。刃部が再生され使い込まれている状況が分かる。18は短冊形のもので、刃部に剥離が認められることから、刃部再生がされていると考えられる。

これらの遺物は、土器は西調査区からの出土が多く、石器は東調査区の東西両端から出土するものが多い。古代の集落の中心域となる東3区中央付近では土器・石器とも出土しなかった。少量ではあるが、完形の石器以外に石核や剥片が土器と伴に確認されたことから、調査区周辺に何らかの縄文時代の遺構があったと考えられる。



第192図 遺構外出土遺物(古墳時代以降)



第193図 遺構外出土遺物(縄文時代)

第IV章 総括

1 本郷畑内遺跡の集落について

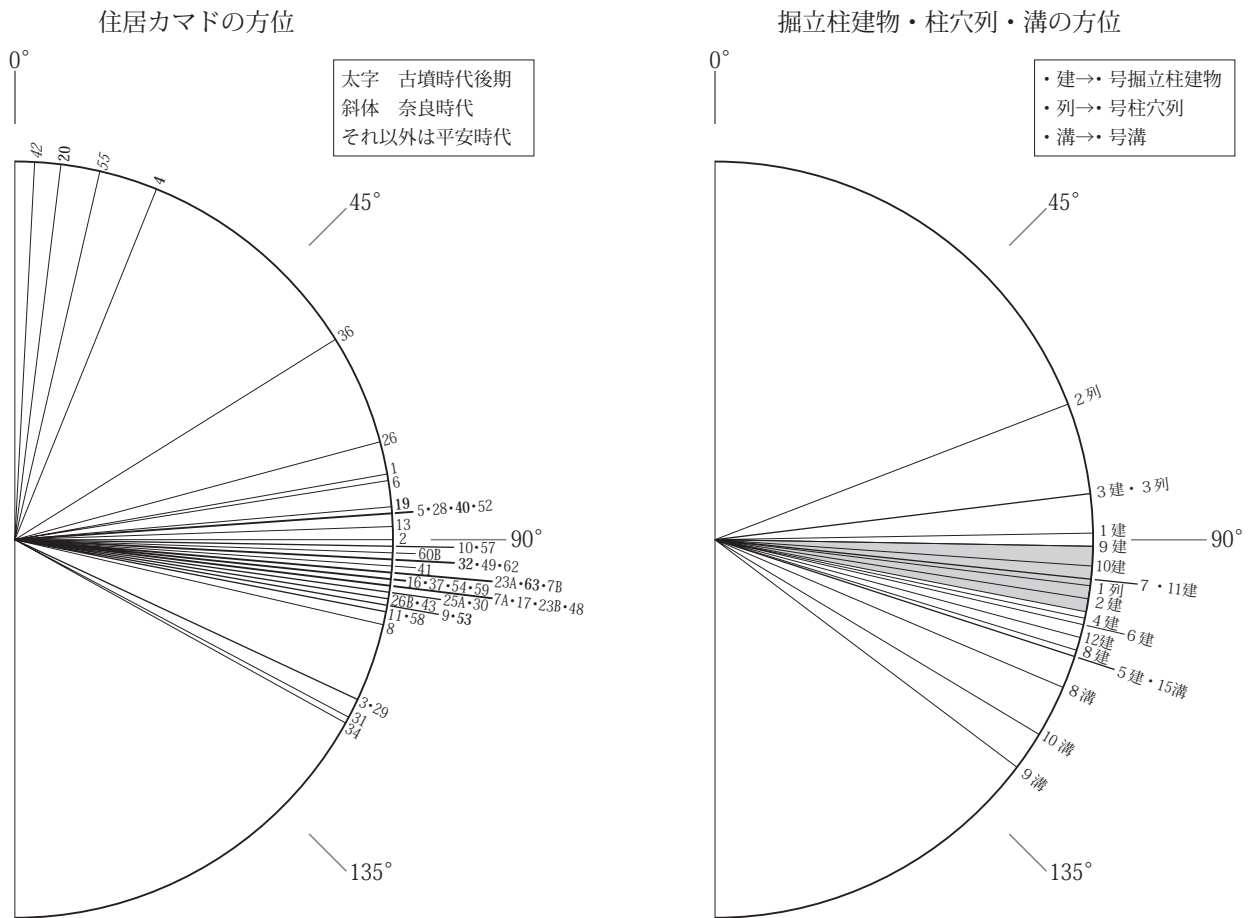
本郷畑内遺跡は国の特別史跡『多胡碑』の約2 km西側にある。この碑には周辺の3郡から6郷(織茂・韓科・矢田・大家・武美・山等)を割いて新たに多胡郡を建郡したことが記されている。

本遺跡の集落動向を概観すると、多胡建郡が記されている和銅四年(711)に先行して、20号住居など古墳時代後期の住居が見られる。8世紀前半の住居には19・37・55号住居などがあり、同中葉以降は40・42・45・46・52・53号住居と続き、この付近が古墳時代後期以降、規模を拡大しながら永続的に集落があったことがわかる。多胡碑周辺には御門(みかど)の小字名があり、碑周辺に郡衙が設けられた大家(おおやけ)郷が存在すると想定されている。本遺跡は多胡碑と同じ下位段丘面の鑄川沿い

にあり、地形的には碑と繋がりのある立地にある。また折茂の地名が本遺跡の南側の中位段丘上に残っている。多胡郡6郷の名に繋がると思われる地名としては最も至近の位置にあって大沢川左岸という地形的な共通点もあり、本遺跡が織茂郷に含まれる集落であった可能性は高いが、それを裏付ける資料は得られていない。

掘立柱建物(以下建物と略す)は12棟確認されているが、確実に時期が分かる遺構はない。各建物の形状は一樣ではないが、方形に近い掘り方や布掘りのある奈良時代的な建物はない。また柱間が不均等であったり、極端に細長い形状であるなど平安時代の建物とも異なっている。反面、本遺跡は中世以降の遺物出土もごく少ない。遺跡周辺は中世城郭「本郷城」が存在していたとの推測もあるが、中世以降に建物群があったとも考えにくい。

次に、竪穴住居と同時存在であれば建物の配置も影響



第194図 主な遺構の方位

を受けるという前提で、建物の方向を住居カマドと比較した(第194図)。計測できたカマドの数は46基でこのうち26基が91°~101°の間に入り、この部分に集中している。建物では南面する側の角度を計測した。2・7・9~11号建物の5棟が住居カマド域に入っている。本遺跡で柱間が3間または底部分を含めて3間以上の建物はこの5棟の中の2・9~11号建物の4棟が含まれ、それ以外には6号建物のみである。3間以上に含まれなかった7号建物も東側が調査区外にかかり、全容を把握できていない建物で柱間3間以上の規模となる可能性のある建物である。これらやや大型の建物が奈良・平安時代の遺構となる可能性が指摘できる。

なお、本遺跡の比較的規模の大きな溝(5・8~10号溝)の軸方向を同じ図中にプロットしても、いずれも住居カマド集中域には含まれない。中世以降の施設となる可能性があるだろう。

竪穴住居内の特徴的な点として、礎盤石状の礫が床面に据えられる例があり、表7に示した。

表7 住居内礎盤石状礫一覧 (cm)

No.	住居	長×短×厚	位置	備考
1	1号住居	43×32×15	北東寄り床下土坑状掘り方上。	楕円形。掘り方底面から浮いた状態。
2	4号住居	42×29×13	北東寄り床下土坑状掘り方上。	長方形。掘り方底面から浮いた状態。
3	7号住居	44×35×14	旧カマド斜め前。	楕円形。掘り方底面上。
4	16号住居	45×23×13	南東隅貯蔵穴上。	長方形。貯蔵穴底面から浮いた状態。
5	21号住居	31×21×-	北西隅。	長方形。地山直上。
6	23号住居	37×24×-	旧カマド前掘り方上。	掘り方底面から浮いた状態。
7	34号住居	32×29×-	南壁際。	床面に据えた状態。
8	34号住居	32×17×-	南壁寄り。	床面に据えた状態。

礫はいずれも床面に水平になるように、礫の長軸方向を住居壁に平行になるように据えられている。礫をカマド周辺や壁際などに置く傾向が窺えるが、細かな位置は一定していない。34号住居以外は1点のみの確認である。6世紀で北カマドの4号住居から10世紀で南東隅カマドの34号住居まで、時代や遺構の形態も一定しておらず、礫を据えた目的は不明である。

2 特筆される遺物について

本遺跡からは、県内での出土例のごく少ない遺物の出土があった。その一つが弥生時代から古墳時代前期にかけて見られる腕輪状土製品(土製釧)で、もう一つが古墳時代後期以降に見られるカマド形土器(置きカマド)である。希少な遺物でありながら比較的残存状態が良い資料で、この項で追加説明を行う。他に石帯や陶硯など律令期の特徴的な遺物の出土もあった。

① **腕輪状土製品** 西調査区の古墳時代前期38号住居から出土した。西調査区で3棟調査した弥生時代末から古墳時代前期の住居中の1棟である。管見では群馬県の出土例は古墳時代前期に偏っていて、前橋市荒砥前田Ⅱ遺跡の2例(住居出土は1例)、伊勢崎市舞台遺跡の3例(住居出土は2例)がある。1遺跡で複数の出土であるが、同一遺構からの出土ではない。いずれも残存状態が良い。他に高崎市綿貫伊勢遺跡の住居出土1例がある。これは例外的に古墳時代後期住居の埋没土から破片が出土した資料だが、この遺跡も古墳時代前期の集落が展開しており、古墳時代前期遺物の混入品と考えられる。

本住居出土例が先例と異なる点は、1棟の住居から2点の腕輪状土製品が出土している点である。1点は完形で貯蔵穴内から、もう1点は破片で埋没土からの出土で同巧の製品である。2点揃っての出土ではないが、腕輪状土製品を両腕に装着した可能性を示唆する資料である。

② **カマド形土器** 2号遺物集中地点で出土した。カマド形土器には「置きカマド」の名称もある。出土例は東日本では少なく、当事業団の報告例を中心に管見の群馬県内の出土例を加えて表8に示した。出土数が少ないうえ、出土遺物も小破片が多く、全容を推定できるような資料はごく少ない。この中で本遺跡出土品は平面方形で付け底が確認される例である。

カマド形土器が祭祀的な用具であることは古くから指摘されているが、県内の出土例をみても竪穴住居内の出土が多く、過半の8例を占めている。このうち4例がカマド内やカマド周辺の出土であり、小破片での出土である。カマドのある住居内でカマド形土器を使った祭祀行為は視覚的な効果に乏しく感じられる。保管のため住居内に置いたのであれば、残存状態の良いものが出土してよさそうである。カマド形土器片を据えカマドに置く祭

表8 主なカマド形土器

No.	遺 跡	遺構・出土位置	特 徴	文 献
1	荒砥北原遺跡 (前橋市)	コ字状区画A・B溝	平面横長楕円形。左右並立の掛け口2カ所。両側面に角状把手か。背面に把持孔か。	55
2	下東西遺跡 (前橋市)	方形区画を造る可能性のある59号溝 (8世紀の遺物共伴)	底部および底面破片。	58
3	東前沖遺跡 (前橋市)	23号住居・西壁際 (7世紀後半)	甕状の掛け口。平面円形。底なし。	66
4	鳥羽遺跡 (前橋市)	J12号住居・埋没土 (7世紀)	底面破片。平面方形と思われる。	60
5	二之宮洗橋遺跡 (前橋市)	祭祀の可能性のある1号溝 (8世紀)	焚口側面の底破片。	62
6	下佐野II遺跡 (高崎市)	4区43号住居・カマド内から前面 (9世紀初頭)	平面方形で、側辺部と思われる奥行38cm、高さ27cm以上を確認。	57
7	雨壺遺跡 (高崎市)	25号住居 カマド内 (10世紀か)	掛け口および体部破片。	54
8	北原遺跡 (高崎市)	64号住居 カマド内 (8世紀前半)	底部破片。	56
9	十三宝塚遺跡 (伊勢崎市)	寺院区画北東溝 (共伴遺物は7世紀後半)	平面横長長方形。付け底部分剥落。	61
10	大道東遺跡 (太田市)	推定東山道駅路南側溝 (共伴遺物は7世紀後半)	甕状の掛け口。平面円形。底なし。背面と両側面の3把持孔。	68
11	善慶寺早道場遺跡 (甘楽町)	19号住居・カマド前 (8世紀前半)	平面円形。底なし。	65
12	同上	遺構外	掛け口底付近破片か。	65
13	田篠上平遺跡 (富岡市)	26号住居 カマド前・壁際 (8世紀)	掛け口底付近破片か。	59
14	中沢平賀界戸遺跡 (富岡市)	F4号住居 東壁際 (8世紀)	側面または裏面。平面方形か。	63

祀的行為があったとも考えられる。

住居以外の出土例は6例ある。屋外に置かれた状態では後世まで残存する確率は下がりそうだが、竪穴住居より残存状態が良い場合が多い。寺院の区画を造る溝から出土した十三宝塚遺跡例を顕著な例とし、方形やコの字状の区画を造るとされる溝からの出土に、荒砥北原遺跡・下東西遺跡例がある。その他例でも二之宮洗橋遺跡例は郷名墨書を共伴しており、大道東遺跡例は東山道駅路側溝と推定される溝の出土である。祭祀行為とカマド形土器との係わりを示唆するものであろう。

本遺跡例は土器集中出土地点という前例のない出土状態である。共伴遺物には杯類のほか煮沸具があり、竪穴住居の土器セットとの差異は見られない。ただしカマド形土器自体は多数の破片が含まれ、住居以外の出土例に近いものである。

③ 石帯・陶硯・その他

石帯は3号住居から石製丸轆を出土している。3号住居は10世紀代の遺構で、灰釉輪花皿などの特殊遺物の出

土がある。平安時代集落の西隅付近に位置している。床面より浮いた状態の出土で確実に住居に伴うと認定できる遺物ではないが、本遺跡唯一の腰帯具である。

陶硯は1号竪穴状遺構から無脚円面硯を出土している。この遺構は8世紀初頭ころの遺物を伴うもので3号住居の北側約6mにあり、集落の西隅付近に位置している。集落西隅付近からこれら律令期の象徴的な遺物が出土しているが、周辺には大型住居や掘立柱建物など特別な施設は見られない。

遺物観察表

凡例

出土位置 竪穴住居や竪穴状遺構から出土している遺物のうち、出土位置を挿図に番号で示してあるものについては、遺構内のおおよその出土位置を記述し、同時に床面からのレベル差を+○(単位cm)と示した。±0や床面にわずかにめり込んでいる場合は「床直上」と記述した。-○(単位cm)で示したものは、貯蔵穴内や床下土坑・掘り方埋戻し土内の遺物で、床面からの深さを表している。

計測値 土器・陶磁器は口径(口縁上端径)・底径・器高を計測し、古墳時代～古代の土器の場合はそれぞれ「口」・「底」・「高」と略している。底部が残存するが丸底のため計測できない土器には、計測値欄に「丸底」と記した。その他、「胴」=胴部最大径、「台」=高台径、「摘」=摘み径などを追加計測したことがある。ただし縄文土器はすべて小破片であるため、計測値は示していない。土製品・石製品・金属製品などでは長さ・幅・厚さなどを計測しているが、形状により異なるので表中に計測項目を明示した。単位はすべてcmである。重さを計測した場合もあり、その場合の単位はgである。なお()は復元値、□は残存値を表している。

胎土 土器の夾雑物を記述した。古墳時代～古代の土器では、砂粒の場合は2mm以下を細砂粒、2mm以上を粗砂粒とした。その他に、白色・黒色鉱物粒、暗赤色・赤色・灰黒色・灰白色粘土粒、雲母・石英粒などの混入を記述した。夾雑物の少ない精良な胎土は「精選」と記した。縄文土器の胎土については、記号で表したが、次のような特徴を示している。

D：中量の石英や黒・白色の粗砂と、多量の角閃石(または輝石)粗砂を含むやや粗雑な胎土。

E：石英、長石、黒・白色の礫・粗砂を中量含む極めて緻密な胎土。

焼成 古墳時代～古代の土器については、土師器の場合は「良好」か「やや不良」かを区別した。須恵器の場合は「還元焰」か「酸化焰」かを区別した。縄文土器は記入していない。

色調 古墳時代～古代の土器について記述した。色調の名称は、『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修)に準拠した。

石材・素材 石製品の石材名を記した。

成形・整形の特徴 主に遺物製作段階の特徴を示したが、摩滅等、製作特徴を不明とした原因を記す場合がある。

備考 被熱・摩滅・付着物および墨書や線刻など、焼成後に加わった特徴の他、型式名などを記した。

遺物観察表

1号住居遺物観察表 (第9・10図 PL.43)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	胎土/焼成/色調 石材・素材等			
第9図 PL.43	1	須恵器 椀(無台)	西寄床直上 1/4	口底 12.2 4.8	高	4.0	粗砂粒・暗赤色粘 土粒・片岩/酸化焰 /灰黄褐	ロクロ整形(右回転)。ロクロ痕弱い。底部は不明瞭だが回転糸切り後、無調整と考えられる。	器面摩滅。
第9図 PL.43	2	須恵器 椀(無台)	竈内床下4cm 口縁～底1/4	口底 12.8 6.0	高	4.6	粗砂粒/還元焰・ 軟質/黄灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。
第9図	3	須恵器 杯	北寄床直上 破片	口底 13.0 6.0	高	3.3	粗砂粒・片岩・雲 母/酸化焰/にぶい 黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切りと考えられる。	器面摩滅。
第9図	4	須恵器 杯	北西隅際床直上 ～6cm 口縁下位～底 2/3	口底 6.4	高		胎土が細かい粗砂 粒少/酸化焰/浅黄	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。
第9図	5	須恵器 杯	床下土坑1内 床下7cm 口縁下半～底片	口底 5.5	高		粗砂粒・片岩・暗 赤色粘土粒/還元 焰・酸化焰/ぎみ/ 灰白	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。
第9図 PL.43	6	須恵器 椀	中央床直上 1/2	口底 14.2	台高	5.6 5.4	粗砂粒・灰黒色粘 土粒/還元焰・軟 質/黄灰	ロクロ整形(右回転か)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。	器面摩滅。
第9図 PL.43	7	須恵器 椀	南寄床下14cm 1/2	口底 13.4	台高	6.0 4.8	粗砂粒/酸化焰/黄 灰	ロクロ整形(右回転か)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。	器面に炭素吸着。摩滅。
第9図 PL.43	8	須恵器 椀	竈内床直上 1/2	口底 13.1	台高	5.4 5.0	小礫・粗砂粒・片 岩/酸化焰/にぶい 橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整を施すも切り離しが粗雑で器面の一部は凹む。	器面摩滅。
第9図	9	須恵器 椀	東寄床上6cm 1/5	口底 15.0	台高	6.8 4.9	粗砂粒多・暗赤色 粘土粒/酸化焰/橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は付高台。厚手。	器面摩滅。
第9図	10	須恵器 椀(無台)	東寄床上14cm 1/4	口底 12.8 6.6	高	3.8	粗砂粒・片岩/酸 化焰/浅黄	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切りと考えられるが、切離し時底部が極端に薄くなったため、粘土塊を貼付し補修している。	器面摩滅。
第9図	11	須恵器 椀	埋没土 口縁片	口底 13.8	台高		細砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。	胎土は4に類似。
第9図	12	須恵器 椀	床下土坑1内 床下13cm 口縁下位～高台	口底	台高	6.2	粗砂粒/酸化焰/浅 黄	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	器面摩滅。
第9図 PL.43	13	須恵器 椀	東寄床下8cm 口縁下位～高台	口底	台高	7.2	粗砂粒・片岩/酸 化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	器面摩滅。
第9図	14	須恵器 椀	竈内床直上 口縁下位～高台	口底	台高	6.3	粗砂粒/還元焰・ 軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	器面摩滅。
第9図 PL.43	15	須恵器 椀	西寄床直上 口縁下位～底片 ・高台欠	口底	台高		粗砂粒・片岩粒/ 酸化焰/灰	ロクロ整形(右回転)。付高台は剥がれた後もそのまま使用。	器面摩滅。
第9図	16	須恵器 長頸壺か	埋没土 肩片	口胴	底高		細砂粒少/還元焰/ 黄灰	ロクロ整形。外面は平行する2本の沈線による区画内に櫛状工具に刺突文を列する。	
第9図	17	須恵器 甕	埋没土 口縁片	口胴	底高		白色鉱物粒少/還 元焰/灰	紐づくり後、ロクロ整形。	混入品か。
第9図 PL.43	18	土師器 甕	東寄・竈内床上 11～14cm 口縁～胴上位 1/3	口胴 17.2 18.9	底高		粗砂粒・細砂粒/ 良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	器面被熱。炭素吸着。
第10図 PL.43	19	須恵器 罎付甕	床下土坑1内 床下7～19cm 口縁～胴上位片	口罎 34.6 34.0	胴高		粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	紐づくり後、ロクロ整形。直線的な体部。罎部は貼付後、周縁部にナデ調整。	器面摩滅。
第10図 PL.43	20	須恵器 羽釜	竈内・北東隅 床直上～5cm 口縁～胴下位 1/3	口罎 20.5 25.0	胴高	24.8	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	紐づくり後、ロクロ整形(右回転)。罎部は貼付後、周縁部にナデ調整。	被熱。一部に炭素吸着。
第10図 PL.43	21	須恵器 羽釜	南壁密着床直上 口縁～胴上位片	口罎 20.0 24.2	胴高	22.6	粗砂粒/酸化焰/灰 黄	紐づくり後、ロクロ整形か。罎部は上辺に平坦面を有する。貼付後、周縁部にナデ調整。胴部外面は縦位のヘラ削り。	器面摩滅。
第10図 PL.43	22	須恵器 羽釜	床下土坑1内 床下9cm 口縁～胴上位片	口罎 20.6 25.5	胴高		粗砂粒/酸化焰/黄 灰	紐づくり後、ロクロ整形(右回転)。罎部は貼付後、周縁部にナデ調整。	内外面に炭素吸着。燻状。
第10図 PL.43	23	石製品 紡輪	北寄床下7cm 完形	長幅 4.9 4.6	厚重	1.5 55.9	蛇紋岩	火バネして破損した紡輪の再生品。周辺を刀子状工具により粗く面取り整形する。径7mmの軸孔を両側穿孔する。	板状。

2号住居遺物観察表 (第12・13図 PL.43・44)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	胎土/焼成/色調 石材・素材等			
第12図 PL.43	1	土師器 杯か	中央床直上 1/4	口底 12.7 6.0	高	3.9	粗砂粒/酸化焰/灰 黄褐	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切りと考えられる。底部極端に薄く、高台と併に剥がれた可能性。	器面の摩滅顕著。
第12図 PL.43	2	須恵器 杯	南西隅床直上 口縁中位～底片	口底 6.0	高		粗砂粒・灰黒色粘 土粒多/酸化焰/に ぶい黄	ロクロ整形(右回転か)。底部は回転糸切り後、無調整。	
第12図 PL.43	3	須恵器 杯	南壁際床上9cm 口縁中位～底 1/2	口底 5.2	高		粗砂粒多・片岩/ 酸化焰/灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	器面の摩滅顕著。

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第12図 PL.43	4	須恵器 杯(有台)	南寄床頂上 2/3	口 底	11.9 (6.9)	台 高	6.5 5.2	粗砂粒・暗赤色粘 土粒/酸化焰/にぶ い黄橙	ロクロ整形(右回転か)。高台部は底部切り離し後の付高台。	器面摩滅。
第12図 PL.43	5	須恵器 椀	中央床上11cm 3/4	口 底	14.3 (7.0)	台 高	5.9 5.1	粗砂粒・暗赤色粘 土粒/酸化焰/にぶ い橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部切り離し後の付高台。 貼付は粗雑。厚手。	器面摩滅。炭 素吸着。
第12図 PL.43	6	須恵器 椀	貯蔵穴埋没土 1/3	口 底	13.2 (7.8)	台 高	7.0 5.3	粗砂粒・暗赤色粘 土粒/酸化焰/にぶ い黄橙	口縁部先端は大きく外反。やや歪んでいる。ロクロ整形(右 回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。	器面摩滅。
第12図	7	須恵器 椀	埋没土 破片	口 底	13.0 (6.8)	台 高		小礫・粗砂粒・暗 赤色粘土粒/酸化 焰/浅黄	ロクロ整形(右回転)。高台部は付高台。	器面摩滅。
第12図	8	須恵器 椀	埋没土 口縁片	口 底	14.8	台 高		小礫・粗砂粒/酸 化焰/灰黄	ロクロ整形(右回転)。	器面摩滅。
第12図 PL.43	9	須恵器 椀	竈密着床直上 口縁下位～高台 片	口 底		台 高	7.4	粗砂粒少/還元焰 ・軟質/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部切り離し後の付高台。 貼付後、周縁部にナデ調整。	
第12図 PL.43	10	灰釉陶器 耳皿	北東隅壁際床直上 完形	口 底	11.1 4.7	高	2.9	黒色鋳物粒少/還 元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。内面全 面と耳の部分の外面に施釉。	大原2号窯式 期。
第12図	11	灰釉陶器 皿	埋没土 口縁片	口 底	13.3	台 高		黒色鋳物粒少/還 元焰/灰黄	ロクロ整形(右回転)。内外面に釉漬掛けか。	光ヶ丘1号窯 式期か。
第12図	12	須恵器 壺	南西隅床直上 口縁～胴上位片	口 胴	15.8	底 高		粗砂粒・片岩/良 好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位 のヘラナデ。	器面摩滅。
第12図	13	土師器 甕	中央床直上 口縁片	口 胴	14.8	底 高		粗砂粒・片岩/良 好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ。	
第12図 PL.43	14	土師器 甕	南東隅床直上 胴下位～底1/2	口 胴		底 高	7.0	粗砂粒/良好/にぶ い橙	胴部外面は斜位・横位のヘラナデ。内面は横位のヘラナデ。	被熱。炭素吸 着。
第12図 PL.43	15	須恵器 羽釜	竈内床床下2cm 口縁～胴上位片	口 鏝	20.8 25.2	胴 高	25.3	粗砂粒・暗赤色粘 土粒/酸化焰/にぶ い黄橙	紐づくり後、ロクロ整形。鏝部は貼付後、周縁部にナデ調整。	内面摩滅。
第12図 PL.44	16	須恵器 羽釜	中央床上6cm 口縁～胴上位片	口 鏝	19.8 24.8	胴 高	24.1	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形(回転方向不明)。鏝部は貼付後、周縁部にナデ 調整。	外面に炭素吸 着。
第12図 PL.44	17	須恵器 羽釜	掘り方埋没土 口縁～胴上位片	口 鏝	21.8 26.2	胴 高		粗砂粒/酸化焰/に ぶい橙	ロクロ整形(回転方向不明)。鏝部は貼付後、周縁部にナデ 調整。	器面摩滅。内 面に炭素吸着。
第13図 PL.44	18	須恵器 羽釜	北東隅・南寄床 直上 口縁～胴上位片	口 鏝	19.2 23.8	胴 高		粗砂粒/酸化焰/に ぶい橙	紐づくり後、ロクロ整形。鏝部貼付後、周縁部にナデ調整。	
第13図	19	須恵器 羽釜	竈密着床直上 口縁～胴上位片	口 鏝	17.6 23.1	胴 高		粗砂粒多/酸化焰/ 橙	紐づくり後、ロクロ整形。鏝部貼付後、周縁部にナデ調整。	
第13図 PL.44	20	須恵器 羽釜	北壁際床直上 口縁～胴上位片	口 鏝	19.9 25.1	胴 高		粗砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形(回転方向不明)。鏝部は貼付後、周縁部にナデ 調整。	
第13図	21	須恵器 羽釜	埋没土 口縁～胴上位片	口 鏝	17.0 21.1	胴 高		粗砂粒/酸化焰/黄 灰	紐づくり後、ロクロ整形。鏝部貼付後、周縁部にナデ調整。	器面に炭素吸 着。黒色味。
第13図	22	須恵器 羽釜	南寄床上9cm 口縁～鏝片	口 鏝	16.3 19.8	胴 高		粗砂粒・片岩/酸 化焰/橙	紐づくり後、ロクロ整形。鏝部貼付後、周縁部にナデ調整。	
第13図	23	須恵器 甕	竈周辺床下4cm 口縁片	口 胴		底 高		黒色鋳物粒/還元 焰/灰	ロクロ整形。外面の中位に2条の沈線を配し、区画の上下 両段に波状文を配する。	

3号住居遺物観察表 (第15・16図 PL.44)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第15図	1	須恵器 杯	埋没土 破片	口 底	13.4 6.0	高	3.7	粗砂粒・暗赤色粘 土粒/酸化焰/灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切りと考えられる。	器面摩滅。
第15図 PL.44	2	須恵器 椀	埋没土 完形	口 底	12.8	台 高	6.3 5.2	小礫・粗砂粒・片 岩/酸化焰/にぶ い橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。 貼付後、周縁部に雑なナデ調整。	器面摩滅。一 部に炭素吸着。
第15図 PL.44	3	須恵器 椀	竈周辺床直上 2/3	口 底	13.1	台 高	6.2 5.1	小礫・粗砂粒/酸 化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。 貼付後、周縁部にナデ調整。	器面摩滅。一 部に炭素吸着。
第15図 PL.44	4	須恵器 椀	埋没土 口縁下位～高台	口 底		台 高	6.9	白色鋳物粒・灰黒 色粘土粒/還元焰 ・軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。 貼付後、周縁部にナデ調整。	器面摩滅。
第15図	5	須恵器 椀	北西隅床直上 底片	口 底		台 高	6.1	粗砂粒/酸化焰/に ぶい橙	ロクロ整形(回転方向不明)。高台部は付高台。底部外面に 工具痕。	被熱。器面摩 滅。
第15図 PL.44	6	灰釉陶器 皿	埋没土 破片	口 底	14.3	台 高	7.0 2.5	精選/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は断面三日月形の付高台。内 外面に釉。刷毛塗り。	光ヶ丘1号窯 式期。
第15図 PL.44	7	灰釉陶器 輪花皿	北壁際床直上 口縁一部欠	口 底	15.4	台 高	6.8 3.0	黒色鋳物粒/還元 焰/にぶい黄橙	4単位の輪花皿。ロクロ整形(右回転)。口縁部下位に回転 ヘラ削り。高台部は低く、断面三日月形。底部回転ヘラ削 り後の付高台。施釉は漬け掛け。	内面やや摩滅。 大原2号窯式 期。
第15図 PL.44	8	土師器 甕	埋没土 口縁～胴上位片	口 胴	23.6 25.3	底 高		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面はナデ。	器面被熱。炭 素吸着。
第15図	9	土師器 甕か	掘り方埋没土 胴下位～底片	口 胴		底 高	6.8	粗砂粒/酸化焰/灰 黄	胴部外面は斜位・横位のヘラ削り。内面は幅太の横位ヘラ ナデ。	被熱か。
第15図 PL.44	10	須恵器 羽釜	中央床下4cm 口縁～胴下位 1/3	口 鏝	16.6 21.7	胴 高	22.1	粗砂粒・暗赤色粘 土粒・片岩/還元 焰・やや軟質/灰黄 褐	ロクロ整形(左回転か)。鏝部貼付後、周縁部にナデ調整。 胴部外面下位に斜位のヘラ削り。一部にナデ。	被熱。炭素吸 着。

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第15図 PL.44	11	須恵器 羽釜	埋没土 口縁～胴上位片	口 鏝	18.8 23.3	胴 高	21.8	粗砂粒/酸化焰/に ぶい橙	紐づくり後、ロクロ整形。鏝部貼付後、周縁部にナデ調整。	
第15図	12	須恵器 羽釜	竈内床直上 口縁～胴上位片	口 鏝	18.8 23.5	胴 高		暗赤色粘土粒/酸 化焰/灰黄	ロクロ整形。鏝部貼付後、周縁部にナデ調整。	
第15図 PL.44	13	須恵器 羽釜	南寄床上8cm 口縁～胴下位片	口 鏝	17.6 23.8	胴 高	23.8	粗砂粒・暗赤色粘 土粒/酸化焰/にぶ い黄橙	紐づくり後、ロクロ整形。厚い鏝部貼付後、周縁部にナデ調整。胴部外面は縦位のヘラ削り。	被熱
第16図	14	須恵器 羽釜	竈内・南寄 床直上～25cm 胴下半～底1/3	口 鏝		底 高	14.2	暗赤色粘土粒多 /還元焰・軟質/に ぶい褐	紐づくり後、ロクロ整形。胴部外面は縦位・斜縦位のナデに近いヘラ削り。内面の一部に斜位のナデを重ねる。	外面に炭素吸着。
第16図 PL.44	15	石製品 丸鞆	南寄床上20cm 完形	長 幅	2.9 4.2	厚 重	0.7 16.0	珪質頁岩	背面側・側面は研磨され、光沢が著しい。裏面側には線条痕として研磨痕が残る。裏面側3カ所に潜り穴を穿つ。	
第16図 PL.44	16	鉄製品 鎌	埋没土 装着部付近片	長 幅	5 3.4	厚 重	1.0 16.2		鎌破片で錆化著しく、本体空洞化し刃先部分は劣化破損する。柄装着部は端部の1cm程を斜めに折り曲げる。	柄木質確認できない。

4号住居遺物観察表 (第19図 PL.44・45)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第19図 PL.44	1	土師器 杯	北東隅床直上 口縁一部欠	口 底	9.1 丸底	高	5.1	細砂粒・暗赤色粘 土粒少/良好/にぶ い黄橙	口縁部は大きく歪んでいる。口縁部は横ナデ。底部は厚手で外面は横位のヘラ削り。内面はナデ。	
第19図 PL.44	2	土師器 杯	竈周辺床直上 1/4	口 底	9.7 丸底	高	[4.6]	粗砂粒・暗赤色粘 土粒/良好/赤褐	口縁部は横ナデ。以下外面は器面摩滅のため整形不明。内面は指ナデ。	
第19図 PL.44	3	土師器 杯	南壁密着床直上 口縁1/2欠	口 底	10.8 丸底	高	5.2	小礫・粗砂粒・片 岩/良好/橙	厚手。器面摩滅のため整形不明。口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削りと考えられる。内面はナデ。厚手。	
第19図 PL.44	4	土師器 杯	ピット6内床直 上 1/4	口 底	9.9 丸底	高	[4.7]	粗砂粒少/良好/橙	器面摩滅のため整形の詳細不明。口縁部は横ナデ。底部は厚手で外面は手持ちヘラ削りと考えられる。内面はナデ。	
第19図 PL.44	5	土師器 杯	埋没土 1/4	口 底	9.2 丸底	高	5.6	小礫・粗砂粒/良 好/橙	口縁部内斜気味、口縁部は横ナデ。底部外面はヘラ削りと考えられる。内面は横位のヘラナデ。	器面摩滅。
第19図	6	土師器 杯	ピット6内床直 上 口縁1/4	口 底	10.4 丸底	高		粗砂粒/良好/明黄 褐	器形は歪んでいる。口縁部は横ナデ。口縁外面下端はナデの上にヘラ削りを重ねる。内面はナデ。	内面に炭素吸着。
第19図 PL.44	7	土師器 杯	埋没土 1/4	口 底	9.8 丸底	高	3.3	粗砂粒少・細砂粒 /良好/にぶい橙	器形は歪んでいる。口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削りと考えられるが、器面摩滅のため整形の詳細不明。内面はナデ。	
第19図	8	土師器 杯	埋没土 1/4	口 底	11.2 丸底	高	[3.9]	粗砂粒少/良好/橙	器面摩滅のため整形不明。厚手。	
第19図 PL.44	9	土師器 杯	南壁際床直上 口縁一部欠	口 底	11.2 丸底	高	5.0	小礫・粗砂粒・片 岩/良好/橙	厚手。口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削りと考えられる。内面はナデ。	器面摩滅。
第19図	10	土師器 杯	北寄床直上 1/4	口 底	11.4 丸底	高 稜	3.7 10.9	暗赤色粘土粒少/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ。以下器面は摩滅のため不明。	外面の底部に炭素吸着。
第19図	11	土師器 杯	北壁密着床上18cm 1/4	口 底	11.2 丸底	高		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	器面摩滅のため整形不明。口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削りと考えられる。	
第19図	12	土師器 杯	埋没土 破片	口 底	11.8	高		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部外面は摩滅。	
第19図	13	土師器 杯	埋没土 破片	口 底	13.8 丸底	高		粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。口縁部との間にナデの部分を残す。	外面一部に炭素吸着。
第19図	14	土師器 杯	埋没土 口縁片	口 底	11.7 丸底	高 稜	10.3	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部との間に弱い稜を有する。	器面摩滅。
第19図 PL.44	15	土師器 杯	ピット5内床下 19cm 2/3	口 底	13.7 丸底	高 稜	[5.0] 13.8	粗砂粒・暗赤色粘 土粒少/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削りと考えられるが、器面摩滅のため整形不明。	
第19図 PL.45	16	土師器 杯	竈内床直上 口縁一部欠	口 底	14.0 6.6	高	5.0	粗砂粒/良好/にぶ い黄橙	紐作りの上に不足部分に粘土補充痕が内外面に残る雑な成形。口縁部は横ナデ。口縁外面中位以下は器面を抉るような細かなヘラ削りで器面凹凸著しい。底部はナデ。一部にヘラ削り。内面はナデ。	器面摩滅。
第19図	17	土師器 杯	埋没土 破片	口 底	18.0	高		粗砂粒少/良好/橙	口縁部は横ナデ。以下は器面摩滅のため整形不明。	
第19図 PL.45	18	須恵器 蓋	埋没土 口縁片	口 天	10.9	摘 高		白色鈹物粒少/還 元焰/灰黄褐	ロクロ整形(右回転)。底部外面は手持ちヘラ削り。	
第19図	19	土師器 甕	南壁際・西壁際・ 西寄・P4内床 直上～7cm 2/3	口 底	24.3 10.9	高	29.7	粗砂粒少・暗赤色 粘土粒少/良好/橙。 焼成時の黒斑。	口縁部は横ナデ。外面に縦位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデの上に縦位のヘラ磨きを重ねている。最下位に横位の面取り状ヘラ削り。	器面摩滅。外面一部炭素吸着。
第19図	20	土師器 甕	埋没土 口縁～頸片	口 胴	32.2	底 高		粗砂粒/良好/橙	甕の可能性もあるか。口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位のヘラ削り。小破片からの復元で径不安。	
第19図 PL.45	21	土師器 小型甕	北壁際床直上 3/4	口 胴	15.1 15.0	底 高	7.0 12.4	小礫・粗砂粒多・ 片岩/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は数回に分けて斜位のヘラ削り。底部外面もヘラ削り。内面はヘラナデ。	器面摩滅。被熱か。
第19図	22	土師器 甕	埋没土 口縁片	口 胴	18.4	底 高		粗砂粒・片岩/良 好/にぶい橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。厚手。	器面摩滅。
第19図 PL.45	23	土師器 台付甕	北壁際床上11～ 15cm 胴下位～台	口 胴		台 高	7.6	小礫多・粗砂粒・ 片岩/良好/赤褐	胴部外面に縦位のヘラ削りと考えられる。内面はヘラナデ。台部上半部も縦位のヘラ削り。下半部に横ナデ。底部きわめて厚手。	器面摩滅。被熱。
第19図	24	土師器 甕	北東隅床下4～ 5cm 口縁1/3	口 胴	25.2	底 高		粗砂粒・片岩/良 好/橙	内外面は横ナデ。	器面やや摩滅。
第19図 PL.45	25	石製品 白玉	埋没土 完形	径 高	1.2 1.0	重	1.85	滑石	表裏面とも丁寧に研磨、体部側面には粗い縦線条痕が残る。径3mmの孔を片側穿孔する。	

5号住居遺物観察表 (第21図 PL.45)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	台高				
第21図 PL.45	1	須恵器 高台付皿	東寄床下 5 cm 口縁一部欠	口底	13.4	台高 6.3 3.3	小礫・粗砂粒/酸化 焰/明褐色	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	器面摩滅。
第21図	2	須恵器 椀	掘り方埋没土 口縁下位～底片	口底		台高	粗砂粒/酸化焰/灰 黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、高台部を貼付。	高台部剥落後も 続けて使用か。器面 摩滅。
第21図 PL.45	3	須恵器 杯	中央・北西隅 床直上 1/2	口底	12.3 5.4	高 4.2	粗砂粒・暗赤色粘 土粒/酸化焰/灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。一 部に炭素吸着。
第21図	4	須恵器 椀	西壁密着床上20 cm 口縁片	口底	16.2	台高	粗砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形(右回転)。	内面摩滅。
第21図	5	須恵器 杯	埋没土 口縁下位～底片	口底	5.6	高	粗砂粒・暗赤色粘 土粒/酸化焰/浅黄	ロクロ整形(左回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	器面の摩滅顕 著。
第21図 PL.45	6	須恵器 杯(有台)	中央床直上 2/3	口底	14.7 (7.9)	台高 6.6 5.3	粗砂粒・片岩・暗 赤色粘土粒/酸化 焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は低い。底部回転糸切り後の付高台。	器面摩滅。
第21図	7	須恵器 椀	埋没土 口縁下位～底片	口底	(6.8)	台高	灰黒色粘土粒/還 元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、高台部を貼付。	高台部剥落後 も続けて使用か。器面 摩滅。
第21図 PL.45	8	土師器 甕	竈内床上 5 cm 口縁～胴上位	口胴	19.2	底高	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	器面被熱。摩 滅。
第21図 PL.45	9	土師器 甕	中央床直上 口縁～胴上位1/4	口胴	18.6	底高	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。	器面の摩滅顕 著。

6号住居遺物観察表 (第23図 PL.45)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	台高				
第23図 PL.45	1	土師器 杯	東寄床下 7 cm 2/3	口底	11.6 8.4	高 3.4	粗砂粒・輝石・角 閃石/良好/にぶい 橙	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削りと考えられるが、器面摩滅のため整形不明。外面中央窪む。	
第23図 PL.45	2	須恵器 皿	南東隅床直上 高台3/4欠	口底	12.8 (6.5)	台高 6.7 3.2	粗砂粒・灰黒色粘 土粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	器面摩滅。
第23図 PL.45	3	須恵器 杯	北寄床直上 口縁・底一部欠	口底	11.7 6.1	高 3.8	粗砂粒・灰黒色粘 土粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	
第23図 PL.45	4	須恵器 杯	南寄床上 7 cm 1/3	口底	13.3 7.0	高 4.0	粗砂粒/還元焰・ 軟質/黄灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。
第23図 PL.45	5	須恵器 杯	埋没土 口縁下位～底片	口底	7.4	高	白色鈹物粒/還元 焰・酸化焰ぎみ/ 褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	被熱か。
第23図 PL.45	6	須恵器 杯	埋没土 口縁下位～底片	口底	7.6	高	粗砂粒・片岩/酸 化焰/明赤褐色	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。
第23図	7	須恵器 椀	南西隅床上 6 cm 口縁	口底	14.8	台高	粗砂粒・片岩/酸 化焰/明赤褐色	ロクロ整形(回転方向不明)。	
第23図 PL.45	8	須恵器 椀	北寄床上 4 cm 口縁下位～高台	口底		台高 7.0	粗砂粒・暗赤色粘 土粒/還元焰・軟 質/黄灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。	器面摩滅。
第23図	9	須恵器 椀	埋没土 口縁中位～高台	口底		台高 7.7	暗赤色粘土粒/還 元焰・軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	器面摩滅。
第23図	10	須恵器 椀	埋没土 口縁下半～底 1/2	口底		台高	暗赤色粘土粒/還 元焰・軟質/黄灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は付高台。現状は欠落。	器面摩滅。
第23図	11	土師器 甕	埋没土 口縁～胴上位片	口胴	18.0	底高	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	器面摩滅。
第23図	12	須恵器 甕	埋没土 口縁片	口底	30.6	高	小礫・粗砂粒・片 岩/酸化焰/橙	ロクロ整形。	

7号住居遺物観察表 (第26・27図 PL.45・46)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	台高				
第26図 PL.45	1	須恵器 杯	北寄床直上 1/4	口底	14.2 8.8	高 3.5	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形(右回転)。底部回転ヘラ切り後、縁辺手持ちヘラ削り。底部厚手。	内面自然剥離付 着。混入品か。
第26図 PL.45	2	須恵器 杯	竈B内床直上 1/2	口底	11.8 6.4	高 3.4	粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第26図 PL.45	3	須恵器 杯	南東隅床下 8 cm 4/5	口底	12.4 5.4	高 3.9	小礫・粗砂粒/還 元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。
第26図 PL.45	4	須恵器 杯	南東隅壁際床直上 1/3	口底	12.0 5.8	高 4.1	灰黒色粘土粒多/ 還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。ロクロ痕強い。底部回転糸切り後、無調整。	
第26図 PL.45	5	須恵器 杯	南壁際床上 4 cm 1/3	口底	12.1 5.8	高 3.6	粗砂粒・暗赤色粘 土粒/還元焰/黄灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。
第26図	6	須恵器 杯	埋没土 2/5	口底	12.9 6.0	高 3.9	粗砂粒/還元焰・ やや軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。
第26図	7	須恵器 杯	掘り方埋没土 1/4	口底	11.8 6.2	高 4.0	粗砂粒/酸化焰/灰 オリーブ	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面に炭素吸 着。摩滅。
第26図 PL.45	8	須恵器 杯	掘り方埋没土 破片	口底	12.0 6.4	高 3.4	粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第26図	9	須恵器 椀	埋没土 口縁片	口底	12.7	台高	灰黒色粘土粒/還 元焰・軟質/灰白	口縁部先端は内折する。ロクロ整形(右回転)。	

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第26図	10	須恵器 椀	埋没土 口縁1/3	口底	12.8	台高	粗砂粒・暗赤色粘土粒/酸化焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。	
第26図	11	須恵器 杯	北寄床上5cm 口縁下位～底	口底	5.5	高	粗砂粒・片岩/酸化焰/にぶい黄褐	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。
第26図 PL.46	12	須恵器 椀	北西隅床上4cm 1/2	口底	15.0 (6.7)	台高 6.8 6.8	粗砂粒・灰黒色粘土粒/還元焰・軟質/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。高台剥落後も刮削若干研磨して使用。	器面に炭素吸着。摩滅。
第26図	13	須恵器 椀	竈B内床直上 口縁片	口底	14.3	台高	粗砂粒・暗赤色粘土粒/酸化焰/橙	ロクロ整形(回転方向不明)。外面底部下端に高台貼付時の沈線状窪み巡る。	器面摩滅。
第26図 PL.46	14	須恵器 椀	南壁際床直上 3/4	口底	13.8 (6.9)	台高 7.0 5.8	粗砂粒・長石粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	内面やや摩滅。
第26図 PL.46	15	須恵器 椀	南東隅・北西隅 床直上～床上5cm 1/3	口底	14.0 (7.2)	台高	粗砂粒/還元焰/黄灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は剥落しているが底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ整形。	器面摩滅。
第26図 PL.46	16	須恵器 椀(転用硯)	南東隅床下13cm 1/3	口底	14.6 (6.8)	台高 6.7 6.6	粗砂粒少/還元焰・軟質/暗灰黄	椀の高台部内を硯として二次利用している。器面は摩耗し平滑になり、朱墨痕が認められる。椀の整形は、ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。	器面摩滅。
第26図	17	須恵器 瓶	埋没土 口縁片	口胴	12.2	底高	粗砂粒少/還元焰/褐灰	ロクロ整形(右回転)。	
第27図 PL.46	18	須恵器 甌	竈A内床直上 胴下位～底片	口底	16.6	高	粗砂粒・片岩/酸化焰/にぶい橙	外面は横位のナデ、内面も横位のナデでロクロ整形と考えられる。内面の胴部最下位に縦3.7cm、上幅1.5cmの焼成前に作られた軸受けの凹部あり。	内面摩滅。
第27図 PL.46	19	土師器 小型甕	埋没土 口縁～胴上位 1/4	口胴	12.6	底高	細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	器面被熱。炭素吸着。やや摩滅。
第27図	20	土師器 小型甕	竈B内床直上5cm 口縁～胴上位	口胴	13.9 16.6	底高	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面はヘラ削りと考えられるが、器面摩滅のため詳細不明。内面は横位のヘラナデ。	
第27図	21	土師器 甕	南壁際・南東隅 床下10cm 口縁～肩片	口胴	17.1	底高	細砂粒・角閃石/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	
第27図 PL.46	22	土師器 甕	南壁際・南東隅 床下5cm～床直上 口縁～胴上位片	口胴	19.0 20.8	底高	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	器面被熱。摩滅。
第27図	23	土師器 甕	南壁際床直上4cm 口縁～肩片	口胴	18.2	底高	細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	器面に炭素吸着。
第27図	24	土師器 甕	竈B内床直上11cm 口縁～胴上位片	口胴	20.0	底高	細砂粒・暗赤色粘土粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデと考えられる。	
第27図 PL.46	25	土師器 甕	竈B内床直上 口縁～胴上位 1/4	口胴	19.6	底高	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は斜横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	
第27図 PL.46	26	土師器 台付甕	北寄床上7cm 口縁下位～台1/4	口胴		台高 8.4	細砂粒/良好/明赤褐	胴部外面と台部内外面は横位のナデ。胴部内面はヘラナデ。	
第27図	27	土師器 甕	竈A内床直上 胴下位～底3/4	口胴		底高 2.8	細砂粒/良好/橙	胴部外面は縦位のヘラ削り。内面はヘラナデと考えられるが器面摩滅。底部外面もヘラ削り。	被熱。
第27図	28	須恵器 甌か	埋没土 口縁片	口底	23.7	高	灰黒色粘土粒/還元焰・酸化焰/みみ/灰黄	ロクロ整形(右回転)。頸部がわずかに屈曲する樽形の土器か。	
第27図 PL.46	29	土製品 土錘	南壁際床直上 完形	長幅	3.6 1.8	孔重 0.35 10.4	細砂粒/酸化焰/黄灰	側面形状は紡錘形。両小口はヘラ状工具で切ったような平坦面をなす。	炭素吸着。
第27図 PL.46	30	石製品 紡輪	西壁際床直上 完形	径高	5.0 1.3	重 35.9	流紋岩凝灰岩	紡輪厚は薄く、板状を呈する。側面は面取り整形され、横位・斜位の粗い線条痕が残る。径9mmの軸孔を両側穿孔。	板状。
第27図 PL.46	31	石製品 砥石	南壁際床下8cm 完形	長幅	15.0 10.8	厚重 6.2 663.0	砥沢石	四面使用。各面ともよく使い込んでおり、激しく研ぎ減る。裏面側を破損後、再利用されたもので、破損部も砥面として使われている。	切り砥石。

8号住居遺物観察表 (第29・30図 PL.46・47)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第29図 PL.46	1	須恵器 蓋	西壁際床上5cm ほぼ完形	口天	12.1	摘高 3.0 4.0	小礫大の片岩・粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。天井部を切り離した後、摘み部を貼付。天井部外面の中心寄りに回転ヘラ削り。	器面に炭素吸着。
第29図	2	須恵器 蓋	埋没土 口縁片	口天	18.8	摘高	暗赤色粘土粒・片岩/還元焰・軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。	
第29図 PL.46	3	須恵器 杯	埋没土 2/3	口底	10.5 7.2	高 3.3	黒色鉱物粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。底部厚手。	
第29図	4	須恵器 杯	南壁際床上7cm 1/4	口底	11.6 6.6	高 3.6	黒色鉱物粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転か)。底部回転糸切り後、無調整。	
第29図 PL.46	5	須恵器 杯	住居内土坑内床 下6cm 口縁一部欠	口底	12.7 5.6	高 4.1	粗砂粒少/酸化焰/灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。一部に炭素吸着。
第29図 PL.46	6	須恵器 杯	西壁際床上9cm 口縁中位～底	口底	6.4	高	粗砂粒・片岩・黒色鉱物粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面に炭素吸着。内面の摩滅顕著。二次利用か。
第29図	7	須恵器 杯	南壁際床直上 口縁下位～底	口底	5.7	高	黒色鉱物粒/還元焰/にぶい黄褐	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	内面の摩滅顕著。

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	台高	底高			
第29図	8	須恵器 杯	住居内土坑内床 下11～12cm 口縁下位底2/3	口底 6.2	台高	高	粗砂粒少/酸化焰/ 灰黄褐	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。中央部の一部にナデを重ねる。	器面に炭素吸着。
第29図 PL.46	9	須恵器 椀	住居内土坑内床 下12～26cm 2/3	口底 13.9 (6.9)	台高	6.7 5.4	暗赤色粘土粒多/ 酸化焰/にぶい橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は付高台。	器面の摩滅顕著。
第29図 PL.46	10	須恵器 椀	住居内土坑内床 下7cm 1/3	口底 13.9	台高	5.8 4.6	小礫・粗砂粒・片 岩/酸化焰/浅黄	ロクロ整形(右回転か)。高台部は付高台。	器面の摩滅顕著。一部に炭素吸着。
第29図	11	土師器 小型甕	住居内土坑内床 直上 口縁～胴上位片	口胴 11.0 12.9	底高		細砂粒/良好/にぶ い黄褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削りと考えられる。内面は横位のヘラナデ。	
第29図	12	土師器 小型台付甕	貯蔵穴埋没土 台片	口胴	台高	7.6	粗砂粒/良好/明赤 褐	外面は横ナデ。内面は横位のナデ。	
第29図	13	土師器 甕	南壁際床上7cm 口縁～胴中位 1/4	口胴 21.2 25.0	底高		粗砂・細砂粒/良 好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は斜横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	器面の一部に炭素吸着。
第29図 PL.46	14	土師器 甕	住居内土坑内床 下11～13cm 口縁～胴中位片	口胴 21.6 21.7	底高		粗砂粒・片岩/良 好/橙	器形はやや歪むか。口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位のヘラ削り。口縁部との間にナデの部分を残す。内面は横位のヘラナデ。	器面摩滅。
第29図	15	土師器 甕	住居内土坑密着 床直上 口縁～胴上位 1/4	口胴	22.4	底高	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	
第29図 PL.47	16	土師器 甕	竈埋没土 口縁～胴上位片	口胴 21.8 23.1	底高		細砂粒・暗赤色粘 土粒/良好/にぶい 橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	器面摩滅。
第29図 PL.47	17	土師器 甕	住居内土坑内床 下6cm～床直上 口縁～胴上位 1/4	口胴	19.4	底高	細砂粒・暗赤色粘 土粒/良好/にぶい 褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	器面やや摩滅。
第30図 PL.47	18	土師器 甕	東寄床直上 口縁～胴上位 1/3	口胴	20.2	底高	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ。輪積み痕を残す。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	
第30図	19	須恵器 甕	貯蔵穴内床下13cm 口縁片	口胴		底高	粗砂粒/還元焰/灰 白	紐づくり後、ロクロ整形。左回転か。	
第30図	20	須恵器 羽釜	埋没土 鏝片	口鏝	25.7	底高	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形。	

9号住居遺物観察表 (第32図 PL.47)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	台高	底高			
第32図 PL.47	1	須恵器 高台付皿	貯蔵穴内床直上 完形	口底 12.9	台高	6.9 2.8	粗砂粒/還元焰/黄 灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。器面の一部に炭素吸着。内面摩滅。	
第32図 PL.47	2	須恵器 杯	貯蔵穴内・貯蔵 穴密着 床直上～4cm 1/2	口底 12.4 5.6	高	3.3	灰黒色粘土粒/還 元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。
第32図 PL.47	3	須恵器 杯	西壁際床直上 1/3	口底 13.9 6.9	高	4.6	粗砂粒・灰黒色粘 土粒/還元焰・軟 質/黄灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。
第32図	4	須恵器 杯	埋没土 口縁下位～底 1/2	口底 6.4	高		粗砂粒・暗赤色粘 土粒/還元焰・軟 質/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。
第32図 PL.47	5	須恵器 椀	竈内・東寄・南 寄床下8cm～床 上12cm 3/4	口底 15.2 (7.5)	台高	8.0 5.3	粗砂粒・暗赤色粘 土粒/酸化焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。内面に重ね焼き痕。	器面に炭素吸着。
第32図	6	須恵器 椀	竈内床上5cm 口縁上位～高台	口底 (6.0)	台高	5.8	暗赤色粘土粒/還 元焰・軟質/灰黄	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。皿の可能性。	器面摩滅。
第32図	7	須恵器 椀	南寄床上4cm 口縁下位～高台片	口底 (6.6)	台高	6.8	粗砂粒少/還元焰/ 灰	ロクロ整形(右回転か)。高台部は付高台で下端は平坦。	
第32図	8	土師器 甕	南壁際床直上 口縁～胴上位片	口胴	11.8	底高	粗砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は斜横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	器面摩滅。

10号住居遺物観察表 (第33図 PL.47)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	台高	底高			
第33図	1	須恵器 杯	埋没土 口縁片	口底	14.1	高	粗砂粒/酸化焰/灰 黄	ロクロ整形(回転方向不明)。	
第33図	2	須恵器 杯	埋没土 口縁下位～底	口底	5.5	高	粗砂粒/酸化焰/灰 黄	ロクロ整形(回転方向不明)。底部の切り離し状況は不明。	器面に炭素吸着。摩滅。
第33図 PL.47	3	須恵器 椀	北西隅壁際床上 4cm 口縁下位～高台 3/4	口底 (6.4)	台高	6.4	粗砂粒・灰黒色粘 土粒/還元焰・軟 質/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	器面摩滅。

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第33図 PL.47	4	須恵器 椀	埋没土 口縁下位～高台片	口底 (6.1)	台高	5.8	粗砂粒・片岩/酸化焰か/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	内外面とも炭素吸着。摩滅。
第33図 PL.47	5	須恵器 椀	北西隅壁際床上9cm 口縁下位～高台	口底 (7.5)	台高	7.5	粗砂粒・片岩/酸化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	器面摩滅。
第33図	6	土師器 小型甕	埋没土 口縁～胴上位1/4	口胴 14.9 14.3	底高		粗砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は摩滅。内面は横位のヘラ削り。	
第33図	7	土師器 甕	埋没土 口縁片	口胴 21.8	底高		粗砂粒少/良好/にぶい橙	内外面とも横ナデ。薄手。	器面摩滅。混入品か。
第33図	8	須恵器か 羽釜	埋没土 鏝1/5	口鏝 25.6	胴高		粗砂粒/酸化焰/にぶい黄橙	胴部整形後、鏝部を貼付。	

11号住居遺物観察表 (第35・36図 PL.47・48)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第35図 PL.47	1	土師器 杯	貯蔵穴埋没土 1/2	口底 11.2 丸底	高	3.0	粗砂粒少・暗赤色粘土粒少/良好/橙	器面摩滅のため整形不明。	
第35図 PL.47	2	土師器 杯	埋没土 1/3	口底 10.1 丸底	高	3.3	粗砂粒/良好/明赤褐	器面摩滅のため整形不明。	
第35図 PL.47	3	土師器 杯	貯蔵穴内床下20cm 口縁1/4欠	口底 13.3 5.8	高	5.5	粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底面はヘラ削りか。他は器面摩滅のため整形不明。	
第35図 PL.47	4	土師器 杯	南寄床直上～7cm 3/4	口底 13.2 丸底	高 13.7	3.7	粗砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ。底部との間には弱い稜を有する。底部外面は手持ちヘラ削り。内面はナデ。	器面摩滅。内外面とも漆塗りか。
第35図 PL.47	5	土師器 杯	東寄床上7cm 1/2	口底 12.6 丸底	高 12.1	[3.9]	粗砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。内面はナデの上にヘラ磨きで内面を八分画か。	
第35図	6	土師器 杯	埋没土 口縁1/4	口底 12.6	高 12.2		暗赤色粘土粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削りと考えられる。	器面摩滅。
第35図	7	須恵器 蓋	埋没土 破片	口天 15.2	摘高		細砂粒・片岩/還元焰/黄灰	ロクロ整形(右回転か)。天井部外面の中心寄りに回転ヘラ削り。小破片からの復元で径不安。	
第35図	8	須恵器 蓋	埋没土 1/4(口縁欠)	口天 4.4	摘高		黒色鉱物粒少/還元焰/灰黄	ロクロ整形(右回転)。天井部を切り離し後、摘み部貼付。天井部外面の中心寄りに幅広く回転ヘラ削り。厚手。	内面やや摩滅。
第35図	9	須恵器 高台付杯	埋没土 破片	口底 12.0 (7.6)	台高 4.1	7.3	灰黒色粘土粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。口縁部外面下位に回転ヘラ削り。高台部は底部切り離し後の付高台。	
第35図 PL.47	10	須恵器 高台付杯	埋没土 破片	口底 17.2	台高 3.8	12.1	細砂粒・黒色鉱物粒/還元焰/灰黄褐	ロクロ整形(右回転)。口縁部外面下位と底部に回転ヘラ削り。高台部は削り出し高台。	外面に自然釉付着。
第35図	11	須恵器 椀	埋没土 口縁上位～高台1/3	口底 7.4	台高		暗赤色粘土粒/酸化焰/橙	ロクロ整形(右回転か)。高台部は付高台。	器面摩滅。
第35図 PL.47	12	土師器 鉢	貯蔵穴内床下22cm 1/2	口底 17.4 丸底	高 12.4		小礫・粗砂粒多・片岩/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ。胴部から底部外面は斜縦位のヘラ削り。口縁部寄りと底部は弱いタッチ。内面は横位のヘラナデ。底部厚手。	外面一部に炭素吸着。器面灰黒色。
第35図 PL.47	13	土師器 鉢	東壁際床直上 1/3	口胴 13.7	底高 14.4	6.0	小礫・粗砂粒多・片岩/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部は縦位のヘラ削り。底部外面もヘラ削り。内面上位・中位は横位の、下位は縦位のヘラナデ。	器面灰黒色。
第35図 PL.47	14	土師器 甕か	埋没土 口縁～胴下位1/4	口胴 14.0 17.5	底高		粗砂粒・片岩/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面はヘラ削りと考えられるが、器面摩滅のため詳細不明。内面は横位のヘラナデ。	内面は黒色味。
第35図	15	土師器 鉢	埋没土 口縁～胴上半片	口底 15.4	高		粗砂粒・片岩/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は斜縦位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	
第35図	16	土師器 小型甕	埋没土 口縁片	口胴 10.8 10.6	底高		片岩・細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面はヘラ削りか。内面は横位のヘラナデ。	器面摩滅。
第35図 PL.47	17	土師器 甕	東寄床上6cm 口縁～胴中位片	口胴 21.4 18.4	底高		小礫多・粗砂粒多・片岩/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。長胴甕。	胴部外面一部に炭素吸着。被熱。
第35図 PL.47	18	土師器 甕	中央床上12cm 口縁～胴下位片	口胴 17.5 19.2	頸高 15.7		粗砂粒少・細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面上半部は横位の、下半部は縦位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	被熱。内面やや摩滅。
第36図 PL.48	19	土師器 甕	西寄床上9cm 口縁～胴上位1/4	口胴 18.2 20.2	頸高 15.7		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。輪積み痕を残す。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	器面摩滅。
第36図 PL.48	20	土師器 甕	東壁密着床直上 口縁～胴上位片	口胴 22.8	底高		小礫・粗砂粒多・片岩/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位のヘラ削りと考えられるが、器面摩滅のため詳細不明。内面はヘラナデと考えられる。	内面も摩滅。
第36図	21	土師器 甕	埋没土 口縁～肩片	口胴 15.8	底高		粗砂・細砂粒・片岩/良好/にぶい褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	器面摩滅。
第36図	22	土師器 甕	埋没土 口縁～肩片	口胴 18.0	底高		細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	器面摩滅。
第36図 PL.48	23	土師器 甕	中央床上12cm 胴下半～底	口胴 22.6	底高	3.4	細砂粒/良好/にぶい褐	胴部外面の残存最上位は斜位の、以下は斜縦位のヘラ削り。内面は上位に横位の、下位は斜位のハケ状工具によるナデ。	器面摩滅。

12号住居遺物観察表 (第37図 PL.48)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第37図	1	須恵器 蓋	埋没土 口縁片	口天 18.5	摘高		細砂粒少/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。天井部外面の中心寄りに回転ヘラ削り。	
第37図 PL.48	2	土師器 甕か	南寄床上13cm 胴下半～底	口胴 15.0	底高 6.3	7.3	粗砂粒少・片岩/良好/にぶい橙	上半部に欠損の生じた甕の割れ口を二次調整。鉢として再利用したものと考えられる。胴部外面はヘラ削りか。器面摩滅のため詳細不明。	被熱か。

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	底				
第37図	3	土師器 甕	埋没土 口縁～胴上位片	口	14.1	底	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は斜横位のヘラ削り。内面は横 位のヘラナデ。	器面に炭素吸 着。摩滅。
第37図 PL.48	4	土師器 甕	南寄床上12cm 口縁～胴上位片	口	17.6	底	粗砂粒多・片岩/ 良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。	器面摩滅。
第37図 PL.48	5	土師器 甕	南寄床上10cm 口縁～胴上位 1/3	口	22.8	底	細砂粒・暗赤色粘 土粒少/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ。外面に輪積み痕を残す。胴部外面は縦位 のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	被熱。器面や や摩滅。

13号住居遺物観察表 (第39図 PL.48)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	底				
第39図 PL.48	1	須恵器 椀	竈内床上7cm 1/4	口	15.0 (7.2)	台 高	粗砂粒・暗赤色粘 土粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転系切り後の付高台。 貼付後、周縁部にナデ整形。高台剥離後も割口を研磨して 使用。	器面摩滅。
第39図	2	土師器 甕	竈周辺床直上 口縁～胴上位片	口	19.8	底	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位 のヘラナデ。	器面摩滅。
第39図 PL.48	3	土師器 甕	竈内床上11cm 口縁～胴上位片	口	19.8	底	細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位 のヘラナデ。	器面摩滅。
第39図 PL.48	4	鉄製品 刀子	埋没土 両端欠く1/2	長 幅	9.5 1.9	厚 重	1.0 20.5	刃先および茎端部を欠く刀子。錆化が著しく形状は不明瞭 であるが、棟および刃になだらかな間を持つ。	茎部に柄の木 質は確認でき ない。
第39図 PL.48	5	鉄製品 釘	埋没土 両端欠く	長 幅	5.3 1.3	厚 重	1.5 11.3	断面正方形の角釘と見られるが両端は劣化破損する。	木質等は見ら れない。
第39図	6	鉄製品 釘	埋没土 頂部側破片	長 幅	4.4 0.9	厚 重	1.0 7.1	断面正方形の角釘と見られるが、頂部はやや曲がり特別な 形態を持たず角形終わり、他端は劣化破損する。	表面に木質等 見られない。

14号住居遺物観察表 (第41図 PL.48)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	底				
第40図 PL.48	1	土師器 杯	中央床上8cm 口縁片	口	9.7	高	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削りと考えられる。	器面摩滅。

15号住居遺物観察表 (第41図 PL.48)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	底				
第41図	1	土師器 杯	埋没土 口縁片	口	10.8	高	粗砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。	器面摩滅。
第41図	2	土師器 不明	南東隅床直上 口縁片	口	15.0	高	小礫・粗砂粒・片 岩/良好/橙	器種不明。直口壺または高杯の口縁部か。器面は摩滅のため 整形不明。	
第41図 PL.48	3	土師器 甕	東寄床直上 口縁～胴中位片	口	23.8	底	粗砂粒少・暗赤色 粘土粒少・雲母/ 良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位のヘラ削り。内面は横位 のヘラナデ。	器面被熱。や や摩滅。
第41図 PL.48	4	土師器 甕	埋没土 口縁～胴上位片	口	19.7	底	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位 のヘラナデ。	
第41図	5	土師器 甕	埋没土 胴下位～底	口		底	3.3 細砂粒/良好/にぶ い黄褐	胴部外面は縦位のヘラ削り。内面はヘラナデ。底部外面は ヘラ削り。	被熱。器面に 炭素吸着。

16号住居遺物観察表 (第43図 PL.48)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	底				
第43図 PL.48	1	土師器 杯	貯蔵穴内床下12cm 3/4	口	11.5 7.7	高	3.1 粗砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ。体部外面は横位のヘラ削り。底部外面は 手持ちヘラ削り。内面はナデ。	底部外面摩滅。
第43図	2	須恵器 皿	北寄床上7cm 口縁片	口	11.8	高	粗砂粒/還元焰・ 軟質/黄灰	ロクロ整形(右回転)。	器面摩滅。
第43図 PL.48	3	須恵器 杯	貯蔵穴内床下4cm 3/5	口	13.0 6.2	高	4.4 小礫・粗砂粒・片 岩/還元焰/黄灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転系切り後、無調整。	器面摩滅。
第43図 PL.48	4	須恵器 杯	東寄床直上 1/4	口	12.8 5.8	高	4.1 粗砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転系切り後、無調整。	器面摩滅。
第43図	5	須恵器 椀	南西寄床下13cm 1/4	口	16.6	台 高	粗砂粒・片岩/酸 化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。歪みのある破片からの復元で径・傾 き不安。	器面摩滅。
第43図 PL.48	6	須恵器 椀	東寄床上6cm 口縁下位～高台1/2	口	(7.9)	台 高	8.6 白色鋳物粒/還元 焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転系切り後の付高台。 貼付後、周縁部にナデ調整。	内面はやや摩 滅。
第43図	7	須恵器 椀	中央床直上 口縁下位～高台	口	(6.5)	台 高	6.5 粗砂粒・暗赤色粘 土粒/酸化焰/灰黄	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転系切り後の付高台。	器面摩滅。
第43図	8	土師器 小型甕	埋没土 口縁～胴上位片	口	10.5	底	高 細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位 のヘラナデ。	外面に炭素吸 着。
第43図	9	土師器 甕	南寄床下8cm 口縁～胴上位片	口	19.0	底	高 細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位 のヘラナデ。	被熱。炭素吸 着。

17号住居遺物観察表 (第45図 PL.48)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	底				
第45図 PL.48	1	須恵器 蓋	西壁密着床直上 完形	口	13.8	摘 高	2.4 粗砂粒少・黒色鋳 物粒/還元焰/褐灰 3.9	ロクロ整形(右回転)。天井部は切り離し後、摘み部を貼付。 天井部外面の中心寄りに回転ヘラ削り。	内面の摩滅顕 著。
第45図 PL.48	2	須恵器 杯	南壁際床直上 3/4	口	13.0 7.4	高	4.7 細砂粒/酸化焰/ にぶい橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転系切り後、無調整。	内面摩滅。
第45図	3	須恵器 椀	埋没土 底～高台1/2	口		台 高	8.5 細砂粒少/還元 焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転系切り後の付高台。 貼付後、周縁部にナデ調整。	内面摩滅顕著。 高台部端部も 摩滅。

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第45図	4	土師器 甕	貯蔵穴埋没土 口縁～胴上位片	口 底	21.8	底 高	粗砂粒・細砂粒/ 良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は斜横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	被熱か。
第45図 PL.48	5	石製品 紡輪	北寄床直上 完形	径 高	4.9 1.4	重	48.8 蛇紋岩	全面が良く研磨され、丁寧な作り。径7mmの軸孔を両側穿孔する。	逆台形状 (薄型)

18号住居遺物観察表 (第46図)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第46図	1	須恵器 椀	埋没土 底～高台1/4	口 底		台 高	8.8 黒色鈹物粒少/還元 焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転系切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	内面摩滅顕著。

19号住居遺物観察表 (第47図 PL.48)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第47図 PL.48	1	須恵器 杯	南壁際床直上7cm 1/2	口 底	13.0 8.4	高	3.1 粗砂粒/還元焰・ 酸化焰ぎみ/灰白	ロクロ整形(左回転か)。底部回転ヘラ切り後、全面回転ヘラ削り。	

20号住居遺物観察表 (第49図 PL.48・49)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第49図 PL.48	1	土師器 杯	埋没土 1/2	口 底	14.0 丸底	高	4.4 粗砂粒・片岩多/ 良好/にぶい褐	口縁部は横ナデ。底部はヘラ削り。他は摩滅のため観察できない。	被熱か。
第49図 PL.48	2	土師器 杯	埋没土 1/4	口 底	11.2 丸底	高	粗砂粒/良好/橙	器面摩滅のため整形不明。	
第49図	3	土師器 杯	埋没土 口縁片	口 底	12.8 丸底	高 稜	13.4 粗砂粒少/良好/橙	口縁部は横ナデ。以下器面は摩滅のため整形不明。	
第49図 PL.48	4	土師器 杯	竈周辺床直上5cm 1/4	口 底	13.8 丸底	高	[3.3] 粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。以下器面は摩滅のため整形不明。	
第49図 PL.49	5	土師器 鉢	西壁際・西壁密 着床直上10cm 4/5	口 底	21.8 7.2	高	5.7 粗砂粒多・片岩/ 良好/橙	器形は歪んでいる。口縁部は横ナデ。以下内外面は摩滅のため整形不明。底部外面は木葉痕か。丸胴形甕を製作途中で鉢形に変えたような異なる土器。	
第49図 PL.49	6	土師器 鉢	ピット4内・ ピット4際 床直上～13cm 4/5	口 底	7.3 8.8	底 高	丸底 5.5 粗砂粒少・片岩/ 良好/明赤褐	厚手だが端部のみ細く尖る。口縁部は横ナデ。以下内外面とも摩滅のため整形不明。	
第49図 PL.49	7	土師器 鉢	南壁密着床直上 ～8cm 3/5	口 底	8.4 10.3	底 高	丸底 5.7 粗砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ。体部から底部外面は手持ちヘラ削り。内面はナデ。	器面やや摩滅。
第49図	8	土師器 鉢	南東隅床直上 口縁～体下位片	口 底	27.8	高	粗砂粒多・片岩/ 良好/明赤褐	口縁部は横ナデ。体部外面は縦位のヘラ削り。内面はナデと考えられるが、器面摩滅のため詳細不明。	
第49図	9	須恵器 蓋	東寄床直上7cm 1/4	口 天	19.0	摘 高	粗砂粒/還元焰/に ぶい黄褐	ロクロ整形(右回転)。天井部外面の中心寄りに回転ヘラ削り。	
第49図	10	須恵器 鉢	埋没土 口縁片	口 底	15.4	高	黒色鈹物粒少/還元 焰/灰白	磁鉢。口縁部先端の内側は肥厚。ロクロ整形(左回転)。残存部下位に回転ヘラ削り。	
第49図	11	土師器 台付甕	埋没土 底～台	口 底		台 高	粗砂粒/良好/にぶ い褐	外面は縦位のヘラ削り。裾部にナデの部分を残す。内面上半部に指ナデ。下半部は横ナデか。	器面摩滅。被熱か。
第49図 PL.49	12	土師器 甕	西壁際・西寄 床直上10～14cm 口縁～胴1/3	口 底	23.4	底 高	小礫・粗砂粒・片 岩/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	被熱。外面一部に炭素吸着。黒斑状。
第49図	13	土師器 甕	埋没土 口縁片	口 底	23.8	底 高	粗砂粒・暗赤色粘 土粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面はヘラ削り時の工具が当たった痕跡が見られる。	器面摩滅。
第49図	14	土師器 甕	埋没土 口縁片	口 底	23.6	底 高	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	
第49図	15	土師器 甕	西壁密着床直上11cm 底1/2	口 底		底 高	6.2 粗砂粒・片岩/良 好/明黄褐	胴部外面はヘラ削り。内面はヘラナデ。底部外面に木葉痕。	器面摩滅。

21号住居遺物観察表 (第51図 PL.49)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第51図	1	土師器 杯	北壁際床直上 1/4	口 底	12.4 丸底	高	4.8 細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ。他は器面摩滅のため整形不明。	内面に炭素吸着。
第51図 PL.49	2	土師器 杯	北壁際床直上 3/4	口 底	13.5 丸底	高 稜	4.8 13.9 粗砂粒少/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部との間に稜を有する。底部外面は手持ちヘラ削り。内面中心から放射状にヘラ磨き。	器面摩滅。
第51図 PL.49	3	土師器 杯	ピット2周辺 床直上7cm 1/3	口 底	14.5 丸底	高 稜	5.1 14.6 粗砂粒少/良好/に ぶい橙	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。内面はナデ。	器面摩滅。
第51図 PL.49	4	土師器 鉢	西壁際床直上 完形	口 底	9.7 10.4	底 高	丸底 7.2 粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。体部は横位のヘラ削り。内面はナデ。底部外面はヘラ削りか。	外面やや摩滅。
第51図 PL.49	5	土師器 甕	北壁際床直上 口縁～胴上位片	口 底	23.3 30.9	底 高	粗砂粒少・暗赤色 粘土粒多/良好/に ぶい赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位のヘラ削り、間にナデの部分を残す。内面は横位のヘラナデ。	被熱か。内外面に炭素吸着。
第51図 PL.49	6	土師器 甕	北壁際床直上 胴中位～底	口 底	18.8	底 高	6.7 小礫・粗砂粒多数/ 良好/にぶい褐	胴部外面は縦位のヘラ削り。最下位は斜位。内面は斜横位のヘラナデ。	器面被熱。炭素吸着。

22号住居遺物観察表 (第52図)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高さ	口径			
第52図	1	須恵器 高台付皿	埋没土 口縁～底片 (高台欠)	口底	13.4 (6.2)	台高	粗砂粒・白色鈹物 粒/還元焰・軟質/ 黄灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後、体部下 端に貼付する。	高台剥落後も 割口研磨して 使用。
第52図	2	土師器 甕	埋没土 口縁片	口底	18.0	底高	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。	器面摩滅。

23号住居遺物観察表 (第54図 PL.49)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口天	口径	高さ			
第54図	1	須恵器 蓋	埋没土 摘み～口縁上位 片	口天	5.8	摘高	3.8 黒色鈹物粒/還元 焰・軟質/灰黄	ロクロ整形(右回転)。天井部は回転糸切り後、摘み部を貼 付。周縁部にナデ調整を施さないことから切り離し痕を残 す。天井部外面の中心寄りに回転ヘラ削り。	
第54図 PL.49	2	須恵器 杯	南西隅床上8cm 2/3	口底	11.8 6.8	高	3.7 粗砂粒・白色鈹物 粒/還元焰・酸化 焰/黄灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面の摩滅顕 著。
第54図 PL.49	3	須恵器 杯	埋没土 2/3	口底	12.6 5.6	高	3.7 粗砂粒多/還元焰 か/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	被熱か。炭素 吸着。器面摩 滅。
第54図 PL.49	4	須恵器 杯	中央床上13cm 1/4	口底	13.2 6.2	高	4.0 粗砂粒/酸化焰/灰 白	ロクロ整形。底部回転糸切りと考えられる。	器面の摩滅顕 著。
第54図	5	須恵器 杯	埋没土 口縁下位～底 1/4	口底	7.0	高	粗砂粒・暗赤色粘 土粒/酸化焰/灰黄	ロクロ整形(左回転)。底部回転糸切り後、無調整。	底部外面に粘 土塊付着。器 面摩滅。
第54図 PL.49	6	須恵器 椀	竈A内床上8cm 1/2	口底	15.2 (7.4)	台高	6.8 5.4 暗赤色粘土粒・雲 母/酸化焰/灰黄	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。	器面摩滅。
第54図 PL.49	7	須恵器 椀	北西隅床直上 高台一部欠	口底	14.1 (7.6)	台高	6.9 5.2 粗砂粒少/酸化焰/ 灰黄褐	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部切り離し後の付高台。 口縁部先端の内外面に油煙付着。灯明に使用か。	器面摩滅。
第54図	8	須恵器 椀	掘り方埋没土 口縁下位～高台 1/2	口底	(8.4)	台高	9.4 白色鈹物粒・片岩 /還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。周縁部に回転ヘ ラ削り後に高台部を貼付。その後、周縁部にナデ調整。	器面に炭素吸 着。
第54図	9	土師器 小型壺か	埋没土 胴中位片	口肩	8.4	底高	粗砂粒/良好/黄灰	中で屈曲。肩部をなす。上位はナデ。下位は横位のヘラ 削りか。内面はナデ。薬壺形か。	器面に炭素吸 着。
第54図 PL.49	10	土師器 甕	南壁際床上5cm 口縁～胴上位	口底	19.2 19.9	底高	粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位を主体とするヘラ削り。 内面は横位のヘラナデ。	
第54図 PL.49	11	土師器 甕	南壁際床上5cm 口縁～胴上位	口底	19.8 21.9	底高	粗砂粒少/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は斜横位のヘラ削り。内面は横 位のナデ。薄手。	器面やや摩滅。

24号住居遺物観察表 (第55図 PL.50)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口天	口径	高さ			
第55図 PL.50	1	須恵器 蓋	掘り方埋没土 口縁～天片	口天	12.6 6.2	摘高	粗砂粒・灰黒色粘 土粒/還元焰/黄灰	ロクロ整形(右回転)。天井部外面の中心寄りに回転ヘラ削 り。	
第55図 PL.50	2	須恵器 杯	東寄床下16cm 完形	口底	14.0 6.8	高	4.4 粗砂粒少/還元焰/ 灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面に黒色の 付着物。
第55図	3	須恵器 椀	埋没土 口縁下位～高台	口底		台高	6.2 粗砂粒・灰黒色粘 土粒/酸化焰か/褐 灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。	器面に炭素吸 着。摩滅。
第55図	4	須恵器 椀	西寄床直上 口縁下位～高台1/4	口底		台高	粗砂粒/還元焰・ 酸化焰/黄灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。 端部は摩滅している。	器面摩滅。
第55図	5	土師器 台付甕	西寄床直上 胴下位～台上位	口底		台高	細砂粒/良好/明赤 褐	胴部外面は縦位のヘラ削りと考えられる。内面はヘラナデ。 台部外面は横位のナデ。	器面摩滅。

25号住居遺物観察表 (第57図 PL.50)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	口径	高さ			
第57図 PL.50	1	須恵器 杯	西寄床下6cm 1/2	口底	12.6 6.0	高	2.8 粗砂粒/酸化焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面の摩滅顕 著。
第57図 PL.50	2	須恵器 杯	貯蔵穴内床下10cm 口縁一部欠	口底	12.6 5.8	高	3.9 小礫・粗砂粒・片 岩/酸化焰/灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	内面の口縁部 内端に油煙付 着。器面摩滅。
第57図 PL.50	3	須恵器 杯	南西壁際床上5cm 口縁～底片	口底	12.8 5.6	高	2.4 粗砂粒・片岩/酸 化焰/にぶい橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。
第57図 PL.50	4	須恵器 杯	竈A内・南東隅 床上4cm 2/3	口底	14.0 6.3	高	4.1 粗砂粒・暗赤色粘 土粒/酸化焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面の摩滅顕 著。炭素吸着。
第57図 PL.50	5	須恵器 杯	竈A周辺床下15cm 1/2	口底	12.4 6.2	高	4.0 灰黒色粘土粒/還 元焰・軟質/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。
第57図	6	須恵器 杯	埋没土 口縁～底片	口底	11.2 6.0	高	3.6 細砂粒/還元焰/黄 灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第57図 PL.50	7	須恵器 杯	竈A周辺床直上 3/4	口底	13.2 5.8	高	4.6 粗砂粒・暗赤色粘 土粒/還元焰・軟 質/灰白	粗雑なロクロ整形(右回転)。内面に粘土を貼り足している。	器面摩滅。
第57図	8	須恵器 椀	埋没土 口縁上位～底片	口底	(7.8)	台高	粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は剥落したまま使用か。体部 立ち上がり急で瓶類の可能性。	器面に炭素吸 着。

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第57図 PL.50	9	須恵器 椀	西寄床下10cm 1/4	口 底	15.4	台 高	6.2 5.0	暗赤色粘土粒/酸 化焰/明黄褐	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部切り離し後の付高台。 貼付後、周縁部にナデ調整。
第57図	10	須恵器 椀	埋没土 口縁1/4	口 底	14.6	台 高		灰黒色粘土粒/還元 焰・軟質/灰黄	ロクロ整形(右回転)。歪みある破片からの復元で、径・傾 き不安。
第57図	11	須恵器 椀	掘り方埋没土 口縁1/3	口 底	16.0	台 高		灰黒色粘土粒/還元 焰・軟質/灰黄	ロクロ整形(右回転)。
第57図	12	土師器 甕	埋没土 口縁~胴中位片	口 胴	16.8 19.0	底 高		粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面はヘラ削りと考えられるが、器 面摩滅の為、詳細不明。
第57図 PL.50	13	土師器 甕	西寄床下5~6 cm 口縁~胴上位片	口 胴	18.8	底 高		細砂粒・暗赤色粘 土粒/良好/にぶい 橙	口縁部は横ナデと考えられる。胴部外面は摩滅の為、器面 の整形不明。内面は横位のヘラナデ。
第57図	14	土師器 甕	竈A内床上9cm 胴中位~底	口 胴		底 高	3.8	粗砂粒/良好/明黄 褐	胴部外面は縦位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデと考え られるが、器面摩滅で詳細不明。底部外面はヘラ削り。

26号住居遺物観察表 (第58図 PL.50)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第58図 PL.50	1	須恵器 杯	貯蔵穴内床下7 cm~床直上 2/3	口 底	12.0 6.3	高	3.9	粗砂粒・暗赤色粘 土粒/酸化焰/にぶ い黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。

27号住居遺物観察表 (第61・62図 PL.50・51)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第61図 PL.50	1	土師器 埴	南東壁際・南東 隅床上4cm 口縁一部欠	口 胴	11.6 8.8	底 高	丸底 9.0	暗赤色粘土粒/良 好/橙	口縁部は内外面ともナデ後、縦位のヘラ磨き。胴部外面は 横位の手持ちヘラ削り。内面は指ナデ。
第61図 PL.50	2	土師器 高杯	埋没土 杯下位~脚	口 柱	3.3	裾 高	10.6	粗砂粒・片岩/良 好/にぶい橙	基部欠損部分の割口を丁寧に二次調整。蓋または器台に整 形し利用したものと考えられる。脚部外面に丁寧なナデ。 内面上半部は縦位のナデ。下半は横位のナデ。
第61図	3	土師器 高杯	南東壁際床上4cm 脚(柱状部~裾 上位)	口 柱	3.5	裾 高		細砂粒/良好/橙	裾部は柱状部から屈曲。大きく外反する。柱状部外面は縦 位のヘラナデ。裾部は横ナデ。柱状部内面はナデ、上半部 に絞り痕。
第61図	4	土師器 高杯	南西隅・北東隅 床直上 脚(柱状部)	口 柱	3.6	裾 高		細砂粒・暗赤色粘 土粒/良好/橙	裾部は柱状部から屈曲。大きく外反すると考えられる。脚 部外面は縦位にヘラ磨きを施したか。器面は摩滅のため詳 細不明。内面はナデ、上半部に絞り痕。
第61図	5	土師器 高杯	北東隅床下13cm ~床直上 脚(柱状部)	口 柱	3.1	裾 高		粗砂粒/良好/明赤 褐	裾部は柱状部から屈曲。大きく外反すると考えられる。脚 部外面は縦位のナデ。磨きか。器面は摩滅のため詳細不明。 内面上半部に絞り痕。
第61図 PL.50	6	土師器 小型甕	南東隅床直上 2/3	口 胴	10.9 15.3	底 高	4.8 12.5	粗砂粒・片岩・暗 赤色粘土粒/良好/ にぶい橙	口縁部はS字状を呈する。底部は平底。口縁部は横ナデ。 胴部外面斜横位のヘラ削り。内面はヘラナデと考えられる が、器面摩滅のため詳細な整形不明。
第61図 PL.50	7	土師器 小型甕	ピット2内・ ピット2周辺 床下14~床上 5cm 口縁~胴下位	口 胴	12.1 13.6	底 高		粗砂粒多/良好/橙	単口縁。口縁部は横ナデ。胴部外面上半は斜位の、下位は 縦位のヘラ削りか。内面は横位のヘラナデ。最大径は胴部 下側にある。
第61図 PL.50	8	土師器 小型甕	北東隅床直上~ 4cm 口縁~胴下位	口 胴	12.1 16.3	底 高		粗砂粒多・暗赤色 粘土粒多/良好/ にぶい橙	口縁部は外反して立ち上がる。中位で一段と外方に向く。 横ナデ。胴部外面は斜横位のヘラ削り。内面は頸部直下に ナデ。指押さえ痕を残す。以下は横位のヘラナデ。
第61図 PL.50	9	土師器 甕	貯蔵穴内床下21 cm 口縁~胴中位 1/2	口 胴	15.8 23.8	底 高		粗砂粒・暗赤色粘 土粒/良好/明赤褐	口縁部は単純口縁で外反して立ち上がる。口縁部は横ナデ。 胴部外面は頸部直下が斜横位の、それ以下が斜横位のヘラ 削り。内面は頸部直下が指押さえを兼ねたナデ。以下は横 位のヘラナデ。
第61図 PL.51	10	土師器 壺	北東隅壁際床直 上 胴上位~底2/3	口 胴	31.2	底 高	7.5	粗砂粒・暗赤色粘 土粒/良好/にぶい 橙	胴部外面は3、4回に分けて斜位のヘラ削り。内面は斜位 ・斜横位のヘラナデ。底部外端は肥厚気味で高台状。器面 摩滅のため詳細不明。
第61図 PL.51	11	土師器 台付甕	南東壁際床直上 2/3	口 胴	14.1 25.2	台 高	10.1 30.4	粗砂粒・暗赤色粘 土粒/良好/にぶい 褐	口縁部はS字状を呈する。横ナデ。外面下半には胴部ヘラ 削り時の工具が強く当たり消し切れていない。胴部外面は 右から左への斜横位のヘラ削り。中位以下は下から上に斜 縦位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。台部は下端が内 側に折り返る。外面は基部に横位の、以下は縦位のナデ。 内面は縦位の指ナデ。底部には内外面とも砂目粘土を貼付。 砂粒は少ない。
第62図 PL.50	12	土師器 台付甕	ピット4内・北 東隅 床下8cm ~床直上 口~胴上位	口 胴	10.2	台 高		粗砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部はS字状を呈する。横ナデ。胴部外面は横位のヘラ 削り。内面はヘラナデ。
第62図 PL.50	13	土師器 台付甕	貯蔵穴内・南東 隅床下7~床上 4cm 口~胴上位	口 胴	11.8	台 高		粗砂粒/良好/橙	口縁部はS字状を呈する。先端直下の内面側は沈線状に屈 曲。胴部外面と頸部直下は横位の、上位は斜横位のヘラ削り。 内面は頸部直下に指頭圧痕。以下は横位のヘラナデ。
第62図 PL.50	14	土師器 台付甕	北東隅・東寄 床直上 口縁~胴上位1/2	口 胴	13.6	台 高		粗砂粒多・暗赤色 粘土粒多/良好/橙	口縁部はS字状を呈する。横ナデ後、下半にヘラ削り。胴 部外面は右下から左上に斜横位のヘラ削り。内面はヘラナ デ、指押さえ。

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第62図 PL.50	15	土師器 台付甕	南東隅・東寄 床直上～5cm 口縁～胴上位1/4	口 胴	13.8	台 高	粗砂粒/良好/橙	口縁部はS字状を呈する。横ナデ。胴部外面は斜横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	
第62図 PL.51	16	土師器 台付甕	北東隅床直上～ 4cm 台下位	口 胴		台 高	[6.8] 粗砂粒/良好/橙	外面はナデを施すが輪積み痕も残る。内面は指ナデ。台部下側の折り返しなし。	
第62図	17	土師器 台付甕	北壁際床直上 台1/2	口 胴		台 高	10.2 粗砂粒/良好/明赤 褐	台部外面はナデ。内面は縦位の指ナデ。底部内面と台部天井部に砂目粘土を貼り、指で伸ばしている。	
第62図	18	土師器 台付甕	東壁際床直上 台1/2	口 胴		台 高	11.6 粗砂粒/良好/橙	端部は内側に折り返る。外面はナデか。内面は横位のナデか。	器面摩滅。
第62図	19	土師器 台付甕	北東隅床直上～ 8cm 台1/2	口 胴		台 高	7.5 粗砂粒/良好/明赤 褐	端部は内側にわずかに肥厚するのみ。外面はヘラナデ。内面は指ナデ。	器面被熱。やや摩滅。
第62図	20	土師器 台付甕	北東隅床直上～ 5cm 台下半3/4	口 胴		台 高	[10.7] 粗砂粒・暗赤色粘 土粒/良好/橙	下端部は内側に折返る。外面はナデ。内面は指頭によるナデ、押さえ。	

28号住居遺物観察表 (第63図 PL.51)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第63図 PL.51	1	須恵器 杯	東壁際床直上 2/3	口 底	12.2 6.6	高	4.0 粗砂粒・雲母/酸 化焰/灰黄	ロクロ整形(左回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。
第63図 PL.51	2	須恵器 椀	南寄床直上 口縁1/3欠、高 台欠	口 底	14.4 (7.3)	台 高	粗砂粒・暗赤色粘 土粒・雲母/酸化 焰/灰黄	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部切り離し後の付高台。高台剥離後も丁寧に研磨して使用。	器面摩滅。
第63図	3	須恵器 椀	南東隅床直上 口縁片	口 底	14.8 (7.8)	台 高	粗砂粒少/酸化焰/ にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。	器面に炭素吸着。摩滅。

29号住居遺物観察表 (第64図 PL.51)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第64図	1	須恵器 杯	埋没土 口縁下位～底片	口 底	6.2	高	灰黒色粘土粒/還 元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	底部外面の周縁部は摩滅。
第64図	2	須恵器 皿	埋没土 底片	口 底	4.6	高	粗砂粒・暗赤色粘 土粒/酸化焰/にぶ い橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第64図	3	須恵器 椀	埋没土 口縁1/3	口 底	14.6	台 高	粗砂粒/酸化焰/橙	ロクロ整形(右回転)。	器面摩滅。
第64図 PL.51	4	須恵器 椀	竈内床直上 口縁1/4	口 底	15.2	台 高	粗砂粒・黒色粘土 粒/酸化焰/にぶい 黄橙	ロクロ整形(右回転か)。	
第64図 PL.51	5	土師器 甕	竈内床直上～床 上9cm 口縁～胴下位 1/2	口 胴	20.8 22.6	底 高	小礫多・粗砂粒多 ・片岩/良好/にぶ い褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は丁寧にナデ調整の後、中位以下に縦位のヘラ削り。下位は横位、斜横位の弱いヘラ削り。内面は全面に斜横位のヘラナデ。	器面被熱。破損後、二次的に被熱の破片もあり。
第64図 PL.51	6	土師器 甕	竈内床直上 口縁～胴上位片	口 胴	19.8	底 高	小礫・粗砂粒・片 岩/良好/にぶい褐	胴部はもっと張り出す可能性があるか。口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位のヘラナデ。内面は横位のヘラナデ。	被熱。器面に炭素吸着。
第64図	7	土師器 羽釜	竈内床直上 口縁片	口 鉤 胴	24.4 28.9	底 高	灰黒色粘土粒/良 好/にぶい橙	口縁部は横ナデ。鉤部の貼付はやや粗雑。	器面摩滅。

30号住居遺物観察表 (第65図)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第65図	1	須恵器 椀	埋没土 口縁片	口 底	10.8	台 高	灰黒色粘土粒/還 元焰・軟質/灰	ロクロ整形(右回転)。	
第65図	2	土師器 甕	埋没土 口縁～胴上位片	口 胴	17.6	底 高	粗砂・細砂粒/良 好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は斜横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。歪みある破片からの復元で怪不安。	器面摩滅。

31号住居遺物観察表 (第67図 PL.51)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第67図 PL.51	1	須恵器 椀	北西隅床直上 3/4	口 底	12.4 (6.2)	台 高	6.0 5.1 粗砂粒・片岩・黒 色粘土粒/酸化焰/ 橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。	器面に炭素吸着。摩滅。
第67図 PL.51	2	土師器 甕	竈内床直上 口縁～胴中位 1/3	口 胴	20.0 22.0	底 高	粗砂粒・片岩/良 好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位・斜横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	器面被熱。
第67図 PL.51	3	須恵器 甕	竈密着床直上 口縁～胴下位片	口 胴	12.9 14.0	底 高	粗砂粒・片岩/酸 化焰/橙	紐づくり後、ロクロ整形(右回転か)。胴部外面下位に斜位のヘラ削り。	
第67図	4	須恵器 羽釜	中央床上4cm 口縁～胴上位片	口 鉤 胴	20.8 23.9	底 高	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	紐づくり後、ロクロ整形(右回転か)。	器面に炭素吸着。
第67図 PL.51	5	礫石器 敲石	埋没土 下半部欠損	長 幅	(10.8) 5.1	厚 重	1.8 143.9 緑色片岩	背面側上端・右側縁に敲打され、これに伴う衝撃剥離痕が生じている。	扁平棒状礫。

遺物観察表

32号住居遺物観察表 (第68図)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第68図	1	須恵器 蓋	埋没土 口縁片	口 天	10.2	摘 高	黒色鈹物粒/還元 焰/灰	ロクロ整形(右回転)。天井部外面の中心寄りに弱いタッチの回転ヘラ削り。	

34号住居遺物観察表 (第71図 PL.52)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第71図	1	土師器 杯	埋没土 口縁片	口 底	10.2 7.0	高	[3.9] 粗砂粒・赤色粘土 粒多/酸化焰/橙	器面摩滅のため整形不明。	
第71図	2	須恵器 蓋	埋没土 天井3/4	口 天		摘 高	白色鈹物粒少/還元 焰/灰	ロクロ整形(右回転)。天井部外面の中心寄りに回転ヘラ削り。	
第71図	3	土師器 台付甕	西壁際床直上 底～台上半	口 底		台 高	細砂粒/良好/橙	台部の内外面とも横ナデ。	器面摩滅。
第71図 PL.52	4	土師器 羽釜	南壁際床直上 口縁～胴中位 1/4	口 罅	20.8 24.4	胴 高	25.0 粗砂粒多・暗赤色 粘土粒/良好/にぶ い褐	口縁部は横ナデ。突出度の低い罅部を貼付後、周縁部にナデ調整。胴部外面は斜縦位のヘラ削り。内面は斜横位のヘラナデ。	器面被熱。摩滅。
第71図	5	須恵器 羽釜	竈内床直上 口縁～胴上位片	口 罅	21.8 25.8	胴 高	粗砂粒/酸化焰/に ぶい橙	紐づくり後、ロクロ整形。	器面に炭素吸着。
第71図 PL.52	6	須恵器 羽釜	竈内床直上 口縁～胴上位片	口 罅	16.8 22.8	胴 高	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄褐	ロクロ整形(回転方向不明)。罅部は貼付後、周縁部にナデ調整。	内面変色。黒色味。
第71図 PL.52	7	礫石器 敲石	埋没土 完形	長 幅	13.6 2.4	厚 重	2.6 120.6 雲母石英片岩	小口部に敲打・摩耗痕、側縁に敲打痕を有する。	棒状礫。

35号住居遺物観察表 (第72図 PL.52)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第72図 PL.52	1	須恵器 杯	埋没土 1/2	口 底	13.0 6.6	高	4.1 粗砂粒多・白色鈹 物粒・暗赤色粘土 粒/還元焰/黄灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第72図	2	須恵器 杯	埋没土 口縁上位～底片	口 底	7.2	高	粗砂粒・白色鈹物 粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第72図	3	土師器 甕	埋没土 胴下位～底片	口 胴		底 高	5.0 細砂粒/良好/にぶ い褐	胴部外面は縦位のヘラ削り。内面はヘラナデ。	器面被熱。炭素吸着。

36号住居遺物観察表 (第73図)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第73図	1	須恵器 杯	中央床直上 口縁片	口 底	14.0	高	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形(右回転)。	
第73図	2	須恵器 皿か	竈前床直上 口縁片	口 底	15.4	高	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。	器面摩滅。

37号住居遺物観察表 (第74図 PL.52)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第74図 PL.52	1	須恵器 高台付杯	東壁際床直上 口縁一部欠	口 底	15.2 (10.7)	台 高	11.8 4.4 細砂粒・黒色鈹物 粒/還元焰/灰黄	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転ヘラ削り後の付高台。	口縁部外面に自然釉付着。内面摩滅。

38号住居遺物観察表 (第76図 PL.52)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第76図 PL.52	1	土師器 埴	貯蔵穴内床下8cm 完形	口 頸	8.2 6.2	胴 高	8.3 9.2 粗砂粒/良好/橙	口縁部上半の外面は横ナデ。下半は縦位のナデ。胴部外面は頸部直下が縦位の、それ以下が横位のヘラ削り。内面は指ナデ。	底部外面に炭素吸着。黒斑状。
第76図 PL.52	2	土師器 高杯	中央・南西隅 床直上 杯1/3	口 柱	17.1	裾 高	粗砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部はナデ調整の上に内外面に縦位のヘラ磨きを重ねる。	
第76図 PL.52	3	弥生土器 高杯	貯蔵穴埋没土 口縁片	口 柱	15.8	裾 高	粗砂粒/酸化焰/に ぶい橙	口縁部先端には刻目文が施される。外面はナデ。内面もナデか。赤色塗彩。	
第76図	4	土師器 高杯	北東隅床直上 脚下位片	口 柱		裾 高	12.2 粗砂粒/良好/にぶ い赤褐	外面はナデの上に縦位のヘラ磨き。内面は横位のナデ。	
第76図 PL.52	5	土師器 鉢	貯蔵穴内床下12cm 1/4欠	口 底	11.7 7.5	高	6.4 粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。体部はナデ後、縦位にヘラ磨き。内面もナデ後ヘラ磨き。底部外面は丁寧なナデ。	器面やや摩滅。炭素吸着。
第76図 PL.52	6	土師器 台付甕	中央床直上～床 上5cm 1/2	口 胴	16.3 23.2	台 高	11.2 31.6 粗砂粒多/良好/に ぶい褐	口縁部は緩やかに屈曲しS字状口縁の名残。横ナデ。胴部外面は上位が右から左へ、下位から中位が右下から左下にヘラ削り。内面上部横位、下半部上位斜縦位、下半部下位横位のヘラナデ。台下端部内側に折り返る。外面は丁寧なナデ。内面縦位の指ナデ。外底部砂目粘土を貼付。	器面被熱。内外面に炭素吸着。
第76図 PL.52	7	土師器 台付甕	貯蔵穴内床下7 ～26cm 胴上位～台1/4	口 胴	20.5	台 高	9.2 粗砂粒多/良好/に ぶい褐	胴部外面上位は横位のヘラ削り。中位・下位は左上に向かってヘラ削り。台部寄りは横位のヘラ削り。内面上位は横位、以下は縦位のヘラナデ。台部は内外面ともナデ。底部は内外面ともに砂目粘土を充填。	器面被熱。内外面に炭素吸着。
第76図 PL.52	8	土製品 腕輪状	貯蔵穴内床下16cm 完形	外 径 内 径	7.7 5.5	高 重	2.4 48.0 細砂粒少/酸化焰/ 橙	長径7.7cm、短径7.0cmを測る。断面形は扁平であるが、内外面とも中位でわずかに厚みを増し、外側には稜を意識している。厚さは0.8cm。器面はナデ調整が施されている。	
第76図 PL.52	9	土製品 腕輪状	埋没土 1/4	外 径	9.0	高 重	2.6 19.7 粗砂粒少/酸化焰/ 橙	最大径9.1cmに復元できる。断面形は内側下位に弱い稜をなす。厚さは0.9cm。器面にはナデ調整が施される。	8と同巧で胎土も同じ。

39号住居遺物観察表 (第78図 PL.52・53)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第78図 PL.52	1	弥生土器 高杯	埋没土 脚	口 柱	- 4.4	裾 高	10.5	粗砂・石英等、緻 密	外面は縦ヘラ磨き後、端部横ナデ。内面は横ナデだが、縦 位の指頭圧痕が残る。	樽式。
第78図 PL.52	2	弥生土器 有孔鉢	南壁際床上7cm 一部欠損	口 底	14.0 7.6	高 孔	7.2 0.7	粗砂・石英等、緻 密	外面は縦ヘラ削り後、口縁部横ナデ。内面は斜位ヘラナデ 後、口縁に横ナデ。	樽式。
第78図 PL.53	3	弥生土器 小型台付甕	北壁際床上直上 口縁～胴下半	口 胴	12.0 12.2	底 高		細砂・石英等多量、 やや粗雑	内外面ともに被熱風化して不鮮明だが、外面頸部に簾状文、 その下位に波状文を施す。内面は斜位のヘラナデ後、口縁 に横ナデ。	樽式。
第78図 PL.53	4	弥生土器 壺	埋没土 脚	口 胴		底 高		粗砂・石英等、緻 密	外面にベンガラと思われる赤色塗彩あり。	樽式。
第78図 PL.53	5	弥生土器 甕	埋没土 胴片	口 胴		底 高		粗砂多、片岩少、 やや粗雑	外面頸部に7本歯の簾状文を施す。3連止めが認められる が、全体構成は不明。	樽式。
第78図 PL.53	6	弥生土器 壺	埋没土 胴片	口 胴		底 高		細砂・石英等多量、 やや粗雑	内外面ともに被熱風化。外面頸部に波状文が巡る。	樽式。
第78図 PL.53	7	弥生土器 甕	北西隅・中央床 直上 胴片	口 胴		底 高		細砂・石英等多量、 やや粗雑	内外面ともに被熱風化。外面頸部付近に波状文が巡る。	樽式。

40号住居遺物観察表 (第81図 PL.53)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第81図 PL.53	1	土師器 杯	埋没土 1/2	口 底	13.2 丸底	高	3.3	粗砂粒・暗赤色粘 土粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。間にナデの 部分を残す。	器面摩滅。
第81図 PL.53	2	土師器 杯	埋没土 1/2	口 底	12.8 10.8	高	3.1	粗砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。間にナデの 部分を残す。	器面やや摩滅。
第81図	3	土師器 杯	埋没土 1/4	口 底	13.6	高		粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。間にナデの 部分を残す。内面はナデ。	
第81図	4	土師器 杯	埋没土 口縁～底片	口 底	12.9	高		粗砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削りを施すが、器 面摩滅のため詳細不明。	
第81図 PL.53	5	土師器 杯	埋没土 口縁下位～底	口 底	5.5	高		粗砂粒/良好/にぶ い褐	外底に粗砂の付着顕著で型造りの可能性。内面にヘラ状工 具の当たった痕跡あり。内面に金属器と思われる鋭利な工 具による線刻「示」か。	器面摩滅。
第81図	6	須恵器 蓋	南壁際床上直上 口縁～天1/2、 摘み欠	口 天	13.8	摘 高		黒色・白色鈹物粒/ 還元焰/灰黄褐	ロクロ整形(右回転)。天井部外面は広い範囲に回転ヘラ削 り。	
第81図 PL.53	7	須恵器 杯	中央床上直上 3/4	口 底	12.9 8.0	高	4.0	粗砂粒・白色鈹物 粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部は回転ヘラ削り。	
第81図	8	須恵器 盤	埋没土 口縁～底片	口 底	21.0 17.5	高	2.9	白色鈹物粒/還元 焰/にぶい黄	ロクロ整形(右回転)。口縁部下位に回転ヘラ削り。底部は 回転ヘラナデか。	
第81図 PL.53	9	土師器 甕	竈内床上直上 口縁～胴上位1/4	口 胴	22.0	底 高		細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面はヘラ削り。内面はヘラナデと 考えられるが、器面摩滅のため整形不明。	被熱。
第81図	10	土師器 甕	北壁際床上17cm 口縁～胴上位片	口 胴	23.6	底 高		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は斜横位のヘラ削り。	器面摩滅。
第81図 PL.53	11	土師器 小型甕	埋没土 口縁～胴上位片	口 胴	14.0	底 高		粗砂粒・片岩/良 好/にぶい褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は斜縦位のヘラ削りか。内面は 横位のヘラナデ。	器面摩滅。
第81図	12	土師器 甕	埋没土 胴下位～底	口 胴		底 高	4.9	細砂粒/良好/明赤 褐	胴部外面はヘラ削り。内面はヘラナデ。底部外面はヘラ削 り。	外面被熱。炭 素吸着。
第81図	13	土師器 甕	中央床上8cm 胴下位～底	口 胴		底 高	丸底	粗砂・細砂粒/良 好/にぶい橙	底部凸面状。外面は斜横位のヘラ削り。内面はヘラナデ。 器面摩滅のため詳細な整形不明。	

41号住居遺物観察表 (第83図 PL.53)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第83図 PL.53	1	須恵器 杯	南西寄床上直上 口縁一部欠	口 底	13.6 6.7	高	4.0	粗砂粒・片岩/酸 化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。
第83図 PL.53	2	須恵器 杯	南寄・南東隅 床上5cm 3/4	口 底	13.0 6.0	高	4.2	粗砂粒多/酸化焰/ にぶい橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面に炭素吸 着。摩滅。
第83図 PL.53	3	須恵器 杯	南寄・北東隅・ 北寄床上直上～5cm 3/4	口 底	12.5 5.8	高	4.2	粗砂粒・片岩/酸 化焰か/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面に炭素吸 着。摩滅顕著。
第83図 PL.53	4	須恵器 杯	竈内床上直上 2/3	口 底	12.6 5.7	高	4.0	白色鈹物粒/還元 焰/褐灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	内面摩滅。
第83図	5	須恵器 杯	埋没土 1/4	口 底	11.0 6.0	高	3.9	暗赤色粘土粒/還 元焰・軟質/灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。
第83図	6	須恵器 杯	西寄床上5cm 口縁上位～底 1/3	口 底	7.2	高		粗砂粒・灰黒色粘 土粒・片岩/還元 焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面やや摩滅。
第83図	7	須恵器 椀	埋没土 口縁上位～高台 上位1/2	口 底		台 高		粗砂粒/還元焰・ 軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。	口縁部内面に 重ね焼き痕が 見られる。器 面摩滅。
第83図	8	須恵器 壺	埋没土 胴下位～高台 1/5	口 底	(7.6)	台 高	7.8	白色鈹物粒少/還 元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。 貼付後、周縁部にナデ調整。	

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 胴	底 高				
第83図	9	土師器 甕	床下土坑内床下 8 cm 口縁1/4	口 胴	19.0	底 高	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位 のナデ。	
第83図 PL.53	10	土師器 甕	東壁際・床下土 坑内床下6～床 上6 cm 口縁～胴中位 1/3	口 胴	18.9 20.7	底 高	細砂粒/良好/橙	胴部中位は形状が歪んでいる。口縁部は横ナデ。胴部は器 面摩滅のため詳細な整形不明。外面上位は横位の、中位は 縦位のヘラ削り。内面は横位のナデと考えられる。	
第83図 PL.53	11	土師器 甕	竈内・竈周辺・ 床下土坑内床下 17cm～床直上 口縁～胴中位 1/3	口 胴	18.2 21.0	底 高	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面上位は斜横位の、中位は斜縦位 のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	被熱。器面摩 滅。

42号住居遺物観察表 (第84図 PL.53)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 胴	底 高				
第84図	1	土師器 甕	北壁際床直上 口縁～胴上位片	口 胴	20.2	底 高	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面はヘラ削りと考えられるが器面 摩滅のため整形不明。	
第84図 PL.53	2	土師器 甕	竈内床直上 口縁～胴上位 1/4	口 胴	20.8	底 高	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ。一部に指頭圧痕を残す。胴部外面は横位 のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	器面やや摩滅。

43号住居遺物観察表 (第86図 PL.53)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	高				
第86図 PL.53	1	須恵器 杯	貯蔵穴内床下7 cm 1/2	口 底	13.2 6.4	高	3.6	粗砂粒・暗赤色粘 土粒/酸化焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部は回転系切り後、無調整。 器面摩滅。一部に炭素吸着。
第86図 PL.53	2	須恵器 杯	南寄床直上 1/2	口 底	12.8 6.0	高	4.0	粗砂粒・片岩粒/ 酸化焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転系切り後、無調整。 器面摩滅。
第86図	3	須恵器 杯	埋没土 口縁～底片	口 底	12.5 6.0	高	3.9	粗砂粒/酸化焰/に ぶい橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転系切り後、無調整。 外面に炭素吸着。
第86図	4	須恵器 椀	埋没土 口縁片	口 底	14.8	台 高		粗砂粒/酸化焰/ 灰白	ロクロ整形(右回転)。
第86図 PL.53	5	須恵器 椀	南寄床直上 2/3	口 底	14.4 (6.0)	台 高	6.2 5.4	粗砂粒・暗赤色粘 土粒/酸化焰/にぶ い黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転系切り後の付高台。 貼付後、周縁部にナデ調整。 器面やや摩滅。炭素吸着。
第86図 PL.53	6	土師器 甕	北東壁際床直上 口縁～胴上位 1/4	口 胴	18.7 21.5	底 高		細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部は横ナデ。胴部は器面摩滅のため詳細な整形不明。 外面はヘラ削りと考えられる。
第86図	7	土師器 甕	埋没土 口縁～胴上位片	口 胴	21.2	底 高		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位 のヘラナデ。 器面摩滅。
第86図	8	土師器 甕	竈内・貯蔵穴内 床下9 cm～床直 上 頸～胴下位片	口 胴	24.6	底 高		細砂粒/良好/橙	外面は上位が横位の、中位以下が縦位のヘラ削りと考えら れる。内面は横位のヘラナデ。 器面摩滅。
第86図	9	須恵器 甕か	竈内床上7 cm 胴下位片	口 胴		底 高		粗砂粒/還元焰・ 軟質/灰	外面は斜位のナデ。最下位は横位の弱いタッチのヘラ削り。 内面は横位のナデ。

44号住居遺物観察表 (第88図 PL.54)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	高				
第88図	1	土師器 杯	埋没土 口縁～底片	口 底	11.9	高	[2.4]	暗赤色粘土粒/良 好/橙	器面摩滅のため整形不明。小破片からの復元で傾き不安。
第88図 PL.54	2	須恵器 蓋	東壁際床上11cm 摘み～口縁片	口 天		摘 高	4.5	灰黒色粘土粒/還 元焰・軟質/黄灰	ロクロ整形(右回転)。天井部は切り離し後、摘み部を貼付。 天井部外面の中心寄りに回転ヘラ削り。
第88図	3	須恵器 蓋	東寄床上7 cm 口縁片	口 天	14.0	摘 高		粗砂粒少/還元焰/ 灰	ロクロ整形(右回転)。天井部外面の中心寄りに回転ヘラ削 り。
第88図	4	土師器 甕	東寄床直上 口縁～胴上位片	口 胴	15.8	底 高		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は斜位のヘラ削り。内面は横位 のヘラナデ。 器面摩滅。
第88図 PL.54	5	土師器 甕	東寄床上4 cm 口縁～肩1/4	口 胴	23.2	底 高		細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ。外面に輪積み痕を残す。 器面摩滅。

45号住居遺物観察表 (第89図 PL.54)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	高				
第89図 PL.54	1	土師器 杯	埋没土 2/5	口 底	13.0 丸底	高	[3.1]	粗砂粒/良好/明褐	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削りと考えられる が、器面摩滅のため整形不明。内面はナデ。
第89図	2	土師器 杯	南東隅床上4 cm 1/4	口 底	13.6 丸底	高	[3.0]	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。内面はナデ。 器面の摩滅顕著。
第89図	3	土師器 杯	南東隅床直上 口縁～底破片	口 底	14.5 8.2	高	[5.3]	粗砂粒・暗赤色粘 土粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。内面はナデ。 器面摩滅。
第89図 PL.54	4	土師器 盤	中央床直上 1/4	口 底	20.0 丸底	高	[2.7]	粗砂粒・片岩/良 好/にぶい褐	口縁部はナデ。底部削りは不明瞭。 器面摩滅。一部に炭素吸着。

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第89図	5	須恵器 杯	埋没土 口縁下位～底 1/4	口 底	9.0	高	細砂粒少/還元焰/ 褐灰	ロクロ整形(右回転)。底部切り離し後、周縁部に回転ヘラ 削り。	
第89図	6	須恵器 小型壺	埋没土 肩～胴下位片	口 胴	8.4	底 高	粗砂粒/還元焰/灰 黄褐	ロクロ整形(右回転)。中位に回転ヘラ削り。	外面に自然釉 付着。
第89図	7	土師器 小型甕	ピット1内床直 上 口縁肩片	口 胴	13.2	底 高	粗砂粒・片岩/良 好/明赤褐	口縁部は横ナデ。以下は器面摩滅のため不明。	被熱か。

46号住居遺物観察表 (第90図 PL.54)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第90図 PL.54	1	須恵器 蓋	北壁密着床直上 1/3・摘み欠	口 天	19.4	摘 高	粗砂粒・白色鈹物 粒・黒色鈹物粒少 /還元焰/黄灰	ロクロ整形(右回転)。天井部外面の中心寄りに回転ヘラ削 り。	

47号住居遺物観察表 (第91図 PL.54)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第91図	1	須恵器 蓋	埋没土 口縁片	口 天	14.2	摘 高	白色鈹物粒少/還 元焰/褐灰	ロクロ整形(右回転)。	
第91図 PL.54	2	須恵器 杯	中央床上9cm 1/2	口 底	12.3 5.6	高 3.4	灰黒色粘土粒・白 色鈹物粒/還元焰 ・やや軟質/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第91図 PL.54	3	須恵器 杯	埋没土 1/2	口 底	13.0 7.8	高 3.8	粗砂粒/還元焰・ 酸化焰ぎみ/にぶ い黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部に粗雑な回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。
第91図 PL.54	4	須恵器 杯	中央床上6cm 1/3	口 底	12.6 7.5	高 4.0	灰黒色粘土粒/還 元焰/褐灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	内面やや摩滅。
第91図 PL.54	5	須恵器 杯	埋没土 口縁下位～底	口 底	5.5	高	粗砂粒/還元焰・ 軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。底部 内面に焼成後ヘラ描き。	

48号住居遺物観察表 (第93図 PL.54)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第93図 PL.54	1	土師器 杯	北壁際床上6cm 4/5	口 底	11.6 9.0	高 3.7	粗砂粒・暗赤色粘 土粒/良好/明赤褐	器形は大きく歪んでいる。口縁部は横ナデ。底部外面はヘ ラ削りと考えられるが不明瞭。	器面摩滅。
第93図 PL.54	2	土師器 杯	南寄床上10cm 2/3	口 底	12.4 7.0	高 4.2	粗砂粒少/良好/に ぶい黄橙	器面摩滅のため、整形の詳細不明。口縁部は横ナデ。体部 ・底部外面はヘラ削りと考えられる。	
第93図	3	土師器 杯	埋没土 口縁～底片	口 底	12.4	高 [3.2]	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ。口縁下位・ 底部外面はヘラ削りか。	器面摩滅。
第93図	4	土師器 杯	埋没土 口縁～底片	口 底	12.8 9.2	高 [3.3]	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。以下は器面摩滅のため整形不明。	
第93図 PL.54	5	須恵器 蓋	西壁際床上5cm 1/3	口 天	15.8	摘 高 3.8	細砂粒・暗赤色粘 土粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。天井部切り離し後、摘み部を貼付。 天井部外面の中心寄りに回転ヘラ削り。	内面摩滅。
第93図 PL.54	6	須恵器 蓋	南東隅床上8cm 1/3	口 天	12.4 5.0	摘 高	黒色鈹物粒/還元 焰/灰	ロクロ整形(右回転)。天井部切り離し後、摘み部を貼付。 天井部外面の中心寄りに回転ヘラ削り。	内面に自然釉。 やや摩滅。
第93図	7	須恵器 蓋	東壁際床下9cm 天井～口縁1/4	口 天	17.4 6.0	摘 高	粗砂粒・灰黒色粘 土粒/還元焰・軟 質/灰白	ロクロ整形(右回転)。天井部外面の中心寄りに回転ヘラ削 り。	内面やや摩滅。
第93図 PL.54	8	須恵器 杯	竈内床直上 1/3	口 底	12.5 7.2	高 3.1	粗砂粒/還元焰・ 軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。
第93図 PL.54	9	須恵器 杯	南壁際床上14cm 2/5	口 底	12.4 7.6	高 4.0	灰黒色粘土粒/還 元焰/灰白	ロクロ整形(右回転か)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。
第93図 PL.54	10	須恵器 杯	南東寄床直上 1/4	口 底	12.8 6.8	高 3.9	粗砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。
第93図 PL.54	11	須恵器 杯	埋没土 口縁1/3	口 底	12.2	台 高	白色鈹物粒/還元 焰/褐灰	ロクロ整形(右回転)。底面割口の強い屈曲は、高台か強い ロクロ痕か判断できない。	
第93図 PL.54	12	須恵器 杯	南壁際床上6cm 口縁下位～底	口 底	6.7	高	粗砂粒/還元焰/褐 灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	外面に炭素吸 着。内面に灰 黒色の付着物。
第93図 PL.54	13	土師器 甕	竈内・南壁際・東 寄床直上～10cm 口縁～胴上位1/3	口 胴	21.0 21.4	底 高	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位 のヘラナデ。	器面は被熱、 摩滅。
第93図	14	土師器 甕	南寄床上6cm 口縁～胴上位片	口 胴	19.8	底 高	粗砂粒・片岩/良 好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位 のヘラナデ。	

49号住居遺物観察表 (第94図 PL.54)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第94図 PL.54	1	土師器 杯	埋没土 1/4	口 底	13.6	高 [3.2]	粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。間にナデの 部分を残す。内面はナデ。	
第94図	2	須恵器 杯	南寄床直上 1/4	口 底	6.8	高 [3.8]	白色鈹物粒少/還 元焰/黄灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転ヘラ切り後、ヘラナデ。	
第94図	3	須恵器 杯	埋没土 口縁下位～底 1/4	口 底	5.8	高	粗砂粒・白色鈹物 粒/還元焰/暗灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、ヘラ状工具が不 規則に当たっている。	内面やや摩滅。

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第94図	4	須恵器 杯	埋没土 口縁下位～底 1/3	口 底	6.6	高	粗砂粒・灰黒色粘 土粒/還元焰/黄灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第94図	5	土師器 小型甕	埋没土 口縁～胴上位片	口 胴	11.0	底 高	粗砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位 のヘラナデ。	被熱か。器面 摩滅。
第94図 PL.54	6	土師器 小型甕	西寄床直上 口縁～胴中位片	口 胴	13.0 15.6	底 高	粗砂・細砂粒/良 好/にぶい褐	口縁部は横ナデ。胴部外面はヘラ削りと考えられる。内面 は横位のヘラナデ。	器面摩滅。
第94図 PL.54	7	石製品 砥石	埋没土 ほぼ完形	長 幅	(14.7) 7.6	厚 重	3.2 332.6 牛伏砂岩	背面側に断面V字状を呈する研磨痕(幅8mm・深さ4mm、 研磨対象は不明)があるほか、縦位の浅い刃ならし傷が残 る。裏面側中央左にも同程度の研磨痕溝が残る。中央右に 整形痕が残されているが、整形意図は明らかでない。	

50号住居遺物観察表 (第95図 PL.54)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第95図 PL.54	1	須恵器 杯	埋没土 1/4	口 底	14.4 10.0	高	4.1 白色鈹物粒/還元 焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転ヘラ削り。高台部は形骸化 した削り出し高台。	

52号住居遺物観察表 (第98図 PL.54・55)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第98図 PL.54	1	土師器 杯	北壁際床直上～ 6cm 1/2	口 底	12.6 丸底	高	2.8 粗砂粒/良好/明褐	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。間にナデの 部分を残す。	
第98図	2	土師器 杯	竈埋没土 1/4	口 底	12.7 丸底	高	[3.1] 粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。以下摩滅のため整形不明。内面はナデ。	
第98図	3	土師器 杯	埋没土 1/4	口 底	12.0 丸底	高	粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部外面はヘラ削り。間にナデの部分 を残す。内面はナデ。	器面摩滅。
第98図 PL.55	4	土師器 杯	南壁際・竈内 床直上～10cm 4/5	口 底	15.8 丸底	高	5.5 粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。間にナデの 部分を残す。内面はナデ。	
第98図	5	須恵器 蓋	西壁際床直上 摘み	口 天		摘 高	5.9 黒色鈹物粒/還元 焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。	
第98図 PL.55	6	須恵器 杯	貯蔵穴内床下6 cm 口縁一部欠	口 底	13.2 8.9	高	4.3 灰黒色粘土粒/還 元焰・軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転ヘラ削りか。	器面に炭素吸 着。摩滅。
第98図 PL.55	7	須恵器 杯	貯蔵穴密着床直 上 1/3	口 底	12.2 8.8	高	[3.3] 黒色鈹物粒/還元 焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部切り離し後、周縁部に回転ヘラ 削り。底部厚手。	器面に自然釉 付着。
第98図 PL.55	8	須恵器 杯	北西隅床上6cm 1/4	口 底	12.0 9.0	高	3.8 黒色鈹物粒少/還 元焰/灰黄	ロクロ整形(左回転か)。底部切り離し後、手持ちヘラ削り。	口縁部外面に 自然釉。
第98図 PL.55	9	須恵器 杯(有台)	貯蔵穴内床下8cm 完形	口 底	10.8	台 高	6.4 6.8 黒色鈹物粒/還元 焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転ヘラ削り後の付高 台。貼付後、周縁部にナデ調整。	内外面とも摩 滅。
第98図 PL.55	10	須恵器 杯(有台)	貯蔵穴内床下13 cm 2/3	口 底	18.8	台 高	11.0 6.8 細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転ヘラ削り後の付高 台。貼付後、周縁部にナデ調整。口縁部外面最下位に回転 ヘラ削り。	内面摩滅。
第98図	11	須恵器 横瓶	貯蔵穴内床下7cm 胴部片	口 胴		底 高	白色・黒色鈹物粒 /還元焰/灰	大形品で紐づくり後、叩き整形は平坦な叩き具使用。外面 はナデ調整。間隔をあけて回転を伴うヘラ削り。内面は青 海波文状の当て具痕。	
第98図 PL.55	12	土師器 甕	南壁密着・南寄床 直上～床上9cm 1/3	口 胴	22.4 21.4	底 高	4.4 27.0 細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面上位は斜横位の、中位は斜位の、 下位は斜縦のヘラ削り。内面は横位のヘラナデと考えられ るが器面摩滅。	器面被熱。炭 素吸着。
第98図	13	土師器 甕	竈内床上6cm 口縁～胴上位 1/3	口 胴	21.6 23.2	底 高	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位 のヘラナデ。	器面被熱。

53号住居遺物観察表 (第100図 PL.55)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第100図 PL.55	1	土師器 杯	埋没土 1/3	口 底	12.2 8.4	高	[4.1] 粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削りと考えられる。 その間の整形は不明。	器面摩滅。
第100図	2	須恵器 蓋	埋没土 破片	口 天	15.9 6.0	摘 高	白色鈹物粒/還元 焰/黄灰	ロクロ整形(右回転)。天井部外面の中心寄りに回転ヘラ削 り。	
第100図 PL.55	3	須恵器 杯	貯蔵穴内床下16cm 1/4	口 底	11.8 6.0	高	3.8 黒色鈹物粒/還元 焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	内面やや摩滅。
第100図	4	須恵器 杯	竈内床直上 破片	口 底	10.9 5.1	高	3.8 黒色鈹物粒/還元 焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	内面摩滅。
第100図	5	須恵器 杯	3号床下土坑 埋没土 口縁片	口 底	13.8	高	黒色鈹物粒/還元 焰/灰白	ロクロ整形(右回転か)。	
第100図	6	須恵器 椀	2号床下土坑 埋没土 底～高台片	口 底		台 高	10.4 灰黒色粘土粒/還 元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。 高台接地面広く、瓶類の可能性。	器面摩滅。
第100図 PL.55	7	須恵器 壺	埋没土 胴下位～高台	口 胴		台 高	7.8 粗砂粒少/還元焰/ 黄灰	ロクロ整形(左回転)。高台部は断面台形。底部回転糸切り 後の付高台。	器面に自然釉 付着。
第100図	8	土師器 台付甕	埋没土 台片	口 胴		台 高	9.5 細砂粒/良好/橙	内外面とも横ナデ。	

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第100図	9	土師器 甕	貯蔵穴内床下26cm 口縁~胴上位片	口 胴	13.9	底 高		粗砂粒/良好/橙	器面摩滅のため整形不明。	
第100図	10	土師器 甕	埋没土 口縁~胴上位片	口 胴	22.8	底 高		粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面はヘラ削り。	器面摩滅。
第100図 PL.55	11	土師器 甕	竈内床直上 胴中位~底2/3	口 胴		底 高	3.4	細砂粒/良好/赤褐	胴部外面は縦位のヘラ削り。内面は斜位のヘラナデ。中位は横位と考えられる。	器面被熱。内面はにぶい赤褐色の付着物。
第100図	12	土師器 甕	南壁密着床直上 胴下位~底1/3	口 胴		底 高	4.9	細砂粒/良好/にぶい褐	胴部外面は縦位のヘラ削り。内面はヘラナデ。底部外面はヘラ削り。	器面は被熱、炭素吸着。
第100図 PL.55	13	石製品 砥石	埋没土 破片	長 幅	(2.9) (2.7)	厚 重	0.7 6.3	牛伏砂岩	粗粒石材だが背面側は目が潰れ、平坦な砥面が形成されている。右辺側は面取り様に研磨。	

54号住居遺物観察表 (第102図 PL.55)

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第102図	1	土師器 杯	埋没土 1/4	口 底	11.8 丸底	高 稜	11.4	粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。他は器面摩滅のため不明。	
第102図 PL.55	2	土師器 甕	竈内床直上 口縁~胴下位 1/3	口 胴	19.8 23.8	底 高		粗砂粒・細砂粒/ 良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位・斜横位のヘラ削り。中位以下は斜位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	被熱。器面摩滅。
第102図 PL.55	3	土師器 甕	中央床上14cm 口縁~肩	口 胴	20.0	底 高		粗砂粒・暗赤色粘 土粒・片岩/良好/ 橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削りであるが、器面摩滅のため詳細な整形不明。	
第102図 PL.55	4	土師器 甕	中央・竈周辺床 直上 口縁~胴上位 1/3	口 胴	22.6	底 高		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面上位は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	器面やや摩滅。
第102図	5	土師器 甕	埋没土 口縁~胴上位片	口 胴	16.7	底 高		粗砂粒・石英/良 好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面はヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	
第102図	6	土師器 甕	埋没土 口縁片	口 胴	17.3	底 高		粗砂粒/良好/にぶ い橙	内外面とも横ナデ。	

55号住居遺物観察表 (第104図 PL.55・56)

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第104図 PL.55	1	土師器 杯	西壁際床直上 1/4	口 底	12.8 丸底	高	3.4	小礫・粗砂粒/良 好/橙	器面摩滅のため整形不明。	
第104図	2	土師器 杯	北寄床直上 1/4	口 底	14.0 10.8	高	3.9	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削りと考えられるが、器面摩滅のため詳細不明。	
第104図 PL.55	3	須恵器 蓋	北壁際・貯蔵穴 密着床直上~4 cm 1/2	口 天	19.4	摘 高	8.0 3.3	粗砂粒/還元焰・ 軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。天井部を切り離し後、環状の摘み部を貼付。天井部外面の中心寄りに回転ヘラ削り。	器面摩滅。
第104図 PL.55	4	須恵器 杯	北東隅壁際床直 上 口縁一部欠	口 底	14.8 8.8	高	4.2	粗砂粒・白色鈹物 粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転ヘラ削り。	
第104図	5	須恵器 甕か	埋没土 口縁片	口 胴	13.8	底 高		黒色鈹物粒/還元 焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。	
第104図 PL.56	6	土師器 甕	東壁際床上4~ 15cm 口縁~胴下位 1/2	口 胴	21.3 20.0	底 高		小礫・粗砂粒・片 岩/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位にヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	器面は被熱。炭素吸着。やや摩滅。
第104図 PL.56	7	土師器 甕	北寄床直上 口縁~胴下位 1/3	口 胴	21.2 20.0	底 高		粗砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ。胴部外面上位は横位・斜横位の、以下は斜縦位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデと考えられるが詳細な単位は不明。	外面被熱。煤付着。内面黒色の付着物。

57号住居遺物観察表 (第106図 PL.56)

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第106図	1	須恵器 椀	埋没土 口縁片	口 底	12.5	台 高		細砂粒・暗赤色粘 土粒少/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形(右回転か)。歪みある破片からの復元で径不安。	器面摩滅。
第106図	2	須恵器 椀	東壁際床直上 口縁片	口 底	11.8	台 高		粗砂粒多/酸化焰/ にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転か)。歪みある破片からの復元で径不安。	器面摩滅。
第106図	3	須恵器 壺	東壁際床直上 胴下位~高台	口 胴		台 高	9.6	白色鈹物粒/還元 焰/灰白	ロクロ整形(左回転)。胴部下位に回転ヘラ削り。高台部は断面台形の付高台で雑な造り。	東海産。
第106図	4	須恵器 甕か	東寄床直上 胴下位~底片	口 底	17.0	高		灰黒色粘土粒/酸 化焰/にぶい黄橙	紐づくり後、ロクロ整形。	器面摩滅。
第106図 PL.56	5	須恵器 羽釜	東壁際・南東隅・ 竈周辺床直上~ 4cm 口縁~底1/3	口 鈹 胴	18.4 23.1 23.8	底 高	8.5 27.1	小礫・粗砂粒・片 岩/還元焰/灰白	紐づくり後、ロクロ整形。口縁上端は外側へ小さく突出。鈹部貼付後、周縁部にナデ調整。胴部外面下半は斜位のヘラ削り。	器面被熱。炭素吸着。
第106図	6	須恵器 羽釜	竈周辺床下4cm 口縁片	口 鈹 胴	23.3 27.7	底 高		粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。鈹部は後から貼付。口縁上端の形状は5に近似。	
第106図 PL.56	7	石製品 砥石	西壁際床直上 下端側欠損	長 幅	(10.3) 3.4	厚 重	(3.9) 162.6	砥沢石	四面使用。背面面・右側面とも使い込まれ、弱く研ぎ減る。左側面は破損後も継続使用され、摩滅している。	切り砥石。

遺物観察表

58号住居遺物観察表 (第108図 PL.56)

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口底	高	底高				
第108図	1	須恵器 杯	南寄床上 8 cm 1/3	口底	13.2 6.0	高	3.6	暗赤色粘土粒/還元焰・軟質/灰黄褐	ロクロ整形(右回転か)。底部回転糸切り後、無調整と考えられるが、器面摩滅のため詳細不明。	
第108図 PL.56	2	須恵器 椀	西壁際・北西隅 壁際直上～10cm 2/3	口底	13.8	台高	6.2 5.1	粗砂粒・片岩/還元焰・軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	器面摩滅。
第108図 PL.56	3	須恵器 椀	西壁際・南東隅 床下6～9 cm 1/2	口底	13.8	台高	6.2 5.0	粗砂粒・片岩/還元焰・軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	器面の摩滅顕著。
第108図 PL.56	4	須恵器 椀	西壁際床下 9 cm 1/3	口底	14.6	台高	6.4 5.8	小礫・粗砂粒/酸化焰/灰オリーブ	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部切り離し後の付高台。	器面の摩滅顕著。
第108図 PL.56	5	須恵器 椀	中央床直上 口縁1/3・高台 欠	口底	15.0	台高		粗砂粒・暗赤色粘土粒/還元焰・軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は付高台。	高台部剥離後も使用か。
第108図	6	土師器 小型甕	埋没土 口縁～胴中位片	口胴	10.1 11.2	底高		粗砂粒・暗赤色粘土粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面上位は横位の、中位は縦位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	被熱。炭素吸着。
第108図 PL.56	7	土師器 小型甕	埋没土 口縁～胴上位片	口胴	11.3	底高		細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面はヘラ削りと考えられるが、器面摩滅のため不明。内面は横位のヘラナデ。	
第108図	8	須恵器 羽釜	埋没土 口縁～胴上位片	口罎	19.8 24.0 22.2	底高		灰黒色粘土粒/還元焰/灰黄褐	紐づくり後、ロクロ整形。罎部貼付後、周縁部にナデ調整。	
第108図	9	須恵器 羽釜	東寄床下16cm 口縁片	口罎	21.3 26.9	底高		粗砂粒/酸化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形。罎部は口縁部・胴部整形後の貼付。	
第108図	10	須恵器 羽釜	北壁際床上 6 cm 胴下位～底片	口罎		底高	13.4	黒色鉱物粒/酸化焰/灰黄褐	紐づくり後、ロクロ整形。	器面摩滅。炭素吸着。

59号住居遺物観察表 (第110図 PL.56)

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口底	高	底高				
第110図 PL.56	1	須恵器 杯	南寄床直上 2/5	口底	12.6 5.8	高	3.5	粗砂粒・灰黒色粘土粒/還元焰・酸化焰/灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第110図 PL.56	2	須恵器 椀	埋没土 口縁片	口底	13.7	台高		粗砂粒・暗赤色粘土粒/酸化焰/灰黄	ロクロ整形(右回転)。	器面摩滅。
第110図	3	須恵器 椀	埋没土 口縁片	口底	11.6	台高		粗砂粒/還元焰・酸化焰/灰黄	ロクロ整形(回転方向不明)。歪みある破片からの復元で径不安。	器面摩滅。
第110図 PL.56	4	須恵器 椀	竈内床直上～4 cm 口縁下半～高台 3/4	口底		台高	5.8	粗砂粒/酸化焰/にぶい橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部に粗雑な回転糸切り後の付高台。	器面摩滅。
第110図 PL.56	5	須恵器 椀	南寄床直上 口縁下位～高台	口底		台高	5.4	粗砂粒/酸化焰/灰	ロクロ整形(右回転か)。高台部は底部切り離し後の付高台。	被熱か。器面摩滅。炭素吸着。
第110図 PL.56	6	土師器 甕	竈内・南寄床直上～7 cm 口縁～胴上位 1/4	口胴	21.9 21.3	底高		細砂粒・暗赤色粘土粒/良好/にぶい褐	口径は小さくなる可能性あり。口縁部は横ナデ。胴部外面は横位・斜横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	器面摩滅。
第110図 PL.56	7	土師器 甕	埋没土 口縁～胴上位 1/3	口胴	21.0	底高		細砂粒/良好/にぶい褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	器面やや摩滅。
第110図	8	須恵器 羽釜	埋没土 口縁片	口罎	16.2 21.2	底高		粗砂粒・暗赤色粘土粒/酸化焰/橙	紐づくり後、ロクロ整形(右回転)。	
第110図	9	須恵器 羽釜	竈内床上 4 cm 胴中位～底	口罎		底高	6.6	粗砂粒多/酸化焰/にぶい黄橙	紐づくり後、ロクロ整形(右回転)。胴部外面下位に縦位のヘラ削り。	器面被熱。

60号住居遺物観察表 (第112・113図 PL.56・57)

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口底	高	底高				
第112図 PL.56	1	須恵器 杯	貯蔵穴内床下14cm 1/2	口底	13.7 6.4	高	4.8	粗砂粒・暗赤色粘土粒/酸化焰/灰黄褐	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。
第112図 PL.56	2	須恵器 杯	貯蔵穴内床下9 cm 1/2	口底	12.9 5.4	高	3.9	小礫・粗砂粒/酸化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。一部に炭素吸着。
第112図 PL.56	3	須恵器 杯	床下土坑 6 内床 下27cm 1/2	口底	12.9 6.0	高	3.6	粗砂粒/酸化焰/にぶい黄	ロクロ整形(右回転)。底部は粗雑な回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。
第112図 PL.56	4	須恵器 杯	床下土坑 2 内床 下11～12cm 2/5	口底	13.7 6.2	高	4.3	粗砂粒・暗赤色粘土粒・片岩/還元焰・軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面は摩滅顕著。

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第112図	5	須恵器 椀	埋没土 2/5	口底	13.8	台高	粗砂粒・暗赤色粘土粒/酸化焰/灰黄	ロクロ整形(左回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。	器面摩滅。
第112図	6	須恵器 杯	竈埋没土 口縁～底片	口底	13.8 8.2	高	4.0 灰白色粘土粒・片岩/還元焰・軟質/黄灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切りと考えられるが、器面摩滅。	
第112図	7	須恵器 杯	中央床上6cm 口縁中位～底 1/2	口底	6.3	高	粗砂粒/還元焰・軟質/褐灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第112図	8	須恵器 杯	埋没土 口縁下位～底	口底	7.0	高	粗砂粒/還元焰/黄灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面に炭素吸着。
第112図	9	須恵器 杯	埋没土 口縁下位～底	口底	5.5	高	粗砂粒/還元焰・軟質/灰白	ロクロ整形(左回転か)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。
第112図 PL.56	10	須恵器 椀	床下土坑3内床 下17cm 口縁1/4欠	口底	14.2	台高	6.7 5.2 粗砂粒・暗赤色粘土粒・片岩/酸化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部切り離し後の付高台。	器面摩滅。
第112図 PL.56	11	須恵器 椀	竈埋没土 1/3	口底	13.9	台高	7.4 5.7 粗砂粒/還元焰・酸化焰/黄灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。内面に重ね焼き痕。	器面に炭素吸着。内面の高台部下端は摩滅。
第112図 PL.57	12	須恵器 椀	貯蔵穴内床下13cm 口縁一部欠	口底	14.2	台高	5.5 5.6 粗砂粒・暗赤色粘土粒/酸化焰/にぶい橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	
第112図 PL.57	13	須恵器 椀	埋没土 1/4	口底	14.3	台高	6.7 5.6 粗砂粒/酸化焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	内外面に炭素吸着。黒色味。摩滅。
第112図	14	須恵器 椀	埋没土 口縁片	口底	13.0	台高	粗砂粒/還元焰・軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。歪みある破片からの復元で径不安。	
第112図 PL.57	15	須恵器 椀	埋没土 口縁下位～高台	口底		台高	7.4 粗砂粒・暗赤色粘土粒/酸化焰/灰黄	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	器面摩滅。一部に炭素吸着。
第113図	16	須恵器 椀	床下土坑1内床 下14cm 口縁下位～高台 1/2	口底		台高	7.7 小礫・粗砂粒・片岩/酸化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(左回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。	器面摩滅。内面に炭素吸着。
第113図	17	須恵器 皿(有台)	埋没土 口縁下位～高台	口底	(7.4)	台高	7.0 小礫・粗砂粒・片岩/酸化焰/灰黄	ロクロ整形(右回転)。高台は底部回転糸切り後の付高台。	器面摩滅。
第113図 PL.57	18	灰釉陶器 壺	埋没土 口縁～頸片	口胴	11.4	底高	精選/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。内面に施釉。	光ヶ丘1～大原2号窯式期。
第113図	19	土師器 台付甕	埋没土 底～台片	口胴		台高	細砂粒/良好/にぶい褐	内外面とも横ナデ。	
第113図 PL.57	20	土師器 甕	貯蔵穴際床直上 口縁～胴中位 1/4	口胴	18.4 20.0	底高	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ。胴部外面上位は横位の、中位は斜横位の、下位にかけては縦位のヘラ削り。内面は摩滅のため不鮮明であるが、横位のヘラナデ。	被熱。
第113図 PL.57	21	土師器 甕	中央・西寄床上 4～5cm 口縁～胴中位 1/4	口胴	19.2 20.4	底高	粗砂粒少・細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面はハケ状工具による横位のナデ。	器面被熱。炭素吸着。摩滅。
第113図 PL.57	22	土師器 甕	貯蔵穴内・床下 土坑2内床下15cm 口縁～胴上位 1/3	口胴	18.8	底高	細砂粒/良好/にぶい褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	器面摩滅。
第113図	23	土師器 甕	中央床上6cm 口縁～胴上位片	口胴	16.7	底高	細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	器面に炭素吸着。
第113図	24	土師器 甕	床下土坑4内床 下8cm 口縁～胴上位片	口胴	18.4	底高	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面はハケ状工具によるナデ。	
第113図	25	土師器 甕	南寄床上7cm 口縁～胴上位片	口胴	17.2	底高	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。	器面摩滅。
第113図	26	土師器 甕	中央床直上 口縁～胴上位片	口胴	19.0	底高	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	器面摩滅。
第113図	27	土師器 甕	埋没土 口縁～胴上位片	口胴	20.9 21.5	底高	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。	器面摩滅。
第113図	28	土師器 甕	埋没土 口縁片	口胴	17.8	底高	細砂粒/良好/橙	内外面とも横ナデ。	
第113図	29	土師器 甕	竈埋没土 口縁片	口胴	20.8	底高	粗砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ。	器面摩滅。
第113図 PL.57	30	石製品 砥石	貯蔵穴内床下8cm 完形	長幅	12.5 5.2	厚重	(6.8) 401.9 砥沢石	四面使用。表裏面が特に使い込まれ、光沢が著しい。右側面に斜向する浅い刃ならし傷が残る。下端側小口部は破損面が摩滅しており、破損後も継続使用されている。背面側先端を破損する。	切り砥石。
第113図 PL.57	31	鉄製品 釘	埋没土 先端くか	長幅	4.2 0.5	厚重	0.5 3.1	断面0.5cm角の角釘で頭部分は特別の形態を示さず角形に終わる。先端は細くなるが鋭利には尖らない。	木質等は見られない。

遺物観察表

62号住居遺物観察表 (第115図 PL.57)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第115図	1	土師器 杯	埋没土 1/4	口底	10.5	高	[3.2]	粗砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ。口縁部外面に指頭圧痕。底部外面に手持ちへら削り。	器面摩滅。
第115図 PL.57	2	須恵器 杯	埋没土 4/5	口底	12.4 5.7	高	4.0	粗砂粒・片岩/酸 化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。切り離しが粗雑で、高台状をなす。	器面摩滅。
第115図 PL.57	3	須恵器 杯	東壁際床直上 1/2	口底	13.0 6.5	高	3.6	粗砂粒・白色鈹物 粒/還元焰・軟質/ 灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面やや摩滅。
第115図 PL.57	4	灰釉陶器 椀	西壁際床直上 1/2	口底	16.7	台 高	8.3 4.9	黒色鈹物粒少/還 元焰/浅黄	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転へら削り後の付高台。	内面全面に施 釉。黒笹14号 窯式期。
第115図 PL.57	5	須恵器 椀	西壁際・貯蔵穴 内床下25cm~床 直上 1/2	口底	14.3	台 高	7.4 5.3	粗砂粒/還元焰・ 軟質/黄灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	器面摩滅。
第115図 PL.57	6	須恵器 杯(有台)	中央床下9cm 口縁下位~高台 1/2	口底	(7.8)	台 高	8.7	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は付高台。底部回転糸切りの上に一部へら削り。その後の貼付。	
第115図 PL.57	7	土師器 小型甕	竈周辺床上4cm 口縁~胴下位 1/2	口 胴	10.3 12.7	底 高		細砂粒・灰黒色粘 土粒/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面上位は横位の、中位以下は縦位のへら削り。	外面被熱。炭 素吸着。
第115図 PL.57	8	土師器 甕	東寄・中央床下 6~8cm 頸~胴上位片	口 胴	19.6	底 高		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部の整形は器面摩滅のため不明。	
第115図 PL.57	9	土師器 甕	竈埋没土 底片	口 胴		底 高	4.1	粗砂粒/良好/橙	詳細不明。外面はへら削りか。内面はへらナデ。	
第115図 PL.57	10	瓦 丸瓦	中央床上13cm 端部破片	長 幅		高 厚	1.1 ~ 1.8	白色鈹物粒/還元 焰/にぶい黄橙	丸瓦の上端左辺の残存である凸外面は丁寧なナデ調整。凹内面には布目痕を残す。側端面取り2回はへら切り。小口端部は粗雑なナデ。	
第115図 PL.57	11	瓦 平瓦	埋没土 端部破片	長 幅	8.5 7.2	高 厚	1.3 ~ 1.8	白色鈹物粒/還元 焰/灰	凸面は粗雑なナデ調整。凹面に布目痕。下端面はへら切り。側端面に2回のへら切り。	
第115図 PL.57	12	土製品 土錘	中央床上15cm 一部欠損	長 幅	5.6 2.15	孔 重	0.4 20.0	粗砂粒少/酸化焰/ にぶい褐	側面は紡錘形、小口は絞り込むように細くなる。一端は欠損する。	
第115図 PL.57	13	土製品 土錘	中央床上9cm 先端欠損	長 幅	4.5 1.8	孔 重	0.4 12.5	粗砂粒少/酸化焰/ にぶい黄橙	両端は欠損する。	
第115図 PL.57	14	石製品 紡輪	北寄床上14cm 完形	径 高	4.6 1.8	重	37.8	流紋岩凝灰岩	表裏面ともよく研磨され、平滑面が形成されている。側面は面取り整形され、粗い線条痕が残る。径9mmの軸孔を両側穿孔する。	板状。
第115図 PL.57	15	鉄製品 釘	南側床下7cm 先端欠く	長 幅	2.9 1.1	厚 重	0.9 3.2		断面0.4cm角の角釘で、頭部は薄く延ばしたのち120°ほど折り曲げる。先端部は劣化破損。	木質等は見ら れない。

63号住居遺物観察表 (第117図 PL.57)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第117図	1	土師器 杯	埋没土 口縁~底破片	口底	12.8	高	[3.2]	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちへら削りと考えられるが、器面摩滅のため詳細な整形は不明。	
第117図	2	土師器 小型甕	竈埋没土 口縁~胴上位片	口 胴	12.6 14.8	底 高		粗砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のへら削り。内面はナデか。	器面摩滅。
第117図 PL.57	3	土師器 甕	南壁際床下5cm 口縁~胴上位 1/3	口 胴	21.2	底 高		粗砂・細砂粒・暗 赤色粘土粒/良好/ にぶい褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は斜横位のへら削り。内面は横位のへらナデ。	器面やや摩滅。
第117図	4	土師器 甕	竈内床上15cm 胴下位~底1/3	口 胴		底 高	4.8	粗砂粒/良好/にぶ い褐	胴部外面は細かく方向の異なるへら削り。内面はへらナデ。底部外面は砂底。	被熱。

64号住居遺物観察表 (第118図 PL.57)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第118図 PL.57	1	土師器 杯	東寄床上5cm 1/2	口底	12.8 9.4	高	3.8	小礫・粗砂粒・片 岩/良好/橙	器面摩滅のため整形不明。	
第118図	2	須恵器 蓋	西寄床直上 1/4 摘み欠	口天	17.7	摘 高		白色鈹物粒/還元 焰/灰黄	ロクロ整形(右回転)。天井部外面の中心寄りに回転へら削り。	
第118図 PL.57	3	須恵器 杯	中央床上7cm 1/2	口底	12.9 6.8	高	3.1	粗砂粒・白色鈹物 粒/還元焰/灰	薄手。ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第57図 PL.57	4	須恵器 杯	北壁際床直上 1/2	口底	11.9 5.7	高	3.5	粗砂粒・白色鈹物 粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第118図	5	須恵器 杯	北壁際床直上 口縁下位~底 1/2	口底	6.8	高		灰黒色粘土粒少/ 還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第118図 PL.58	6	土師器 小型甕	埋没土 口縁~胴上位片	口 胴	10.6	底 高		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のへら削りか。内面は横位のへらナデ。	器面被熱。摩 滅。
第118図	7	土師器 甕	埋没土 口縁片	口 胴	19.8	底 高		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	内外面とも横ナデ。	器面やや摩滅。

1号竪穴状遺構遺物観察表 (第122図 PL.58)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第122図 PL.58	1	土師器 杯	埋没土 1/2	口底	12.3 丸底	高	4.2	粗砂粒/良好/灰褐色	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。内面はナデ。	器面は被熱。炭素吸着。
第122図 PL.58	2	土師器 杯	A 竪穴南際窪み 内 4/5	口底	13.1 丸底	高	4.6	粗砂粒・暗赤色粘土粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。内面はナデ。	内面やや摩滅。
第122図 PL.58	3	土師器 杯	A 竪穴西壁際床上 3 cm 3/4	口底	12.2 丸底	高	[3.6]	粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。間にナデの部分を残す。内面はナデ。	器面摩滅。底部外面に炭素吸着。黒斑状。
第122図	4	土師器 杯	A 竪穴西壁際床上 直上 口縁1/4	口底	15.4	高		粗砂粒・暗赤色粘土粒/良好/橙	口縁部は横ナデと考えられる。他は器面摩滅のため整形不明。	
第122図	5	須恵器 杯	埋没土 底片	口底		台高	11.1	暗赤色粘土粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部は回転ヘラ削り。高台部は削り出し高台。	器面摩滅。
第122図 PL.58	6	須恵器 盤(有台)	A 竪穴西壁密着 口縁1/2欠	口底	25.2 (20.8)	台高	16.9 4.8	粗砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部切り離し後の付高台。貼付後、周縁部に強い調子のヘラナデ。底部内面は丁寧なナデ。	
第122図 PL.58	7	土師器 甕	B 竪穴西壁際床上 3 cm 口縁~胴上位片	口胴	23.2	底高		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位のヘラ削りと考えられる。内面は横位のヘラナデ。	器面摩滅。
第122図	8	土師器 甕	A 竪穴南西隅床上 直上 口縁~胴上位片	口胴	19.4	底高		粗砂粒多・片岩/良好/にぶい褐色	口縁部は横ナデ。胴部外面は斜位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	
第122図 PL.58	9	土師器 甕	A 竪穴中央床上 5 cm 口縁~胴上位片	口胴	21.5	底高		小礫・粗砂粒/良好/にぶい褐色	口縁部は横ナデ。胴部外面は斜横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	
第122図 PL.58	10	土師器 甕	B 竪穴中央床上 直上 口縁片	口胴	19.4	底高		粗砂粒/良好/にぶい赤褐色	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。	
第122図 PL.58	11	陶製品 硯	埋没土 2/5	口底	10.1 9.9	高	1.0	黒色鋳物粒/還元焰/灰黄	円板状を呈する。硯面の周囲に堤が巡る。硯面は墨を擦ったことにより、摩耗しており墨痕が残る。	

2号竪穴状遺構遺物観察表 (第123図 PL.58)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第123図	1	土師器 杯	埋没土 口縁~底片	口底	13.5	高		粗砂・細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。内面はナデ。	
第123図	2	土師器 小型甕	中央付近床上4 cm 口縁~胴上位片	口胴	13.2	底高		粗砂粒/良好/にぶい赤褐色	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。	外面摩滅。
第123図 PL.58	3	須恵器 長頸壺	埋没土 頸片	口頸	5.1	底高		細砂粒少/還元焰/黄灰	ロクロ整形(右回転)。中位に沈線が2条巡る。	

3号竪穴状遺構遺物観察表 (第124図 PL.58)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第124図 PL.58	1	土師器 杯	西壁寄床上直上 完形	口底	12.5 丸底	高	4.6	粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。間にナデの部分を残す。内面はナデ。	

4号竪穴状遺構遺物観察表 (第125図)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第125図	1	須恵器 椀	埋没土 口縁下半~高台 1/4	口底		台高	6.7	粗砂粒・灰黒色粘土粒/酸化焰/灰黄	ロクロ整形(右回転)。高台部は付高台。	器面摩滅。
第125図	2	須恵器 椀	埋没土 口縁下位~高台 1/2	口底		台高	7.3	白色鋳物粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	

5号竪穴状遺構遺物観察表 (第126図 PL.58)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第126図	1	須恵器 蓋	埋没土 天~口縁片	口天	13.8	摘高		白色鋳物粒/還元焰/黄灰	ロクロ整形(右回転)。	
第126図 PL.58	2	須恵器 杯(有台)	埋没土 口縁下位~高台	口底		台高	6.4	灰黒色粘土粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	内面摩滅。

ビット遺物観察表 (第149図 PL.58)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第149図 PL.58	1	須恵器 杯	17ビット底面直上 1/2	口底	12.6 7.0	高	4.0	暗赤色粘土粒/酸化焰/灰黄	ロクロ整形(回転方向不明)。	器面の摩滅顕著。
第149図	2	須恵器 椀	23ビット埋没土 底~高台1/2	口底		台高	6.8	粗砂粒/還元焰・軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	内面やや摩滅。
第149図	3	土師器 杯	48ビット埋没土 口縁~底片	口底	13.2	高	2.4	粗砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。内面はナデ。	器面摩滅。
第149図	4	在地系土器 片口鉢	50ビット 口縁~体1/4	口底	26.0 [8.8]	高	[9.8]		体部内面上位以下使用により器表面摩滅。内面すり目施さない。片口部残る。	中世。

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第149図 PL.58	5	須恵器 杯	53・59ピット埋 没土 1/4	口 底	12.9 7.0	高	3.9	粗砂粒少/還元焰/ 灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第149図	6	須恵器 椀	61ピット埋没土 口縁下位～高台 片	口 底		台 高	7.2	粗砂粒・片岩/酸 化焰か/黄灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	内外面とも炭 素吸着。黒色 味。
第149図	7	土師器 鉢	78ピット埋没土 口縁～体上半片	口 底	28.0	高		粗砂粒・片岩/良 好/橙	口縁部は横ナデ。体部外面は斜位のヘラ削り。	器面摩滅。
第149図	8	須恵器 蓋	97ピット埋没土 口縁片	口 天	14.4	摘 高		黒色鈹物粒/還元 焰/灰	有蓋壺の蓋で天井部外端に鈹状突帯を巡らす。ロクロ整形(右回転)。	外面に自然釉 付着。

土坑遺物観察表 (第161・162図 PL.58)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第161図	1	土師器 杯	10・11土坑埋没土 口縁片	口 底	12.0	高		粗砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。間にナデの 部分を残す。内面はナデ。	
第161図	2	須恵器 蓋	10・11土坑埋没土 天井片	口 天	11.8	摘 高		黒色鈹物粒/還元 焰/灰	器形は歪んでいる。ロクロ整形(右回転)。天井部外面の中心 寄りに回転ヘラ削り。	外面に自然釉 付着。
第161図 PL.58	1	須恵器 杯	11土坑底面直上 3/4	口 底	13.2 6.2	高	4.2	粗砂粒多・片岩/ 酸化焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面炭素吸着。 摩滅。
第161図 PL.58	2	須恵器 椀	11土坑底面上11cm 口縁一部欠・台 欠	口 底	14.0	台 高		粗砂粒/酸化焰か/ 黄灰・吸炭部黒色 味強い	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。高台部剥落後も継続して使用。	内外面に炭素 吸着。器面摩 滅。
第161図	3	土師器 甕	11土坑埋没土 口縁～胴上位片	口 胴	24.0	底 高		粗砂粒・暗赤色粘 土粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位のヘラ削り。内面は横位 のヘラナデ。	
第161図	1	龍泉窯系青 磁 碗	17号土坑埋没土 口縁片	口 底	-	高	-	灰白	内面片彫りによる蓮華文。内外面青磁釉。太宰府分類 I-2 類。	12世紀中葉～ 後葉。
第161図 PL.58	2	石製品 砥石	17号土坑埋没土 一端欠く	長 幅	(6.7) (3.5)	厚 重	(2.3) 52.7	砥沢石	四面使用。破損のため、左側面はほとんど残存しない。そ れ以外の3面は、使い込まれ砥面が凹状になっている。	切り砥石
第161図	1	須恵器 椀	29土坑底面上6cm 口縁下位～高台 片	口 底		台 高	6.9	灰黒色粘土粒/還 元焰・軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	器面摩滅。
第161図	1	須恵器 杯	30土坑埋没土 口縁下位～底片	口 底	6.0	高		白色鈹物粒/還元 焰/暗灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後の付高台貼付の可 能性。	内外面とも炭 素吸着。黒色 味。底部周縁 部摩滅。高台 部が欠落した 痕跡か。
第161図	2	須恵器 椀	30土坑埋没土 口縁下位～高台片	口 底		台 高	6.8	粗砂粒・暗赤色粘 土粒/酸化焰/にぶ い橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は付高台。	器面摩滅。
第161図	1	須恵器 椀	34土坑底面下3cm 口縁下位～高台 1/4	口 底		台 高	9.6	白色鈹物粒/還元 焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部切り離し後の付高台。貼付後、口縁部最下位に回転ヘラ削り。	
第161図	2	須恵器 椀	34土坑底面直上 底～高台片	口 底		台 高	6.9	粗砂粒/酸化焰/ にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。	器面摩滅。
第161図	1	須恵器 杯	35土坑埋没土 口縁下位～底片	口 底	6.2	高		灰黒色粘土粒/還 元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第161図	1	土師器 高杯	42土坑埋没土 脚上半片	口 柱	3.5	裾 高		暗赤色粘土粒/良 好/橙	内面に絞り痕が見られる。	器面摩滅。
第161図 PL.58	1	須恵器 椀	58土坑底面直上 口縁一部欠	口 底	14.4	台 高	7.6 6.9	暗赤色粘土粒多/ 酸化焰/橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	
第161図	1	土師器 杯	63土坑埋没土 口縁片	口 底	14.8	高	(4.6)	粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。他は摩滅のため整形不明。	
第161図	2	須恵器 杯	63土坑底面下3cm 底片	口 底	7.1	高		細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第161図	1	須恵器 高台付杯	69土坑埋没土 底～高台片	口 底		台 高	8.4	黒色鈹物粒少/還 元焰/灰白	ロクロ整形(回転方向不明)。高台部は底部回転ヘラ削り後 の付高台。	内面摩滅。
第162図 PL.58	1	須恵器 椀	83土坑底面直上 1/4	口 底	13.0	台 高	6.2 3.8	粗砂粒/還元焰・ 軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	器面摩滅。
第162図	2	須恵器 椀	83土坑埋没土 口縁片	口 底	13.2	台 高		暗赤色粘土粒少/ 酸化焰/にぶい橙	ロクロ整形(右回転)。	
第162図	3	須恵器 椀	83土坑底面直上 口縁下位～高台 片	口 底		台 高	5.8	粗砂粒・暗赤色粘 土粒/酸化焰/にぶ い橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は付高台。	器面摩滅。
第162図 PL.58	1	須恵器 椀	86土坑底面下6cm 1/2	口 底	14.8	台 高	6.8 5.4	粗砂粒多/酸化焰/ 灰黄	ロクロ整形(右回転)。高台部は付高台。	器面の摩滅顕 著。一部に炭 素吸着。
第162図 PL.58	1	須恵器 杯	92土坑埋没土 1/4	口 底	12.7 6.8	高	3.5	粗砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	内面摩滅。
第162図 PL.58	1	土師器 甕	93土坑底面上9cm 口縁～胴上位 1/4	口 胴	17.6	底 高		細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位 のヘラナデ。	

粘土採掘坑遺物観察表 (第163図 PL.58)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第163図	1	須恵器 蓋	埋没土 天井片	口 天	13.8	摘 高	細砂粒/還元焰・ 軟質/灰	ロクロ整形(回転方向不明)。	
第163図 PL.58	2	土師器 有孔鉢	北西隅底面上12cm 底1/2	口 底	2.9	高	粗砂粒少・細砂粒/ 良好/橙	狭小な平底の底部に直径0.3cm程の焼成前穿孔の小孔が 6ヶ所確認できる。外面はヘラ削りか。	器面摩滅。

1号溝遺物観察表 (第164図 PL.59)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第164図 PL.59	1	石製品 板碑	石列内底面上5cm 破片	長 幅	(12.1) (10.7)	厚 重	2.4 556.9	緑色片岩	左辺側裏面に逆台形状の側縁を残す。碑面上半側には浅い 横位線条痕が付く。

6号溝遺物観察表 (第168図 PL.59)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第168図 PL.59	1	土師器 杯	東寄底面直上 1/4	口 丸底	10.9	高	3.4	粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部は手持ちヘラ削り。その間はナデ調 整と考えられる。	器面摩滅。

8号溝遺物観察表 (第170図 PL.59)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第170図	1	須恵器 蓋	埋没土 口縁片	口 天	16.8	摘 高		粗砂粒/還元焰・ 軟質/褐灰	ロクロ整形(右回転か)。	
第170図	2	須恵器 皿	埋没土 1/4(高台欠)	口 底	13.4	高		灰黒色粘土粒・片 岩/還元焰・軟質/ 黄灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は欠損している。	器面摩滅。
第170図	3	須恵器 杯	埋没土 口縁～底破片	口 底	13.2 9.4	高	3.2	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転ヘラ切り。	底部やや摩滅。
第170図	4	土師器 甕	埋没土 口縁片	口 胴	21.6	底 高		粗砂粒・雲母/良 好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位のヘラ削り。内面は横位 のヘラナデ。	
第170図 PL.59	5	土師器 甕	南寄底面上6cm 口縁～胴上位 1/3	口 胴	23.8	底 高		粗砂粒・片岩多/ 良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。	器面摩滅。

9号溝遺物観察表 (第171図 PL.59)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第171図 PL.59	1	須恵器 壺	南西寄底面上9cm 胴下位～高台	口 胴		台 高	11.1	白色鈹物粒/還元 焰/灰	紐づくり後、ロクロ整形。高台部は断面台形の低い付高台。	底部内面は摩 滅顕著。二次 利用か。
第171図	2	須恵器 壺	南西隅底面上3cm 胴下位～高台片	口 胴		台 高		粗砂粒/還元焰/黄 灰	紐づくり後、ロクロ整形と考えられる。胴部外面は回転ヘ ラ削り。内面は横位のヘラナデ。	

19号溝遺物観察表 (第180図 PL.59)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第180図 PL.59	1	須恵器 杯	北隅底面上22cm 1/3	口 底	11.9 5.8	高	3.8	粗砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第180図 PL.59	2	須恵器 杯	中央底面上5cm 1/3	口 底	11.4 6.4	高	4.1	粗砂粒多・暗赤色 粘土粒/還元焰・ やや軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。
第180図	3	須恵器 椀	中央底面上10cm 口縁上位～高台 1/4	口 底		台 高	7.6	白色鈹物粒多/還 元焰・軟質/黄灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は低く、底部回転糸切り後の 付高台。	
第180図	4	須恵器 椀	中央底面上16cm 底～高台	口 底		台 高		細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。 貼付後、周縁部にナデ調整。	
第180図 PL.59	5	須恵器 壺	南壁際底面上6cm 頸	口 胴		底 高		白色鈹物粒/還元 焰/灰	ロクロ整形(右回転)。	
第180図	6	土師器 台付甕	北寄底面下2cm 台1/4	口 胴		台 高	10.2	細砂粒/良好/橙	内外面とも横位のナデ。	器面摩滅。
第180図 PL.59	7	土師器 甕	中央・北寄底面 上9～15cm 口縁～胴上位片	口 胴	20.8	底 高		粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位 のヘラナデ。	器面摩滅。
第180図	8	土師器 甕	北寄底面上22cm 口縁～胴上位片	口 胴	21.2	底 高		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位 のヘラナデ。	器面摩滅。

21号溝遺物観察表 (第180図 PL.59)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第180図 PL.59	1	須恵器 杯	21号溝中央底面 上4cm 1/3	口 底	11.8 6.8	高	3.8	粗砂粒多・灰黒色 粘土粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	

1号遺物集中遺物観察表 (第187・188図 PL.59・60)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第187図 PL.59	1	土師器 杯	中央底面上3cm 1/4欠	口 丸底	13.1	高	[4.3]	粗砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。内面はナデ。	
第187図	2	土師器 高杯	中央・東寄底面 直上～5cm 杯1/3	口 柱	18.4	裾 高		粗砂粒/良好/にぶ い黄橙	先端に幅狭い横ナデ。外面は縦位のヘラ磨き。内面はナデ。	器面摩滅。

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第187図 PL.59	3	土師器 高杯	中央床面上 2 cm 杯1/2	口 柱	17.2	裾 高	粗砂粒/良好/橙	器面摩滅のため内外面とも整形不明。	内面に炭素吸着。
第187図 PL.59	4	土師器 高杯	東寄床面直上～ 7 cm 脚下半3/4	口 柱		裾 高	13.3 暗赤色粘土粒/良 好/明赤褐	外面は丁寧なナデ調整の上に縦位のヘラ磨きを重ねる。内面の柱状部は斜横位のヘラナデ。裾部は横ナデ。	器面摩滅。
第187図	5	土師器 高杯	埋没土 脚中位2/5	口 柱		裾 高	暗赤色粘土粒/良 好/にぶい黄橙	外面摩滅。内面の残存上半部は縦位のナデ。下半部は横位のナデ。	
第187図	6	土師器 高杯	中央床面直上 裾1/2	口 柱		裾 高	12.8 暗赤色粘土粒/良 好/にぶい褐	内外面とも摩滅。	
第187図 PL.59	7	土師器 埴	東寄床面上 5 cm 4/5	口 胴	8.8 9.6	底 高	丸底 7.8 粗砂粒/良好/橙	丸底。口縁部は横ナデ。胴部外面の頸部直下は斜縦位のヘラ削り。以下は横位のヘラ削り。内面は指ナデ。	器面はやや摩滅。
第187図 PL.59	8	土師器 甕	埋没土 口縁片	口 胴	14.2	底 高	粗砂・細砂粒/良 好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ。	
第187図 PL.59	9	土師器 台付甕	西寄・中央床面 上 2～11 cm 1/3	口 胴	13.6 24.3	台 高	9.3 28.3 粗砂・細砂粒/良 好/にぶい黄褐	器形・胴部が一方に傾き大きく歪んでいる。口縁部はS字状を呈する横ナデ。外面下半はヘラ削り。胴部外面は上位、肩部までが斜横位、右から左へのヘラ削り。以下は斜縦位、右下から左上へのヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。台部は端部が内側に折り返る。外面は基部が横位の、以下は斜縦位のナデ。内面も斜縦位の指ナデ。底部内面と外底部に砂目粘土を貼付。指でなでつける。	器面被熱。炭素吸着。摩滅。
第187図 PL.59	10	土師器 台付甕	中央周辺の床面 直上～11 cm 口縁～底1/4	口 胴	14.5 25.6	台 高	粗砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部はS字状を呈する。横ナデ。外面下半にはヘラ状工具痕を消し切れていない。胴部外面上位は横位・斜横位の、中位以下は斜位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。最下位には砂目粘土を貼るため指ナデが見られる。	接点の無い2片から図上復元。器面被熱。やや摩滅。炭素吸着。
第187図	11	土師器 台付甕	北寄床面下 5 cm 口縁～胴上位片	口 胴	13.8	台 高	粗砂粒/良好/暗灰 黄	口縁部はS字状を呈する。胴部外面は斜位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	被熱か。
第187図 PL.59	12	土師器 台付甕	西寄床面下 2 cm 胴最下位～台	口 胴		台 高	9.4 粗砂粒/良好/にぶ い褐	台部端部は内側に折り返され肥厚する。胴部外面はヘラ削り。内面はヘラナデ。台部内面は指ナデ。胴部内面最下部と外底部に砂目粘土を貼付している。	被熱。
第187図 PL.59	13	土師器 甕	中央周辺の床面 直上～6 cm 口縁～頸1/4	口 胴	22.2	底 高	粗砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。一部に指押さえの痕跡を僅かに残す。	器面摩滅。
第187図 PL.59	14	土師器 甕	中央床面直上 口縁片	口 胴	23.6	底 高	粗砂粒/良好/にぶ い橙	内外面とも横ナデ。	
第188図	15	土師器 鉢	中央床面上 9～ 11 cm 1/4	口 底	15.7 6.8	高	4.7 粗砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。この上に一部ナデ。口縁部との間にもナデの部分を残す。内面はナデ。	器面の一部に炭素吸着。
第188図 PL.60	16	須恵器 杯	東寄床直上 口縁～底片	口 底	13.9 8.9	高	3.3 黒色鈹物粒/還元 焰/黄灰	ロクロ整形。底部は回転ヘラ切り後、周縁部に回転ヘラ削り。	器面やや摩滅。炭素吸着。外面に自然釉付着。
第188図 PL.60	17	土師器 杯	北寄床面上 4 cm 1/4	口 底	14.7 10.8	高	3.6 粗砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ。他は器面摩滅のため整形不明。	
第188図	18	土師器 甕	南寄・中央床面 直上 口縁片	口 胴	21.6	底 高	粗砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ。内面頸部は横位のヘラナデ。	

2号遺物集中遺物観察表 (第190・191図 PL.60)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第190図 PL.60	1	須恵器 蓋	中央床面直上 7 cm 口縁1/4	口 天	15.4	摘 高	白色鈹物粒/還元 焰・軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。天井部外面の中心寄りに回転ヘラ削り。	器面摩滅。
第190図	2	須恵器 蓋	中央床面直上 7 cm 摘み～天井片	口 天		摘 高	3.9 白色鈹物粒少/還 元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。天井部は切り離した後、摘み部を貼付。天井部外面の中心寄りに回転ヘラ削り。	内面摩滅。
第190図 PL.60	3	須恵器 蓋	埋没土 1/4	口 天	17.0 7.0	摘 高	2.7 粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。天井部は回転糸切り後、周縁端部にのみ弱いヘラ削り。	
第190図	4	須恵器 蓋	南東外床面上 2 cm 摘み～天井片	口 天		摘 高	5.3 灰黒色粘土粒少/ 還元焰/黄灰	ロクロ整形(右回転)。天井部切り離した後、摘み部を貼付。	
第190図 PL.60	5	須恵器 杯	南外床面下 5 cm 2/3	口 底	12.6 6.6	高	4.1 粗砂粒/酸化焰/灰 白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	内面摩滅。
第190図 PL.60	6	須恵器 杯	南東外床面上 8 cm 1/2	口 底	11.8 6.0	高	3.1 粗砂粒・灰黒色粘 土粒・片岩/還元 焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第190図	7	須恵器 杯	東際・南外床面 下 5～床面上 16 cm 口縁1/4	口 底	12.8	高	白色鈹物粒少/還 元焰/黄灰	ロクロ整形(右回転)。	
第190図 PL.60	8	須恵器 椀	南寄床面上 7～ 8 cm 1/4	口 底	15.8 (8.0)	台 高	8.8 6.9 粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部に横ナデ。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第190図	9	須恵器 椀	西寄床面上3~ 5cm 口縁1/3	口 底	15.8	台 高	粗砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形(右回転)。	
第190図	10	須恵器 甕か	中央床面上13cm 胴下位~底片	口 胴		底 高	16.2 粗砂粒/還元焰/灰	紐づくり後、外面はナデ調整。最下位は横位のヘラ削り。 内面は横位のヘラナデ。	
第190図 PL.60	11	須恵器 甕	中央床面上9~ 13cm 口縁1/4	口 頸	24.0 15.4	底 高	白色鉱物粒少/還 元焰/灰	紐づくり後、ロクロ整形。	
第190図	12	須恵器 甕	中央床面直上7cm 口縁片	口 胴		底 高	粗砂粒少/還元焰/ 灰白	器面摩滅のため整形不明。	
第190図	13	須恵器 甕	埋没土 頸~肩片	口 胴		底 高	灰黒色鉱物粒/還 元焰/灰白	紐づくり後、叩き整形か。器面摩滅のため整形不明。	
第191図 PL.60	14 -1	土製品 カマド形土器	南寄床面直上~ 8cm 焚口部片	口 底		高	粗砂粒・片岩/良 好/にぶい黄橙・ 黒斑	焚口部上辺破片。紐積みで内面に接合痕顕著。削り・ナデ 等の痕跡見えない。底部分貼付。	
第191図 PL.60	14 -2	土製品 カマド形土器	中央・南寄床面 上3~12cm 焚口部片	口 底		高	[35.2] 粗砂粒・片岩/良 好/にぶい黄橙	焚口部側面破片。底部分貼付。端部は焚口側で面取り状に 平坦だが、底側は丸みが強い。体部下端に指頭圧痕が残る。	14-1と同一 個体。
第191図 PL.60	14 -3	土製品 カマド形土器	中央・南寄床面 上7cm 側面片	口 底		高	粗砂粒・片岩/良 好/にぶい黄橙	窓部がかかり、側壁破片と思われる。窓部分は内側から外 側へ向けて穿孔したが、端部に耕具痕は残っていない。	14-1と同一 個体。
第191図 PL.60	14 -4	土製品 カマド形土器	南寄床面上5cm 底部片	口 底		高	粗砂粒・片岩/良 好/にぶい黄橙	14-5に比べ底面が厚く平坦で、形状が異なる。側壁破片か。 体部下端に指頭圧痕が残る。	14-1と同一 個体。
第191図 PL.60	14 -5	土製品 カマド形土器	中央・南寄床面 上3~8cm 底部片	口 底		高	[34.8] 粗砂粒・片岩/良 好/にぶい黄橙	湾曲のない破片で底面が方形の平面形状であったことが分 かる。長さがあり奥壁側破片か。底面は比較的平坦だが面 取りの痕跡不明瞭。	14-1と同一 個体。

古墳時代以降遺構外遺物観察表 (第192図 PL.61)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第192図 PL.61	1	土師器 杯	東調査区 口縁一部欠	口 底	11.3 丸底	高	3.9 粗砂粒・片岩/良 好/橙	器面摩滅のため整形不明。	
第192図 PL.61	2	土師器 高杯	085-165G 杯~基部1/2	口 柱	19.3 3.7	裾 高	細砂粒・暗赤色粘 土粒/良好/橙	口縁部は中位に変換点を有し、斜め上方に立ち上がる。杯 部下端はホゾ状に作り、筒状に作った脚上部と接合してい る。器面摩滅のため整形不明。	接点の無い2 片から図上復 元。
第192図	3	須恵器 蓋	東3区攪乱内 口縁片	口 天	18.0	摘 高	灰黒色粘土粒少/ 還元焰/黄灰	ロクロ整形(右回転)。天井部外面の中心寄りに回転ヘラ削 り。	
第192図 PL.61	4	須恵器 杯	東調査区 1/3	口 底	12.3 8.3	高	3.4 粗砂粒少/還元焰/ 灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第192図 PL.61	5	須恵器 杯	東調査区 口縁下位~底 片	口 底	5.4	高	白色鉱物粒少/還 元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第192図 PL.61	6	須恵器 杯	4住埋没土 1/4	口 底	12.6 5.9	高	3.7 粗砂粒・暗赤色粘 土粒/還元焰・軟 質/灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	器面摩滅。
第192図 PL.61	7	須恵器 椀	4住埋没土 口縁1/3	口 底	13.6	台 高	粗砂粒多/酸化焰/ 灰黄	ロクロ整形(右回転)。	器面摩滅。
第192図 PL.61	8	須恵器 壺か	4住埋没土 口縁下位~高台 片	口 底		台 高	7.0 暗赤色粘土粒/酸 化焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転ヘラ削り後の付高 台。	内面摩滅。
第192図	9	須恵器 椀	東調査区 口縁下位~高台 片	口 底		台 高	8.8 粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。 貼付後、周縁部にナデ調整。	外面に炭素吸 着。
第192図	10	須恵器 椀	東調査区 口縁下位~高台 片	口 底		台 高	8.8 粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。 貼付後、周縁部にナデ調整。	外面に炭素吸 着。
第192図	11	須恵器 椀	東調査区 口縁下位~高台 片	口 底		台 高	5.8 灰黒色粘土粒多/ 還元焰・軟質/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部切り離し後の付高台。 粗雑な貼付後、周縁部にナデ調整。	内面やや摩滅。
第192図	12	須恵器 椀	東調査区 口縁下位~高台 片	口 底		台 高	9.2 粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形。高台部は付高台で底部やや内側に貼付。	器面摩滅。
第192図	13	灰釉陶器 椀	1号竪穴上層 口縁下位~高台 3/4	口 底		台 高	6.4 細砂粒少/還元焰/ 灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は断面三日月形。底部回転ヘ ラ削り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。外面に釉 が垂れている。内面は重ね焼き痕。	内面摩滅。 大原2号窯式 期。
第192図	14	土師器 甕	東3区攪乱内 口縁~胴1/3	口 胴	21.6	底 高	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面の整形は不明。内面は横位のヘ ラナデ。	器面摩滅。被 熱。
第192図	15	土師器 甕	東3区攪乱内 口縁片	口 胴	18.9	底 高	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位 のヘラナデ。	器面摩滅。
第192図	16	須恵器 甕	東調査区 口縁片	口 胴		底 高	小礫・粗砂粒/還 元焰/黄灰	ロクロ整形。	
第192図 PL.61	17	銅製品 銭貨	084-948G 完形	長 幅	2.4 2.4	厚 重	0.1 2.28	開元通寶。外縁・文字・郭とも彫深く明瞭、裏面の縁・郭 も明瞭だが彫は浅い。	初铸621年。

遺物観察表

縄文時代遺構外遺物観察表 (第193図 PL.61)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口底	高					
第193図 PL.61	1	縄文土器 深鉢	27号住居埋没土 胴部片	口底	高		D	背割り隆帯により横位S字文を施すが、渦巻き部分が小突起状に盛り上がる。頸部に無文帯を構成。	加曾利E 2式	
第193図 PL.61	2	縄文土器 深鉢	27号住居埋没土 口縁部片	口底	高		D	口縁部にRL縄文を横位施文後、隆帯による区画文を施す。	加曾利E 2式	
第193図 PL.61	3	縄文土器 深鉢	西3区倒木痕内 胴部片	口底	高		D	口縁部に背割り隆帯による区画文を施す。渦巻き部分が突起状に迫り出す。	加曾利E 2式	
第193図 PL.61	4	縄文土器 深鉢	19号溝埋没土 胴部片	口底	高		D	口縁部に幅広の隆帯を横位施文。風化により詳細不明だが、縄文施文も見られる。	加曾利E 3式	
第193図 PL.61	5	縄文土器 深鉢	58号土坑埋没土 胴部片	口底	高		D	胴部にRL縄文を縦位に施文。	加曾利E 2式	
第193図 PL.61	6	縄文土器 深鉢	西3区倒木痕内 胴部片	口底	高		D	胴部にRL縄文を縦位に施文。	加曾利E 2式	
第193図 PL.61	7	縄文土器 深鉢	西5区倒木痕内 胴部片	口底	高		D	胴部にRL縄文を縦位に施文。	加曾利E 2式	
第193図 PL.61	8	縄文土器 深鉢	東5区表採 口縁部片	口底	高		E	口縁の波頂部にC字状沈線文や刺突文を施し、それを連結して横位に沈線文が巡る。	堀之内1式	
第193図 PL.61	9	縄文土器 深鉢	東5区表採 口縁部片	口底	高		E	口唇下に単沈線を巡らせ、頸部に無文部を構成する。8と同一個体。	堀之内1式	
第193図 PL.61	10	縄文土器 深鉢	東区表採 口縁部片	口底	高		E/断面黒色味強い。	口縁部にC字及び8字状の突起を貼付し、円形の押圧痕を付加。同部位の内面側にも押圧痕あり。頸部に区画沈線が巡る。	堀之内2式	
第193図 PL.61	11	縄文土器 深鉢	34号住居埋没土 胴部片	口底	高		E	彫りの深い沈線により、胴部に斜位や同心円状の文様を施す。9と同一個体。	堀之内1式	
第193図 PL.61	12	剥片石器 石鏃	106号ピット埋没土 完形	長幅	1.3 1.3	厚重	0.3 0.28	チャート	完成状態。全面を押圧剥離が覆う。	凹基無茎鏃 (鏃形鏃)
第193図 PL.61	13	剥片石器 石鏃	表採 ほぼ完形	長幅	(1.4) (1.1)	厚重	0.3 0.29	黒曜石	未製品?背面側は押圧剥離に覆われているが、裏面側には素材剥離面を残す。左辺部剥離時に「返し部」を欠く。	凹基無茎鏃
第193図 PL.61	14	剥片石器 石鏃	1号住居埋没土 ほぼ完形	長幅	2.7 1.5	厚重	0.6 1.53	黒曜石	完成状態。表裏面とも左辺側に粗い剥離が残されているが、加工は丁寧で、押圧剥離が全面を覆う。基部欠損。	平基有茎鏃
第193図 PL.61	15	剥片石器 打製石斧	3号住居埋没土 完形	長幅	10.3 5.8	厚重	1.8 91.94	硬質泥岩	完成状態。側縁をノッチ状に加工、着柄部を作出する。刃部は着柄部から大きく開き、弧状を呈する。	撥形か
第193図 PL.61	16	剥片石器 打製石斧	19号溝埋没土 完形	長幅	12.8 6.5	厚重	2.9 213.2	硬質泥岩	完成状態。右辺側の刃部摩滅が著しいほか、左辺側エッジが弱く摩滅する。着柄部は下端側に偏り、頭部側に刃部を作出している可能性も否定できない。	分銅形
第193図 PL.61	17	剥片石器 打製石斧	42号住居埋没土 完形	長幅	9.8 4.2	厚重	1.8 86.0	硬質泥岩	完成状態。側縁は直線的に開き、刃部は斜刃気味である。刃部再生され、激しく使い込まれている。	短冊形
第193図 PL.61	18	剥片石器 打製石斧	表採 完形	長幅	12.8 6.2	厚重	2.1 186.0	珪質頁岩	完成状態。側縁は直線的で、敲打摩滅する。刃部は直刃様で、刃部再生されている可能性が高い。	短冊形

引用・参考文献一覧

・周辺遺跡

1 吉井町教育委員会 『入野遺跡』1962
 2 山崎一 『群馬県古城址の研究 下巻』1972
 3 群馬県立博物館 『東吹上遺跡』1973
 4 吉井町誌編さん委員会 『吉井町誌』1974
 5 尾崎喜左雄 『上野国の古墳と文化』1977
 6 群馬県教育委員会 群馬県歴史の道調査報告書第十集『下仁田道』1981
 7 吉井町教育委員会 『川内遺跡』1982
 8 吉井町教育委員会 『道六神遺跡』1986
 9 吉井町教育委員会 『川福遺跡調査報告書』1986
 10 吉井町教育委員会 『入野遺跡』～『入野遺跡Ⅲ』1985～1986
 11 吉井町教育委員会 『東沢遺跡 折茂東遺跡』1987
 12 吉井町教育委員会 『西馬脇・長根宿遺跡』1987
 13 吉井町教育委員会 『蛇田古墳』1987
 14 吉井町教育委員会 『椿谷戸遺跡発掘調査報告書』1989
 15 吉井町教育委員会 『富岡遺跡』1989
 16 吉井町教育委員会 『柳田遺跡発掘調査報告書』1989
 17 吉井町教育委員会 『竹腰遺跡』1990
 18 吉井町教育委員会 『椿谷戸遺跡Ⅱ』1990
 19 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 『矢田遺跡』～『矢田遺跡Ⅷ』1990～1997
 20 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 『長根羽田倉遺跡』1990
 21 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 『神保下條遺跡』1992
 22 吉井町教育委員会 『多比良遺跡発掘調査報告書』1992
 23 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 『神保富士塚遺跡』1993
 24 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 『多胡蛇黒遺跡』1993
 25 吉井町教育委員会 『長根遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』1994
 26 吉井町教育委員会 『ヌカリ沢A築址発掘調査報告書』1995
 27 吉井町教育委員会 『御門遺跡発掘調査報告書』1995
 28 吉井町教育委員会 『入野遺跡群馬場遺跡発掘調査報告書』1995
 29 吉井町教育委員会 『長根遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』1995
 30 吉井町教育委員会 『長根遺跡群発掘調査報告書Ⅳ』1996
 31 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 『長根安坪遺跡』1997
 32 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 『神保植松遺跡』1997
 33 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 『多比良追部野遺跡』1997
 34 吉井町教育委員会 『長根遺跡群発掘調査報告書Ⅴ』1998
 35 吉井町教育委員会 『多比良観音山遺跡発掘調査報告書』1999

36 吉井町教育委員会 『矢田遺跡発掘調査報告書』2001
 37 吉井町教育委員会 『川福遺跡第二次発掘調査報告書』2002
 38 吉井町教育委員会 『多比良笠掛遺跡発掘調査報告書』2003
 39 吉井町教育委員会 『長根遺跡群発掘調査報告書Ⅵ』2003
 40 吉井町教育委員会 『川内遺跡第二次発掘調査報告書』2004
 41 吉井町教育委員会 『椿谷戸遺跡第四次発掘調査報告書』2004
 42 吉井町教育委員会 『矢田遺跡(第3次)発掘調査報告書』2004
 43 吉井町教育委員会 『上河原遺跡発掘調査報告書』2004
 44 吉井町教育委員会 『下条遺跡発掘調査報告書』2004
 45 吉井町教育委員会 『片山遺跡群発掘調査報告書』2004
 46 吉井町教育委員会 『安坪古墳群・長根遺跡群発掘調査報告書Ⅷ』2005
 47 吉井町教育委員会 『東シメ木・多胡松原遺跡発掘調査報告書』2005
 48 吉井町教育委員会 『中林遺跡』2006
 49 吉井町教育委員会 『長根遺跡群発掘調査報告書Ⅸ』2006
 50 吉井町教育委員会 『長根遺跡群発掘調査報告書Ⅹ』2007
 51 公益財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 『吉井川下宿遺跡』2013
 52 公益財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 『年報33』2014

・その他

53 稲田孝司 『忌の籠と王権』『考古学研究97』1978
 54 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 『熊野堂遺跡Ⅲ地区 雨壺遺跡』1984
 55 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 『荒砥北原遺跡』1986
 56 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 『北原遺跡』1986
 57 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 『下佐野遺跡Ⅱ地区』1986
 58 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 『下東西遺跡』1987
 59 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 『田篠上平遺跡』1988
 60 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 『鳥羽遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区』1988
 61 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 『史跡十三宝塚遺跡』1992
 62 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 『二之宮洗橋遺跡』1994
 63 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 『中沢平賀界戸遺跡』1996
 64 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 『舞台遺跡(2)』2004
 65 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 『善慶寺早道場遺跡』2004
 66 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 『越前南部遺跡群』2006
 67 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 『荒砥前田Ⅱ遺跡』2009
 68 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 『大道東遺跡(3)』2010
 69 公益財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 『綿貫伊勢遺跡』2013

写真図版



① 本郷畑内遺跡全景(東より)



② 本郷畑内遺跡全景(西より)



① 本郷畑内遺跡東区全景(合成写真：上側が北)



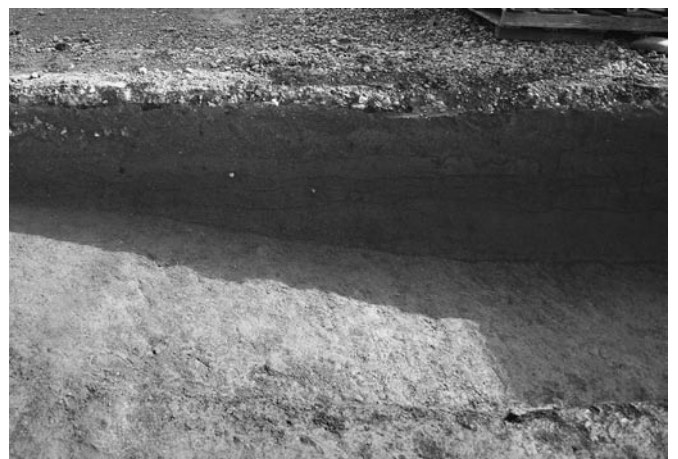
② 西3区遠景(東より)



③ 西1・2区遠景(西より)



④ 東3区北側拡張区遠景(北より)



⑤ 東3区南側拡張区の基本土層(西より)



① 1号住居全景(西より)



② 1号住居カマド(西より)



③ 1号住居掘り方全景(西より)



④ 1号住居貯蔵穴(北より)



⑤ 1号住居床下土坑(西より)



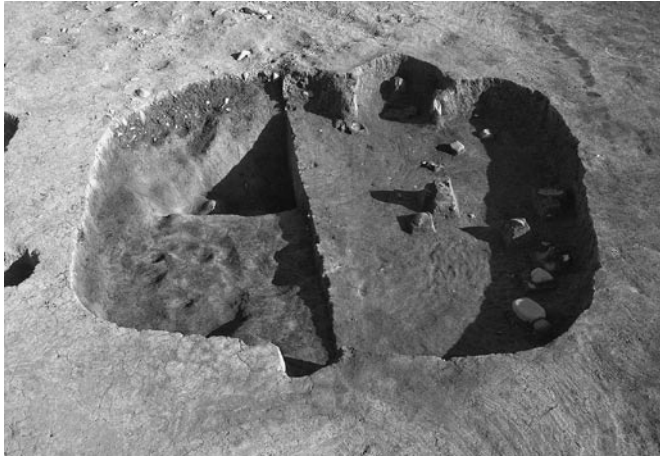
⑥ 2号住居全景(西より)



⑦ 2号住居断面(南より)



⑧ 2号住居カマド断面(西より)



① 3号住居全景(西より)



② 3号住居カマド(西より)



③ 3号住居南西隅付近遺物出土状態(東より)



④ 3号住居掘り方内遺物出土状態(西より)



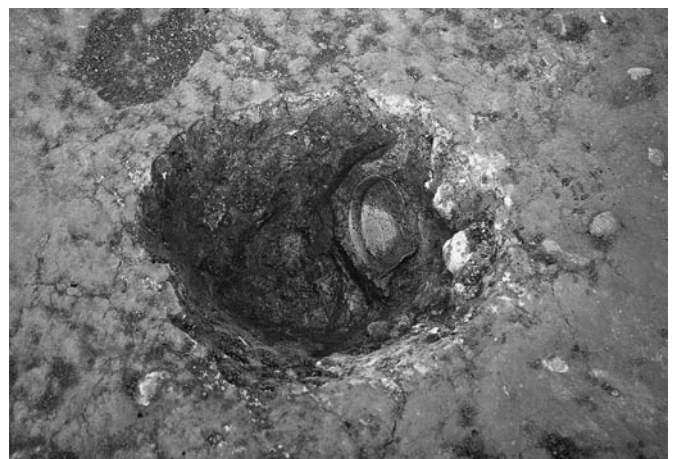
⑤ 4号住居全景(南西より)



⑥ 4号住居カマド(南西より)



⑦ 4号住居南隅付近遺物出土状態(南東より)



⑧ 4号住居P1と遺物出土状態(南西より)



① 5号住居全景(西より)



② 5号住居カマド(西より)



③ 5号住居掘り方全景(西より)



④ 5号住居カマド前遺物出土状態(南西より)



⑤ 6号住居全景(西より)



⑥ 6号住居カマド断面(南より)



⑦ 6号住居北壁側遺物出土状態(北西より)



⑧ 6号住居掘り方全景(西より)



① 7号住居全景(西より)



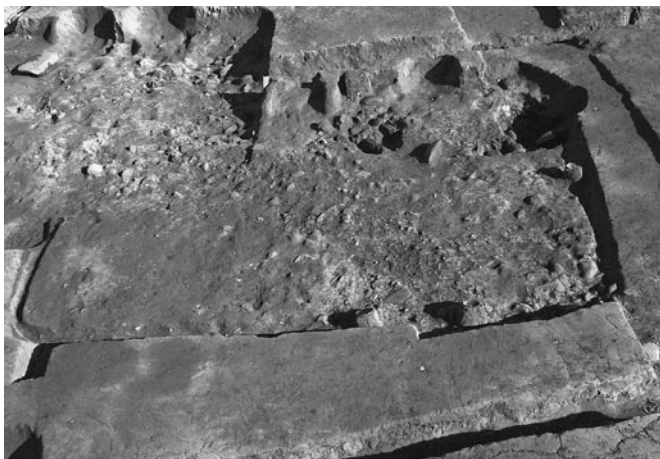
② 7号住居カマドA断面(西より)



③ 7号住居カマドB断面(西より)



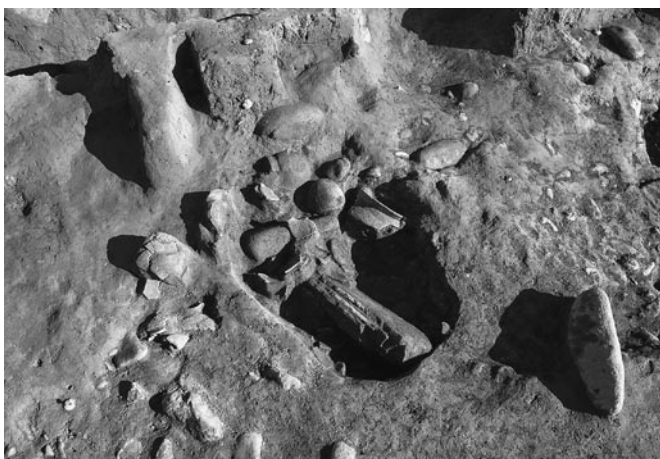
④ 7号住居掘り方全景(西より)



⑤ 8号住居全景(西より)



⑥ 8号住居カマド断面(南より)



⑦ 8号住居貯蔵穴1と遺物出土状態(西より)



⑧ 8号住居西壁際遺物出土状態(北より)



① 9号住居全景(西より)



② 9号住居カマド(西より)



③ 9号住居貯蔵穴と遺物出土状態(南西より)



④ 9号住居掘り方全景(南より)



⑤ 10号住居全景(西より)



⑥ 10号住居カマド断面(西より)



⑦ 11号住居全景(西より)



⑧ 11号住居カマドと周辺遺物出土状態(西より)



① 12号住居遺物出土状態(南より)



② 13号住居全景(南より)



③ 13号住居カマド断面(南より)



④ 14号住居全景(南より)



⑤ 15号住居全景(西より)



⑥ 16号住居全景(西より)



⑦ 16号住居カマド(西より)



⑧ 16号住居貯蔵穴断面(西より)



① 17号住居全景(西より)



② 17号住居貯蔵穴断面(西より)



③ 17号住居掘り方全景(西より)



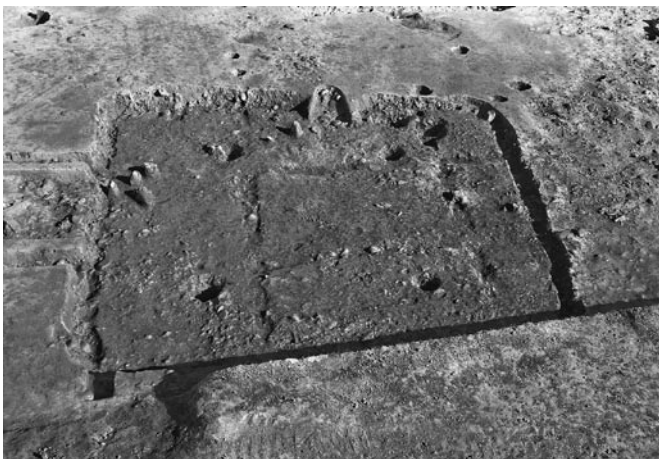
④ 18号住居全景(南より)



⑤ 19号住居全景(西より)



⑥ 19号住居掘り方全景(西より)



⑦ 20号住居全景(南より)



⑧ 20号住居カマド断面(東より)



① 21号住居全景(南より)



② 21号住居カマド断面(西より)



③ 21号住居遺物出土状態(東より)



④ 22号住居全景(南より)



⑤ 23号住居全景(西より)



⑥ 23号住居カマドA(西より)



⑦ 23号住居カマドA断面(南より)



⑧ 23・24号住居掘り方全景(西より)



① 25号住居全景(西より)



② 25号住居カマド(西より)



③ 25号住居カマド(南より)



④ 25号住居掘り方全景(西より)



⑤ 26号住居全景(西より)



⑥ 26号住居カマド・貯蔵穴と遺物出土状態(西より)



⑦ 27号住居全景(東より)



⑧ 27号住居北隅周辺遺物出土状態(南より)



① 27号住居遺物出土状態(北より)



② 27号住居掘り方全景(北より)



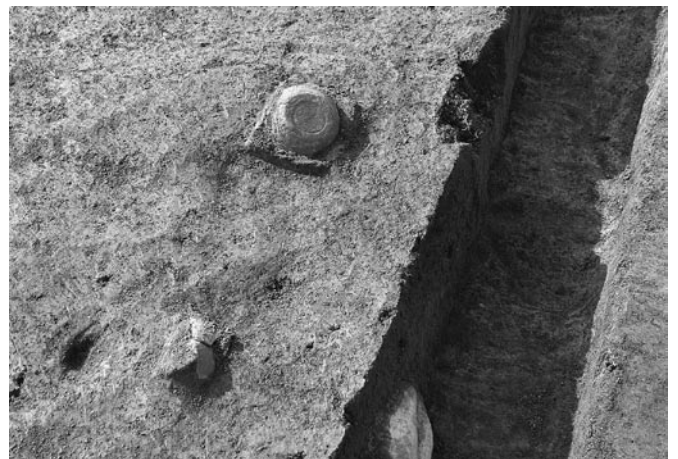
③ 27号住P 5と遺物出土状態(東より)



④ 28号住居全景(西より)



⑤ 28号住居カマド断面(西より)



⑥ 28号住居遺物出土状態(東より)



⑦ 29号住居全景(北西より)



⑧ 29号住居カマド(北西より)



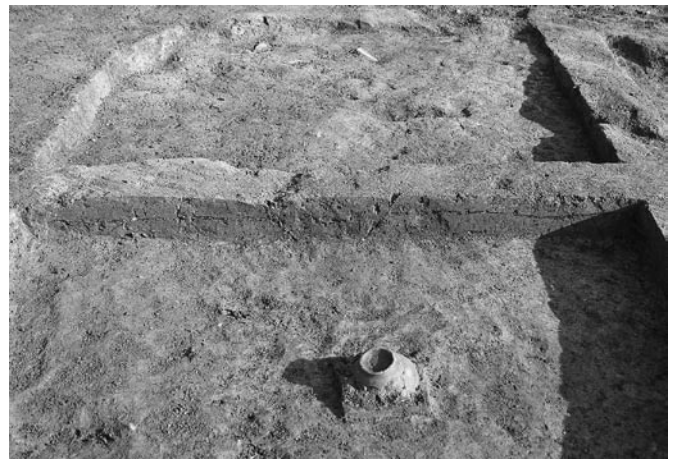
① 30号住居全景(西より)



② 31号住居全景(北西より)



③ 31号住居カマド(北西より)



④ 31号住居断面と遺物出土状態(北西より)



⑤ 32号住居全景(西より)



⑥ 32号住居カマド(西より)



⑦ 32号住居貯蔵穴断面(西より)



⑧ 32号住居掘り方全景(西より)



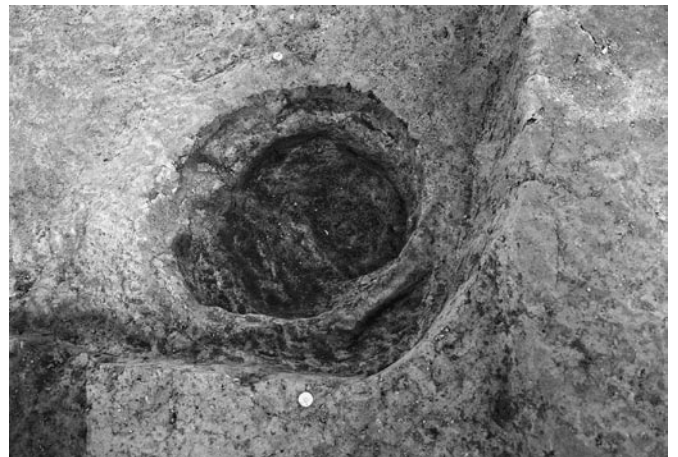
① 33号住居全景(南西より)



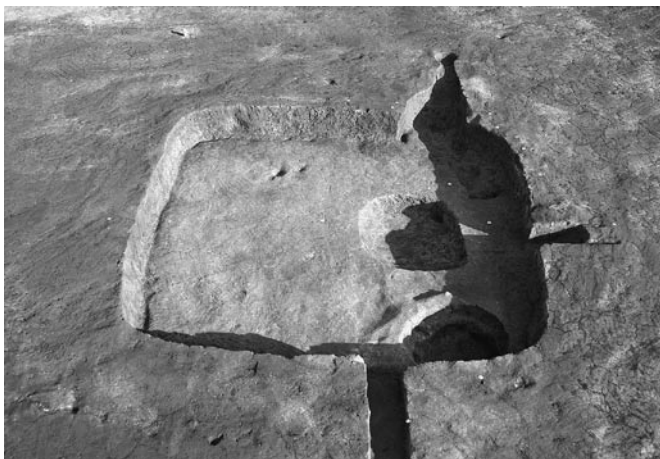
② 34号住居全景(西より)



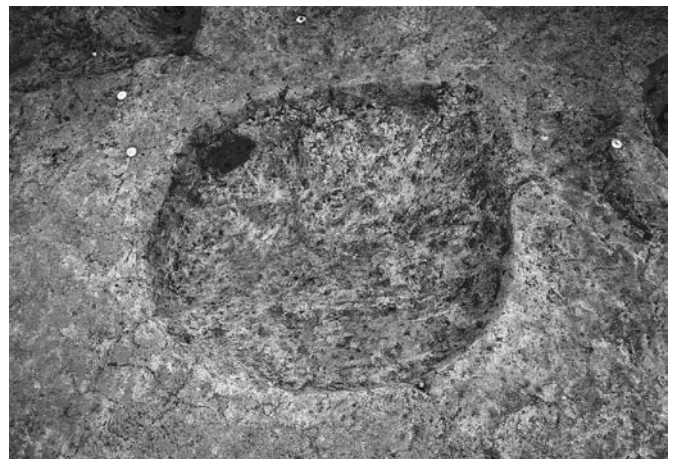
③ 34号住居カマド焚口付近(西より)



④ 34号住居貯蔵穴(西より)



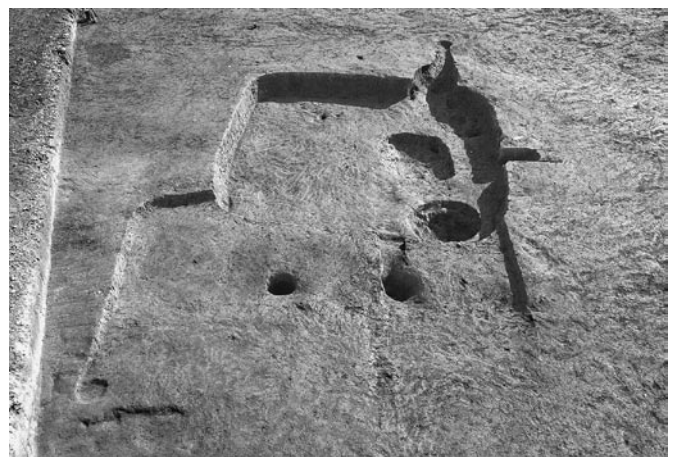
⑤ 34号住居掘り方全景(西より)



⑥ 34号住居床下土坑(北より)



⑦ 35号住居全景(西より)



⑧ 35号住居掘り方全景(西より)



① 36号住居全景(南西より)



② 36号住居カマド断面(南東より)



③ 37号住居全景(西より)



④ 37号住居カマド断面(西より)



⑤ 38号住居全景(南東より)



⑥ 38号住居貯蔵穴と遺物出土状態(北東より)



⑦ 38号住居中央付近遺物出土状態(南東より)



⑧ 38号住居掘り方全景(北西より)



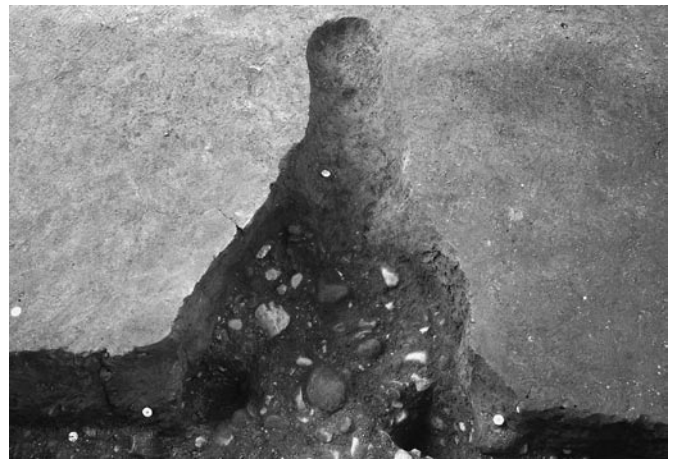
① 39号住居全景(北東より)



② 39号住居掘り方と炉(南東より)



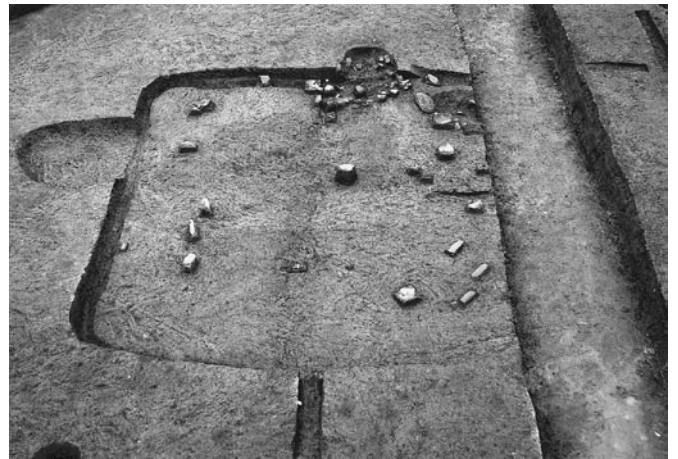
③ 40号住居全景(南より)



④ 40号住居カマド(西より)



⑤ 40号住居掘り方全景(西より)



⑥ 41号住居全景(西より)



⑦ 41号住居カマド断面と遺物出土状態(西より)



⑧ 41号住居掘り方全景(西より)



① 42号住居全景(南より)



② 42号住居カマド全景(南より)



③ 43号住居全景(西より)



④ 43号住居カマドと周辺の礫(北より)



⑤ 43号住居南壁付近の遺物出土状態(北西より)



⑥ 43号住居掘り方全景(西より)



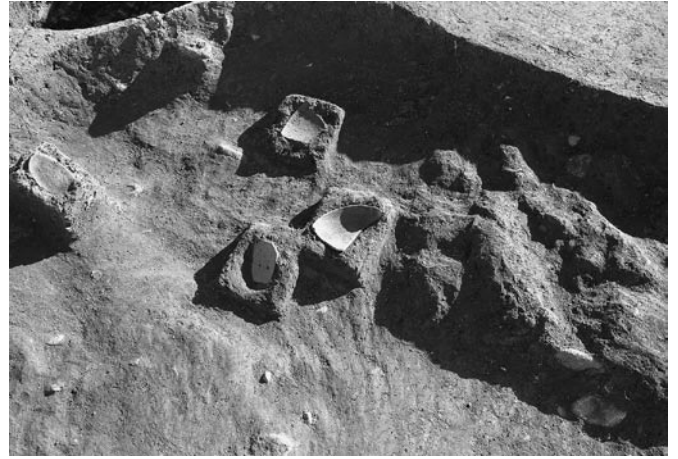
⑦ 44号住居全景(北より)



⑧ 44号住居東側の礫出土状態(北より)



① 45号住居全景(西より)



② 45号住居南東隅遺物出土状態(北西より)



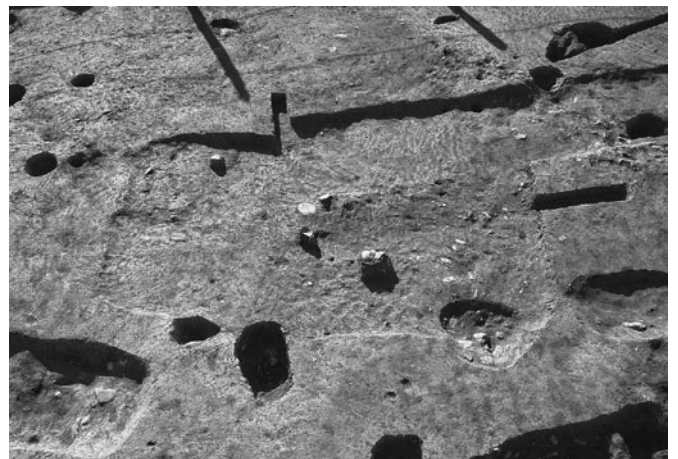
③ 46号住居全景(北より)



④ 46号住居北西隅遺物出土状態(西より)



⑤ 46・56号住居掘り方全景(北より)



⑥ 47号住居全景(北より)



⑦ 47号住居遺物出土状態(西より)



⑧ 47号住居掘り方全景(西より)



① 48号住居全景(西より)



② 48号住居遺物出土状態(西より)



③ 48号住居カマドと遺物出土状態(西より)



④ 48号住居掘り方全景(西より)



⑤ 49・50号住居全景(西より)



⑥ 49号住居カマド(西より)



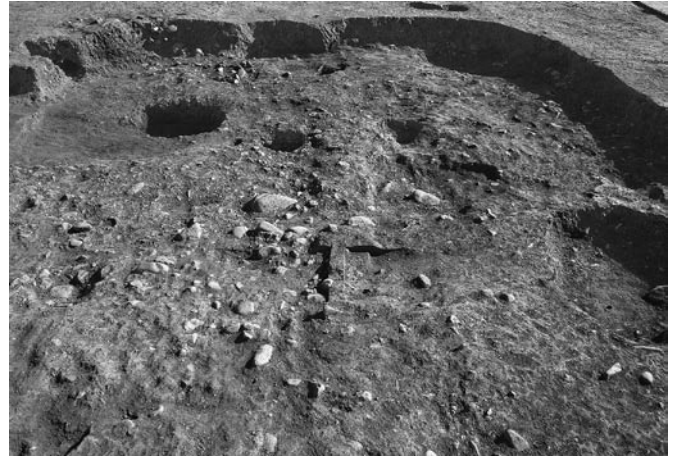
⑦ 49号住居カマド掘り方断面(西より)



⑧ 49・50号住居断面(西より)



① 49号住居遺物出土状態(西より)



② 49・50号住居掘り方全景(西より)



③ 51号住居礎出土状態(北より)



④ 51号住居掘り方全景(北より)



⑤ 52号住居全景(西より)



⑥ 52号住居カマド(西より)



⑦ 52号住居貯蔵穴と遺物出土状態(東より)



⑧ 52号住居掘り方全景(西より)



① 53号住居全景(西より)



② 53号住居カマド(西より)



③ 53号住居貯蔵穴(北西より)



④ 53号住居2号床下土坑(西より)



⑤ 53号住居掘り方全景(西より)



⑥ 54号住居全景(西より)



⑦ 54号住居カマドと周辺遺物出土状態(西より)



⑧ 54号住居掘り方全景(西より)



① 55号住居全景(西より)



② 55号住居カマド断面(東より)



③ 55号住居北東隅遺物出土状態(南より)



④ 55号住居掘り方全景(西より)



⑤ 57号住居全景(西より)



⑥ 58号住居全景(西より)



⑦ 58号住居カマド(西より)



⑧ 58号住居掘り方全景(西より)



① 59号住居全景(西より)



② 59号住居カマド(西より)



③ 60号住居全景(西より)



④ 60号住居カマドA全景(西より)



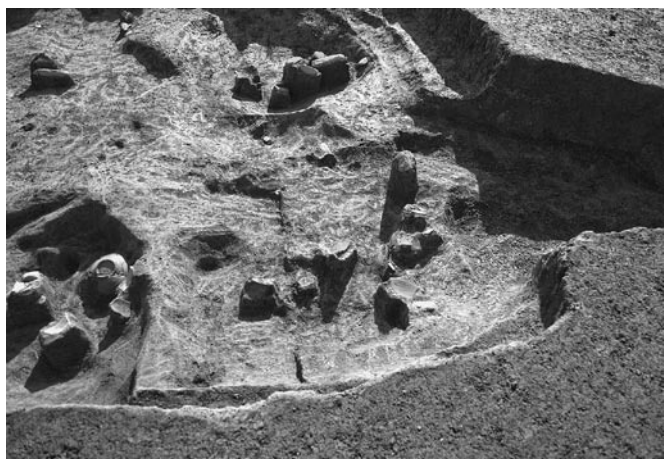
⑤ 60号住居掘り方全景(西より)



⑥ 60号住居1号床下土坑(西より)



⑦ 60号住居貯蔵穴(北より)



⑧ 60号住居掘り方内遺物出土状態(北より)



① 62号住居全景(西より)



② 62号住居カマド(西より)



③ 62号住居カマドと周辺遺物出土状態(南西より)



④ 62号住居掘り方全景(西より)



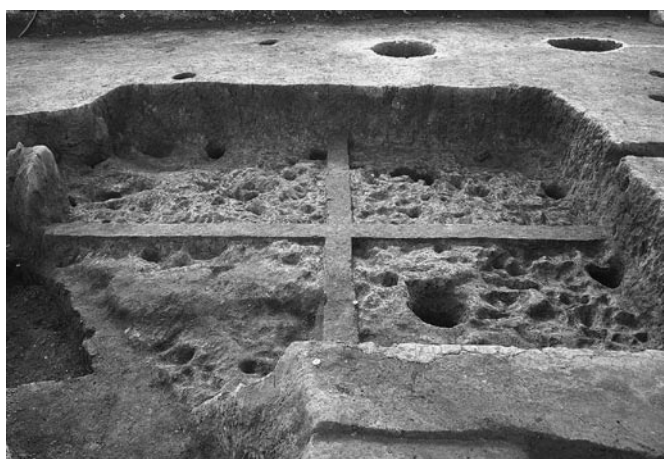
⑤ 63号住居全景(西より)



⑥ 63号住居カマド(西より)



⑦ 63号住居カマド掘り方(北より)



⑧ 63号住居掘り方全景(北より)



① 64号住居全景(北より)



② 64号住居東側遺物出土状態(西より)



③ 64号住居中央遺物出土状態(北より)



④ 64号住居掘り方全景(北より)



⑤ 65号住居全景(東より)



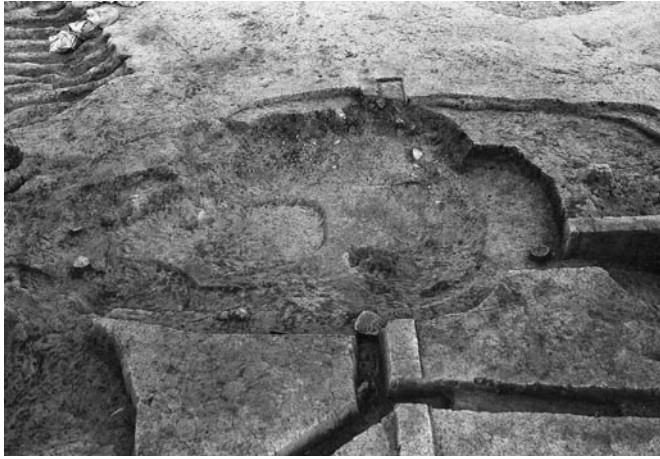
⑥ 65号住居掘り方全景(東より)



⑦ 66号住居全景(東より)



⑧ 66号住居掘り方全景(南より)



① 1 A・B号竖穴状遺構全景(西より)



② 1 A・B号竖穴状遺構遺物出土状態(南より)



③ 1 A・B号竖穴状遺構遺物出土状態(西より)



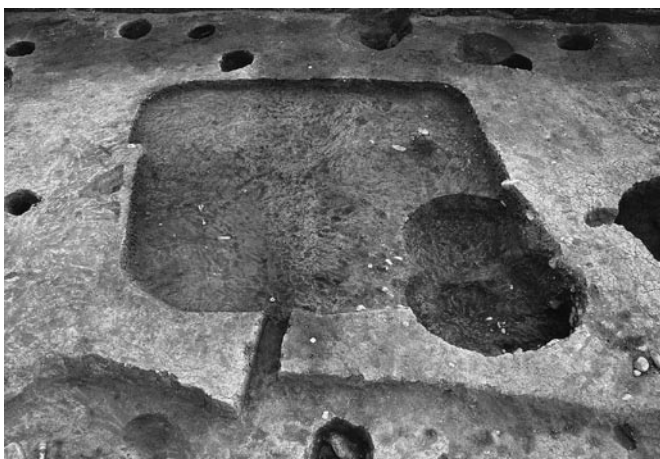
④ 1 B号竖穴状遺構および2号竖穴状遺構断面(東より)



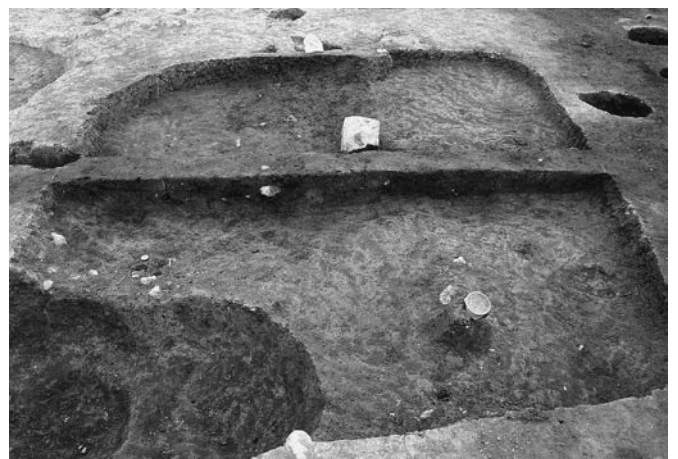
⑤ 3号竖穴状遺構全景(南より)



⑥ 4号竖穴状遺構と23・24号住居(西より)



⑦ 5号竖穴状遺構全景(北より)



⑧ 5号竖穴状遺構断面(西より)

1・2号掘立柱建物



① 1号掘立柱建物P 1(南より)



② 1号掘立柱建物P 2(南より)



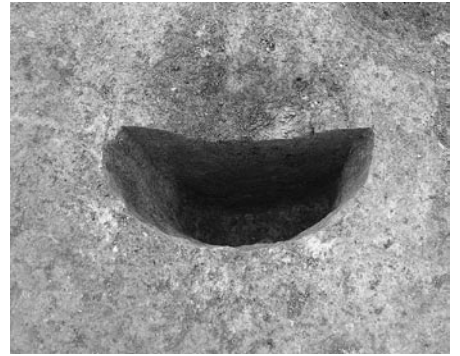
③ 1号掘立柱建物P 3(南より)



④ 1号掘立柱建物P 4(南より)



⑤ 2号掘立柱建物P 1断面(南より)



⑥ 2号掘立柱建物P 3断面(南より)



⑦ 2号掘立柱建物全景(南より)



⑧ 2号掘立柱建物P 9断面(南より)



⑨ 2号掘立柱建物P 11断面(南より)



⑩ 2号掘立柱建物P 12断面(南より)



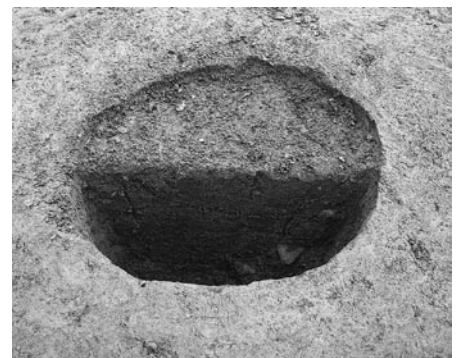
① 3号掘立柱建物全景(東より)



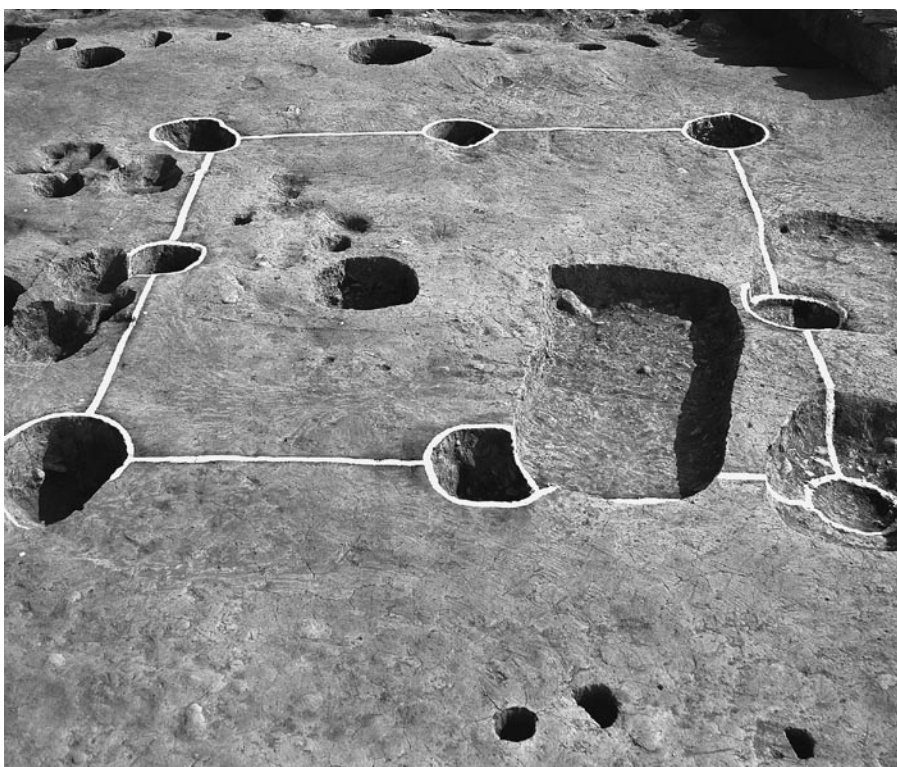
② 3号掘立柱建物P 1断面(西より)



③ 3号掘立柱建物P 2断面(西より)



④ 3号掘立柱建物P 3断面(西より)



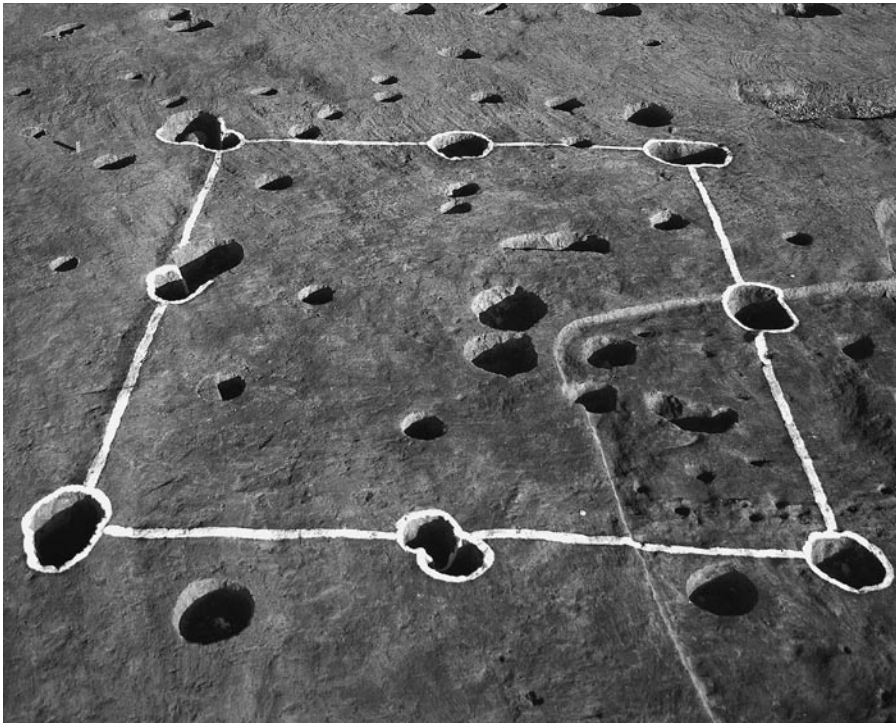
⑥ 4号掘立柱建物全景(西より)



⑤ 4号掘立柱建物P 7(南より)



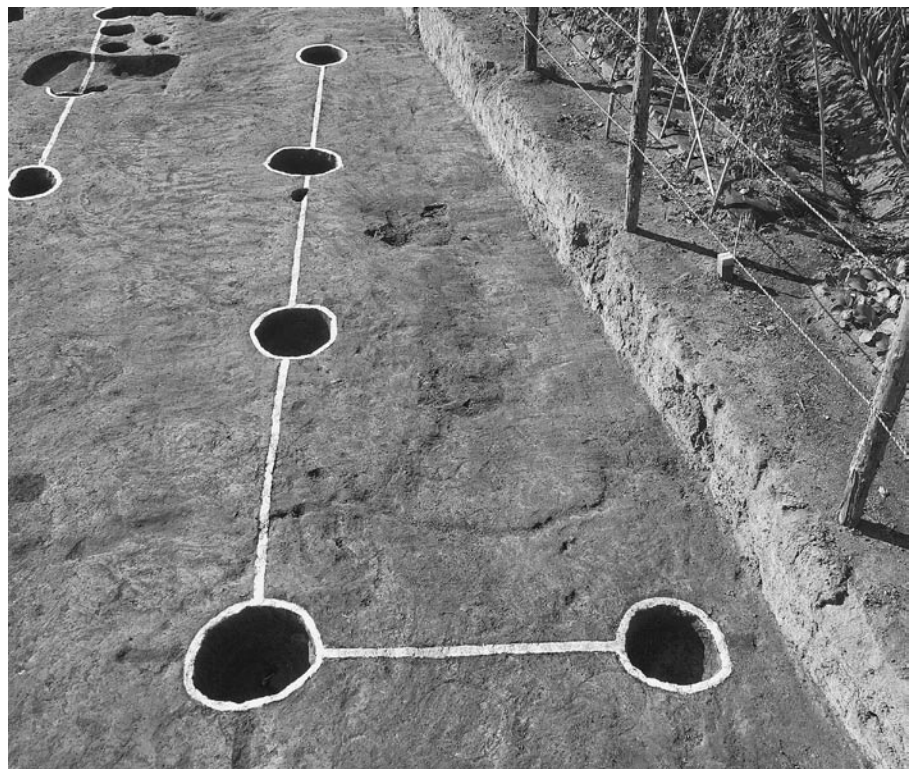
⑦ 4号掘立柱建物P 7断面(南より)



① 5号掘立柱建物全景(西より)



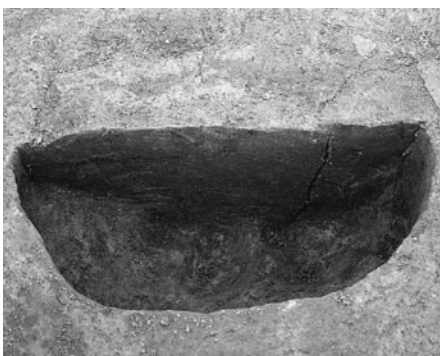
② 5号掘立柱建物P 9(北より)



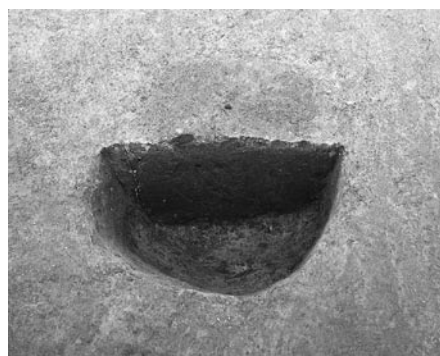
③ 6号掘立柱建物全景(東より)



④ 6号掘立柱建物P 2断面(南より)



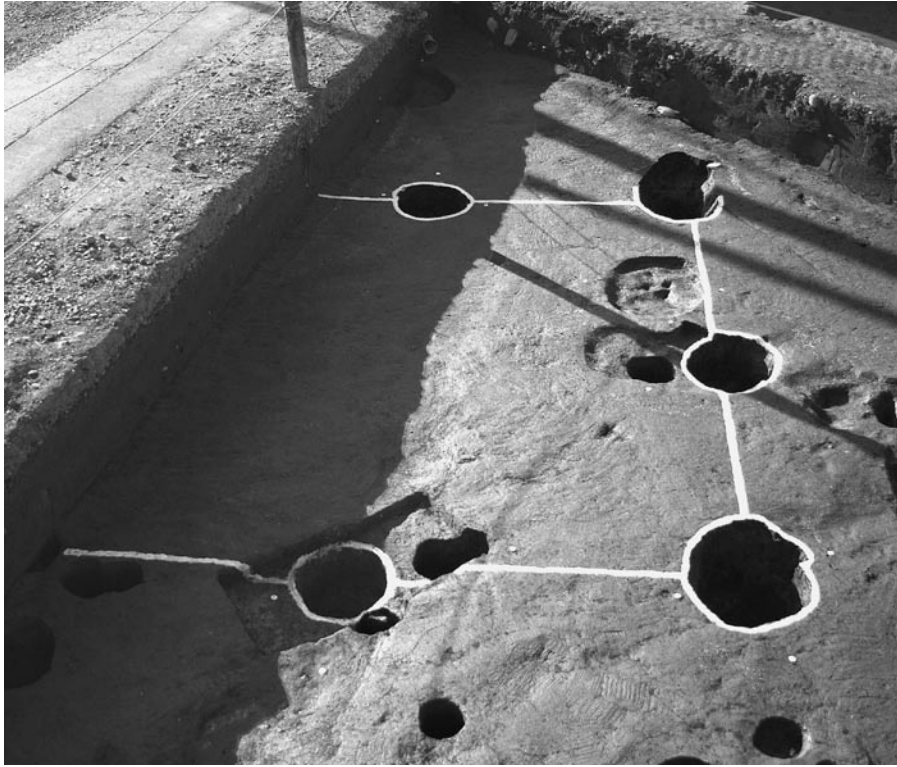
⑤ 6号掘立柱建物P 3断面(南より)



⑥ 6号掘立柱建物P 4断面(南より)



⑦ 6号掘立柱建物P 5断面(南より)



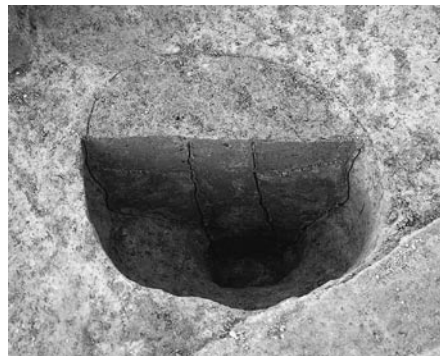
① 7号掘立柱建物全景(北より)



② 7号掘立柱建物P 1断面(南より)



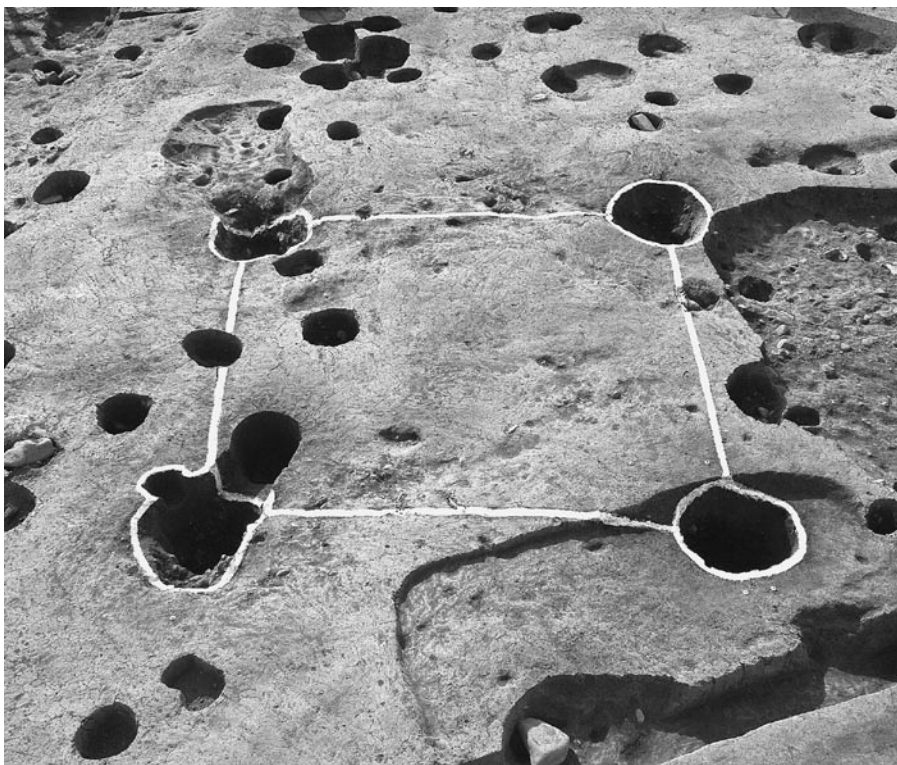
③ 7号掘立柱建物P 4(南東より)



④ 7号掘立柱建物P 5断面(南より)



⑤ 7号掘立柱建物P 6(南より)



⑥ 8号掘立柱建物全景(北より)



⑦ 8号掘立柱建物P 3断面(南より)



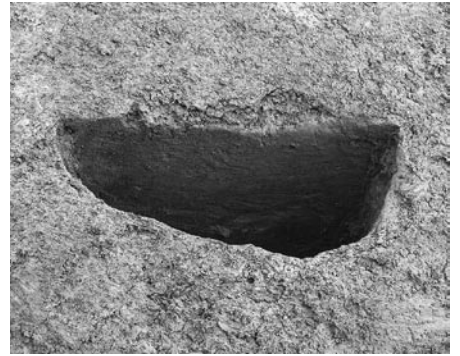
⑧ 8号掘立柱建物P 4断面(西より)



① 9号掘立柱建物全景(北より)



② 9号掘立柱建物P 4断面(南より)



③ 9号掘立柱建物P 5断面(南より)



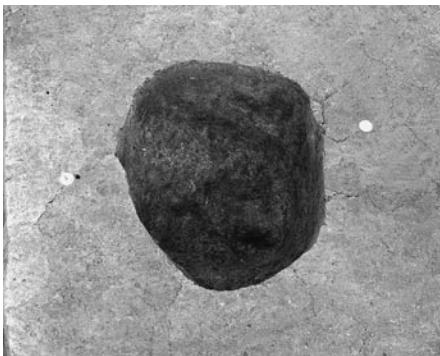
④ 9号掘立柱建物P 2(南より)



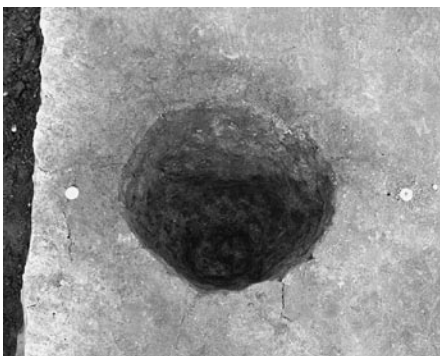
⑤ 9号掘立柱建物P 3(南より)



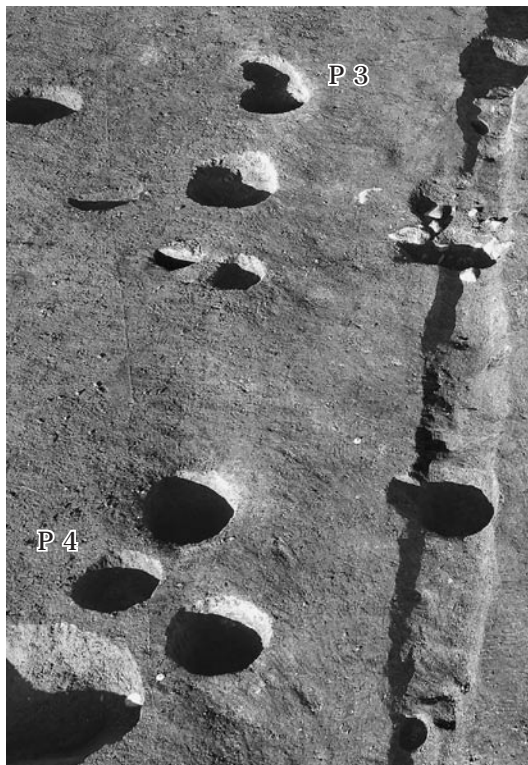
⑥ 10号掘立柱建物P 6断面(南より)



⑦ 10号掘立柱建物P 8(南より)



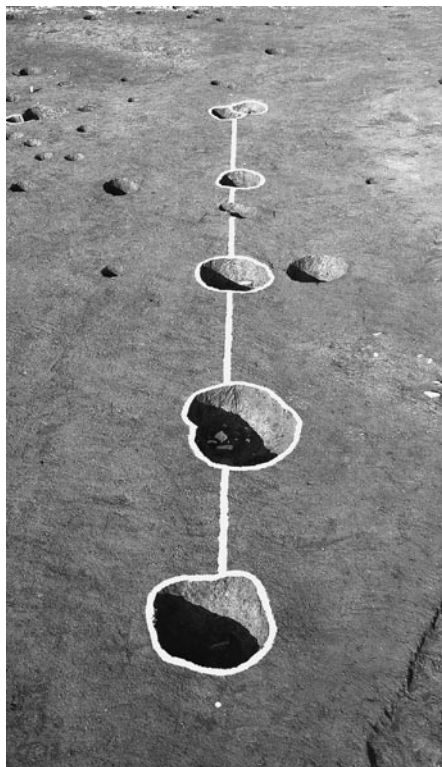
⑧ 10号掘立柱建物P 9(南より)



⑨ 12号掘立柱建物北東部周辺(南より)



① 1号柱穴列P2断面(東より)



③ 1号柱穴列全景(南より)



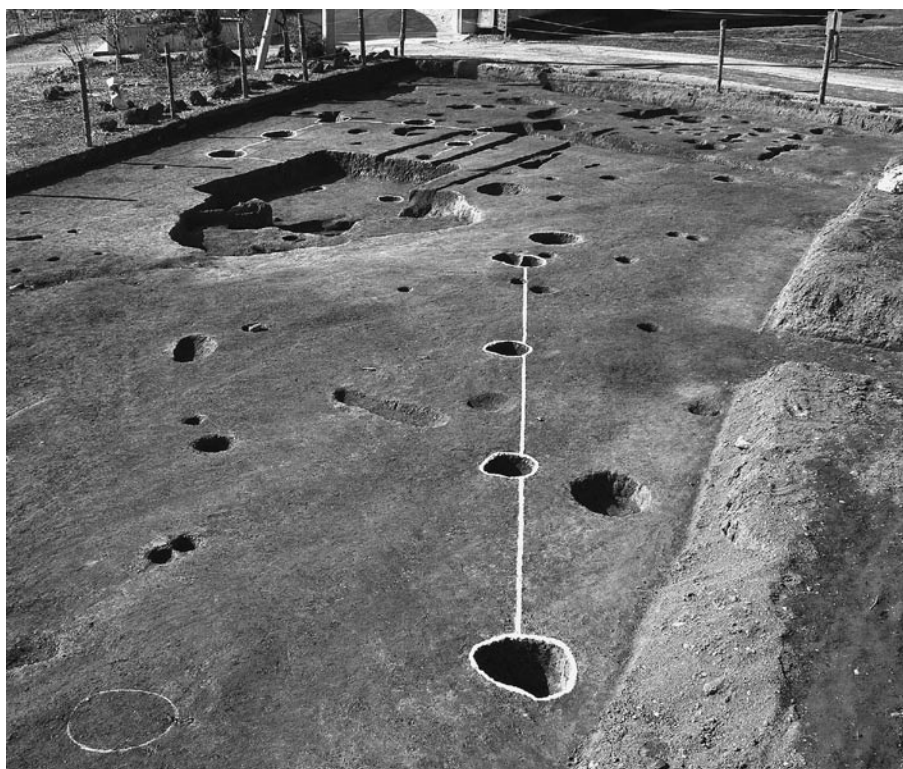
④ 1号柱穴列P4断面(東より)



② 1号柱穴列P3断面(東より)



⑤ 1号柱穴列P5断面(東より)



⑥ 2号柱穴列全景(東より)



⑨ 3号柱穴列全景(西より)



⑦ 2号柱穴列P1断面(南東より)

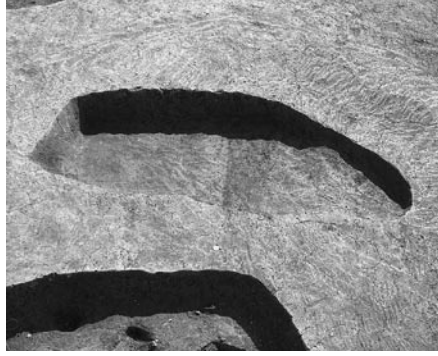


⑧ 2号柱穴列P2断面(南東より)

1～18号土坑



① 1・9号土坑全景(北西より)



② 2号土坑全景(北より)



③ 3号土坑全景(北より)



④ 4号土坑全景(北より)



⑤ 5号土坑全景(北より)



⑥ 6号土坑全景(西より)



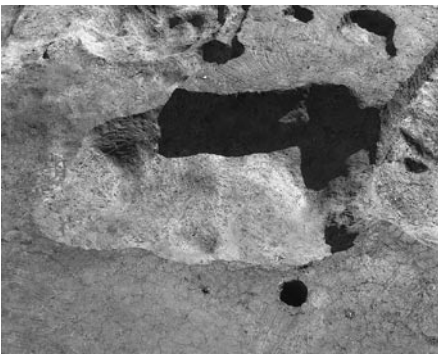
⑦ 7・8号土坑全景(南西より)



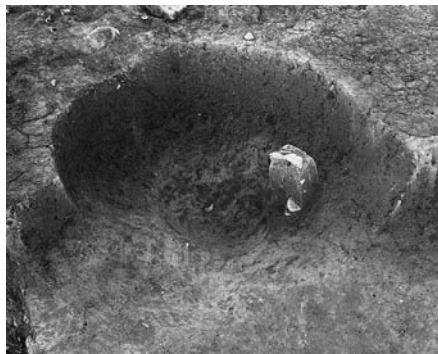
⑧ 10・11号土坑断面(西より)



⑨ 12号土坑全景(北より)



⑩ 13号土坑全景(北西より)



⑪ 14号土坑全景(北西より)



⑫ 15号土坑全景(北西より)



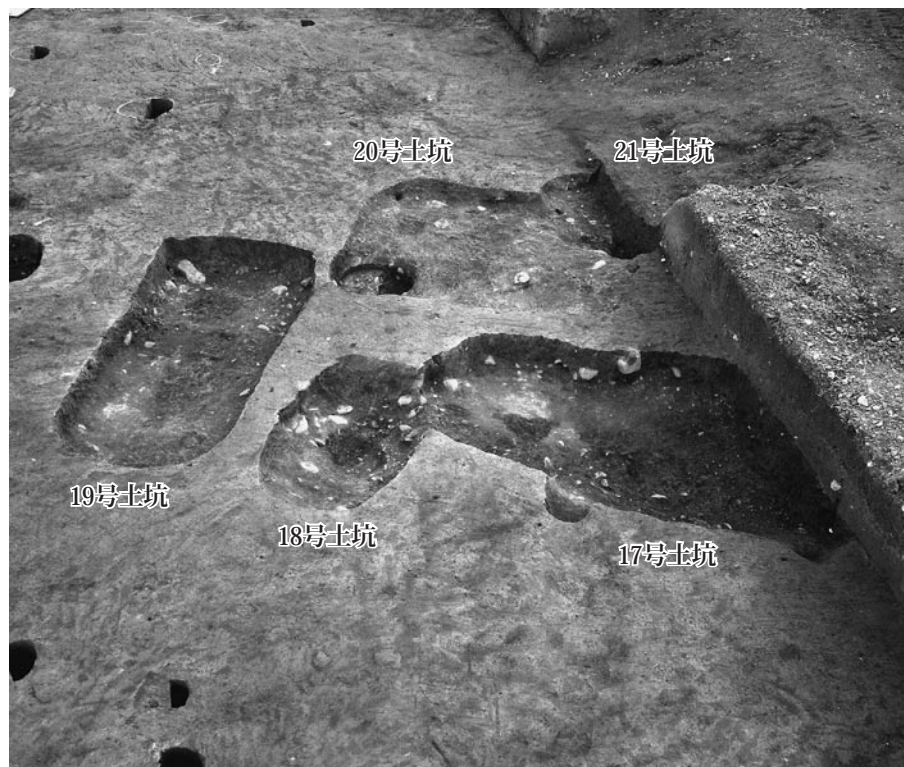
⑬ 16号土坑全景(北より)



⑭ 17号土坑全景(北西より)



⑮ 18号土坑全景(北西より)



① 17～21号土坑全景(北西より)



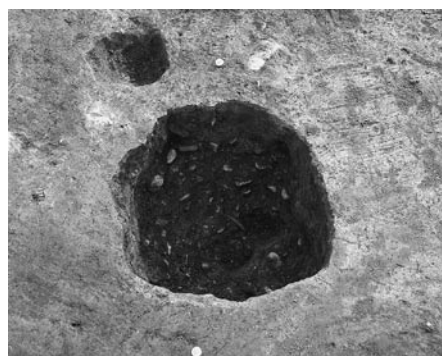
② 18・19号土坑全景(北西より)



③ 20・21号土坑全景(北東より)



④ 22号土坑全景(東より)



⑤ 23号土坑全景(西より)



⑥ 24号土坑全景(南西より)



⑦ 25号土坑全景(南より)



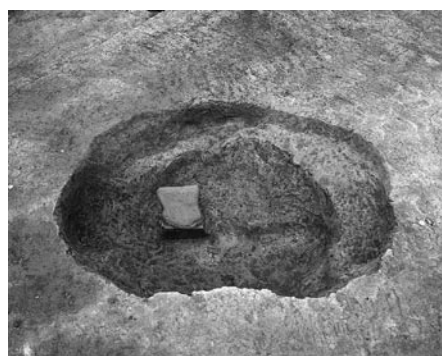
⑧ 26～28号土坑全景(南西より)



⑨ 29号土坑断面(北より)



⑩ 30号土坑全景(西より)



⑪ 31号土坑全景(北東より)



⑫ 32号土坑全景(北より)



① 33・37号土坑全景(西より)



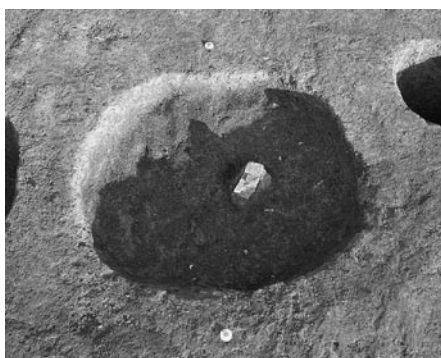
② 34号土坑全景 南西より)



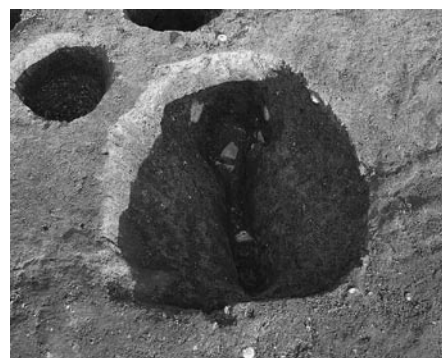
③ 35号土坑断面(西より)



④ 36号土坑全景(南より)



⑤ 38号土坑全景(西より)



⑥ 39号土坑全景(西より)



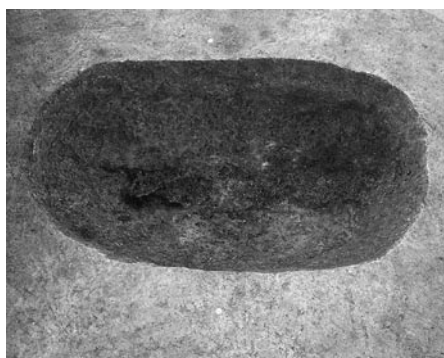
⑦ 40号土坑全景(南より)



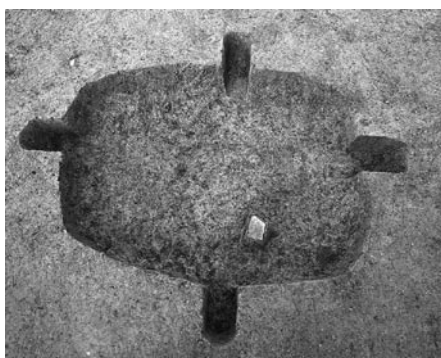
⑧ 41号土坑全景(北西より)



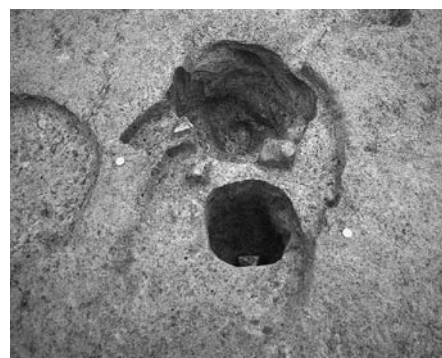
⑨ 42号土坑全景(東より)



⑩ 43号土坑全景(東より)



⑪ 44号土坑全景(南西より)



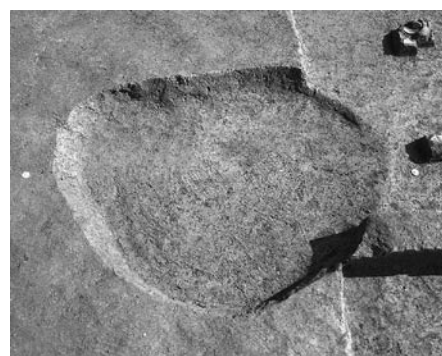
⑫ 45号土坑全景(東より)



⑬ 46号土坑断面(西より)



⑭ 47号土坑全景(東より)



⑮ 48号土坑全景(西より)



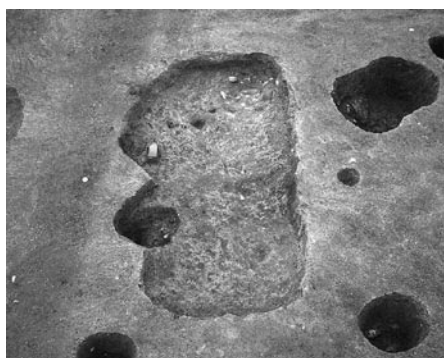
① 49号土坑全景(東より)



② 50号土坑全景(西より)



③ 51号土坑全景(北より)



④ 52号土坑全景(東より)



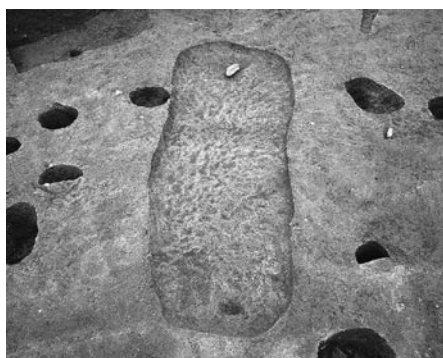
⑤ 53号土坑全景(北東より)



⑥ 54号土坑全景(東より)



⑦ 55号土坑全景(北東より)



⑧ 56号土坑全景(北東より)



⑨ 57号土坑全景(東より)



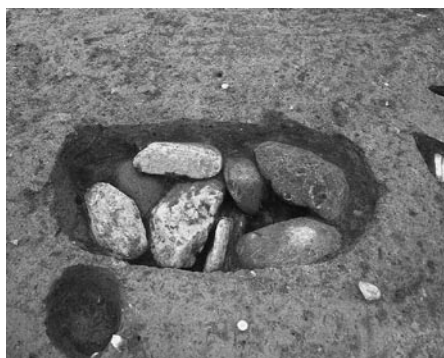
⑩ 58号土坑全景(北より)



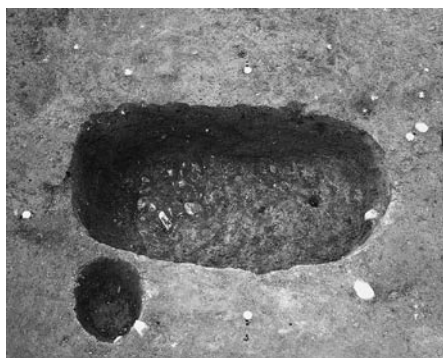
⑪ 59号土坑全景(北より)



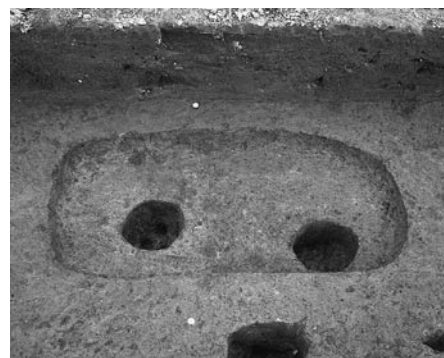
⑫ 60号土坑全景(東より)



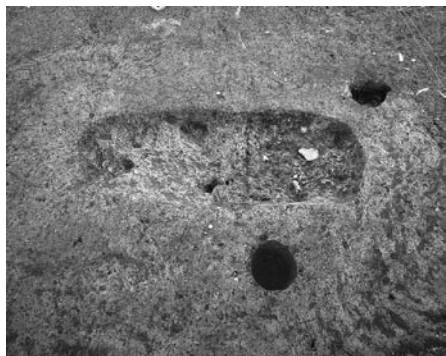
⑬ 61号土坑礫確認状態(南東より)



⑭ 61号土坑全景(南東より)



⑮ 62号土坑全景(北より)



① 63号土坑全景(北東より)



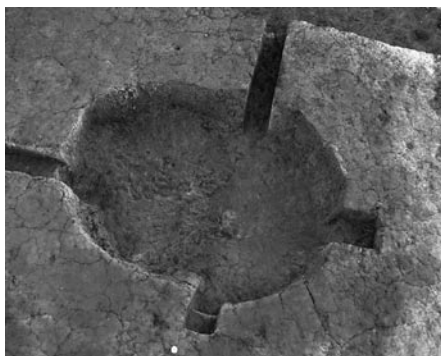
② 65号土坑全景(北東より)



③ 66号土坑全景(西より)



④ 67号土坑全景(西より)



⑤ 68号土坑全景(北より)



⑥ 69号土坑全景(北より)



⑦ 70号土坑断面(北より)



⑧ 71号土坑全景(西より)



⑨ 71号土坑断面と遺物出土状態(南より)



⑩ 72号土坑全景(北より)



⑪ 73号土坑全景(東より)



⑫ 74号土坑全景(北より)



⑬ 75号土坑全景(西より)



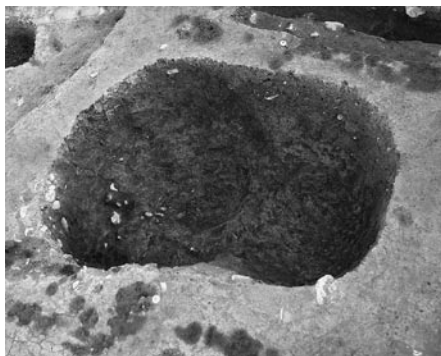
⑭ 76号土坑全景(西より)



⑮ 77号土坑断面(南西より)



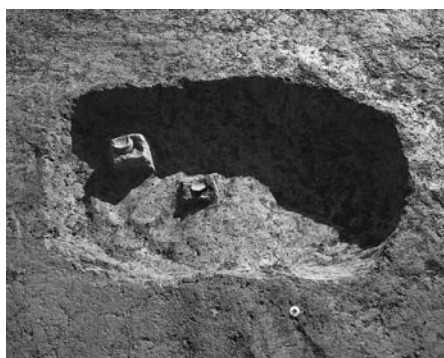
① 78号土坑全景(西より)



② 79号土坑全景(西より)



③ 80号土坑全景(西より)



④ 83号土坑全景(北より)



⑤ 84号土坑全景(東より)



⑥ 85号土坑全景(南東より)



⑦ 86号土坑全景(東より)



⑧ 87号土坑全景(東より)



⑨ 88号土坑全景(南より)



⑩ 89号土坑全景(南西より)



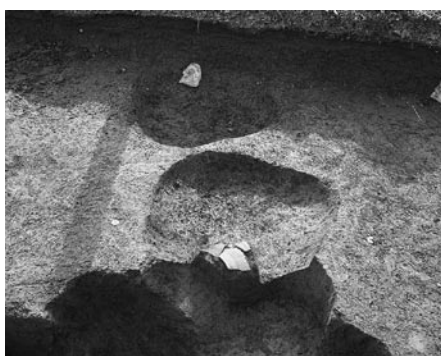
⑪ 90号土坑全景(北東より)



⑫ 91号土坑全景と礫出土状態(北東より)



⑬ 92号土坑全景(西より)

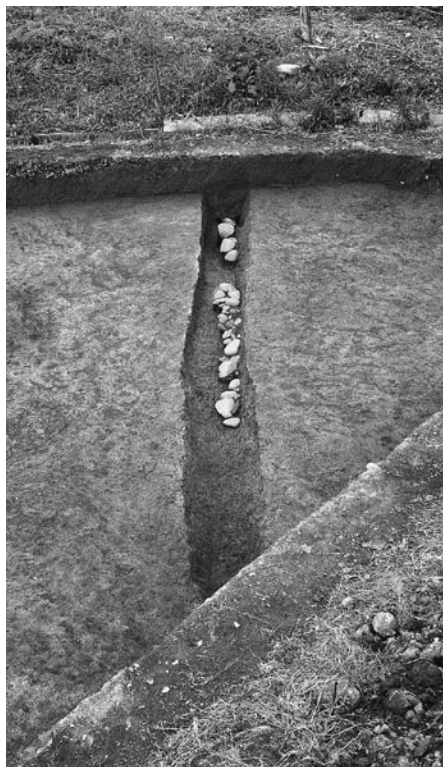


⑭ 93号土坑全景(北より)



⑮ 94号土坑全景(北より)

1～4・8～10号溝



① 1号溝全景(北西より)



② 2号溝全景(西より)



③ 2号溝断面(西より)



④ 3号溝全景(南西より)



⑤ 4号溝全景(北より)



⑥ 8号溝南半部(北より)



⑦ 8号溝北半部(南より)



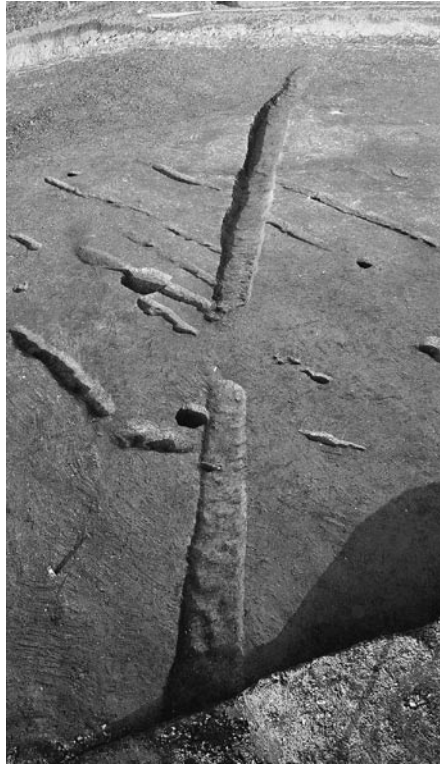
⑧ 9号溝全景(北東より)



⑨ 10号溝全景(南西より)



① 11号溝全景(南より)



③ 14号溝全景(南西より)



④ 15・16号溝北半部(南より)



② 12・13号溝全景(南より)



⑤ 17号溝全景(南より)



⑥ 18号溝全景(南東より)



⑦ 19号溝全景(北より)



⑧ 20号溝全景(南東より)



⑨ 21号溝全景(北より)



⑩ 22B号溝全景(北西より)

1～4号島



① 1号島全景(西より)



② 1号島断面(西より)



③ 2号島全景(南東より)



④ 2号島断面(南西より)



⑤ 3号島全景(北より)



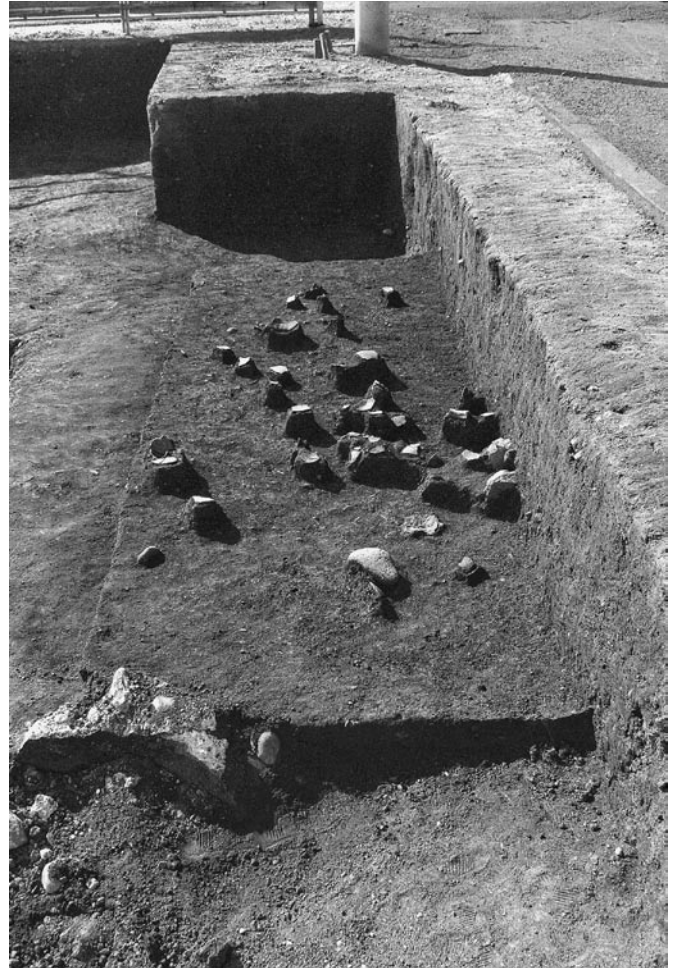
⑥ 4号島全景(西より)



⑦ 4号島断面(西より)



① 1号遺物集中地点確認状態(東より)



③ 1号遺物集中地点下面(北より)



② 1号遺物集中地点上面(西より)



④ 2号遺物集中地点全景(西より)



⑤ 2号遺物集中地点南側(西より)

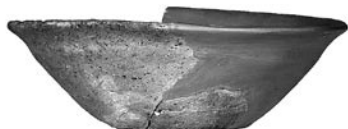


⑥ 2号遺物集中地点北側(西より)

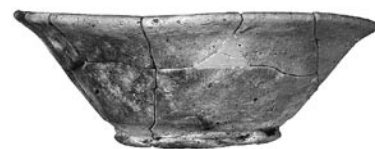
1・2号住居出土遺物



1号住居 1



1号住居 2



1号住居 6



1号住居 7



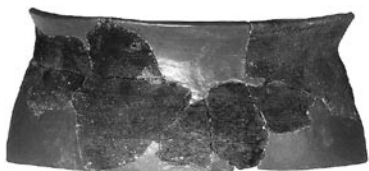
1号住居 8



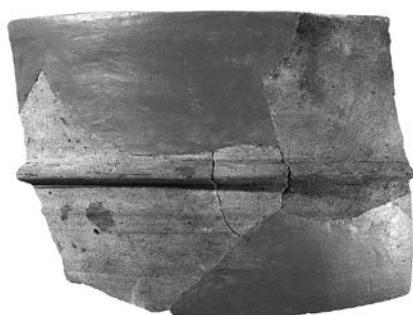
1号住居 13



1号住居 15



1号住居 18



1号住居 19



1号住居 20



1号住居 21



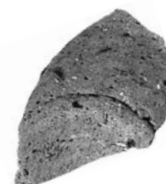
1号住居 22



1号住居 23



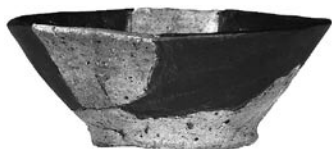
2号住居 1



2号住居 2



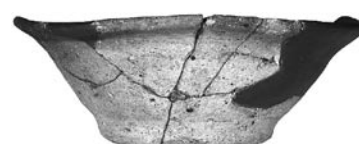
2号住居 3



2号住居 4



2号住居 5



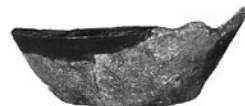
2号住居 6



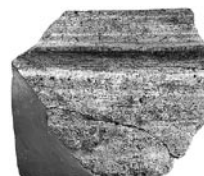
2号住居 9



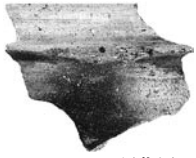
2号住居 10



2号住居 14



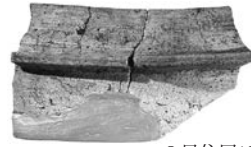
2号住居 15



2号住居16



2号住居17



2号住居18



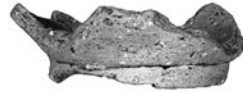
2号住居20



3号住居2



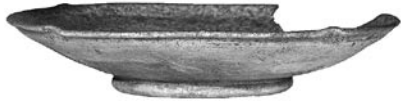
3号住居3



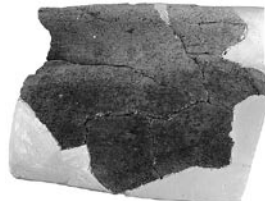
3号住居4



3号住居6



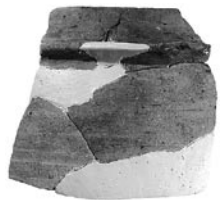
3号住居7



3号住居8



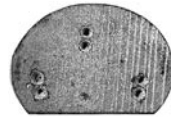
3号住居10



3号住居11



3号住居13



3号住居15



3号住居16



4号住居1



4号住居2



4号住居3



4号住居4



4号住居5



4号住居7



4号住居9



4号住居15

4~7号住居出土遺物



4号住居16



4号住居21



4号住居23



4号住居25



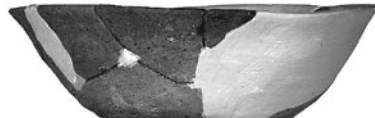
4号住居19



5号住居1



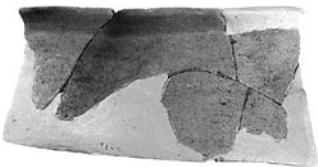
5号住居3



5号住居6



5号住居8



5号住居9



6号住居1



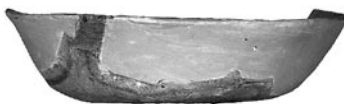
6号住居2



6号住居3



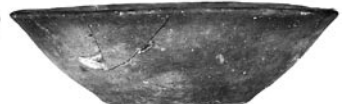
6号住居4



7号住居1



7号住居2



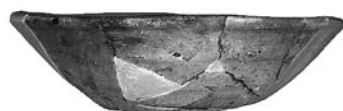
7号住居3



7号住居4



7号住居5



7号住居6



7号住居8



7号住居12



7号住居14



7号住居15



7号住居18



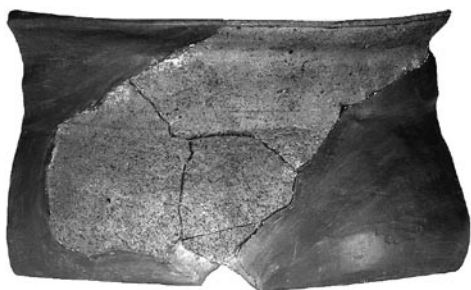
7号住居19



7号住居16



7号住居22



7号住居25



7号住居26



7号住居29



7号住居30



7号住居31



8号住居1



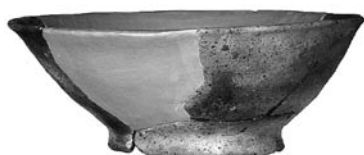
8号住居3



8号住居5



8号住居6



8号住居9

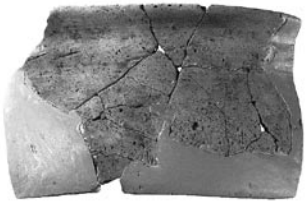


8号住居10



8号住居14

8~11号住居出土遺物



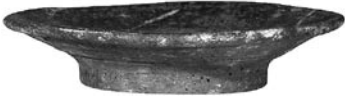
8号住居16



8号住居17



8号住居18



9号住居1



9号住居2



9号住居3



9号住居5



10号住居3



10号住居4



10号住居5



11号住居1



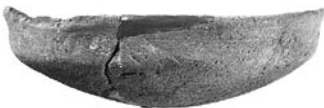
11号住居2



11号住居3



11号住居4



11号住居5



11号住居10



11号住居12



11号住居13



11号住居14



11号住居17



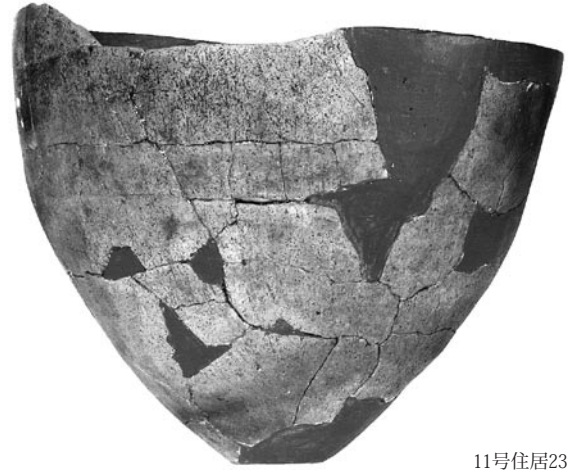
11号住居18



11号住居19



11号住居20



11号住居23



12号住居2



12号住居4



12号住居5



13号住居1



13号住居3



14号住居1



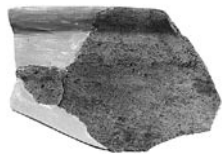
13号住居4



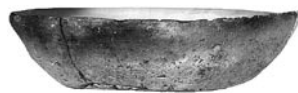
13号住居5



15号住居3



15号住居4



16号住居1



16号住居3



16号住居4



16号住居6



17号住居1



17号住居2



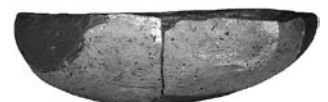
17号住居5



19号住居1



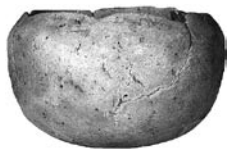
20号住居1



20号住居2



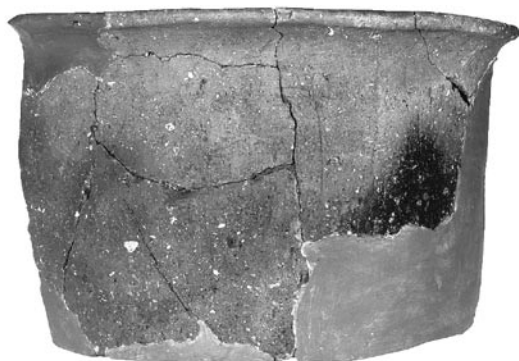
20号住居5



20号住居6



20号住居7



20号住居12



21号住居2



21号住居3



21号住居4



21号住居5



21号住居6



23号住居2



23号住居3



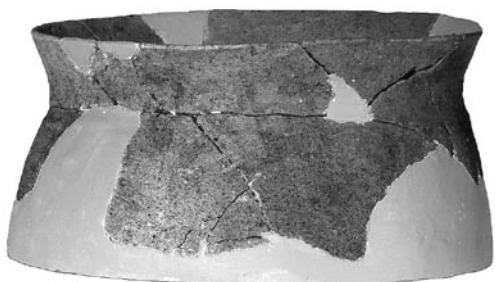
23号住居4



23号住居6



23号住居7



23号住居10



23号住居11



24号住居 1



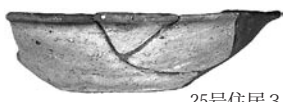
24号住居 2



25号住居 1



25号住居 2



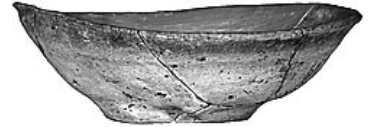
25号住居 3



25号住居 4



25号住居 5



25号住居 7



25号住居 9



25号住居 13



26号住居 1



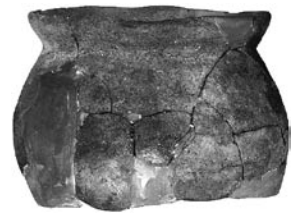
27号住居 1



27号住居 2



27号住居 6



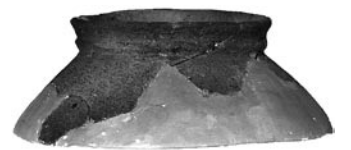
27号住居 7



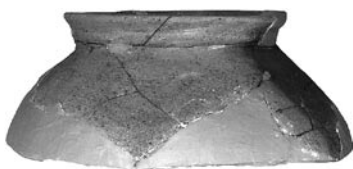
27号住居 8



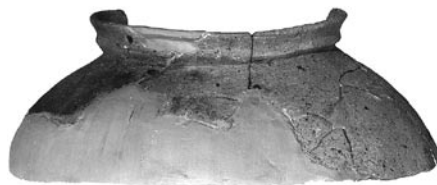
27号住居 9



27号住居 12



27号住居 13



27号住居 14



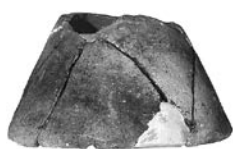
27号住居 15



27号住居10



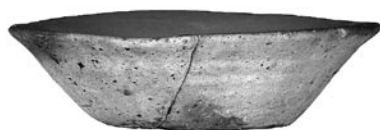
27号住居11



27号住居18



28号住居1



28号住居2



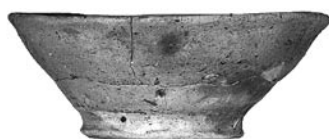
29号住居4



29号住居6



29号住居5



31号住居1



31号住居2



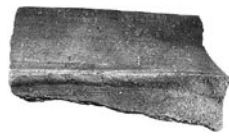
31号住居3



31号住居5



34号住居 4



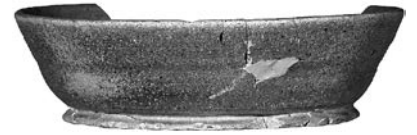
34号住居 6



34号住居 7



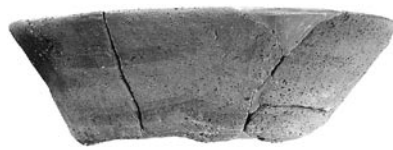
35号住居 1



37号住居 1



38号住居 1



38号住居 2



38号住居 3



38号住居 5



38号住居 6



38号住居 7



38号住居 8



38号住居 9



39号住居 1



39号住居 2

39~43号住居出土遺物



39号住居 3



39号住居 4



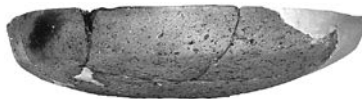
39号住居 5



39号住居 6



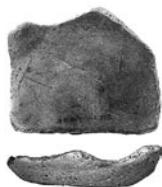
39号住居 7



40号住居 1



40号住居 2



40号住居 5



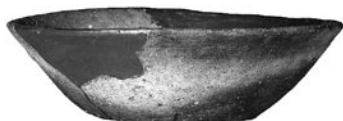
40号住居 7



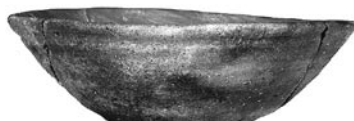
40号住居 9



40号住居 11



41号住居 1



41号住居 2



41号住居 3



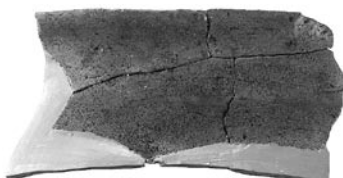
41号住居 4



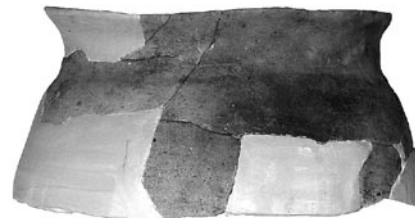
41号住居 11



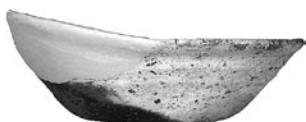
41号住居 10



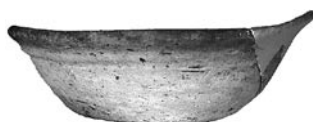
42号住居 2



43号住居 6



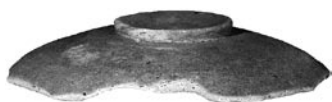
43号住居 1



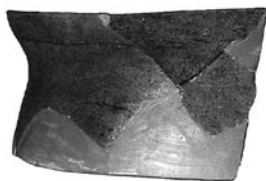
43号住居 2



43号住居 5



44号住居 2



44号住居 5



45号住居 1



45号住居 4



46号住居 1



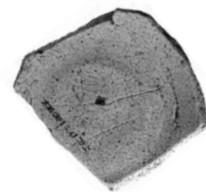
47号住居 2



47号住居 3



47号住居 4



47号住居 5



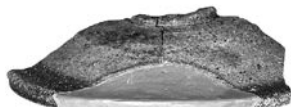
48号住居 1



48号住居 2



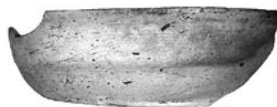
48号住居 5



48号住居 6



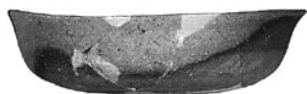
48号住居 8



48号住居 9



48号住居 10



48号住居 11



48号住居 12



48号住居 13



49号住居 1



49号住居 7



50号住居 1



49号住居 6



52号住居 1

52~55 号住居出土遺物



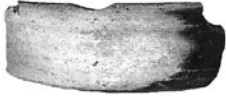
52号住居 4



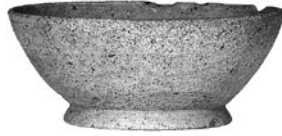
52号住居 6



52号住居 7



52号住居 8



52号住居 9



52号住居 10



52号住居 12



53号住居 1



53号住居 3



53号住居 7



53号住居 13



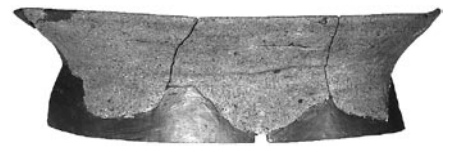
53号住居 11



54号住居 2



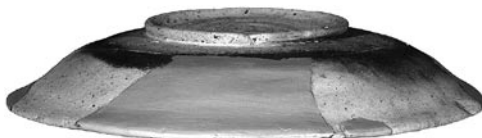
54号住居 3



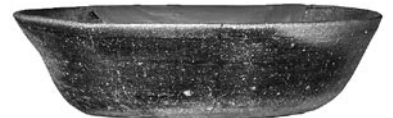
54号住居 4



55号住居 1



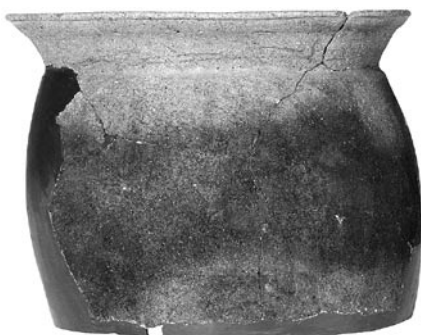
55号住居 3



55号住居 4



55号住居 6



55号住居 7



57号住居 5



57号住居 7



58号住居 2



58号住居 3



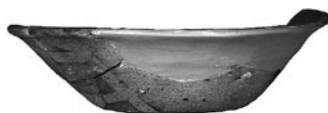
58号住居 4



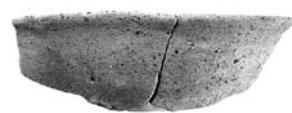
58号住居 5



58号住居 7



59号住居 1



59号住居 2



59号住居 4



59号住居 5



59号住居 6



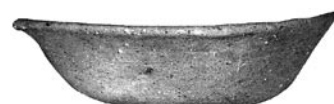
59号住居 7



60号住居 1



60号住居 2



60号住居 3



60号住居 4



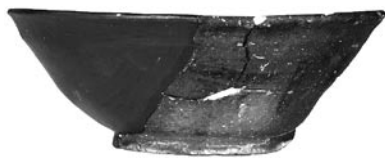
60号住居 10



60号住居 11



60号住居12



60号住居13



60号住居20



60号住居15



60号住居18



60号住居21



60号住居22



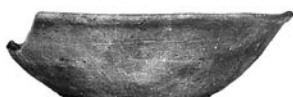
60号住居30



60号住居31



62号住居 2



62号住居 3



62号住居 4



62号住居 5



62号住居 6



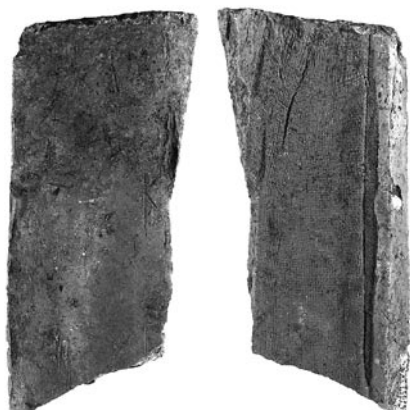
62号住居 7



62号住居 8



62号住居 9



62号住居10



62号住居12



62号住居13



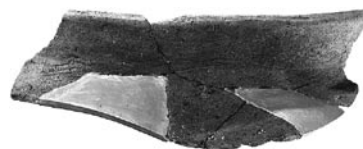
62号住居14



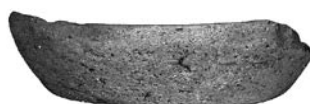
62号住居15



62号住居11



63号住居 3



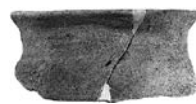
64号住居 1



64号住居 3



64号住居 4



64号住居 6



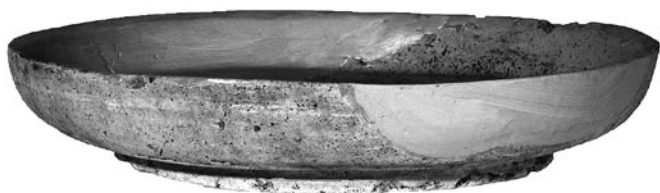
1号竪穴状遺構 1



1 A号竪穴状遺構 2



1 A号竪穴状遺構 3



1 A号竪穴状遺構 6



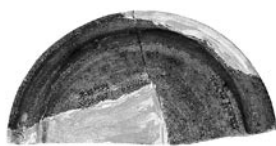
1 B号竪穴状遺構 7



1 B号竪穴状遺構 10



1 A号竪穴状遺構 9



1号竪穴状遺構 11



2号竪穴状遺構 3



3号竪穴状遺構 1



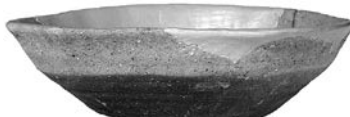
5号竪穴状遺構 2



17号ピット 1



53・59号ピット 5



11号土坑 1



11号土坑 2



17号土坑 2



58号土坑 1



83号土坑 1



86号土坑 1



92号土坑 1



93号土坑 1



粘土採掘坑 2

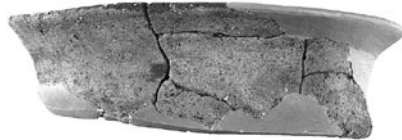
溝、1号遺物集中地点出土遺物



1号溝 1



6号溝 1



8号溝 5



9号溝 1



19号溝 1



19号溝 2



19号溝- 5



19号溝 7



21号溝 1



1号遺物集中地点 1



1号遺物集中地点 3



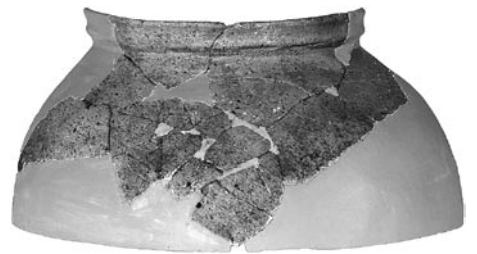
1号遺物集中地点 4



1号遺物集中地点 7



1号遺物集中地点 9



1号遺物集中地点 10



1号遺物集中地点 8



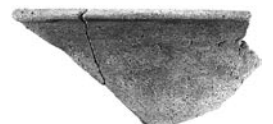
1号遺物集中地点 10



1号遺物集中地点 12



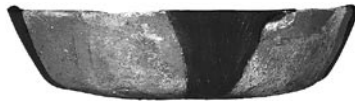
1号遺物集中地点 13



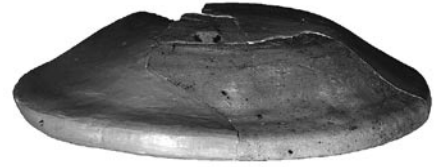
1号遺物集中地点 14



1号遺物集中地点16



1号遺物集中地点17



2号遺物集中地点1



2号遺物集中地点3



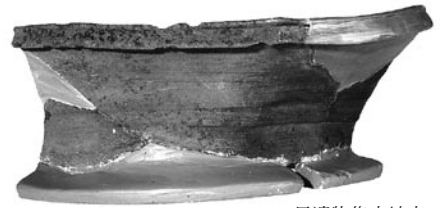
2号遺物集中地点5



2号遺物集中地点6



2号遺物集中地点8



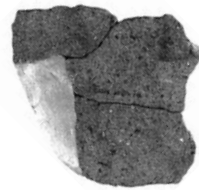
2号遺物集中地点11



2号遺物集中地点14-2



2号遺物集中地点14-1



2号遺物集中地点14-3



2号遺物集中地点14-4



2号遺物集中地点14-5

遺構外の遺物
古墳時代以降



遺構外 1



遺構外 4



遺構外 7



遺構外 6



遺構外 8



遺構外 2

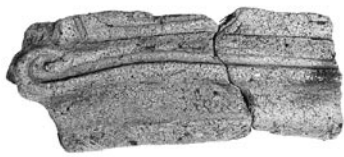


遺構外 5



遺構外 17

縄文時代



縄文土器 1



縄文土器 2



縄文土器 3



縄文土器 4



縄文土器 5



縄文土器 6



縄文土器 7



縄文土器 8



縄文土器 9



縄文土器 10



縄文土器 11



縄文石器 12



縄文石器 13



縄文石器 14



縄文石器 15



縄文石器 16



縄文石器 17



縄文石器 18

報告書抄録

書名ふりがな	ほんごうはたうちいせき
書名	本郷畑内遺跡
副書名	(都)3.3.2吉井北通り線社会資本整備総合交付金 (防災・安全/活力基盤)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	594
編著者名	飯田陽一 関根愼二
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20150125
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	ほんごうはたうちいせき
遺跡名	本郷畑内遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんたかさきしよしいまちほんごう
遺跡所在地	群馬県高崎市吉井町本郷
市町村コード	10202
遺跡番号	02746(高崎市)
北緯(世界測地系)	361532
東経(世界測地系)	1385836
調査期間	20120901-20130228
調査面積	6351m ²
調査原因	道路建設
種別	集落
主な時代	古墳/奈良・平安
遺跡概要	集落-弥生時代-竪穴住居1棟+弥生土器/古墳時代-竪穴住居9棟-土師器・須恵器+石製品/奈良平安時代-集落-竪穴住居55棟+竪穴状遺構6棟-土師器・須恵器+石製品+金属製品
特記事項	国特別史跡多胡碑の西方約2kmに位置する、多胡建郡の8世紀初頭にも展開した集落遺跡。
要約	弥生時代後期から平安時代後期までの集落。古墳時代中期を除き永続するが、奈良・平安時代を主としている。 古墳時代前期の集落では腕輪状土製品を出土。奈良平安時代は多胡郡内にある集落で石帯・陶硯・カマド形土器等を出土する。 他に時期不明の掘立柱建物12棟、溝21条などを調査する。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第594集

本郷畑内遺跡

(都)3.3.2吉井北通り線社会資本整備総合交付金

(防災・安全／活力基盤)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成27(2015)年1月18日 印刷

平成27(2015)年1月25日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／株式会社大塚カラー 群馬事業所

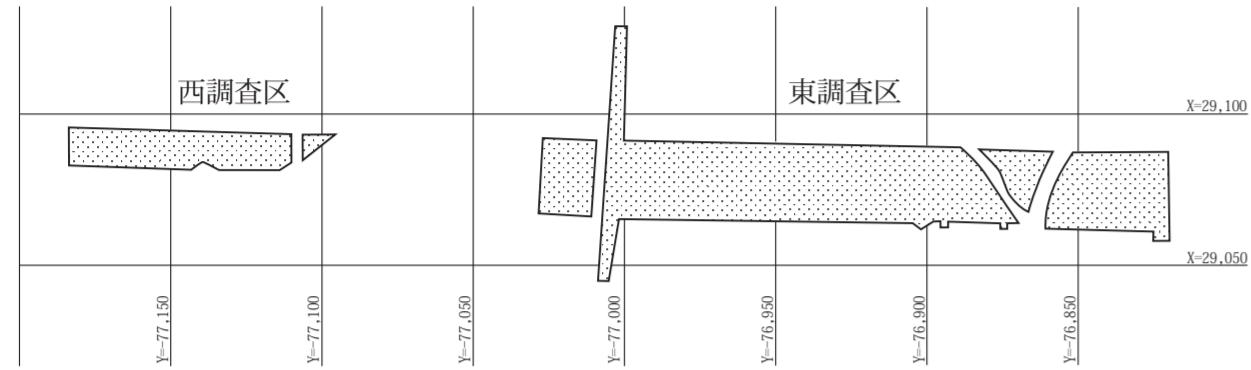
本郷畑内遺跡 全体図

地図中に用いた遺構名称の略語は以下の通りである。

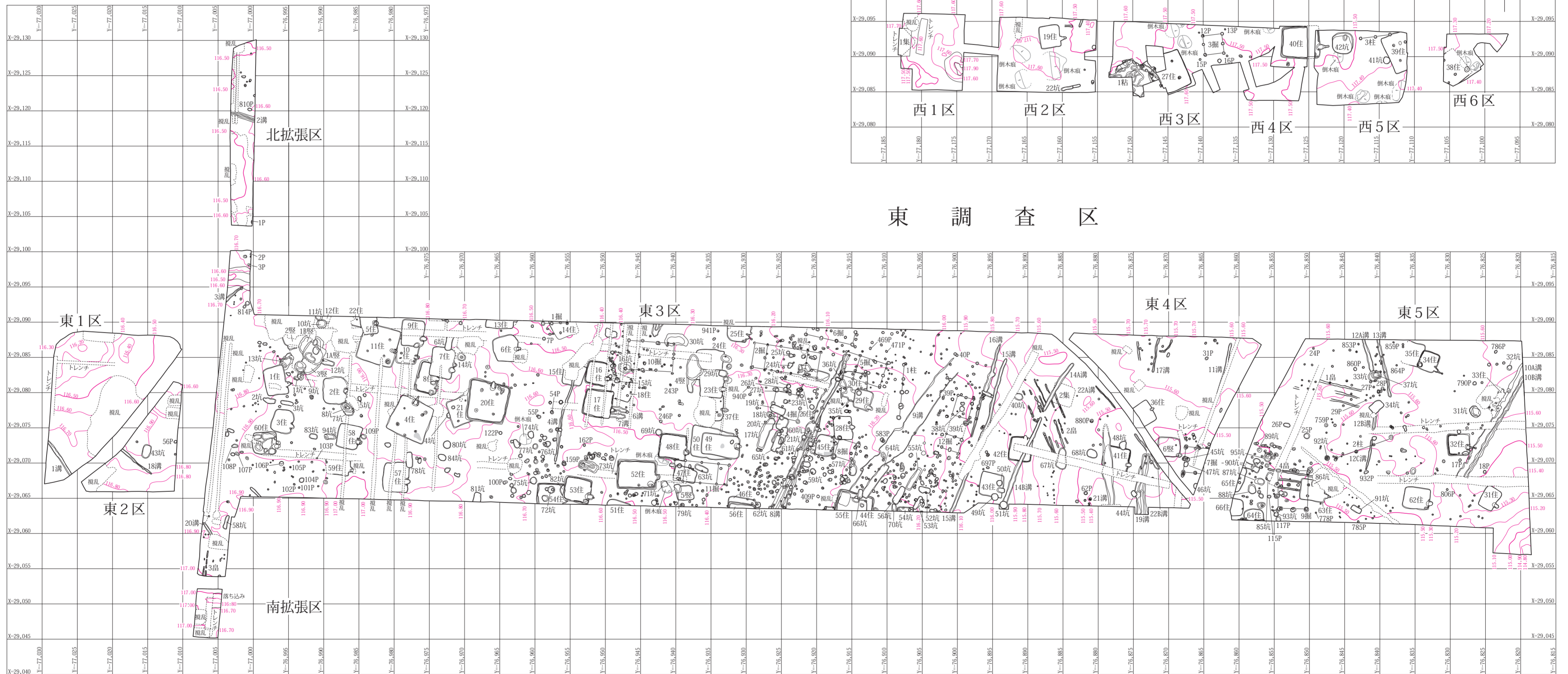
- 住 → 竪穴住居
- 竪 → 竪穴状遺構
- 掘 → 掘立柱建物
- 柱 → 柱穴列
- 坑 → 土坑
- P → ビット
- 集 → 土器集中出土地点

本文中の挿図に示したビットについては、付図では一部のみ記載した。

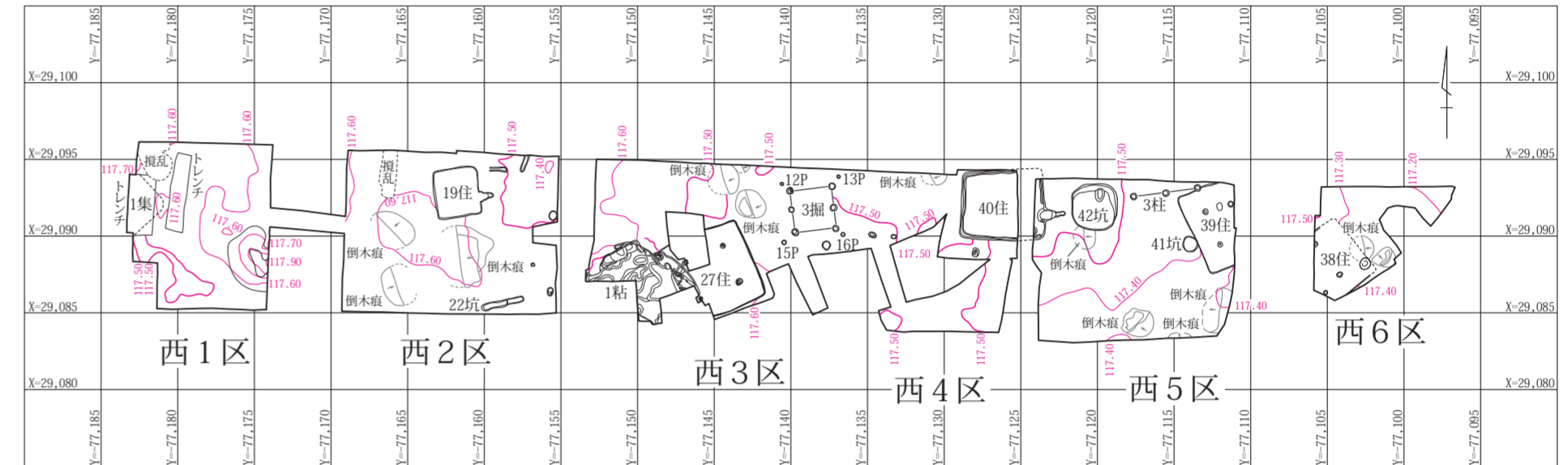
調査区配置



(1:2500)



西調査区



東調査区

